セルヴァンテス著

ドン・キホーテ

片上伸譯

新潮社出版

改譯本の序

日本の文部省内に文藝委員會といふものの設けられたのは、明治四十四年のことであるが、その會は、その年の八月、古典飜譯事業の計畫を立て、ダンテの『神曲』（上田敏氏擔當）、ゲーテの『ファウスト』（森鷗外氏擔當）などとともに、セルヴンテスの『ドン・キホーテ』をも飜譯することになつたのである。而してその『ドン・キホーテ』の飜譯を擔當せられたのは、文藝委員の一人であつた島村抱月先生であつた。抱月先生がこの譯書の第一版（大正四年刊行）で言つてをられるやうに、「本來なら、『ドン・キホーテ』の飜譯はスペイン語とスペイン文學に熟通した文學者の手に成らなくてはならない。ところが現時の我が邦には、幾分のスペイン語學者はあつても、スペイン文學者は無い。まして此の大古典を譯し得るまでに外國文學に通ずると共に我が文學に堪能な人は絶無である。今一つは、スペイン語學者といへども、現代語を主とする限り、すでに古典語に入つた部分の多い此の古文を自由に味讀することは非常に困難であつた。」

そこで已むを得ず他の外國語から重譯することになり、それが島村先生の擔當となるとともに、先生は文藝委員會の同意を得て、その飜譯を主として私に委ねられた。私がこの古典を飜譯するに至つたのは、實はかういふ次第からであつた。そこでこの書を飜譯するについては、底本となるべきものを、イギリス、フランス、ドイツの各國の譯書にわたつて文部省の手で蒐集し、結局オームズビーのイギリス譯を土臺として、當時東京外國語學校の西日辭典編纂に從事してゐた故海老名穀介君を煩はして、原本との照校をも試みなどして、それが完了出版せられたのは、大正四

年の秋であつた。

『ドン・キホーテ』の全譯と稱せられるものはいろいろあるが、今まで日本で出たものでは、私の譯本を別として、いづれも抄譯本である。外國でも、一般に讀まれてゐるのは、大抵多かれ少なかれ省略せられてゐて、たゞ滑稽珍奇な出來事ばかりを並べ立てたやうなものになつてゐる。從つてこの書はたゞ滑稽な物語としてのみ知られてゐるのであるが、全册を通讀すれば、何人も人生の眞實にして貴重なるものに觸れざるを得ないであらう。第一にはこの書に對するかういふ解釋からも、またその原文に持ち前の風格からも、譯文には、强ひて輕い調子を出さうとはしないで、たゞ出來るだけ平明な飾りのない調子に從ふことを心がけた。今回この書が新たに『世界文學全集』に加へられるについて、譯者は二回にわたつて改訂を加へたのであるが、その改訂を試みる間にも、また數回にわたつての校正を讀む間にも、これを初めて譯出した十數年前に比べては、この書の中に、一層深く嚙みしめて味ふべきものの更に多きことを感じたのである。

千九百二十七年四月十日　東京巢鴨にて

片上伸

解題

聖書以外では、これほど廣く流布してゐる書物はないとさへ謂はれてゐる。『ドン・キホーテ』の前半は、千六百五年に、またその後半は、千六百十五年に出版せられたのであるが、その前半は、作者セルヴンテスの生前に九版を出し、版權を侵して、各地の書肆が勝手に出版したものを別として、作者自身の計算だけでも、その九版の部數が三萬となつてをり、十版は作者の亡くなつた翌年卽ち千六百十七年に出てゐる。後半はその同じ十七年の夏頃既に五版を出してゐる。原作の完了後七年を出でずして、英佛獨伊の各國語に譯せられた。二十世紀の初めの計算では、七百種の飜譯が出てゐるといふことである。その數多い飜譯の中には、夥しい註釋附きのものなどもあつて、——全卷六册の中二册は註釋などといふのさへあつて、本國スペインは勿論、その他の國々のスペイン文學者の間には、凡そ十八世紀の半ば頃からこの方、熱心な研究者註釋者飜譯者が少なからず出てゐるのである。そのほか少年の讀みものとして抄略せられた「ドン・キホーテ物語」といふやうな種類のものは、世界各國に亙つて實に夥しいものであらう。而して大抵の讀者は、完全な原作を通讀するのでなく、それ等の「物語」本によつて『ドン・キホーテ』を知つてゐるのである。實際、『ドン・キホーテ』を原作のまゝに完本によつて通讀してゐる人は存外少ないであらう。しかし、その主人公が、滑稽な空想的な人物であることを知らない人は少なからう。それは實に天下周知の事實である。古來の文學に描かれた人物の數は夥しいものであるが、ドン・キホーテほど滑稽な人物は、恐らくあまりあるまいとさへ謂はれてゐる。ロシヤの農民といへば、無知な點では今でさへ他の國の農民以上であらうが、今から七十年も前のそのロシヤの農民の間にさへ、ドン・キホーテといふ名が、滑稽な空想的な人物の異名として通用してゐたといふことを、トゥルゲ

ーネフが言つてゐる。千六百五年に出た前半は、後半に比べると、一層多く滑稽な珍奇な出來事を含んでゐて、十年後に出た後半は、漸く眞面目なユーモアの味ひに熟して來たと見らるべき點がある。一體この點についても、いろいろの說があるのだが、作者は最初から最後までの十分な構想や計畫を立てゝから書き出したのではなかつたらしい。セルヴンテス學者の言ふところによると、最初ドン・キホーテが騎士姿で出かけた頃には、サンチョー・パンザといふこの作での大立物さへ、作者は持ち出すことを豫期してゐなかつたのであつて、中途で、ドン・キホーテが、從者をつれない騎士といふものはないと、人から注意を受けるところまで書いて來て、はじめて作者もサンチョーといふ人物を現はす氣になつたのであらうとさへ考へられてゐる。とにかく、さういふ仕組みの上からも、前半後半の調子の上からも、最初から全體を通じての計畫が立てられてゐたのでないといふことだけは、この作の結果から見て事實であらう。こゝに收められたものはその前半である。

ドン・キホーテといへば、直ちに滑稽な空想的な人物を想ひ浮べるのが常であるが、一體この作はたゞ滑稽な物語に過ぎないのであるか。作者はそもそも何を書かうとしたのであるか。——この問題についても、昔からさまざまのやかましい解釋が持ち出されてゐる。作者自身が前半の序文で言つてゐるところから見ると、その當時のスペインの社會があまりに荒唐無稽な騎士道の物語に夢中になつてゐるので、その流行に對する諷刺の意味で書かれたものだといふことになる。さういふ點もあつたであらう。時代おくれの騎士道氣質に對する諷刺の意味も十分にあつたであらう。當時のスペインは、軍國の氣風が盛んで、ヨーロッパの他の國々よりも、殊に封建的な騎士道的傳統の精神が根深くこびりついてゐたので、青年の間にも、空想的な時代おくれの騎士道物語を耽讀するものが少なからずあつて、當時一部の識者は、これに對して政府が何等か防止の手段を講ずるやうに申出でたことさへあつた。千五百五十三年には、

カルロ五世の命で、アメリカに於けるスペインの領土内へは一切騎士道物語を輸入することを禁じたが、スペイン本國では、そのカルロ五世自からそれの愛讀者であつたやうなわけで、到底禁止などは思ひもよらなかつた。しかし、千六百五年に『ドン・キホーテ』の前半が出てから後は、その諷刺が效を奏して、今までのやうな騎士道物語はもう新らしくは書かれなくなり、二三の例外を除いては、舊來のもので重版せられたものさへなくなつたと傳へられてゐる。

いづれにしても、作者が諷刺し譏笑したところのものが、崩壞期頽廢期の騎士道であつたのには相違ない。この時代は、商業資本主義の勃興に伴ふ經濟上の組織の變革に伴つて、中世封建の時代に社會上の勢力を保持してゐた貴族階級、とりわけ小地主貴族即ち武士階級が、崩壞沒落の運命に陷つてゐた時代である。然るにその新らしい社會生活の現實に適應して行くことをせず、またその能力もなく、徒らに昔の夢をなつかしみ、新らしい生活事情の下に、過去となれる社會上思想上道德上の制度組織を回復維持しようと空想するものは、いつの時代にもあるやうに、その時代にもまた少なくなかつたのである。ドン・キホーテは實にこのタイプの人物だといふ解釋が成り立つ。また更に、作者セルヴンテスも、本來この沒落し行く小地主貴族の家柄から出た人であつて、その階級の沒落は、これを自然の成行と認めるにしても、そこにはさすがに幾多愛惜の情を寄すべきものがないではない。作者はこの作で、最初は專らドン・キホーテを諷刺の眼で見てゐたのであるが、だんだん書き進むうちに、ドン・キホーテの人物の滑稽な方面ばかりでなく、自から惡と信ずるところのものと戰つて身命をかへりみない無私の理想主義を、——理想に立てこもつて、外部の物質的打擊を心にかけようともしない精神主義を、即ちいはゆるドン・キホーテ型を描くやうになつたものであるとの說も立つ。作者はドン・キホーテの如き人物を、過去の空想に生きて現實を眼中に置かない人間として、封建時代の理想を追ふものとして、これを諷刺し譏笑しつゝ、而かもその一身の利害を度外視して義のために弱きを扶ける騎

士道の精神には、一掬同情の涙をそゝいだのであるといふ解釋もある。理想と現實との矛盾衝突を具體的に描いたものだとして、哲理的な解釋を加へようとしたものは、ドイツの理想派の思想家の間に殊に多い。

作者の最初の考へが、當時流行の騎士道物語心酔や、過去を夢みる當時の沒落階級としての小貴族への諷刺であつたにしても、それだけでは、三百年後の今日に至るまで、ひろく世界の讀者を牽きつける力はない筈である。封建制度は崩壞して、近世的官僚國家の組織の成り立つたことも、文藝復興期の新學藝の光りも、道德の變遷も、また從つて、虐げられ苦しめられてゐる弱者の保護が、諸國遊歷の騎士の義氣と勇武とによつて行はれた時代は疾くに過ぎて、今は國家の法律と制度とによつて行はれるといふことも、——凡てそれ等のことを、ドン・キホーテは認めてゐない。而かも、空想想像の力が病的に發達してゐて、その一方では、他人の悲しみや苦しみに同情する心が異常に鋭敏で、あらゆる眼前の現實を無視して(どうしても無視することの出來ない時には、惡魔の魔術にかゝつてゐるものと解釋して)、人類の壓迫者と闘ふのである。この矛盾から一切の滑稽が大眞面目に演出せられる。而して少年の牧者を主人の手から助けた場合のやうに、その結果は志と全く相反するやうになる。ロマンティックで、へまで、而かも自分は道德上の義務を果たしてゐるといふ信念から、いかに肉體的に苦しくても、平氣で、寧ろ常に幸福で、何事があつても決して降參しない。あくまでも樂觀的である。物慾に拘泥しないから自由で、エゴイズムの影もさゝない。現實的な、實利的なサンチョーでさへ、さすがに自分の主人たるドン・キホーテを、結局敬愛せざるを得なくなる。よい人だと深く信じて、どこまでも隨つて行かずにはゐられなくなる。この點では、ドン・キホーテの性格を中心とするこの作は、人生に於ける理想的なものゝ意義を、深く細かく現はしてゐるのである。

トゥルゲーネフは、有名な『ハムレットとドン・キホーテ』と題する講演の中で、滑稽だといふことの中には、既にそ

の過ちを赦し、進んでこれを愛さうとする心が動いてゐるのだと言つてゐる。彼は文學上のこの二つのタイプを比較して、ハムレットに對しても十分な理解を持ちながら、彼自身實はドン・キホーテびいきであることを明らかに示してゐる。全く彼の言ふやうに、「ハムレットを愛することは殆ど不可能である」が、ドン・キホーテを愛したのは、ひとりトゥルゲーネフばかりではない。ドン・キホーテの純良さは昔から多くの人々に愛せられて來たのである。ハイネは少年の頃、『ドン・キホーテ』を讀み、主人公の苦難に涙を注いだと傳へられてゐる。ハイネが後年の詩には、高潔な理想が凡俗のために地上に引きずりおろされ、嘲られ、辱かしめられるのを憤つたやうなものが少なくないのであるが、少年のハイネが、ドン・キホーテに注いだ涙の中にも、この心がおのづから宿つてゐたであらう。ルナチャールスキーは、何故ドン・キホーテがかくまで讀者の心を牽き、時としては讀者の涙をさへさそひ、從者のサンチョー・パンザが何故にドン・キホーテに對してあのやうに忠實であるか、さまざまの時代の讀者が、單にをかしさのためばかりでなく、繰り返して『ドン・キホーテ』を讀むのは何故であるかを尋ね、ドン・キホーテの言行一致と、眞理のために自己を犧牲にして悔いない底知れぬ善良さとを指摘し、凡俗な現實の世界では、ドン・キホーテのやうな善良さや理想主義は、滑稽でもあれば、また結局亡びても行く、しかしそれは滑稽でありながら、その善良さが人の心に觸れずにはゐない、讀み進むに從つて、人はたゞ笑つてばかりはゐられなくなつて來るといふ意味のことを、その講演の中で述べてゐる。サンチョーは、ドン・キホーテに對しては、知らず識らずの間に、いつでも空想の幻影を破る役目をつとめてゐる。サンチョーの平氣な言葉によつて、ドン・キホーテの空想の幻影は、悉く讀者の前にかき消される。但しサンチョー自身は自分がさういふ役割を演じてゐることを意識してゐない。いはゞ無意識のメフィストフェレースのやうなものである。また一方ドン・キホーテの方でも、それによつて必ずしも幻滅を感じたり認めたりしない。この點でどちらも極めて

樂觀的な人間である。このサンチョーは、作者の殊に氣に入りの人物であつたことが、その自序から察知せられる。サンチョー・パンザもドン・キホーテも、後半ではずつと眞面目な調子で取り扱はれてゐる。

セルヴンテスはいつでも甚た書きなぐりの方であつた。彼の境遇も經歷も自然にさうさせたのであつたらう。殊にこの『ドン・キホーテ』では、隨分筆にまかせて書いた調子があるが、後半に至るとずつと落ちついて整頓せられてゐる。しかし一體に言葉が多く、長たらしく、ところどころに辻つまの合はないところさへないでもないが、それ等については註によつて讀者の理解を補ふやうにして置いた。さうは言ふものの、これを全體として見ると、かざりのない文體で、平氣で無遠慮にありのまゝを述べてあり、非常に滑稽なことを述べながら、作者は少しもそんな氣ぶりを見せず、あたり前のことを述べてゐるやうな調子でものを言つてゐる。そこがこの作の特色であらう。重々しさうな口調の中に、却つて皮肉やをかしみが出てゐるところも少なくない。

『ドン・キホーテ』に描かれたドン・キホーテは勿論、サンチョー・パンザでも、人間に共通の特徴を、豐富な鮮やかな個性の中に、如實に表現し得た點で、たしかに古今東西にわたつて讀まれるだけの生命を持つてゐる。作者自身誇りを以て言つてゐるやうに、それはあらゆる種類の人々によつて、手垢のつくまで繰り返して讀まれ、詰んじられる書物である。少年はその繪卷をめくり、青年はそれを讀み、成人はそれを理解し、而して、老年の人はそれを賞讃するであらう。

セルヴンテス小傳

セルヴンテスは名をミグエルといひ、正しき呼び方に從へば、姓はセルヴンテス・サーエドラである。千五百四十七年九月二十九日、スペインのアルカラ・デ・ヘナレスの町に生れた。尤もその生れた月日は確實とはいへないが、その名前のミグエルから推して、多分聖ミカエル祭の日、卽ち九月二十九日であらうといふことになつてゐる。父はロデリゴー・デ・セルヴンテスといひ、母はレオノラ・デ・コルティナスといつた。もと貴族の家柄ではあつたが、ミグエルの生れた頃には、家運既に衰へ、父は貧しい醫を業としてゐた。セルヴンテスの生涯の事蹟も、實はあまり詳しくは傳はつてゐないのであるが、彼自からの書いたもの、中んづく、『ドン・キホーテ』などによつて推測すると、その中に引用されてゐる夥しい騎士道の物語や歷史類から、彼が少年時代に非常な讀書好きであつたことが想像せられる。二十歲位から後のセルヴンテスは、落着いて讀書をしてゐるやうな暇もなかつたらしく、また『ドン・キホーテ』の中に引用せられてゐるいろいろの書物の文句には、隨分甚だしい覺えちがひなども少なくないからである。彼が少年時代にマドリッドの中學校に學んだといふ話もあるし、サラマンカの大學へやられたといふ說も傳はつてゐるが、大家族を抱へた彼の貧しい父に、それだけの餘力があつたかどうかは疑はしい。彼はその數多い作品の中で隨分自分の生活を材料にしてゐるが、學生生活の事を書いたものは一向見當らないので、多分正則の教育は受けなかつたらうといふ事に傳記家の意見が一致してゐる。

千五百六十八年、彼が二十一歲の年に、ローマ法王の使節として、スペインの國王フィリップ二世の許へ遣はされた君牧師ジュリオ・アクァヴィヴに召し使はれることになつたが、千五百七十年の夏、その使節の歸國に從つてイタリーに赴き、その勤めを退いて、自から志願して、ドン・ミグエル、デ・モンカダの聯隊に一兵卒として入隊した。當時、軍人熱の盛んであつたためでもあるが、セルヴンテス持ち前の南方人らしい冒險心が、平和な勤めよりも、この方面を選ばしめたところがある。丁度その頃スペインとローマ法王とヴェニスとの間に結ばれた神聖聯合は、オウストリーのドン・ジュアンを總司令官として、キリスト敎徒の共同の敵たるトルコ軍と戰ふことになり、セルヴンテスもまたその聯合軍に加つて、千五百七十一年九月、メシナの港を船出した。その十月七日の拂曉には、トルコ艦隊が現はれた。有名な

レパントーの海戦が始まつたのである。セルヴンテスはその時高熱を發して臥てゐたが、敵艦見ゆと聞いて、人々の制止を聽かず起つて持ち場に就き、激戦のために三ヶ所の彈傷を受けた、二つは胸に、一つは左の手に。彼はこの重傷のために七ヶ月の間病院の生活を送つた。左の手は永久に用をなさなくなつた。しかし彼は後年いつもその不具の左手を人に示して誇りとした。千五百七十二年の五月、病癒えて再び彼は聯合軍に歸參した。そこには實弟ロデリゴーも勤めてゐた。それから三年の間、各所に轉戰した末、千五百七十五年の九月、休戰を利用して賜暇を得、ネープルスから本國へ向けて船出した。弟のロデリゴーも同行した。セルヴンテスは、聯合軍の總司令官ドン・ジュアンなどから、スペインの國王へ宛てた書狀を携へてゐた。それには、このレパントー海戦の勇士セルヴンテスの勳功勇武を賞讃して、彼を中隊長に任命せられんことを請ふ旨が記されてあつた。併しこの推薦狀こそは、却つてセルヴンテスのために不幸の源となつたものであつた。本國へ向けての航海中、九月二十六日敵艦と遭遇し、激戦の後一同は捕虜となつてアルジールスへ伴れて行かれた。そこで五年間の捕虜生活が初まる。『ドン・キホーテ』の中の一挿話である「捕虜の話」は、この經驗によつて書かれたものであらう。アルジールスで捕虜は分配せられ、セルヴンテスはある船長の所有となり、弟のロデリゴーは別の人のものとなつて、兄弟は別れ別れになつた。捕虜は相當の身請金によつて釋放せられる習慣であつたので、鄉里アルカラの町の方では、なけなしの金を工面して、一切のものを犧牲にして身請金をアルジールスへ届けた。セルヴンテスは、自分よりも、どこかで捕虜になつてゐる弟の方を先きに、この金で釋放して貰ひたいと言つた。しかし弟の方は程なく釋放せられたが、セルヴンテスは、總司令官その他の國王への推薦狀を携へてゐたために、却つて身分の重いものと見られ、僅少な身請金では容易に釋放せられなかつた。セルヴンテスは度々逃亡を企てたが、いつも失敗に終つた。さういふ時にも、彼はいつも進んで罪を一身に引き受けようとした。彼は遂にアルジールスの總督の手で一層嚴しく禁錮せられることになつた。この總督は殘忍で、彼の家には鼻や耳を殺ぎ取られた捕虜が多勢ゐたが、セルヴンテスはこゝでも尚逃亡を企てた。しかしその殘忍な總督も、彼の大膽で率直な氣性に免じて彼を殺すやうなことはしなかつた。アルカラの實家では、更に血を絞るやうな三百デュカットの金を調達して送り届けて來た。總督は更にその二倍の金額を要求した。丁度その頃總督は任期滿ちてコンスタンチノープ

ルへ引き上げるので、セルヴンテスもそれに伴ふことになり、既に乗船さへしたのだが、總督は急かにその身請金を割引してくれ、セルヴンテスはやうやく自由の身となつた。それは千五百八十年九月十九日、捕虜となつてから滿五年目のことであつた。

鄉國には歸つたが、生活には窮した。丁度その頃、もとゐた聯隊がポルテュガルへ出征するので、彼もそれに從つた。更に二年程アゾーア群島に遠征した。千五百八十三年の秋、小說『ガラテア』の原稿と、一人の幼い女の兒とを携へて歸國した。この幼女は、出征中、あるリスボン生れの貴婦人の生んだものだと傳へられてゐるが、それ以上のことは分らない。この女兒は、千六百五年『ドン・キホーテ』の出た時には、既に二十歳に達してゐて、セルヴンテスの私生兒として戸籍に上つてゐたが、千六百十四年には尼寺に入つてゐた。セルヴンテスの葬られたのはその尼寺であるといはれてゐるが、その尼寺の名も所在も今日までのところでは全く分つてゐないのである。

セルヴンテスも既に四十歳に近く、左手は不具となり、舊知の聯隊長も死に、軍隊生活に前途の見込もなかつた。彼は文筆で身を立てようと決心した。『ガラテア』は千五百八十五年に鄉里アルカラで出版せられたが、それの結果は收入の上からも世評の上からも餘り芳ばしくはなかつた。その頃彼は多少の持參金を持つてゐる身分のある婦人と正式に結婚した。その婦人の名は、カタリーナ・デ・パラシオス・サラザール・イ・ヴォズメディアーノであつた。

セルヴンテスは收入の上からも最も見込のある劇作の方面に手を着け、三年くらゐの間に、前後三十種に上る喜劇悲劇を作り、自から旅まはりの劇團に加はつて、喜劇俳優ともなつて働いた。しかしこの方面の仕事もあまり思はしいことはなかつたと見えて、千五百八十九年の初めには、インド艦隊の食糧供給係長の下で働いたりしたが、薄給でやはり窮乏を免かれ得なかつた。千五百九十四年には、グラナダ國の收稅吏に任ぜられたが、稅金を國庫へ澁附するやうに委託した商人が逃亡したために、セルヴンテスは責任者として投獄せられるに至つた。それは千五百九十七年九月のことで、その年の暮には、保釋によつて出獄を許された。

この入獄中に腹案を得たのが、『ドン・キホーテ』であつた。『ドン・キホーテ』には、彼が收稅吏として地方を巡廻する間に自から接した中流以下の人々の生活相が豊かに取り入れられてゐる。千五百九十八年の九月頃まで彼がセヴーリにゐたことは分つてゐるが、それから千六百三年まで

の間の所在は不明である。しかしその間に『ドン・キホーテ』の前半は書かれたのに相違ない。この前編は千六百四年の九月に出版の許可を得、同年十二月に印刷を終へ、千六百五年の初めに賣り出されると、忽ちひろく歓迎せられ、その年の間に六版を重ね、出版書肆は大いに利得を占めたが、條件の定め方が悪かつたので、作者は相變らず貧乏であつた。千六百九年には、彼の一家はマドリッドのラ・マグダレーナ街に住んでゐた。『ドン・キホーテ』はその年イタリーで、その翌年はブルッセルで譯出せられた。前編の中にも、いづれ後日譚を書くことはほのめかしてあつたのだが、容易にそれの完成を見ないでゐる間に、千六百十四年の十月か十一月に、アヱリアネーダの匿名の下に『ドン・キホーテ』の續編の僞作が現はれた。丁度その時、セルヴンテスの方でも『ドン・キホーテ』の第五十九章までは書き進んでゐたので、その僞作の出現に刺戟せられて、ドン・キホーテの臨終まで書き上げることに專心努力した。千六百十五年の二月に、續編は書き上げられ、その暮に出版せられた。その頃は彼の健康も漸く衰へて、千六百十六年の四月二十三日、水腫を病んで永眠した。これは偶然にもシェークスピヤの永眠と同日である。彼が自分の娘の尼となつた尼寺に葬られたことは傳はつてゐるが、その所在は前にも言ふやうに今以て分らない。

セルヴンテスは、當時既に解體しつゝあつた小貴族階級の貧家に生れ、身分こそは貴族でも心持は平民的知識階級的で、戎劍とペンとによつてわづかに身を支へつゝ、多難の一生を安定なく過した人であつた。しかし、大膽率直で、義に勇み、赤心を他人の腹中に布き、朗らかな笑ひを好むわだかまりのない彼の氣質は、同時代の人々からも敬愛せられたであらうやうに、たとひその傳記の詳しいことは分らないでも、『ドン・キホーテ』の作を通して、後代の人々からもまた同じく敬愛せられるであらう。

目次

序……一

第一篇……八

第一章　には名高い紳士ラ・マンチャのドン・キホーテの人と爲りと平生とを述べる……八

第二章　には工夫に富めるドン・キホーテの初めての門出を述べる……一三

第三章　にはドン・キホーテが騎士の位を受けた道化た式の次第を述べる……一八

第四章　旅籠を出てからわが騎士の身に降りかかつたことども……二四

第五章　にはわが騎士の災難の話が續く……三〇

第六章　わが工夫に富める紳士の書庫で牧師補と理髪師とのなした、おもしろくも重大な檢査のこと……三六

第七章　わが天晴の騎士ラ・マンチャのドン・キホーテが二度目の門出のこと……四三

第八章　恐しい夢想せられたこともない風車の冒險に際して、勇敢なるドン・キホーテの得たる吉き幸運のこと。附り、當に記錄するに足るその他の出來事ども……四九

第二篇……五七

第九章　では勇ましきビスケィ人と勇壯なマンチャ人との猛烈な眞劍試合が終りを告げておしまひになる……五七

第十章　ドン・キホーテとその家來サンチョー・パンザとの間に取り交されたおもしろい議論のこと……六三

第十一章　山羊飼ひ等を相手にドン・キホーテの身に起つたこと……六八

第十二章　ドン・キホーテと一緒にゐた山羊飼ひたちに一人の山羊飼ひが話したこと……七五

第十三章　では、女羊飼ひマルセラの物語が他のいろ〳〵の出來事と共に終る……八一

第十四章　の中には羊飼ひの『絶望の歌』及び其他の待ち設けざる出來事が插入してある……九一

第三篇……一〇一

第十五章　の中には、ドン・キホーテが殘酷なヤン

グア人等と出逢つた時に際會した不運な冒險が記されてある……… 101
第十六章　自分で城だと思つた宿屋の中で、この工夫に富める紳士の上にふりかゝつたこと……… 108
第十七章　の中には剛勇なるドン・キホーテと順良なる家來サンチョーとが宿屋で樣々な難儀に遇ふことが收めてある。その宿屋をドン・キホーテは氣の毒にも城と思ひ込んでゐたのである…… 二六
第十八章　にはサンチョー・パンザがその主人ドン・キホーテとなしたる議論並に其他の記すに足る冒險譚が記されてある… 二三五
第十九章　サンチョーがその主人となしたる拔目なき議論及び主人の出逢うた死骸の冒險その他の著しき出來事ども…… 二三五
第二十章　豪勇なるラ・マンチャのドン・キホーテが世界の如何なる高名の騎士によつて成し遂げられたる如何なる冒險よりも危險を冒して成し遂げたる前例なき前代未聞の冒險のこと…… 二四三
第二十一章　は得意の冒險と貴重なる分捕品マムブリノーの兜、及びわが無敵の騎士に起つたその他の事件を傳へる…… 二五七
第二十二章　自ら少しも行きたくないところへ意ならずも伴れ行かれつゝあつた十餘人の不運な人々にドン・キホーテが授けたる自由のこと…… 二六九
第二十三章　モレナの山中に於てドン・キホーテに降りかゝつた事。それはこの信憑すべき物語に記されてある最も珍奇なる冒險の一つである…… 一八〇
第二十四章　にはモレナ山中の冒險が續く…… 一九二
第二十五章　はモレナ連山に於て、剛胆なるラ・マンチャの騎士の上に起りし奇異なる事ども、及び彼がベルテネブロスの苦行に倣ひしことを取扱ふ…… 二〇一
第二十六章　にはモレナ連山にてドン・キホーテが優しくも演じたる戀人の所作が續く… 二二九
第二十七章　牧師補と理髮師とが彼等の計畫を實行せし次第及びこの偉大なる物語に記載するに足るべきその他の事ども…… 二三七

第四篇……二四五
第二十八章　は同じ連山に於て、牧師補と理髪師の上にふりかゝつた奇異なる面白き冒險を記く……二四五
第二十九章　は戀に傷けられたる我等の騎士を、自ら課したる烈しき苦行より救ひ出さん爲めに用ゐられたる滑稽なる手段方法に就いて記く……二五九
第三十章　は美しきドロテアの述べたる演説、及びその他さま〴〵の愉快に面白き事柄を記く……二七二
第三十一章　ドン・キホーテと家來サンチョー・パンザとのおもしろき議論及びその他の出來事ども……二八四
第三十二章　は宿屋でドン・キホーテ一行の上に起つた事どもを述べる……二九四
第三十三章　には、『無分別なる好奇心』といふ小説が書いてある……三〇一
第三十四章　には、小説『無分別なる好奇心』がつゞく……三一
第三十五章　は赤葡萄酒の革嚢に對するドン・キホーテの勇壯絶烈なる鬪ひを述べ、小説『無分別なる好奇心』を完結させる……三四三
第三十六章　はその宿屋で起つた更に珍らしい出來事を述べる……三五一
第三十七章　には名高いミコミコナ姫の物語の續きと、其他滑稽な冒險譚が收めてある……三六一
第三十八章　は文武兩道に關してドン・キホーテの述べた珍らしい演説を記す……三七二
第三十九章　では捕虜が自分の身の上話や冒險譚を述べる……一七五
第四十章　には捕虜の物語がつゞく……三八四
第四十一章　には尙も捕虜の冒險譚が續く……三九六
第四十二章　は宿屋に於けるその後の出來事及び其他數々の知るに足る事どもを述べる……四一六
第四十三章　には騾馬追ひの面白き物語及びこの宿屋で起つたその他の奇異なる事どもが述べてある……四二三
第四十四章　には前代未聞の宿屋の冒險が續く……四三四
第四十五章　ではマムブリノーの兜と荷鞍との疑はしい問題が遂に解決する。尙眞實眞劍

に起つたその他の冒險のことども……四四三
第四十六章 「神聖救濟組合」等の著しき冒險の終局並びにわが優れたる騎士ドン・キホーテの大勇猛のことども……四五〇
第四十七章 ラ・マンチャのドン・キホーテが魔術をかけられて伴れ行かれたる異樣の有樣及び其他注目に價する出來事ども……四五九
第四十八章 では、件の役僧が騎士物語の問題を論究する。附り彼の才智すぐれしことども……四六八
第四十九章 はサンチョー・パンザが主人ドン・キホーテと爲せる拔目なき會話を傳へる……四七六
第五十章 ドン・キホーテと役僧との拔目なき論戰。附りその他の出來事ども……四八三
第五十一章 はドン・キホーテ護送中の人々に話した山羊飼ひの物語を述べる……四八九
第五十二章 ドン・キホーテと山羊飼ひとの喧嘩。附りドン・キホーテが汗を流して目出度き結末に到らしめたる行者等との稀有の冒險……四九四

工夫に富める紳士

ラ・マンチャのドン・キホーテ

セルヴンテス 著
片上伸 譯

序

閑なる讀者よ、この書物は余が頭腦の子であるので、余がそれの想像し得る限り美しく華美やかにまた怜悧ならんことを願ふのは、何等の誓言を用ゐずして君の信じたまふところであらう。しかし物皆己に似たるものを生むといふ自然の法則は、余も逆らふことが出來なかつた。さればこの痩地な手入れの不十分な余の才智は、未だ何人の想像にも浮ばなかつたやうなあらゆる種類の思想に充ちた、乾いた干乾びた變てこな物語ならずして何をか生み得よう——恰もこれ、あらゆる薄命の宿り、あらゆる哀音の住みなせる牢獄の中で生れさうなものである。靜閑と、樂しき隱棲と、快き田野と、晴れやかな空と、せゝらぎの小川と、心の靜けさと、これ等こそ、嘗まず女のミューズの女神をさへも豐かに熟らしめ、驚きと喜びとに世間を充す誕生をこの世に齎すに至るものである。世には往々にして父が醜い不細工な伜を有つてゐながら、その子に對する愛の爲めに眼昏んで、その子の瑕は見ず、ともすると寧ろそれを心身の天賦または魅力と思ひなし、友人に向つて才智または愛嬌としてそれを話すことさへある。さりながら余は——尤も余は『ドン・キホーテ』の父として通つては居るが、余はたゞその繼父たるに過ぎぬ——時流に從はうとは思はぬ、また、親愛なる讀者よ、他のする如く余の眼に殆ど涙を浮べて君に哀願し、余がこの子の中に君が認めらるゝ缺點を許し見のがされんことを乞はうとも思はぬ。君はこの子の親戚でもなく友人でもない。君の魂は君自らのものであつて、君の意志は如何なる人にもあれ他人の如くに自由である。君が自分の家に在つてその主人であることは、王がその課稅の主であると同じである。君は「自分の外衣を着れば王をも殺す」（自分は自分で王も眼中にないとの意）といふ諺を知つて居られよう。凡て以上のことによつて君は何の遠慮も義務もいらぬ。

この物語に就いては思ふ存分を言はれてよいので、君がそれに就いて惡口を言つたとて非難される心配もなく、善く言つたとて報いられるといふ心配もないのである。

余の希望は、普通の書物の初めに附けてあるやうな、序文の飾りもなく、世の常の短詩や警句の頌詩などを無數に陳列することもなく、たゞありのまゝに飾らずに君の前へ出さうとするに在つた。實を言へば、成る程それは多少骨折もしたなれど、今君の讀まれるこの序文を書くほど骨の折れたものはない。余は幾度かそれを書かうとしてペンを採り上げ、さて何を書いてよいか分らぬので幾度かペンを置いたのである。その中の一度のこと、紙を前に據ゑペンを耳に挟み、卓に肘をかけて頬杖をついて、何を言うたものかと考へつゝ思ひ耽つて居る折柄、そこへ快活な怜悧な一人の友人がやつて來た。この友人は余がひどく考へ込んで居るのを見て、その譯を訊ねた。それに對して余は、別にかくし立てをせずに、『ドン・キホーテ』の物語の爲めに作らねばならぬ序文を考へて居るのである。實はそれが氣がかりなので、一層のこと全く序文なしにしようか、それともこの高貴なる騎士の功績を世に公にせずに置かうかとも考へて居るのだと答へた。

『しかし、あんなに長年の間忘れられ沈默して睡つて居て、今更大分の年を背中に負うて出て來るのを見たら、所謂讀書社會といふ老年の立法者は私を何と言ふであらうぞ？私がそれを不安に思はずに居るとは、何うして君に思へるのだ。而も燈心草のやうに乾燥な、創意のない、文體の貧弱な、思想の空疎な、學識智慧を全く缺いた、私の見る他の書物のやうに欄外に引用句もなければお仕舞ひに註釋もない書物を持つて出て來たらさ。他の書物といふのは皆お伽噺や異教めいた本だが、それには皆アリストートルやプレートーやその他のあらゆる哲學者の格言が一杯抜いてあつて、作者はいかにも學問のある博學な雄辯な人だと思つて讀者は驚いて感心してしまふ。それからまた、その作者たちが聖書を引用するとなると！——そのお勤めぶりが如何にも巧妙で、一つの文章で狂亂の戀人を描くかと思ふと、次の文章では一寸した有難さうな說教を述べ立てるといふ風で、聽くにも讀むにもおもしろく愉快なので、誰でもあの作者たちはトーマス樣（キリストの十二使徒の一人）か、さもなくば教會の本山の博士たちであらうと言ふのである。そんなものは余の書物には何一つあるまい。何故といふに余には何一つ欄外に引用すべきものもなければ、終りに註釋すべきものも

ないからである。ましてこの書物の中でさういふものをば、皆人のするやうにABCの順で初めに置くなどと、一體どんな作者の例に倣ふべきかを余は知らぬ。卽ちアリストートルから初まつてゼノフォーン（紀元前四世紀頃のギリシャの修辭學者、ホーマーに批評を加へし人）かジュークシス（紀元前五世紀の終りゝギリシャの畫家）かに至るまで、尤もそのゾイラス（紀元前五世紀のギリシャの史家、ソクラテスの弟子）かジュークシスは讒誣者であつた。尙また余の書物はその初めに短詩（ソネット）なしに濟ますやうにせねばならぬ、少くともその作者が公爵、侯爵、伯爵、僧正、貴婦人または有名な詩人などであるやうな短詩（ソネット）は。尤も余が二三人の親切な友人に賴みさへすれば、彼等はさういふ短詩（ソネット）を書いてくれることは分つて居る、しかもわがスペイン國内で最高の評判を得て居る詩人たちの作物もそれには叶はぬほどのものを。

『要するに君、』と余は續けた、『天が何人かに命じてドン・キホーテ殿の必要とする一切のものを以てあの人を裝はしめるまでは、ドン・キホーテ殿は生地ラ・マンチャの古文書庫に埋もれたまゝになつて居るに違ひないと思ふよ。何故といふに、私は淺薄で學問が足りないので、さういふものを供給するには力が及ばぬし、またさういふ人々を待たずして自分で言へることを言ふ爲めに他の作者たちを漁りまはるやうなことにかけては、生來內氣で無頓着な方ですからな。それで君の見られた通り考へ込んで夢中になつて居つたのです。それも今お話した通り十分道理がありませう。』

これを聽いて余の友人は、ぽんと一つ額を打つて腹の底から笑ひ出し、『いや君、全く今になつて初めて自分の間違ひを悟つたよ。實は君とお近づきになつてからこの方久しい間といふもの、ずつと私は、君は何をしても機敏で怜悧な人だと思うて居つたのぢやが、今になつて君が、そんな人間とは天と地の間ほども隔りのある人だといふことが分りましたよ。何うしたんです？　そんな些細な容易いことを旨くするのに、もつとずつと面倒な故障でも碎き破つて行ける君のやうな智慮の熟した人が、一生懸命に頭を惱ますとは一體どうしたんです？　これはきつと、才能が不足な爲めではなく、あんまり惰けてゐたり世間を知らな過ぎたりするためですよ。私の言ふことが本當かどうか知りたいと君は思ひますか？　ふん、それなら私の言ふことをお聞きなさい、さうすりや一遍眼を瞑つて開ける間に、私が君の面倒を殘らず一掃して、騎士道の光にして鏡なる有名なドン・キホーテの物語を世間へ出す邪魔をして氣を挫かすと君が言ふ、さういふ不足の點は殘らず私が補うて見

せて上げますからな。』

『言つて御覽なさい、』と、私は友人の話に耳傾けつゝ言つた、『私のこの疑惑をどう片附けたものか、また私の陷つてをるこの當惑の混沌界をどう整理したものか？』

それに對して友人は答へた、『君のその第一の困難……つまり君が卷頭に揭げたいと思うてをられる、しかも身分のある顯要な人に書いて貰はねばならんと言はれる、その短詩（ソネット）や銘や頌詩などのことは、君が自分で少し骨を折つてそんな物を書きさへなされば、何でもない事です。後（あと）で君がそれに洗禮を授けて、自分の好きなやうな名前を附けて、その名附け親には「インドのプレスター・ジョン」とでも「トレビゾンドの皇帝」とでもしとけばよいのです、この二人は名高い詩人であつたと聞いてをりますが、もしさうでなかつたにせよ、衒學者や大學得業の連中が君に喰つてかゝつてその眞相を質問したにせよ、鐚一文がとこも氣にかけるがものはないのです。たとへあの連中は君の嘘を證明したところで、その嘘を書いた君の手を截ち切ることは出來んのですからね。

『書物の欄外に附ける引照文句や、君の物語の中へ挿入する格言や、諺の類（たぐひ）を取つて來る名著などに就いては、そりや君が偶々暗記してをるか、或はとにかく大した面倒を見ずに見付かるやうな、ラティン語の文章とか章句とかを、うまくぴツたりはまるやうに工夫すればよいのです。例へばもし自由とか囚はれとかを述べる場合には——

Non bene pro toto libertas venditur auro;（金のみの爲めに自由を賣るは幸福でない）

を挿入して、そしてその欄外に、ホレースか誰れかこの文句を言つた人を參照して置くのです。また若し死の力を諷する場合には——

Pallida mors aequo pulsat pede pauperum tabernas,
Regumque turres.（青い死は平等の足もて貧民の茅屋をも王侯の宮殿をも踏む）

と來るんです。もし友情とか、われ等の敵をも愛せよと命じ給うた神の愛とかになると、直ぐ様聖書に行くがよい。それは甚だ少しばかりの詮索で神樣御自身のお言葉が見付け出される……

Ego autem dico vobis: diligite inimicos vestros.（されど我れ汝等に告げん。汝等の敵をも愛すべし）。もし惡念に就いていふ場合はやはり福音書に行けば……*De corde exeunt cogitationes malae.*（心より出づる所の惡念）がある。もし友人の賴み難いことをいふ場合にはケートーがある。この人の聯句がそれに丁度よい——

Donec eris felix multos numerabis amicos,
Tempora si fuerint nubila, solus eris.
汝の幸福なる間は友多かるべし、
されどもし天候曇らば一獨になるべし。

こんな風なラティン語の切れ端を見せれば、世間の人は必ず君を學者だと思ふから、これは當世には少なからぬ名譽でもあり利益でもあるのです。

『巻末に註釋を附けるといふ方は、かうやれば何でもない——もし君がその本の中に何か巨人のことを書いてをるとすれば、それをあの巨人ゴライアスたらしめるやうに工夫するのです。さうすれば、それだけでも、殆ど寸毫も勞なくして、堂々たる註が出來るわけです。卽ちかういふ風に書けるから——この巨人ゴライアス若くばゴリアテはペリシテ人にて、羊飼ひダビデの爲め強き石撃ちをもてヲレピントの谷に殺されたり。そは列王記略に記しあるが如し——その何章といふところは君が搜して書き入れるのです。『その次に、雅文學や宇宙學の碩學泰斗たることを證明するには、君のその物語の中にテーガス河の名前を擧げるやうに臨梅するのです。さうすれば君は忽ちまた一つ名高い註解を附けてかう書くことになります——テーガス河はスペインの一王國の名に因みてかく呼ばれしものにして……その源を某々の地に發し、而してその大洋に注ぐや名高きリスボン市の巖堤を洗ふ。而して該河が黄金色の砂を有するは普く世人の信ずる所なり云々。もし君が泥棒のことを記す場合には、あのカクスの物語を話して聞かさう。それは私が請んじてをるところです。もしふしだらな女を記す場合には、モンドニェドーの大僧正がある。この人はラミアとかライダとかフロラとかを君に貸して呉れようから、そのうちの何れを引照しても大信用を博しませう。もし冷酷な心の女を記す場合には、オヰッドかメデアを君に提供するでせう。もし巫女や魔法使ひを取り扱ふ場合には、ホーマーはカリプソーを有し、ヴァージルはサースを有してゐる。勇壯な大將の場合には、ジュリアス・シーザーが自らその自叙傳の「註釋篇」を君に貸すであらうし、またプリュタークは百千のアレキサンダーを提供するであらう。もし君が戀を取り扱ふなら、たゞ僅か二オンスばかりタスカニー語を知つてさへ居れば、あのヘブライ人レオンの許へ行ける。あの人なら心ゆくまで君に供給するであらう。しかし、もし君が外國へ行きたくなければ、國内ではフォンセカの「神の愛に就いて」がある。あの本の中には、君にせよまた如何に想像の逞しい人にせよ、その題目に就て欲しいと思ふ一

切のものが凝結してをるのです。要するに、君は君のその物語の中に、今のやうな名前を引照するとか、今申したやうな様々の物語を引用しさへすればよいのです。そして、その註解とか引用文句を挿入することは私にお任せなさい。私は誓つて君の本の欄外を埋め、そして巻末の四臺のページを使ひつくして上げよう。

『さてそこで、種々の書籍にもあるし、また君も君の著書の中に入れたがつてをる、その大作者たちの引照目次になりますが、その始末は至つて簡單です。君はたゞ、君自身が言つてをられる通り、AからZまですつかり引用してある或る一册の書物を見付け出しさへすればよいのです。さうすれば、そのまんまのABC順で君の書物へ押し込むのです。そしてたとへその剽竊は明々瞭々であらうとも、君はそんな物を借りて來る必要を事實少しも有つてゐないのだから、それは何でもないことです。君が君のこの率直な飾りの無い物語に、そんな物を殘らず使用したのであると思ひ込むやうな、そんな馬鹿正直な人も、そりや世間にはありさうなことでもある。しかし、とにかく、假令別に何の目的も無くそれを挿入したとて、その大作者たちの長い長い目錄は君の書物に堂々人を驚かすやうな壯觀を與へるでせう。それにまた、君が他の作者たちを眞似たか眞似ないかを證明したところで、何にもなることではないのだから、誰れもそんな無駄骨は折りますまい。取り分け、私の誤りでなければ、君のこの本には、君が入用だと言つてをられるそんな引照目次などは一つも必要でないのです。何故なれば、それは始めから終りまで騎士道の書籍に對する攻撃なのです。この騎士道に關しては、アリストートルはついぞ夢みたこともないし、聖バシルは一言も言うてをられぬ。またシセロは少しも知らなんだのです。そして又、的確な眞理も、天文學の觀測も、その氣まぐれの狂想の領域へは入りません。そしてまた、幾何學上の測量も、修辭學上の辯難攻撃も、これに對しては何のせん術もないのです。そしてまた、この本は、人のことゝ神のことゝを混合して、キリスト教徒の頭腦を着飾らしてはならない雜色の着物のやうな物で人に說教する積りでもないのです。この本はたゞ、その組織に於いて、自然の眞に自ら過はすればそれでよいのです。そしてその模倣がいよ〳〵完全になれば、この作はいよ〳〵上出來なのです。そして君のこの一篇は、かの騎士道の群書が世間の群衆に對して有つてをる權威や感化を打ち壞すより外に目ざすところはないので、

何も哲學者等の金言や聖書の箴言や詩人等の寓話や雄辯家等の辯舌や聖者等の奇蹟などを貰うて歩く必要はないのです。たゞよく注意して、君の文體や句法を流暢輕快平明にし、措辭を明快正鵠妥當にして、君の志すところを精一杯力の及ぶ限りよく記述して、混雜なく曖昧なく、明瞭に君の思想を現はすやうにすればよいのです。それにまた、君の物語を讀めば憂鬱は笑ひにかへられ、快活はいよ〳〵ます〳〵快活にされるやうに骨を折り給へ。愚かな者も駄かされず、聰明な者もその創意を賞讃し、眞面目な人もこれを蔑まず、賢い人も必ずこれを褒めるやうに骨を折り給へ。要するに、あの少數の人に憎まれ大多數の人々に賞讃されてをる騎士道の群書の根柢なき建物を打ち壞すことに君の主眼を置くがよい。もし君がこの事業に成功すれば小さからぬ成功を收めたことになるであらう。』

私は深い沈默の裡にこの私の友人の言葉に耳傾けた。そして彼の言説は私に非常な印象を與へた。そこで私はそれに疑ひを挾むことなく、その良分別を受け容れた。そしてその言葉によつてこの序文を作ることに決心したのである。わが溫厚なる讀者よ、諸君はこの序に於いて、この友人の良判斷を認め、且つそんな困窮の場合にこんな助言者を見付けた私の幸運を認め、尙且つこの名高きラ・マンチャのドン・キホーテの物語が添補も改刪もなく諸君の手に達するに至つたことを認められるであらう。このドン・キホーテこそは、幾多の年月の間この近隣に見られなかつた程の純潔な戀人、勇敢な騎士であつたと、カムポ・デ・モンティエル地方の住民は皆さう思うて居る。かくも名高く譽れある騎士を諸君に御紹介して以て諸君に捧げたその骨折を、私は誇大にして言はうとは思はぬ。しかし、その從士なる名高いサンチョー・パンザと諸君とが知り合ひに成らるゝことに對しては、讀者から感謝して貰ひたいと思ひます。このサンチョーに於いて私は汗牛充棟も啻ならぬ埒もない騎士道の群書に散見して居る從士のおどけを殘らず結晶せしめ得たと思うてをる。さらば——讀者よ健在なれ、さうして私を忘れ給ふ勿れ。さらば。

第一篇

第一章　には名高い紳士、ラ・マンチャのドン・キホーテの人と爲りと平生とを述べる。

名はわざと省くが、ラ・マンチャ（スペインの昔の縣の名）の或る村に、久しからぬ前、長押の槍、古い楯、痩せ馬、狩りの爲めの獵犬などを備へてゐる紳士の一人が住んでゐた。羊肉よりも牛肉の多いゴッタ煮、大方の晩は肉生菜、土曜日には肉屑、金曜日には扁豆、日曜日には小鳩か何かの添へ皿、それで所得の四分の三は遣つた。その餘りは、安息日に似合はしい地の好い胴衣、天鵞絨のズボン、靴となつた。そして唯の日には、一番よい地織りもので豪氣な風をした。家には四十餘りの家婢と二十に屆かぬ姪と、馬に荷駄をも積めば山刀をも振り、畑に出で市場に通ふ若者が居つた。我がこの紳士の齢は五十歳に垂んとしてゐた。肉落ち面痩せはしてゐれど、體質は強壯で、頗る早起きで、また大の狩獵家であつた。苗字はクェサーダであるとも、またクェサーダであるともいふ（これに就いては、このことを記してゐる著者たちの間に多少意見の相違がある）。尤もまた然る可き推測によれば、クェサーナと呼ばれたことが明白らしくもある。しかしこれは我々の物語に殆んど必要でない。物語をするに當つて、髪の毛一筋も眞實を逸れねばそれで十分であらう。

さて人々聞きたまへ、上に言ふ紳士は、いつも暇のあるときは（一年中大抵さうであつたが）熱心に貪るやうに騎士道物語に讀み耽つて、野外遊獵の樂しみも、家産を治めることさへも殆んど顧みなくなつたほどであつた。果てはその熱心と惑溺とのあまり、騎士道物語の讀み本を購ふ爲めに多くのエーカー（一エーカーは四段十八町歩に當る）の耕地を賣り拂つて、手に入る限りその類の書物を寄せ集めるに至つた。中にも有名なシルヴのフェリシアーノが仕組んだ物語ほど彼の好んだものはなかつた。その文章の明晰と錯雜せる奇想とが、取りわけ讀むうちに戀の睦言や口說に出つくはすと、彼の眼には眞珠とも見えたからである。そこに屢々わが「理性を惱ましめたる理外の理は、いたくわが理性を弱めたれば、われ君が美貌をかこつも理なり。」とか、或ひはまた、「星辰を以て神々しくも君が神々しさを守る崇高なる上天は、君をして、君の偉大がまさに受く可きむくいを受くるに足る

の人とこそならしむれ。」などいふ文句を見出だした。このたぐひの奇想の爲めに、この氣の毒な紳士は正氣を失つた。そしてそれを會得し、その意味を探り出す爲めには、いつも夜の目も寢ずに苦心した。これたとひアリストートル（紀元前四世紀のギリシヤの哲學者）その人が、唯そのことの爲めばかりに甦へつて來たとしても、到底解くことも探り出すことも出來ないことであつた。彼はドン・ベリアーニスの負はせたり受けたりした手創に就いては、全く心を安んじなかつた。彼を療治した外科醫たちは名醫でこそあつたとは言へ、彼の顏と全身とは一面に創痕や縫ひ目を以て蔽はれたに違ひないと想はれたからである。けれども、あの果てしない冒險を豫約して物語を終つてゐる作者のやりかたを彼は褒めた。そして幾度か自ら筆を執つて、作者豫約のまゝに物語の終りを書かうといふ氣になつた。もしそれよりも大きな、それよりも心を奪ふ考へが彼を妨げなかつたら、彼は必ずそれを爲遂げもし、また出來ばえのよい作を得たであつたらう。

彼は村の牧師補（學者で、シグエンザ大學の名、そこの學位は價値を認められてゐた）と、イギリスのバルメリン（十五世紀頃の騎士物語の主人公なる勇士）とゴールのアマディス（同じく、一名「獅子の騎士」と呼ばるる勇士）とは、どちらが優れた騎士であるかといふことに就いて、度々議論をした。然し村の理髪師ニコラス親方はいつも斯う言つた、——『どちらも「太陽の騎士」（同じく騎士物語の勇士）には叶はぬ。それに比べられる人があるとしたら、それはゴール族のアマディスの兄弟ドン・ガラオルだ。何故といへば、ガラオルはどんな場合にも撓まぬ精神を有つてゐる。そして服裝をしやれる騎士でもなければ、その兄弟のやうに涙脆くもない。ところで武勇の道にかけては、少しもその兄弟に引けは取らぬ』と。とにかく、かの老人は讀み本に凝つて、夜は日の入りから日の出まで、晝は明け方から暮れがたまで、一心に讀み暮らした。かうしてろく〳〵睡らずにむやみに讀んだ爲め、頭は干上つてしまつて、とう〳〵正氣を失ふやうになつた。彼の空想は、讀み本の中でいつも讀む魔法、爭鬪、戰爭、挑戰、負傷、言ひ寄り、戀、苦惱、その他あらゆる荒唐無稽のことで一杯になつてゐた。その空想に心を奪はれて、彼が讀んだ作りごとや空想の仕組は悉く眞で、彼にとつては、世界中のどの歷史でもこれ程事實に近いものはないのだと思ひ込んでゐた。彼はいつも言つた。シード・ルイ・ディアツ（十一世紀に實存せしスペインの國民的英雄）は眞に善い騎士である。けれども打ち返す一太刀に、獰猛怪異の巨人を二人まで、

眞つ二つに切つた『燃ゆる劒の騎士』には比べられぬと。ハーキュリーズ（ギリシャ神話中の最もすぐれたる勇士）が、わが兩腕の間に緊めて、『地』（テルラ）同上、地の化身なる女神）が子アンティウス（同上、巨人にして力士の息の根を止めたときの業を遣つて、魔法を物ともせず、ローランド（中世の騨士物語中の最も有名なる騎士）をロンセスヴァルレス（スペインの古戰場）に屠つたといふので、彼はベルナルドー・デル・カルピオ（九世紀のスペインに於ける半神話的の英雄）を更に好いた。彼は巨人モルガンデのことを大いに褒めた。概ね傲慢無法な巨人の族でありながら、彼はひとり愛嬌あり上品であつたからである。しかし中んづく彼はモンタルヴァンのレイナルドス（中世スペインの騨士物語中の勇士）を、殊に彼が自分の城内から突進して出逢ふ人毎に掠め取り、又金無垢であつたと言ひ傳へられてゐるマホメット（六世紀から七世紀へかけてのアラビヤの人、回々教の教祖）の聖像を、海を越えて奪ひ取るあたりを讃歎したのである。そしてガネロン（中世物語中の勇士）といふあの謀叛人を一足蹴つてやる爲めになら、自分の家婢とおまけに自分の姪までも、くれてやつてよいとさへ思つたのである。

結局全く正氣の顚倒してしまつた彼は、この世では狂人も思ひついた例の無い不思議千萬な考へを思ひついた。則ち彼自ら武者修行となつて、甲冑に身を固め、馬に跨り、冒險を求めて世界を遍歷し、武者修行者の行ふ慣ひとして讀み覺えたことどもを、悉く己れ自ら實際に行ふといふことは、己が名譽を維持する爲めにも國家に盡す上からも、正當にして緊要なりと思ひ込んだのである。あらゆる非違を正し、あらゆる危難災害に身を曝し、それによつて歸するところ己が名聲と名譽とを獲ようとするのであつた。この哀れなる人は、既にはやわが武力によつて、少くともトレビゾンドの皇帝（前出モンタルヴァンのレイナルドスはトレビゾンドの皇帝になつたと傳へられてゐる、トレビゾンドは黑海沿岸の領域）と仰がれたやうな氣になつた。そこで、その娛しい空想の中に感ずる無上の嬉しさに唆されて、彼はその計畫を愈々實行することに取り掛かつた。

第一に彼のしたことは、甲冑の磨き上げであつた。それは彼の曾祖父のものであつたので、錆び朽ち黴に蝕はれて、長き年月を片隅に遺られたまゝになつて居た。彼はそれを一生懸命に擦り磨いた。が、それには包兜はなくて唯粗末な鉢金しか無いといふ一つの大きな瑕疵のあるのに氣がついた。しかしその不備は彼の器用で補つた。卽ち彼は厚紙の瞼甲やうのものを工夫して、それを鉢金に取り着けると、そつくり揃つた兜らしく見えた。尤も實は、果してそれが丈夫で太刀先きを防ぐに足るか否かを試す爲めに、自分の劒を拔いて二た打ち喰はせると、その初めの一と打ちで、

製作に一週間もかゝつたものが、立ちどころに駄目になつた。易々と自分でそれを微塵に壊してしまつたので、彼も聊か當惑して、その危險を防ぐために、再び製作に取り掛かり、これで大丈夫と滿足するまでその内側に針金を張つた。さてもうその上に試めして見る氣は更になかつたので、最も完全な構造の兜として、自らそれを認め且つ採用したのである。

次ぎに彼は自分の駄馬を檢分に掛かつた。それはレーエル銀貨（凡そ二十五錢に當る。）を割つた小錢よりも多い足の蹄裂を有ちながら、スペインの馬の病氣なる蹄裂を意味すると同時に、原文では言葉の洒落となつてゐる「皮と骨とのみなりし」ゴネラスペインの諺、十五世紀の人）の乘馬よりも多くの瑕疵を持つてゐたれど、彼の眼にはアレキサンダー大王として知られるアレキサンダー・マセドニアの王、紀元前四世紀の人）のビューセフハラスレ（キサンダーや、シードのバビーカ（シードの愛馬）にも優れて見えた。四日の間は、何といふ名を馬に附けたものかと考へ暮らした。何故ならば（彼が心の中に思つた通り）、これ程名高い騎士の乘り料で、また自身もこれ程手柄のある馬が、何か際立つた名前を有つてゐないといふことは、不都合であつたからである。それ故彼は、その馬が騎士の乘馬とならない前の素性をも、現在の身分をも、あはせて示すやうな名前を當てがはうと苦心した。蓋し主人の身分が新しくなれば、馬も新しい名前を附けねばならず、その名前も、これから勤める新しい役目と新しい身分とに似合はしい、際立つたもの〳〵しいのでなければならぬといふことは、當然のことに過ぎない。そこで、自分の記憶や思ひ附きの中から、いろ〳〵雜多の名前を組み立てゝは削り、棄てゝは足し、壞しては作り直しゝた末に、ロシナンテ（Rocinante ロシンは專ら勞役に使用せられる駄馬を意味し、乘馬、貴の馬などと區別するに用ゐられる、ante（アンテ）は以前の若しくは第一の意味それ故Rocinante はまさしく以前は駄馬であつた馬若しくは「駄馬中の筆頭」を意味することゝなる）と呼ぶことに決定した。彼の考へでは、高尚で、通りがよくて、そして世界中の駄馬の第一の筆頭たる今の身分にならない前の、たゞの駄馬たる素性をも含めた名前であつた。

頗る自分の好みに叶つた名前を、馬に附けたので、彼は自分にも、一つ附けたいと頻りに思つた。そして八日以上もこのことを思案してゐたが、遂に自分をドン・キホーテと呼ぶことに心を定めた。そこからして、既に述べた如く、この正史の著者たちは、彼の名は疑ひもなくクィサーダであつて、他の人々がよく言ふやうにクェサーダではないと推論してゐる。しかし勇敢なるアマディスが、自分のことをぶつきらぼうにアマディスとばかり言ひ放しては承知せず、そ

の土地を名高くする爲めに、おのが領地なり生國なりの名を附け足して、自らゴールのアマディスと稱へたことを想ひ出して、彼も立派な騎士らしく、おのが名に附け足して、自らラ・マンチャのドン・キホーテと名乘ることに決めた。それによつて、彼は精確に自分の出どころと生國とを名乘つたのであり、またそこから自分の冠名を附けたのは、その土地を表彰したのであると考へた。

さて甲も磨かれ、鉢金も兜となり、馬の名附けも濟み、自分の身も定まつたので、今はたゞ、戀ひすべき婦人（騎士道の風習として婦人を尊敬し保護する精神から騎士は各自分の戀慕する婦人を有してゐた）を探す外には、何一つ足らぬこともないといふ始末になつた。戀のない武者修行の騎士は、樹木に葉や實がなく、五體に魂のないやうなものであつたからである。彼の獨り言ちたやうに、『もしわが罪業の爲めに、但しは又わが武運めでたくして、武者修行の騎士には有りふれたことぢやが、この邊で巨人にでも出逢ひ、一と打ちして其奴を敗るか、または腰まで引き裂くか、または結局打ち負かせ打ち從へることでもあつたら、其奴を贈り物に進ずべきさる人のあるのも結構ではあるまいか。其奴を遣はして、わが懷かしい佳人の前に跪づかせ、卑下した素直な辭で、「私めはマリンドラニアの島の主、巨人カラキュリアムブロと申し、褒めても褒めても褒め足らぬ騎士ラ・マンチャのドン・キホーテの爲め、一騎打に打負かされた者でござります。私めを貴女さまの御存分に成されますやうに、貴女さまのお前へ罷り出でよとの仰せ附けでござります。」と言はせてくれうもの。』あはれわが善良なる紳士は、此の長雲辭を述べ立てゝ、ことに彼が自分の意中の人と呼ぶ可きある人を思ひ附いたときには、どんなに喜んだことであらう！　言ひ傳へによれば、彼の近くの村に、非常に麗はしい農家の娘があつた。それを彼は一と頃戀ひしたことがあつた。尤も世間のうはさでは、娘は夢にもそんなこととは知らなかつたし、またそんなことは思ひも寄らなかつたさうである。娘の名はアルドンザ・ロレンゾオであつた。彼はその娘に、自分の意中の佳人たる尊稱を授けて可なりと考へた。さて、その娘の名と不調和でなくて、しかも姫君や高貴の婦人の名前らしく仄めかして見せる名前を、何かと探し求めた末、彼はその娘をドゥルシネア・デル・トボソォ――その娘はエル・トボソォの生れなので――と呼ぶことに決めた。その名前は、旣に自分や自分の持ちものに與へた凡ての名と同樣、彼には口調がよく、月並でなく、そして意味深重なつもりであつた。

第二章　には工夫に富めるドン・キホーテの初めての門出を述べる。

かういふ用意が整うたので、非違の正さんと欲するもの、難儀の救ふべく、非道の改むべく、弊害の除くべく、義務の果たすべきものを思へば、自分の猶豫の爲めに世界中が損亡をして居るといふ考へに急き立てられて、彼は自分の計畫の實行を、最早延ばす氣はなかつたのである。そこで、誰れにも前以て自分の目論見を知らさず、また誰れの眼にも觸れないで、まだ日の白みそめぬある朝（それは七月の月の最も暑い日であつた）、彼は鎧に身を堅め、急か細工の兜を戴き、ロシナンテに打ち跨り、圓楯を摑み槍を掻い込み、わが大目的の發端のやす〳〵と成れるを思うて、無上の得意と滿足とのうちに、裏の庭口から野原へと乘り出したのである。

然るに彼が廣々とした野原へ出るか出ないに、怖ろしい考へが彼を襲うた。それは殆んどこの企てを最初の取りつきから止めさすに足るものであつた。彼はまだ騎士の位を授けられて居ない。それ故騎士道の掟に從へば、彼は如何なる騎士にも刃向ふことは出來ないし、またさうしてはならぬ筈である。また、たとひ騎士の位を授けられてあつたにしても、やはり新參の騎士として自ら武勇によつて之れを得るまでは、楯の面には意匠なく、白の甲冑を着せねばならぬ次第であつた。かういふ考へは彼の心をぐらつかせた。しかし彼の狂熱はいかなる道理よりも强かつたので、かういふ段取にまで彼を伴れ出した讀み本の中で、自ら讀んだことのある通り、同じ場合に於ける他の人々の例に倣つて、自分の出くはし次第の人から、騎士の位を授けて貰ふことに、彼は心を決めたのである。白い甲冑（實は銀貨でなくても飾りさへなくばよいのである。それをドン・キホーテのことは、よい折の來次第、貂の皮より白くなるまで、自分の甲冑を磨き立てることにしようと決めた。かやうに自ら慰めて、彼は馬の選ぶがまゝに道を追うた。かくするところに冒險の本領は在ると信じたからである。

かやうにして出で立つて、わが新參の冒險家は、獨り言をいひつゝ歩みを進めた。『やがて拙者の高名な事蹟の實歷が知れ渡つて、それを書く賢人が、わが、早朝の初門出を述べねばならぬことになつたら、かういふ風に書かいで何うするものぞ、「茜さすアポルロ神（ギリシヤ神話の黄金の光りと生命の神、太陽の神）その髪は、廣大無邊なる大地の面の上に、その輝く髪の黄金

の絲をひろげたまふひまもなく、彩羽の小鳥たちは姤み強き夫の君の軟かなる褥を棄てゝ、マンチャの地平線の門や露臺のあたりより、今し人間に現れたまふ薔薇色なす曙の女神のいでましを、甘く滑らかに流るゝ諸音もて歡び迎へんとおのがじゝ、歌の調べを整ふるひまもなく、世にきこえたる騎士ラ・マンチャのドン・キホーテは、いぎたなき綿毛の床を棄てゝ、その名高き軍馬ロシナンテに打ち跨り、いにしへより聞えたるモンティエルが原を越え初めぬ』實際その野原を彼は現に越えて居つたのである。言葉を續けて、『永代の記念として、黄銅の塑像を作り、大理石に彫り刻み、繪圖に描いても恥かしくない拙者の名高い功業を、普く知れ亙らせるやうになるその時代こそは仕合せぢや、その時節こそは仕合せぢや。さてまた、汝賢き魔法使ひよ、（騎士道物語の後期に於ては、魔法使ひが拙々の事變を作ると考へられてゐる）そちはどのやうな人であらうとも、この驚くべき物語の記錄者たる運にめぐりあふそちは、わしの賴みぢや、わしが道中や遍歷の變らぬ道伴れ、この善きロシナンテを忘れるなよ。』と言ふかと思ふと、恰も眞實戀に惱む人のやうに、彼は再び呼ばはつた。『おゝ、ドゥルシネア姫よ、この囚はれたる心の戀人よ、蔑んでわれを追ひ立て、すげなくもつれなくも、君が麗顏のみ前よりわれを斥けたまふとは、非道邪慳の君が仕打ちかな。あはれ姫よ、かくまで悶えて君が情を求め歎くこの心、君が僕を、せめてみ心に留めたまふことを許させられい。』

かうして彼は、すつかりいろ〳〵の讀み本で覺えた口調で、出來るだけその言葉を眞似て、こんなやうなさま〴〵の他愛もないことを、次ぎから次ぎへと綴くり合はせたのである。そんなことをしながら彼はのそ〳〵と馬を歩ませた。日はずん〳〵と昇つて、而かも非常な炎暑であつたので、よし彼がいくらか持つて居つたにしても、腦味噌は立派に溶けてしまつたわけであつた。殆んど一日、彼は何一つこれといふ程のことも起らずに旅した。彼は自分の强い腕力を試すべき相手に、直ぐさま出逢ひたいと望んで居つたので、それには失望したのであつた。

彼が初めて出逢うた冒險は、ラピースの峽路のそれであつたといふ著者もある。また他の人たちは、風車の冒險であるともいふ。しかし私がこの點について確かめたところ、また私がラ・マンチャの年代記に書いてあるのを見たところは、かうである。——彼は一日途上に在つたが、日の暮れ方になると彼の駄馬と彼とは、疲れるやら饑じいやらで死にさうになつた。その時、もしや休息させて貰うて、

烈しい飢渇を救つてくれるやうな、誰かの城か、但しは羊飼ひの小屋でも見當らないものかと、そこら中を見廻して居ると、その道から程遠からぬところに、一軒の旅籠が見えた。それこそ、彼を救ふ宮殿へではないまでも、その玄關へ導く星のやうにうれしかつたのである。そこで歩みを疾めてそこに辿り着いたのは、丁度日の暮れかゝつた頃であつた。戸口には二人の若い女が立つて居つた。謂はゆる宿場の女で、その晩偶々この旅籠に泊り合はせた騾馬追ひ人足どもと一緒に、セヰールへ行く途中であつた。わが冒險家には、何が起つて來ようとも、何でもかでも、自分が本で讀んだやうな風に起つて來るものと考へるか、さもなくば、自分にはさう見えたと思ひ込んでしまふのがきまりであるので、彼はその旅籠を見ると直ぐ、四面に塔櫓もあれば銀色燦爛たる尖塔などもある城だと、獨りで思ひ込んでしまつた。それに吊橋と濠と、その他かういふ城にいつもある筈の一切の附屬物をも忘れはしなかつたのである。彼は自分には城と見えたこの旅籠の方へ進んだ。そしてつい近くの手前で彼はロシナンテを控へた。一寸法師か何かが胸壁の峽間に現はれ、喇叭を吹き鳴らして、騎士の城に近づくよしを知らせることであらうと心待ちにしたのである。然るに人々はぐづ〳〵して居るし、ロシナンテは既へ行くのを急き立てるのを見て、彼はその旅籠の戸口へ進んだ。そしてそこに立つて居つた二人の派手な娘に目をとめたが、それは二人の住き處女か又は麗はしい婦人の、城門のほとりに息らふものゝと彼には見えたのであつた。

折しも偶々一人の豚飼ひは一群の豚（遠慮なしにさういつて呼ばれて居るので）を集めながら、苅株の間を通つて居つたが、豚を呼び寄せるとてその角笛を一と吹き鳴らした。すると忽ちドン・キホーテは、それこそかねて待ち設けて居つた通り、一寸法師か誰かゞ彼の到着を披露する合圖であると思うたのである。そこで非常に滿足して、彼はその旅籠と婦人たちのところへ乘りつけた。その女たちは、そんな男が甲冑に身を堅め圓楯を把つて近寄つて來るのを見て、びつくり仰天して旅籠屋の中へ引つこみかけた。ドン・キホーテは彼等が遁げるのを見て、怖がるのであらうと思ひ、厚紙張りの瞼甲を上げて、その干乾びた、埃塗れの顔を露はし、ものごし殿懃に、優しい聲をして彼等に言葉をかけた。「方々聊かも無禮を怖れてお遁げなさるには及びません。いかなる人に對しても無禮を仕向けるといふことは、拙者が自から名譽る騎士道の掟のうちにはござりませ

ん。ましてかた〳〵の御様子をお見受け申しても見まがふ方もない、やんごとない處女子に對しては、尚更のことでござります。』娘たちは彼を見つめ眼を見張つて、不細工な瞼甲に隱れてゐる彼の顏つきを、讀み取らうとして居つたが、自分たちのことを處女と言はれたときには、自分たちの商賣と餘り筋違ひのことなので、つい大聲立てゝ笑はずには居られないのであつた。ドン・キホーテはそれを聞いて嚇となつてから言つた、『愼み深いのが麗しい人には似合ふのぢや。別して何の譯もない高笑ひは、大きな不束かぢや、さりながら、これとて方々を苦しめようの、立腹させようのとて申すではございません。拙者の願ひは方々に仕へる外にはございませんから。』

わが騎馬武者の腑に落ちない言葉や頼もしからぬ顏つきは、婦人たちの哄笑を增したばかりであつた。それがまた益々彼の憤りを加へたのである。もしその時亭主が出て來なかつたならば、事はこの上進んだかも知れなかつたのである。亭主は非常に太つた男で、頗る穩やかな人間であつた。鞍、手綱、槍、圓楯、或ひは胸甲などゝ同樣に、不揃ひな甲冑に身を堅めた、この異樣の姿を見ては、彼も娘たちと一緒になつて、可笑しさを外へ出すのが、滿更いやでもなかつたのである。しかし實は、かやうな事々しい武裝が怖くもあるので、綺麗に物を言ふのが上分別と考へて、『お武家さま、あなた樣お宿をお召しなさりまするならば、御寢具は取り除けに致しまして（手前の宿には一臺もございませぬので）その他は何なりと澤山にござりまする。』と言つた。ドン・キホーテはこの城砦の守將（旅籠の亭主と旅籠とが彼の眼にはさう見えたので）の恭しげな振舞ひをつく〳〵見て、『城守どの、拙者は何でも足り申す、そのわけは

わが物の具はわが晴れ着
わが休らひは唯いくさ

でござる。』と答へた。主は彼が自分を、城守と呼んだのは、彼が自分を「カスティル人らしい男」だと思つたからだ（Pano de castilla（サノ・デ・カスティラ）はゼルマニアの方言から出た諺語で、（髪裝した格眺）義である。castellano（カステルラノ）及びcalainie（アルカイデ）はともに城又は砦の義であるが、前者はまた a castilian 即ち カスライル人の義ともなる、之も言葉の亂れでそのほかに譯せない。そのくせ自分は實はアンダルーシア スペイン南部の一地方の總稱 のもので、サン・ルカル スペインの港 の濱の生れで、ケークス ローマ神話の巨人、前出のハーキュースの家 を盜んだことがある のやうな惡ごすい竊盜で、大學生や、小姓のやうに、惡戲ばかりするやつなのだがなと思つた。『さやうならば』と彼は言つた、

『君が褥は堅き巌、
君が眠りは寝ずの宿直
ぢや。さやうならば御下馬なされて、一と夜とは申さず、十二ヶ月も、この屋根の下で、どれ程なりとも大丈夫寝ずに居られるおつもりでおいでなされませ。』かう言ひながら、彼はドン・キホーテの鐙を捺へようとて進み寄つた。ドン・キホーテは（一日斷食の戒を破らなかつたので）非常に難儀をして骨を折つて、やつと馬から下りたのである。そしてその時主に、凡そ世に麵麭を喰ふもの〻中でも、これは最も優れた畜類であるから、自分の馬のことは非常に氣をつけてくれるやうにと頼んだ。主は馬を檢分したが、ドン・キホーテの言つた程、いやその半分程も良くは思はれなかつた。そこで馬を厩に繋いで置いて、彼はこの客が何を望むか知らんと思つて引き返して來た。するともう彼と仲直りをしてしまつた娘たちは、丁度彼の鎧を解いてやつて居つたのである。彼等は彼の胸甲と背甲とは取り外したのだが、どうして喉輪を開けるのやら、どうして間に合はせの兜を脫がすのやら、知つても居らず、分りもしなかつた。それは彼が絲色の平紐でそれを括りつけて居つたからで、その結び目の解きやうがないものだから、是非とも切らねばならなかつたのである。けれどもそれは彼がどうしても承知しない。そこで彼が一と晩中兜を被つたまゝで居つたのは、何とも形容の出來ない程道化た奇妙な姿であつた。そして彼等が鎧を取り外して居つた折に、それをして居る宿場の女どもをば、その城に屬いて居る高位の婦人だと思つて、彼は頗る陽氣に話しをしかけた。

『ゆめかくも處女の手に
宮仕へ受けし騎士は世になし、
ドン・キホーテと呼ぶ人のやうに
わが町を出で來し後に。
處女等は彼に仕へ、
姫たちはその馬に……

……卽ちロシナンテは、それは皆さん方、拙者の馬の名でござります。またラ・マンチャのドン・キホーテは拙者が名でござる。方々のお後に立ち、方々の名譽の爲めにする功勳が、自と拙者を世に知らすまでは、われから名宣る心は更になかつたのぢやが、あのランスロット（中世騎士物語中の勇士）の古歌を、今この折につけて作りかへねばならぬことに成つて、全く早まつてわが名を方々に知らせ申したのぢや。さりながら方々が命令を下され、拙者がそれに從ふ時も參りませ

う。その時こそ捕者の武力が、方々に盡さん捕者の願ひをお目にかけるでござりませうわい。』

こんな飾つた言葉を聽きなれない娘たちは、何と返す言葉も無かつた。彼等はたゞ何か食べものは入らぬかと彼に尋ねた。『何か少しばかり喜んで戴きませう。』とドン・キホーテは言つた。『丁度時分もよろしいやうに存じまする故。』その日は偶々金曜日であつた。それで、カスティルでは「アバデジョー」、アンダルシアでは「バカラオ」、またあるところでは「キュラディルロー」、他のところでは小鱒ともいふ幾尾かの魚の他には、旅籠中に何もなかつたのである。そこで彼等は、別に差し上げる魚もないので、小鱒が食べられるとも思ふかと彼に尋ねた。『小鱒が澤山あるなら』とドン・キホーテは言つた。『一尾の鱒と同じことでござる。何故ならば、細かい小錢で八レーェルを貰ふのも、八レーェル銀一つ貰ふのも、捕者には一つことぢや。その上、大方その小鱒は犢肉のやうであらう。あれは牛肉より結構ぢや、また山羊肉よりも結構な野羊肉よりも結構ぢや。しかし何なりと早く持つて来て下され。甲冑の重みと壓しとは、内側に支へがなうては持ちこたへられませんわい。』人々は風通のよいやうに、彼の食卓を旅籠屋の戸口のところに据ゑた。主は汁氣のないまづい作りの干魚を一人前と、彼自身の鎧のやうに黒い黴びた一片の麺麭とを持つて来た。しかし彼の食べる様子こそ可笑しい見ものであつた。兜を被つて瞼甲をあげて居るので、誰か他のものがそこへ入れて呉れなければ、何一つ自分の手で自分の口に運ぶことが出来なかつた。そこでこの役目をその婦人の一人が勤めてやつたのである。しかし飲みものを與へることはとても出来なかつた。否もし主が葦に孔を開けて、その片端を口に差し入れ、片端から葡萄酒を注ぎ込むことにしなかつたら、とても出来なかつたであらう。彼は兜の紐を切るよりも、と、悉くこれを辛抱して忍んだのである。

こんなことをして居る折柄、この旅籠へ豚の睾脱をする一人の男がやつて来た。その男は近くへ来ると篠笛を四五度鳴らした。それを聞いてドン・キホーテは、自分はどこかの名高い城内に居るのだ、そして人々は音樂を奏して自分を持てなして居るのだ、そしてその干魚は鱒で、その麺麭は最上白で、その宿場の女どもは貴婦人だ、そして主は城の守將だと、すつかり信じ切つてしまつた。從つてまた彼の企ても門出も、いくらか旨く行つたと思つた。しかし、自分がまだ騎士の位を授けられてゐないことを思うては、

やはり心を惱ました。それは、騎士の位を受けずにはどんな冒險にも表て立つて係はることが出來ないのは、彼にも明白であつたからである。

第三章　にはドン・キホーテが騎士の位を受けた道化た式の次第を述べる。

それを思ふと氣が揉めて、彼は貧しい一膳飯流の晩餐をそこ〳〵にすませた。食べてしまふと主を呼び、一緒に遁の中に閉ぢ籠つて、その前に跪づいて言つた、『武勇の騎士よ、足下の寬典を以て拙者が求める賜ものを授けたまふそれまでは、拙者はこゝを立ち上りません。その賜ものは足下の美名と人類の利益とに貢獻するでござりませう。』主は自分の脚下に居る客人を見、こんな口上を聞いて、何とし何と言つてよいやら分らず、たゞ驚き呆れてぢつと見つめたまゝ立つて居つた。お立ちなされと頻りに勸めても、一向聽き入れる樣子がないので、遂に彼の求める賜ものを與へることに同意した。『君よ、拙者は閣下のお許しを期して居りましたのぢや。』ドン・キホーテは答へた、『拙者が願うて寬仁なる君の許された賜ものとは、外でもない、明朝足下より拙者に騎士の位を授けられることゝ、今一つは、拙者は今宵君がこの城内の禮拜堂で、わが甲冑の見張りを致すといふことぢやと、御承知を下されたい。かうして明朝は、今も申す通り、かねての拙者が心願の成就して、不幸に苦しむ人々の爲めに、武勇の働きを求めて世界の四方を遍歷することも、表て立つて叶ふことゝなるでござりませう。それは騎士道の義務でもあり、又その志かゝる行ひを爲すに在る拙者のやうな武者修行者の義務でもござるぢや。』

主は前にも記した通り、いくらか剽輕ものでもあり、また、かねてこの客人に正氣のないことはうすゝ〳〵感附いても居つたので、その人からこんた話を聞くに及んで、全くそれと思ひ込んでしまつた。そしてその一と晩からかつもりで、客人の心に任せることに決めたのである。そこで彼は、彼の志す目的を追ふのは全く正しいといふこと、かういふ勳績は、その見かけなりその勇ましい擧動の示すところなり、あれほどの際立つた騎士に在つては、自然でもあり似合はしくもあるといふこと、また自分自らも若い頃には同じ譽れある道に從つて、世界の各地に冒險を求めて遊歷した。中にもマガラの郊外の贓物所、「リアランの小島」、セヰール の管內、セゴヰアの小市場、ヴレンシーアの

オレフ樹園、「グラナダの四つ辻」、サンルカールの濱邊、「コルドーヴの駒の泉」、トレードの居酒屋など、（以上は何れもスペインの地名にて、多く浮浪人や惡漢の出入する繁華の場所）その他さま〴〵の土地で、幾人もの寡婦を欺いたり、處女を傷けたり、未丁年者を瞞着したり、隨分惡い事をした末に、結局スペインの殆んどあらゆる判事席と法廷とから目を注けられるやうになつて、彼はその足のすばしこさと指の器用さとを見せてやつたといふこと、そのうち遂にこの自分の城へ退いて、こゝで彼は自分の身代と他の身代とで暮らして居る。またこゝで彼は、地位や身分の如何を問はず、凡ての武者修行者を接待した。それは偏に、自分が彼等に懷いて居る大いなる愛情の爲めであり、また自分の慈の報いとして彼等の持ちものゝ分け前に與かりたい爲めであるといふことなどを彼に告げた。その上また主は、改築の爲めに取り崩したので、自分のこの城には禮拜堂がないから、そこで甲冑の見張りをするわけには行かぬ。しかしまさかの場合には、どこで見張りをしてもよいと心得てゐる。それ故今晩は城の廣庭で見張りをし、朝になつて、神意に叶はゞ、彼に騎士の位を授ける爲めに、別して何人も及ばぬ程遺憾なく騎士の位を授けるやうに定めの儀式を行ふことにしようと彼に告げた。主は彼に幾らかの金を持ち合せて居るかと尋ねた。それに對してドン・キホーテは、武者修行者の傳記の中では、嘗て一人として金錢などを携へて居る話を讀んだことがないので、自分も一文も持ち合せはないと答へた。それを聞いて、主は彼の間違つて居ることを告げた。何故といへば、たとひ武勇傳の中には書いてないにもせよ、それは、金錢とか清潔なシャツとかいふやうな、そんな知れ切つた無くてはならぬものゝことを言ふには及ばぬといふ作者の考へによつた譯で、それだからと言うて、騎士たちがそれらの品を携へて居ないと思ふべきではないのである。凡て武者修行者は（そのことを書いた精しい申分のない書物は隨分澤山あるが）萬一の場合の爲め、十分に用意した財布を携へ、また同じくシャツとか負傷を癒す爲めの膏藥の小匣とかを携へてゐるといふことは、確かな定り切つたことゝ思うてよいのである。何故といふに、彼等が戰つて遂に負傷を受けた原や荒野では、實際賢い魔法使ひか何かでも友達に有つて、雲に乘り空を馳せ、妃嬪侏儒のたぐひを携へ來たつて、靈驗ある一壺の神水を以て立ちどころに彼等を救ひ、その一滴を味ふときは打ち傷斫り傷瞬く隙に癒え、何の負傷をも負はなかつたやうに健やかになるといふことでもない限

り、彼等を療治する人がいつもそこに居る譯ではなかつたのである。しかしこんなことの起らない場合には、昔の騎士は、自分の家來が金錢その他の調度、たとへば治療用の綿撒絲や膏藥などを用意して居るかを注意したのである。また偶々、騎士が一人も家來を伴れぬ場合には(それは滅多にない珍らしいことである)、馬の臀の上に、殆んど眼にかゝらぬ位の可愛らしい鞍袋に何もかも入れて、何かさも大切の品らしく彼等自ら携へた。それは、何かさういふ譯でもなければ、鞍袋を携へる事は、武者修行者の間にあまり好ましくは思はれて居なかつたからである。そこで主は彼に向つて、この後は決して路銀や一通りの調度なしで旅をするな、思ひもかけぬ時にそんな品の有難さが分るものだと言ひ聽かしたのである(やがて自分の烏帽子兒となるのであるから、主は彼に指圖までしてもよかつたのである)。

ドン・キホーテは愼んで彼の忠言に從ふことを約した。そして、旅籠の片側の廣い裏庭で自分の鎧の見張りをするといふことが、直ちに取り定められたのである。そこで、鎧を凡て取り纏めて、ドン・キホーテはそれを井戸の側にあつた水槽の上に置いた。かくて、腕には圓楯を取り構へ、槍を摑み、步武堂々として水槽の前を行きつ戻りつし始めた。そして彼の步き始めたときに日が暮れかけた。

亭主は旅籠に居つた皆の人々に、その客人の氣違ひ沙汰や、鎧の見張りや、その思ひ込んで居る騎士敍任式のことを告げた。かくも奇妙な氣違ひを頻りに不思議がつて、人人は遠くの方からこれを見ようとして集まつた。そして、いかにも泰然として、或は行きつ戻りつし、或は槍を杖ついて、隨分永い間側目も振らずその鎧を見詰めて居る彼の樣子を見たのである。夜に入つて月の光りは煌々と、その光りの貸し主太陽のことごとと競ふばかりに照らしたので、この新參の騎士のすることは、一々はつきりと皆の眼に見えたのであつた。

折柄この宿に居つた騾馬追ひ人足の一人は、自分の騾馬どもに水飼うてやる氣になつたが、ドン・キホーテの鎧が水槽の上に置いてあるので、是非ともそれを除けねばならなかつた。が、彼は人の近づくのを見て、大きな聲で呼びかけた、『やア〳〵、たとひ誰にもせよ、凡そ劍を佩びたるものゝ中にも最も豪勇なる武者の鎧に、手をかけようとする無禮の騎士、わがすることに氣をつけい。わが無禮の罰として命を落すつもりでなくば、手をそれに觸れるなやい。』騾馬追ひ人足はこんな言葉を氣にもとめず(もし彼が自分

の身體に氣をつけて居つたのなら、その言葉に氣をつけた方がよかつたのであらうに)、轡革のところを摑んで、少し遠くの方へその鎧を投げたのである。これを見てドン・キホーテは、兩眼を天に向けて、その意中の人ドゥルシネアを一心に念ずるらしく見えたが、『君が從へたまふわがこの胸に臨み來るこの初めての太刀打ちに、助けたまへ、わが君よ。君が惠みとお護りと、願はくばこの初めての危難にわれを見棄てさせ給ふ勿れ』と叫んだ。そして、こんなやうな同じ意味のことを言ひながら、圓楯を落し槍を兩手に提げて、騾馬人足の頭にウンと一撃も喰はせると、その男は目を廻して、大地の上に平伏つてしまつた。もし二度目を續けて參つたら、外科醫の療治などはいらなかつたであらう。これをし濟まして、彼はその鎧を取り上げ、もとの通り落ち着き澄まして、また行きつ戻りつし出したのである。

これから間もなく、また別の人足が、そんなことのあつたとは知らず(前の人足はまだ氣絶して倒れて居つたので)、同じやうに自分の騾馬どもに水をくれてやらうと思つて遣つて來た。そして水槽の邪魔を除ける爲めに、鎧を側へ除けようとして居つた。その時ドン・キホーテは、一言も發せずまた誰にも助勢を求めずして、またもやその圓楯を落し、またもやその槍を提げ、二番目の人足の頭をば、實際粉々にこそ碎きはせねど、四つにそれを劈いたので、三つ以上にしてしまつたのである。この物音に旅籠の人々は殘らずその場へ馳せつけた。その中には亭主も居つた。これを見てドン・キホーテは、腕に圓楯を取り構へ、片手を劍にかけて呼ばはつた、『あはれ、わが弱き心の力たり杖たる美貌の君よ、今こそ、君が偉力の眼を、かゝる大冒險の際に臨める君が俘囚のこの騎士の上にふり向け給ふべき時なれ。』これによつて、彼は、世界中の人足どもが、殘らず自分に掛つて來てもびくともすまいと思ふ程に、元氣の湧くを覺えたのである。傷負ひの仲間はその場の形勢を見て取つて、遠くの方からドン・キホーテに石をバラ〳〵と投げ出した。彼は水槽を去つて自分の鎧を番せずに打ち棄てゝ置くことも得せず、圓楯を以て出來るだけ身を庇うた。亭主は人々に向つて彼を打ち遣つて置けと叫んだ。已に亭主の話した通り彼は氣違ひである、氣違ひであつて見れば、萬一彼が人々を殘らず殺したとて咎めるわけには行くまいからである。ドン・キホーテは尚々聲を張り上げて、人々を惡もの謀叛人と呼び、また武者修行者に向つてこんな風に仕向

けさすこの城の主は、腰抜けの下司侍である、もし彼が騎士の位を得たならば、彼はこの裏切に對して必ず報いるつもりであると呼ばはつた。『しかし汝等下賤卑怯の彌次馬どもは物でもない。投げ、打て、掛つて來い。どんなことでもして見せろ。汝等の馬鹿と横着の報いは今に見せてくれるぞ。』と叫んだ。かく呼ばはる勢の烈しさと大膽さに、寄せ手の者どもは頻りに怖くなつた。一つはこれもあり、また一つには亭主の說得もあつて、彼等は石を投げつけることを止した。そこで彼も亦傷負ひを運んで行かしてやつた。そしてもとの通り泰然自若としてまた鎧の見張りを初めたのである。

しかしこの客人の氣紛れは、餘り亭主の好むところではなかつた、そこで彼は、事を手短に片づけて、この上災難の起りやうのないうちに、直ちに緣起の悪い騎士の位を彼に授けてしまはうと決心した。そこで、彼のところへ行つて、自分の知らぬ間に下賤の者どもが無禮を働いたが、その者どもの無法は十分に罰してやつたと言つて、詫びを申し入れたのである。彼の言ふには、既に申した通り、この城内には禮拜堂は無けれど、これからまだ爲さねばならぬ儀式の爲めにはそれもいらぬ。蓋し彼が敍任の式を解するところによれば、騎士敍任の要領は、頸を抱く型と肩を平打ちにする型とに在る。そしてこれらは野原の眞中でも行ふことが出來るのである。それに定りは凡て二時間だけの見張りで十分であるのに、彼はそれを四時間以上も勤めたのであるから、既に鎧の見張りに關する所要の式は爲したのであると。ドン・キホーテはこれを殘らず信じた。そして彼に向つて言ふには、自分はいつでも彼の言ふまゝに、出來るだけ手早く事を濟ませるようにと待つて居るのである。それは、萬一再び攻撃を受けても、自らわれこそ敍任せられた騎士と思へば、主の求めにより敬意を表して許してくれようものゝ他は、城内唯一人も生かしては置くまいと思うて居るからであると。

かゝる警告と威嚇とに接して、城守は直ちに一冊の書物を持ち出した。その中には、騾馬人足どもに用立てた藁や大麥を平生書き入れるのであつた。そして蠟燭の燃え屑を持つた一人の若者と例の二人の娘とを伴れて、ドン・キホーテの居るところへ還つて來て、彼を跪づかしめた。やがて恰かも何か一心籠めて祈り上げて居る風をして、その出入帳のところ〴〵を讀み、唱へ、その最中に手をあげてウンと頸の上を打ち、又ドン・キホーテの劍を以てその肩の上を

小ひどく平打ちにした。その間中はさも祈りを上げて居るらしく、口の中でもが〳〵やつて居たのである。これが終ると、彼は件の婦人の一人に指圖して、ドン・キホーテに劍を着けさせたが、婦人は非常に沈着に嚴肅にそれを執行した。そしてその儀式の段取り毎に、噴き出しさうな可笑しさを抑へるのは、並大抵のことではなかつたが、この新參の騎士の豪勇は彼等も既に見て居るので、その高笑ひを抑へ了せたのである。劍を彼に着けるとき、その立派な婦人は彼に言つた、『冥加を以てあなた樣がえらい仕合せな騎士になられますように、また戰にお勝ちなされますように。』ドン・キホーテは、自分の受けた恩義を負ふところのその人をば、この以後覺えて置きたいからと言つて、その女の名前を尋ねた。彼は自分の武力によつて獲たる名譽の幾分を、その女にも授けるつもりであつた。その女は大いに卑下して、自分はラ・トロサと呼ばれるので、サンチョーピエナヤの廣場に住むトレドの軋直しの娘であること、また自分がどこへ行かうとも、主君として彼に仕へ彼を崇めるつもりであると答へた。ドン・キホーテは答へて、もし今より後かの女が、「ドン」の尊稱を取つて自からドーニャ・トロサと呼んでくれるなら有難いと言つた。その女はさうしようと約束した。やがて今一人の女は、彼の拍車を拵子で締めた。そしてその女との間にも、前の婦人と殆んど同じやうな問答が續いた。彼はその名前を尋ねた。女はラ・モリネラ（粉挽きの女といふ義）と言つて、アンテケェラの卑しからぬ粉挽き屋の娘であると言つた。ドン・キホーテは、更に一層の心盡しと好意とを捧げて、その女にも同じく「ドン」の尊稱を取り、ドーニャ・モリネラと自ら呼ぶことを求めるのであつた。

かうして火の附くやうに急いで、前代未聞の儀式を終へたので、いよ〳〵冒險を求めて乘り出す自分を馬上に見るまでは、ドン・キホーテは、尻も落ちつかなかつたのである。かくて、直ちにロシナンテに鞍を置いて打ち跨がり、自分に騎士の位を授けてくれたその親切を謝するとて、主を抱いてわが心を述べたが、その言葉が餘りに突飛で、その意味を傳へることも、またそのまゝに知らせることも出來かねた。亭主は、旅籠から彼を逐ひ立てる爲めに、言葉は短けれど、いづれ劣らず飾り立てゝ答へた。そして、勘定の支拂ひを求めもせず、道中御無事にと立たせたのである。

第四章　旅籠を出てからわが騎士の身に降りかゝつたことども

騎士の位を授けられた嬉しさに、馬の肚帯も踏み裂かんばかり、にこ〳〵と、浮れ上り勇み立つて、ドン・キホーテがかの旅籠をあとにしたのは、空も東雲の頃であつた。しかしながら、携帯すべき管の調度、とりわけ路銀とシャツとに就いてかの主の心づけを想ひ出して、彼は家に引き還して一切の支度を調へ、また一人の家來をも召し伴れようと決心したのである。それは、彼の近所のもので、妻子のある貧乏人ではあれど、騎士の家來の役目には極めて誂へ向きの、一人の小作人を手に入れる當てがあつたからである。この目的で彼は馬の鼻面をわが村の方へと向けた。ロシナンテは、かうして自分の馴染みの土地を想ひ出させられ、足も大地に附かぬばかり宙を飛んで走り出した。

餘り遠く行かぬうちに、右手の林の中から、誰か窘められて居るやうな、力のない泣き聲が聞えたやうであつた。それを聞くと忽ち彼は呼ばはつた、『われに授けたまふ天の惠みの忝けなや、かうも速かにわが企てたる責務を果たし、わが大望の成果を集める好機會を與へたまふとは。あの泣き聲は疑ひなく、助けるものなき男か女の、拙者が加勢と保護とを求めて泣くのぢや。』そしてぐるりと廻つて、泣き聲の出て來たと思はれる方角へロシナンテを向けた。彼はその林の中へ二歩三歩踏み入れたばかりで、そこに一本の樫の樹には牝馬が一匹繋がれて居り、今一本には、かれこれ十五にもなる若ものが、腰から上を裸にせられて縛りつけられて居るのを見た。泣き聲はそこから來たのである。それも原因のないことではなかつた。頑丈な百姓が、帶でその若者を打つて居つた。そしては打つごとに追ひかけ、追ひかけ、叱つたり言ひ附けたりして、『口閉めて眼開けろ！』と繰り返して言ふと、若者も、『もうしませんよう、旦那さん。きつと〳〵もうしませんよう。今度からもつとよう羊に氣つけますよう。』と答へた。

その場の樣子を見て、ドン・キホーテは聲を怒らして言つた、『粗暴な騎士よ、自から守ることの出來ぬものを攻めるのは、貴方に似合はしからぬことぢや。馬に乘つて槍を取られい。』（それは牝馬の繋がれてあつた樫の樹に、一振りの槍が凭せかけてあつたからである）。『貴方の振舞が卑怯ぢやといふことを思ひ知らせて上げませうぞ。』その百姓は自分の頭の上で槍を振り廻して居る甲冑に身を堅めたこの

人の姿を眼の前に見て、自分の命は無いものと諦めて、おとなしく返事をした、『お武家さん、私の折檻して居りますこの若い者は、私の下男でござりましてな、近廻りに私の持つて居る羊の群の番に使うて居りますのぢや。ところが此奴はうツかりもので、毎日一匹づゝ見失うてしまひますのぢや。そこでうツかりもの、横道もの、此奴に罰を喰はせてやりますちふと、此奴の申すことには、旦那さんがしみツたれぢやで己をこんな目に逢はせるのぢや、拂はにやならん給金を踏まうとてぢやとな。とんでもない、神さまも見てござる、ほんとに此奴は嘘つきぢや。』

『拙者の前で嘘をいふか、土百姓め！』とドン・キホーテは言つた、『我等を高照らす天日も照覧あれ、拙者はこの槍を以て汝を刺し通すつもりぢやぞ。文句を言はずに直ぐさま其奴に拂へい。もしさうせぬならば、我等を統べたまふ神にかけても、汝を打ち果たして立ちどころに消しつぶしてしまふぞよ。直ぐさま其奴を釋いてやれい。』

百姓は頸をうな垂れ、一と言も言はずにその下男を釋いた。ドン・キホーテは下男に向つて、いくら主人に貸しがあるかと尋ねた。

彼は、一と月七レーェル銀で九月分と答へた。ドン・キホーテはそれを總計して、六十三レーェルになることが分つた。そこで、もしその爲めに死にたくないなら、直ぐそれを拂うてしまへと百姓に告げた。

ぶる〳〵慄へて居るこの田舎ものは、自分の命のある通り、またかねてかけた願を賭けても（そのくせ彼は一度も願がけをしたことはなかつた）、確かにそれ程澤山ではないと答へた。何故ならば、そやつに遣つた三足の靴と、病氣の折の出血療治二度分代一レーェルとを勘定に入れて差し引きせねばならぬからである。

『それは皆その通りで結構ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『しかし、靴と出血療治とは、汝が何の譯もなしにそやつを打つた償ひにするがよい。何故となら、そやつが汝の金を出した靴の革に傷をつけたといふなら、汝はそやつの身體の皮に傷をつけたのぢや。また、理髪師がそやつの病氣の折に、そやつの血を取つたといふなら、汝はそやつの丈夫な折に血を引き出したのぢや。そこで右の勘定によると、そやつは汝に何にも借りては居らぬわい。』

『困りましたことにヤ、お武家さん、こゝには一文も持つて居りません、アンドレスを私と一緒に家へおよこしなさつて下さりませ。そしたら耳を揃へて殘らず拂うてやりま

せう。』

『一緒に行くウ？』と若者は言つた、『いヤア、滅相もない！どうして、旦那さま飛んだことぢや。私と二人きりになつたことなら、あの人はバーソロミュウさま（一五七二年、四月二十三日（バーソロミュウ聖者の祭日）にフランスにて舊徒が新徒を虐殺したことがあるが、ここではその日に虐殺せられた新教徒のやうにといふ意味のやうに）私の皮ア引ンむくぢやろ。』

『そんなことは少しもあるまいぞよ、』とドン・キホーテは言つた、『拙者は言ひつけさへすればよいのぢや。さうすりやそやつは言ふことを聽くのぢや。自分が受けた騎士の位にかけて、そやつが拙者に誓うた故、拙者はそやつを許してやる。また支拂ひは拙者が保證に立つてやる。』

『何を言うてるのか我が手に考へてお見なされ、旦那さん、』と若者は言つた、『私がこの旦那は騎士ちふもんでもなけりや、騎士の位なんか貰うたこともありやせん、あの人はクィンタナールの分限者のジュアン・ハルデュドスさんぢやもの。』

『それはどうでも構はん、』とドン・キホーテは答へた、『ハルデュドス（長裾を着るの義）家の騎士もあらうわい。それにまた、人は皆わが仕業の兒なりぢや。』

『そりや眞實ぢや、』とアンドレスは言つた、『が、私のこの旦那は——どんな仕業の兒ぢやらうぞ。私が汗みづくの骨折賃をくれぬちふのは。』

『やらぬたア言はんぞ、アンドレス兄よ、』と百姓は言つた、『素直に私と一緒に來いよ。世界中にある騎士の位を殘らずかけても、きつと約束通りに耳を揃へて綺麗さつぱりと拂うてやるわい。』

『綺麗にしてやるには及ばぬぞ、』とドン・キホーテは言つた、『レーェル銀でそやつにくれてやれ。さうすりや拙者は滿足するのぢや。そして汝の誓ひ通りにするやうに氣をつけい。萬一さうせぬときは汝の誓言をそのまゝに、きつと拙者は引き返して、汝を狩り出して罰するぞよ。たとひ汝が蜥蜴よりもこつそりと匿れて居らうと見つけ出すぞよ。また、この命令を下すのが誰ぢやといふことを知つて、愈堅くそれを守らねばならぬやうにありたいと思ふなら、拙者こそは惡事不正を矯め直す、豪勇なるラ・マンチャのドン・キホーテぢやと知つて置けい。そんなら達者で暮しなさい。先き程も言ひ渡したあのやうな天罰の下に、約束したり誓うたりしたことをよう覺えて居れよ。』

かう言ひながら彼はロシナンテに拍車を當てゝ、忽ち遠く隔たつた。百姓は後を見送り、彼が林を出離れて、もはや

や見えなくなつたのを見濟まし、下男アンドレスに向つてかう言つた、『こゝへ來い、小僧、惡事をやめさすあの人の言ひつけ通りに、私の借を拂うてやろわい。』

『きつとさうぢやろと思うて居つたよ、』とアンドレスは言つた、『あの善いお侍の言ひつけたことを、旦那さんがよう聞き入れてその通りしなさるぢやろとよ。——あんな人ァ千年も生きて居つて貰ひたいナ。——何故ちふて、あの人はほんとに剛毅で眞直な判事さまぢやから、旦那さんが私に拂うてくれなさらんと、戻つて來て言うた通りにするぢやろもの。』

『私もきつとさうぢやろと思うて居る、』と百姓が言つた、『けれど私ァお前が可愛うて堪らんから、拂ふ金殖したさに借りを殖してやろわい。』そして若者の腕を摑んで、またもや樫の樹へ縛りつけて置いて、半死になるまで擲りつけた。『さア、アンドレスどんや、』と百姓は言つた、『あの惡事をやめさす人を呼んで見やれ。あの人ァこれを止めさしちやくれまいぞよ。そのくせ私はお前の怖ろしがつて居つた通りに、心からお前の生き身の皮ァ剝ぐ氣で居るのぢやから、まだお前を存分にしたとは思へんのぢや。』けれども結局彼はその若者を釋いて、申し渡された宣告を執行する爲めに、その裁判官を探しに行くことを許したのである。

アンドレスは、『豪男なるラ・マンチャのドン・キホーテを探しに行つて、あつた次第をそのまゝ告げてやる、さうすればきつと七倍にして仕返しをしてくれるのだと詈りながら、却つてふさぎ込んで出て行つた。そんなことを言ひながら、それでゐて彼はめそ〳〵と泣きながら出て行つた。主人の方は笑ひながら立つて居つた。

かやうにして豪勇なるドン・キホーテはその非違を正したのである。かくて、わが騎士道の發端の頗る幸先よく立派なりしことを考へて、事の一伍一什につく〴〵滿足しつつ、低い聲でかう言ひながら、すつかり得意になつて自分の村へと道を辿つた。『今日こそは、地上の凡ての人々にすぐれて幸運なりと、仰せられても宜しうございませう。あゝ麗しい人の中の最も麗しいドゥルシネア・デル・トボソよ。ラ・マンチャのドン・キホーテの今在る如く、またこの後も在らん如くさほどまで名高い騎士をば、君が御心の思ひのまゝに服し從へ置きたまふ御運とならせられたことなれば。彼は全世界の知る如く、昨日は騎士の末位を受け、今日こそは、凡そ不正が思ひつき殘忍が犯した中の、最も大いなる惡事非道を正しました。また今日、無法にもかのか

弱き少年を鞭うつかしこの無慈悲なる壓迫者の手からその鞭をもぎ取りました。』

彼は今、四方へ分れて居る道へやつて來た。そして、武者修行者たちがどちらに行つてよいかと思案していつでも立ちどまる四つ辻のことを直ぐに想ひ出した。彼等の眞似をして彼も暫く立ちどまつた。そして篤と思案をした末に、彼は己が心を馬の心に打ち任せて、ロシナンテを進ませた。馬はその最初のつもり通りに、自分の廐へと眞直に道を辿つた。二哩ばかり來てから、ドン・キホーテは多人數の一隊に眼をとめた。それは後で分つたのであるが、トレードのある商人たちが、ムルシアで絹を買ふとて行く途中であつた。一行の中六人の人々は日傘を翳し、馬に乘つた四人の下部と、歩行の騾馬引き三人とを供につれて近づいて來た。ドン・キホーテは彼等が眼に入るや否や、これはまた何か新しい冒險でなくてはならぬと思ひ込んでしまつたのである。そこで自分の書物の中で讀んだ太刀打ちを出來るだけ眞似するに都合のよいやうに、こゝに態々こしらへられた冒險が來るかとも思はれて、彼は當つて見る決心をしたのである。そこで堂々たる威風と剛毅とを示して、彼は確かと鐙の上に身を構へ、槍を扱き圓楯を胸にあて、大道の唯中に馬引き据ゑ、件の武者修行者どもの近づくを待ちつゝ立つた。蓋し彼は今その人々を、それと考へ思ひ込んで居つたのである。さて人々が見えもし聞えもする程に近づいた時、彼は傲然たる態度を以て呼ばはつた。『萬一全世界が、ラ・マンチャの皇后絶世の佳人ドゥルシネア・デル・トボソォよりも麗しい女性は全世界になしと告白せぬに於いては、全世界も立ちどまれ。』

商人たちはこの言葉を聞き、それを咏る奇妙な人の姿を見て立ち止まつた。そして、その姿と言葉とから、直ぐその持ち主の狂氣を推察したのである。けれども彼等は、自分等に向つてその告白を求める目的の何であるかを、靜かに知らうと欲したので、一行のうち、稍剽輕な、而も極めて小ざかしい男が、彼に向つて言つた、『お武家さま、私どもは貴方さまの申されますその立派な御婦人をどなたであるやら存じません。そのお方さまを私どもにお見せなされませ。何故と申すに、もしそのお方さまが貴方の申されますやうに、お美しいお方でござりますならば、少しも強ひられませいでも、貴方さまの方で私どもにお強請み遊ばすその眞實のことを、欣んで告白いたしませう。』

『もし拙者がその君を貴方にお見せ申すのであつたなら、』

とドン・キホーテは答へた、『それ程鮮らかな眞實を告白なさるといふに、貴方に何の手柄がありませうぞ。その君を見ずして、貴方がその眞實を信じ、告白し、斷言し、誓言し、また擁護せねばならぬといふのが眼目のところです。さもなくば、不屆千萬な傲慢な彌次馬どもの汝等、拇者と戰をせねばならぬぞ。騎士道の掟に從うて一人々々なり、また汝等が仲間の習慣や卑劣な作法の如く一度になり、かかつて來い。拇者はわが持する道の正義に賴つて、こゝに居つて待つて居るぞ。』

『騎士足下、』とその商人は答へた、『私はこの王子たちの一行の名を以て、足下にお願ひいたしまするが、私どものまだ見もし聞きもせなんだもの、また殊には、アルカルリアとエストレマデュラ（何れもスペインの地方の名、それを二つとも、帝國ほしいまゝに言つてゐるのである）との皇后たちまたは女皇たちのお儕みを烈しく招くべき人のことを告白して、私どもの良心に重荷を負はすことを免れまする爲めに、たとひ小麥の一粒ほどの大きさでござりませうとも、足下願はくばその御婦人のお繪姿なりともお示しなされて下さりますまいか。絲から鞠に屆くとも申します。それで以て私どもは滿足し安心するでござりませう。また足下も御本意御滿悦でございませう。いやたとひその繪姿の御婦人の片眼は盲で、また片眼からは朱と硫黄とがちよぼ〳〵滴つて居らうとも、それでも私どもは足下を滿足させます爲めに、お望み通りその御婦人の御都合の宜いやうに何なりと申すでござりませう。それ程までに私どもは既に足下に御同意致して居ること、信じまする。』

『そんなものは何も滴つては居らんわい、下司めが、』とドン・キホーテは烈火の如く怒つて言つた。

『こりや、そんなものは何も無いのぢや。龍涎香と綿に包んだ麝猫香とばかりぢや。また隻眼で偏僂でもなうて、グァダルラマ（スペインの地名、森林に富むその木材にて作れる紡錘の意）の紡錘よりも眞直ぢや。しかし汝はわが姫ほどの麗人を惡口した不敬の罰を受けねばならぬぞ。』

かう言ひながら、彼は槍を身構へて、憤然として勢ひ猛に物言つたかの男に攻め寄つたのである。されば、もし仕合せよくロシナンテが中途で躓いて倒れなかつたなら、その向う見ずの商人は、ひどい目に逢うたのであつたらう。ロシナンテが倒れると、その上に主人も倒れて、可なりの間地面の上を轉がつて居つた。そして起き上らうとしても出來なかつた。彼は實に槍、圓楯、鐙、兜の爲めに、さては古鎧の重みに惱まされて居つたのである。そして起き上

らうと蹤いて居る間中『遁げるな臆病もの卑怯もの！　待ち居れい、拙者の過ちではない拙者の馬の過ちによつて、こゝに拙者は平伏つて居るのぢや。』と彼は言ひ續けた。

件の騾馬引きの一人は、餘り性質の善い人間といふわけでなかつたものか、この哀れなうつ伏しに倒れた人が、こんな風に威張り我鳴つて居るのを聞いて、その肋骨の上に一つ徹へさせてくれずには居られなかつたのである。そこで彼はその側へ行つて、彼の槍を攫んでそれを切れ〴〵にへし折り、その切れ端の一つで以てドン・キホーテを擲き出し、鎧があるのに拘らず、それにも構はず、小麥のやうになるまで擲きつけたのである。主人等は聲をかけて、そんなにひどく打たないで打つちやつて置けと言つたが、騾馬引きは逆上せて居つたので、すつかり腹癒せをしてしまふまで、その惡戯を止めようとはしなかつた。そして終ひには、殘つて居る槍の切れ端を掻き集めて、その不仕合せな犧牲に向つて投げつけた。その人はまた、棒切れの嵐が自分の上に降つて來る間中も、天と地と山賊ともとを威嚇することを少しも止めなかつたのである。蓋し彼にはその人人が山賊に見えたのであつた。遂に騾馬引きは疲れた。そこで商人たちは、打ん擲られた可哀さうな奴の事を話のたねにしながら旅を續けた。彼は自分は獨りになつたのを見て、起き上らうと今一度やつて見た。しかし無疵で丈夫で居る時にすら出來なかつたものが、敲き据ゑられてすたずたにならんばかりに打たれた末に、どうして起き上ることが出來ようぞ。それでも彼は猶自分を仕合せだと考へた。何故といへば、これは武者修行者にお定りの災難であると思はれたし、また全く、考へて見れば、自分の馬の過ちであると思はれたからである。けれども實際彼は身内を打ち傷められて、起き上る力もなかつたのである。

第五章　にはか騎士の災難の話が續く。

さて、全く身動きのならぬのを知つて、彼はいつもの救治策に賴らうと考へた。それは自分が讀んだ書物の或る一節のことを思ふのである。卽ち取りとめもない彼の心は、カルロートーがマンテュア侯爵に傷を負はせて山腹に打ち棄て、置いた時の、ボールドヰンとマンテュア侯爵とに關する一節（以上も何れも古歌謠の題目にして歌はれてゐる人々の事蹟）を想ひ出したのである。子供等は諳んじて居り、若い者どもは忘れず、老人は感服して信じてまで居る話である。それでありながらマホメットの奇蹟ぐらゐにしか當てにはならぬのである。それが今の彼の

身の上にぴつたりと當て嵌るやうに思はれたので、いかにもひどく苦しむやうな風をしながら、彼は地上を轉げ廻つて、呼吸づかひも弱々しげに、かの森の傷負ひの騎士が言つたといふその通りの言葉を眞似し出した。

わが悲しみを歎かぬ君、
君はいづこぞ、わが君。
知るよしなければか、君よ、
はた誠なければか。

かうして彼はその唄をこんな文句のところまで讀み續けた。

あゝマンテュアの貴き侯、
わが叔父君わが大君！

丁度折よくも彼がこの文句まで讀み着いたときに、偶々そこへ彼の村の一人の百姓が通りかゝつた。それは彼の近所の人で、粉挽き屋へ小麥の荷を持つて行つた歸りであつた。彼はそこに人の平伏つて居るのを見て、側へ寄つて、お前さんは誰だ、何でそんなに悲しげに愚痴をこぼして居るのだと尋ねた。

ドン・キホーテは、これこそ自分の叔父マンテュアの侯爵だと堅く思ひ込んだので、別に返事はしないで、唯その唄を續けて行つた。その中で、彼は自分の不運の話を物語り、また皇子とその妃との戀を、凡て一々唄に歌つてある通りに語つた。

百姓はそんな譯も分らぬ話を聞いて呆れてしまつた。敲かれてもう早やばら〳〵壞れてゐる瞼甲を取りのけて、埃塗れの彼の顏を拭いた。さうすると、忽ちそれと分つたので、『ドン・クィサーダさま（蓋し彼が正氣を失はず、靜かな田舍の紳士から武者修行者に變らない頃には、さう呼ばれて居つたと見える）、誰れがあんた樣をこんなにしましたかえ。』と言つた。が、何を聞いても一方は、唯例の唄で承け應へをするばかりであつた。

これを見て、その善い人は、もしや彼が手傷を負うては居らぬかどうか見ようとて、胸甲と背甲とを出來るだけ取り除けたが、血の一滴も疵痕の一つも更に見えなかつた。そこで彼は、どうやらかうやら工夫して、地面から彼を起し、自分には一番安樂な乘り物と思うて居た自分の驢馬に、やつとこさと、彼を引き上げた。そして武器をば槍の折れるに至るまで掻き集めて、それをロシナンテの背に縛りつけ、ロシナンテは手綱で、驢馬は端綱で引きながら、ドン・キホーテの喋る譫語を聞くのが悲しげに、村の方へと道

を迎つた。ドン・キホーテも同じやうに悒いで居つた。それは打撲や傷の爲めに、驢馬の上に眞直に乘つて居ることが出來なかつたからである。そして時々天を仰いで吐息をついた。そこで何を心配して居るのかと、又もや百姓に聞かれたのであつた。さて、彼自身の冒險にふさはしい物語を、彼に想ひ起させたのは、どうしても惡魔の仕業に違ひなかつた。何故といふに、今は早や彼はボールドキンのことは忘れて、かのアンテクエラの城將ロドリゴー・デ・ナルヴェズの俘となつてその城内に送られた時の、ムーア人アビンダルレェズのやうに自分を思うたからである。されば百姓が、何となされた、何を心配して居りなさるかと、またもや彼に尋ねたとき、俘のアペンサーレージがロドリゴー・デ・ナルヴェズに言つた同じ言葉や文句を返事にした。それはジョルジ・デ・モンテメーヨル（スペイン十六世紀の傳奇小説の作者）の『牧娥（ダイアナ）』の中に書いてある物語を自分の讀んだ通り、しかもそのまゝぴつたりと自分の身に當てはめたので、百姓は、そんな譯の分らないことを、ぢつと聞いて居らねばならぬ自分の運命を呪ひつゝ道を辿つたのであつた。しかしこれを聞いて百姓は、この人は氣が觸れて居るなと思うたので、ドン・キホーテのこの長談議の退屈さを免れる爲めに、大急ぎをして村へ着いた。その終ひにドン・キホーテは言つた。

『ドン・ロドリゴー・デ・ナルヴェズどの、拙者のお話し申した美しいサリファは今では麗はしいドゥルシネア・デル・トボソォです。その人の爲めにこそ、拙者はこの世界の嘗て見、今も見、またこの後にも見る騎士道の最も名高い振舞ひを嘗ても致し、今も致し、またこの後にも致すつもりぢやと、御承知置きを願ひたい。』

百姓はこれに答へた、『旦那さん、——私ア罪の深い人間ぢや！——眞のことお前さまにア、私がドン・ロドリゴー・デ・ナルヴェズでも、マンテュアの侯爵さまでもない、お前さまの近所の者のペドロ・アロンソォぢやちふことも、それからお前さまはボールドキンでもアビンダルラエズでもない、クヰサーダさまといふ立派な旦那衆ぢやちふことも、お分りなさらんかいの。』

『自分が何者ぢやといふことは知つて居る、』とドン・キホーテは答へた、『それに拙者は今言うた名前の人たちであるばかりか、フランスの十二華族、また世に謂ふ九勇將の凡てゞもあると言うてよいのぢやぞよ。それといふのは、拙者の功績は彼等が力を合はせて爲たこと殘らずにも、また銘々自分の爲めにしたことにも、悉く立ち優つて居るか

らぢや。』

かういふ話や、同じやうな話を尚もしながら彼等が村に着いたのは、丁度日の暮れかゝつた頃であつた。けれども百姓は、この敲かれた紳士がこんなみじめな風體をして乘つて居るところを人に見せまいとて、少し遲くなるまで待つて居つた。もうよい時分と思はれた頃に、彼は村へ入つて、ドン・キホーテの家へ行つた。行つて見ると家中大混雜で、ドン・キホーテの親友であつた牧師補と村の理髮師とが來て居つた。そして家婢は大きな聲でその人たちにかう言つて居つた。

『まア貴方さまは、うちの旦那さまが一體どうなりなされたと思うておいでなさんすぞ。ペロ・ペレズ學士さま。』牧師補はかう呼ばれて居つたからである。『もう今日で六日といふもの、あの人の影も形も、馬も圓楯も、槍も鎧も見えません。あゝ辛いことぢや！　こりやきつとさうぢや、私が生れて死ぬのが眞實な通りにさうぢや。あの人が持つてござつて、いつも〳〵讀んでばかりお出でなさつたあの騎士道の本の奴めが、あの人の正氣を狂はしてしまうたのぢや。今になつて想ひ出しや、あの人は自分で武者修行者にならしやれて、武勇の働きを探し〳〵世界中を歩き廻ると、自分で言うて居りなされたのを、度々聞いた覺えがござんすわい。あんな本は、惡魔と極道の鬼神にくれてしまへ。あの本こそ、ラ・マンチャ中一番立派な分別者をこんなにしてしまうたのぢや！』

姪もその通りのことを言つた。そして實はまだ言つた、『まア聞いて下さいませ、ニコラスの親方、』——それは理髮師の名前であつたので——『うちの叔父は、あんな穢らはしい似而非武勇の本を、全二日二夜も一心に讀み續けたりなんか度々したのですよ。さうしては、その本を投げ出して置いて、劍をおツ取つて壁を切りまくるのがお定りでしたの。そして疲れると、俺は四つの塔櫓ほどな巨人を四人殺してやつたなぞと言ふのですよ。そして草臥れて汗が出ると、これは戰をして受けた傷の血ぢやなぞと言ひますの。そしてそれから冷水を大きな水注に一杯飮んで、氣が落ち着いて鎭まりますと、この水は、えらい魔法師で俺の友だちの賢人エスクィフが持つて來てくれた、世にも有難い飮料ぢやと云ひますの。けれども、叔父の醉狂を一度も貴方にお話ししませなんだのは、皆私が惡いのでございます。さうさへすれば、こんなことにならぬうちにそれを止めて頂いて、邪宗徒のやうに結構燒いてしまうてもよい、あの

嫌な本も隨分澤山ありますから——皆燒いて頂けたのでせうに。』

『そりや私もさう思ひます、』と牧師補が言つた、『そこで必ず明日のうちには、その書物どもに正式の審問を加へ、火刑に處して、それを讀む人たちがそれに釣られて、私の良友の爲たやうなことを仕出かさないやうに致しませう。』

百姓は殘らずこれを聞いた。そこで自分の近所の人が一體何をしたのだといふことが、やつと分つたのである。そこで彼は大聲で呶鳴りだした、『開けてくれよ、旦那衆、ボールドヰンさまぢや、マンテュアの侯爵さまぢや。ひどい怪我をしてお出でたのぢや。ムーア人のアンダルレーズさまぢや。それをアンテクェラの城の大將の、豪膽なロドリゴ！デ・ナルヴェズが俘にして來たのぢや。』

かういふ言葉を聞いて人々は殘らず驚けて出た。そして、身動きのならない爲めに、まだ驢馬から降りずに居るその友だちなり主人なり叔父なりをそれと見ると、人々は走り寄つて抱かうとした。

『控へい！』と彼は言つた、『拙者は自分の馬の過ちから、ひどく傷をして居るのぢや。寢床へ伴れて行てくれ。そして、出來るなら、賢いウルガンダを呼びにやつて、拙者の傷を癒やして看病をして貰うてくれ。』

『これぢやもの！　なさけない！』と家婢は、それを聞いて言つた、『旦那さまの跛におなりなされた足が、何方かちふこた？私の胸騒ぎが嘘は言ひませなんだわい。直ぐにお床へお行きなさんせ。そのフルガタを伴れて來いでも、私らが茲で具合ようして癒して上げませうに。返す〳〵もなさけないことぢや。眞個に百遍言うたてなさけないことぢや。あの武勇傳の本めが貴方さまをこんな目にお逢はせ申して。』

人々は直ちに寢床へ彼を運んだ。そしてその傷を探した末に、一つも見つけることが出來なかつた。けれど彼は凡そこの傷は、またとこの地上に見られぬ程大きな大膽な十人の巨人と戰つたとき、自分の馬のロシナンテと一緒にひどく倒れた爲めであると言つた。

『ほゝう！』と牧師補が云つた、『巨人が踊つて居りますかな？　イヤどんなことがあらうと、明日は日の暮れぬうちにあの本どもを燒いてしまひませう。』

人々はドン・キホーテにいろ〳〵の事を尋ねた。けれど何を聞いても彼の返事は——何か食べるものをくれ、そして獨りで眠らしてくれ、それが一番欲しいものぢやからと言ふばかりであつた。人々はその通りにした。そして牧師補

はその百姓に、彼がドン・キホーテを見つけた顛末に就いて長々と尋ねた。彼は殘らず話した。そして彼が見つけたときと歸り路とに、ドン・キホーテの喋つた譯の分らぬことをも話した。それで以て學士はその明くる日自分で爲たことをば、いよ〳〵熱心にする氣になつたのである。それは自分の友人の理髮師ニコラス親方を誘うて、一緒にドン・キホーテの家へ行くことであつた。

第六章　わが工夫に富める紳士の書庫で牧師補と理髮師との爲した、おもしろくも重大な檢査のこと。

彼はまだ眠つて居つた。そこで牧師補は姪にかの凡ての禍を作り出した書物の在る室の鍵を求めた。姪は頗る快くそれを渡した。人々は皆、家婢も一緒に這入つて行つた。見れば極めてよく裝幀した百册以上の大册と、別に幾らかの小册子とが在つた。家婢はそれを見るや否や引き返してその室を駈け出し、間もなく一碟の神水と水撒きとを持つて歸つて來て、『さア貴方さま、學士さま、この室をお淨めなさんせ。魔法使ひを一人でも殘してお置きなさんすなよ。そいつらをこの世から追ひ出さうといふ私らの目論見の仇返しに私らを化かそとて、この本の中にや魔法使ひが澤山居りますぞえ。』と言つた。

家婢の愚直は學士を笑はせたのである。彼は、中には火刑にするに足らぬものも幾らかあるかも知れぬから、何を書いた書物かを見分ける爲め、一册づゝ渡してくれるやうにと理髮師に指圖をした。

『いゝえ、』と姪は言つた、『どの本にも惡魔をかけてやる譯は少しもありません。どれもどれも害をした本です。窓から内庭へ投げ出して積み上げて、そして火を掛けてやつた方がよいのです。それとも裏庭へ運べば、あすこで篝火が出來ますよ。あすこなら煙が立つても困りはしません。』家婢もその通りのことを言つた。彼等はこの罪科もないものを殺すことにそれ程熱心であつた。けれども牧師補は、ともかく先づ標題だけは讀まないでは、それに同意しようとせぬのであつた。

第一番にニコラス親方が彼の手に渡したのは、『ゴールのアマディス』の四卷であつた。『これは不思議千萬なものに見える、』と牧師補は言つた、『何故といふに、私の聞いたところによると、これがスペインで判に刷られた最初の騎士道の書物であつたさうぢや。そして他のものは殘らずこ

れから生れたり源を發したりして居るさうぢや。それぢやから實に穢らはしい宗派の開祖として、假借せずこれを火刑に處せねばならんと私は思ひますのぢや。』

『いや、もし、』と理髮師は言つた、『私もこんな話を聞いて居りますが、今までに書かれたかういふ類の殘らずの書物の中で、これは一番よいものぢやさうで、さうすりやその道の格別のものとして許してやらんなりますまい。』

『なる程ナ、』と牧師補は言つた、『それぢやさういふ譯によつて、差し當り命を助けてやれ。その次のをお見せなされ。』

『これは「ゴールのアマディスの正子エスプランディアンの武勇傳」ぢや。』と理髮師が言つた。

『それぢや眞個に、』と牧師補は言つた、『父親の手柄が息子のための役に立つわけには參らん。そゝら、お婆さん、窓を開けてそれを裏庭へ投げさんせ。そして私らが拵へにやならん篝火の柴堆の土臺にしなされ。』

家婢は大滿足で、云ひつけ通りにした。そこで天晴の「エスプランディアン」も裏庭へ飛んで行つて、やがてわが身を燒く火をばぢつと辛抱して待つて居つた。

『お次ぎへ。』と牧師補が言つた。

『次ぎに來まするのは、』と理髮師が言つた、『「ギリシャのアマディス」です。はゝア、成る程、この側に在るのは殘らず同じアマディスの血統のぢやな。』

『それぢや、それは殘らず裏庭へ、』と牧師補が言つた、『女王のピンティクィニエストラと、羊飼ひのダリネルと、その牧歌と（凡てギリシャのアマディスの物語中にあるもの）それからその作者の狐に魅まれたやうなやゝこしい講釋とを燒いてしまふ爲めになら、私の產みの父親でもそれと一緒に燒きますわい。萬一親爺が武者修行の風をして歩き廻つて居りさへすりや。』

『私もその氣ですわい。』と姪が口を出した。

『私もさうですわ。』と理髮師が言つた。

『そんなら、』と家婢が言つた、『さア、それを裏庭へ！』

それ等は婆さんに渡された。そして、澤山あつたものだから、婆さんは階子の上り降りを無精して窓から下へ投げた。

『そこの大量なのは誰ぢやな。』と牧師補が言つた。

『こりや「ドン・オリヴンテ・デ・ラウラ」です。』と理髮師が言つた。

『その書物の作者は、』と牧師補が言つた、『「百花の園」を書いたのと同じ人ぢや。そしてその二卷のうちで、どちら

に眞が多いのか、またもつと上手に言へば、どちらに嘘が少いのか、眞個に決めやうがないのぢや。威張りちらす阿呆扱ひで、これを裏庭へやりなされと、私は精々さう言ひましよ。』

『そのお次ぎのは「ヒルカニアのフロリスマルテ」です。』と理髪師が言つた。

『へえ、フロリスマルテどのですか、』と牧師補が言つた、『それぢや、不思議な御誕生や夢みたやうな冒險譚はおありなさるが、是非とも裏庭へ陣を構へてお貰ひ申さにやならん。あの書き振りのごち〳〵と味の無いことはそれで丁度分相應ぢや。それと他のと一緒に裏庭へ、お婆さん。』

『へい〳〵、畏こまりました。』家婢はかう言つた。そして大喜びで言ひつけを果たした。

『これは「騎士プラティル」ですぢや。』と理髪師が言つた。

『そりや古い書物ぢや、』と牧師補は言つた、『しかし慈悲をかける理由はそのうちに少しも見つからん。文句なしに他の〻後へ隨けてやりなされ。』その通りになつた。

別の書物が開かれた。見ると標題には、「十字架の騎士」とあつた。

『この書物の持つて居る有難い名前の爲めに、』と牧師補は言つた、『その物知らずな點も見逃して貰へるかも知れん。しかしさうなると、世にいふ「十字架の背後に惡魔あり」ぢや。これも火の中へ。』

また別の書物を取り下して、理髪師が言つた、『こりや「騎士道鑑」ですぢや。』

『私もその御本は知つて居ります、』と牧師補が言つた、『あれはモンタルヴンのレイナルドス殿がケィクスよりえらい大盜賊の、自分の友だちや仲間と一緒に、またフランスの十二貴族（八世紀フランスのシャーレマン大帝の御下の十二将）が確實な歴史家テュルパン（八世紀のベルユムの歴史家）と一緒に出て來る本ぢや。しかし終身追放以上に彼等を處分する氣は、私にはない。何故となら、とにかく彼等は有名なマッテオ・ボイアルドー（十五世紀ノイタリーの詩人）の構想を幾らか持つて居るからぢや。そこからしてまた、クリスト教の詩人ルドヰコー・アリオストー（十五世紀から十六世紀初めへかけてのイタリーの大詩人）もその結構を編んだのぢや。もしアリオストーに茲で出くはして、あの人が自分の國以外の言葉で話してでも居らうもんなら、私は一向敬意を表せんつもりぢや。しかし自分の國の言葉を話して居るなら、私はあの人を自分の頭の上へ戴きましよわい。』

『そんなら、私はイタリア語のアリオストーを持つて居り

ます、』と理髪師が言つた、『しかし私には分りません。』『貴方にそれが分つたところで大したことでもあるまいよ。』と牧師補は言つた、『そこでもしあの船長ゼロニモ・ジメネズ・デ・ウルレアのこと、アリオストーがアリオストーをスペインに持つて來て、それをカスティリア語（スペイン語の中最も純正な標準語）に直してしまはなんだら、その廉であの船長は罪を許してやれたらうに。あの男はアリオストーの持ち前の力を大分奪うてしまうた。そして律語で書いた書物を他國の言葉に直さうとする人たちは皆その通りぢや。それはその人たちは隨分苦心もするし、また隨分手際を見せて居るけれど、それでも到底初めて作られた通り原本の足もとには屆くことが出來ませんのぢや。つまりこの書物や、何れに限らずフランスの事を書いて居る書物は、よく考へた末で何う始末したらよいのか定るまで、涸井戸へでも投げ込むか藏うて置くかするが宜しいと私は言ふのぢやな。尤もこゝでうろ〳〵して居る「ベルナルドー・デル・カルピオ」といふのと、も一册「ロンセスヴルレス」といふのとだけは、いつでも取り除けにして。何故ならこの本どもは、もし私の手へはいると婆さんの手へ渡るであらうし、またそれから何の執行猶豫もなしに、火の中へ行つてしまふぢやらうからな。』

理髪師は悉くこれに同意した。そしてそれを正しい尤もなことゝ思つたのである、それは、牧師補は信仰にも堅し眞にも忠實であるから、あの人がそれに反いたことなんぞ言ふことは何としてもあるまいと思ひ込んで居つたからである。彼はまた別の書物を開けて見ると、それは「パルメリン・デ・オリヴ」であつた。そしてその側には「イギリス國のパルメリン」といふ別の書物があつた。それを見て學士は言つた、『橄欖樹を直ぐに焚きつけにして、灰も殘らんまで燃やしてしまひなされ。それからそのイギリスの棕櫚はたつた一本立つて居るものぢやからその儘に保存して置きなされ。アレキサンダアがダライヤス（紀元前五六世紀頃のペルシヤの王）の分捕品の中で見つけて、詩人ホーマー（ギリシヤの大叙事詩人イリヤッド）はその最も有名な作物の保管の爲めに取つて置いた匣のやうな、さういふ別の匣をそれの爲めに拵へさせて下され。この書物はな、老爺さん、二た通りの譯で有難いものなのぢや。『第一はこれが非常によいからぢや。第二には、ポルテュガルのある賢い才子の王さまがことを書いたといふ傳へのある爲めぢや。ミラグァルダ（イギリス國のパルメリン）中に出る美妃の名、こゝで城の名となつてゐるのは作者が故意か偶然かの間違であるの城での冒險は悉く優れた見ごとな仕組みぢや。そして言葉は、その物を言ふ人によう似合うた、きちんと

適つた言ひ振りを工夫して守つて居るので、品がよくて明瞭して居る。そこでさ、もし貴方が宜かろと思ひなさるなら、ニコラス親方、これと「ゴールのアマディス」とは火責を赦してやつて、他のは殘らず、この上尋ねたり審問したりせずに亡くしてしまはうと言ふのさ。』

『いや、もし、』と理髪師が言つた、『私のこゝに持つて居るのは有名な「ドン・ベリアニス」（第一章にあつた、ベリアニス・デグレシアと同じ書物）でございますからな。』

『なる程、』と牧師補は言つた、『それと、その第二、第三及び第四篇は、その膽汁過多を瀉下す爲めに、どれも皆少し大黄が入り用ぢやな。そしてその中の名聞の城に關する一切の譫語やその他もつとえらい氣取つた文句を取つてしまはにやなりません。その爲めに、夫等海外在留者（海外在住者に控訴の手續をさせる爲めに與へる猶豫期限）を許してやりましよ。そして夫等の改めるに從うて、慈悲や公平に與からしてやりましよ。それまでの間は、親爺さん、貴方の家へそいつらは取つて置いて下され。そして誰にも讀ませなさんな。』

『えゝ、よろしいとも。』と理髪師は言つた。そしてこの上騎士道の書物を讀んで疲れたくないので、彼は家婢に、大册の書物を殘らず持つて行つて裏庭へ投げ込んでくれと言ひつけた。それが鈍間や聾者ならこそ、この上もない幅の廣い精巧な織物を織るよりも、更にそれを燒くのをおもしろがつて居る人に言ひつけたのである。そこで一度に八册ばかりも摑んで、彼の女はそれを窓から投げ出した。

そんなに澤山を一緒に運んで居つたので、彼女は理髪師の足もとへ一册取り落したのである。理髪師は誰の書いた書物かと物好きに取り上げて見ると、「高名の騎士、ティランテ・エル・ブランコ」の傳とあつた。

『おや〳〵！』と牧師補は大きな聲で言つた、『ティランテ・エル・ブランコか！　此方へ下され、親爺さん。私にやこの本は、娯しみの寶庫が、慰みの金山でも見つかつたやうに思はれますからな。この中にはモンタルヴンのドン・キリエレイソンといふ豪勇の騎士ぢやとか、その兄弟のモンタルヴンのトーマスぢやとか、騎士フォンセカぢやとか、それから大膽不敵のティランテが猛犬と闘うた戰ぢやとか、少女プラセルデミギダの洒落ぢやとか、寡婦レボサーダの情事や手管ぢやとか侍士ヒポリトーとの戀ぢやとか——全く、親爺さん、文章の廉では世界最良の書物ぢやよ。その中では、騎士どもが食べる、眠る、また寢床の中で死ぬる。そして死ぬ前に遺言狀を拵へる。それからまだ〳〵どつさりあるが、

そんなことはどの書物にも他には書いてはないのぢや。ではあるがこれを書いた作者は、こんな馬鹿げたことどもを巧んで書き綴つた廉によつて、一生涯櫂船へやられてもよい（昔は罪人を舟夫として使役したことがある）と私は言ふのぢや。これを持つて歸つて讀んで見なされ。私の言うたことが眞實ぢやといふことが分りましよわい。』

『さうしましよ、』と理髪師は言つた、『しかし殘つて居るこの小さな本どもは何うしますかな。』

『夫等は騎士道ぢやない、詩集に違ひない。』と牧師補は言つた。そして一册開いて見ると、それはジョルジ・デ・モンテメーヨルの「嬋娥（ダイアナ）」であつた。それで、他のも殘らず同じ種類のものであらうと想像して、彼は言つた、『此等は他の書物のやうに燒くにや及びません。何故といふに、これは誰をも害しようのない娯樂の書物ぢやから、騎士道本のしたやうな害をすることもなけりや、また出來もしませんわい。』

『あら、貴方！』と姪が言つた、『これも他のと一緒に燒くやうに言ひつけておしまひなさつた方がよろしいですよ。それでも、騎士道氣違ひが癒つてから、叔父がこんな本を讀んだ爲めに、羊飼ひになつて唄を歌うたり笛を吹いたりしながら、森や野原をうろつくやうな氣にふいとなるやらも、ほんとに知れたものぢやないのですもの。それに、それよりか悪いことは、詩人になりでもしましたら、それは到底癒らんで、人に傳染る病ぢやさうですもの。』

『お孃さんの言はれるのは尤もぢや。』と牧師補は言つた、『それぢや、この邪魔なり誘惑なりを私らの友たちの妨害にならんやうに取り除けるが宜しかろ。それぢやモンテメーヨルの「嬋娥（ダイアナ）」から初めなさい。私の考へでは、それは燒かんがよい、たゞ、賢人フェリシアーノと魔法水に關する全部と、長篇の詩の殆んど全部とは取り除けたがよいと思ふのぢや、その散文と、その類の書物の中では第一ぢやといふ名譽とだけは取つて置いて、有難がらせるがよい。』

『次に來ますこれは、』と理髪師が言つた、『「第二篇、サラマンカ人（アロンソ・ペレーズのこと、一五六四年（ダイアナ）の續編を出す）」と標題のある「嬋娥（ダイアナ）」です。それから今一つのは同じ標題で、作者はジル・ボローナ（同じくスペインの文學者、彼の「ダイアナ」の續編もペレーズのと同年に出づ）です。』

『サラマンカ人の書いた方のは、』と牧師補は言つた、『裏庭に居るお仕置き者の數を增しにやりなされ。それからジル・ボローのは、アポロー神御自身から出たものか何ぞのやうに保存して置きましよ。いやお次ぎを、親爺さん。そし

て急いで下され、だん〳〵暁うなつて来ますから。』

『この本は』と、別のを開けながら、理髪師が言つた、『サルディニアの詩人アントーニオ・デ・ロフラソーの書いた「戀の運命」十巻です。』

『自分の受けて居る聖職をかけても申すが、』と牧師補は言つた、『アポロー神がアポロー神でありミューズの女神がミューズの女神であり、詩人が詩人であつてこの方、この本のやうに道化た馬鹿げた本は一度も書かれたことがないのぢや。それでその向きでは、今まで世に出たこの類の殘らずの中で、一番よくて一番風變りなものなのぢや。それでこれを讀まぬ人は、確かにまだ愉快なといふものを讀んだことのない人と言うてよい。こゝへ下され、親爺さん、フロレンス織の袈裟を人から貰うたよりも、これを見つけた方が、私にや餘計に有難いのぢやからな。』

彼は至極滿足してそれを側へ置いた。そこで理髪師は續けた、『次ぎに來ますのは「イベリアの羊飼ひ」、「ペレナスの女神」、それから「嫉妬啓蒙訓」』

『そんなら皆まだ出家せぬ婆さんの腕へ渡しさへすりやそれでよいのぢや。そしてその譯は聞きなさんな。そでなけや到底切りが着くまい。』と牧師補が言つた。

『次ぎのこれは「フイリダの牧者」』

『そりや牧者なものか、』と牧師補が言つた。

『非常に品のよい大宮人ぢや。それは貴重な寶玉として藏つて置きましよ。』

『この大きなこれは、』と理髪師が言つた、『「雜詩寶典」といひますのぢや。』

『さうまで澤山無けりや、』と牧師補が言つた、『それでももつと旨みもあらうに。この本は拙らんところが佳いところと一緒になつて居るから、それを刈り取つて手入れをせにやならん。作者が私の友だちではあるし、それにあの人の書いたもつと勇壯な高尚な他の著作を尊敬して、取つて置いて貰ひましよか。』

『これは、』と理髪師は續けた、『ローペズ・デ・マルドナードーの「小曲集」です。』

『その本の作者も、』と牧師補は言つた、『私の親友ぢや。そしてあの人自身の口からあの人の歌を聞くと、皆それに感心しますよ。それはあの人の歌を聞くと、聞きほれさせてしまふ程その聲が美しいからぢや。牧歌が少し多過ぎるが、よいものが多過ぎたといふことはない。これまで別にして

置いたのと一緒に取つて置きましよ。さてその次ぎのは何の本ぢやな。』

『ミギェル・デ・セルヴンテスの「ガラテア」』（抒情詩を挿入せる田園情詩風の散文の物語、一五八三年頃出つ、第一巻のみにて二巻は遂に出でず、作者が自ら自分のことを語つてゐる作である）と理髪師が言つた。

『そのセルヴンテスは久しい前からの私の親友ぢや。そして私の知つて居るのでは、あの人は歌よりも浮世の方で大分苦労をして来たのぢや。その書物の中には、よい仕組みのところもある。何か知らん見せてくれるが何一つ結末まで行つて居らん。出る筈の第二篇を待つて居らにやならんのぢや。恐らく筆を入れて直したら、今こそ無いが、その評判を十分に取ることは旨く行きさうなものぢや。さてそれまでの處、親爺さん、貴方のお家へこれを藏うて置いて下され。』

『えゝよろしい、』と理髪師は言つた、『それから今度は三部一緒ですぜ。ドン・アロンソー・デエルミラの「アラウカナ」、コルドーヴの裁判官ジュアン・ルフォーの「アウストリアダ」、それからヴレンシアの詩人クリストヴル・デ・ギルェスの「モントセルラテ」』

『この三部は、』と牧師補は言つた、『カスティリア語で史詩體で書かれた中で一番よいものぢや。ぢやからイタリアの最も有名なものとも比べられるのぢや。此等はスペインの有つて居る最も貴い詩歌の寶玉として保存して置きましよ。』

牧師補は疲れた。そしてもうこの上書物を吟味したくなかつた。そこで「内容は確かめずに」、殘りは一切燒いてしまはうと決めた。しかし丁度その時理髪師は、「アンゼリカの涙」といふのを開けて居つた。

『その本を燒けと言ひつけてしまうたのぢやつたら、私は涙を零したことであらうに。』と、その標題を聞いて牧師補は言つた、『何故ならこの作者は、スペインばかりぢやない、世界の有名な詩人の一人で、オヰッド（紀元前一世紀頃のローマの大詩人）の寓意譚の中の飜譯はなか〳〵見ごとであつたからぢや。』

第七章

わが天晴の騎士ラ・マンチャのドン・キホーテが二度目の門出のこと。

この途端にドン・キホーテは呶鳴り出した。『いざ〳〵、豪勇の騎士どもよ！　こゝでこそ御身たちが強き武力を揮ふべきぢや。宮廷の人々は試合に勝を占めようとして居る

ではないか！』この物音と叫びとに氣を奪はれて、人々は殘りの書物の檢査をそれ以上に進めなかつたのである。それ故「カロレア」、「スペインの獅子」及びドン・リュイス・デ・アギラの書いた「皇帝御事蹟」は、見られもせず聞かれもせずに火中にせられたと思はれて居る。何故といへば、疑ひもなくそれ等は殘部の中にあつたので、もし牧師補がそれ等を見たならば、恐らくそれ程苛しい宣告は受けなかつたに違ひないからである。

人々がドン・キホーテの側へ行つた時には、彼は既に寢床から出て居つた。そしてやはり呶鳴つたり狂うたりして、一向眠らなかつたらしく、ぱつちりと眼を開けて、そこら中をめちや〳〵に切り立て截りまくつて居つたのである。人々は彼を抱き上げて無理やり寢床へ還らせた。それから少し落ちついて來たときに、彼は牧師補に向つてかう言つた、『まことに、大僧正テュルバンさま、我々冒險者は先きの三日に名譽を得て置きながら、不覺千萬にも宮廷の騎士どもにこの試合の勝利を得させるとは、十二華族と自ら呼ぶ我々にとつて大の恥辱でござりますわい。』

『何の、御老人、』と牧師補は言つた、『おかげで吉い運が向いて來ようも知れん。今日失ふものは明日得ることあらんぢや。差し當つて貴方は御自分の健康に氣をおつけなされや。ひどく傷を受けてお出でぢや無うても、貴方は疲れ切つて居りなさるやうに見えますからな。』

『傷なぞして居るものか、』とドン・キホーテは言つた、『殿らられて滅多打ちにせられたに違ひないのぢや。それはあの庶子のドン・ローランドが檪の樹の幹で拙者を打ちのめしたからぢや。それも彼奴が自分と功業を競ふものは拙者ばかりぢやと思ふによつて、皆妬む心からぢや。しかし彼奴にどれ程の妖術があらうとも、拙者がこの寢床から起きると直ぐ、萬一彼奴に仕返しをしてやらなんだことには、拙者は自分からモンタルヴァンのレイナルドスとは名乘るまいわい。が、差し當つて何か食べものを寄越して下され、それが何より拙者に忝けないであらうと思ふのぢや。仕返しのことは拙者自身に任せて置かれたい。』

人々はその望むまゝにした。人々は何か食べるものを與へた。そして、その狂亂を驚き異しむ人々を差し措いて、彼は再び熟睡したのである。

その夜家婢は、裏庭と家中とに在つた書物を殘らず燒いて灰にしてしまつた。不朽の文庫に保存するに足るものも、多少は燒き失はれてしまつたに違ひない。さしもの名

著もそれ等の書物の運命と、檢閲者の怠慢とが、そのことを免れしめなかつたのである。かくして、罪なきものも往往にして罪あるものゝ爲めに惱むといふ諺が、その書物を俟つて確かめられたのである。

牧師補と理髪師とが時を移さず自分等の友人の病に適用した一つの療法は、書物の在つた室を壁圍ひにしてしまつて塗り隱すことであつた。さうすれば、彼が起きても書物は見つからないし(恐らく、原因が除かれたら結果も止みさうなもので)、また室も何もかも魔法使ひが持つて行つてしまつたのだと言つても濟むわけである。そこでこの事は大急ぎで成された。二日經つてドン・キホーテは起きた。そして第一に彼の爲たのは、行つて書物を調べることであつた。そして、その儘にして置いた室が見つからないので、彼はそれを探して彼方此方とうろついた。彼は戸口の有りつけの處へ來た。そして兩手で押して見た。そして一言も言はずに眼をきよろ〳〵させて八方を見廻した。が、稍暫らくして家婢に自分の書物の入れてある室はどの邊にあつたかと尋ねた。

何と返事をすべきかを既に十分教へ込まれて居つた家婢はかう言つた、『旦那さまはどんなお室やどんなものを探してゐるでなさるのでござんすぞ。このお家にはもう室も本もありやしませんがな。魔ものゝ奴めが殘らず持つて行つてしまうたので。』

『魔ものぢやないのよ、』と姪が言つた、『貴方がこゝをお出かけなさつてから、ある晩一人の魔法使ひが雲に乘つて來ました。そしてその乘つて來た蛇から降りて、あのお室へ入りました。それからそこで何をしたのか私は知りません。けれども暫らくすると、屋根を飛び脱けて逃げて行つてしまひました。その後では家中一杯の煙になりました。それから何をして行つたのかと私らが行つて見ますと、本もお室も見えませなんだ。けれどその曲者の老爺めが出て行きしなに、大きな聲で、この書物や室の持主に人知れぬ恨みを抱いて居る爲めに、俺はこの家に禍をしたのぢや。その事はだん〳〵今に分るぞと言ひましたのは、婆やも私も非常によく覺えて居ります。そいつはまた、自分の名は賢人ムニャートンぢやとも言ひましたよ。』

『そやつはフリストン(死の家に住んでゐた魔法使ひとして知らる)と言うたに相違ない。』とドン・キホーテが言つた。

『フリストンと言ひましたかフリトンと言ひましたか私は存じません。』と家婢は言つた、『何でもそやつの名のお仕

舞に「トン」がついて居つたことしか知りません。』

『その通りぢや、』とドン・キホーテは言つた、『そして其奴は賢い魔法使ひで、拙者の大敵の一人ぢや。何時かその中に、拙者が其奴の眼をかけて居る騎士と一騎打ちで戰ふ筈ぢや、そして拙者が打ち負かしてくれる筈ぢや、そして其奴はそれを邪魔することが出來まいといふことを、其奴は自分の術と學問とによつて知つて居るものぢやから、拙者に恨みを有つて居るのぢや。それでかういふ譯から其奴は、自分に出來るだけの意地悪い仕向けを拙者にせうとして居るのぢや。しかし必ずぢや、天の定めるところを反いたり避けたりすることは、其奴の力には及ぶまいわい。』

『そりやさうですとも、』と姪が言つた、『けれど叔父さん、誰が貴方をそんな喧嘩にかゝり合はせるのです？　羊の毛を賣ひに行つて毛を剪られて歸る人の多いことも少しも考へなさらずに、小麥で出來たのよりもつと上等の麵麭を探して、世界を歩き廻つたりなさる代りに御自分の家に落ち着いておゐでなされた方がよいことはないのでせうか。』

『はて、姪よ、』とドン・キホーテは答へた、『お前はまア、えらい勘違ひぢや。誰れなりと私の毛一本の、ほんの端にでも觸つて見るがよい。其奴が私の毛を剪まぬうちに、私が皆其奴らの髯を引つこ拔いて攫り取つてくれるのぢや。』

彼の立腹が烈しくなつて來るのを見たので、二人はもうこの上返事をすることを好まなかつたのである。

結局かうして、彼は自分の前の妄想を採用したいらしい樣子は少しも見せないで、極めて靜かに十五日間家に留まつた。そしてこの間彼はその二人の親友、卽ち牧師補と理髮師とを相手に、武者修行は世界の最も必要とするところのものであること、及び武者修行道の復活は彼を俟つて成就せらるべきであるといふ彼の主張の要點に就いて、盛んな議論を闘はしたのである。牧師補は或るときは彼に反對し、或るときは彼に同意した。蓋し彼がこの用心を守らなかつたなら、彼はドン・キホーテを宥めるすべは無かつたであらう。

かれこれする中にドン・キホーテは、一人の小作人を取り込んでしまつた。自分の近所のもので、正直な男で（實際その肩書きを貰乏なその男に與へても構はぬならば）、たゞその腦天には極僅かしか智慧がなかつた。一と口に言へば、彼はうまくその男を說き伏せた。しかもいろ〳〵說き勝したり約束をしたりして。それでこの可哀さうな馬鹿ものは、彼と共に出征し、侍士として彼に仕へようと腹を定

めたのである。殊にもドン・キホーテは、瞬く隙に一つの島を手に入れて彼をその太守にしてやれるやうな冒険が、いつ起つて來るかも分らぬのであるから、欣んで自分と共に行く氣になつて居つてくれねばならぬと、彼に話した。

こんなやうないろ〳〵の約束で、サンチョー・パンザ（その小作人はさう呼ばれて居つたのでゝは、女房や子供を棄てゝ、自分の近所の人の家來として雇はれた。ドン・キホーテは次に多少の金の調達に取りかゝつた。そしてかれは賣りこれは質入れして、その度毎に割の悪い取引をしながら、相當の金高を集めたのである。彼は一人の友人から貸して貰つた圓楯を用意した。そして敲き破られた兜をば、出來るだけよく修復して、自分で一番入用と思うて居るものゝ用意を出來すやうにと、わが家來のサンチョーに、自分の出立するつもりの日と時刻とを知らせたのである。何よりも彼は二重胴鎧を携へよと命じた。片方の男はさうしませうと言つた。それから彼は徒歩には餘り慣れて居らぬ故、自分の持つて居る非常によい驢馬をも伴れて行くつもりだと言つた。驢馬に就いては、武者修行者で、驢馬に乘つた家來を伴れて居るのを想ひ出せるかどうかと考へて見て、ドン・キホーテは少し躊躇したのである。けれど一向そんな例は想ひ浮ばなかつた。さうではあつたけれど、しかし彼は、自然に折が來れば、無禮な騎士に出逢ひ次第その馬をわがものにして、もつと恥かしからぬ乘り料を彼に與へてやるつもりで、彼を伴れて行くことに定めたのである。己れ自身は、旅籠の主が與へた忠告に從つて、シャツ及び出來るだけのいろ〳〵のものを用意した。殘らず定りがついて整うてしまつたので、サンチョー・パンザは自分の女房子供にも、ドン・キホーテは家婢にも姪にも暇乞ひをせず、彼等は誰にも見られずに、ある夜その村から出で立つた。そして隨分道程が捗取つたので、夜明けの頃には、追手を後から出したところで大丈夫見つからずに濟んだのであつた。

サンチョーは二重胴鎧と革袋とを携へ、主人が自分に約束した島の太守に早くなつて見たいと思ひながら、僧正さまのやうに驢馬を乘り進めた。ドン・キホーテは初めの旅に辿つたのと同じ道筋と街道とを取ることに定めた。それはモンティエルが原を越えるのだが、折柄朝は早く、日の光りは斜かひに彼等の上にさしたので、暑さに苦しめられなかつたものだから、彼はこの前のときほどの難儀をせずに旅したのである。

さてサンチョー・パンザは、主人に向つて言つた、『武者修

行の旦那さま。貴方さまのお約束なさつた島のことは忘れんやうに氣をつけておくれなされませよ。どんなに大きかろと私や結構治めることが出來ますからの。』

それを聞いてドン・キホーテは答へた、『よう聞いて置くがよいぞよ、サンチョー・パンザや。自分の家來どもをば、自分の取つた島や王國の太守にするのが昔の武者修行者どもの間に專ら行はれた慣はしであつたのぢや。そこでかういふ寬大な仕來りについては、拙者の方にも少しの過ちもあつてはなるまいと思ひ込んで居るのぢや。それどころか拙者はそれに改良を加へるつもりぢや。何故といへば、武者修行者どもは時によると、いや恐らくは大方いつでも、自分の家來どもの年取るまで待つて居るのぢや。そして隨分勤めに勤めて、つらい晝や、それよりもひどい夜を送つてしまうたその時分に、多かれ少なかれ、どこかの山間の平地か州の伯爵とか、またはたか〴〵侯爵とかの稱號か何かをくれてやるのぢや。ぢやが、お前も生きて居るし拙者も生きて居りさへすりや、大丈夫六日と經たぬうちに、どこかの王國を拙者が手に入れることが出來ようと思ふのぢや。それには他に附屬の王國どもがある。丁度それで、お前をそのうちの一つの王にしてやれることになるのぢや。お前はそれを不思議と思ふには及ばん。物事も好い折も、かういふ騎士どもの運には、まことに例も開かず思ひも寄らぬ具合に降りかゝつて來るものぢや。さうすりや拙者がお前に約束するよりもつと餘計にも、造作なしにお前にくれてやれるのぢや。』

『さうなりやァ、』とサンチョー・パンザは言つた、『もしも私が、貴方さまの言ひなさるやうな不思議なことのどれか一つのお蔭によつて、王さまになれでもしたら、うちの婆さまのジュアナ・グティエルレーズでも女王さまちふことになるし、子供どもは王子さまちふことになるのでござりますの。』

『おゝ、さうぢやとも、』とドン・キホーテは言つた。

『さうぢやろかの。』とサンチョー・パンザは言つた、『何故ならの、私はの、たとひ神樣がこの世へ王國を夕立ほど降らして下さろと、そりや一つもマリー・グティエルレーズの頭にや適るまいかと、どうも私にヤさう思はれますのぢや。まア聞いて下さりませよ、旦那さん、彼女ヤ三文がとこも女王さまの値打はありやしませんぞよ。伯爵夫人の方があれにやよう適りませうわい。それかてゝ、神さまのお助け一つによることぢや。』

『神さまにお任せせい、サンチョー、』とドン・キホーテは答へた、『神さまがあれに一番似合ふものを下さるぢやらう。しかしお前は一州の太守になるより下のことで滿足してしまふ程に、自分を見くびろなよ。』

『見くびりませんぞ、旦那さま、』とサンチョーは答へた、『別して私に似合ふものや私に持てるものなら何でも下さることが出來ようといふ、貴方さまといふこんなお豪い人を御主人に持つて居るのでござりますもの。』

第八章　恐ろしい夢想せられたこともない風車の冒險に際して、勇敢なるドン・キホーテの得たる吉き幸運のこと。附けたり、當に記錄するに足るその他の出來事ども。

折しも彼等はその野原に在る三四十の風車の見えるところに來た。ドン・キホーテはそれ等を見るや否や、自分の家來に向つて言つた。

『私らが自分で己れの願ひを果すよりも幸運の神が更によく私らの爲めに物事を整へてくれて居るわい。あれ見よ、サンチョー・パンザよ、あすこには三十體以上も異形の巨人が姿を現はし居る。拘者はあの殘らずと渡り合うて居るつもりぢや。またその分捕の品々で我等は身代を起し初めよう。何故とならこれは正義の戰ひぢや、またかやうな惡い族を地球の面から掃ひ除けるのは神への善い勤めぢや。』

『どんな大男ですかい。』とサンチョー・パンザは言つた。

『あすこに見えるあれだ、』と主人は答へた、『長い臂をしてゐて、中には、その長さがかれこれ二リーグ（一リーグは約一里八丁）もあるのがある。』

『よう御覽なされ、旦那さま、』とサンチョーは言つた、『あしこに見えるのは、大男ぢやない風車ぢやに、そして腕のやうに見えるのは帆で、あれが風で廻るので磨石が動くのですぞ。』

『ア分つた〳〵、』とドン・キホーテは答へた、『お前はこんな冒險の事には慣れて居ぬのぢや。あれは巨人ぢや。お前は怖けりや彼方へ避けて、拘者があの奴等と烈しい不釣合ひな戰をする間、祈禱に身を打ち込んで居れ。』

かう言ひつゝ彼はその軍馬ロシナンテに拍車を當てた。彼の攻めかゝらうとするあのものどもは必ず確かに風車であつて、巨人ではないと警め告げつゝ、家來サンチョーの後

より呼びかける聲をも氣に留めずに。彼はそれでも尚それらを巨人であると堅く思ひ込んでゐたので、サンチョーの呼ぶをも聞かねば、眞近く來ながらその何ものたるかをも見分けずして、それらに向つて大音聲に呼ばはつた、『遁げるな、臆病もの卑怯もの、汝等に打つてかゝるはたゞ一騎の騎士ぢやわい。』

この時、風が少し吹き起つた。そこで、大きな帆は動き出した。それを見て、ドン・キホーテは呼ばはつた、『たとひ汝等巨人ブリアリュースよりも數多き腕を揮ふとも、汝等は拘者との始末を附けねばならぬぞ。』

かう言ひつゝ、かゝる危難に在るわれを擁護したまへと祈願して、意中の貴婦人ドゥルシネアに全心を捧げてわが身を託しつゝ、槍を休らへ圓楯に身を蔽うて、ロシナンテの足掻の限り疾驅突進し、その前に立てる最初の粉磨車に打つて掛つた。

しかし彼がその槍の穗尖を帆に突き立てたので、風は勢烈しくそれを廻轉させ、その爲めに槍はずた〳〵に折れ碎け、それと一緒に馬も乘り手も引ツ浚はれ慘めな有樣で野原の上をぐる〳〵轉げ廻つた。サンチョーは驢馬の走れる限り急ぎに急いで彼を救ひに駈け着けた。そしてその場へ來て見れば、彼は身動きもならぬ始末である、ロシナンテは彼と一緒にどツと激しく倒れたのであつた。

『やアれやれまア、』とサンチョーは言つた、『あれはほんの風車ぢやから、貴方さまのなさることに氣をおつけなされませと、私が旦那さまに申し上げなんだことかい。また誰が、頭の中にあれと同じやうなものでも有つて居る人で無けりや、あれのことを間違へたりなぞしようがあろかい。』

『さう言ふな、サンチョーよ、』とドン・キホーテは言つた、『凡そ何よりも戰の運は屢々勝敗のありがちなものぢや。それにまた拘者の思ふには、それが眞のことぢやが、俺の書齋や書物を掻ツ浚つて行つたあの同じ賢人フリストンが、彼奴等を征伐する榮譽を俺から奪はう爲めに、あの巨人どもを粉磨車に變化させたのぢや。しかしつまりは彼奴の妖術も、わが名劍に施すすべはあるまいぞ。』

『どうぞさうありたいものでござりますよ。』とサンチョー・パンザは言つた。そして彼を扶け起して、再びロシナンテに乘らせたが、馬の肩は半ば骨が脫れて居つた。さてそれから、今の冒險を議論しつゝ彼等はラピースの往還口へと道を追うた。蓋しそこでは、ドン・キホーテの言ふに、大街道（マドリットからセザルへ行く大街道の一驛路）の事であるから、澤山のまたさま〳〵

の冒險の見つからぬ氣遣ひはないからである。ではあつたが、彼は槍を失くしたことを大に惜しんだ。そしてこの侍士にそれを言ひなから、附け加へて言つた、『ディエゴ・ペレズ・デ・ヴルスと名乘るスペインの騎士が戰の中に槍を折つたので、樫の木から重さうな大枝か小枝かを折り取つた、そしてこれでその日はえらい働きをした。そして多數のムーア人どもを打ち据ゑた。そこでその人はマチューカ Macha ともよばれ、又はマチャカル Machacal は打ち据ゑるの意、この事實は千二百六十四年、アルフォンソ十世の代のジエレーズの圍みの時のことで、これを謠つた物語歌 romance がある といふ異名を貰つた。そしてその人も子孫もその日からはヴルガス・イ・マチュカと呼ばれたといふ話を、私は讀んで覺えて居るわい。私がこれを言ふのはな、見あたり次第の樫の木から（前記の物語歌にはこの木は橡櫟樹になつてゐるが、橡櫟樹はラ・マンチャ地方には繁茂しないので、ドン・キホーテが、樫の木に取り代へたのである。エンシナ encina さういふやうな大きな丈夫な枝を一本折り取るつもりなればこそぢや。それを以て私は素晴らしい働きをする決心覺悟ぢや。そこでお前もそれが眼のあたり見られるし、またなか〳〵眞とは思はれぬやうな事柄の見證人ともなれる程の身分になつたのを、われながら實に仕合せぢやと思ふがよい。』

『何も神樣任せでござりますわい。』とサンチョーは言つた、『私は旦那さまの仰有る通りを、何もかも眞と思つて居りますぞい。ぢやがちつとお身體を眞直になされませ、まるで片側へ寄つてしまうておめでなさるやうぢや。大方落ちるときに搖り落とされたからぢやろ。』

『それはその通りぢやわい。』とドン・キホーテは言つた、『そこで、私が少しも苦痛を訴へぬのは、それや武者修行はどんな僞でも、痛いと言ふことを許されて居らぬからぢや。たとひその僞のために臟腑の出ることがあつてもぢや。』

『そんなら、』とサンチョーは言つた、『私や何も言ふことはござりませんわい。しかし神さまが知つてござる、私や何によらず旦那さまのお苦しいときには、泣き言を言うてござる方が私にやよいのでござります。私はと言ひますとな、打ち明けた話がどんなちよいとした痛みでも泣き言を言はずにや居られませんわい。全くのところ、泣き言を言はぬに就いてのその規則が、武者修行者の家來にまでもかゝつて來るのでないのならぢや。』

ドン・キホーテは、その家來の無邪氣を笑はずには居られなかつた。そしていつなりとどんなになりと勝手に自分の好きなやうに泣き言を言つてもよいと保證してやつた。蓋しこれまで嘗て彼は騎士道の掟の中で、これと反對のことは更に讀んだことがなかつたからである。

サンチョはもう晝飯時であることを彼に思ひ出させた。それに對してその主人は自分は丁度今は何も欲しくないが、お前は食べたい時に食べてもよいと答へた。この許しを得てサンチョは、自分の獸の上に出來るだけ乘り心地よく身を落ちつかせた。そして胴籃からその中へ藏ひ込んで置いたものを取り出しながら、彼はゆつくりと嚙みしめ嚙みしめ、又渴き切つたマラガの酒酌み男が羨しがりさうに、旨さうに、時々酒袋からグイ〳〵と飲みながら、主人のあとからコツト〳〵と歩いた。そして一杯又一杯とグビ〳〵飲みながらかうやつて歩いてゐる間、彼は主人が自分に番へた約束のことなどは一寸も思うても見なかつた。又どれ程危險であるにしても冒險を探して歩くことを彼は苦しみとは思はず寧ろ樂しみだと考へた。遂に彼等はある木立の中でその夜を過した。その中の一本の木からドン・キホーテはともかく槍の役目をする枯れ枝を折り取つて、折れた槍から取つて置いた穗尖をその上に取り着けた。その夜中ドン・キホーテは彼の貴婦人ドゥルシネアのことを考へつゝ起きて居つた。騎士たちが彼等の戀人の想ひ出に助けられて幾晩も〳〵森や荒野原の中で一睡もせずに横はる慣はしであつたと、彼が書物で讀んでゐたことに倣はせるために。サンチョ・パンザはさうしてはその夜を過さなかつた、彼の胃袋は菊苣水よりもつと強いもので一杯になつてゐたので、彼はたゞ一寢入りにしてしまつたからである。そしてもし彼の主人が彼を呼び起さなかつたら、彼の顏の上に照りつける太陽の光りも、晝間の近づくのを歡び迎へる百鳥の嬉々たる一切の音色も、彼を覺ます力はなかつたのであつたらう。起き上りさま彼は酒袋を吟味して見た、そして昨晩より幾らか量の減つてゐるのを見出だした。それは彼の心を悲しましめた。彼等が手易くその不足を塡め足す方へ向いてゐるとは思はれなかつたからである。ドン・キホーテは朝飯を食べようとはしなかつた。それは已に言つた通り、彼は榮養に就いては美味を回想する外一切取らぬことに定めて居たからである。

彼等はさきに立つたラピースの驛路へ行く往還へ取つて返した、そして午後の三時にはそれが見えて來た。『さア、サンチョ・パンザ、』とドン・キホーテはそれが見えると言つた、『世間で謂ふ冒險の中へ肘元まで、手を突つ込んでやれるのぢやぞ。しかしな、心得て居れ、私が全く非常の大危難に逢ふところを見ようとも、お前は私を護るためにお前の劍に手を掛けてはならぬぞよ。尤も、私に打つてかか

かるものが、烏合の衆か下司のものどもぢやと、お前が認めたときは、ともかくもぢや。それはその時にはお前が私に助太刀しても一向差し支へはない。しかしもし彼等が騎士であると、お前が騎士の爵を受けるまでは、私を助けることは、騎士道の法によつて何としてもお前には許されず、また認められぬのぢや。』

『かしこまりました、旦那さま、』とサンチョは答へた、『その儀は、十分旦那さまの仰せに従ひませうわい。それにまた尚のこと、私といふ人間が一體穏かな方で諍ひ喧嘩の仲間入りには一向仲の悪い方でござりますからの。尤も私がわが身を庇ふといふことになつたら、そんな法は氣にはかけますまいがの。何故なら人間の法でも神さまの法でも、誰であらうが攻めてくるものに双向うてわが身を守ることは、誰にでも許して居りますからの。』

『それはさうぢや、』とドン・キホーテは言つた、『しかし騎士に双向うて私を助けると云ふことについては、お前のもちまへの性急を抑へて居つてくれねばならぬ。』

『さういたしましよ、きつとしますよ、』とサンチョは答へた、『そしてこの掟を日曜日のやうに大事に守りましよわい。』

彼等がこんな話をしてゐる折から、その往還に二人の聖ベネディクト教派の僧が現はれた、二匹の單瘤駱駝に乘つて。蓋し彼等の乘つてゐる二匹の騾馬はかれこれそれ位の丈であつたのだ。彼等は旅行眼鏡をかけ日傘を携へてゐた。そしてその後からは馬に乘つた四五人の人と二人の徒歩の騾馬馬丁を従へた一豪の四輪馬車が来た。四輪馬車の中には、後に分つた通り、これからセヴィールへ行く或るビスケイの貴婦人が乘つてゐた。そこにはその人の夫が高貴の任を拜して印度諸島へ向け船出しようとしてゐたのである。僧たちは、同じ往還は行くものゝ、その同行者ではなかつた。しかしドン・キホーテは彼等を眼にとめるや否や、彼の家來に言つた、『拙者の見違ひか、さもなくばこれは未だ曾て見たこともない極めて名高い冒險になつて來るぞ。なぜといふに、あそこに見える黒い體軀は魔法師に相違ない、また疑ひもなくさうぢや。彼等は偸み取つた何處かの姫君をあの四輪馬車で連れて行き居るのぢや。我が力の限りをつくして拙者はこの非道を救はねばならぬわい。』

『こりや風車よりまだ悪かろわい、』とサンチョは言つた、『御覽なされ、旦那さま。聖ベネディクトの坊さまたちでござります。そして四輪馬車はあの通りどこかの旅人のでござ

ざります。お氣をおつけなされませ、もし、御自分でどうしてござるかようお氣をつけなされませよ。そして惡魔に迷はされぬやうになされませよ。』

『拙者ははやもうお前に話して置いたぞ、サンチョー、』とドン・キホーテは答へた、『冒險のことについてはお前は凡て知らぬのぢやと。拙者の言ふことが眞ぢや、それやお前今に分らうぞよ。』

かう言ひながら、彼は、進んで僧たちのやつて來る往還の中央に立ち停まつた。そして自分の言ふことが十分聞える程に彼等が近づいたと思ふや否や、彼は大聲に呼ばはつた、『極惡非道にして天理に悖れるものどもよ、汝等がこの四輪馬車で無理無體に連れ行き居る高貴の姫君たちを卽刻釋き放せ。さもなくば汝等が惡事の正しい仕置きとして卽死に出つくはす覺悟をし居れ。』

僧たちは歩みを止め、ドン・キホーテの風采にも又その言葉にも驚き異しみつゝ立ち停つた。彼等はそれに答へた、『騎士足下、我等は極惡非道のものでも、天理に悖つたものでもなうて志す方へ參る聖ベネディクト派の二人の托鉢僧でござる。また我等は囚人の姫君たちがその四輪馬車で來なさるのやらどうぢややら存じませぬわい。』

『いかなやさしげな言葉も拙者には無駄ぢや。拙者は汝等を知つて居るのぢや。嘘つきどもめ、』とドン・キホーテは言つた。そして返事も待たずロシナンテに鐙を當て、槍を横へて、憤然決然として先頭の僧を襲うた。さればもしその僧が騾馬から自分で飛び下りなかつたら、彼はむりやりに地上に引きずり落して、よしや全く殺しはせぬまでも、激しく傷を負はせたに違ひないのであつた。次の托鉢僧はその道連れのあしらはれ振りを見て、自分の根城なる騾馬にわが踵を引きよせて風よりも早く野原を横切つて逃げて行つてしまつた。

サンチョー・パンザは、その托鉢僧が地上に倒れるのを見ると、素早く驢馬から下りてつか〳〵と進み寄り、その僧袍を剝ぎにかゝつた。其途端に僧侶一行の騾馬追ひどもがやつて來て、何でそれを剝ぐのかと訊いた。サンチョーは、これは自分の主人のドン・キホーテが勝つた戰の分捕品として當然自分の手に入つたものだと答へた。冗談といふことを解せず、且つまた戰とか分捕品とか言ふ事が一向腑に落ちなかつた騾馬追ひどもは、ドン・キホーテが少し離れたところで馬車の中の旅人たちと話してゐるのを見すまして、サンチョーに打つてかゝり、彼を打ち据ゑ、頤鬚一本も殘ら

ず引き攣つて、さん〴〵に蹴散らし、息も絶え〴〵に覚えのなくなるまで平伏らさせてしまつた。それから猶豫なく托鉢僧を助け乗せた。その托鉢僧は今までぶる〳〵慄へて眞蒼になつて居たが、鞍の上に落ち着いたと思ふや否や、拍車を當てゝ自分の伴侶のあとを追うた。その伴侶は遠くの方に立つて、その襲撃の成り行きを氣づかひながら見てゐたのである。そこで、つい今また初まつた事件の成り行きを待つ氣はないので、彼等はまるで後から悪魔でも追つかけて來てゐるやうに、更に澤山の曲り道を曲つて旅を續けて行つた。

ドン・キホーテは、上に述べた如く車中の婦人に言つて居た。『美しの君よ、わが婦人よ、』と彼は言つた、『今は貴女の御心に最もよく叶ひますやうに御身の御始末をなさるやうに、貴女に無禮を加へる者どもの誇りは、拙者がこの強き腕の力によつて地上に平伏つて居りますから。尚また貴女の救ひ手の名を御承知なされたいとて御心づかひなさらぬやうに、拙者は騎士にして冒險者、且つ無比の美人ドゥルシネア・デル・トボソォ姫の俘虜、ラ・マンチャのドン・キホーテと申すものと御承知置き下されたい。また拙者より受けられた勤勞の酬いとしては、たゞ貴女がエル・トボソォへ歸られて、拙者の爲めに、かの婦人の前に出られ、貴女を自由にする爲めに、拙者の働いたところを物語つて下さるやうにお願ひ申すばかりぢや。』

その馬車に從いてゐた一人のビスケィ人は、ドン・キホーテの言ふことを殘らず聞いて居つた。そして彼がその馬車を通さうとしないで、エル・トボソォへ歸らねばならぬなどと言ふのを見て、彼の傍へ近寄り、その槍を摑んで、下手なカスティル語と、それよりもつと悪いビスケィ語で、かういふ風に彼に物を言ひかけた、『行け、騎士め失せやがれ。貴樣がこの車を離れんと、己れを生んだ神さまにかけて、どうでも貴樣を片づけずにや置かん。』

ドン・キホーテは、その意味を十分よく了解した。そして極めて靜かに彼に答へた、『お前はさうではないか、もしお前が騎者であつたら、拙者はとくにお前の愚かさと無禮とを懲らしてやつたらうに、憫れな奴め。』それに對してビスケィ人は答へた、『私は紳士ぢやないよ！（caballero カバレロは騎士もしくは紳士を意味す）——私はキリスト信者ぢやから神さまに誓うて言ふが、お前さんは嘘つきぢや。お前さんが槍を投げて劍を拔いて來たら、まるで猫を海へ連れて行つたやうなものぢや。ビスケィ人は陸で、紳士は海に居りや、紳士は災難ぢ

や。それでもお前さんが嘘を言はぬと言ふかい。』

『「今に分るぞ」とアグラジェス（ゴールのアマディスの弟にして勇士）が言うて居る。』とドン・キホーテは答へた。そして槍を地上に投げて剣を抜き、圓楯を緊と摑んで、その一命を果たさうと思ひ込んでビスケイ人に打つてかゝつた。

ビスケイ人は彼の打つてかゝるのを見ると、實はそれはけちな貸し騾馬であつて、一向頼りにならなかつたので、自分の騾馬から下りようと思つたけれども、到頭剣を抜くより外にしようがなかつた。しかし、幸ひに彼は馬車の近くに居つたので、其中から一枚の蒲團を摑み出すことが出來たので、それが彼の爲めに楯の役を勤めて呉れた。そこで二人は恰も不倶戴天の敵の如く互ひに打ち合うた。他の人人は仲裁をしようと骨折つたが出來なかつた。それはビスケイ人が文句もしどろもどろに、もし人々がこの戰をしまひまでやらせなかつたら、奥様でも誰でも、邪魔をする者は殘らず殺してしまふぞと言つたからである。馬車の中の婦人はこの有様に驚き恐れ、御者に少し脇へ車を寄せるやうに命じた。そしてこの烈しい打ち合ひをぢつと見てゐた。するうちにビスケイ人はドン・キホーテの圓楯の上を越えて肩の上にうんと一つ打ち喰はしたのである。もしそれを胄のない人が受けたことなら、腰まで裂けてしまつたであらう。ドン・キホーテはこのしたゝかの打撃の手痛さが身に應へて大聲に叫び出した、『おゝわが魂の婦人なるドゥルシネア よ、美貌の花よ、君が美しさに對する己が義務を果たすとてかゝる大危難に逢へるこの君が騎士を來つて助けたまへ。』これを言ふのと、剣を上げるのと、圓楯で身を十分に庇ふのと、ビスケイ人に打つてかゝるのとは、一刹那の働きであつた。蓋し彼はたゞ一と打ちで勝負を決める決心であつたからである。ビスケイ人はこの様子を見て、その決心ある振舞ひによつて勇氣の程も確かと見て取り、自分も亦その例に慣はうと決心した。そこで彼は蒲團で身を庇ひつゝ待ち受けた。へと〳〵に勞れてゐて、こんな勝負をしようなどとは思ひも寄らなかつたその騾馬は、身動きすることも出來なかつたので、これでは彼もどうも動きまはるわけに行かなかつたからである。

その時、上に述べた如くドン・キホーテは、剣をふり上げて眞二つに斬つてやらうと一念こめてそのすばしこいビスケイ人目がけて進み寄つた。ところがビスケイ人はその側に、剣を手に持ち蒲團を楯にして彼を待つて居たのである。そこに居合せた一同は、まさに落下せんとする打撃の結果如

何と片唾を嚥んで待ちながら慄へ〳〵立つてゐた。馬車の中の婦人とその供人等は、今この差しかゝつた危難から、例の家來もその他の者等をも、神よ願くは悉く救ひたまへと、スペイン中のあらゆる聖像と神殿とに數限りない祈誓祈願を捧げてゐたのである。ところが困つたことには、丁度こゝの大事のところで、この物語の作者は差し迫つたこの合戰の筆を止めてゐるのである。その申譯としては、上に既に述べたこと以上にはドン・キホーテのかゝる武功に就いて何等の記錄を發見し得なかつたといふことを言つて。しかしこれ程珍らしい物語が忘却の宣告を受くるまゝにして置かれたといふことも、ラ・マンチャの學者たちがその古文書庫や記錄書庫の中に、この有名なる騎士に關する文書を多少とも保存しないといふ程思慮のない人であつたといふことも、實はこの作の第二の作者は、何れも信ずることを好まぬものである。卽ち彼はかく思ふが故に、彼はこのおもしろき物語の結末を發見することに就いては、絶望はしなかつたのであつた。その結末は、天、彼に幸ひして、第二篇に於いて述べらるゝやうな次第によつて發見したのである。

作者は初此作を四篇に分つた。こゝに第二篇とあるのはこの分け方によつたのである。

第二篇

第九章

では勇ましきビスケイ人と、勇壯なマンチャ人（ドン・キホーテ）との猛烈な眞劍試合が終りを告げておしまひになる。

この物語の第一篇では、勇壯なビスケイ人と有名なドン・キホーテとが互ひに拔身の劍を振り被つて、若し二人が確かりと見事に打ち下しさへすれば、敵手（あひて）を眉間から爪先迄ずばりと眞二つに斬り裂いて、柘榴の如くあんぐりと横たはらせるであらう、とさう思はれる程の猛烈な鋭い打擊を今にも與へようと身構へしたと云ふ所で、そのまゝにして置いた。そしてそれほどに大事な所で、この面白い物語は中絶して尻切れになつて、その脫落した部分は何處を捜せばあるのだか、作者から何の斷りもなかつたのである。

この事は私を非常に悲しませたのである。何故といふに、こんなおもしろい物語の中から脫落した部分が、澤山（と私には思はれた）あつて、それは發見する望みも殆んどないらしいと考へると、あればかりの小部分を讀んで得た樂しみ

が却つて煩悶の種となつてしまつたからである。かくの如く優れた騎士でありながらその驚くべき功績を記錄するの勞を取つて貰ふやうな一人の賢人も有たなかつたと云ふ事は、あり得可からざることでもあり、また一切の先例にも反したことゝ私には思はれた。これ、謂はゆる冒險事變を求めて出かける武者修行者の一人として有たざるはなきところのものである。蓋し武者修行者は誰れも彼れも、そのためにわざ〳〵拵へられたやうな賢人を一人や二人は有つてゐて、自分の武功を記錄させるばかりでなく、極めて他愛もない考へや馬鹿げた行爲までも、たとひそれがどのやうに內證のことであらうとも記述させたのである。それにドン・キホーテのやうな偉い騎士が、プラテイルやそれに似寄つた輩まで有り餘る程有つてゐたものを、有つてゐないと云ふ程に、それ程不仕合せであるべき筈がないのである。それ故私はこのやうな勇壯な物語が四肢を切り落され不具の儘で捨てゝ置かれたものとは、どうも信ずるわけには行かない。そこで私はその罪を、あらゆる事物の貪食者にして破壞者なる「時」に歸したのである。「時」がこの物語を隱蔽し若しくは消耗したのである。

また一方に於いて、私はかうも思つた——彼れドン・キホーテと讀んだ書物の中には、「嫉妬の啓發」や「ヘナレスの女神の牧羊者」のやうな近世の物が含まれて居るところから見ると、彼自身に就いての物語も同じく近世のことでなくてはならぬ。またそこで、假令文字に書き下されてはないにしても、彼の村の人たちや隣村の人々の記憶には、まだ存してゐるかも知れない。この考へは私の懸案となつてゐて、私をして我が有名なスペイン人　マンチャ村のドン・キホーテの全生涯とその驚くべき功績とを實際に眞實に知りたいと頻りに思はせてゐたのである。彼こそマンチャ村人の武士道の光りであり鏡であり、またこの現代の厭ふべき時にあつて、一身を獻げて廻國武士の武術を精勵練磨し、或は不義を正し、寡婦を援け、また、鞭を手にし婦人乘馬に跨り處女の凡ての純潔を保つて山から山、谷から谷へと乘り廻すを慣ひとしてゐたあの處女たちを保護したところの最初の人であつたのだ。蓋しもし暴漢や、頭巾を被り斧を持つ無道者や、或は怪物の如き巨人が居て、彼等に暴力を加へる事さへなかつたら、八十の高齡に達して、その長い間中只の一夜も屋根の下に寢ることなく、而も自分を生んだ母親と同樣に、無垢の女として穴に這入つて行つたといふやうな處女が、昔はあつたわけであるのだ。そこで思ふ

に、縁々の點から我が勇壯なるドン・キホーテは不朽永世の讃美に價する者で、また私にしても、この興味深き物語の結末を捜す爲めに費した勞力と苦痛とに對しては、同じ位の讃美を取り上げられるわけではないのである。尤も神と偶然と幸運とが私を助けて呉れたのでなかつたなら、この世界は、この物語を綿密に讀む人の貶るべき二時間かそこらの娯樂と快樂とを、遂に失つたまゝで終つたらうといふことは、私は好く知つて居るのではあるが。さてそれを捜し出した次第は次の如くである。

或日、私がトレードのアルカナ市場に居たら、一人の小僧が一人の絹商人に、幾冊かの小冊子や反故を賣りに來た。で私は反故の斷片でも道で讀むのが好きなので、その私の性癖に騙られてその小僧の賣つてゐる小冊子の一つを買つた。そして見るとアラビア文字と思はれる文字で書かれて居る。私はさうだと見分けは出來たものゝそれを讀むことは出來なかつたので、誰れかスペイン語を話すムーア人でこの本を私に讀んで呉れる者はそこらに居ないかと四邊を見廻した。またそんな通辯人を見つけるのは何も大した困難なことでもなかつた。それどころか若し私がもつと古いもつとよい國語の通辯人を捜したところで、私はそれを見つけたに違ひなかつたのだ。兎に角、都合好く一人の通辯人が見つかつた。私が自分のして欲しい事を告げて、その本を手渡しすると、その男は本の眞中を開けて、少し讀んでから笑ひ出した。私は何を笑つてゐるのかと訊いた。すると彼はその本の欄外の餘白に註解のやうにして書いてあるところを見て笑つてゐるのだと答へた。私はそれを聞かして呉れと言つた。すると彼はやつぱり笑ひながら言つた、『今申したやうに、欄外にかう書いてあります、「この物語に屢々記されて居るこのトボソォのドゥルシネアは、鹽豚を掩へることにかけては、マンチャ全村のどの女よりも一番上手であつたといふ。」と。』

トボソォのドゥルシネアといふ名前を聞いた時、私は案外の思ひと驚きとに打たれた。何故ならば、これ等の小冊子はドン・キホーテの傳記だと、たちどころに氣付いたからである。かう考へて私は、その初めの部分を讀んで呉れるやうにせがんだ。彼は讀みながらアラビア語を即座にカスティリヤ語に譯して、それは、「アラビアの一歷史家シード・ハメット・ベネンジェリに依つて錄されたる、マンチャ村のトン・キホーテの傳記」といふことだと言つた。この書物の名前が私の耳に達した時に、私の感じた喜びを隱すには、非常な

用心を必要としたのである。そしてその本を絹商人の手から引奪つて、例の小僧から半リール五錢餘であり附けたけの反故と小冊子を買ひ取つた。若しこの小僧がもつと悧巧で、私がそれをどんなに欲しがつて居るかと云ふことを見て取つたなら、この商賣で六リール以上は譯もなく儲かる見込みがついたであらうに。私は直ぐそのムーア人と一緒に寺の廊下に引き上げて、ドン・キホーテに關したそれ等の小冊子の殘らずをば、少しの削除も附け加へもなくカスティリヤ語に飜譯して呉れるやうに、さうすれば報酬は望み通りに出すと言つて賴んだ。彼は乾葡萄二アローバ約六貫目と大麥二ブッシェル四斗餘とで滿足した。そして忠實に大急ぎで飜譯すると約束した。が仕事を容易にする爲めに、またこんな貴重な掘り出し物を私の手から離すまい爲めに、私は彼を私の家に連れて來た。其處で彼は一ヶ月半と少しばかりで、以下にある通りの物を全部飜譯し終つたのである。

第一の小冊子には、ドン・キホーテとビスケイ人との眞劍勝負の繪が生き〳〵と描かれてあつた。物語に書いてあるやうな同じ恰好で立ち上つて、銘々劍を振り上げ、一方は圓楯で、一方は座蒲團で身を護つてゐた。そしてビスケイ人の騾馬は短距離間の賃貸馬だとすぐ見分けがつくやうに眞に迫つてゐた。ビスケイ人の足の下には、「ドン・サンチョー・デ・アゾペイティア」と云ふ書き出しがあつた。これは疑ひもなく彼の名前に相違なかつた。そしてロシナンテの足のところには、「ドン・キホーテ」と云ふ書き出しがあつた。ロシナンテは素敵にうまく畫かれてあつた。うんと長く細く、うんと痩せこけて、脊骨のこつ〳〵出たところ、消え入るやうに衰弱してゐるところは如何なる分別と適宜とを以てこの馬にロシナンテと云ふ名前が授けられたかといふことを明かに示してゐた。その傍には、サンチョー・パンザが、自分の驢馬の面勒の索を握つてゐた。驢馬の足のところには「サンチョー・ザンカス」と書いた、別の下げ札が付いてゐた。而してこの繪に依ると、サンチョーは太い腹、ずんぐりした身體、長い脛を有つてゐた筈である。その長い脛の爲めに、バンザ腹とかザンカ脛とか云ふ名前を與へられたに違ひない。それに、この物語の中には、二つの異名で幾度もサンチョーを呼んであるからである。まだ他のいろんな些細な特徴を記してもよいが、併しそれ等は皆大した意味もなく、この傳記に何等の關係も有つてゐない。而して如何なる傳記もそれが眞實である限りは惡からう筈がないのである。

この傳記に對して、史實の點から何等かの抗議が起るな

ら、それは僅かにその原著者がアラビア人であつたと云ふこと丈けである。あの國の人々としては虚言は實に萬人共通の性癖であるから。しかし彼等は我々の非常な敵であるから、本書の内容には附加よりも寧ろ削除があると云ふ事はありさうなことである。而してこれは私一個の意見である、蓋し作者がかくの如き立派な騎士に對する讃歎の筆を自由奔放に用ひることも出來、また用ふべき筈の所を、彼はわざ〳〵默過してゐるやうに私には思はれるからである。これは惡意で爲され、また更に一層の惡意で工夫された事である。何故なれば、歴史家の職分及び義務は、正確であること、眞實であること、また全く私情から脱してゐるといふことである。而して如何なる興味も恐怖も、憎みも愛も、彼等を眞理の道から踏み迷はせてはならないのである。眞理の母は歴史である。歴史は「時」の對抗者、勳功の貯へ藏、過去の證據人、現在に取つての見せしめであり忠告であつて、また將來への警告である。想ふに、この書の中には、最もおもしろい書物の中で求められ得る限りのものが見出されるであらう。而して若し何か美質が之に缺けてゐるとすれば、私は斷言する、それは要するに、原作者たる者の過ちであつて、決してこの題材の落ち度ではない。要するにその第二卷は飜譯に從へばこんな風に初まつてゐる——

各々兩刃の劍を振り上げ、大上段に構へ合つたところは、恰も憤激せる勇壯なる二個の戰士が天界と地獄とを威嚇して衝立ち上つたやうにも見えた。それ程の斷乎たる決心で二人は兩々相對した。猛烈なビスケイ人が眞先きに一擊を下した。この一擊は非常な力と忿怒を以て打ち下された。若しその途中で劍が外れなかつたら、この一擊は、この烈しい鬪ひにも、また我が騎士冒險にも、終りを告げさせるに十分であつたらう。併し運命は、後日の大事業の爲めに彼を生かして置かうと思つたので、彼の敵手の劍を横に外らした。その爲めに、劍は彼の左の肩の上を打ちはしたが、彼に及ぼした傷害は、甲の左側を全部切り落し、耳朶の半分と一緒に兜の大部分を攫つて行つた丈けに止まつた。切り去られたそれ等のものは、凡てめちや〳〵になつて地上に落ち、彼は見るも氣の毒な態になつた。

あゝ彼自らこんな風な目にあつたのを見たその時に、我がマンチャ人の心を充たしたその憤怒を、適當に敍述し得る者が誰があらう？　精一杯のところを言へばかうである。彼は再び鐙を踏みしめて身を起した。而して劍を一層固く

兩手に握りつめ、凄じい勢ひで蕃地にビスケイ人に突進して、その座蒲團の上や頭の上を力一杯打ち下したので、さしもの立派な楯も蒲團も役には立たず、恰かも大山が落ち掛つたかのやうで、彼は鼻や口や耳から出血し出して、殆んど乘つてゐる騾馬から背反り落ちさうによろめいたが、全く、もし彼が兩腕を騾馬の首に投げ掛けなかつたら、きつと背反り落ちたのであつたらう。けれどもそれと同時に、兩足を鐙から滑らして、兩手を緩めた。そこで騾馬はヅシンと來た重みに吃驚して、野原を駈け廻つて、二三度揺すぶるかと思ふと主人を大地へ投げ出した。ドン・キホーテは極めて平靜にそれを見戍つてゐたが、落馬するのを見ると、馬から飛び降りて、非常に敏捷こく駈けつけた。そしてその眼の前に劍の切先を突き付けて、降參せよ、しなければ首を斬り落すぞときめつけた。ビスケイ人は非常に狼狽して、一語も答へる事は出來なかつた。それで今迄非常にびく〳〵しながら此の勝負を見戍つてゐた箱馬車の中の婦人達が、大急ぎでドン・キホーテのところへ來て、一生懸命に辭を卑うして、特別の慈悲恩惠を以て自分達の家來の命だけは赦して吳れるようにと懇願しなかつたら、ビスケイ人はこの上ひどい目に逢つたのであらう。それ程ドン・キホーテは夢中になつてゐたのである。その懇願に對して、彼は非常な重々しさと威嚴とを以て答へた、『御婦人方、拙者はあなたがたのお賴みのやうにすることを眞實滿足して居ります。ぢやがそれは一つの條件と約束とに依らねばなりません。卽ち、この騎士が、トボソの村へ參つて、私の代りにあの比類なきドゥルシネア姫の前に出て、あの婦人の心のまゝに取り扱はれようといふことを、私に約束してくれるといふことです。』怖がつてひや〳〵してゐた婦人たちは、ドン・キホーテの要求にとやかく文句を言つたり、またドゥルシネアとは誰であらうかと訊ねたりもせずに、その家來は、彼が自分の代りとして命じただけのことを必ず果すに相違ないと約束した。

『それでは、そのお約束を信じて、この者にはもうこの上の傷害は與へますまい。この男はそれを受けるが當然ではありますがな。』とドン・キホーテは言つたのである。

第十章

ドン・キホーテとその家來サンチョー・パンザとの間に取り交されたおもしろい議論のこと。

托鉢僧の騾馬引きどもに少々痛めつけられたサンチョー

は、丁度この時立ち上つた。そして自分の主人ドン・キホーテの勝負を見戍りつゝ心の中にはどうか神様の御意に依つて自分の主人が勝つやうに、そしてそれに依つて自分は、曾て主人が約束したやうに一つの島を得てその島の太守になれるようにと、神に祈つてゐたのである。そこで、今や勝負が終つて、主人がロシナンテに乗らうと引き返して來るのを見ると、彼は鐙を抑へてやるために主人に近寄つた。そしてまだ主人が乘馬しないうちに、その前に跪づき、その手を取つて接吻しつゝかう言つた、『ドン・キホーテ樣憚りでござりますが、どうぞ今度の激しい戰ひでお取りなさつたあの島の支配權を私に下さりませ。その島はどれ程大きうござりましても、これまで島といふものを治めた世の中の誰にも負けん程に立派にそれを治める丈けの十分な力を私は有つとると思ひますから。』

それに對してドン・キホーテは答へた、『考へて見にやならんぞ、のうサンチョー。この冒險は、またこれに似よつた冒險は、島での冒險ぢやなうて四つ辻街道での冒險ぢや。これに依つて受けるものは、頭を割られるとか片耳を失ふとかゞ關の山ぢや。辛抱せい、お前を島の太守にする位ぢやない、もつとよいものにしてやれるやうな冒險が今に起つて來るからの。』

サンチョーは幾度も感謝した。そして今一度主人の手と鎖子鎧の裾に接吻して、主人をロシナンテに助け乘せ、自分も驢馬に跨つて主人の後に從いて行つた。主人はかの箱馬車の婦人たちには別れも告げず、また最早何も言はずに、早足で近くの森の方へ向つて行つた。サンチョーも驢馬の跑歩を出る丈け出して續いたが、ロシナンテの足が餘りに早いので後方に取殘されて了つた。それで彼は已むを得ず待つて呉れるようにと主人に呼びかけた。ドン・キホーテは待つて呉れるようにと主人に呼びかけた。ドン・キホーテはロシナンテの手綱を控へて、疲れ切つた家來の追ひ付くまで待つた。家來は近付いてからかう言つた、『旦那樣、何處かのお寺へ行つて隱れる方が上分別ぢやらうと思ひますがな。その譯はな、貴方樣の喧嘩敵手の男をあんな手荒い目に逢はせて來たからにや、屹度あの事を、「聖淨講」（當時スペインに行はれた警察制度で、街路及び市管區外に於ける生命財産の侵害者に對して即決裁判を下す組合）に屆け出て、私達を縛らせるにきまつとりますよ。そしてまア、若しあいつらがさうしたら、私らは牢屋から出る迄にえらい目を見にやなりませんがなア。』

『騷ぐな。武者修行者たるものが幾ら殺人を行つたにせよ、裁判所に召喚されたなどといふことを、お前は一體ど

こで見たのぢや、どこで聞いたのぢや？』とドン・キホーテは言つた。

『私は科料金い形で、Romecillo 又は Omecillo romeadillo の古 サンチョーの聞きちがひである なんちふことは些とも知りやしませんし、生れてからそんな事になるやうな事はしやしません。あの「聖浄講」が野原で斬り合ひする者を見張つとるちふことを知つとるだけでございますよ。もう一つの事は、私の構ふこつちやございません。』とサンチョーは答へた。

『それなら何もびく〳〵するには及ばんことぢや、のう。私はお前をカルデア人の手からでも救ひ出すのぢやから、ましてあの「聖浄講」などの手から救ふのは、知れたことぢや。それはさうと、お前本當のことを言うてくれ、お前はこの世界といふ世界中で、拙者よりも勇壯な騎士を見たことがあるかどうぢや。お前が讀んだ物語の本に、拙者よりも元氣に打つてかゝり、拙者よりも根強く詰め寄せ、拙者よりも敏捷く傷を負はせたり巧者に投げ倒したりする騎士が、昔でも今でも居つたかい？』とドン・キホーテは言つた。

『實は私は物語といふものはついぞ讀んだこたアございません。私は讀み書きが出來ませんからの。併しこれだけア大びらで申しますかの、私は生れてから今日が日まで、貴方様ほど膽の太い御主人さまに仕へたことアついぞございませんよ。どうかまアその御勇氣が今申上げたやうな方へばかり向かんやうに神様へお祈りしますわい。まアとにかくその傷をお卷きなされませ、その耳から血が澤山流れとりますよ。此處に鞍嚢の中に麻布と白膏藥が少しございます。』とサンチョーは答へた。

『こんな物は凡て不要ぢやつたらうになア、私があのフィールブラス 頑強しの意、中世の物語の中の巨人の名 の香油を一罎作る事を忘れさへせなんだらのう。あれがたつた一滴あれば時間も藥品も省けるからのう。』とドン・キホーテは言つた。

『そりやどう云ふ罎でどう云ふ香油でございますぞい？』とサンチョー・パンザが云つた。

『それは一種の香油ぢや、その處方箋は、私が諳記してをる。その香油があれば人間は死を怖れる必要がない。またどう云ふ負傷でも死ぬる氣遣ひはない。ぢやから私がその香油を拵へてお前に與へて置く時には、若し合戰で私の身體が眞中から二つに斬られるのをお前が見たところで何も騒ぐには及ばん。――そんな事はようありがちの事ぢやからの――只血が凝結らんうちに、綺麗に手際よう地上に落

ちとる方の身體をば、鞍の上に止つとる方の半分に當てがふのぢや。そいつが丁度にきつちりと塡るやうに氣を注けての。それからお前が、今私の云うた香油をほんの二滴私にくれて飮ませるのぢや。さうすると私は林檎よりも水々しく元氣になるのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『それが本當なら、そんなら私はあのお約束の島の支配權は願ひ下げにしまして、私がいろ〳〵骨身を惜しまず御奉公をします代りに、貴方樣がその稀代の妙藥の調合書さへ下さりますれば、外にはもう何にも望みはしませんがな。その藥なら何處でも一オンス二リール〔二十錢餘〕から上の價値があらうと思ひますからの、それさへあれば私が殘る一生を安樂に名譽に暮すに事は缺きませんよ。ぢやがその藥をこしらへるには大分かゝるかどうですか、それだけはお聞き申して置きたいもので。』とパンザが言つた。

『それは六クォート〔一升弱〕が三リール〔三十錢餘〕とは掛からずに出來ようわい。』とドン・キホーテは言つた。

『やれまア、とんだこつちや！　そんなら何で貴方樣はそれを拵へるなり、私に敎へて下さるなりするのを今迄打捨つときなさつたのですぞい。』とサンチョーは言つた。

『まア、靜かに。私はもつと大きな祕法をお前に敎へ、もつと大きな恩惠をお前に授けるつもりなのぢや。ぢやが差し當り繃帶をせうぢやないか、何しろ私の耳は思うたよりも痛むからの。』とドン・キホーテは言つた。

サンチョーは鞍囊から麻布と膏藥とを少し取り出した。けれどもドン・キホーテは自分の胄が碎かれてをるのを見ると、恰も失神したやうになつた。そして佩劍をかた〳〵と敲き天を睨んで言つた、『萬物の造り主と十分な長さの福音書とをかけて私は誓ふ。あのマンチュア大侯爵がその甥のボールドウィンの死を復讐せうと誓うた時にしたやうに（それは食卓について食事をせぬ事、妻を抱かぬ事、それからまた他のいろ〳〵の事ぢやつたが、それは今一寸私の記憶に出て來ぬから此處でそれを言うたことにしておくが）私はかほど迄の侮辱を私に加へた奴に對して、十分の復讐をするまでは、その通りにするつもりぢや。』

これを聞いて、サンチョーは彼に言つた、『ドン・キホーテ樣、これだけのことはお心に持つて居つて下さりませ、若しあの騎士が貴方樣に言ひ付けられた通りトボソのドゥルシネア樣にお目通りさへしてしまへば、あの男は貴方樣に言ひ付かつた事を殘らず濟ましたことになりますよ。さうすりやあの男がまた何か新規に無禮を働かぬ分には、もう

その上の罰を受けるわけはございませんぞ。』

『よう言うた、岡星を指したといふものぢや。それでは今の誓言の中の、(あの男に今一度復讐する)といふところは取り消すぞよ。ぢやが私が武力に依つて他の騎士からこの兜のやうな立派な兜を奪ひ取るまでは、私が今言うたやうにして行くと云ふ誓はまた改めて確りとし直すぞよ。しかしサンチョー、さうしたとて私が無鐵砲なことをするなどと思うてはならぬぞよ。これには眞似る手本があるのぢや。即ちこれと寸分違はぬ事がマムブリノオの兜の場合に起つたのぢや。その兜はサクリバンテにはなか〳〵大事のものであつたのぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『旦那樣、』とサンチョーは答へた、『さう云ふ誓言はあの世での救濟には大變害になり、本心を依怙地にするものでござりますから、いつそそんなものは皆な惡魔にやつてお了ひなされませ。それにまア、若し今後何日も兜を被た人に出逢はなんだら、私はどうするのでござりますぞい？　ええ？　どんな具合の惡いことや心持ちの惡いことがありましてもその誓ひは守らにやなりませんかい？　貴方樣が今蒔き直しをしようとしてござる、あのマンチャの侯爵といふ昔の馬鹿者の誓ひの中には、着のみ着のまゝ寢る事や、家の中で寢る事や、その他夥しい難行がござりますぞよ。まアよう見て御覽なされ、此處らの街道にはどこにも甲冑を着て旅をする人間は一人も居らないで、兜を被つた事は愚か、大方、生れてからそんな物のことは話にも聞いたことのないやうな、人夫や荷馬車屋ばかりでござりますぞよ。』

『そこはお前の間違ひぢや。何故といへば、私らはこの街へ出て二時間と經たぬうちに、あの美人アンゼリカを得る爲めに、アルブラカ城を攻めに行つたよりも多勢の甲武者に出逢ふのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『さうですかい、そんならさうとしませうわい。どうか神樣が上首尾を授けて下さるやうに、そして私には大事なあの島の手に入る事を早う來さして下さるやうに。さうなりや私は死んでも構はん。』とサンチョーは言つた。

『先程も言うて聞かせたやうにの、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『そのことは少しも心配せんがよい。何故といふに、若し一つの島が駄目になつても、デンマアクの王國もあれば、ソブラディサの王國もあるのぢや。それは、指環が指に合ふやうにお前に合ふであらう。その上この方

はしつかりした大地の上に在るのぢやから、お前にはますます以て好都合ぢや。ぢやが、それはそのことにして置かう。その鞍嚢の中に何か食べ物があるか見なさい。私らは直ぐさま城を捜しに行かねばならぬ。其處へ行つて今夜は泊つて、そしてお前に話したあの香油を拵へねばならぬ。實はまことにどうも、この耳が非常な痛みを私に與へるのでのう。』

『玉葱が一箇と乾酪が少々と麺麭の屑が少しとござります。けれどこれは貴方樣のやうな強いお侍樣に差し上げられるやうな食物ぢやございませんわい。』とサンチョは言つた。

『お前は、まるでその事を心得て居らんの。』とドン・キホーテは答へた、『サンチョー、お前に知つて置いて貰ひたいが、一月の間も食事をせずにゐるのが武者修行者の譽なのぢや。また食事をするにしても、手に入り次第の物ですべきものぢや。そしてこの事は、私のやうにお前が澤山の物語を讀んで居つたら、お前にも明らかに解つて居つたらうが。さてその物語といふのはなか〳〵澤山にあるが、その殘らずの中で、私の讀んだ物には武者修行者が食事をしたといふ事は、只不圖した場合か、何か贅澤を盡した晩餐に招かれた時か、又ぶら〳〵して日を過ごして居る時かの外には、少しも書いてはなかつたのぢや。尤も彼等も實際私らと同じ人間ぢやからには、食事をしたり、またその他いろいろの身體の機械を働かせずに居る事の出來なんだのは明白ぢやが、かう云ふ事もまた明白ぢや、即ち彼等は生涯の大方を、森や荒野を、料理人も伴れずに彷徨ひ通して來たのぢやから、大抵彼等の常食は、今お前が私にすゝめるやうな鄙びた食物であつたらう。そこでのうサンチョー、私の氣に入つとるものを、お前が餘計に氣をつかふには及ばんぞよ。また新機軸を出さうとしたり、武者修行の道を破らうとしたりせんでもよいぞよ。』

『御免なさりませ、旦那樣。私は今も言ひましたやうに讀みも書きも出來ませんので、騎士道の規則などは知りもせねば解りもしませんので。これからは、貴方樣は騎士さまでお出でなさりますから、いろ〳〵の乾果物を貴方樣の分としてこの鞍嚢の中へ蓄へて置きませう。また私はさういふ者ではござりませんから、この私の嚢の中へは家禽やその他もつと身につく物を用意して置きませう。』とサンチョーは言つた。

『おいサンチョー、私は何も、そのお前のいふ果物の外は何

一つ食ふなといふのが武者修行に對する絶對の命令ぢやといふのではないぞよ。只その人たちの重な常食はそんなやうな物でなけりやならんと言ふばかりぢや。それからあの人たちは野原にある藥草を見付けた。その藥草をあの人等も知つてをつたし、また私も知つて居るといふのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『さういふ藥草を知つとるのは結構なことでござりますよ。いつかはさういふ智慧を實地に働かせにやなるまいと思はれますでなア。』とサンチョーが答へた。

そこでサンチョーは自分が持つて來て居ると言うた物を取り出して、二人は睦まじく仲好く食事をした。併し夜の泊り場所を見付けねば心配なので、彼等は大急ぎでその貧しいまづい御馳走を濟まし、直ちに馬に乘つて、日の暮れない內にどこか人家のある處に行き着かうと急いだ。しかしとある山羊飼ひの小屋のあたりで、日の光も彼等の目的を達する望みも、共に彼等を見棄てゝ了つたので、其處で一夜を明かすことに決めた。そして人家に達しなかつたことは、サンチョーの頗る不滿足とする所であつたが、それだけまた、主人に取つては野天の下に眠ることが滿足であつた。蓋し彼は、こんな事が自分に起る度毎に、これこそ騎士稱號の所有權を行使することであつて、それは卽ち自分の騎士道を證明する助けになると思つたからである。

第十一章　山羊飼ひ等を相手にドン・キホーテの身に起つたこと。

ドン・キホーテは、山羊飼ひ等に手厚く迎へられた。そしてサンチョーはロシナンテと驢馬とを出來るだけ好く始末してから、火にかけた鍋の中に煮立つて居る鹽山羊の肉片から立つ香氣の方へ寄つて來た。そして彼は若しこの肉片が鍋から胃の腑に移されるといふことになつてゐたのであつたなら、立ちどころにさうしたかつたのである。山羊飼ひどもがそれを火から卸して、床の上に羊の毛皮を敷いて、粗末な食物を手早く並べ、そして心からの好意を現はして、この二人を共にその有り合せの御馳走に呼んだので、彼はさうすることを控へたのである。ぞんざいながら禮儀厚く、逆まに伏せた桶の上に先づドン・キホーテを坐るやうに强ひてすゝめて、羊の毛皮の周圍にはこの山羊欄に屬してゐる六人の男が座についた。ドン・キホーテは坐つた。そしてサンチョーは角で拵へた杯へ酌をするために立つてゐた。彼が立つてゐるのを見て主人は彼に言つた、

『サンチョー、武者修行といふものゝ中に含まれて居る利益が、また何なり武者修行たるの務めを果たす者はやがて速かに世間から名譽と尊敬とを受けようとして居るものであるといふ次第が、お前に合點の行くやうに、お前も此處に私の傍に、またこの立派な方々と御一緒に席に着くことを私は望む次第ぢや。またお前がお前の主人でもあり本來の主君でもある私と一つで、私の皿から食べ私の飲む器から飲むことを私は望む次第ぢや。何故といへば武者修行道にも戀の道と同じことが言はれるからぢや、卽ち「上下の隔てなし」ぢや。』

『まことに忝いことでござります。』とサンチョーは言つた、『けれども、旦那樣に申し上げますが、私は食べるだけの物さへありやア、立つて居つて一人でやりますのも、天子樣のお側に坐つて居るのも……いや一人の方が却つて結構でござります。それから全く、本當の所を申しますと、假令麵麭や玉葱でも、小面倒な行儀も作法もなしに手前の隅つこで食ふ物の方が、——そろ〳〵噛んで少し飲んで引つ切りなしに口を拭かねばならなんだり、その上したくても、嚔や咳をするわけに行かなんだり、氣まゝと獨りツぽちの得ぢやといはれるいろ〳〵の事をするわけには行かなんだりするやうな、他家の御馳走の席での七面鳥よりか、却つて私にはずつと餘計に旨味がござりますよ。それで旦那樣、貴方樣が、武者修行の召使ひなり附人なりとして(私は貴方樣の御家來でござりますから、それに違ひござりません)、その私に下さる筈のいろんな名譽は、それはもつと私の役に立つて利益になる他のものと取り代へて下さりませよ。それはもう、拜領したものと思うて十分お禮は申しますが、もう今日只今から末代まで願ひ下げにしますわい。』

『それはさうでもお前は坐らねばならぬぞ。何故ならば自らを卑しうする者は神これを高め給ふのぢや。』とドン・キホーテは言つた。そして彼の腕を取つて強ひて自分の側に坐らせた。山羊飼ひ共には家來とか武者修行とかに關するこの珍紛漢紛は解らなかつた。それでたゞ默つてこの客人等が非常に上品に旨さうに人間の拳ほども太い肉片を詰め込むのをぢつと見詰めてゐたのである。肉の食事は終つた。彼等は羊の皮の上に炒栗實を堆く擴げて、それの上に石臼で拵へてもかうはあるまいと思はれる程に堅い乾酪の半塊を置いた。この間中ずつと角の杯はぼんやりしてはゐなかつた。水車のバケツ(西班牙で灌漑に使用される機械で、水車の周りにバケツを幾つもつけてあつて、それによつて水を汲上げる仕掛になつてゐる)のやうに、滿たされたり乾されたりして間斷な

く廻つて、そこに見えてゐた二つの酒嚢の中の一つを間もなく汲み乾して了つた。ドン・キホーテは十分に食慾を滿たすと、塒實を片手に一杯摑んで、それをぢつと眺めて、次のやうな演說を初めた——

『幸福なる時代よ、幸福なる時勢よ！　その時代に對して古人は黃金といふ名を與へた。それはあの幸運な時代には今この鐵器時代に頗る欲しがられて居るところの黃金が勞なくして得られたからといふではない。たゞあの時代に住まうた人々が「私の」と「お前の」といふこの二つの言葉を知らなんだからのことぢや。あの祝福された時代に於いては、あらゆる物が共有ぢやつた。日々の糧を獲るにも何の勞働も要らなんだ、たゞ手を伸ばして甘く熟した實をつけて、鷹揚に人を誘ひつゝ立つて居る嶮な樹から糧を集めればよかつたのぢや。水澄める流れ潺湲たる小川は、香氣ある玲瓏の水を溢るゝばかり潤澤に與へた。忙しい賢い蜜蜂どもは、岩の罅裂や樹の洞に彼等の共和國を確立して、期限に限りなく、何人にもその馥郁たる働きの豐かな收穫を捧げたのぢや。堂々たる栓樹は他から强ひられたといふではなく、自分持ち前のしとやかさで、廣い輕い木皮を脫ぎ落して、第一に、丸太で支へられた家々の屋根葺く用を務めた。それは唯天候の烈しさに對する防禦ぢや。その時代は凡てが平和で凡てが親密で、凡てが和合ぢやつた。曲り犁の鈍い頭が、私らが最初の母大の豕かい腸を切つたり裂いたりはまだ敢てせなんだのぢや。その母はせがまいでも、その廣大な豐饒な胸の到る處から、その頃その母をわが物としてをつた子供等を滿足させ、養ひ、悦ばせる丈けのものを與へたのぢや。その時代には仇氣ない麗しい若い女の羊飼ひが、垂れ髮をして、着物といへば姉人のたしなみで今も昔も隱すべき所をたしなみ深く蔽ふに足るだけしか着けずに、谷から谷へ丘から丘へと彷徨うた。その身につける飾りも今日流行するものゝやうに、ダイアの紫とか種々樣樣の仕方で痛めて細工した絹とかで飾られはせずに、只酸模や常春藤の綠葉を編んだので、ある女たちはそんなものでも、無駄な物好きの心が敎へてくれた珍奇な舶來の細工物で着飾つてをる今の宮中の女官たちに負けぬほどに、立派に似つかはしう着飾つたのぢや。あの頃は、胸の中の戀の思ひは胸に宿つたそのまゝに、素朴な自然の衣をつけて、無理な遠まはしな無駄言で己れを薦めようとはせなんだのぢや。詐欺とか瞞着とか惡意とかは、あの頃にはまだ眞實や、誠實の中に混り込んではをらなんだ。正義はその足場

を確と保つて、恩を賣り利を喫はしても亂され犯されることはなかつた。その恩や利が今では頗る正義を傷け弱め惱ましをる。專斷な法律はまだ裁判官の心の中に立つてをらなんだ。何故といへば、その頃は裁判く理由も裁判かれる理由もなかつたからぢや。處女と貞德とは今も言うたやうに、意のまゝに獨りきりで供も連れずに出歩いても、狼藉や不埒な脅迫から辱められる氣遣ひはなかつたのぢや。そしてそれが守られなかつたといふならば、それはその番人たちの心と快樂との爲めからぢや。しかし今のこの厭はしい時代では、たとへあのクリートの迷宮のやうな迷宮が新に出來て、處女を隱して閉んで置いても、一人も安全ではないのぢや。さういふ處へでも、婦人に媚びるといふあの惡魔が、忌々しいしつこい熱心から、鍵穴を潛るか窓を飛ぶかして忍び込んで、あらゆる防禦に拘らず處女たちを破滅に導くことであらう。さて時代が進み邪惡が增したので、かういふことを防ぐ爲めに、處女を防衞し寡婦を保護し且つは孤兒窮民を救恤するところの武者修行の階級が設けられた。私はその階級に屬して居るのぢや。山羊飼ひの方々よ、私と私の家來とに與へられた御款待と御親切な歡迎とに對して、私はお前さん方にお禮を申しますぞ。但し天然自然の法則によつて、命ある者は凡て武者修行者に好意を示さねばならぬ筈ぢやが、しかし、その義務を知らぬながらにお前さん方が私を歡迎して御馳走をして下されたのを見れば、私の出來る限りの好意を以て、お前さん方のこの好意を謝するのが本當ぢやわい。』

この長談義（は省いて置いたら頗るよかつたのだが）をこの騎士が述べ立てたのは、人々が與へた賞が、彼に黃金時代を思ひ出させたからである。そしてふとした氣から、彼はこの不必要な議論を山羊飼ひどもにして聞かせたのである。その人達は呆氣に取られて口を開けたまゝ、一語も答へないで彼に耳傾けてゐた。サンチョーも同じやうに默つて橡實を食べてゐた。そして二番目の酒囊に頻りにお見舞ひ申したのである。その酒囊は酒を冷たくしておく爲めに、山羊飼ひどもが栓樹の上に懸けておいたのであつた。

ドン・キホーテは、晩飯をすませるよりも話の方に餘計手間取つた。食事が終つた時に一人の山羊飼ひは言つた。『私らが旦那を心から喜んでもてなしたといふことを、武者修行の旦那、お前さんが言はしやつても、全く本當ぢやといふ證據に、私らが仲間の一人の男に歌はせて、お慰みや御愛嬌にしませうわい。その男はやがて來ましよがな、え

らい利巧な若い衆で、戀に深入りをしとりますよ。おまけに彼奴は讀み書きが出來て、その上、胡弓（三絃の小型）彈きと來ちやうまいもんですよ。』

その山羊飼ひの言葉が終るか終らぬかに、胡弓の音が人人の耳に達した。そして間もなく彈人がやつて來た。それは二十二三位の中々男振りのよい若者であつた。その若者の仲間たちがもう夕飯はすんだのかと彼に訊くと、濟んだといふ返事であつたので、さき程その事を言ひ出した男が、彼にかう言つた。『それぢやアントニオよ、お前一寸歌うて聞かせてくれまいかの。そしたらこゝにござるお客人の旦那も、山の中や森の中にでも音樂者は居るもんぢやと言はしやるぢやらうによ。私らお前の藝ごとの上手な事を旦那に今話したところぢやから。お前がその上手なところを聞かせて、私らの言ふのが本當ぢやちふことを見せて貰ひたいのぢやよ。さア、本當によ、坐つて、あのお前の戀の唄な、あのお前の叔父さんの和尚さんが作つて呉れて、町でも大分はやつた、あの唄を歌うてくれよ。』

『よし來た。』と若者は言つた。そして最早やその上強請むのを待たないで、伐り倒した樫の幹に腰かけて、胡弓を鳴らしながら、直ぐとなだらかに優しく次の唄を歌ひ出した。

アントニオの唄

オラルラよ、お前が眞實私をば
思うて居るとは知つてゐる、
物言はぬ戀の舌、お前の眼こそついぞまだ
それとはもらとも言はねども。

お前が私の心をば、知つてゐると思へばこそ
お前の心を頼りもする。
互ひの胸を打ちあけて、かくさぬやうになつて見りや
何の叶はぬことがあろ。

オラルラよ、ほんの話が、或る時は
お前のつれなさは、眞鍮で
雪のよな、お前の胸は石ころぢやと
まざ〳〵と見せつけられたこともある。

それでもやつぱり、お前の內氣な含羞みと
移り氣な、お前のむら氣のその中に
希望がちら〳〵見えてゐる——せめてその

希望の衣の端だけは。

そのちら〳〵と見えるのが、眞實を引くおとりでも、
私の眞實ア變りやせぬ、
今さらの親切で、心が堅まる譯ぢやなし、
冷めたいからとて冷めもせぬ。

戀は優しいものならば
お前の優しさのその中に
お前をば、わが物にする望みへの
すがりどころがあらうもの。

一心不亂のその中に
心をば、動かす力があるならば、
お前に見せる毎日の、素振り仕向けがこの戀の
力になつてくれうもの。

幾度も、お前は氣付いてをる筈ぢや——
氣付かうとさへ思ふなら——
月曜日にも日曜の、晴着をすツかり着飾つて
私がそこらを歩くのを。

戀の眼は、晴れやかなのを見るが好き、
はでなみなりを戀は好く。
日曜も月曜も、私が心にかけるのは
晴着姿のわが風をお前に見られることばかり。

夜半から、鷄の鳴き出す夜明けまで、
お前を起こしておいたほど、
お前の氣に入つた踊りやら、
紘のしらべが何であろ。

また私が、お前ほど淸麗な人はありやせぬと
あけすけと、言うてのけたが何であろ。
それが事實ぢや、さりながら、私やその爲めに
今ぢや娘たちに憎まれて。

丘のわきのテレザ子は
私がお前を讃めたので、機嫌そこねてかう言うた、
「お前はな、天の使に、戀してござる氣なれども、

お前の思ふはお猿さん。」

「あのびか〳〵する玉かざりや
入れ毛で結うた髪の毛や、
戀の目さへも誑かす、見た目綺麗な
いかさまものに釣りこまれ。」

そりや虚言ぢや、それ故私はさう言うた。
するとテレザの從兄めが
それ聞いて、やにはに喰うてかゝつたよ。
それから後は知つての通りぢや。

私がお前を思ふのは、上べばかりの戀ぢやない、
世間の人のいふやうな
汚れた浮氣の沙汰ぢやない、
私のは眞實無垢な戀。

聖教會には御利益の紐がある、
この上もない柔らかな絹の靴の紐がある。
お前の頸をあの靴の下へ置いてたも、
私も續いて、さうしよう、眞實きつとさうしよう。

それが出來ねば——一生に一度の誓ひ
いとも名高き聖僧も照覽あれ
私がもしこの山を、出て行く時があるならば
墨ぞめの僧衣姿で行くであろ。

こゝでその山羊飼ひの唄は終りを告げた。そしてドン・キホーテは、もつと彼に歌つて吳れるやうに賴んだが、サンチョーは唄を聞かうよりか眠りたい方であつたので、もうそんな氣は少しもなかつた。そこで彼は主人に言つた、『貴方樣は、今晩お寢みになるつもりの場所へ早う落ち着きなさつたがえゝでござりましよ。この人たちは終日の草臥で、歌うて夜を明かすわけにア行きませんぞよ。』

『サンチョー、お前はさうぢやらうの。あの酒囊へ度々のお見舞ひぢやア、音樂よりか眠りのお禮を貰ひたがるも尤も千萬ぢや。』

『眠るのは誰れにでも心持のえゝものでござりますよ。ああ有難い〳〵。』とサンチョーは言つた。

『それをさうでないとは言はんのぢや。』と、ドン・キホー

テは答へた、『ぢやがお前は勝手のところに寢たがよい。私の本分は、眠るよりか寢ずの番をする方が似合はしいのぢや。しかしやはり、も一度私の耳を縛つて呉れゝばよいと思ふよ。こいつは入用のない程も餘計に痛みを呉れ居るので。』

サンチョーは命ぜられた通りにした。が一人の山羊飼ひはその傷口を見て、私が直ぐ癒えるやうな療治をして上げるから心配しなさるな、と言つた。そしてそこらに非常に澤山あつた迷迭香の葉を少し集めて、それを噛みこなして鹽を少し混ぜて、それを耳にあてがつて確かりと繃帶で結はへ、もう他の療治は要らないと請合つた。そしてそれはその通りになつた。

第十二章　ドン・キホーテと一緒にゐた山羊飼ひたちに一人の山羊飼ひが話したこと。

丁度その時、村から食糧品を運んで來た連中の內の一人の若者が、そこへやつて來て言つた。

『皆なの衆、お前さん等は村の出來事を知つとんなさるかい？』

『何で私らが知るもんで。』と一人の男が答へた。

『よし、そんなら話すがの、』その若者は續けた、『あのそら評判ものゝクリソストムちふ學者の羊飼ひが今朝死んだのぢや。そしてな、あの男はそらあの村の阿魔つ子、金持のギィレルモーの娘で、いつも、此處らの野や森を女羊飼ひの風をして歩きよる女サ、あの娘に惚れて死んだちふ噂ぢや。』

『ぢア、マルセラのことぢやな？』と一人が云つた。

『あの女のことサ、』とその山羊飼ひは答へた、『そして、おもしろいことにや、あの男は遺言の中へ、かう書いて居るさうぢや。死骸はムーア人のやうに野原の中へ、しかも、あの「栓の樹泉」のそばの岩の根つこへ、埋めてくれよとぢや。その譯は、人の話ぢやア（またあの男が自分でさう言うたさうぢやが、あの場所はあの男が娘を見染めたところぢやからといふことぢや。それからまだ別な言ひ置きもしとるちふことぢや。そいつは村の坊さん連の言ふにや、邪宗臭いから言ふ儘にしてやる譯にも行かんし、またしてもならんとサ。それに就いて、あの男と大の仲好しの學者のアンブロシオさね、あいつもあの男のやうにやつぱり羊飼ひの裝をしとつたが、あいつがなア何事もクリソストムの殘

した言ひ置き通りに少しも缺かさずせんならんと返事したさうぢや。この事で村中は大騷ぎサ。ぢやが結局アムブロシオやあれの友達の羊飼ひ等の望みの通りになるちふ噂でな。明日は、私が今いうた場所で大したお葬ひをやつてあの男を埋めるさうぢや。そりやきつと見物に違ひないよ。私は明日は村へ歸るわけにや行かんちふこたア分いとるにしたつて、それを見にだけア是非行くつもりぢやよ。』

『私らもさうせうよ。ぢや、誰れが殘つて皆んなの山羊を氣をつけにやならんか鬮を引かう。』と山羊飼ひどもは答へた。

『ペドローよ、お前よう言うた。尤もそんな手數をすることもないがな、私が皆なの爲めに留守するから。ぢやが別に私が義理堅いとか物好きの心がないのぢやとかは思ふなよ。たゞこなひだ足に立つたあの刺でよう歩かれんからぢやよ。』と一人が言つた。

『どつちにしても皆んなでお禮を言ふよ。』とペドローが答へた。

ドン・キホーテは、その死んだ人は如何なる人でまた女羊飼ひは如何なる人であるかをペドローに訊ねた。それに對してペドローはかう答へた、自分の知つてゐるところでは、この死んだ人は、この連山の中の或る村の金持ちの紳士で、以前には長年の間サラマンカで學問をしてゐたが、學問が終ると博學多識の評判を取つて、その村へ歸つて來た。『世間の噂ぢや、取りわけあの人はお星樣や、あの空を翔るものや、お日樣や、お月樣の學問に明るかつたさうですよ。何しろあの人はお日樣やお月樣の猪口ちふものをちやんと時を違へず言ひ當てたもんぢや。』

『お前さん、そりや猪口ぢやない、蝕と云ふのぢや。あの二つの天體が暗くなるのは。』とドン・キホーテが云つた。けれどペドローはそんな些細な事に頓着することなく自分の話を續けて、かう言つた、『またあの人はいつ豐作の年が來るとかクモの年が來るとかいふことを前から言ひあてたよ。』

『お前さん、そりや不毛のことぢやらう。』とドン・キホーテが言つた。

『不毛でもクモでもとゞの詰りは同なじこつちや。』とペドローは答へた、『そこでなア貴方さう云ふ事を教へるもんぢやから、それを信用したあの人の親父さんや友達衆は大した金持になつたのぢや。といふのは、あの人が、「今年は裸麥を播け、大麥ぢやいかん。今年は蚕豆は播いてもえい

が裸麥はいかん。來年は油の滿作ぢや、そしてこれから三年の間は一滴も收れまいぞ。」ちふやうなことを言ひつけると、皆でその指圖通りにしたからですよ。』

『その學問は占星學といふのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『私ア何んちふもんか知りませんが、とにかくあの人はこんな事やまだもつと外の事もよう知つとりましたよ。』とペドローは答へた。『所が、かいつまんで話すと、あの人はサラマンカから歸つてから幾月も經たん內に、或る日のこと、それまで着て居つた學者の長上衣を脫いでしまうて、飼ひ杖を持ち羊の皮を着て羊飼ひのやうな裝をして出て來たのぢや。するとそれと一緒に、あの人の大の仲好しのアムブロシオちふ男も、そりやあの人の勉強仲間ぢやつたのぢやが、やつぱり羊飼ひの裝をしたですよ。言ふのを忘れとつたが、あの死んだクリソストムは歌作りの名人でな、クリスマスの前の晩の讃へ歌や謝肉祭の狂言も拵へたくらゐぢやつた。その狂言は私らの村の若い衆が演たのぢやが、なか〳〵上出來ぢやといふ皆んなの評判ぢやつたよ。ところで村の人等は二人の學者さんが思ひもよらぬ羊飼ひの裝をして來たのを見ると魂消てしまうてな、どう云ふわけであの人らがそんな突拍子もない變りかたをするやうになつたものか推量がつかなんだですよ。丁度その頃あのクリソストムの親父さんが死んでな、土地はもとより澤山の動産と、ちつとの數でない牛馬や羊と、それから金もどつさり遺してくれたですよ。そこであの若い衆がその大した身代すつかりを、したい放題に出來る持主になつたのぢや。また全くあの人はそれだけの事があつてもえゝ人ぢやつた。そりや、あの人あ仲間になつてもなか〳〵おもしろい人で、心が優しうて、えらい人たちの友達で、それは〳〵慈け深い顏つきをしとりましたからな。それからあの人が身裝を變へたのは、別の考へからぢやなうて、つい、今しがたあの若い衆が話した、あの女羊飼ひのマルセラの後についてそこらの野原をほうつき廻りたいばつかりぢやといふことが、間もなく知れたですよ。その女にその死んだクリソストムは惚れとりましたのさ。そこで、いよ〳〵話さんならんが、一體この娘はどう云ふものか、そいつを貴方に話すのが順當ぢや、おほ方、いやおほ方など〳〵云ふにも及ぶまい、貴方はこんなやうな事はまこと聞くことアあるまいよ。貴方が拙癖（原文 Zafia（サルナ）琉球の意、その全治し難いから云ふので（挾びよりも永生きする）といふ句がある、それをドン・キホーテはアブラハムの妻サラと取り違へる、サラも長命だつた）よりも長生きしたところがサ。』

『サラだよ』とドン・キホーテは、この山羊飼ひの言葉を混用するのが辛抱しきれなくなつて言つた。

『疥癬は随分長生きしますぜ。ぢやが旦那、貴方が一つ一つ言葉のあげ足を取らずにア居られんとなると、今年の内にや果てませんぜ。』とペドローが答へた。

『いや、これは失禮ぢやが、疥癬とサラとの間には、中々の相違があるもんぢやで、私はそこを言うたのぢや。しかし、疥癬はサラよりも長生きするのぢや。お前さんの言ひ分はなか〳〵御尤もぢや。そこでお前さんの話を續けて下され、私はもう何事にも文句は申しますまい。』とドン・キホーテは言つた。

『それぢやお話しませう、旦那。』と山羊飼ひが言つた。

『私らの村にクリソストムの親父さんよりも、もつと金持の百姓が居りましたが、その名はギィレルモーと云うて、神様はその男にその大身代の上にかて、加へて、一人の娘を授けて下されたが、その娘の產でお袋は死にました。そりやこの近鄉で一番覩はれとつた女でがしたがな。私は今でもあの、お日様を片方にお月様を片方に持つたやうなあのお上さんの容貌が眼に見えるやうに思ひますよ。そしてその上まめ〳〵しうて、貧乏人に親切でさ。そのおかげで今ではあのお上さんの魂は、あの世で神様のお惠みを受けとることゝ信じますよ。あの人の亭主のギィレルモーは、さう云ふえゝ噂どんが死んだのを歎いて死んでしまふ。年の行かん金持ちの、娘のマルセラを、その叔父に後見を賴んでおいてさ。叔父ちふのア坊さんなんで、私らの村の和尚さんですがな。その娘が大きうなると、大した美貌ぢやつたお袋を思ひ出させる程の美貌になりましてな、それどころか娘の方が上になるぢやらうと思はれとりましたよ。そこであの娘が十四五の年頃になりますとな、その娘を見る者は、皆んな神様の惠んで下さつた美しさぢやと云はん者はない位で、大抵の者はまるで手のつけられん程に惚れましたよ。叔父さんはあの娘を大層大事にしてしまひ込んでおいたのぢやが、なんぼそんな事をしてもあの娘が大の容貌よしちふ評判は世間に擴がつてしまうて、容貌のよいのと財產があるのと兩方で、私らの村の者ばかりぢやない、この邊ずつと遠方の人間まで、その中の立派な人達が、あの娘を嫁にくれと云うてな、叔父さんは立派なキリスト信者ぢやから、あの娘ももう年頃でもあるし、自分ぢやおいそれと嫁入りさせたかつたのぢやが、あの娘の承知せんのをさうさせるのは好ましう思はなんだのぢや。そりや、あの

娘の嫁入を延ばしとく間に、あの娘の財産の後見役ちふもんで、自分の懐にはいる利得や儲を目當てにしたといふわけぢやないですよ。全くのこと、そこは村のいろ〳〵の仲間でも和尚さんを讃めたもんぢや。そりや、貴方に申し上げますがな、私らのやうな小さな村では何事によらず噂にのぼるし、何事によらず咎めだてされるでな。そこで正眞正味のところが、あの和尚さんは自分の檀家中の者に、それもかういふ村で好う言はせるやうにする人ぢやから、そりや餘程の善い人にちがひないですよ。』

『なるほどその通りぢや。がまア話を進めなさい。その話は中々おもしろい。さアこれ、ペドローさんや、どうぞお慈悲に話して下され。』とドン・キホーテは言つた。

『どうぞ私が主のお慈悲を受けられますやうに。それこそ大事なものぢや。』とペドローは言つた。

『さてそれから、まア、お聞きなされ。叔父さんは縁談を申し込んで來た大勢の人間の一人々々を姪御の前へ持ち出して、その人柄を細かに話して聞かせてサ、お嫁に行くことゝ、自分の好きな人を選り出すことを頼んだですよ。けれどもその娘は只もう、自分はまだ嫁に行きたうないこと、こんなに年が若うては夫婦になるといふやうな重荷を負ふことは出來さうに思はれんといふやうな返事しかついぞせなんだのぢや。こりや上べから見ると如何にも尤もな返事ぢやから、叔父さんも奨めるのを止めたですよ。そして、あの娘がもう些と年が行つて、自分の好きな人につれ添ふことの出來るまで待つことにしたのぢや。何故なら、あの人の言ふにや(そりや全く道理ぢやが)兩親が本人の意思に逆らうて、子供等の一生の事を極めるちふことはないといふのぢや。ところがどうぢや、まるで魂消てしまうたことにや、ある日のこと、あの内氣なマルセラが山羊飼ひの女の姿になつて出て來たですよ。そして叔父さんや他の村の人たちが止めさせようと骨折つたけれど、とう〳〵村の羊飼ひ娘等と一緒に野原へ出て、自分の羊群の世話を始めたですよ。そこであの娘が人中へ出て、あの美貌が大ビラに見られるやうになつてからといふものは、そりやもうどんなに大勢の金持の息子衆や旦那衆や百姓たちが、クリソストムのしたやうな風裝をして、こゝらの野良をほうつき廻つて、あの娘に戀をしかけたか、とても話しにやなりませんよ。今話した通り、あの死んだ男もその手合の一人ぢやが、世間の噂ぢやあの男はあの娘に惚れたんぢやない、ただ慕うて居つたまでぢやと申しますよ。ぢやがマルセラが

さう云ふ氣まゝ勝手な、また遠慮の少い……いやまるで無遠慮な暮し方をしたからちうて、あの娘が自分の清淨潔白な操を汚してしまふやうな油斷ちやとか、またそれらしいものでも見せたと思うてはいけませんぜ。それどころか、あの娘はそりや大變な用心をして、自分の名譽を守りましたので、ちやほや言ひ寄つた大勢の男の子も誰れ一人として、自分の望みを叶へる見込みがこれんばかりでも立つたというて、自慢する奴もなけりや、また本當に自慢の出來る奴もありやしませなんだ。但し、あの娘は山羊飼ひらと付き合うたりすることを避けたり嫌うたりもせず、丁寧に親切にもてなしますけれど、誰れなりあの娘に胸の中でも打ちあけようもんなら、たとへ正式の夫婦にならうといふ神聖な心であつたにしても、ちやうど弩でも彈くやうにあの娘から彈きとばされます。かういふ風な性質なもんで、あの娘はこの田舍に傳染病が入り込んだよりも餘計の害をしますのさ。それと云ふのは、あの娘の愛嬌や美貌はつきあふ者どもの心を惹きつけて、惚れたり口說かせたりしますけれど、あの娘のさげすみや手管のないところが皆んなをあきらめの崖際へつれて行くからですよ。それで奴らは只もうあの娘を、邪慳ぢやとか情知らずぢやとか、その他あの娘の氣性によくはまるやうなさういふ名前を喚きちらすよりどう言ふことも出來やしません。貴方さんがもう暫くこゝに御逗留なさつたら、この邊の岡も谷も、あの娘を追ひかけて彈かれた連中の歎く聲でわん〳〵鳴るのが聞かれませう。此處から遠くないところに高い樅が二三十本立つとる場所がありますがな、その樅には一本でも、つるつるした皮の上へマルセラの名前を彫り付けたり書いたりしてないのはありません。そしてその名前を書いた同じ樹の上の方へ、冠が一つ彫りつけてありますが、こいつはつきりと言うて見りや、あの娘が絶世の美人ぢやからその名譽の冠を被つてもよいといふ心を、あの娘の戀人が言はうとしたもんらしいのでござりますよ。こゝに一人の羊飼ひが吐息をついて居るかと思や、あすこにや別な奴が歎いて居る。あすこに戀歌が聞えるかと思や、こゝにや胸の割けるやうな悲しい歌が聞える。槲の根つこや岩の上に夜どほし坐り込んでゐて、そこで泣き通しの眼をまんじりともさせんで、お日樣があがつて朝になると氣を喪うたやうにぼかんとなる奴もある。さうかと思ふとまた、氣の安まることもなしに吐息の吐きづめで、むし暑い眞晝間のくわんくわん照る中に燒けた砂の上にへたばつて　お慈悲深い天道

様に愁訴する奴もある。そしてどれにもこれにも皆んなの者に、あの綺麗なマルセラは平氣で知らん顏して勝どきをあげて居る。それであの娘を知つとる私らは皆な、あの娘の高慢が今にどうなるもんか、あの凄い氣性をうまく手慣らしてあの絶世の美人を手に入れる果報ものには誰れがなるぢやらうといふことばつかり知りたがつて待つとりますのさ。今迄私が貴方さんにお話し申したことア、皆んな保險づきの本當でございますからな、あのクリソストムの死んだ原因も、今あの若い衆が話した通り、やつぱり本當ぢやと私は思ひますよ。それぢやから、なア旦那さん、明日はあの人の葬式にきつと行つて御覽じろ、クリソストムは澤山友達を持つとりましたから、そりやなか〳〵見物でござりませうよ。そしてあの人が葬つてくれと指圖して置いた場所は、此處から半里と離れちや居りません。』

『私はきつとさうしませう。また私はお前さんがこんな面白い話を聞かせて興を添へて下されたことを忝なく思ひます。』とドン・キホーテは言つた。

『私はあのマルセラの戀人たちの身に湧いた事柄の半分も知つて居りやせん。ぢやが大方明日はそれを知つとる羊飼ひどもに途中で出逢ふかも知れませんよ。ぢやアもうお前さん、夜露の降りん處へ行つて寢なさつたがようございませう。夜嵐に當たるとお前さんの傷口が痛むかも知れんからな。尤も私がして上げた療治でもう惡うなる心配などはないやうなものぢやが。』と山羊飼ひは言つた。

この山羊飼ひの長饒舌を忌々しく思つてゐたサンチョー・パンザは、彼も亦主人にペドローの小屋に入つて眠るやうに願つた。主人はさうした。そしてマルセラの戀人どもを眞似て、自分のドゥルシネアのことを考へながら、ぢつとその夜をすごしたのである。サンチョー・パンザは、ロシナンテと自分の驢馬との間に身體を置いて彈ねつけられた戀人のやうではなく、うんと蹴られた男のやうな樣子をして眠つた。

第十三章

では、女羊飼ひマルセラの物語が、他のいろ〳〵の出來事とともに終る。

しかし日が東方の雲欄を通して輝き初めぬうちに、六人の山羊飼ひの中の五人はやつて來て、ドン・キホーテを起し、そしてもし彼がやはりあの評判の高いクリソストムの葬式を見に行く氣でゐるならば、一緒につれて行かうと云

つた。ドン・キホーテは、この上もなく望んでゐたので、起き上つて、サンチョーに直ぐさま鞍や荷鞍をつけるやうにと命じた。サンチョーは大急ぎでさうした。そして皆々同じく大急ぎで出かけたのである。彼がまだ四里半も行かない内に二つの小路の出逢つたところで、黒い羊皮の着物を着て、頭には各々サイプレス（柏樹の一種）や夾竹桃の花環を戴いてゐる六人の羊飼ひが、こちらに向つて來るのを見た。彼等は銘々手に巖丈な柊の杖を持つてゐた。そして彼等につれ立つて身分のある二人の人が、見事な旅行服を着て馬に乘つて、三人の徒歩の下男を從へてやつて來た。出逢ひがしらに懇懃な挨拶が取り交はされた。そして互ひにどちらの道へ行くかと訊ねると、皆例の埋葬の式場へ行くところだと知れたので、みな〳〵一緒に進んで行つた。

馬の上の二人のうちの一人は、片方の人に話しかけて言つた、『ヴィヴァルドーさん、この評判の高い葬式を見る爲めに私達は時間をつぶしませうが、それ丈けの事はあらうと思ひますな。あの死んだ羊飼ひと男殺しの女羊飼ひとに就いてこの羊飼ひさんたちから聞いたあの珍らしい話から判斷して見ると、どうもこの葬式は變つてをるに違ひありませんからな。』

『私もやはりさう思ひますよ。そして私はそれを見る爲めなら、一日とは言はず四日でも暇潰しをしてよいと思ひますな。』とヴィヴァルドーが答へた。

ドン・キホーテは、その人たちがマルセラやクリソストムに就いてどんな事を聞いたのかを訊ねた。その旅人が答へるには、丁度今朝この羊飼ひ等に逢ふと、皆んな弔ひの服裝をしてゐるので、どういふわけでそんな姿をしてゐるかと訊ねた。すると一人の羊飼ひがそれに答へて、自分達が會葬しに行きつゝあるそのクリソストムの死に就いて話すと共に、マルセラといふ羊飼ひの奇妙な振舞ひや美貌や、それからこの女に言ひ寄つた大勢の男の戀の話をして聞かせたのであると。つまりこの旅人は、すでにペドローがドン・キホーテに話したことを殘らず繰り返したのであつた。

この會話はやんだ。そして他の會話が、ヴィヴァルドーと呼ばれた男によつて始められた。卽ち彼はドン・キホーテが、どういふ理由からこんな平和な國をそんな風に武裝して歩くやうになつたのかと訊ねたのである。これに對してドン・キホーテは答へた、『拂者の行ふ本職がこれ以外の風で歩くことをさせねば許しもしませぬのぢや。安樂な暮しや樂

しみや休息は、骨無しの殿上人の爲めに工夫せられたものぢや。しかし辛勞や不休や武器といふものは、世に謂ふ武者修行者ばかりの爲めに工夫せられ作られたもので、揃者も及ばずながら、その人々の中の端くれでござりますよ。』

彼等はこれを聞くや否や、ドン・キホーテを氣違ひだときめて了つた。そしてそれをもつと確かめ、且つはどういふ種類の氣違ひであるかを發見しようと、ヴィヴルドーは更に進んで、武者修行とは何のことであるかと訊ねた。

『まだ貴公がたはイギリス國の年代記や歷史類を讀まれんかな？』とドン・キホーテは答へた。

『あの中にはアーサー王（紀元六世紀頃のイギリスの王、華麗悲壯な傳說中の人として知られてゐる）の名高い事蹟が記錄してある。その王のことを私どもの一般のカスティリヤ語ではいつもアルツス王と呼んで居るのぢや。あの王に就いては古くから一つの傳說があつて、あの大ブリテン（イギリスの雅名）の王國中に普ねく廣く受け容れられてをる。その傳說といふのは、この王樣は死にはせいで、魔術によつて一羽の大鴉に變へられた。そして時が來れば歸つて來て國を治め、自分の王國と王笏とを取り戻すといふ事ぢや。さういふ理由からして、あの時以來今日に至るまで、荷もイギリス人たるものが大鴉を殺したといふ證明は出來ぬのぢや。さて、そこで、この結構な王祿の時代に、あの「圓卓の騎士」（アーサー王が妃ギネヴィアの嫁資として受けたる大圓卓、百五十人の騎士を坐に就かしめることが出來る。こゝではこれに因んで設けられたアーサー部下の騎士制度をいふ）と云ふ武士制度が定められた。そして語り傳へと寸分違はずあの湖のドン・ランスロット（圓卓の騎士の長も主たる一人で、湖上の女に育てられたりと云ふ傳說から湖のランスロットと通稱する）と女王ギネヴィアとの情事が起つたのぢや。その仲次役で取持の女は、あの誠に立派なクィンタニヨーナ（二人の間に仲次の女性のあつたことはイタリーで附加へられた話であるが、こゝではスペイン風の名前で、單に老女の意になる。イギリスの傳說にはこれ等のことはない）夫人ぢやつた。そこからして、わがスペインになか〳〵よく知られて廣くひろがつてをるあの唄が出たのぢや——

とても二人とありはせぬ、あれほどに
上﨟の手でちやほやされた侍は。
ランスロットの殿さまが、

ブリタニヤからござつた時のそのやうに。

それと共にあの人の戀や戰の事蹟の美しい面白い物語も出て來たのぢや。その時から傳へられて、この武士制度は世界の諸所方々に廣まり擴がつて來たのぢや。そしてその中で、自分の手柄の爲めに高名になり名を知られて居るのは、あの偉いゴールのアマディスとその殘らずの息子たち、及びその五代に至るまでの子孫どもぢや。それからあの勇

敢なヒルカニアのフェリックスマルテや褒めても褒め足らぬティランテ・エル・ブランコぢや。それから當代ではあの無敵の騎士、ギリシャのドン・ベリアニスは、私どもは大抵見たり聞いたり話しをしたりして知つて居るのぢや。そこで貴公がた、これが武者修行者といふもので、拙者が唯今話したのが武者修行の騎士制度ぢや。拙者は罪の深い者ではあれど、先程も言うた通り、その騎士道の職に從うてをるものぢや。そして先程名前を擧げた騎士どもが奉じたところは同じく拙者も奉じて居る。さればこそ拙者は冒險を捜し求めて、寂しい場所や荒野などを遍歷し、弱い者や貧しい者を助ける爲めに運命が拙者に命ずる最も危險な事にでも拙者の力と身を以て手向はうと、深く心に決して居るのぢや。』

旅人等はドン・キホーテのかういふ言葉によつて、彼が氣の違つてをる事や、彼を顚倒させてゐる其の狂氣の種類などを感づくことが出來たのである。實際それを知つて凡ての人が初めてそれを知つた時に感じたと同じやうな驚きを彼等もまた感じたのであつた。ヴィヴルドーは、中々拔け目のないまた賑やかな氣性の人であつたので、例の葬式の場所である山へ行く爲めだと彼等の言つてゐた、この短かい道のりの氣紛らしに、何かドン・キホーテの馬鹿げた話を續けさせる折を作つてやらうと思つた。それで彼はドン・キホーテに向つて言つた、『武者修行先生、貴方さんは世界で一番嚴しい職務をお選びなされたやうに思はれますな。あのシャルトルーズ派の修道僧（サン・ブルノーがフランスのシャルトローズに創設した派の僧）の職務でも、さうまでは嚴しいものぢやあるまいと思ひますなア。』

『あの宗派は恐らく嚴しいものではあらうけれど、』とドン・キホーテは言つた、『世間にさほど必要ぢやといふことは、拙者とうも頗る疑うて居る次第ぢや。といふわけは、眞實を言うて見れば、隊長の命令を行ふ兵卒は、その命令を下す隊長自身と敢て劣らぬことをして居るのぢや。といふ心はかうぢや——僧侶は穩かに靜かに、神に向うて世の福利を祈るのぢやが、拙者等武人なり騎士なるものは腕の力と刃の切先とで、而も屋根の下でなく青天井の下で、堪へ難い夏の日光や劈くやうな冬の霜の的となつて　あれ等が祈り求めるものを守護してこれを實現させるのぢや。かうして拙者等は地上に於ける神の使者で、またそこで神の正義を行ふところの腕なのぢや。それに戰の仕事並びにそれに關係しそれに附屬することどもは、凡て非常な大汗と

辛苦と骨折りとなくしては運用するわけには行かぬのぢやから、それぢやから、戰爭を職務とする者等は、弱い者をお助け下されませと靜穩な中で神樣に祈ることにかゝつて居る者等よりも、餘計に骨の折れるのは疑ひもないことぢや。拙者は武者修行の務めが庵室にをる坊さまの務めのやうなものぢやとは、言ふつもりもなければ、考へにも浮んで來ぬのぢや。拙者はたゞ拙者の自ら忍ぶところから推して、これが餘計に骨の折れるもの、餘計にひどい目にあふもの、餘計に饑ゑ餘計に咽喉の渴くもの、餘計に難澁で、餘計に見すぼらしい風をするし、餘計に虱のたかるものぢやと云ふことは疑ひないと言はうと思ふばかりなのぢや。昔の武者修行者たちがその生涯中大層難儀を忍んだといふことを疑ふ仔細はないからの。そしてもしあの人達の中に、その腕の力によつて、皇帝とまで立身した者があれば、それは實に夥しい血と汗を流した高價なものぢや。またさういふ高位に登つた者で、もし自分を助ける魔術使ひとか賢人とかを有つて居らなんだとすれば、その功名心は全く挫かれ、その望みは失はれてしまうたぢやらう。』

『私の考へもさうですな、』とその旅人は答へた、『しかしいろ〳〵の中で取り分け一つ武者修行のことで非常に悪いと思ふことがありますよ。それは他でもありません、あの人達が目に見えて自分の生命を落とす危險があるといふやうな、何か大變な危ない冒險にイザ打つからうとする場合があつても、あの人達はそれにイザ打つからうとする間際になつても、さういふ危險に臨んでは誰でも信心の篤いキリスト信者がせねばならんやうに自分を神樣にお任せしようとは決して思ひません。さうする代りにあの人達は、自分の愛して居る婦人がたに、まるでその婦人がたが神樣でもあるやうに眞心をこめて恭しく、自分の身を任せますな。それはどうも私には邪宗臭いやうに思はれますがな。』

『いやもし、』とドン・キホーテは答へた、『それはどんな事があつても止めるわけにはなりません。またさうせなんだら武者修行者は擯斥されますわい。何故といへば、武者修行者が方に晴れの太刀打に取りかゝらうとする時に、その前に自分の愛する婦人が居るならば、必ずその眼を婦人の方へ、これから取りかゝる危ない戰の間中、われに惠みを垂れ護りたまへと願ふやうに、やさしく、いとしらしく向けるべきものぢや。そしてたとひ誰れも聞いてをらずともロの中で何か言うて、眞心をさゝげてわが身をその婦人に任さにやならん。そしてかういふ先例は歷史の中に數へ切

れぬほどあるのぢや。ぢやがこれを以て直ぐさま、騎士たちが神にわが身を推撃することをせぬのぢやと思うてはならぬ。何故といへば、その試合をしてをる間に、神様に祈るゆとりも折もあらうからぢや。』

『さうは仰しやつても、私はやはりどうも何やら腑に落ちかねます。』とその旅人は答へた、『と申すのは、二人の武者修行の間に言葉が交されますな。そして一と言は一と言と段々両方で激して来て、二人は馬をぐる〳〵と乗り廻し、随分廣く野原を駈けまはりますな。さうなるともうその上餘計なことはせずに、両方から轡らに駈け寄つて撃ち合ひますな。そしてその撃ち合ひのさ中に自分等の御婦人にわが身を推撃いたしますな。そしてこの試合のお仕舞ひは、大抵片方が敵手の槍でづぶり〳〵衝き貫された馬の腰の上へおつこもて、またその敵手の方はといふと、自分の馬の鬣にしつかり縋りついてゐて、やつと大地へ投げ出されずにすむといふ始末ですよ。しかしその死んだ男は、そんなやうな早業の間に、自分を神様に推撃するやうな暇がどうしてあるか私には解りませんよ。その最中にわが身をその御婦人に推撃するために費す其言葉を、キリスト教徒としての義務本分のために獻げたらよささうなものですがな。それにまた、私は悉くの武者修行者に自分を推撃するための御婦人が有るといふわけでもなからうと思ひますがな。武者修行者の皆が皆戀してゐも居りませんからな。』

『そんなことはありません。』とドン・キホーテは言つた、『思ふ婦人を有たぬ武者修行者が、一人でも居るなどといふことはありやうのないことなのぢや。何故といふに、武者修行者に愛する人のあるといふことは、恰に星のあるのと同様に、自然な持ち前のことなのぢや。確實な所が、如何なる物語でも情事のない武者修行者の出て来る物語といふものはあるものでない。そしてその理由は簡單ぢや、情事がなうては正統の騎士でない、庶出のものと見られるのぢや。所謂騎士道の城塞へ、門口からでなくて、物取り夜盜のやうに壁を乗り越えて入り込んだ奴ぢやと見られるのぢや。』

『さうかも知れませんが、私の覺え違ひでなければ、私はいつか、あの勇壯なゴールのアマディスの兄弟のドン・ガラオルは、自分を推撃すべき特別の御婦人を一人も有つて居らなんだといふ事を讀んだやうに思ひますよ。それでもやはり、あの人は、尊敬もせらるれば、またなか〳〵剛壯な名高い騎士でござりましたなア。』とその旅人は言つた。

それに對してわがドン・キホーテは答へた、『もし、たつ

た一匹の燕では、夏にはなりませんぞ。それに又、拙者はあの騎士が人知れず中々深い戀をしたことを知つて居りますぞ。その上に、自分が好きと思うた人を悉く戀するものがあの人の生れつきの癖で、それを抑へることが出來なんだのぢや。ぢやが、とにかく、あの人にも自分の意中の人とするたつた一人の婦人が有つたのは至極明白ぢや。その婦人に對して、あの人はなか〳〵繁々とまたなか〳〵人知れず自分を推擧して居つたのぢや。といふのは、あの人は無口な騎士ぢやといふことを自慢にして居つたからぢや。』『では、どの武者修行も戀をして居るといふ事が是非肝要なことですなら、貴方様も、矢張りそのお仲間でゐられますからには、さうぢやと推量してもよろしい譯でございますな。』とその旅人は言つた。『そしてもし貴方樣があのドン・ガラオルのやうに無口ぢやといふことを御自慢になさらんなら、この道連れの皆なの衆と私の自分の名前にかけまして一生懸命にお願ひ申しますから、どうか貴方の御婦人のお名前とお國と御身分とそれからお美貌とをお聞かせ下さりませ。その御婦人は、見たところ貴方樣のやうなおえらい騎士に思はれ仕へられてござる事を世界中の者が知りましたならば、さぞ仕合せとお思ひなさりませうからな。』

かう言はれて、ドン・キホーテは深い溜息をついて、そして言つた。『拙者がその方に仕へてをるといふ事が世間に知れるのをば、拙者の美しい相手方が喜ばれるかどうか、拙者は確かには言へませんのぢや。たゞ、それ程鄭重にお聞き下さるところに對して、お答への出來るのは、その名前はドゥルシネア、その鄉國はラ・マンチャの一村、エル・トボソス、またその身分は、わが女王なり思ひ人ぢやから、まづ少くも姫宮の身分でなうてはならぬ。そしてその美貌は人間以上ぢや、といふのは、あの婦人には、詩人たちが銘銘の戀人に當てはめたやうな、とても世に無い程の空想らしい美貌の特徴が、悉く本物となつて備はつてをるからのことぢや。卽ちその髪は黄金でその額はエリジア（ギリシャ神話の、極樂淨土の野邊で、その眉は虹、その眼は日輪、その頬は薔薇、その脣は珊瑚、その齒は眞珠、その首すぢは雪花石膏、その胸は大理石、その手は象牙、その膚の白さは雪、そしてつゝましやかさの爲めに人の眼から隱して居る所は、それこそ道理を辨へる力では、たゞ歎賞することが出來るばかりで、とてものに準へ比べることは出來ぬやうなものぢやと、拙者は思うても居るし、想像しても居る次第ぢや。』『どうかそのお方の血統と種族とそれから御先祖とを承り

たいものですな。』とヴィヴァルドーが言つた。

それに對してドン・キホーテは答へた、『あの婦人は古ローマのクルティイ家からでもカィイ家からでもスキピヤ家から出たものでもなければ、また近世のコロンナ家やオルミス家或ひは又モンカダス家やカタロニアのレクセルネ家からでも、尚またレベルラ家やヴレンシアのヴィラノヴ家から出たものでもないのぢや。またパラフォキセ家、ヌザ家、ロカベルティ家、コレルラ家、ルナ家、アゴネ家、ウルレア家、フォセ家、もしくばアラゴンのグレレア家からでもない。レルダ家、マンリク家、メンドーザ家、またはカスティルのグズマン家からでもない。アレンカストロ家、パルラ家、もしくばポルテュガルのメネセ家からでもない。あの婦人はラ・マンチャのトボソ家から出たもので、その血統は、近世のではあるが、將に來るべき時代の最も名だたる家々の爲めに、由緒ある血統の源たるべきものぢや。そしてこの事は、あのゼルビノーが（アリオストーの作（オルランドー・フリオソ）の中に出るスコツトランドの君主オルランドー傳說、英雄ローランド、イタリーではオルランドーと通稱せらるローランドとその力を比ぶる者にあらざる限り、何人もこれを動かす勿れ」と書いたその條件によつての外は、誰れにも異議を申し込んで貰ひますまいぞ。』

『私はラレドー（スペインの港）のカチョピン家から出たものですがな。私はそれとそのラ・マンチャのトボソ家とを比べようなどと大それたことは致しません。尤も本當を言ひますと、そんな苗字は今まで私の耳にはいつたことはないですがな。』とその旅人は答へた。

『なに！　それが一度も耳にはいつたことがない？』とドン・キホーテは言つた。

その一行のうちの他の人々は非常に熱心に二人の會話に耳を傾けながら進んでゐたのである。そしてその山羊飼ひどもや羊飼ひどもさへも、ドン・キホーテが如何に甚しく正氣を外れてゐるかを認めた。サンチョー・パンザだけは、その人柄も知つてゐるし、またそれの生れた時から知つてゐるので、自分の主人の言ふことを眞だと思つた。そして彼が多少とも信ずるに困難を感じた事といへば、たゞその美しいトボソのドゥルシネアに關する事だけであつた。何故なれば、彼はトボソの極近くに住んでゐたけれども、さういふ名前も、またさういふ姫宮も、未だ曾て知るところがなかつたからである。さて彼等はかういふ風に話しながら進んで行つた。折しも二つの高い山の峽の小徑を、二十人ばかりの羊飼ひが、皆んな黒い羊の毛皮を着て、これは後で分

つたのだが、あるものは水松で、またあるものはサイプレスの樹で作つた花環を戴いて、降りて來るのを見た。その中の六人は非常にさま〴〵の花や小枝で蔽はれた棺を舁いでゐた。それを見とめて一人の山羊飼は言つた、『あすこへ來るのはクリソストムの死骸を舁いでをる人たちですよ。そしてあの山の根つこが、それ、あの人が死骸を埋めろと遺言した場所ですよ。』そこで一行はその場所に達しようと急いだ。そしてそこに着いた時は、もう向うの連中は棺を地べたへおろしてゐた。その中の四人は、鋭い鶴嘴で堅い岩の側に墓穴を掘つて居つた。兩方の人々は互ひに叮嚀に挨拶を交した。そしてそれから、ドン・キホーテとその連れの人々は、棺をよく見ようと近づいた。するとその中には、さま〴〵の花で飾られた、羊飼ひの着物を着た死骸があつた。それはどう見ても三十恰好の年輩で、死んでゐながらも、その生前には秀でた顏だちや勇ましく華やかな容貌の人であつたことを現はしてゐた。死骸のぐるりの棺の內側には、數册の書籍と、開かれたり卷かれたりした數種の書きものが横たはつてゐた。死骸を見てゐる人々も、墓穴を掘つてゐる者等も、またそこにゐたその他の者等も、皆んな異樣の沈默を守つてゐたが、とう〳〵棺を舁いで來たうちの一人が他の一人に話しかけた、『アムブロジオさん、お前さんは故人の遺言の中に言ひ置いた事は寸分違はぬやうに守らにやならんと辭酌してゐなさるによつて、此處がクリソストムさんの言うたその場所だかどうか、よう氣を附けて見なされよ。』

『此處がさうぢやよ、』とアムブロジオは答へた、『此處でな、私の可哀さうなこの友達は、幾度も自分の不仕合せの話をしてきかしたんぢやからな。あの人が私にした話ぢやと、あの人が、あの人間の怨敵めを初めて見たのは、此處ぢやつたさうですよ。そしてまた此處で初めてあの人は、あの一心を打ち込んだ、而も立派な自分の熱い思ひをあの女に打ち明けたのですよ。そしてとう〳〵マルセラがあの人に惡口を言うて彈ね付けて、あの人の氣の毒な一生の悲劇を大詰へ持つて來ることになつたのも此處ですよ。あの人はあれ程大きな不仕合せの記念の爲めに此處で未來永劫の忘却の臟腑の中へ葬られたいと思つたのですよ。』それからアムブロジオはドン・キホーテと旅人たちに向き直つて言ひ出した、『貴方がた、貴方がたが同情の眼を以て御覽になつてをるその死骸こそは、天がその富の莫大なる分け前を與へて下された英魂の宿り家でありました。その死骸こ

そは、あの才氣に於て當るものなく、禮讓に於て並ぶものなく、優雅な振舞ひに於て及ぶものなく、友情に於いては不死の鳥（不死の鳥は火に燒かれてもまた甦ると傳へられ、友情に深きことを言ったのであらう）の如く、寬大なること限りなく、莊重にして倨傲ならず、陽氣にして俗ならず、つまり一言にして言へば、善を組み立てる一切のものに於いては第一番、また不幸を作り上げる一切のものに於いても誰に對しても第二番と下らぬ人、そのクリソストムの死骸です。彼は深く愛したが、彼は憎まれました。彼は愛慕しましたが、彼は嘲られました。彼は野獸に求婚しました。彼は大理石に哀願しました。彼は風を追ひかけました。彼は荒野に向つて叫びました。彼は恩知らずに對して仕へました。そしてその報酬としては、人生の半ばに於いて死の餌食にされました。その命は、彼が人間の記憶に不朽ならしめようと求めたその一人の女羊飼ひの爲めに斷ち切られたのです。それはこゝに貴方がたが御覽なさるこれらの書きものが十分に證明する事が出來ませう。尤も彼は自分の死骸を大地に渡した後はこの書きものは火に渡すやうにと私に命じましたので、お見せ申す譯には行きませんが。』

『貴方はその書きものをその持主自身よりかもつと苛く邪慳に扱はれるがよろしいでせう。』とヴィヴルドーが言つた、

『何故といへば、全く道理外れの事を指圖する人の遺言を實行するのは正しいことでも適當なことでもありませんからな。たとひあのアウガスタス・シーザー（ローマ帝國最初の大皇帝）が、もしあの神聖なマンチャの人の遺言の中に遺した言ひ附けを、實行することを許したとしても、それは道理にかなはぬことといふべきでせう。そこで、アムブロジオさん、貴方はそのお友達の死骸は大地に歸されても、あの人の書き物を湮滅に歸せしめてはなりませんよ。それはな、若しあの人が心の痛みのあまりにその遺言をなさつたとすれば、貴方が不道理にもそれに從はれるといふ事は正しくありませんからな。さうせずに、この書きものに命を赦して、マルセラの邪慳さを末代までも生かして置いて、かういふ危險に陷ることを避けかはすやうにと、この後の世の中の、あらゆる男の戒めにしなさるが宜しいのぢや。實は私も、こゝへ一緒に來た人たちも、戀になやみ、斷腸の思ひをせられたこの貴方のお友達の話はとくに聞いて居りますし、また貴方の御友情や、このお方の死なれた原因や、その臨終になされた遺言なども承知して居りますのぢや。さういふいたましい物語からして、マルセラの邪慳さや、クリソストムの愛情や、また貴方の御友情の厚いことなどがどれ程非常な

ものでありましたか、それにつけては意馬心猿の目ざす徑を墓地に突き進む人々のなれの果てがどんなでありませうか、さういふことも思ひ浮べられますわい。昨夜、私どもはクリソストムどの〻死なれたことや、此處に埋葬されることを聞きました。そして物珍らしいやらお可哀さうやらで、順路を捨てゝこちらへ參つて、お話を聞いて非常に同情心を動かされましたその物を、直々に見ようといふ氣になつたのでござります。そこでその御同情と、もしお差支へござりませんなら、お悔みとを申し上げて現はしたいといふ私どもの願ひから、アムブロジオ樣に、私どものお願ひでござりますが、いや、少くとも、私だけは私として貴方にお願ひ申しますから、その書きものをお燒き捨てなさらずに、その中の幾枚かをいたゞいて行かしてくださりませ。』

そしてその羊飼ひの返事も待たないで、彼は手を伸ばして、自分の一番近くにあつた書きもの〻幾枚かを取り上げた。これを見てアムブロジオは言つた、『折角のお望みですから、まアお取りになつた丈けは貴方のお望みに任せませう。しかしその殘りを燒かないやうに止めようと思はれても無駄ですよ。』

ヴィヴルドーはその書きものに何が書いてあるか見たくて堪らなかつたので、直ぐ樣、その一つを開けた。

そしてその表題が、絶望の歌』とあるのを見た。

アムブロジオはそれを聞いて言つた、『それはこの不仕合せな人の書いた最後の書きものです。この人が不仕合せの爲めにどんなにまでなつて居つたかゞお分りになりませうから、皆さんに聞えるやうに讀んで下さい。私等が墓穴の掘りあがるのを待つてをる間に、十分それを讀む暇はありますから。』

『喜んでさう致しませう、』とヴィヴルドーは言つた。そしてそこに立つてゐた人々は皆等しく聞きたがつてゐたので彼の周圍に集まつた。そして彼は高聲でそれを讀んで、次のやうに書かれてあるのを知つたのである。

第十四章

の中には羊飼ひの「絶望の歌」及びその他の待ち設けざる出來事が挿入してある。

クリソストムの歌

汝が暴虐の無慈悲なる嚴しさを
國語より國語へ異邦より異邦へ傳へよと

無慈悲にもおん身の願ふが故に
われは眞その「地獄」に強ひ迫つて
傷められしわがこの胸に深き歎きの調べを貸さしめ
似合はしき節もて思ひを漏らすに役立つるぞや。
ありとある我が苦みと汝がしわざの物語を
まざ〳〵と描き出でんと努むるなれば
物凄き聲音は轉び出で、寸斷せるわが九腸よりは
裂片吐き出だされて、いやまさる苦みを受けん。
さらばいざ耳傾けよ、美音にとはいはず、
狂ほしき絶望に絞り出だされし
この胸の苦き奥底よりの騷音に、
わが胸を休め、汝が胸に刺を植ゑんがために。

獅子の吼えごゑ、悍き狼の暴き唸き、
鱗だつ蛇のおそろしき叱々の鳴き聲も、
名も知らぬ妖怪の物凄き叫びも、
凶兆を呼ぶ鳥の聲も、息みなき海と
犇めき闘ふ嵐の容鳴りも、
打ち仆されたる牡牛の怒れる咆え聲も、
寡婦となれる雌鳩のいたはしき啜り泣きも、
嫉まれたる梟（梟はキリスト十字架にかけられるところを見た唯一の鳥だといふことから滑鳥の嫉妬の的となり、日中は姿を見せることが出來ないやうになつたと傳へられる）の悲しき歌も、
地獄の物凄き合唱より來たる悲哀の慟哭も
たゞ一音に轟々と打ちまじり
悉くわが魂の歎きを來たり助けよ、
わが苦みの如きは新しき律の歌を求むるが故に。

「父なるタナホス」（スペイン半島中最長の河）の浪うつところにも、
橄欖立ちしげるベティス（スペイン南方の河）の岸べにも
その騷音の餘響は聞えざらん。
わが歎きは嚴に向ひ、或は深き洞の中に
命なき舌により命ある言葉もて傳へられん。
また人跡も日光も絶えて音づれぬ
眞暗き谷々に、淋しき濱べに、
或ひはまた緩々たるナイルの流れに養はるゝ
毒吹く怪獸の群の間にこそ。
たとひそは人跡遠き荒寥の地なりとも
わが悲しみのすがれたる覺束なき反響は
比類なき汝が無情冷酷を傳へ
わが暗き運命はその反響を世界の廣きにまでも送るべ

ければ。

さげすみには殺す力あり、忍耐もまた
疑惑に殺されて死す、その眞僞は何れにもあれ。
また嫉妬の力はおそろし。
久しく逢はざればこの世はわびしき空虚となる。
常に忘らるゝことを恐るゝ者には
いかなる幸の望みも安らひを與へがたし。
かくて死は避けんすべなく、一切の物の中に待てり。
されどわれは、不思議なる奇蹟によりて
逢ひがたき嫉妬と侮蔑との餌食となりつゝながらふ、
疑ふ餘地なきに苦む如く、疑念にも呵責まれつゝ、
忘られ棄てられて、わが胸の炎を焦がすにまかせて。
かくわれは惱みてあれど、その鬱憂を貫きて
われを喜ばしむべき希望の線光だに來ず。
われもまた絶望してそを待ち設けず。
却つて癒ゆるなき悲しみに縋りつゝ
あらゆる希望をば永久にふり棄つるなり。

怖れあるところに希望のあり得べしや？

怖れの礎いや堅き時、希望全からんや？
われは眼を嫉妬に向ひて閉づべきか
よしやそが百千の心の痛手より現はるゝとも。
さげすみはその覆面を除り——、つれなき變化なるかな！——
あらゆる疑念は確かとなり
うるはしき眞理は僞りと面變りするを見て、
誰れかあくまでも不信を叫ばざらん？
あゝ、汝、戀の領土の烈しき暴君よ、
あゝ、「嫉妬」よ——この兩手に鎖をかけよ、
「さげすみ」よ、汝がいと強き繩もて我を縛しめよ。
さはれ、悲しきかなあらゆるものに打ち勝ちて、
わが苦みぞ汝が思ひ出を溺らすなる。
かくして我は今ぞ逝く、さればよ、生死何れにも
わが爲めの幸の希望はたえてなきを、
尚ほ我は自らわが妄想に恥りすがらん。
われは言はん、よく愛する者は賢し、
いと自由なる魂とは、昔ながらの虐げの戀柳に
いと固く囚はるゝ者にこそあれと。
我は言はん、わが仇にしあるかの處女は

麗はしきその身の中に、劣らぬ麗はしき心を宿せり、
彼女の情なさはわが咎に外ならず、
戀人が送る痛みの德により、戀こそは
やさしき權力もてその領土を治めんと。
かくも、自ら慰めつ、病きづなの下にありて、
彼女がさげすみの爲めに壓しすくめられにし、
淺ましき生命の碎片を擦り耗らしつゝ、
わが魂とわが身とを吹く風にわれは與へん、
やがて天禍の冠を得ん望みも凡て絶え果てゝ。

汝がつれなさこそ我をして、我が厭ふものうき世を
去らしむる原因とはなりつれ、
この傷ける胸によりても汝は知らん
われいかにすゝみて汝が犧牲となりしかを、
たとひ一つゆの涙には償すとも、わが死をして
汝が晴れやかなる眼に宿る青空をな曇らせそ。
わが心を汝が餌食となしたる罪の償ひは
何一つ汝にもとめはすまじ。
いな寧ろ汝が笑ひの華やかに鳴りひゞきて
わが死は汝の饗宴なりと知らしめよ。

汝にかく言ふ我が愚かさよ！
われは知れり、わが時ならぬ死の汝が光を增さん事を。
あゝ早や時は來ぬ、奈落の底ひより
渦けるタンタルス（ギリシャ神話に出るリデア王、不行跡の罪により、渇きの刑に處せらる）
またシジフス（同上に出る盜賊、山上へ大石を轉ばし上ぐべき刑に處せらる、石は永久に身におちかゝる）も無
慈悲の石を押しあげて來よ、
ティティウス（巨大なる怪物）も兀鷹とともに來よ、
また火車もてイキシオン（無限に回轉する車輪に縛り付けらるゝ）も來よ。
來たれ、小止みなき勞苦の姉妹（同上に出る、人間の運命を司る）も、
皆な來りてこの胸におの〳〵の惱みをうつせ、
かくて（かゝる手向が絶望にさゝぐべきものならば）
そのいと深き調べもてその悲しき弔ひの歌を
壽衣をも纏ふにおよばぬ死骸の上に唱へよかし。
三つの頭の門衞（ギリシャ神話地獄の門衞）をして、また
地獄のあらゆる奇怪なる子等をして
その物悲しき合唱に加はらしめよ。
死ぬる戀人にこれよりふさはしき葬ひはあるべしとも
思はれず。
絶望の歌よ、おん身この悲しめる胸より

出でたる上は歎きそよ。わが禍は
汝を生むべき源に幸をもたらせり。

されば墓穴の中にてさへ悲しみを逐ひ去れかし。

この「クリソストムの歌」は聽く人々の喝采を博したのである。尤もその朗讀者は、クリソストムがその歌の中で、嫉妬や邪推や妾を見せぬことやを懲へてゐるけれども、それは皆マルセラの美名と名聲とに僻見を持つてゐる爲めであつて、これは、自分が噂に聞いたマルセラの控へ目なのや禮儀正しいところと一致しないやうに思はれると言つた。これに對してアムブロジオは、その亡友の最も祕密な考へをよく知つてゐる者として答へた、『貴方、そのお疑ひを霽らす爲めに申しますがな、この歌を書いた時には、この不仕合せな男はマルセラから離れて居りましたのですよ。離れて居る事が世間の習ひのやうに效果があるかどうか試めさうとてわざとあの婦人から身を遠ざけてをつたのですよ。すると、この見棄てられた戀男には、あらゆる物事が氣を滅入らせ、あらゆる氣苦勞がつけ廻はすといふわけで、その思ひなしからの嫉妬や邪推がまるで本當のことのやうに怖ろしがられて、ひどくクリソストムを惱めました。さういふ譯ですから世間が噂するマルセラの婦德といふものは、そのまゝで搖ぎはしません。そして猜みの眼で見たとて、あの婦人には情ないことゝ、稍氣位の高いことゝ、非常に人を蔑しむことゝの外には、何の疵も見つけ出すわけにはゆくまいし、また見つけ出すことも出來ませんよ。』

『そりや全くです。』とヴィヴルドーは言つた。そして彼が火に入れないで殘して置いた今一つの書きものを讀まうとした時に、不思議な幻が(と見えたのだが)不意に人々の眼の前に現はれて來たので、彼は讀むことを止めたのである。卽ち彼等が墓穴を掘りかけてゐた岩の頂上に、美しさは噂にまさるほど美しく、羊飼ひ女のマルセラが現はれたのである。今まで一度も彼女を見たことのない人々は、驚いて言葉もなく、彼女を見詰めた。そして、彼女をよく見慣れてゐた人々も、前に一度も見たことのない人々に劣らず驚かされたのである。しかしアムブロジオは彼女を見るや否や、憤怒を面に現はして言葉をかけた、『この山の無情冷酷な怪物め、お前の無情のおかげで生命を取られたこの哀れな者の傷口から若しやお前の眼の前で血汐が流れ出はすまいかと、それを見ようとてやつて來たのか。又はお前の無情冷酷な仕業を見て喜び騷がうとてやつて來たのか。又は無慈悲な第二のネロ(ローマ末期の暴君)のやうに、そこの高みから、

灰になつたこのお前のローマの廢墟を見下さうとてか、又お前の高慢ちきなところから、あの不孝な娘が自分の父親タルクインの死骸を踏みつけたやうに、この不運な死骸を踏みつけようとてやつて來たのか？　何をしに來たのか、又何をして貰ひたいのか、さつさと言へ。クリソストムの心が生前一度もお前の言ふなりにならなんだことのなかつたことは私が承知して居るから、あの男は死んでゐても、あの男の友だちぢやと云うて居なさるこの人たち皆さんに、お前の言ふなりになつて貰うてやらうわい。』『わたしはお前の言ふやうな、そんなつもりで來はしません。』とマルセラは答へた、『たゞ、わたしの身を庇ふ爲めに、また御自分らの悲しみやクリソストムの死んだのを、わたしの咎になさる皆さんがどれほど無理かといふことの證明を立てに來ましたよ。それ故こゝにござる皆さんにより聞いて下さるやうに願ひます。物の分つた人さんに眞を納得させるのは、手間もかゝらねば言葉數もいりません。神樣はわたしを皆さんの仰しやるところでは美しうなさいました。そしてその爲めに貴方がたのお意からであらうとなからうと、わたしの美しさが貴方がたにわたしを愛させるやうにさせました。そして貴方がたがわたしに見せなさる愛の報いに、わたしは貴方がたを愛せねばならぬのぢやと、貴方がたは言ひもしなされば、せがみもなさいます。わたしは神樣が下されたもち前の分別で、すべて美しいものは愛情を惹くといふことは知つて居ります。けれど、愛されたからと言うて、自分の美しい爲めに愛された者が、自分を愛したその者を愛さねばならぬといふ譯は解りません。それに又美しい者を愛する人が醜いといふやうな事もありませう。そして醜いのはいやらしいもの故、『お前さんは美しいから私が愛する。私は醜くともお前さんは私を愛さねばならぬ』といふのは非常に分らぬ話です。けれど兩方とも同じ位の美しさとしましたところで、それだけから兩方の好みが同じでなければならぬとは言はれません。何故と申しますと、美しくさへあれば誰でも愛情をおこさせるわけのものではござりません。中にはたゞ眼を喜ばせるだけで愛情を動かさぬものもあるのです。若しどんな種類の美しさでも愛情を起させて心を囚へるものであつたら、本心はどれを選んでよいか分らずに、あちこちとぼんやり迷ひ歩きませう。美しい物が數限りなくあるやうに人の好みも數限りなくなければなりません。そして本當の愛といふものは幾人にも分けたりは出來ぬものと聞いて居ります。それ故自分

の心からのもので、強ひるわけには行かんものでせう。もしわたしの信ずる通りに、これがさういふものとしたら、何で貴方がたは、わたしを愛すると仰しやるより外に何の理由もないのに、無理にわたしの本心を曲げようとお思ひなされますか？　いゝえ――それでは――神様がわたしを美しうなされたやうに、もし神様がわたしを醜くお作りなされたら、貴方がたがわたしを愛して下さらぬと云うて、わたしは愚痴をこぼしてもよろしいでせうか！　それにまた、わたしの有つてゐます美しさは、わたしが自分で選んだものではないといふことを、覚えて居つて下さいませ。どんなものにもせよ、わたしが願ひもせねば選り好みもせぬのに神様のお慈から、この美しさを下されたのです。あの蝮だとて、毒で人を殺したりはしますけれど、その毒は自然から授かつたものですから、毒を有つて居るからとて責めるには當りません。それと同じく、わたしも美しいからとて悪く言はれる筈はありません。たしなみある婦人の美しさは遠くにある火か、または鋭い刃のやうなものでございます。餘り近くへ来ない人たちを焼きもせねば切りもしません。名譽と徳とは心の飾で、それなくば、身體はたとひ美しうても、美しいとして通用する權利を持ちません。けれど若しつゝましやかといふものが、心にも身體にも殊更ら床しさや風情を添へる婦徳の一つでありますなら、美しさの爲めに愛せられる婦人は、ほんの自分の快樂の爲めばかりにその徳を失はせようと精根の限りを盡して骨折る男を滿足させる爲めに、何でそれと別れてしまはねばならぬのでせう？　わたしは伸び〳〵と生れました。そして伸び〳〵と暮したいために野原の寂しさを選びました。山々の木々はわたしのお友だちで、小川の澄んだ水はわたしの鏡です。そしてわたしは木や水にわたしの思ひや風情を知らせます。わたしは遠くに離れた火、脇へ置かれた刃ですよ。わたしは自分の姿を見せる爲めに、戀の心を燃やさせた人たちをば、言葉で瞞しはしませんでした。そしてその人たちの片思ひがもしやの希望につながれてをるならば、――そしてわたしはクリソストムにも他の誰れにも希望なんぞは與へはしませなんだ――誰れが死んだとてわたしのわざぢやと言はれる筈はありません。何故と申せば、あの人を殺したのはわたしの不人情といふよりもあの人の強情一途のせゐなのです。またクリソストムの願ひは立派なものであつたといふ事や、それ故わたしはその願には從はねばならぬのぢやといふ事が、わたしへの一つの

咎めにされるなら、わたしはお答へ申します。――丁度今あの人の墓の作られて居るこの場所で、あの人がわたしに御自分の志の潔白を明しなされた時に、わたしの志はいつまでも獨りで暮らすつもりといふことも、またこの大地ばかりがわたしの獨り暮しの果實と、わたしの美しさの獲物とを享け樂しむことであらうといふことも、あの人に告げました。この打ちあけた明言を聞きながら、若しあの人が自ら好んで望みのないところに執念し、逆風に舵を進めたのなら、自分から痴情の淵瀬に沈まれることゝなるに何の不思議がありませう？　萬一わたしがあの人をそゝのかしたとすれば、わたしは嘘つきといふことになりませう。もしわたしがあの人を喜ばせたとすれば、わたしは自分の本當の決心や志に背いたことをしたことになりませう。あの人は戒めを聽き入れずに意地を張りました。憎まれては居らぬのに絶望しました。サア皆さん考へて御覽なさい、あの人の苦しみをわたしの科にするといふことは、これでも道理あることでせうか。瞞された人なら愚痴も申しませう。わたしが希望をそゝのかして置いて、それが無駄になつた人なら絶望もしませう。わたしが惑はす人なら自惚れもするでせう。わたしが受け入れる人ならば自慢もしませう。けれどわたしが、何の約束もせず、何一つ瞞しもせず、また惑はしも受け入れもせぬ人が、わたしを薄情ものゝ人殺しのとはいはれますまい。わたしが否でも應でも愛さねばならぬといふことまでも、神樣の御意にはありません。それにわたしのすき好みで戀をさせようと望むのは無駄なことです。あの世間で言ひ觸らすことは、わたしを求められる方々の銘々御自分のために使うて下さい。そして只今からは、わたしの爲めに誰が死なれようと、それは嫉妬や不幸の爲めに死ぬるのではないと思うて頂きませう。何故なれば、誰をも愛せぬ女は誰にも嫉妬を起させることは出來ません。そして包み隱しのないのと蔑みとは、ごつちやにはなりません。わたしを野獸とか怪物とか呼ぶ人は、どうかわたしを害をする惡い者として打ちやつて置いて頂きませう。わたしを恩知らずといふ人は、わたしにいろ〳〵して下さるのを見合せて頂きませう。わたしを我儘といふ人は、わたしと近づきにならうとなさるな。わたしを不人情といふ人は、わたしを追ひかけ廻さないで貰ひませう。一體この野獸は、この怪物は、この恩知らずの無情な我儘な女は、そんな人たちを捜し廻つたり、お世話をして上げたり、知り合うたり、お伴をしたりしたいなどとは、露程も思

うては居りませんから。もしクリソストムが自分の短氣や取り逆上せた心から身を殺したのであるならば、何でわたしの控へ目な振舞や愼み深いのを咎められることがありませう？　もしわたしが木立を仲間として自分の清淨を失はずに居るならば、その清淨を人間の間でも失はせずに置かうと思ふ人が、何でそれをわたしから奪ひ取らうとするのでせう？　御承知の通り、わたしは自分の財産を有つて居ります。そして他人のものを欲しがりはしません。わたしの好きなのは自由です、強ひられることは少しも好みません。わたしは誰をも愛しも憎みもしません。わたしは一人の人を瞞すこともせねば、又別の人に取り入ることもしません。また一方を馬鹿にしたり一方を弄んだりもしません。こゝらの村々の娘の羊飼ひたちと、愼ましやかに話をするのや、自分の山羊の世話をするのがわたしの樂みでございます。わたしの願ひはこの山々で限られて居ります。そしてもしその願ひが山を越えてさまよふことがありますなら、それは空の美しさに見惚れるためでございます。それによつて魂がその原始の住みかへ通ふのです。』

かう言ひ終つて、一言の答へも待たずに、彼女は向うを向いて、直ぐ近くの最も深い繁みの中へ入つて行つた。そこに居合せた人々は、皆彼女の美しさにも劣らず分別のあることに感心してぼんやりしたまゝでゐたのである。中には——彼女の晴れやかな眼から射出された敵し難い矢の爲めに傷ついた人々は——自分等が今聞いた包み飾りのない言明にも頓着なく、彼女の後から跟いて行かうと思ふらしい樣子であつた。それを見て、またこれこそ惱み苦しめる處女等を救ふ爲めに我が武士道を應用するにふさはしい機會だと考へて、ドン・キホーテは、劍の柄に手を掛けながら高いはつきりした聲で叫んだ——

『如何なる身分門地の人であらうとも、敢て一人たりともあの美しきマルセラの後をつけてはなりませぬ。もしさうすれば拙者の激怒に觸れませうぞ。あの婦人は明白な十分な議論によつて、クリソストムの死に就いては些かも、いや全く自分に科のないことを、また如何なる戀人の願ひにも、とても從ふどころではないといふことを示されたのぢや。さういふ次第故、あの婦人は、後をつけられたり責め苦しめられたりはせずに、却つて世界の凡ての善良な人々から、尊ばれ重んぜられるのが正當ぢや。何故といへば、あの婦人こそあのやうな道德堅固な志を滿へぬ世界にたつた一人の婦人ぢやといふことを示して居るからぢや。』

ドン・キホーテのこの威嚇の爲めか、それともアムブロジオが皆の人々に、亡友への務めを果すようにと話した爲めか、その羊飼ひ等は一人としてその場所から動きも立ち上りもしなかつた。やがて彼等は墓穴を仕上げ、クリソストムの書きものを焼いてしまつて、死骸をその中に納めた。側に立つてゐる人々は少からず涙を流した。彼等は石碑が出來上るまでと一つの重い石でその墓を塞いだ。その石碑はアントニオが大體次のやうな意味の碑銘をつけて拵へるつもりだと自ら言つた——

諸君の眼前なる石の下には
一人の戀人の骸よこたはれり。
生前は彼羊飼ひの若者たり、
死しては侮蔑の犠牲となりぬ。
彼を絶望に沈めし女は
恩知らず、無情、婀娜にして麗しかりき。
さて「戀」はその女を己が味方とし
以て己が暴虐を廣く布きぬ。

一同は墓の上に花や小枝を澤山撒き散らした。そして皆んな故人の親友たるアムブロジオに弔詞を述べて、別れを告げた。ヴィヴルドーとその伴れの人も同じやうにした。

ドン・キホーテもその亭主役の人達と二人の旅人とに別れを告げた。その二人の旅人はドン・キホーテにセヴィル（スペインの都會）へ一緒に來ないか、その地まではどの通りにもどの隅にも、他の何處でよりも度々冒險的なことが起つて來るので、そんな事を見つけるには、至極便利な土地であるからと勸めたのである。ドン・キホーテは彼等の忠告や、自分に好意を示して呉れた志を謝した。そして、話に聞けばそこらの山中には追剝強盜が蔓つて居るといふから、それを悉く平げるまでは、さし當りセヴィルへは行かうとも思はず、また行つてはならぬと言つた。彼の折角の意向を見て、旅人等はその上尚も彼を强ひる事は好まなかつた。そこで今一度別れを告げて、彼等はドン・キホーテに別れ、自分等の旅をつゞけた。その旅の道すがら彼等はドン・キホーテの狂氣とともにマルセラとクリソストムの話を論じあはずには指かなかつたのである。ドン・キホーテの方ではまた、女羊飼ひのマルセラを捜しに行つて、自分が彼女に盡せるだけの盡力を申し出ようと決心した。しかしながらこの忠實なる物語の進み行く中に說かれてゐるところに從へば、物事は彼が待ち設けた通りには來なかつたのである。この物語の第二篇は此處で終る。

第三篇

第十五章

酷なヤングア人等と出逢つた時に際會した不運な冒險が記されてある。

賢者シード・ハメット・ベネンゼリの記すところによれば、ドン・キホーテは山羊飼ひどもや、その他、クリソストムの葬式に列した皆の人々に別れを告げるや否や、サンチョーと共に、人々が女羊飼ひマルセラの入込むところを見たといふその同じ森へ入つて行つた。そして彼女を捜して遂に見付からずに二時間あまりもあらゆる方面にさまよつた揚句、彼等は柔かな草に蔽はれた森の中の草地に憩うた。その傍には快い涼しい流れが走つて居た。それがもうそろそろ堪へ切れぬほどにならうとしてゐた暑い晝の數時間を、其處で過ごすやうに彼等を誘ひ强ひたのである。ドン・キホーテとサンチョーとは馬から降りた。そしてロシナンテも驢馬も、そこら一面に生茂つてゐる草を喰はせる爲めに解き離しておいて、彼等は鞍嚢をあさつて、主人も從者も何の隔てなく仲よく睦じくあり合せの物で食事をした。サンチョーは、ロシナンテのおとなしいことや淫らでないことを知つてゐるところから、コルドヴの牧場の牝馬どもが皆んなかゝつても不しだらを起させはしないだらうと、大丈夫に思つて、脚索かけるにも及ばぬと思つたのであつた。けれど、いつでも眠つて居ない惡魔と偶然とが、ヤングアの馬方等の物であるガリシマ小馬の一群を、こゝの谷で草を喰はせて置いたのである。草や水の多い場所で晝の休みをとるのがその馬方どもの慣ひであつた。またドン・キホーテが偶然居合せたこの場所が、このヤングア人どもの目的にも非常によく適して居たのである。ところがロシナンテは、ふと仔馬の牝たちと一緒に遊ばうといふ考へをおこした。そして牝の匂ひを嗅いだので平生の行儀作法も棄ててしまつて、主人の許しも受けないで、素速い駒足でとことこと走つて行つて、早速自分の望みを牝馬どもに知らさうとしたのである。しかし牝馬どもはロシナンテよりも寧ろ牧草を好んだと見えて、踵や齒で彼を持てなして、とうとう、見る間に彼の腹帶を引き切り、背の鞍をおとして赤裸にして了つたのであつた。けれどロシナンテにとつて更に手痛かつたに違ひないことは、馬方どもが自分等の牝馬に

對して持ちかけられたロシナンテの無禮を見ると、てんでに棍棒（荷を馬の背につむ時、一方の重みを支へる棒）を提げて駈けつけて來て、彼が地べたにうんとへたばるまで毆りちらしたことであつた。

丁度この時、今迄ロシナンテの棒打ちにされるのを見てゐたドン・キホーテとサンチョーとは息せき切つてやつて來た。そしてドン・キホーテはサンチョーに言つた、『のうサンチョー、私に分るところでは、この連中は騎士ではなうて、生れの賤しい下司下郎どもぢや。私がかういふのは外でもない、私らの眼の前でロシナンテに加へられた、この辱めに對する然るべき復讐をするに當つて、お前も當然私に加勢が出來るからのことぢや。』

『とんでもない、何で私らに敵討が出來ませうぞい？　あいつらは二十人から上をるとすると、私らの方はたつた二人、いや、それどころか大方一人半位なもんですによ。』とサンチョーが答へた。

『私は百人に當るのぢや。』とドン・キホーテは答へた。そしてそれ以上一言も云はずに劍を抜いてヤングア人等に擊ちかゝつた。サンチョーも主人の手本に勵まされ促されて、同じくつゞいた。そして手始めに、ドン・キホーテは一人の馬方に一擊を喰はして、その着てゐた栗皮の短上着をあんぐりと切り開き、同時に肩口にも強たか切りこんだ。ヤングア人どもは自分の方がそんなに大勢居るのに、たつた二人の男が打つてかゝるのを見て、各々棍棒をとつた。そして二人を眞中に取り圍んで非常な勢ひと力とで毆り出した。實際その二つ目の打擊でサンチョーを地べたにへたばらせた。またドン・キホーテも、さしもの手練と元氣との甲斐もなく、同じ目にあはされた。そして偶然にも彼は、倒れたまゝ起き上らずにゐたロシナンテの足もとに倒された。これに依つても、怒れる野人の手にかゝつては、棍棒と雖もいかに猛烈に打ち据ゑるかゞ分るであらう。さて、ヤングア人どもは、自分等が傷害を加へたのを見て、一生懸命大急ぎで自分等の荷馬に荷を負はせ、その旅路をつゞけて行つた。二人の冒險者を見るも氣の毒な有樣に、また尚更氣の毒な心持ちの中に殘して、サンチョーが先づ正氣づいた。そして自分のすぐ側に主人の居るのを見て、力のない悲しげな聲で呼びかけた、『ドン・キホーテ樣、もし、ドン・キホーテ樣！』

『サンチョーや、どうせうと云ふのぢや。』とドン・キホーテもサンチョーと同じく消え入るやうな苦しげな調子で答へた。

『叶ふことなら、あの火のやうなブラス　シャーレマン大帝の部下の勇將フイーラブラスのことを間違つたのである　の妙藥を二口頂きたうございますがな、もし旦那樣がこゝに持つてござるならなア。大方あの藥は切り傷に利くやうに骨の挫けたのにも利きませうの。』とサンチョー・パンザは答へた。

『殘念なこつちや、あの藥がありさへすりや、何が他に要らうぞい。ぢやがサンチョー・パンザよ。私は武者修行の道にかけてお前に誓ふぞよ。運が外へ向かぬ限りは二日とたたぬ内に、あの藥を私の手に入れるつもりぢや。それが叶はぬやうでは、私の手は利かぬやうになつたのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『ぢやが幾日したら私らの足が役に立つやうになるとお思ひなさりますぞい？』とサンチョーは答へた。

『その事なら幾日やら分りかねると言はにやならん。』と打ちたゝかれた騎士ドン・キホーテは言つた。『ぢやが私は一切の咎を一身に受けるぞよ。その譯は、私のやうに騎士の位を受けなんだ者等に向つて劍を抜くといふ法はなかつたのぢや。そこで私が武士道の掟を破つた罰に、戰さの神はこの懲しめを私に下し給うたことゝ思ふわい。さういふ次第故、のうサンチョー、私がこれからお前に言ひきかさうとする事をよう會得して貰ひたいぞよ。それは私ら二人の仕合せに取つて中々大事な事ぢやからの。それはの、今日のやうな亂暴人が私らに辱めを加へようとするのをお前が見てとつたら、お前は私がそいつらに向うて劍を抜くまで待つとつてはならぬぞよ、私は決してさうしてはならぬのぢやからの、そこでお前が劍を抜いて、思ふ存分そいつらを懲しめてやるのぢや、そして若しそいつらの助太刀や加勢に騎士でも來よつたら、私が腕のかぎりお前の加勢をしてそいつらを打ち挫くやうに氣を附けようわい。そして私のこの强い腕の力が、どれほどあるかは、お前はおびたゞしい記號と證據によつて、ちやんと承知しとることぢや。』

——この可哀さうな紳士は、あの剛勇なビスケイ人に打ち勝つたことからして、これほどまでに、自惚れてゐたのである。

しかしサンチョーは、何の言ひ返しもせずに聽いて通してしまふほど十分には、主人の戒めを承認はしなかつたのである。『旦那樣、私はおとなしい、柔和な、靜かな人間でござります。それに扶持を呉れて養うてやらにやならん女房子供もござりますで、どんな無禮でも我慢ができます。そこで私から貴方樣に言ひ付けるといふ譯にも行きませんか

ら、お互ひさまにかう思うて頂きませうかい、まあ、私は百姓に向うてもお侍に向うても、どんなことがあらうと刀を抜きますまい。そして私はこゝで神様の御前で、私が人から受けた辱めは、今までのも、これからのも皆な赦します。たとへそれが、身分の高い人からぢやらうが、低い人からぢやらうが、金持ちからでも貧乏人からでも、位のある人、ない人、また身分や身代はどうであらうと、これからのも、これまでのも、今日只今のも、皆んな赦しますわい。』

これに對して主人は答へて言つた、『もう些と樂に口のきけるだけ呼吸が出來ればよいのぢやがのう。そしてこの横腹の痛みがもう些と薄らげば、パンザや、お前の考へてをる誤りを說き明かしてやるのぢやがのう。これ、サンチョよ、まあ思うて見い、これまで全く逆に吹いた幸運の風が私らが爲めの追手になつて、私らが望みの帆を滿々とふくらませ、私がお前に約束したあの島のどれかの港へ易々と何の故障もなく到着したと思うて見い。その島を手に入れて、私がお前をそこの主にした曉には、お前はどうなると思ふぞい？　やれ〳〵、お前は騎士でもなければ、騎士になりたいとも思はず、また辱めに復讐して自分の領主たる威光を守るだけの勇氣意氣込みも有たぬところから、それを豪なしにして了ふぢやらうぞよ。一體お前がよう心得ておかねばならんことは、新たに乘り取つた王國や領地では、そこの住民どもの心は新しい領主に對して決してさう素直でもなければ悅服もして居るものぢやない、必ずもう一度形勢を變へようと事を起したり、また世にいふ通り隙のあるのを覗うて立たうとする恐れがあるものぢや。そこで新たな領主といふものは、よく治めるだけの分別を備へ、またどういふ事が降りかゝつて來ようとも出ては攻め、入つては身を竊るだけの武勇を有たねばならぬのぢや、それが肝腎要のことぢや。』

『そんなら今の今私らに降りかゝつたあの騷ぎの折に、貴方樣の言はつしやるやうな分別ぢやとか勇氣ぢやとかゞ有つたら誠に結構でござりましたになあ。』とサンチョは答へた、『ぢやが、私は哀れな男の眞實かけて誓言いたしますが、私は議論するよりか膏藥貼りが似合ひますわい。貴方起きあがれますかい、やつて御覽じろ。それからロシナンテも起してやりませう。尤もこいつは、こんな痛い目を見た一番の元起しぢやから、さうしてやるにや當りませんがな。私はロシナンテは愼みのよい奴で私のやうにおとなし

いとばかり思うとりましたから、あんなことを仕出かさうとはついぞ思ひも寄りませなんだよ。やつぱり、人をよう知るにや長い間かゝるとか、世の中にや當てになるものはないとか人の云ふのは本當でござりますの。貴方樣があの運の悪いお侍をお斬りなされた後から、つい今私らの肩に落ちかゝつたやうなあんなひどい棒の嵐が、一目散にあの後から追つかけて來ようなどとは、誰れが思ひますものかい？』

『ぢやがのう、サンチョー、お前の肩ぶしはさういふ嵐の折に使はれる筈ぢやが、柔かい布や上等のリンネルに包まれて育つた私の肩は、この災難の痛みを餘計に強う感ずる筈といふことは明白ぢや。そして若し、かういふ憂目はすべて武勇の道には止むを得ぬ附き物ぢやと、私が想像するといふことが、いや——私は何で想像するなどと言はう？——確かにさうと承知するといふことがなかつたら、私は今こゝに打ち倒れて只やきもきするばかりで死んでしまうたぢやらうがのう。』

これに對して從士は答へた、『旦那樣、かういふ災難が武士道の收穫でござりますなら、一體、かういふのはやたらに度々やつて來るものか、それともやつて來るにはそれぞれ定つた季節があるものか、どうでござりますぞい。實はな、この二度の收穫の上に三度目となつたら、神樣が宏大なお惠みで私らを助けて下さらんことにや、とても私らは叶ひますまいからの。』

『これサンチョー、よう聞けよ、』とドン・キホーテは答へた、『武者修行の生涯は幾多の危難災難を受けるのぢや。そして武者修行者等が王となり皇帝となるのは、早かれ遲かれ即座にといふわけには行かぬのぢや。その事は、私がすつかり諳んじてをる數多い樣々の騎士達の物語の中に見えて居るのぢや。若しこの痛みさへなければ、唯腕の力だけで今言うたやうな高位に昇つた騎士のことを、こゝでお前に話してやれるのぢやがの。その偉うなつた人達も、さうならん前にもなつた後にも、色々樣々な災難や辛苦を嘗めたのぢや。抑も、勇敢なるあのゴールのアマディスもその不倶戴天の仇なる魔法師のアルカラウスの手中に陷つたのぢや。確實な定說によれば、その魔法師はアマディスを生捕つて、城の柱に縛りつけて、その馬の手綱で二百以上もびしびし打つたといふ事ぢや。それから又少からぬ權威ある或る隱れたる一人の作者があるが、その人は太陽の騎士はある城內で、自分の足の下にあつた陷穽に落され、落ちこん

で見ると地の中の深い穴の中で手も足も縛られて了うた。其處で、灌腸劑といふ、砂や雪水で拵へたものをその騎士に仕掛けて、殆ど一命を果し了るところぢやつた。若しその友である一人の賢者によつてその危急な場合を救はれなんだら、この氣の毒な騎士はこの上もない不幸を見たことであつたらう、そこで私はさういふ偉い人々とともに苦しむのは構はん。あの人達の受けた恥辱は私らの受けるものよりも尚ひどかつたのぢやからのう。サンチョーよ、私はお前に知らせて置きたいが、偶々手に持ち合せて居る道具で負はされた傷といふものは、何の辱めをも與へぬものぢや。そしてこのことは試合の掟に明白な言葉で記錄してある。例へばぢや、若し靴直し屋がその手に持ち合せてをつた靴型で他の人を毆つたとしても、それは木片には相違ないが、さういふ譯からしてその毆られた奴は棒打ちにされたとは云はれんのぢや。私がお前にかう言ふのは、たゞ私らが今度の喧嘩で打たれたからと言うて、それ故私らが辱めを受けたなどと、お前が思ひ違ひをせぬ爲めにぢや。つまり、あいつらが持つとつた武器は、それであいつらは私らを打ち叩いたが、あれはたゞあいつらの支へ棒といふだけのもので、私の覺えてをる限りでは、あの中の一人として細身の劍も、劍も、短劍も持つてはをらなんだからのう。』

『そこまで見極める隙はありやしませなんだよ、』とサンチョーは答へた、『私が劍に手をかけるか、かけんかに、あいつらは、私の眼の玉の明りも足の力も引つこ抜いてしまうて、私が今臥とる此處へ私をへたばらせたほどに、私の兩肩ぶしを、あの棒で滅多やたらに毆りつけましたぞい。そして、此處であの棒打ちが辱ぢやろか辱ぢやあるまいかと考へるのは、別に苦にはなりませんがのう。それよりか毆られた痛みが苦になりますわい。どうせこいつア私の肩ぶしにも、腹の底にもうんと沁みこたへて殘りませうからの。』

『兎にも角にも私の言ふことを聞けよ、のうパンザ。どういふ記憶でも時といふものゝ消してくれぬのはないわい。またどういふ痛みでも死といふものが無くせぬのはないわい。』とドン・キホーテは言つた。

『また、それを消したり無くしたりするとて時や死を待つ不仕合せより上の不仕合せがござりますかい？　二度分の膏藥で癒るくらゐのもんなら、私らの災難も大してひどいもんぢやありませんわい。ぢやが、病院一軒の膏藥皆なで

も、私らを元のやうにするにやおほかた足るまいかと、私は、はや何とやら氣にかゝつて來ましたよ。』とパンザは答へた。

『もうそんなことは言ふな、サンチョー、弱い中から力を引き出せよ。私がさうせうと思うて居るやうにの。そしてロシナンテはどうしてをるか見ようぢやないかい。あの可哀さうな奴も、今度の災難には相當に割り前を當てがはれて居るらしいからの。』とドン・キホーテが答へた。

『それにや何も不思議はござりませんさ。あいつもやはり武者修行でござりますからな。私が不思議に思ひますのは、私らがえらい目に逢うたところを私の驢馬がロハで脫けたことでござりますよ。』とサンチョーは答へた。

『幸運はいつも助けを與へる爲めに、災難の中で一方に戸口を明けて置くものぢや。私がさういふのは、この小さい獸が今こそロシナンテの代りを勤めて、私のこの傷を療治して貰へるどこかの城へ、私をこゝから運んでくれるであらうからぢや。またその上私は、それに乘ることを恥かも不名譽とは思はんのぢや。そのわけは、あの陽氣な笑の神（ギリシャの神樂舞踏の師傅であり教師であつたあの善良な老シレナスが、百の門ある市（ギリシャのテーベの町のこと）へ入りこんだときに、綺麗な驢馬に、いとも機嫌よう跨つて行つたといふことを讀んで覺えがあるからぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『貴方樣の言はつしやるやうに、その人が乘つて行きなされたもふのは本當かも知れません。ぢやが乘つて行くのと、肥料袋同樣に引つ抱へて行くのとは、大した違ひでござりますよ。』とサンチョーは答へた。

これに對してドン・キホーテは答へた、『戰で受けた傷は名譽を取り去るのではなうて與へるのぢや。それぢやから、サンチョーや、もう何も言ふな。言はずに私が先程言うたやうに、お前の出來るだけ起き上つて、そして驢馬の背の上へ、どうなりお前の好きな恰好に私を置いて吳れ。そして夜が來てこの荒野の中で私らを吃驚させぬ前に、此處から出かけることにしよう。』

『けれど、私はまだ貴方樣の言はつしやつたことを聞いとりますがな。そら年中おほかた荒野や沙漠で眠るのが武者修行には似合はしいことで、また武者修行は、それを大した仕合せと思　てるのぢやと言うて。』とパンザが言つた。

『それは詮方ない時のことぢや、』とドン・キホーテは答へ

た、『さうでなくば武者修行者が戀をしてをる時ぢや。そしてこの事は全く眞實で、現在愛する婦人は少しもそんな事を知らいでも、日に照らされ蔭に立ち、あらゆる天候の異常の中に、二年の間も岩の上にぢつとしてをつたといふやうな騎士が何人もあつたのぢや。そしてペルテネプロスといふ名前でボブル岩に住居を定めた時には、アマディスもかういふ中の一人であつたのぢや——さア、私は餘り勘定は確かでないから、それが八年の間ぢやつたか八ヶ月の間ぢやつたかは覺えぬがの。兎に角あの人は、オリアナ姫にどういふ御不興を蒙つたのか私は知らぬが、それを解く爲めに其處に止つて苦業をしたのぢや。ぢやがサンチョー、もうこの話は止めよう。そしてまた何かこの驢馬にロシナンテのやうな災難がふりかゝらぬ内に急ぐがよい。』

『そんな事にでもなつたら泣面に蜂でござりませう。』とサンチョーは言つた。そして誰にもせよ自分をこゝまで連れて來た人に向つて、三十遍の「あゝ」と六十遍の溜息と百二十遍の惡口雜言を洩らしながら、起きあがつたが、眞直ぐに身を伸ばす力がなくて、トルコ人の敬禮のやうに半身を曲げてゐた。けれども彼はそのあらゆる痛みを忍んで驢馬に鞍をおいた。この驢馬も、この日は法外な自由をさせて貰つたので、恥か遠くへ迷うて行つてゐたのである。サンチョーは次にロシナンテを起した。こいつの方も、若し不平をこぼす舌さへ有つてゐたなら、きつとその方ではサンチョーやその主人にひけは取らなかつたであらう。兎に角、サンチョーはドン・キホーテを驢馬にしがみつかせ、ロシナンテを手綱で驢馬の後に繋ぎ、驢馬の轡紐を取つて、本街道のあるだらうと思はれる方角へいゝ加減に進んだ。然るに幸運は彼等の都合をだん〳〵善い方へ導いて居つたので、まださほど行かないうちに道路が見え出して。そしてその道の向うに一軒の宿屋が見えた。その宿屋は、サンチョーには困つたことでありドン・キホーテには喜びであるが、どうしても城でなければならなかつた。サンチョーはこれを宿屋だと言ひ張り、また主人は宿屋ではない城であると言ひ張つた。そしてこの言ひ爭ひは中々長く續いて、その決着がつかないうちに彼等はもうそこに着いた。そこでサンチョーは最早その上の論爭をしないで、馬や驢馬と共にそこへはいつて行つた。

第十六章

自分で城だと思つた宿屋の中で、この工夫に富める紳士の上にふりかゝつたこと。

宿屋の亭主は、ドン・キホーテが驢馬の背に横倒しに乘せられてをるのを見て、一體どういふ間違ひがあつたのかとサンチョーに尋ねた。サンチョーは別に何でもないが、たゞこの人が岩から轉げ落ちて少しその肋骨を挫いたのだと答へた。その亭主の女房は、こんな商賣の女が普通に有つてゐるのとは違つた性質の女であつた。卽ちこのお上さんは生れつき親切な心をもつた女で、他人の難儀に同情した。そこで直ぐ樣ドン・キホーテの介抱をし始めた。そしてなかなか容色よしの自分の若い娘にも、この客人を介抱するのを手傳はせた。その外、この宿屋にはアスチュリア生れの娘が女中になつて居つた。その女は平べつたい顏で、ひしやげ頭で獅子鼻で、そして目つかちで、また良い方の目も餘り丈夫ではなかつた。しかし全くこの女の姿の優しさがあらゆる瑕疵を補うてゐた。この女は頭から足先までで二尺五寸とはなかつた。そしてやゝ嵩つ被さる氣味の兩肩の爲めに、自分で氣に入るより餘計に前屈みになつてゐる。やがてこの上品な女中も若い娘に手傳つた。そして二人はドン・キホーテの爲めに、もと何年間も藁置き場に使はれてゐたといふ明かな證跡を示してゐる屋根裏の部屋に、隋分粗末な寢床をしつらへた。その室にはまた馬方が一人宿合してゐたが、その方の寢床はわがドン・キホーテと少し離れて置かれてあつた。そして荷鞍や驛馬の被せ布で拵へてはあつたが、それが爲め却つて具合よく出來てゐた。といふ譯は、ドン・キホーテの寢床は、たゞ非常に高低のある二つの架臺にのつけた四枚の荒削りの板と、薄さでは天幕布と思はれさうで、もし裂目から羊の毛だといふことが見えなかつたら、手觸りでは堅いこと小石の如く思はれさうなころ〳〵の塡め物の一杯入つてゐる褥が一枚と、楯の革で拵へた二枚の敷布と、數へて見たくば一と筋の間違ひもなくその糸の勘定が出來さうな掛蒲團とだけで出來あがつてゐたからである。

この忌々しい寢床の上にドン・キホーテはなが〳〵と臥そべつた。そしてお上さんと娘とは、直ぐ彼の頭の上から爪先まで膏藥を塗つた。その間マリトルネスは——これがそのアスチュリアの女の名であつた——二人に燈火を見せてゐた。そしてお上さんは、膏藥を塗つてやりながら、ドン・キホーテが場所によつては一杯に打撲傷を受けてゐるのを見て、これは落ちた爲めといふよりも毆られた爲めのやうに見えると言つた。

それは毆られたのではない、たゞその岩に澤山の尖りや

角や出つ張りが有つて、そしてその一つ〳〵が傷痕を殘したのだとサンチョーは言つた。そして彼は附け加へた、『お上さん、膏藥の入り用な人間は絕えんから、どうぞ些とばかりその屑を殘しといて下され。私の腰も少々痛みますよ。』

『それではあんたも落ちなされたんぢやな。』とお上さんは言つた。

『私ア落ちやしませんさ。けれど旦那樣が落ちなさるのを見てはつとしたので、私の身體は千も百も打つ敲かれたやうに痛みますわい。』とサンチョー・パンザは言つた。

『そりやほんにさうですぢやろなア、』と若い娘が言つた、『わたしも塔から落ちながら、どうしても地面に屆かんやうな夢を何遍も見ましたよ。そして夢が醒めて見ると、何やら本當に落ちたやうに弱り切つてぐら〳〵して居るですよ。』

『さアそこぢやて、な、私は根つから夢を見るどころか、今よりかもつとはつきり目を醒して居つて、それで私の御主人のドン・キホーテ樣にも負けん位打傷を受けたのぢやからな。』とサンチョー・パンザは答へた。

『この旦那樣は何と仰しやりますか？』とアスチュリア女のマリトルネスが訊いた。

『ラ・マンチャのドン・キホーテ樣と申されて、このお方は武者修行のお侍ぢや、そして又この世界始まつてから二人とないやうな一番えらい一番強いお侍さまぢや。』とサンチョーは答へた。

『武者修行て何でござんすかい？』と女中は言つた。

『お前さんは、それを知らんほど世間知らずかい？』とサンチョー・パンザは答へた、『よし、それぢや、聽きなされ。武者修行といふものは、二た言で言へば棒打ちにされて、そして皇帝樣になるもので、今日は世界中で一番の不仕合せな貧窮人ぢやが、明日は御自分の御家來に二つ三つ王樣の冠を下さるやうになる方のことぢやよ。』

『そんなら、あんたはこんな結構な旦那樣についとんなさるのに、まアお見かけ申すところでは郡一つも有つてござらんらしいのはどういふ譯でござんすかえ？』とお上さんは言つた。

『そりや、まアだ早やすぎますよ。』とサンチョーは答へた、『まアだ私らが冒險を探しに出かけてからたつた一と月しか經ちませんからの。それにあれを探してもこれに出くはすといふやうなことになるものぢやから、まだ今迄のとこ

ろぢや冒險と云へるやうな事にや一つも廻り合ひませんのサ。けれど、私の御主人のドン・キホーテ樣のこの傷が、いや怪我がお癒りなされて、それでやつぱり私が同じことで居つても、それでも私の望みはスペイン中の一番高い位とでも代へようとア思ひませんよ。』

ドン・キホーテはこの殘らずの問答に極めて注意深く耳を傾けてゐた。そしてつとめて寢床の上に起き直つて、お上さんの手を取つて言つた、『お美しい奥方よ、貴女は私の身をこの御城内にお泊め下されたことを幸ひぢやと申されてもようござりまするぞ。私はな、私の身を自身で讃めませぬのは、自讃は價を下げると、世間でよう言ふからのことで、私はさういふものでござりますぞ。しかし拙者が何者であるかは家來がお話し申しませう。拙者は貴女がお盡し下された御親切を心に永く銘じて貯へおき、拙者の生命のつゞく限り貴女に感謝をさゝげませうと、たゞそれだけを申します。そして又、愛がその掟に拙者を隷從させ、またその名ははつきりとは口に出せませねどあの美しい情知らずの人の眼に拙者を服從させいで、この愛らしい少女御の眼が私の自由を縛る主人になれたなら、どんなにか喜ばしいことでござりませう。』

お上さんも、その娘も、又その立派なマリトルネスも呆氣にとられてこの武者修行者の言葉に耳を傾けた。蓋し彼等は、この言葉が好意とお世辭を表はすものだとは、感づく事が出來たものの、まるでギリシャ語を話されてをる位にしかその意味が解らなかつたのである。そして彼等はこんな風の言葉は聞き慣れてゐないし、第一人間が自分等の見慣れてゐる人たちとは柄の違つた人のやうに思はれたので、彼を見つめたまゝどぎまぎしてゐたのである。そして彼の物々しい辭令に對して、安宿風のぞんざいな言葉で挨拶を述べてそこを去つた。その間に例のアスチュリア女はサンチョーの介抱をしてやつた。この男も主人に劣らずそれが入り用であつたのである。

例の馬方はその晩この女中と遊ぶことに手筈をきめてゐた。そして女の方でも、客人たちが靜まつて家の人たちが眠つたら、彼を探してやつて來て、十分にその心に從はうと言葉を番へたのであつた。そして噂によるとこの善い女は、かういふ種類の約束をすれば、假令森の中で一人の證據人も居らぬところでそれを結んだにせよ、決して反古にはしなかつたさうである。蓋し彼女は自分は身分のある婦人だとて非常にそれを誇りにした。そして、自分で言ふ所

では、不運や不仕合せの爲めにかういふ境涯に立つやうになつたのであるから、宿屋の女中といふやうな勤めをしてゐるも少しも恥とは思つてゐなかつた。ドン・キホーテの堅い、狹い、慘めな、ぐら〳〵する寢床は、この明りのさし込む廐の眞中の取りつきに据ゑてあつた。そして、その直ぐ側にサンチョーは自分の寢床をしつらへた。それは僅かに粗い蓙一枚と、見たところ、羊毛で出來たといふよりも寧ろ絲の擦り切れたヅックともいふべき毛布一枚とで出來て居た。この二つの寢床の向うに馬方のがあつた。それは先に述べたやうに、荷鞍と、彼の所有してゐる最上の二匹の騾馬のありつたけの掛布とで出來てゐた。尤もこの馬方は、この物語の原著者に從へば、アレヴローの富裕な馬方連の一人だつたので、光澤の好い、肥つた壯りの騾馬を十二匹持つてゐた。それから此原著者がこの馬方のことを特に記してゐるのは、彼が其男を非常によく知つてゐたからで、その上多少親類の間柄であつたからだといふ話さへある。それにこのシード・ハメット・ベネンゼリはあらゆる事物に就いて非常な穿鑿をする正確な歷史家であつたので、それは、どんな些細なつまらない事でも、既に記述された事柄を默過してしまふことのないといふ點から極めて明白であるので、これは、諸事件を粗匆に簡略に記述して、不注意か頑迷か或は無智かの爲めに、その著書の正味は全くインキ壺の中へ殘して置くところから、我々に始どその味ひを味はしめないやうな堂々たる歷史家の宜しく遵奉すべき模範である。「タブランテ・デ・リカモンテ（アーサー王の傳說に基づける物語）の著者や、トミラス伯（シャーレーン大帝部下の貴族）の偉業を錄した書物の著者の上に天福の厚からんことを！　彼等は如何に精細にあらゆる事物を記述して居る事ぞ！

それはさて措き、馬方は自分の持ち馬どもを一度見に行つて、二度目の飼料をやつてしまふとその荷鞍の上に寢そべつて、まつ正直なマリトルネスを待つてゐた。サンチョーはもう膏藥を塗り終へて臥てゐた。そして眠らうと努めたけれども肋骨の痛みがそれをさせなかつた。その時ドン・キホーテも肋骨の痛みの爲めに眼を兎のやうに大きく開けてゐた。宿屋はしんと靜まつた。そして入口の眞中に吊されて點つてゐる燈火が明りを與へて居る外には、家中に明りはなかつたのである。この異樣な靜けさと、それから何時も我が騎士の心に現はれる、彼の不仕合せの源になつた例の澤山の物語の到る處に記されてある雜多な出來事に就いての考へとが、彼の想像に任せて、途方もない、よくも思ひ

付かれたと思はれるやうな妄想を拵へあげてしまつた。それはかうであつた、彼は或る名高い城に到着したものと思ひ込んだ(先にも述べたやうに、彼の泊つた宿屋は、彼の目にはすべて城であつたので)、そしてこの宿の亭主の娘は城主の姫であつた、そしてこの姫は、彼の氣高い擧止に心牽かれて、遂に彼と戀に陷り、今宵暫くの間、兩親に知らさないで、彼の寢床に忍んで來るといふ約束をしたのである、と、彼は自分で組み立てたこの空想を悉く確實な事實と思ひ込んで、だん〳〵不安を感じ出した。そして自分がまさに出會はうとしてゐる道德上の恐るべき危險をつく〴〵と考へ初めた。そして彼は、たとひギネヴィア女王(アーサー御下の妃)御自身と官女クィンタニョーナとが自分の前に出て來ようとも、自分の愛人たるドゥルシネア・デル・トボソに反くやうなことはすまいと深く心に決したのである。

ドン・キホーテがこんな狂想に耽つてゐる時、丁度その時、アスチュリアの女のやつて來べき時刻——ドン・キホーテにとつては運の悪い時刻——が到着した。彼女は肌着を着て、素足で髮は粗い布の頭巾の中に卷きあげて、脊も立てぬ忍び足で、馬方を探して、三人合宿してゐるこの室に入つて來た。併し彼女が戸口を入るか入らぬに、ドン・キホーテはその姿を見とめた。そして脊髓や肋骨の痛みやに拘らず寢床の上に起き直つて、その美しい少女を迎へようと兩腕をさし伸べた。身を曲げて默つて戀人を探り當てようと、兩手を前に差伸べてやつて來たアスチュリアの女は、ドン・キホーテの兩腕に行き當つたのである。彼は彼女の手頸をしつかりと摑んで、女が一言も得言はぬ間に、自分の方へ引き寄せた。そして寢床の上に掛けさせた。それから彼は女の肌着に觸つた。それはざら〳〵した綿布ではあつたけれど、彼には極めて精巧な極めて柔かな絹物と思はれた。女の手頸には硝子の珠飾りのやうなものが掛けてあつたが、彼の眼には貴重な東洋の眞珠の光澤を有つてゐた。どこか馬の鬣に似寄つてゐる彼女の髮も、彼はその光で日輪さへも曇らせる極めて輝かしいアラビアの黃金の絲のやうに貴く思つた。その呼吸は、疑ひもなく昨日の腐つた生菜料理の匂ひがしてゐたが、彼には彼女の口から甘い香ばしい芳香を放つと思はれた。そして結局、彼は自分が嘗て讀んだ本の中で、或る姫宮が戀に焦がれて、今上に記したやうなあらゆる飾りを身につけて、ひどく傷を負うてゐる騎士を訪ねて來たといふのを見たことがあつたが、それと丁度同じ容貌と同じ姿で、この女の繪姿を自分の想像に描き

出したのであつた。この氣の毒な紳士の盲目さは、馬方風情の者でででもなければ話にだつて嘔吐を催させるであらうやうな、この立派な娘の手觸りも臭ひもまたその外の何ものも、彼の眼を醒ますには足りなかつた程であつた。それどころか、彼は美の女神を抱いてゐると思ひ込んでゐたのである。そこで女をしつかりと摑まへながら、低い、優しい聲で言ひ初めた、『愛らしい氣高い御婦人よ、貴女がそのすぐれたお美しさを見せてくだされて、拙者にお與へ下さるこの有難いお惠みに報いまゐらせる境涯に居つたならばと思ひまする。しかし、いつも善人を苦しめて倦むことのない運命は、拙者をこの寢床の上に置くようにしましたのぢや。拙者の心は喜んで貴女の御心に從はうとしましても、それが叶はぬまでに拙者の身は傷つき挫けて此處に臥つてをりまする。その上それが叶はぬと申すには、今一つ外の又一層重大な譯をも言ひ添へねばなりませぬ。と申すのは、拙者は類ひなきドゥルシネア・デル・トボソォと申す、拙者の心に奥深く思ふ唯一人の婦人へ立てた誓がありますのぢや。もしこのことさへ邪魔せねば、拙者も貴女の惠み與へたまふこの仕合せのよい機會を取り遁すほど、情けを知らぬ騎士ではござりますまいに。』

マリトルネスはドン・キホーテに緊かりと摑まれて、わくわくして汗をかいてゐた。そして自分に向つて言はれたその言葉は解りもせねば聞いてゐる氣にもなれないで、物は言はずに身を脫れようとあせつてゐた。件の馬方は、清からぬ考へで眠つかれないでゐたので、その女が戸口を入つて來た途端にそれと感づいてゐたのである。そしてドン・キホーテの言つたことを殘らず耳を澄して聽いてゐた。そしてこのアスチュリアの女が自分との約束を他の男の爲めに破りさうなので氣が氣でなく、ドン・キホーテの寢床の側へ段々近づいて來て、自分には會得の出來ないその話の結果が、どうなるかを見ようとぢつと立つてゐた。しかし、女中は逃げようと藻掻き、ドン・キホーテは逃がすまいと骨折つてゐるのを見て、そのふざけた樣子にむら〳〵となり、片腕をふり上げて、戀の騎士の痩せた顏の上に恐ろしい一擊を喰はせ、その口を血塗れにしてやつた。しかもそれでも滿足せず、その胸の上に馬乘りになつて、跫歩よりも速い足取りで、その上を一面に兩足で踏みつけた。その寢床は稍狂つてゐて足が餘り丈夫でなかつたので、この馬方の餘計な重みを支へることが出來ないでめり〳〵と折れてしまつた。この大變なめり〳〵いふ音に亭主は目を醒ました。

そして直ぐさまマリトルネスの何かの騒ぎに違ひないと判斷した。といふのは、この女を大聲で呼んで見たけれど返事がなかつたからであつた。この嫌疑を抱いて彼は起き上つた。そしてランプに火を點して、その騒ぎの聞えた方へ急いだ。女中は主人のやつて來るのを見、またその氣性の烈しいことも知つてゐるので、びつくり仰天して、まだ眠つてゐるサンチョー・パンザの寢床へ潜り込み、手鞠のやうに身を屈めて隱れた。

『どこに亡せ居るんぢやい、賣女め、この騒ぎヤ貴樣の仕業に違ひないんぢや。』と怒鳴りながら主人は入つて來た。この聲でサンチョーは眼を醒ました。そして殆んど自分の頭のところに塊のあるのを感じて夢魔に取りつかれたのだと思ひ、そこら中を拳固で殴り出した。その幾つかはマリトルネスにも當つたので、彼女はその痛さに腹を立てゝ、女のたしなみも打ちやつて、サンチョーへむやみにその返禮をして、彼を起きたくもないのに起こしてしまつた。そこでサンチョーは、誰からかは知らぬが自分がそんな目に遇はされてゐるのを知つて、えんやらやつと起き上つて、マリトルネスと摑み合つた。そして彼と彼女との間には、世にも烈しい滑稽極まる組打ちが始まつた。しかし馬方は、亭主の燈の明りで、自分の女の有樣を見ると、ドン・キホーテは打ちやつて彼女の加勢に駈けつけた。亭主も同じくさうしたが、これは別の考へからである。即ちそれは、凡てこの一幕の原因は疑ひもなくこの女一人であつたと信じてゐたので、この女を折檻するつもりであつた。そこで、「猫が鼠へ、鼠が繩へ、繩が棒へ」といふ諺のあるやうに、馬方はサンチョーをボカ〳〵と殴り、サンチョーは女中を、女中はサンチョーを、そして亭主は女中をといふ風で、皆んなお互ひに息もつかずに烈しい立ち廻りをしたのである。そして殊に振つたのは、亭主のランプが消えたことであつた。そこで皆眞暗な中へ殘されたので、皆一塊になつてお互ひに相手嫌はず遮二無二殴りつけたので、手に觸れる限り一ところとして無事な個處はなかつたのであつた。

偶々その晩、この宿屋には、所謂トレードーの舊神聖救濟組合（追剝どを捕へて旅客を安全ならしめる爲めの組合）の捕手の巡邏が泊り合せてゐた。この巡邏も亦この只ならぬ喧嘩の物音を聞きつけ、その役目の棒とそれから逮捕狀を納めてある錫の箱とを引つ摑んで、眞暗がりの中を怒鳴りながらこの部屋へ探り寄つて來た。『鎭まれ！　法權を以て命ずるぞ！　鎭まれ、神聖救濟組合の名を以て命ずるぞ！』彼が最初に突當つたのは滅多

打ちされて、毀れた寢床の上に氣絶して仰向けに寢そべつてゐたドン・キホーテであつた。そして探り廻してゐると髯に手が觸つたので、彼は續いて叫んだ、『法權の味方をせい！』然し、摑まへてゐる者が動きもすごきもしないので、巡邏は、この男は死んでゐるので、この室に居る者共が下手人だと判斷した。そしてこの嫌疑を懷いて彼は一層聲を張り上げて叫んだ、『この宿屋の門を閉めい。一人も外へ出さんやうにせい。人が一人殺されて居る！』この叫び聲は皆をびつくりさせた、そしてその聲の屆いたその途端、各々その喧嘩を止めた。亭主は自分の室へ、馬方はその荷鞍へ、女中は藁置場へと退いた。運の悪いドン・キホーテとサンチョーとだけは、その儘そこから動くことが出來なかつた。巡邏は、そこでドン・キホーテの髯を離した。そしてその科人どもを搜して捕へる爲めに燈火を見つけに出て行つた。しかし亭主が自分の室へ引きさがる時に燈火を消してしまつたので、一つも見つからなかつたから、巡邏は已むを得ず、爐の助けを借りた。其處で、彼は、多くの時と骨折りとの後に、別のランプに燈火をつけたのである。

第十七章　の中には剛勇なるドン・キホ

ーテと順良なる家來サンチョーとが宿屋で樣々な難儀に遭ふことが收めてある。その宿屋をドン・キホーテは氣の毒にもお城と思ひ込んでゐたのである。

この時はもうドン・キホーテは正氣づいてゐた、そして昨日「棍棒の谷」にへたばつてゐた時、自分の家來に呼び掛けたのと同なじ情けない聲で今もまた家來に呼びかけた、『サンチョーや、おい、お前は眠つて居るのか？　眠つてをるのかお前は、おいサンチョー。』

『どうして眠られますかい、いま〳〵しい！　今夜はありつたけの惡魔ともが私に憑いてをるのがわかつとりますのに？』とサンチョーは不平さうに苦々しげに答へた。

『お前がさう思ひ込むのも尤もぢや、つまり私が正氣を失うてをるのか、それともこの城が魔法にかゝつてをるかどつちかぢや、といふ譯はのう——だがこれから私がお前に話さうとして居ることは、私の死後まで祕密にすると誓うて貰はねばならぬことぢや。』とドン・キホーテは答へた、

『私がさう言ふは外でもない、誰にもせよ人の美名を傷つけることを憎むからぢや。』とドン・キホーテは續けた。

『そりやもう、貴方樣の御往生の時までは誓言口外は致しません、そこで明日はそれを口外させて頂ければ有難い仕合せでございますがなア。』とサンチョーは答へた。

『サンチョー、一體私がお前にどんな無理無體をしたからといふので、お前は私をそんなに早く死ねばよいと思ふのぢや？』とドン・キホーテは言つた。

『そんな理由ではございませんが、併し私は物事を長くしまつて置くことが嫌ひぢやし、またそれをしまひ過ごして、腐らして持つて居りたうはございませんからの。』とサンチョーは答へた。

『何れにせよ、私はお前の愛情と順良な性質とを愈々信賴するぞよ。そこで私がお前に聞かせたいと思ふのは、今夜、言ふに言はれぬ位不思議な椿事が私の身の上に降りかゝつたといふ事ぢや。まあそれを手短かに言へば、かういふ譯ぢや、暫く前にこの城の城主の娘御が私のところへ參られたと思ふがよい、そしてその娘はこの廣い世界に又と見られぬ程の上品な美しい婦人と思ふがよい、その姫の姿形の美しさ！　そのきび〳〵した才氣！　その外の祕密な事柄——それはドゥルシネア・デル・トボソどのへの私の心づくしを失はぬ爲めに、私は終生人に語らず祕密にして置くが、私はそれらを何と言うてお前に話したらよからうぞ！　ただこれ丈けはお前に話さう、幸運に依つて私の兩手の中に置かれた非常に大きな恩惠物を、惡運の奴が妬んだのか、それとも大方（この方が却つてありさうなことぢやが）私の先に言うたやうに、この城に魔法がかゝつて居るのか、丁度私があの姫と、まことに樂しい戀の物語をして居るところへ、何處から來たのか私が見もせず知りもせぬうちに、すばらしい巨人の腕にくつついてゐる一つの手がやつて來て、それが私の兩顎に強い一擊を與へたので、顎は血塗れになつてしまうたのぢや。それから私を滅多打ちにして、昨日よりも慘めな有樣にならせたのぢや。昨日はお前も知つとるやうに、ロシナンテの不埒のことからあの人夫どもが私らに害を加へた日ぢや。さういふところから考へて見ると、魔法使ひのムーア人が、その姫の美しさといふ財寶を護衞して居るに相違ない。そしてその財寶は私のものぢやないと思はれるよ。』

『私のものでもございません、』とサンチョーは言つた、『何故と申しますに、棍棒で打つたゝく事などは、それに比べ

たら菓子か菓子パンのやうなものぢやと思へる位に、四百人から上のムーア人どもが私を打ちのめしたんでございますものな。けれど何うしてまた貴方様はそれを——私らをかうやつてこんな風にして了うたその事を、立派な珍らしい冒險ぢやと仰有るのでございますぞい。えゝ？　そりや貴方様は、今申されたやうな絶世の美人を抱いておいでなされましたから、そんなにお氣の毒なわけでもございませなんだが、しかし私は、私の一生涯の大方まあ一番ひどく打ちのめされたといふ外に、何の得がございましたろぞ？　あゝ不運なのは私と私を腹に宿した阿母でございますよ！　一體私は武者修行者でもなければ、そんな者にならうとも望んでは居りませんからの。それだのに何か災難が起りさへすりや、そいつは大方私の方へふりかゝつて來よる。』

『それではお前もやはり打ちのめされたのか？』とドン・キホーテは言つた。

『さう申したぢやございませんか！　あゝ忌々しいことぢや！』とサンチョーが言つた。

『さうまあ氣を落とすなよ、のう、私が今に貴い香油を拵へるから、それがあれば瞬きする間に私らは癒るわい。』とドン・キホーテは言つた。

この時、例の巡邏は漸くランプに燈を點けることが出來た。そして殺されたこと〻思つてゐたその男を見に、この室へ入つて來た。シャツを着て、頭の上に布片をのせて片手にランプを持ち、そして非常にむづかしい顏をして入つて來る巡邏の姿が、戸口のところに現はれたのを見て、サンチョーは主人に言つた。

『旦那樣、こりやあの魔法使ひのムーア人が引き返して來て、まだ何かやり殘しがあればもつと懲罰を見せようといふのでございませうかの。』

『あのムーア人の筈はない。魔法を使ふ奴等は自分の姿を何人にも見せはせぬからの。』とドン・キホーテは答へた。『あいつらは姿を見せんなら見せんでそれと感じさせますよ。それでなきや私の兩肩がふるへるのでわかりますよ。』とサンチョーは言つた。

『私の肩でも解りはするが、ぢやがそれだけでは、そこに現れたのを魔法使ひのムーア人ぢやと思ひ込むには、十分な理由とはならん。』とドン・キホーテが言つた。

巡邏はやつて來たが、二人がこんな會話をして居るのを見て、吃驚して立ち止まつた。尤もドン・キホーテは打撲傷や膏藥の爲めに動くことが出來ないで、やつぱり仰向けに

なつたまゝでゐたのである。巡邏は彼の方を向いて言つた、『おい、どうしたのぢや、え！』

『私が若し貴公ぢやつたら、もう少し叮嚀にものを言ひますよ。さういふ風に武者修行に對して物をいふのがこの國の風なのか？　この馬鹿者！』とドン・キホーテは答へた。

巡邏は、こんな慘めな樣子の人間から、こんな無禮な挨拶を受けたので癇癪を起してしまつた。そしてその油の一杯入つてゐるランプを振り上げて、ドン・キホーテの頭の上にうんとたゝきつけた。その爲めに頭の頂邊はひどく破れたのである。そこで四邊は眞暗になつたので、彼は出て行つて了つた。するとサンチョーは言つた、『そうら、旦那樣、あいつは矢つ張り魔法使ひのムーア人でござりますよ。あいつは財寶は他の者の爲めに取つて置いて、私達には平手撃やランプ撃ばつかり呉れますよ。』

『それはその通りぢや。しかしかういふ魔法の事について氣をもんだり、腹を立てたり、むしやくしやしたりする事は無益なことぢや。何故といふに魔法といふ奴は眼には見えぬ幻のやうなものぢやから私らがどんな事をしたとて、誰に仕返しをするといふ對手を見つけるわけには行かんのぢや。さあ、サンチョー、起きられるなら起きて呉れ、そしてこの城の城主を呼んで、效驗のある香油を造るによつて、少しばかりの油と酒と鹽とそれから迷迭香とを呉れるやうに賴んでくれ。實はあの化物に擊たれた傷の爲めに大分出血して居るところぢやで、今その香油が大いに入用だと思ふのぢやからの。』

サンチョーは筋々が強かに痛むけれど起き上つた。そして暗闇の中を宿屋の主人を搜しに行つたが、例の巡邏が自分の敵手がどうなつたか知らんと窺つてゐたのに出逢つたので、サンチョーは彼に言つた、『貴方樣は何方かは存じませんが、何卒後生でござりますから御慈悲に少し迷迭香と油と鹽と葡萄酒とを惠んで下さりませ。世界第一の武者修行のお方の療治にそれが入り用なのでござりますから。そのお方はこの宿屋に居る魔法使ひのムーア人の手にかゝつてひどく傷をお受けなされてあそこの寢臺の上に臥てござります。』

サンチョーがかういふ風に話すのを聞いて巡邏は、彼を氣違ひだと思つた。そして夜もまさに明け方になつて來たので、宿屋の表戸を開けて亭主を呼んで、そのお客人の欲しがつてゐるものを亭主に話した。亭主はその入り用の品々を呉れたので、サンチョーはそれをドン・キホーテのところ

へ持つて来た。ドン・キホーテは両手を頭にあてゝ、ランプで殴られた痛さに泣いてゐたけれど、その傷といふのは、かなり大きい瘤が二つばかり出てゐるのに過ぎなかつた。そして彼が血だと思つたのは、たゞ先きの騒動の折に苦しい目に逢つて流した汗に過ぎなかつた。兎に角彼はその薬剤を手に取つて、殘らず一緒に混ぜて、それを十分だと思はれるまでやゝ暫らく煮立てゝ一つの混合劑を作つた。それから彼はその薬を入れる爲めの壜を求めた。けれどその宿屋には壜がなかつたので、亭主が無代で呉れた錫の油壺に入れることに決めた。そしてこの徳利に向つて八十遍以上も「主の禱」を繰り返し、また更に、同じ程「聖母の禱」や「處女の禱」や「使徒信經」やを繰り返した、一語を發する毎に祝禱するやうに十字を切りながら。その間中、サンチョーも宿の亭主も巡邏も其處にゐたのである。但し、あの馬方はこの時悠々とその騾馬の世話をしてやることに掛かつてゐたのであつた。

これが終へると、ドン・キホーテは自分が思つてゐる程にこの貴重な香油の效驗があるかどうかを、その場で自ら試して見たくて堪らなくなつた。そこで彼は徳利に入り切らないで煮立てられた土瓶の中に殘つてゐるうちから一クワートト六合三勺近くも飲んだ。けれども飲んで了ふか了はないうちに、胃袋の中には何にも殘らなかつた程烈しく嘔き出したのである。その上嘔吐の激痛と痙攣とで、びつしより汗になつたのである。それで彼は身體を蒲團に包んで獨りきりにして置いて呉れるやうに人々に頼んだ。人々はさうした。そして彼は二時間以上も眠つて居たが、やつと目が覺めた時には、身體も非常に安まり、もう全く癒えたかと思つた位に傷が非常に樂になつてゐた。それで彼は自分がフィエラグラスの香油を付けたのだと愈々本當に信じたのである。そしてまたこの療法があるからには、今後は如何な種類の冒險にも戰爭にも一騎討ちにも、たとひそれがどんなに危險であらうとも、何の恐れるところなく向ふことが出來ると信じたのである。

サンチョー・パンザもまた自分の主人の回復を奇蹟のやうに思つたので、自分もその土瓶の中にまだ少からず殘つてゐる香油を飲まして貰ふやうに願つた。ドン・キホーテは許した。そこでサンチョーは両手にその土瓶を抱へ、誠心誠意を擧めてグイと飲み下した。そして主人に劣らぬ程澤山に飲み干した。ところがどうであらう！　可哀さうにサンチョーの胃袋は、勿論彼の主人の胃袋のやうに鋭敏でなかつ

た。それで、嘔出さない内に、彼は激烈な腹痛と嘔氣とに襲はれ、冷汗が流れ、氣が遠くなつたので、これは自分の最後の時が來たのだと、いよ〳〵心からさう思つた位であつた。そして餘り苦しめ悩まされるので、彼はこの香油を呪ひ、またその香油を與れた奴を呪つたのである。

ドン・キホーテは彼がこんなに苦しんでゐるのを見て言つた、『サンチョーよ、私の信ずるところでは、この災難はお前が騎士の位を受けて居らぬところから來たことぢや。この飲料は騎士でない者に對しては利く筈がないと私は思うて居るのぢやからの。』

『貴方樣がさうと知つとりなさるんなら……あゝ忌々しい情けないこつちや！……何で私にそれを飲ませなさつたのぢや？』とサンチョーは答へた。

丁度この時、藥の效驗が現れて、可哀さうな家來は上下の口から夥しく排泄を始めた。それでその下に敷いてゐた莚も上から着てゐた帆木綿の毛布も臺なしにして了つた。彼が痙攣と激痛との爲めに餘り生汗冷汗を出すので、本人ばかりか側にゐる人々も皆もう彼の最後が來たことゝ思つた。この死にもの狂ひと苦しみとはかれこれ二時間ばかりも續いた、その後で彼は主人とは違つて、もう立ち上ることも出來ない程に弱つて疲れ果てゝ居た。しかしドン・キホーテは、前にも言つた通り自分ではもう癒つて丈夫になつたやうに感じたので、新しい冒險を求めて、直ぐさま出發したくてたまらなかつた。彼の到るところ如何なる時にもこの世界には詐欺瞞着が行はれ、その爲めに人々は彼の助力と保護とを必要として居るのである。殊に彼がその香油によつて安心と保護とを得た今に於いては尚更であると、彼には思はれたからである。そこでこの意氣込みに勵まされて、彼は手づからロシナンテに鞍を置き、そして彼の家來の驢馬にも荷鞍をつけてやり、またサンチョーにも手傳つて着物を着せたり驢馬に乘せたりしてやつた。それが濟むと彼も馬に乘つた。そして宿屋の片隅へ行つてそこに立て掛けてあつた手槍をば、投槍の代りに使ふつもりで手に取つた。宿屋には二十人以上の人がゐたが、その殘らずの人が皆立ち並んで彼を見戍つて居た。宿屋の娘も同じく彼を見て居つた。彼もまた決して彼女から眼を離さなかつた。そして彼は折々腹のどん底から吸ひ上げたやうな吐息を吐いた。けれども人々は皆なこの吐息は彼の肋骨に感ずる痛みから來るものに相違ないと思つた。少くとも昨夜彼が膏藥を塗つて貰ふのを見た人々はさう思つたのであつ

た。

二人とも馬に乘つてしまふや否や宿屋の門の前で、ドン・キホーテは非常にもの〳〵しい抑揚のある聲で亭主に呼びかけた、『アルカイデ殿、この御城内に於て拙者が受けましたる御恩惠は、海山もたゞなりません。それに就いては拙者の命のあらん限り足下に對し深く謝意を捧ぐべきものと心得まする。萬一足下に不屆きを働き居る無禮の敵どもあつて、それに仕返しして差し上げるが御報恩の一端ともなることなら、拙者の本分は弱きを扶け、非道に苦しむ者の爲めに讐を報い、不德を懲らしめることに外ならぬと御承知下されい。御記憶をお辿りなされ、そして萬一さやうな事がありますなら、たゞそれを拙者にお話しなさればよいのぢや。さすれば拙者は拙者の受けたる騎士の位にかけて、お望み通り十分に御名譽の回復と賠償とを取つて進ぜませうぞ。』

亭主は平然自若として彼に答へた、『お武家樣、私は貴方樣に仕返しをして頂きたいやうなことは何にもありませんよ。私は自分に何か惡い事をされゝば、その場でそれ相應と思はれるだけの仕返しをする事が出來ますからな。それよかまア御勘定を頂きたいもんで、貴方が昨夜茲でお泊りなされた旅籠料と、二匹の畜生の喰うた大麥代と、それから藁代と晩飯代と寢臺賃とをな。』

『それではこの家は宿屋ぢやな？』とドン・キホーテが言つた。

『へえ、大層評判の好い宿屋でござりますよ。』と亭主は言つた。

『拙者は今の今迄間違つてをつたわい。拙者は全く城ぢやと、しかも惡くない城ぢやと思うて居つた。しかし城ではなうて宿屋らしく見えるから、かうなつてはお前さんがその勘定を免して下さるより外に仕樣は無いのぢや。何故なら私は武者修行の掟に觸れる譯には行かぬからぢや。確かに私の知るところでは、武者修行といふものは何處へ行つても、宿屋宿料その他の代を拂ふことは決してないのぢや（また今日に至るまで私の讀んだ物の中にはそれに反いたことは無かつた）。武者修行どもに捧げられる款待は、すべて彼等の堪へ難い艱難辛苦に對する正當な報酬ぢや。彼等は夜も晝も、夏も冬も、或ひは徒歩で或ひは馬上で、饑渴寒暑に堪へ、ありとあらゆる天變地異に曝され、さま〴〵の冒險を捜して千辛萬苦を嘗めるからぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『そんな事にや用はないですよ。借りた分を拂ひなされ。もうそんな話とか武士道とかは止めて貰ひませう。たゞ私は金さへ拂うて貰へばよいのぢや。』と亭主は答へた。

『お前は譯の分らぬ下卑た亭主ぢやの。』とドン・キホーテは言つた。そしてロシナンテに拍車を當て、手槍を斜に横たへて、誰れも遮らないうちに宿屋を乘出してしまつた。そして暫くの間は自分の家來が後に續いて居るか否かを見返りもせずに突進した。

彼が拂ひをしないで行つたので、亭主はサンチョーから拂つて貰はうと走り寄つた。サンチョーは、自分の主人が拂はない物は自分も拂はないと言つた。何となれば彼は武者修行者の家來であるから、宿屋旅籠屋に拂ひをしないといふ事に就いては、主人に對してと同樣の規則と理由とが彼にも適用されるからである。それを聞いて亭主は益々怒りを激しくして、もし拂はなければ厭な目を見せて無理にも取るぞと嚇した。それに對してサンチョーは、自分の主人が受けてゐる武士道の掟にかけて、假令自分の命を取られても錢一文も拂ひはせぬ。それは武者修行者の立派な古來の慣習が自分に依つて破られてもならぬし、また今後この世に出て來る武者修行者の家來共に、かくも正しい掟を破つたのはお前ぢやとこぼされたり咎められたりしてもならぬからぢやと答へた。

運の悪いサンチョーには氣の毒にも、折も折とて、丁度この宿屋にゐる連中の中には、セゴヴィアの羊毛の梳手が四人、コルドヴの市場から來た針造りが三人、セヴィールの「市」から來た客が二人、皆氣輕な冗談好きなふざけた元氣者ばかりであつた。この連中は皆殆ど共通の衝動にそゝのかされ勸かされたかのやうに、サンチョーの側に駈け寄つて驢馬から引き下して了つた。その間に中の一人は亭主の寢床の毛布を取りに行つた。けれどサンチョーを毛布の中に投げ込んでから見上げると、其處は仕事を始めるに少々天井が低すぎると思つたので、一同は靑天井に蔽はれてをる中庭へ出ることにした。そして其處で、サンチョーを毛布の眞中に入れて、謝肉祭の時に犬でも拔ふやうに（スペイン大學生の風習）胴上げを始めた。毛布の胴上げに遭つてゐる憐れな男の泣聲が餘りに大きいので、彼の主人の耳にまでも屆いた。主人は立ち止まつてぢつとその泣聲に耳を澄まして、また何か新らしい椿事が起つて來たわいと思つたが、やがてそれは自分の家來の聲だといふ事がはつきり分つたのである。彼は馬首を廻らして、大速力で宿屋に取つて返したが、閉つ

てゐるので、どこかに入る口はあるまいかと思つて家をぐるりと廻つた。ところが餘り高くもない中庭の壁のところまでやつて來ると、忽ち自分の家來が胴上げにされてゐることを發見した。彼は、空中を登り降りしてゐるサンチョーを見たが、それが餘りに見事に輕快であつたので、もし彼の怒りの蟲さへ承知してくれたら、彼は噴き出したであらうと作者は信ずる。彼は馬からその壁の頂邊へ攀ぢ登らうとして見たが、ひどく傷付いて亂打されてゐるので、馬から下りることすら出來なかつた。それで、サンチョーを毛布上げにしてゐる一同に向つて、とても精確には筆にも上されないやうな惡口暴言を、馬の上から吐き始めた。けれども一同はこれが爲めに彼等の笑ひ聲も止めねばその惡戲をも止めなかつた。また飛んで居るサンチョーの方でも、いくら嚇かして見ても賴んで見ても殆ど效果がなく全く無駄なその泣き聲をば、止めはしなかつたが、そのうち一同は全くたゞ疲れたために、その惡戲を止した。それから一同はサンチョーを驢馬のところに連れて行き、その上に乘せて上衣を着せてやつた。また思ひやりの深いマリトルネスは、彼が非常に疲れ切つてゐるのを見て、水を飮ましたら元氣がつくであらうと思ひ、成るたけ冷たいのをと思つて井戸から汲み立ての水を壺に入れて持つて來た。サンチョーはこの壺を取つて、口に持つて行かうとしたがその途端に自分の主人の叫び聲で止められた、『サンチョーや、これ、水を飮むな、水を飮むな、これ、水を飮めばお前は死ぬるぞ。そら、こゝに私の貴い香油がある(と言つて例の藥の入つた德利を差し出した)。お前はこれを二滴飮めば確かに囘復するのぢや。』

この言葉を聞いてサンチョーは睨むやうな眼付をした。そして更に高い聲で言つた、『貴方樣は私が騎士でないことをお忘れになつたのですかい。それとも昨夜吐いたその上に殘つてをる腸まで吐き出させて私を殺すお積りですかい？　えゝ胸糞の惡い、貴方の油藥なんかしまつておいて下され。さうして私にや構はずに置いて下され。』そこまで言ふとふつつり言葉を止めて水を飮み始めた。が一飮みするとそれが水だと分つたので、彼はそれを飮みたくなかつた。そこでマリトルネスに葡萄酒を持つて來て與れるように賴んだ。かの女は喜んで自腹を切つてその酒を與へた。彼女はこんな身分の者でこそあるけれど、全くかすかながらどこかキリスト信者らしいところがあるといふ評判であつた。サンチョーは飮み終ると、兩の踵を驢馬に當てた。そ

して宿屋の表戸も開け放されてあつたので、彼は假令自分の身體といふ例の代物をこそ使ひはしたれ、金は一文も拂はないで自分の言ひ分を立て通したので、意氣揚々として乘り出した。實を言へば、亭主は自分の取るべき勘定の形に、サンチョーの鞍嚢を差し押へておいたのだが、サンチョーは餘り慌てゝ駈け出したのでそれが無くなつてゐることに氣がつかなかつたのである。亭主は彼を送り出すや否や表戸を閉めようとしたが、毛布上げの連中はそれに贊成しなかつた。といふのは、この連中は、もしドン・キホーテが眞にかの圓卓の騎士の一人であつたとしても、それを三文の値打にも踏みはしないやうな仲間であつたからである。

第十八章

にはサンチョー・パンザがその主人ドン・キホーテとなしたる議論、並にその他の記すに足る冒險譚が記されてある。

サンチョーはもう驢馬を勵ますことさへ出來ない程に弱つてへと〳〵になつて自分の主人に追ひついた。彼のその樣子を見てドン・キホーテは言つた、『これ、サンチョーや、私は今慾々かう思ふぞ、この城乃至宿屋は疑ひもなく魔法にかゝつて居るのぢや。何故といふに、お前をあれほど慘酷に弄んだ奴等は、あれは幽靈か他界の者かでなくて何であらうぞ？　また私が固くさうと信ずるのは、私があの中庭の壁の側でお前の氣の毒な目に逢うて居るのを見て居つた時ぢや、あの時私は壁に登ることも出來ねばこのロシナンテから降りることも出來なんだのぢや。それは確かに奴等が私に魔法をかけたからぢや。私はこの一命にかけてもお前に誓ふが、あの時壁に登れるか馬から降りられたら、私はお前の爲めに復讐をして、あの傲慢な泥棒どもに未來永劫いつまでも彼奴等の出來心を忘れられんやうにしてやつたらうにのう。尤もそのやうな事をすれば、武士道の掟に牴觸する事は知つて居るがの。その武士道の掟は毎々お前に話した通り、騎士たる者は只自己の生命身體を保護するに急且つ大なる必要ある場合の外は、決して騎士ならぬ者に手をかけては相成らぬと申すことぢや。』

『私も出來たことなら騎士の位があらうがなからうが、仕返しをしてやりたかつたんですが、』とサンチョーが言つた、『私には出來ませなんだわい。尤も私はな、あの私をおもちやにした奴等は、貴方樣の仰しやる樣に幽靈でもなけりや魔法のかゝつた人間でもなうて、私らと同じ身もあり骨も

ある人間ぢやと思ひますがの。そして彼奴等は皆面々の名を有つて居りましたよ。私は彼奴等が私を胴上げする時に名前を呼び合うとるのを聞きましたよ。一人はペドロ・マルティネズ、もう一人はテノリオ・ヘルナンデス、それからあの亭主は左手利きのジャン・パロメックと呼ばれて居りました。それぢやから、旦那様、貴方様があの中庭の壁を飛び越えることがお出来なさらなんだのも馬から降りられなんだのも、魔法より外の何かの爲めでございますよ。そんなところから考へて見ると私にやはつきり分りますわい、私らがかうして様々の椿事を捜し廻るその果ては、自分の足さへどちらが右やら分らんやうな椿事が起りますよ。それぢやから私の小さな腦味噌で考へると今は丁度刈入時ぢやし、一番良い賢いことは、村へ往んで家業を勵んで、諺にもいふやうに、ゼカからメッカへ手桶からバケツへとうろつくのは止めにすることでございます。』（ゼカ及びメッカはともに同々教の聖場として巡禮客のほくとするところ。）

『サンチョー、お前は武士道といふものを一向に知つて居らんの。』とドン・キホーテは答へた、『まア默つて辛抱せい。この務めを全うする爲めに廻國するのがどれ程名譽な事であるか、それをお前が自分の眼でしかと見る日が來るであらう。いやまア一體、戰に勝つとか自分の敵を征服するとかいふ事よりも大きな愉快がこの世の中にあらうかい。それに比べられる喜びがあらうかい。疑ひもなく何一つありはせんのぢや。』

サンチョーは答へた、『私はようは知りませんが、大方さうかも知れません。たゞ私の知つとります事は、私らが武者修行者になつてから、いや貴方様がおなりになつてから、何故なら私は自分でそんな偉い人達の仲間ぢやと思ふ權利は有ちませんからの、私らはあのビスケイ人と戰うた時の外はまだ一度も勝つた例がございません。さうしてあの時ぢやて貴方様は耳を半分と兜を半分減らされてございました。あれから今までいつも椿擊また椿擊、拳骨また拳骨で、お負けに私は毛布上げにまでされましたよ。しかも魔力のある奴等にかゝつたので仕返しも出來ませんから、貴方様の仰しやるやうな敵を降參させる嬉しさがどんな味のものやら知ることも出來やしませんわい。』

『サンチョーや、私もそれでおもしろうないのぢや。またお前もおもしろうない筈ぢや。』とドン・キホーテは言つた、『ぢやが是からは私は、どんな魔法もその劍の持主には力を及ぼすことが出來ぬほどに妙技を以て作られた業ものを

手に入れるやうに心掛けよう。アマディスが「燃ゆる劍の騎士」と呼ばれた時に有つて居つたあの名刀でも、運好くば、私の手に入らぬこともないからのう。あの名劍は凡そ今までに世界の騎士が佩びた最上の一口で、云ひ傳へられてをる德の外に、切れ味は剃刀の如く、どのやうに嚴丈な魔法のかゝつてをる胴でも、あの劍を防ぐことは出來なんだのぢや。』

『私はやつぱり詰りませんわい。もしかそんな名劍があつてそれが貴方樣のお手に入つたとて、あの香油のやうに騎士の位を有つた者にだけ役に立つて利き目があるといふことになりませう。そして家來どもには辛い眼を見せてくれませう。』とサンチョーは言つた。

『そんなことを心配するな。サンチョーよ、神はお前をもつと好くして下さるわい。』とドン・キホーテは言つた。

かう話しながらドン・キホーテと家來とは道を進んで行つたが、折しもドン・キホーテは二人の辿る道の上に濛々たる砂煙の雲が起つてだん〳〵近寄つて來るのを見た。それを見てドン・キホーテはサンチョーに言つた。

『おゝ、サンチョーよ、今日こそは私の幸運が私の爲めに貯へてをる恩惠の見られる日ぢやわい。確かに今日こそは平生と同樣に私の腕力を現はさねばならぬ日ぢや。また今日こそは後世萬代の爲めに名譽の書籍に記し遺されるやうな偉業を爲すべき日ぢや。お前は向うに立つあの砂煙が見えるか？　ウム、さうか、あの砂煙は悉く今前面から進軍して來る大軍勢に依つて捲き起されたので、あの大隊はさまざまの多數の國民の聯合したものぢや。』

『あれが軍勢ぢやとすると、大軍勢が二つある譯でござりますの。そら、こちらの背後の方にも丁度あんな砂煙が立つとりますもの。』とサンチョーは言つた。

ドン・キホーテは振り返つて見たが本當であつた。それで非常に喜んで、その砂煙はこの平原の眞中で今まさに會戰しようとして居る二個の軍勢だと定めて了つた。蓋し彼の空想は、いつ如何なる時にも、騎士道の書物にかいてある戰鬪とか魔法とか冒險とか氣ちがひじみた離れ業とか戀愛とか或は挑戰とかに充たされてゐたからである。そして彼の言ふことも考へることもすることも皆そんな事柄に關係したものであつた。さて彼が見たその砂塵の雲といふのは、同じ道を反對の方角からやつて來る二つの夥しい羊の群が立てたのであつたが、それは砂煙の爲めに間近くなるまでは見えなかつたのである。しかしドン・キホーテはそ

れは二つの軍勢だと手強く言ひ張るものだから、サンチョーもとう〳〵それと思ひ込んで、かう言つた、『はゝア、それぢや、私らはどうすりや好からうぞの？』

『何？　弱い方に、加勢の入り用な方に加勢をしてやるのぢや。サンチョーよう聞けよ。私らの前面から來る軍勢はトウラボバナ大島（古代印度セイロンの島）の君主であるアリファンファロン皇帝に指揮せられ引率せられて居り、また背面から來る方のは、その敵方たる、裸腕のペンタポリンと呼ばれるガラマンタス人（アフリカ内部の住民）の王の軍勢ぢや。何故裸腕といふかとなら、あの人はいつも右の腕を裸にして戰場に出るからぢや。』

『しかしその二人の王様は何ぢやてそんな敵同士になつて居られますかい？』とサンチョーが訊ねた。

『二人が敵同士になつた譯はの、このアリファンファロンは兇暴な異教徒ぢやがペンタポリンの娘御と戀仲になつた。その娘御は中々美しうてその上しとやかで、またキリスト信者なのぢや。それ故父御はアリファンファロンが第一に僞りの預言者マホメットの宗教を捨てゝ自分と同じ宗教を信ずるのでなくば、自分の娘を異教徒の王に與へることはいやなのぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『なるほど、ですがペンタポリンは全く尤もでございますな。私は出來る丈けその人に加勢しますわい。』とサンチョーは言つた。

『サンチョーよ、さうせい、さうすればお前の爲すべき義務を果すのぢや。かういふ合戰に付き合ふのは必ずしも稱號を有つた騎士には限らんからの。』とドン・キホーテは言つた。

『それはよう分ります。しかしこの驢馬は、合戰が濟んでからきつと見付け出せるには、何處へ置いときませうかの？　こんな獸に乘つて戰場にまでも乘り込むといふ慣例はないと思ひますからの。』とサンチョーが答へた。

『それもさうぢや。』とドン・キホーテは言つた、『そこで驢馬を處置する最上の方法は、そいつが見失はれようが見失はれまいが、そいつの好きに委せることぢや。何故と言へば、私らが戰に勝てば馬は澤山に分捕ることが出來て、私のロシナンテまで他の馬と取り代へる破目になるかも知れん位のものぢや。しかし、この兩方の軍勢に加はつてゐる重立つた騎士たちの事を些とお前に知らせて置きたいから、私に從いて見物するがよい。それには、お前が一段とよう見て目印の付けられるやうに、あそこの小高い丘へ立ち退か

う。あそこからはどつちの軍勢も見られるのぢやらう。』

彼等は立ち退いた。そして小高い地面に身を置いた。そこからドン・キホーテが軍勢にして了つたところの二個の羊群がはつきりと見える筈であつたが、それらの羊群の立てた砂煙の爲めに朦朧となつて見分けがつかなかつた。それにも拘らずドン・キホーテは、見えないものの存在しないものを自分の想像で見ながら、大聲で始めた、『それ、あそこに黄色の甲を着た騎士が見えるぢやらう。あれ、あの人の楯の面には少女の脚下に冠を被つた獅子が蹲まつて居るのぢや。あの人が勇敢なる銀橋の君主ラウルカルコーぢや。あの黄金の花模様の甲を着て栗色の地に三つの銀の冠を描いた楯を持つて居る騎士は、威名讃くクィロシアの大公爵ミココレムボーぢや。その右手に居る、あの巨大な體格の騎士は三つのアラビア人はアラビア全土を三つに區分して呼んだこと(ギリシャ人)がある)を領する大膽不敵なるブラン・ダバルバラン・デ・ボリーチぢや。あの人は甲の代りに蛇皮を纏ひ、楯の代りに扉を使うてをる。それは言ひ傳へによると、かのサムソンが死を以て敵に復讐した時に、大地へ覆へしたといふ殿堂の門扉の一つぢやといふ事ぢや。さてお前の眼を反對の側へ向けい。すれば眞先きに此方の軍勢の先鋒にゐるのが、連戰連勝未だ曾て敗を取つた例のない新ビスケィの君主カルカジオナのティモネルぢや。この人は栗色と綠色と銀色と金色で四等分に彩られた紋のある甲を着て、その楯の面には金色の猫が描かれ、その地は朽葉色で「ミョウ」といふ銘が書いてある。それは、この人の思ふ婦人の名前の初めの文字ぢや。その婦人はアルガルエー州の公爵アルフェニクェンの娘御、絶世の美人ミョウリーナといふ話ぢや。今一人は、それあの逞しい軍馬の腰にどつかと乘つて、雪のやうに眞白い飾りのない無紋の楯を有つてゐるのは、新參の騎士で、生れはフランス人、名はピエル・パエン、ユートリック男爵領地の君主ぢや。今一人の、あの輕快な斑色の駿馬の脇腹を鐵靴穿いた踵で蹴つてをる、栗色杯の紋章付けた騎士は、エスパルタフィラルドー・デル・ボスクといふネルヴィアのえらい公爵ぢや。あの人の楯の模樣は天門冬の草でそれにカスティリヤ語の "*Rastrea mi suerte*" 「ラストリアにいふ語は本來「足跡をつけて巡る」といふことで此の銘の意味は「運命の足跡に從つて」とも「我が運命は地上を這ふ」ともなる天門冬の草は脊の低いものだからこれにもかけてある。といふ銘がある。』かういふ風に彼は自分の想像から出任せに、あれやこれやの部隊から幾人かづつの騎士の名を呼上げて行つた。それと共に、前代未聞の氣違ひじみた幻想に驅られて、その騎士等に銘々の紋章や色や模樣や銘をば出鱈目に當てが

つた。そして休みもせずに續けた、『前面のこの部隊は樣々の國民が編制して居るのぢや。こゝにはあの名高いザンサス河の淸水を飮む人民（古代地理に見える小アジアの一都市の民）や、森林の多いマッシリア（マルセイユの古名）の平原を疾驅する人民や、「棕櫚ゆるアラビア」の精良な純金を篩ふ人民や、あの玲瓏たるセルモドン河の世に知られた涼しい岸邊の樂しみに浴する人民（古代小アジア東北部地方の民）や、あの金色のパクトラス川（古代小アジア内リディア領内の川）の支流をいろいろさま〴〵に流れ變へさせた人民や、約束を守らぬヌミディア人や、弓術で名高いペルシャ人や、疾走しながら鬪ふパルシア人やメデア人、その住居を常に轉ずるアラビア人、色白で慘酷なシジア人、脣に穴を開けてゐるエシオピア人、それからまだ數限りない國々の人民が居るのぢや。私はその名前を、一々思ひ出すことが出來ぬが、その容貌は一目見れば見分けがつく。そこから來る今一つの部隊の中には、あの橄欖茂るベティス河の淸流を飮む人民や、いつも洋々たる金色のタホー河の水で顏を磨き立てる人民や、かの神聖なゼニール河の豐饒な河流の灌漑を受ける人民や、牧場に充ち滿ちたタルテシアの平原を彷徨ふ人民、ジエレズの極樂牧場に遊び戲れる人民や、赤い穀物の穗の冠を被つて居る豐かなマンチュア人や、ゴス民族の古い遺物の鐵器を纏うた者共や、穩かな流れで名高いピシュエル河に浴みする人民や、隱れた流れとして有名な曲り迂つたグァディアナ河（流れの一部が地下を行く故にいふ。ペティスの河以下の地名河の名は皆スペイン國内のもの）の廣漠とした牧場に獸を草飼ふ人民や、松の樹に蔽はれたピレニース連山の寒氣や峨々たるアペナイン山の肱しい白雪に身顫ひする人民や――一口に言へば、全ヨーロッパに包み入れて居る限りの人民が來るのぢや。』

やれ〳〵！　何といふ澤山の國々や國民をあげたことぞ！　驚くべく無雜作にそれ〴〵に獨特な屬性を附けて。作り話の出物の中で讀んだことが、溢れるばかり一杯に彼の身内に廻つて居たのだ！　サンチョー・パンザは彼の言葉に釣り込まれて口も利かずに、自分の主人の讀み立てゝ居る騎士や巨人が見えるか知らんと時々向うを透して見た。けれども一向見えないので主人に言つた、

『旦那樣、何のこつちやいな。貴方樣の仰しやるやうな者は騎士でも巨人でもねつから居りやしませんがな。これも昨夜の幽靈と同じやうに全く魔法でござりましよわい。』

『何でお前はそんなことが言へるのぢや？　お前はあの軍馬の嘶きやラッパの響きや、太鼓の音が聞えんのかい？』とドン・キホーテは答へた。

『牝羊や牡羊どもの鳴聲の外には何にも私にや聞えません。』とサンチョーは言つた。それは本當であつた。丁度この時羊の二つの群が近寄つて來たのである。

『サンチョー、お前は怖がつとるので、』とドン・キホーテが言つた、『それで正しく見ることも聞くことも出來ぬのぢや。何故と言へば恐怖の結果は、五官を惑亂させて物事をありのまゝと違へて見せるものぢや。お前そんなに怖くば片隅に引込んで私の邪魔をするな。私が加勢をしてやる方を勝たせるには私一人でも十分ぢや。』と言ひながら彼はロシナンテに拍車を當て、槍は横たへたまゝ、坂を電光の如く駈け下つた。サンチョーは大聲で彼を呼びとめて叫んだ、『旦那樣、ドン・キホーテ樣、引き返して下され。本當に、それは、やれ〳〵貴方の攻めかゝらうとなさるのは牡羊と牝羊でござりますよ！　お返しなされ！　私を生んだ親父は不仕合せものぢや！　こりやまア何もふ氣違沙汰ぢや！　そうら、そこにや巨人も騎士も猫も紋章も塗分けの楯も全る塗りの楯も空色の杯も魔のついた杯もありやしませんよ。貴方は何をなさるのぞい？　あゝこりや飛んでもないことになつてしまうた！』しかしドン・キホーテはいくらこんなに歎願したとて引き返しはしなかつた。却つて彼は大聲で叫びながら進んで行つた、『やア〳〵騎士たち、「裸腕」の勇壯なペンタポリン皇帝の旗下に屬いて闘はれる方々は、殘らず拙者にお續きなされい。方々の主君の仇なるトウラボバナのアリファンファロンに如何に易々と拙者が復讐して進ぜるかお目にかけ申さう。』

さう言ひながら彼は牝羊の部隊の眞中へ突進した。そして一生懸命で人間の敵兵でも突き刺してゐるやうな元氣と勇氣とを以て羊を槍にかけ始めた。羊の群に附いてゐる羊飼ひも羊商人も彼に止めろと叫んだ。けれども何の效果もないのを見て彼等は銘々投石紐を取り出し、ドン・キホーテの耳を目がけて拳大の石塊を投げ始めた。けれどドン・キホーテは石塊には眼もくれないで、右に左に走せ廻りつゝ言ひ續けた、『傲慢なるアリファンファロン、汝は何處に居るのぢや？　サア此處へ來い。拙者こそは、一騎打ちの戰によつて汝の武勇を試し、かの勇壯なるペンタポリン・ガラマンタに對する汝が曲事の償ひとして汝の命を渡させようとする無双の騎士ぢや。』丁度この時、小川の金米糖小石のが飛んで來て彼の脇腹を擊ち、肋骨を二本胴の中へめり込ませた。非常な打擊を受けたやうに感じたので、彼は確かに打ち殺されたか、重傷を負はされたのだと思つた。そして

例の藥のことを思ひ出して、壜を取り出し、口に當てがつて、内容物を胃の腑に注ぎこみ始めた。しかし、十分と思はれたる丈け飲み終へないうちに、またもや一つ扁桃が飛んで來て、彼の手頸と壜とに見事に命中した。それでその壜は粉々に碎かれ、序に彼の口から三四枚の前齒と奥齒が敲き出され、手の指も二本ひどく挫かれた。この第一擊と第二擊との烈しさに、哀れなこの騎士はわれにもあらず馬から後方にドウと落ちた。羊飼ひどもは彼の側にやつて來て、確かに殺して了つたと思つた。そこで大急ぎでその羊の群を一つに纒め、七匹以上もあつた羊の死骸を拾ひ上げて、これから何うなるかゞ分るのをも待たないで出發した。

この間中サンチョーは丘の上に立つて、主人のしてゐる氣違ひめいた働きをぢつと見てゐた。そして、自分の髯を引き搖りつゝ、運命が自分と主人とを知り合ひにしたその時刻と機會とを呪つたのである。やがて、主人が地べたに倒され、羊飼ひらが引き上げてしまつたのを見て、彼は丘を下りて主人の處へ駈けつけて見ると、主人は正氣を喪つてゐなかつたが、なか〳〵悪い容態であつた。そこで彼は言つた、『ドン・キホーテの旦那樣、お引き返しなされと、私が言はなんだことですかい。また貴方が攻めなされるのは軍勢ぢやない羊の群ぢやと言はなんだことですかい？』

『さアそれほどまでに、私の敵のあの魔法使ひの奴めは物を變へたり瞞したりすることが出來るのぢやよ。』とドン・キホーテは答へた、『サンチョーよ、あの手合どもは私らの眼を欺いて自分の好きなやうな形に見させるのは何でもないことなのぢや。そして私を迫害するこの悪者は、私が今度の戰で名譽を得る筈なのを知つてそれを嫉んで、あの敵の軍勢をば羊の群に變へよつたのぢや。とにかく、サンチョーよ、私が賴むから、お前はあれに瞞されずに、私の言ふのが本當ぢやとだけは思ふがよいぞ。お前の驢馬に乘つて、そつとあいつらの後をついて行け。さうすれば此處から幾らも離れぬうちにあいつらは元の形に返つて、羊でなくなつて、私が最初お前に言うて聞かせたのと一點の違ひもない人間になるのが見えようわい。ぢやが、私もお前の助けや手傳ひが入用ぢやで、今は一寸行かぬがよい。さてこゝへ來て、私の前齒や奥齒が何本無くなつとるか檢べてくれい。どうやら私の口には齒が一本も殘つてをらんやうな氣がするからの。』

サンチョーは、殆ど主人の口の中へ自分の眼を入れる位に側近く寄つた、丁度この途端に、例の香油がドン・キホーテ

の胃の腑に利いたので、サンチョーが口を検めようとしたその刹那、主人は鐵砲よりももつと烈しい勢ひで、その親切な家來の髯へ一杯腹の物を吐き出した。

『ひや大變々々！』とサンチョーは叫んだ、『こりやまア一體どうした事ぢや！　かう口から血を吐くんぢや、この人は急所を傷られたに違ひないわい。』しかしそれを今少し仔細に檢べて見ると、その色や味や臭ひによつて、これは血ではなくて、さつき主人の飲むのを見て置いたあの香油だといふことが分つた。そこで彼は胃の腑が引つくり返るほどムカついて來て、自分の腹の中のものを、自分の主人の身體の上へ嘔してしまつた。これで二人とも立派な樣子になつてしまつた。サンチョーは、自分の鞍嚢から何か身體を拭く物や、主人の氣分を恢復させる物を持つて來ようと、驢馬のところへ走つて行つた。けれどもその鞍嚢が無いので、彼は殆と正氣を喪はうとした。そしてまた更に自分を呪つた。そして、たとひ自分の奉公の給金や例の約束の島を支配する一切の希望などを棒に振つても、主人に別れて家へ歸らうと深く心に決したのである。

折しもドン・キホーテは立ち上つた。そして左の手で齒がぞろ〳〵と落ちないやうに口を押へ、右の手は、今までに主人の側から一寸も動かないでゐたロシナンテ——かくまでも彼は忠義で行儀がよかつた——の轡を押へて、深く落膽した人の如く驢馬に凭れかゝつて頬杖ついて彳ずんでゐる家來のところへと身を運んだ。ドン・キホーテは彼がそんな機嫌でいかにも悲しげにしてゐるのを見て、彼に言つた、『サンチョーよ、よう心に止めて置けよ。人は他人よりも餘計に働かねば、他人に勝ることはないのぢや。私らの上に降りかゝるこの嵐は、皆な今に晴天が來て物事が私らの都合のよいやうになるといふ前兆なのぢや。善いも悪いも何時までも續くことは出來んことぢやからのう。そこで、今まで長い間悪いことが續いたからには、もう善いことが手近にある筈なのぢや。それぢやからお前は私に降つて湧いて來たこの不仕合せに仲間入りをする譯がないのぢやから、何もそのことで氣を落さんでもよいわい。』

『どうして仲間入りをせんどころか！　昨日あいつらが毛布上げにした男は、もしか私の親父の息子ぢやなかつたのでもござりますかい？　また今日私のありたけの寳を入れたまゝ無くなつたあの鞍嚢は、ありや私のぢやないよその人のでもござりましたのかい？』とサンチョーは答へた。

『何つ？　サンチョー、あの鞍嚢が紛失したのか？』とド

ン・キホーテは言つた。

『へい、紛失しましたよ。』とサンチョーは答へた。

『さうなると、私らは今日は食ふものがないのぢや。』とドン・キホーテが答へた。

『さうかも知れませんよ。貴方樣が知つてござると仰有りましたあの、それ、貴方樣のやうに不運な武者修行者たちが、かういふ折の凌ぎに食べるといふあの藥草がこの草原に無いことになりますとなア。』とサンチョーは答へた。

『まアそれはさうぢやが、』とドン・キホーテは答へた、『私は今といふ今は、パンが四半片か、それとも一片に鰊の頭が二つでもあれば、あのディオスコリデス（一二世紀頃のギリシヤの名醫）に記されてお負けにラグナ博士（ディオスコリデスの著書を飜譯した十六世紀のスペインの醫家）の註釋さへついてをる藥草の殘らずよりもましぢやと思ふわい。然し善人のサンチョーよ、お前の驢馬に乘つて私と一緒に來いよ。凡ての物を與へて下さる神樣、空の蚊も地の蛆蟲も水の蝌蚪一斗も見棄て給はず、お慈悲によつて惡人にも善人にも日を照らし、正しい者にも正しからぬ者にも雨を遣はし給ふのぢやから、私らを（取りわけ私は現在かうやつて神樣の御奉公に精を出してをるから尚更のことぢやが）お見棄てなさることはあるまいからの。』

『貴方樣は武者修行よりか說敎師にならしやられた方がようござりますの。』とサンチョーは言つた。

『サンチョーや、武者修行者は何事をも知つとるのぢや、又知つとるべきものなのぢや。昔は武者修行者も、パリの大學を卒業でもしたやうに、大道の眞中で說法や議論をするだけの素養があつたのぢやからの。そこで、槍は更に筆を鈍らすことなく、筆は槍を鈍らすことなしといふことが分るわけぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『なるほど、そりや貴方樣の仰有る通りでござりましよ。』とサンチョーは言つた、『ぢやが、もうそろ〳〵出掛けてどこか今夜の泊り場所を見つけませうや。そしてどうか神樣のお惠みで、毛布や毛布使ひや、怪物や魔法使ひのムーア人などの一切居らんところへ泊りたいもんでござりますな。そんなものが居たことなら、何も彼もおしまひぢや。』

『それは神樣にお願ひせいよ。のう。そして今度私らの泊り場所を定めるのはお前に任せるから、お前の好きなところへ案內して吳れい。さてお前の手をこゝまで伸ばしてその指で觸つて見てくれ。そしてこの上脣の右側の齒が何本拔けとるか見て吳れい。そこのところが痛むでの。』とドン・キホーテは言つた。

サンチョーは指を差し込んで、觸り廻しながらきいた。『貴方樣の使うてござつた奥齒は此方側に何本でござりましたかの？』

『絲切り齒の外に四本ぢや。みんな無事で丈夫ぢやつた。』

とドン・キホーテは答へた。

『旦那樣、よう氣を附けて物を仰有りませよ。』とサンチョーは言つた。

『五本でなければ四本ぢやわい。一體私は生れてから前齒も奥齒もついぞ拔いたことはないし、蟲が食つたり腐つたりして拔けたり損じたりしたこともないのぢやからの。』

と、ドン・キホーテは答へた。

『さうですかえ、それぢやア、この下側には奥齒は二本と半分しかないし、上には半分も何にもありやしませんよ。こゝはまるで私の手のひらのやうにすべ〳〵しとりますわい。』とサンチョーは言つた。

『私は不運な人間ぢやわい！』とドン・キホーテは家來からこの悲しい消息を聞かされて言つた。

『右腕でさへなかつたら、一そ片腕取られた方がましぢやつたよ。何故といふにのう、サンチョー、齒のない口は石臼のない轢粉事のやうなもので、また一本の齒は一つの金剛石よりも遙に價のあるものぢや。しかし我々嚴かなる騎士道を奉ずる者は、とかくかういふ事になりがちのものぢや。さア、驢馬に乘つて、案内してくれ。お前の足取り次第に私は隨いて行かう。』

サンチョーは命ぜられた通りにした。そして宿りの見付かりさうなと思はれる方へ、人通りのある大道を離れないで進んだ。やがて彼等が遲い步調で進んでゐる時に、——蓋しドン・キホーテは兩腮の痛みの爲めに急ぐことが苦しくて氣が進まなかつたからである——サンチョーは何か話をして主人を慰め、氣を紛らしたらよからうと考へた。そして彼が話したもの〻中には、次の章で述べられるものがあつたのである。

第十九章

サンチョーがその御主人となしたる拔目なき議論、及び主人の出逢うた死骸の冒險、その他の著しき出來事。

『旦那樣、近頃私らに降つて湧くかういふ災難はな、皆なきつと貴方樣がお立てなさつたあの誓言を守らんで、武士の道に背きなさつた罰ぢやらうと思ひますがなア。それ貴

方様がマランドリノとか何とかあのムーア人のことを言はれましたが、私ア別に好うも覚えてをりませんがな、あいつの兜を分捕るまでは食卓に就いて食事もせんとか女王さまを抱きもせんとか、その他いろ〳〵守るといふて誓言をなさつたろがな。』

『お前の言ふ通りぢや。』とドン・キホーテは言つた、『しかし實を言へば、あの誓言は私の記憶から脱け出てしまうて居つたのぢや。そして又お前の身にあの毛布騒動が起つたのも、お前が早う私にその事を思ひ出させなんだお前の落度の爲めぢやと思へよ。しかし騎士の道には何事に對しても和解の道があるのぢやから、私も償ひはしようわい。』

『へえツ！　それぢや、私も何か誓言を立てたのでござりますかい？』とサンチョーは言つた。

『誓言を立てたらうが立てまいが同じことぢや。お前が全でその一味でないことはないといふことが分れば十分ぢや。まアそれは何方にせよ、私らが二人ともその償ひをするのは間違うたことでもあるまいよ。』とドン・キホーテは言つた。

『そんならば、あの誓言を忘れなさつたやうに今度も忘れちやいけませんぞ。事によるとあの怪物どもがもう一遍私をおもちやにする氣になるかも知れませんからな。また貴方様がそんなに片意地ぢやと分つたら貴方様でもそんな目に逢はせるかもしれませんよ。』とサンチョーは言つた。

こんな話をして居る中に、彼等がまだ泊り場所に行き着きもせねば見付けもせぬうちに、もう道中で日が暮れた。それに更に悪いことには、例の鞍嚢の紛失と共に糧食庫も兵站部もすつかり紛失してしまつたので、彼等は飢えて死にさうになつた。おまけにその災難の上塗りに、拵へた事ではないが全く拵へ事のやうな一つの冒險に出逢つたのである。その次第はかうであつた。夜は稍暗く迫つて來た。それにも拘らず彼等は進んだ。サンチョーは、この道は國道だから一二リーグ（一リーグは二里餘）の内には、どこかに宿屋が見つかりさうなものと安心してゐたのである。そこで、夜は暗く、家來は飢え、主人はげつそり腹がへつて、だん〳〵道を辿つてゐると、同じ道を此方の方へ、丁度星の動くやうに見える非常に澤山の火の影がやつて來るのが見えた。サンチョーはそれを見てぎよツとした。ドン・キホーテも餘り好い氣持はしなかつた。一人は騾馬の面勒を、今一人は痩馬の手綱を何れも控へた。そして二人はぢつと立ち止つて、これは一體何に變化るであらうかと氣遣はしげに見戍つた。

するとその火影が次第に自分等に近づいて來るのが分つた。そして近づけば近づくほど、その火は段々に大きくなるやうに見えた。この光景に接して、サンチョーは恰も水銀汞を服まされた人のやうに慄へ出した。そしてドン・キホーテの髪はずうんと立つた。しかし彼は少しばかり元氣を引き立てゝ言つた、『サンチョー、今度こそはなか〳〵えらい危險な冒險ぢやよ。今度こそは私のありたけの勇氣と決心とを出さねばなるまいぞよ。』

『やれまアー　私にやもう さうらしう思はれて來ましたが、ひよつと今度のが怪物の冒險でござりましたら、私はそれを辛抱する肋骨ア持つとりませんぞい。』とサンチョーは言つた。

『たとひ彼奴らがどんな怪物ぢやにせよ、私はお前の着物の絲一筋にでもあいつらを觸らせはせんぞよ。一體この前の時あいつらがお前を手玉に取つて遊んだのは、ありや私があの中庭の壁を跳び越せなんだからのことぢや。しかし今度は廣い野原ぢやから、私も思ふ存分劍を揮ふことが出來るぢやらう。』ドン・キホーテは言つた。

『それでもこの前のやうに彼奴らが魔法を使うて貴方樣を跛者にしたら、曠原でも何處でも何の違ひがござりましよに？』とサンチョーは言つた。

『とにかく、サンチョーや、私の勇氣がどれ程あるかやつて見りや分らうから、お前は氣をしつかり持つて居つてくれよ。』とドン・キホーテは答へた。

『叶ふことならさう致しませう。』とサンチョーは答へた。

そして二人は一體その動いて來る火影が何であるかをよく見る爲めに、道の片側へ身を引いた。やがて間もなく各々馬に跨り各々炬火を手にしてをる二十人ばかりの白裝束が見えて來た。その物凄い樣子はサンチョーの勇氣をすつかり消してしまつた。彼は癘ひの附いた人のやうに齒をがち〳〵と鳴らし出した。そしてその白裝束どもの後ろから黑布に蔽はれた吊り臺が續き、それに附き添うて乘つてゐる騾馬の足もとまで屆くやうな喪服を着た六人の人のやつてくるのがはつきりと認められた時には、サンチョーの元氣はいよ〳〵沈み、その齒はいよ〳〵がち〳〵と鳴つた——その一行が靜かな步調で步いて來るところからして、その乘つてゐるものが馬でないことは明かに見分けがついたのである。そして白裝束どもは步みながら低い悲しげな調子で何かぶつ〳〵言つてゐた。こんな時刻に、こんな淋しい所で、こんな異樣な光景は、サンチョーの心に、またその

主人の心にさへも、恐怖を惹き起させるに十分であつた。そしてサンチョーは(ドン・キホーテは別であつたが)果して恐怖を起して、あらゆる決心も打ち碎かれたのであつた。しかし、主人は丁度それと反對であつた。彼は自分の想像力で、忽ちこの一伍一什をば物語にあつた冒險の一つとして鮮かに心に描き上げてしまつたのである。彼は、この吊り臺は棺であつて、それにはひどく傷を受けるか殺されるかしてゐる或る騎士が乘せられてゐて、その騎士の爲めに復讐をしてやることが自分だけの爲めに取つて置かれた仕事であると思ひ込んだ。そしてそれ以上は考へずに、槍を横たへ、しつかと鞍に身を落ち着け、勇ましい元氣と樣子とで、その白裝束どもがどうしても通らねばならぬその道の眞中に陣取つた。そして彼等が手近に近づくのを見るや否や、聲を張り上げて言つた、

『お止まりなさい騎士の方々、たとへ何人でござらうとも。そして貴方がたは如何なる人か、何處から來られたか、またその棺に載せてござるのは何であるか、逐一拙者に申し立てられたい。と申す譯は、お見かけ申すところ、貴方がたは何か惡事をなされたか、或ひは人に惡事を仕掛けられなされたかのやうである。そして又貴方がたが惡事をなされたものなら、拙者が貴方がたを懲しめようし、さもなくば貴方がたの受けられた損害は拙者が仕返しをして上げるによつて、拙者が仔細を承ることは至當でもあれば必要でもありますのぢや。』

『私どもは急いでをります。宿屋もなか〳〵遠いので、貴方の仰有るやうなさういふ話をする爲めに止るわけには參りません。』と白裝束の一人が答へた。そしてその騾馬に拍車をあてゝ、進行を續けた。

ドン・キホーテはこの答へに依つてしたゝかに立腹した。そして相手の騾馬の面靭を摑んで言つた、『止まんなさい、そしてもう些と禮儀を守つて、私が今訊ねたことを答へなさるがよい。さもなくば、貴方がたは殘らず私と勝負をさつしやるがよいのぢや。』

騾馬は臆病であつた。そこで面靭を摑まれたので、吃驚して、後足で立ち上り、背の上から乘手を地べたに拋り出してしまつた。この白裝束の人の落ちるのを見て、徒歩で居つた一人の附人はドン・キホーテを罵り始めた。それでドン・キホーテも腹を立てゝその上の挨拶なしに、槍をひねつて喪服を着て居る一人を衝き、したゝかに傷つけて地べたへ轉がした。それから四方八方に殘りの面々を衝き立て擊

も廻した。その敏捷さは實に見物であつた。全くその刹那にロシナンテに翼でも生えたかと思はれるほど彼は輕快にまた堂々と身を働かしたのである。白裝束どもは皆臆病な人間で武裝して居なかつたので、各々逸早くこの騒動から身を脫がれ、手に〳〵燃ゆる炬火を携へてこの曠野を駈け拔けて行つた。その樣子は丁度何かの祝宴か祭禮の晩かの假裝行列の走つて行くやうであつた。黒衣の會葬者も下着や長上着に絡まれ巻きつかれて、身動きも出來なかつたので、ドン・キホーテは自分の身には何の危險もなく、彼等殘らずを擊ちものめし追ひ拂うた。但し彼等が心ならずも逃げたのは、これは人間でなくて、自分達の吊り臺の中の死骸を淺ひに來た地獄の惡魔であると思つたからであつた。

サンチョーは主人の剛勇に驚いてこの騒動を殘らず見て居つた。そして腹の中で思つた。

『なる程私の御主人は、自分で言はつしやる通り膽の太い豪勇なお方ぢやわい。』

騾馬に投げ出された第一の男の側近く、地上に一本の炬火が燃えながら落ちて居た。その光でドン・キホーテは彼を見とめたので、そこにやつて來て顔に槍の先を突きつけて、俘虜になるか、でなくば殺して了ふぞと呼びかけた。

これに對してその平輔つてゐる男は答へた、『私はもう御覽の通り全く俘虜でございます。私は片脚が挫けたので身動きも出來ません。どうか、もし貴方がキリスト信者の紳士でござるなら、私を殺さないで下さい。私は資格のある僧侶でしかも一等級の僧職に居るものですから、殺しなさると重い瀆神罪を犯されることになりますぞよ。』

『それでは、貴方は僧侶でござるのに、どういふ惡魔が此處へ、貴方を連れて來たのぢやな?』とドン・キホーテは言つた。

『何ですと、貴方? 私の不運の爲めですよ。』とその僧は言つた。

『さうすれば私が最初にお訊ね申した事を殘らず十分答へて下さらんと、もつと悪い運に出逢ひなさらうぞ。』とドン・キホーテは言つた。

『直ぐにお答へ申します、』と僧は言つた、『ではお聞き下さい、たつた今私は資格のある僧侶と申しましたけれど、實はほんの新參意で、名はアロンゾ・ロペズと申します。私はアルコベンダスの生れで、今はバエザの市から、あの炬火を持つて逃げて行つた外の十一人の僧侶達と一緒に參りました。そして私たちはあの吊り臺に在る死骸のお供をし

てセゴヴィアの市まで行くところでござります。その死骸はバエザで死んで、そこで假埋葬にされておいた或る紳士のでござります。そこで、お話し申した通り、今私たちはその人の死骸を、その人の生れ故郷のセゴヴィアの埋葬所へ持つて行くところでござります。』

『そしてその人を殺したのは誰ですかい？』とドン・キホーテは訊ねた。

『神樣が、あの人に取りついた悪性の熱病といふ手段で殺されました。』と新發意は答へた。

『さうすると、』とドン・キホーテは言つた、『もし外の奴にその人が殺されたとすると、私がその仕返しの仕事をせねばならんのぢやが、神樣はその手數を許して下されたわけぢや。しかし、その人をお殺しなされたお方がその人を殺されたのぢやから、たゞ默つて、肩をすくめるより外にしようはない。もし私の身が殺されても、私はやつぱりさうすることぢやらう。さて御僧に御承知おきを願ひますが、私はラ・マンチャの騎士で、名はドン・キホーテ、また私の職掌本分は、世界を巡歷して曲事を正し被害を救ふに在るのです。』

『どうもその曲つたものを正すと仰しやることは私の眤に落ちかねます、』と新發意は言つた、『それでも貴方は眞直なものを曲げて下さりましたもの。私の片脚は、もうとてもこの世に居る間は眞直になりさうもないほどに挫かれてしまひました。それから貴方が私の害を救うて下さりましたのは、何時までも私がその害を受けたまゝで居るやうな傷を殘して下さることでござりますよ。棒事を提して行かれる貴方に出逢ひましたことは、私の身にとつてこの上ない棒事でござりましたよ。』

『物事は皆同樣に起つて來るものではない。』とドン・キホーテは答へた、『新發意アロンゾ・ロペズ殿、凡てこの事の起りは、貴方らがなされたやうに、夜中に白衣を着て、火の附いた炬火を持ち、祈りながら、喪服を纏うて、どうしても何か變化か他界の者でもありさうな風をして歩いてござるからの事ぢや。そこで私は貴方がたに擊ちかゝつて自分の務めを果さずには居られなんだのぢや。又たとへ貴方がたが地獄の本物の惡魔ぢやとちやんと分つてをつたとて、私は擊ちかゝつたに相違ないのぢや。一體貴方がたはそんな者ぢやと、私はちやんと思うてをつたのぢやからの。』

『私の運がさうさせたからには仕方がありません。』と新發意は言つた、『どうぞ武者修行者樣、あなたのお役目は私に

取つては誠に悪いお役目でございましたが、どうかお手を貸して、私の片脚を鐙と鞍の中に挿み込んでゐるこの騾馬の下から、私の身體を出させて下さりませ。』

『私はこのまゝ明朝まで話し續けるところぢやつたわい。貴方はその痛みを私に知らせずにどんなに待たれるところぢやつたらうぞ?』とドン・キホーテは言つた。

彼は直ぐさまサンチョーを呼んだ。しかしこの男は丁度この時、この立派な紳士等がつれてゐたところの、食料品をどつさり負はせた一匹の荷駄騾馬から荷物を卸してゐる最中であつたので、そこへ來る氣はなかつたのである。サンチョーは自分の上着を袋にして、それに詰めこまれるだけ、そして騾馬の背襲に容れられるだけ澤山食料品を詰め込んで、自分の騾馬に背負はせた。それが濟むと、彼は急いで主人の召しに應じて、例の新愛意を騾馬の下から引き出す手傳ひをした。やがて彼はその僧を騾馬に乘せ、炬火を渡した。そしてドン・キホーテは、その僧に向ひ、仲間の者どもの跡を追ふやうに、そしてその仲間の人々に對して自分が已むを得ず仕向けた無禮を自分の代りに謝して呉れるようにと賴んだ。

サンチョーも言つた、『もしひよいとあの旦那たちが、自分等にこんな目を見せてくれた英雄は誰ぢやと聞きたがつてござつたら、それこそは音に聞えたラ・マンチャのドン・キホーテ、又の名は「憂ひ顏の騎士」ぢやと言うて下さりませ。』

やがて新愛意は出發した。私はこの僧が出發する前にドン・キホーテに言つたことを記すのを忘れてゐた。『貴方は神聖なものに亂暴な手をお掛けなさつたからには破門されるといふことを覺えてお出でなされ、*Juxta illud, si quis suadente diabolo*（彼によれば、若し誰でも惡魔に誘はるれば……）』

『私はそのラテン語は分りませぬ。』とドン・キホーテは答へた、『しかし私はよう覺えてゐる、私は手はかけなんだ、たゞこの槍をかけたのぢや。その上、揶者は天主教徒で信心なキリスト信者でござる故、揶者の尊び敬ふ所の僧侶や教會のものに對して擊ちかゝるとは思ひもよらずに、たゞ怪物か他界の變化かと思うて擊ちかゝりましたのぢや。しかしそれにもせよ、私はあのシード・リュイ・ディアズが例の王樣の使者の椅子を法王猊下の御前で打毀した時に、どういふ目に逢うたかは覺えて居ります。その事の爲めにあの人は破門になりましたのぢや。ぢやがあの善良なビヴルの

ロデリックはその當日中に氣高い勇壯な騎士たる振舞ひをしたといふことぢや。』

これを聞くと、前に述べた如く何の返事もしないで新發意は出發したのである。そこでドン・キホーテはサンチョーに向ひ、どういふ譯で自分をその時に限つて「憂ひ顏の騎士」と呼ぶ氣になつたのかと訊ねた。

『それはなア、あの不運な男の持つとつた炬火の明りで、私が暫らく貴方樣をぢつと見とりましたからでござりますよ。そして本當に貴方樣は近頃は今までにない憂ひ顏になられたからでござりますよ。それは全く今度の戰さの草臥れか、さもなけりや前齒奥齒の落ちたせゐに違ひござりませんぞ。』とサンチョーは答へた。

『それはさうぢやない。』とドン・キホーテは答へた、『私の功績の歷史を書かねばならぬ役目の賢人が昔の騎士たちが殘らず持つて居つたやうな何か際立つた名前を私にも持たすべきぢやと思うたに違ひないからぢや。或る者は「燃ゆる劍の騎士」と言ひ、或る者は「麒麟の騎士」、これは「少女子の騎士」、あれは「鳳凰の騎士」、或は「兀鷹の騎士」、また或は「死の騎士」、そしてかういふ名前や稱號で廣く世に知られて居つたのぢや。そこで今言うた例の賢人がお前の口と心とを借りて、今といふ今私を「憂ひ顏の騎士」と呼ばせたに違ひないのぢや。私もこれからはずつと自分をさう呼ぶつもりぢや。そして又それが一層よう似合ふやうに、折があつたら私の楯に非常に浮かぬ顏を一つ描かせることにするつもりぢや。』

『その顏を描かせる爲めに無駄費ひするやうな餘分な暇も錢もありやしませんぞよ、旦那樣。』とサンチョーは言つた、『たゞもう貴方樣を見る者等に御自分のそのお顏を、面と向けて見せておやりなさればそれでよいのでござります。さうすりやもうそれだけで、繪姿も楯も要つた物ぢやござりません。皆貴方樣を「憂ひ顏の騎士」と呼びますわい。全くのところ私は本當のことを申して居りますので、旦那樣、（おもしろう言うて見りや）、ひもじいのと奥齒が拔けたので貴方樣は浮かぬお顏になつてござるので、今も申しましたやうに、その憂ひ顏の繪姿は儉約して結構でござりますのぢや。』

ドン・キホーテはサンチョーの冗談に失笑した。それにも拘らず彼はこの名前を自ら稱し、また自分が工夫した通りに楯か胴楯に描かせようと決心した。

ドン・キホーテは、あの吊り臺の中のものが死骸であるか

否かを檢べようと思つたのだが、サンチョーは、それを制してかう言つた、『旦那樣、貴方樣は今まで私が見たうちで一番無事に今度の危ない冒險をおしまひになさりましたのぢや。彼奴等は打たれたり敵かれたりはしたものゝ、事によると自分等大勢を打つたゝいた相手がたつた一人ぢやと思うて、腹は立つやら恥かしいやらで、また元氣を出して、私らを捜しに來てうんと辛い目に遇はせるかもしれませんぞ。驢馬はちやんと支度が出來とりますし、山は近いし、餓じさは身に沁むし、もう私らは何もする事はござりません、たゞ手際よう引き上げましよ。そら、諺にも「死んだ者は墓へ、生きた者はパンへ」と言ひますがな。』さう言つて、サンチョーは先に立つて驢馬を驅りながら主人に隨いて來るやうにと頼んだ。主人もサンチョーを尤もと思つて、何も言ひ返さずにさうした。そして暫くの間行くと、二つの丘の間にある廣いひつそりした谷間へ出た。そこで二人は馬から下りた。そしてサンチョーは驢馬から荷物を下し、咽から手の出るやうな按じさで、綠の草原の上へ寢そべつた。二人は朝飯と晝飯と中食と晩飯とを一度にやつた。彼等の食慾は、かの死人に附いてゐた僧侶等が（この人等もなかなか切りつめの食事では滿足しなかつたのだが）、荷駄騾馬に積んで携へてゐた冷肉の一かたけでは足りない位であつた。しかしながら、サンチョーが最上の不幸とした今一つの悪運かこの二人の上に降りかゝつた。それは卽ち飲むべき葡萄酒が、いな脣を濕めす水さへも無かつたことである。そこで二人とも渇きに苦しんだので、サンチョーは自分等の居る草原が綠の柔かい草に蔽はれてをるのを見て、次の章で語られるやうなことを言つたのである。

第二十章

豪勇なるラ・マンチャのドン・キホーテが世界の如何なる高名の騎士に依つて成し遂げられたる如何なる冒險よりも危險を冒して成し遂げたる前例なき前代未聞の冒險のこと。

『旦那樣、これこの草は、どうしてもこいつに濕潤をくれる泉か小川かゞ近くにあるちふ證據でござりますぞい。ぢやから些つとばかり向うの方へ引越して行つて、私らを苦しめよるこの途方もない渇きを止めてくれるやうな場所を見付けるが、ようござりましよ。全く渇くのは餓じいのよりか辛いもんぢやで。』

この勧告はドン・キホーテには尤もと思はれた。そこで、サンチョーが食ひ殘しの御馳走を驢馬に積み終へると、主人はロシナンテの手綱を取りサンチョーは驢馬の面勒を取つて、折柄夜の闇に一寸先きも見えぬので、爪先探りに草原を進んで行つた。しかし二人がまだ二百歩と行かないうちに、恰も巨きな高い岩の上から落ちるやうな轟轟たる水音が彼等の耳を打つた。この音は彼等を非常に元氣づけた。しかしその音がどの邊から來るのかを聞き分けようと立ち止つてゐると、彼等にこの水音が與へた滿足の氣持に水をさすやうな、時ならぬ別の響きが聞えた。生れつき臆病で氣の弱いサンチョーには殊更さうであつた。つまり規則正しくぶつつかる物の音と鐵や鎖のがら〳〵鳴る響きとが聞えたのである。それは物凄い水の音と一緒になつて、ドン・キホーテの外は何人の心にも恐怖を起させたであらう。先きに言つたやうに、夜は眞暗であつた。そして彼等は偶々何かの高い木立の中のある場所へ出たのである。その樹の葉は靜かな微風に搖られて低い無氣味な音を立てた。そこで、寂しさも、場所柄も、暗さも、水音も、木の葉のさゞめきも一緒になつて、あらゆるものが物凄さ恐ろしさを起させたのである。殊にその打つ音も止まねば、風も凪がず、夜明けも近づかぬと彼等の氣づいた時には、尚更さうであつた。それに自分達が今何處に居るのか分らなかつた事も、その上に附け加へられるであらう。しかしドン・キホーテは自分の勇猛心に扶けられ、ヒラリとロシナンテに跳び乘つて、楯を片腕にしかと緊め附け、槍を斜に構へて言つた、

『サンチョーよ、私はこの鐵器時代の中に金の時代を、いや所謂黄金時代を復舊させる爲めに、神の御意に依つて生れて來たのぢや。樣々の危險やすばらしい功業や勇壯な事蹟は、獨り私の爲めに保有されてゐるのぢや。重ねて言ふが、あの「圓卓の騎士」やフランスの十二貴族や九勇士を再び蘇へらせるその人は私ぢや。そしてまた、あのプラティル輩やタブラント輩や、オリヴント、ティラント、フィバス、バリアニス、その他昔の有名な騎士の殘らずが仕出來した一番立派な功名手柄も光りを失ふやうなえらい手柄や不思議の業や武勇の手並をば、今の時代にして見せて、彼等を忘れさせてしまふ者はこの私ぢや。忠義な賴み甲斐のある家來よ、この夜の闇や、この異樣な靜かさや、この木々の陰氣なざわめく囁きや、また私らが探してやつて來たあの物恐ろしい水の音、恰も月世界の高山からでも逆落しに落ちて來るやうなあの水の音、それから私らの耳を痛め傷ける

あの小止みなしにカタ〳〵と鳴り響く物音などに、よう心をとめるがよいぞよ。さういふものが殘らず一緒になれば、いやその一つ〳〵でも、マーズ（ローマの軍神）の胸にさへ氣遣ひや恐れや狼狽を注ぎこむには十分ぢや。ましてかういふ危險や冒險に慣れぬ人には言ふまでもないことぢや。ぢやが、しかし今讀み立てたものは殘らず私の爲めには元氣を煽り立て勵まして、この冒險が容易ならぬものぢやとは思はれても、やり遂げたい熱心で私の胸に元氣をはち切らせるのぢや。そこでロシナンテの腹帶をもう些つと締めてくれい、そしてお前は無事で居れよ。三日の間だけはこゝで待つて居れよ。三日經つても私が歸つて來なんだらお前は村へ歸つてよい。そしてどうぞ頼むから、私の爲めにトボソ町へ行つて呉れい。あそこでお前はわが比ひないドゥルシネア姫に逢うて、貴女に身命を捧げた騎士は、貴女の騎士ぢやと言はれても恥かしからぬだけの事をしようとして一命を失ひましたと申して呉れい。』

サンチョは主人のこの言葉を聞くと、次のやうに言ひながら、非常に悲しげに泣き出した、『旦那樣、貴方樣は何故そんな恐ろしい冒險をやらうとなさるのですか、私には分りません。今は夜分で、こゝには誰も私らを見とる者は居りません。ぢやからこれから三日の間水さへ飲まずに居りや、このまゝ引き返してこの危ないところから立ち退くのは安いことでございますよ。それに誰も私らを見とらんから、さうしたとて私らを卑怯者ぢやと貶すものはございますまい。それにまた、貴方樣もよう知つてござる私らの村の副牧師さんから、危きを求める者は危きに死ぬるといふ說教を何度も何度も聞かされて居りますわい。それぢやから、奇蹟でもなけりや免れやうのないやうなそんな恐ろしい離れ業をやつて神樣を試すのは、ようございません。またこれまでに貴方樣が私のやうに毛布上げにもお逢ひなされず、あの死人に附いとつた大勢の敵に逢うても、勝ち戰さでやす〳〵と傷も受けずに來られたのは、神樣が貴方樣の爲めにしつかり奇蹟を見せて下さつたのでございます。こんなにいろ〳〵申しても、まア貴方樣の頑固なお心が動き和らぎもせんやうなら、それぢやかう思うて考へ直して下さりませ、貴方樣がこの場所を離れさつしやるが最後、誰が私の魂を奪りに來ても私は恐いが一杯で呉れてやつてしまひますぞい。私が家も嚊も子供も放つといて貴方樣の處へ來て御奉公しますのも、今迄よりか都合が好うはなつても悪うはならんと思ひ込んでの事ですよ。ぢやが慾

深は袋をはち切らせるちふこともあるやうに、さういふ考へは私の希望を引き裂きましたわい。何故かて、貴方樣が何度も〳〵私へくれると約束なされた、あの忌々しい緣起でもない島が手に入るちふ希望の頂邊へ私が登つとる間際になつて、それどころかあべこべに貴方樣は人間界から離れたこんな處へ私を棄てゝ置かうと言ふ氣で居りなさるものなア。どうぞ後生でござりますから旦那樣、私をさう辛い目に逢はさんやうにして下されませなア。そして若し貴方樣がこの冒險をなさるのをそつくり止めるのがお厭なら、せめて明日の朝まで延ばして下されませ。私が昔羊飼ひしとつた時分に習うた學問では、あの「角笛」の口（小熊星の星を的にして兩腕をのばし十字形を作り、星と兩肩との位置の關係によつて時を計る）こゝ が頭の眞上へ來て、左の腕の線の中に在る時は眞夜中ぢやから、もう夜明けまでにや三時間とはござりませんからの。』

『お前のいふやうな線ぢやとか、口ぢやとか、馬ぢやとかが、どうしてお前には見えるのぢや？　サンチョー、空一面に星一つ見えてをらぬこの闇の夜に？』とドン・キホーテは言つた。

『それはさうでござりますがな、恐い一念には眼も敏うなつて地の底のものでも見えますからな、空なんぞア尚更でござりますわい。それにまた、もう夜明けに間のないといふことの分る立派な譯もござります。』とサンチョーは言つた。

『間があらうとあるまいと勝手にせい。』とドン・キホーテは言つた、『今は、いや何時でもぢやが、涙や懇願の爲めに騎士の慣ひによつて事を行ふのを妨げられたと言はれてはならぬのぢや。そこでサンチョーよ、どうぞ氣丈夫に居つて呉れ、私の心に今この先例のない恐ろしい冒險の企てを思ひつかしめ給うた神樣は、お前の無事を見戍りお前の悲しみを慰めて下さるであらうからの。お前はロシナンテの腹帶を緊かり引き締めてくれゝばよいのぢや。そして私は間もなく生きてか死んでか歸つて來ようから、此處に待つて居ればよいのぢや。』

サンチョーは、これが主人の最後の決心で、自分の涙も勸めも懇願も何の役にも立たぬと見て取つたので、自分だけの工夫によつて、出來るならば主人を夜明けまで待たせようと決心した。そこで、馬の腹帶を締めてゐる間に、そつと感づかれないやうに、ロシナンテの兩方の前脚を一つに縛つて、ドン・キホーテがいざ進まうとあせつても、馬が跛跳びしか出來ぬので進めないやうにしたのである。サンチョ

ー・パンザは自分の仕掛けが旨く行つたのを見て言つた、『そうれ見なされ！　旦那様、神様は私の涙とお祈りに感じなされて、ロシナンテが身動きも出來んやうになされますぞい。それでも貴方様がまだ強情を張りなさるなら、馬に拍車をあてたり打つたりして御覽じろ、それこそ貴方様は天に逆らうて、諺に言ふやうに刺のある鞭を蹴りなさるのぢや。』

ドン・キホーテは馬が進まぬので氣が氣でなくなつた。しかし彼が拍車を當てれば當てる程、馬はいよ〳〵動かなくなつた。そして前足を縛られてゐるとは少しも氣がつかないで、これこそサンチョーの思ひ附き以外の何かから來たものとのみ堅く信じ、夜が明けるかロシナンテが動けるまで退いて待つことにしたのである。そこで彼はサンチョーに言つた、『サンチョーよ、お前の言ふことも尤もぢやし、またロシナンテも動けぬから、東雲白みそめるまで待つことにしようわい。東雲の來やうの遲いのは私には泣く程の思ひぢやが。』

『泣かつしやるには當りませんよ、私がこれから夜明けまで話をして貴方様を慰めて上げますわい。』とサンチョーは答へた、『尤も、夜が明けて、貴方様の待つてをりなさるあの途方もない冒險に取りかゝる時が來た時に、氣分がさつぱりして居るやうに、馬から下りなされて、武者修行の風に倣うて青い草の上へ横になつて些との間眠らつしやるなら見合せますがな。』

『馬から降りるの眠るのと、一體お前は何を言うとるのぢや？　危險に面接してをりながら休憩するやうな騎士ぢやと私を思ふのか？　眠るために生れて來たお前は眠るがよい、それがいやならお前の好きにするがよい。私も私の性分に一番よう合うて居ると思ふ通りにするからの。』とドン・キホーテは言つた。

『まア旦那様、怒つて下さるな、私はさういふ積りで言うたんぢやござりませんぞい。』とサンチョーは答へた。そして主人の眞側へやつて來て、片手を前鞍に片手を鞍尻に置いて、主人から指一本の長さだけも離れられないでその左の腿を抱いた。彼は、まだ引きつゞき規則正しく音を立てて響いてゐる例の打ち音を、それ程まで恐れてゐたのである。ドン・キホーテはサンチョーが言ひ出した通り、何か自分を樂しませる話をするようにと命じた。サンチョーは聞えてくる物音の恐ろしさへ無ければ話すのにと答へた。『ぢやが』とサンチョーは言つた、『一つ一生懸命で話をして

見ましよわい。それはな、私がどうにか話すことさへ出來、邪魔さへされにや、そりや一番面白い話でござりますぞい。さア始めますから氣をつけて聞きなされませよ。むかしむかしあつたとさ。これから來る吉事は皆なに來るやうに、また凶事はそれを捜しに行く者に來い――旦那樣、昔の人がいつも話の頭へくつつけよつた前置ちふものは、話で面白がるやうなもんぢやなかつたと思うて居つて貰はにやなりませんぞい。「凶事はそれを捜しに行く者へ」ちふのはローマ人のカトー・ゾンゾリノの金言でござりましてな、これがな、貴方樣はぢつとしてござつて、凶事を捜しに何處へも行きなさつてはならん。また澤山恐い事があつて私らをびく〳〵させるやうなそんな道を誰も無理やりに行けとは言はんのぢやから、私らはどこか別の道から引つ返すがよいちふことを教へて呉れるのに、丁度きつちり筴つて居るのでござりますよ。まるで指環が指に筴るやうにな。』

『お前の話を進めい、サンチョー、そしてその道の選び方は私に任せて置けよ。』とドン・キホーテは言つた。

『それぢや申しませう、』とサンチョーが續けた、『エストレマデュラの或る村は、一人の山羊飼ひが――それはその山羊の世話をする男でござりますが――その羊飼ひか山羊飼ひは、まア何方でも分りますがな、ローペ・ルイズと言ひました。さうして、このローペ・ルイズは、トラルヴぢふ羊飼ひ女に惚れました。そのトラルヴぢふ羊飼ひ女は金持ちの牧畜者の娘でござりましてな。そしてこの金持ちの牧畜者は……』

『サンチョー、自分の話すことは殘らず二度繰り返すといふのがお前の話をするやり方なら、二日かゝつても終へはせぬわい。眞直ぐに進めい、そして譯のわかる人間らしう話すのぢや、さうでなくば何にも話さんがよい。』とドン・キホーテは言つた。

『私の國ぢやア話しちふものは、丁度私が話すやうな調子で話しますよ。ぢやから私は別の調子ぢや話せません。また貴方樣が私に新しい調子をこさへろと仰有るのは、そりや無理でござりますよ。』とサンチョーは答へた。

『お前の好きなやうに話すがよい。私がお前の話を聞かにやならんといふのも宿世の因果ぢやらうからの、さア進めい。』とドン・キホーテは答へた。

『そんなら私の大事な旦那樣、そこで、今申しましたやうに、その羊飼ひは羊飼ひ女のトラルヴに惚れました。ところがこの女は、ちつとばかり髭まで生えとる位で、何處や

ら男のやうな樣子をした太つちよの野育ち娘でございました。私は今でもあの女が眼に見えるやうでございますよ。』とサンチョは話をつゞけた。

『それではお前はその女を知つて居つたのか？』とドン・キホーテは言つた。

『いゝえ、知つちや居りません。』とサンチョは言つた、『ちやが私にこの話をした男が、これは全く本當の確かなことぢやで、私が外の人へこの話をする時にや、私が直に見たんぢやと言ひ張つて誓言しても大丈夫ぢやと申しましたでな。そこで、だん〳〵時がたつ內に、何時も眠らんで諸事萬事を掻き混ぜて居る惡魔の奴でたくらんで、その羊飼ひが羊飼ひ女に向けて持つてをつた戀をば憎しみや愛憎づかしに變へてしまうたのでございます。そしてさうなつた譯は、惡口屋の言ふ話ぢや、その女がその男に些とばかり嫉妬を燒かせたのが度を過ごして大變になつたのでございますとさ。それからと言ふもの、その羊飼ひはその女をえらう憎んで、女から逃げるとて、その國を離れてまたと再びその女の見えん國へ行かうと腹をきめました。トラルヴはローペに蹴返されたちふことが分ると、今迄は些ともその男を可愛いゝと思うとらなんだのが、急に戀しうなりましたのぢや。』

『惚れて來る男を撥ねつけて憎んで吳れる男に惚れるのが、女どもの持ち前のやり方ぢや。さアそれから、サンチョ！』とドン・キホーテは言つた。

『それから到頭その羊飼ひは自分の意圖をやつてのけました。』とサンチョは言つた、『自分の山羊どもを追ひながらその男はエストレマデュラの野原を越えてポルテュガルの國へ入つて行きました。それを知つたトラルヴはその男の後を追うて、徒歩で跣足で、少し離れて從いて行きました。手には巡禮の杖を持つて、頸の周圍には小袋を懸けて、その中には鏡が一枚と櫛が一本とそれから顏の化粧に入用な白粉の小さな壺や何かを入れとつたちふ話でございます。ぢやがその女が何を持つとつたらうが構ひやしません。私アわざ〳〵そいつを吟味しようとするのぢやございません。とにかくその羊飼ひは、自分の山羊群と一緒にグワディアナ河を渡らうとしましたところが、その河は丁度その時水が出て、今にも土手から越さうとしとりました。そしてその男が到着した場所にや、その男や山羊群を向う岸へ渡して吳れる渡し場も小舟も人間も居らなんだので、それには大層困つとりました。といふのはトラルヴがだん〳〵近

づいて來よつたもんで、涙を流したり口説いたりしてえらう自分を困らせるぢやらうと思ふからでござりますわい。ところが、懸命でそこらを見廻しとりますと、一人の漁夫が見付かりました。その漁夫は側に人一人と山羊一匹やつと乘せられる位の小さな小舟を持つとりましたので、小さいけれど、まアその漁夫に話して見ると、漁夫は山羊飼ひも三百匹の山羊も渡してやると承知しました。漁夫は小舟に乘つて一匹の山羊を運んで行きました、歸つて來てまた一匹渡しました。また歸つて來て、また一匹持つて行きました——旦那樣、この漁夫の渡す山羊の數を算へて居つて下さりませよ、一匹でも忘れるとこの話はおしまひになつて、もう一と言も話せんやうになりますからの。それはさうと、申し上げて置かにやならんのは、その向う岸の上り場所は泥濘つて滑るし、漁夫は往き歸りにえらい暇をつぶしたちふことでござりますよ。それでも漁夫はまた別の山羊を取りに引き返して來ました。また一匹、また一匹。』

『おい、もう山羊は殘らず運んで了うたことにせい。そしてそんなに往つたり來たりに手間どるなよ、さうせんと、今年中には山羊運びが果てまいぞよ。』とドン・キホーテは言つた。

『今までに何匹渡りましたかい？』とサンチョーは言つた。

『それを私が知ることかい？』とドン・キホーテは答へた。『さアそこでござりますぞい、私が貴方樣に勘定をようしておいでなされと申しましたのは。それぢや、やれ〳〵この話はおしまひになりました。もう續けやうがありやしませんものな。』とサンチョーは言つた。

『何うしてさうなんぢや？　勘定に一つでも間違ひがあれば話を進められんといふ程に、その河渡りした山羊の數を綿密に知つとることがこの話に大切なのか？』とドン・キホーテは言つた。

『いゝえ、旦那樣、全くそんな譯ぢやござりません。』とサンチョーは答へた、『私が貴方樣に、もう何匹山羊は渡りましたかとお聞き申しましたな、そして貴方樣が知らんと仰しやりましたな。丁度その途端に私が話さんならんことが殘らず覺えから拔け出してしまひましたぞい。いや全くこの話は大した爲めになる面白い話でござりましたがな。』

『さうか、ぢや、その話は果てたんぢやな？』とドン・キホーテは言つた。

『私の阿母が果てましたと同じに。』とサンチョーは言つた。

『本當に、お前の話した話は、世界中で誰でも想像するこ

との出來んやうな珍しい物語や話や歷史の中の一つぢや。またその話し方や結び方は一生涯の中にも二度と見られんやうなものぢや。尤も私はお前の立派な智慧からは、かうなうてはならぬと思つたがのう。しかし、大方あの小止みなく打つ音がお前の頭を亂したことであらうから、別に不思議とは思はんわい。』とドン・キホーテは言つた。

『萬事その通りかも知れません、ぢやが私の今の話はな、その山羊運びの勘定が間違ふ段になるとおしまひになるちふだけのお話でござりますよ。』とサンチョーは答へた。

『まア〳〵、それは好きなところでおしまひにして置いて、ロシナンテが歩けるか何うか檢べて見よう。』とドン・キホーテは言つた。そして拍車を當てゝ見た。するとロシナンテは今度もピョコンと跳ねたきりで元のところにぢつとしてゐた。それ程しつかり縛られてゐたのである。

丁度その時、夜明けの寒氣のせゐか、何か腸を弛めるやうなものを夕飯に食つたせゐか、それともたゞ自然のせゐか(これが一番當つて居るらしいが)、サンチョーは、他人が代りにしてやるわけに行かないことがしたくなつて來た。しかし彼の心に滲み徹つてゐた恐怖の念は非常であつたので、彼は主人の側から爪の垢ほども離れることが出來なかつた。かと言つて彼がしたいと思つたことをしないで濟ますことも出來なかつた。そこで退つ引きならず、鞍尻に掛けてゐた右の手を離して、その手でそつと音を立てないやうに、ズボンを緊め上げてゐた紐の結び目を解いた。するとそれが解けたので直にズボンは兩足の周圍へ足枷のやうに落ちた。それからシャツを出來るだけ上にからげて、その臀を、決して細くないのを出した。彼はこの恐ろしい窮境と當惑から脫れるにはこれだけすればよいと思つて、此處までは漕ぎつけたが、今一つ更に大きな困難が現れた。それと言ふのは、幾らか音を立てないで身輕になることは出來ないことゝ思はれたからである。そこで彼は出來るだけ息を殺して、齒を喰ひしばり兩肩をすくめた。しかしながら、彼がさま〴〵の豫防策もその效なく、不幸にもとう〳〵低い音を出してしまつた、彼をひどく恐がらせてゐるあの音とは非常に違つた音を。

ドン・キホーテはその音を聞いて言つた、『あれは何の音ぢや? サンチョー。』

『私にや分りませんがな。何でもない事に冒險は始まりませんからの、いづれ何か新規な事に違ひないですよ。』とサンチョーは言つた。今一度彼は運試しをやつた。そして今度

は非常にうまく行つて、何の音も騒ぎもたてないで、今まで非常な心配の種であつたその重荷を卸してしまつた。しかしドン・キホーテの嗅覚はその聴覚のやうに鋭かつたし、サンチョーはその臭氣が殆ど一直線に立ち昇る程にぴつたり彼に寄り添うてゐたので、どうしても臭ひが幾らかドン・キホーテの鼻に達しない譯には行かなかつたのである。そこでその臭氣が鼻に達するや否や、ドン・キホーテはそれを防ぐ爲めに指で鼻を抓んで、稍鼻にかゝる聲で言つた、『サンチョー、お前は餘程恐がつとると見えるの？』

『左樣でございます。』とサンチョーは答へた、『ぢやが貴方樣は何うして今になつて殊更にそれにお氣がつきましたかい？』

『さればぢや、丁度今お前がこれ迄にないきつい臭ひをさせるからぢや。それに龍涎香の匂ひでもないやうぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『全くその通りで、』とサンチョーは言つた、『それや私の落度ぢやない貴方樣の落度でございますぞい。何せ途方もない時刻にむやみに急いで引つ張り廻されたのでございますからの。』とサンチョーは言つた。

『では三足か四足後へ退れ。』と指で鼻を抑へたまゝ、ドン・キホーテは言つた、『そして是からはお前の身嗜みにも、私への禮儀にももつと氣をつけるが好い。畢竟私の心易立てが過ぎたからこんな無禮も仕出かさせたのぢや。』

『貴方樣はきつと私が身嗜みに反いたことをしたと思うてござるのぢやな。』とサンチョーは答へた。

『サンチョーよ、とやかく言ふ程却つて悪いぞよ。』とドン・キホーテは言つた。

主從はこの事やこれに似寄つたやうな事を話してその夜を過したが、やがて夜明けは大急ぎで近づいて來たので、サンチョーは、極めてひそかにロシナンテを解き、そして自分のズボンを絡つた。ロシナンテは自由になるや否や、もと〳〵決して痩の強い質ではなかつたのだが、元氣づいたらしく前足で爬き始めた——蓋しこんな事を言つてはロシナンテには濟まないが、彼は跳ね廻るといふことは何の事やら知らなかつたのである。そこでドン・キホーテはロシナンテが勤けるのを見て、これこそ自分が今度の恐ろしい冒險を決行すべき吉兆であり合圖であると思つた。この時夜は悉く明け渡つて萬物は鮮かに現れた。そしてドン・キホーテは、非常に深い蔭を作つてゐる高い栗の樹立の中に自分が居るのを知つた。それと共に例の打ち音のまだ歇ま

ないことも分つたが、しかしそれが何の音であるかは分らなかつた。そこで彼はその上逡巡してゐないで、ロシナンテに拍車をあてた。そして更に再びサンチョーに別れを告げ、前にも言つた通りせい〳〵三日の間其處で待つて居るやうに、そして若しそれまでに自分が歸つて來なかつたら、今度の危險な冒險で一命を落すことが神の御意であつたのぢやと思へと言つた。彼は今一度自分の愛人ドゥルシネアのところへ自分の爲めに齎らし行くべき使命と傳言とを繰返して告げた。そして奉公の給金に就いては、自分が家を出る前に遺言書が拵へてあつて、その中には奉公した期間に割り當てゝ十分給金を支拂ふやうになつてゐるから、心配しなくてもよいと言つた。しかし、若し神が今度の危險から安全に健全に怪我もなく自分を救ひ給ふことあらば、例の約束した島は十二分確かなものと思うてゐてよいと言つた。サンチョーは善良な主人のこのやさしい言葉を聞いて、またあらたに泣き出した。そして最後の結末や事の終りが來るまでは主人と一緒に居らうと決心した。サンチョー・パンザのこの涙とこの立派な決心とからして、この物語の著者は、サンチョーは生れが良くて、少くとも純粋のキリスト信者の血筋の者に違ひないと推論するのである。そして彼が現はしたこの感情は幾らかその主人を動かした。しかし少しでも弱みを表に見せるほどにはならなかつた。それどころか、主人は出來るだけ自分の感じたところを隱して、例の水音や打つ音の聞えて來ると思はれる場所へ向けて進み出した。

サンチョーは、禍福を通じて不斷の伴侶である自分の驢馬の面勒を、いつもの通り執りながら徒歩で後に從つた。そして濃深い栗林の間を稍しばし進んで行くと、高い岩石の根もとにある狹い草原にやつて來た。その下には烈しい奔流が跳び立つてゐた。その岩石の根もとには、家といふよりも荒跡のやうに見える粗末な作りの家が幾軒か建つてゐたが、今も尚ほ小止みなしに續いてゐるあのガラ〳〵ガタン〳〵と打つ音はそこから聞えて來るのだと分つた。ロシナンテは水の響や打つ音におびえた。然しドン・キホーテは馬を靜めつゝ一心不亂に己が愛人に祈りを捧げ、この危險と冒險に際してその扶けを求め、序ながら神も自分を忘れ給はぬようにと祈りつゝ、一歩一歩その家の方へと進んだ。主人の側を少しも離れずにゐたサンチョーも自分をかほどまでに恐がらせ氣遣はせたのは一體何であるか正體が分るであらうかと、伸ばせるだけ頸を伸ばしてロシナンテ

の脚の間から覗いてゐた。彼等は凡そ百歩ばかりも進んで行つた。そして角を一つ曲ると、例の恐ろしい響の、そして一晩中彼等を非常な恐怖と困惑の裡に過ごさせたあのぞつとするやうな物音の本當の原因が、間違ひなどの餘地は更になく、はつきりと明かに現はれたのである。そしてそれは(讀者よ、もし貴方が氣を悪くしたり失望したりなさらぬなら)六つの布晒しの槌が代る〳〵打つ爲めに凡てこの騒がしい響を立てゝゐるのであつた。

ドン・キホーテはその眞相を認めると、押し黙つて了つて頭から足までしやちこ張つてしまつた。サンチョーが彼を盗み見すると、彼はいかにもいま〳〵しい樣子で顔を胸の上に垂れてゐた。またドン・キホーテがサンチョーを盗み見すると、彼は兩の頬をふくらませて、笑ひを口一杯頬張つて、明らかに今にも噴き出しさうにしてゐた。そこでドン・キホーテはむしやくしやしては居たけれど、サンチョーを見ると笑ひ出さずには居られなかつた。サンチョーも主人が始めるのを見ると、腹のどん底から笑ひ出したが、餘り笑つて脇腹が張り裂けさうなので、兩手でそこを抑へねばならなかつた程であつた。彼は四度笑ふのを止めた。すると止める度毎に初めと同じやうな勢で又更に噴き出した。これでドン・キホーテは火のやうに怒つた。殊にサンチョーが口眞似をして、『おいサンチョー、よう聞け、私は神の御意に依つて、この鐵の時代に昔の黄金時代を、金の時代を生き返らせる爲めに生れたのぢや。私の爲めにこそ樣々の危險やえらい功名や勇ましい手柄が取つて置いてあるのぢや。』などと冷かすやうに言ふのを聞いた時には、尚更怒つた。また此處でサンチョーは、昨夜初めてこの恐ろしい打ち音を聞きつけた時にドン・キホーテの言つた言葉を殘らずまたは大方繰り返したのである。

そこで、ドン・キホーテはサンチョーが自分を茶化してゐるのを見ると、非常に機嫌を損じて、槍を振り上げて恐ろしい打撃を二つ喰はせた。この時もしサンチョーがそれを肩で受けなかつたなら、その打撃は彼の頭上に落ちて來て、全く彼の相續人へでなければ、給金を拂ふに及ばぬことになつたであらう。サンチョーは自分の冗談に對して有難くもない本氣の手附金を頂いたので、それにまた主人が尚この上の事もしかねないと恐れたので、極めて下手に出てかう言つた。

『旦那樣、御機嫌を直して下さりませ。本當にほんの冗談でござりますから。』

『ウン、さうか、お前は冗談でも私は冗談ぢやないぞ。』とドン・キホーテは答へた、『こら、ふざけ者、若しこれが布晒しの槌でなうて、何か危險なものであつたら、私がそれを退治するだけの勇氣を見せなんだらうとでも思ふのか？或ひは私がこの通り紳士であるところから、かういふ物音は馴れて居つて聞き分けて、布晒し水車から來る音か、さうでないかど言へる筈ぢやとでも言ふのか。それにかういふ物の中に生れて育つたお前はその通りの百姓ぢやからよう見慣れてもをらうが、私は全く生れてから一度も見たことがなかつたのぢやわい！　しかしこの六つの槌を六人の巨人に變化させて、一人づゝなり一どきになり私にかゝらせて見るがよい。そして若し私がそいつ等を眞倒まに打ち倒してくれなんだら、その時こそお前の好きに私を冷かすがよい。』

『旦那樣、その事はもう言はずに置いて下されませ。』とサンチョーは答へた、『全く私の冗談が些と過ぎましたわい。ぢやがな、旦那樣、私らが仲直りした今になつて見りや（そしてどうか神樣が貴方樣にふりかゝる殘らずの冒險から今度のやうに達者に、無事に貴方樣をお救ひ下さりますやうに）、私らがあんなに恐がつてをつたのはお笑ひ草ぢやござりませんかい？　面白い一つ話ぢやござりませんかい？——兎も角も私だけは恐がつて居りましたからの。そりや貴方樣は恐いぢやの魂消るぢやのといふことは何んなものか御存じもないし分りもなさらんちふことは、もう私にも分つとりますからの。』

『今度起つた事が、笑ふだけのことはあるかも知れんとは私も思はんぢやないが、話の種にするほどのことはないぞよ。そりや誰でも彼でもちやんと物の摑みどころを外さんだけに悧巧ぢやとは言へんからの。』とドン・キホーテは言つた。

『とにかく、』とサンチョーは言つた、『貴方樣は、神樣と私の避け方の素早いおかげで、そのお槍で私の頭を狙うて肩に當てなされたのぢやから、貴方樣はちやんと狙ひどころに當てる法を御承知でござりますわい。ぢやがもうその事は止しましよ。皆流ひ場へ流れて出ますわい。諺にも「お前に涙を流させる男はお前を可愛がつて居るのぢや」と言ひますからの。それにまた、家來にきつい言葉を言うた後でズボンを一揃ひ呉れるのはお大名樣のやり方でござりますからの。尤も武者修行樣は毆つた後で島ぢやとか陸續きの國ぢやとかを呉れなさるかも知れんが、その樣は毆つた

後では何を吳れるのか知りませんがの。』

『お前の言ふことが殘らず本當になるかならぬかは運次第ぢや。人間の物事の爲初めといふものは、自分の思ふやうにならんことは惱巧なお前がよう辨へとるぢやらうから、過ぎたことは見のがすことぢや。尙今後の爲めに心得て置いて貰ひたいのは、お前のその饒舌を私の前では手加減して抑へることぢや。何故といふに、私の讀んだあらゆる騎士道の書物には、それは數限りもない程ぢやが、唯の一人でもお前がお前の主君に對してするやうに口數多く主君に話す家來はなかつたわい。そして全くこの事はお前と私との非常な落度ぢやと思ふわい。お前の落度は私を餘り敬はぬといふ事で、私の落度は、も些と敬はれるやうにせぬちふことぢや。ゴールのアマディスの家來に、インシュラ・フィルメー（ブリタニの一部の伯爵であつたガンダリンといふ人が居つた。この人の事を讀んで見ると、この人は何時もその主君に話しかける時は帽子を脫いで、頭をさげて、身體はトルコ風に二重に曲げたさうぢや。それからまた、ガラオルの家來ガサバルのことはどう褒めてよいか分らんのぢや。この人の驚くべき無口の如何に甚しかつたかを示す爲めに、あれが眞實である限りは、あの傳記を通じてこの人の名はたつた一度しか記されて居らんのぢや。サンチョーよ、お前は私が今言うたけのことから、主人と下男と、君主と臣下と、騎士と從士との間には違ひがなうてはならぬことが分るぢやらう。そこで今日からは私らの間にはお互ひにもつと禮儀を守つて我儘を減さにやならんぞよ。私がたとへ何んな事でお前に腹を立てようとも、詰りは水注の損ぢやからの。（「水注が石ヶ打つても、石が水注を打つても結局水注の損になる」といふ諺から來てゐる）私がお前に約束した恩賞とか賜物とかは時節が來れば手に入るのぢや。またもし手に入らずとも、先程お前に言うた通り、お前の給金だけは間違ひはないぞよ。』

『貴方樣の言はつしやることア、皆御尤もでござります。』とサンチョーは言つた、『ぢやけどお訊き申したいと思ひますのは（その恩賞の時節がどうしても來んことになつて、どうしても、給金の方へかゝつて行かにやならんとなると）一體武者修行の家來衆ちふものア、その時分にやどれ位貰ひましたろかなア。また月極めで勘定しましたろか、それとも左官屋のやうに日當でござりましたろか！』

『あの頃の從士等が給金などを取つて居つたとは思はれんことぢや、』とドン・キホーテは答へた、『たゞ恩顧に賴つて居つたのぢや。私が實印を捺して家へ置いて來た遺言書の

中へお前の給金のことを書いたのは、萬一の場合を思うてのことぢや。そのわけは、この淺ましい今の時勢では、武者修行もどんな破目に立ち到るやら分らんし、またあの世に行つてから給金位の些細なことで、私の魂を惱ましたうもないからぢや。サンチョーよ、お前もよう承知して置いて貰ひたいが、この世の中では冒險といふことぐらゐ危ないものはないからの。』

『全くでございます。』とサンチョーは言つた、『布晒し車の樋の音だけでも、貴方樣のやうに勇ましい廻國冒險屋さんの心をわく〳〵びく〳〵させますからの。ぢやがもう決して、これからは貴方樣のことは何事によらず輕んじるやうな口は敲きません。きつともう貴方樣を御主人よ旦那樣よと奉るやうにばかり致します。』

『さうしてこそ、お前はこの世で長生をするわい。兩親に次いでは、主人は丁度兩親のやうに敬ふべきものぢやからのう。』とドン・キホーテは答へた。

第二十一章　は得意の冒險と貴重なる分捕品マムブリノーの兜、及びわが無敵の騎士に起つたその他の事件を傳へる。

やがて小雨が降り出した。そこでサンチョーは布晒し水車の家へ入らうとしたけれど、ドン・キホーテはさつきの冗談の爲めに、其處を嫌かつてどんなことがあつても入ることを肯かなかつた。そこで二人は右手へ曲つて、昨夜歩いて來た道とは違つた別の道へ出た、すると間もなく、ドン・キホーテは一人の男が馬に乘つて金のやうに光る物を頭に被つて來るのを見とめた。そしてそれを見るや否や、彼はサンチョーに向つて言つた、『サンチョーよ、諺といふものは、凡ての學問の母たる經驗から出た金言ぢやから、眞實でないのは一つもないのう。取り分け「一方の戸が閉まれば片方の戸が開く」といふは眞實ぢや。何故私がさういふかといふと、天は昨夜あの布晒し車で私らを瞞して私らの捜してをる冒險の戸口を塞いだが、今はあれに優つてしかもあれよりも確かな冒險の戸口をひろ〳〵と開いてをる。それ故もし私がその中へ入る工夫をせなんだら、それは詰り私の落度になる。そしてその落度をば布晒し車を知らなんだせゐや闇夜のせゐにする譯には行かぬわい。何故といふに、私の間違ひでなくば、あそこにやつて來る男は頭の上

にマムブリノーの兜を被つてをるからぢや。あの兜を手に入れる爲めに、私はお前も知つて居るあの誓ひを立てたのぢや。』

『貴方樣、言ふことに氣を付けて下さりませよ、またすることにや尚更ですよ。私アもうこの上布晒し車にかゝつて私らの正氣を蔽き出したり、晒したりして仕上げて貰ふにや及びませんからの。』とサンチョーは言つた。

『こら馬鹿なことを言ふな、兜と晒し車とは何の因緣があるのぢや？』とドン・キホーテは言つた。

『存じません。ぢやが本當に、私が今迄のやうに口を利いてもよいのなら、貴方樣の言はつしやる事が間違うとることを納得の行くやうに譯を話して上げるのぢやがなア。』とサンチョーは答へた。

『何で私の言ふことに間違ひがあらうかい、この闕太い不忠者めが！　あの向うから此方の方へ連錢葦毛の駿馬に乘つて黃金の兜を被つてやつてくる騎士がお前には見えぬか、どうぢや？』とドン・キホーテは答へた。

『私が見て分るものは、私のやうな鼠色の驢馬に乘つて頭に何やらぎら〳〵する物を載せとる男だけでござります。』とサンチョーは答へた。

『それ〳〵、あれがマムブリノーの兜ぢや。』とドン・キホーテは言つた。『お前は片側へ避けて私と彼奴とに構はずに置け。暇を潰さんやうに一言も言はずに今度の冒險を仕遂げて、私があれ程ほしがつて居つたあの兜を手に入れて見せるからの。』

『氣をつけて避けて居りませう。ぢやが、も一度申しますが、どうかあれが匂ひ菜であつてくれて、布晒し車であつてくれませんやうに。』「匂ひ菜の原語は mejorana 藥味に供する野生の菜である。神よ願はくばそれのマルジョラることを示し給へ」といふ諺がある。とサンチョーは言つた。

『おい、あの晒し車のことは何事があらうとも二度と言ふなと言うて置いたではないか。それを聽かんなら私は誓うて——もうこの上は言はぬが——お前の魂を蔽き出すぞ。』とドン・キホーテは言つた。

サンチョーは、主人が木毬の如く自分に投げつけたその誓ひを果たすことを恐れて、縮み上つて口を噤んだ。

ドン・キホーテが見た兜や駿馬や騎士に關する事の眞相はかうであつた。此處らの近くには二つの村があつて、その一つは藥種屋も床屋もない位に小さかつた。そしてさういふものはその隣り村にあつた。そこで大きい村の床屋は小さい村を兼客にしてゐた。そして小さい村には血出し療

治をして貰ひたい病人や顔を剃つて貰ひたい人があつたので、（當時の理髪師は、醫療をも行つた）この用事の爲めに床屋は眞鍮の金盥を携へて出かけて行く途中であつた。しかし生憎と途中で雨が降り出したので、恐らく貰ひ立ててあつたその帽子を濡らすまい爲めに、その金盥を頭に被つた。そしてその金盥は磨き立ててあつたから、一里位離れてゐてもぴか〳〵光つたのである。床屋は、サンチョーが言つたやうに、灰色の驢馬に乘つてゐた。それが爲めにドン・キホーテには、それが連錢葦毛や駿馬や黄金の兜などに見えたのである。蓋し彼は見る物を自分の氣違ひじみた騎士道や廻り合せの悪い考へと一致させて了つたからである。そこで彼はその氣の毒な騎士が近づくのを見ると一と言の問答もせずに、槍の穂尖を差し向け、突いて突きまくる決心で、ロシナンテに全速力で駈け寄つた。そしてその側まで來ると、その咄喊の猛烈な勢を緩めもせずに呶鳴り立てた、『卑怯者、勝負をせい。さもなくば當然拘者のものであるその品を自ら進んで渡すがよい。』

夢にも思ひがけなくこの怪物が自分に打つてかゝるのを見た床屋は、自分の驢馬から跳び落ちて僅かにその槍の穂尖を避けるより外に道がなかつたのである。そして足が地面に觸れるや否や鹿よりも敏捷に跳ね起きて、風よりも早く野原を越えて走り去つた。

床屋はその金盥を地べたに殘して行つた。それを見て、ドン・キホーテはほく〳〵と悦んで、この異教徒は悧巧な智慧を出して海狸を眞似たのである。海狸は獵師に追ひ詰められると、自分が何の爲めに追はれて居るかを本能的に知つて居るので、その欲しがられてをるものを自分の歯で噛んで切り離すさうである、と言つた。

彼はサンチョーにその兜を拾へと命じた。そこでサンチョーはそれを手に取り上げながら言つた、『ほんとに、この金盥は上等ぢや。そして錢につもつたら、八リール（一リールは十錢餘の價値はある。』そしてそれを主人に渡した。主人は早速自分の頭に被つて瞼甲は何處に附いてをるかと、ぐる〳〵と廻して見たが一向見付からないので言つた、『なる程、この名高い兜を最初寸法に合せて拵へさせた異教徒は、なか〳〵大きい頭を持つて居つたに相違ない。ぢやが一番困つたことは半分缺けて居ることぢや。』

サンチョーは、主人がその金盥を兜と言ふのを聞いた時には、笑ひを抑へることが出來なかつた。しかし主人の激怒を思ひ起して中途で笑ひを殺してしまつた。

『何を笑うて居るのぢや、サンチョー？』とドン・キホーテは言つた。

『丁度その兜は普通の床屋の金盥のやうに見えますで、それを持つとつた異教人はさぞ巨大い頭をして居りましたろと思ふと、可笑しうなりましてな。』とサンチョーは言つた。

『サンチョー、お前は私がどんな事を推測しとるか分るかい？』とドン・キホーテは言つた、『つまりこの不思議な魔法の兜は、何か變つた不慮の事から、この兜の價値を見分けたり合點したりする事の出來ぬ何者かの手に入つたのぢや。で、その男は、自分のすることの善惡も辨へずに、只これが純金で出來とるのを見て、金目になりさうなところから半分は鑄かし、あとの半分でお前の言ふ通り床屋の金盥のやうなこの品を拵へたのぢや。ぢやが、それは何うであらうと、この兜の素性を見分ける私に取つては形の變りは何でもない事ぢや。私は鍛冶屋のある村へ着き次第に之を直させて、そしてあの鍛冶の神が戰の神に拵へてやつた兜でも、これに優る事は愚か及びもつかぬやうな立派な恰好にさせるからの。そしてまた幾らかでも無いには優るから、差し當り私は出來るだけ具合ようこれを被ることにしようわい。それにひよつと石ころでも飛んで來るやうな時には十分防ぐ役に立たうからの。』

『左樣さ、あの二つの軍勢の戰の時のやうに彼奴らが貴方樣の奥齒に十字を切つたり、また私の腹をすつかり嘔吐させたあの妙藥の入れてある罎を碎いたりした時のやうに、投石紐で石ころを打つつけさへしませんとなア。』とサンチョーは言つた。

『拙者はあの妙藥を無くしたことは餘り悲しんでは居らんのぢや。サンチョー、お前も知つとる通り、拙者はあの調合書を諳記してをるからの。』とドン・キホーテは言つた。

『私もその通りで、』とサンチョーが答へた、『しかし私が若しあの藥を拵へでもしましたら、また息のある內に二度と飲みでもしましたら、それこそ私の年貢の納め時でござりましよ。それに私ア工夫して手傷を負うたり負はせたりせんやうにするつもりでござりますで、あの藥の要るやうなことにやなる氣は毛頭ござりませんわい。も一度毛布上げにされる方のことは何とも言はれませんよ。何故でも、あゝいふ災難は避けるのがむづかしいし、またあんな事がやつて來よつても、只肩をすくめて息を殺して眼をつぶつて、運任せ毛布任せに身體をさせる外にやしようがござりませんからの。』

これを聞いてドン・キホーテは言つた、『サンチョーよ、お前は似而非キリスト信者ぢや。それはお前は一度受けた害を何時までも忘れぬからぢや。細かい事に重きを置かんのが氣高い鷹揚な人々のする事ぢやぞ。一體お前はいまだにあの戯れが忘れられんやうぢやが、片足でもその爲めに跛にされたとか、肋骨でも折られたとか、或ひは頭でも割られたと言ふのか？　あれは公平に考へて見れば、たゞの冗談であつたのぢやよ。もし拙者があれを冗談ぢやと思はなんだら、拙者は取つて返して、ヘレン女王を強奪されたのに對してギリシャ人等がしたよりも、もつと手ひどく復讐したらうぞ。そのヘレンは、もしあの婦人が今の世に生きて居るか或ひはわがドゥルシネアがその當時に生きてをつたとしたら、ドゥルシネア程には美しいといふ譽は得なんだに違ひない。』と此處まで言ふとドン・キホーテは空を仰いで溜息を洩らした。そこでサンチョーは言つた、

『あれは眞面目ぢや仕返しも出來ませんから冗談にしときましよ。ぢやが私にやそれがどんな冗談ぢやつたかどんな眞面目ぢやつたかゞ分つとりますし、またそいつア私の肩ぶしからも私の覺えからも消してしまへんことも分つてをりますよ。ぢやがまアそりやさうとして、貴方樣が投げつけなさつたあのマルティノー（マムブリノーを間違つていふ）の棄てゝ行つた、鼠色の驢馬のやうな連錢葦毛（れんせんあしげ）のこの馬はどう始末したら宜しうございましよかい？　あいつが尻に帆かけて遁げ出した樣子から見ますと、とてもこれを連れに歸りさうもございませんからの。そして確かにこの鼠色の奴ア逸物でございますよ。』

『私は自分の負かした者から分捕物を取ることには一向慣れて居らんのぢや、』とドン・キホーテは言つた、『また負けた者の乘馬を奪うて徒歩で行かせるのは騎士道の習ひでない。尤も勝つた方がその勝負の際に自分の乘馬を失うた場合は別ぢや。その時は正當な戰の分捕品として負けた者の乘馬を取るのは正當なことになつて居るのぢや。それぢやから、サンチョー、この馬が驢馬かそれとも何なりお前の思ふ通りのものであつてよいが、これは棄てゝ置くがよい。私らが此處を立ち去るのを見たらこれの持主が取りに來ようからの。』

『私はこいつが取りたいのでございますかなア、』とサンチョーは答へた、『それでなきや、私のよりか良いやうぢやから、せめて私のと換へつこ位したいもんでございますよ。驢馬の換へつこを許すだけにも緩められんとなると、まこ

とに騎士道の掟は窮屈なもんでござりますの。何うでござりましよ、せめての事に飾物ぐらゐは換へても宜しうござりましよか？』

『その點は私も全く確かでない。何分曖昧なことぢやから、確かなことは他日を期するとして、お前が是非とも入用とあれば取り換へてもよからうぞよ。』とドン・キホーテは答へた。

『それは中々是非とも入用で、この飾り物がもし私の身體に着ける品でもござりましたら、これより上に望みの物はなからうと思ふ位でござりますよ。』そこでサンチョはこの許可に心強くなつて早速驢馬の衣裳更へを濟ました。そして自分の驢馬を九十九分迄裝はせて全く別ものに仕立てた。これが濟むと、二人はあの駄騾馬から强奪した戰利品の殘りで朝飯をやつた。そして例の布晒し水車から流れて來る小川の水を飲んだが、しかしそれが自分等を嚇かした事を思へば忌々しいので、その水車の方へは二人とも見向きもしなかつた。やがて怒りも悲しみも殘らず取り去られて、彼等は乘るものに乘つた。そして別にどの道とも定めずに(どの道ともさだめぬのが眞の武者修行には當り前のことなので)ロシナンテの意のまゝに導かれて出發した。

ロシナンテの意はその主人の意を導いたからである。また驢馬の方は常に何處へでもロシナンテの導くまゝに愛嬌よく人懷つこく從いて行くから、この方は言ふにも及ばぬ。しかし彼等は元の國道へ出た。そしてその道を何のあてもなく漫然と進んだ。

『旦那樣、貴方樣に些ともの申上げても宜しうございましよか？　貴方樣が私にものいふときついお達しをなされてから、いろ〳〵の事が私の腹の中で腐つてしまひましたわい。そして今丁度一つ腐らしたうない事が舌の尖まで出とるのでござりますがの。』

『言ふがよい、サンチョ、そして話は手短にせい。長い話は一向面白うないからの。』とドン・キホーテは答へた。

『へえ、それぢや、旦那樣、』とサンチョが答へた、『そりや外でもござりませんが、かういふ野原や四つ辻で貴方樣が探してござるやうないろ〳〵さま〴〵の冒險を探しても如何にも獲物が少ないちふことを、私はこれ迄幾日の間か考へ續けてをりましたよ。かういふ處ではこの上もない恐ろしい物に見事に勝つても、見る者もなきア知る者もないから、いつになつてもその手柄は世間へ傳はらずにしまひますから、詰りは貴方樣の目的外れで、手柄の持ち腐れに

なりましよ。それぢやから、貴方樣のお考へはどうか存じませんが、私ら㌘、戰にかゝつてござる何處かの天子樣か、大きなお大名のところへ行つて御奉公して、その働きで貴方樣の御大力やらまた優れた御分別やらの價値をお見せなさつたら、それを御覽になつて私らが御奉公しとる殿樣は、面々の手柄によつて是非とも御褒美を下さりましよから、さうした方が却つてえゝやうに私ア思ひますわい。さうなりや何時までも人の覺えに殘るやうに貴方樣のお手柄を挫へて置く書き手に事ア缺きませんぞよ。それから私の手柄のことは何も申しますまいよ。家來は家來らしい手柄を立てりやえゝのでござりますからの。尤も家來の手柄も書きとめるのが武士道の習ひなら、私のも拔かしちやならんと、私ア遠慮なしに申しますがの。』

『サンチョー、お前の言ふのは間違ひではないぞよ、』とドン・キホーテは答へた、『ぢやがそこまで行く前に、いはゞ見習ひとして、世の中を遍歷して冒險を求めることが肝要ぢや。それはの、幾つかの冒險を成し遂げれば大した高名榮譽が得られる、從つてその騎士が何處かの大國の宮廷へ參つた場合には既にその手柄によつて知られてをる。そしてその騎士が市の門を入るが早いか、大勢の子供は、「これは太陽の騎士ぢや」とか「蛇の騎士ぢや」とか、またその他その騎士が大きな手柄を現した時に名乘つてをつた名乘りを呼び立てながら皆な後から從いて來て、そのぐるりを取り卷くやうなことのあらうためぢや。この人こそはあの大力の巨人ブロカブルノーを一擊ちに打ち負かした人ぢや、この人こそはあの偉いペルシャのマメリュークをば九百年近い間もかゝつてゐた長い魔術から救ひ出した人ぢや」と皆なで言はうぞよ。さういふ風に口から口にその騎士の手柄を觸れ傳へよう。そしてこの大勢の子供や大人の騷ぎを聞かれて、直ぐさまその國の王樣は宮殿の窓から顏を出される。そしてこの騎士を一目御覽になると、直ぐその鎧や楯の紋章やでそれとお見分けになつて、必ず言はれるであらう、「ホー、これは〳〵！　これ皆の者、朕が宮廷の騎士どもよ、此方へ來られるあの騎士道の花を出迎ひに出やれ！」此命令を承つて皆出て來る。そして王樣御自身も階段の半分程お下りになつて騎士を緊とお抱きになり、頰に接吻して挨拶をされる。それから王妃のお部屋にお連れになる。そこには王妃と御一緒に、この世では何處へ行つても少々の苦勞では見當らぬやうなこの上ない才色兼備の姫君がお出でなさる。忽ちその姫君と騎士とはお互にぢつと眼と眼を見かは

して、互に人間ならぬ神聖なものゝやうに思ひなすであらうわい。そして又二人はどういふ次第でとも何故とも分らぬながら、脫けるに脫けられぬ戀の惱みの中に捲き込まれ絡み込まれて、互の苦しみ惱みを語りあかす便りがないので二人の心は甚だしく沈んでしまふ。言ふ迄もなく騎士はそこから案内されて、善美を盡した宮中の一室に通される。此處で鎧を脫がせて貰うて、召使ひ共の持つて來る立派な猩々緋のマントを羽織る。そしてその騎士が鎧を着て氣高く見えたのなら胴衣を着れば尚更と氣高く見えようわい。夜になると王や王妃や姫君と御一緒に御飯を頂戴する。そしてその間中、騎士は兩親に氣付かれぬやうに、そつと偸み見しながらその姫君から寸時も眼を離さぬ。姫君も同じやうになさる。が先にも言うた通りこの姫君はなか〳〵愼み深いお方ぢやから、やはり騎士のやうに用心深くなさるのぢや。食卓を撤すると不意にその大廣間の戸口から一人の物凄い矮人が一人の美しい婦人を從へ二人の巨人に護られて入つて來る。こいつらは往昔の賢者の工夫した或る力試めしの物を携へて來をつたのぢや。そしてそれをやり遂げた者は世界第一の騎士と崇められるわけなのぢや。そこで王はそこに居合はせる殘らずの者どもにそれを試めさせられるが、その客人の騎士の外には一人としてそれを仕終せ得るものはないので、その騎士の名譽はいよ〳〵ますます高まる。そこで姫君は大いに喜ばれて自分の思ひをかくも高きところに定め置かれたことを嬉しくも仕合せとも思はれる。それに加へて、この王は、或は君主は、まアそりア何であつてもよいが、御自身と同じ位に有力な別の王と折柄烈しい戰をしてをられるのぢや。そこでこの客人の騎士は、その宮殿に何日か逗留してから、その戰に加はつて王の爲めに盡したいと願ふ。王は卽座にその願を許す。騎士は王の手に恭しく接吻してお禮を申し上げる。そしてその夜騎士は自分の愛人たる姫君に、そのお寢間の格子の前でお暇乞ひを申し上げる。そこは庭園に面してをつて、これまでもその姫君のお氣に入りの侍女を橋渡し仲立ちにして、その騎士と姫君とは此處で度々話しをなさつたのぢや。騎士は溜息を吐く、姫君は悶絶する、侍女は水を持つて來る、夜明けが近づいて來るので、もし人に見付けられては姫君の名譽に關はると思うて騎士は心を痛める。とう〳〵姫君は正氣に返つてその白い兩手を格子の目から差し出して騎士に接吻させる、と騎士はその兩手を涙で洗うて百千度接吻する。二人の間には、互ひに善きにつけ惡しきにつけ便り

をする手筈が整へられる。そして姫君は騎士に出來るだけお留守を短うしてくださるやうにと賴む。騎士が誓言を重ねてそれを約束する。騎士は今一度姫の手に接吻して、殆ど死なばやと思ふ程の悲しみで別れを告げる。騎士はそこから自分の部屋に歸つて、身を寢床の上に投げるが、別れの悲しさで眠られぬ。翌る朝は早く起きて、王や王妃や姫君にお暇乞ひに行く。そして御夫婦に別れを告げて居ると、姫君は御氣分勝れず誰にもお會ひ遊ばすことが出來ぬと騎士に通じられる。騎士は自分の出立を悲しまれてのことゝ思ふと、胸も刺されるばかりでその苦しみを包んで居ることが殆ど出來ぬ。仲立ち役の侍女はそこにをつて殘らず樣子を見て取つて、姫君の許へ行つてそれを告げると、姫君は淚を流して聽き入つて、自分の一番心を痛めることはこの騎士は一體どういふ人か、また王家の血統の人であるかないかを知らぬことぢやと言はれる。侍女は、あの騎士樣は起居振舞からしてあれほど愍懃でお優しく雄々しくゐられますから、どうしても王樣かそれとも名家の出でござりますと請け合ふ。姫の心痛はこれで癒やされる、そして兩親に疑ひを起させてはと思ひ、努めて氣を引き立てゝ二日目には皆の處へ出られる。話かはつて騎士はもう出發した。騎士は戰うては王の敵を征服し、多くの町々を乘り取り、度々の戰ひに打ち勝つて宮廷へ歸つて來る。そしていつもの格子の前で姫君を見る。そして騎士の功勞の酬いとして兩親に對し緣組の許しを求めるといふことに相談が整ふ。王はその騎士の素性を御存じないので、姫君を與へることを好まれぬ。しかし姫君が伴れ出されるかどうかして、姫君はその騎士の花嫁君となつて了はれる。そこで王樣もそれを中々の仕合せと思はれるやうになる。それは不圖したことから、この騎士は或る國の武勇の王の子息であるといふことが分るやうになるからぢや。その或る國といふのは、地圖の上に在りさうもないと思ふので、何處の國だか私も知らぬよ。親父の王樣がおかくれになる。姫君が後を繼がれる。そしてつまりその騎士が王になる。さうなると直ぐさまその騎士の家來やその他その騎士がこの高い位に昇る助けをした者共に恩賞が授けられるやうになる。その騎士は自分の家來を姫君の侍女の一人と婚はせる。その侍女は言ふ迄もなく騎士と姫との戀の橋がけになつた女で、或る大公爵の娘御ぢや。』

『私の望んどるのは、それでござりますよ。そいつアきつと旨いこと行きますぜ！　私はそればつかり待ちこがれて

居りますよ。今の話のことア寸分の違ひなしに憂ひ顔の騎士と名乗つて貴方様がお受けなさることになつとるのでござりますぞい。』とサンチョーは言つた。

『サンチョーよ、お前はそれを疑ふには及ばんぞよ。』とドン・キホーテは答へた、『私がこゝで話した通りの同じ様子や段取りで、武者修行者は王や皇帝に昇るものぢや。またその例もあるのぢや。私らは今キリスト信者であらうと、異教徒であらうと、戰をしてをつて、そして美しい姫君を持つてをる王を見つけ出さねばならぬ。しかし、私が今も言うた通り、私らが宮廷へ赴く前に、外の所で名聲を獲て置かねばならんのぢやから、今のやうなことを思ふまでには、餘ほどの間があらうわい。それにもう一つ缺けた點がある。それは私らが若し戰をしてをれば美しい姫君を有つてをるところの王様を見付け出して、そして私が世界に譽き亙る素晴らしい高名を得たとしても、拙者は王の血統でもなければ皇帝の再從弟にも當つて居らんのぢやから、そこをどうしたものかと思ふのぢや。王は先づこの點で十分滿足をせんと、假令拙者の功名手柄はそれだけの値打があり過ぎるほどであつたところで、その姫君を拙者に婚はせることを好むまいからの。そこでこの翳みがあるによつて、拙者の武勇によつて見事に手に入れたものを失ひはせぬかと氣遣ふのぢや。拙者が地所も財產もある名家の紳士であつて、年に五百シュエルド（一シュエルドは二の恩給（農事に就て著しい功勞のあつた者への國賜金）にあづかつてをるちふことは眞實ぢや。また私の傳記を書く賢者は私の先祖や家來をほぜり出して、私が或る王様の五代か六代かの子孫に當るもふことを見出さうやらも知れぬ。サンチョーよ、お前に知らせて置きたいが、世の中には二た通りの血統があるのぢや。一方には王侯の裔を承けつぎながらも、年代が經つにつれて段々と落ちぶれて、丁度倒しまにしたピラミット（エジプトの金字塔）の頂邊のやうになつてしまうて居るものもあれば、また片方には平民から起つて一歩々々昇り昇つて遂に大君主になる者もある。そこでその違ひは、一方は元はさうぢやつたが今は早やさうでなく、片方は元はさうでなかつたが今はさうであるといふ所に在る。そして拙者がよう調べて見ると、拙者の先祖はやかてて私の眞御となられる王も滿足されねばならぬやうな偉い名高いものであつたと分るやうなものかも知れぬ。それでも王が滿足されぬとあれば、その姫君はたとひ拙者が水汲み人夫の倅ぢやと知り抜いて居られても父上に構はず拙者を自分の主君とし夫として迎へられる程拙者を慕はれるであ

らうぞよ。もしさう行かなんだら、その時こそ姫を奪うて私の好きなところへ伴れて行くまでぢや。時が經つか崩御になれば姫の兩親の怒りもおしまひにならうからの。』

『そいつはやつぱり世間の悪い人間が申しまする「腕づくで取れるものアお情けで貰うな」ちふことになりますの。』とサンチョーは言つた、『尤もそりア「頼み奉るよりか、盗んでさつさと遁げた方がましぢや」と言うた方がよう欲りましよがの。私がかう申しますのは、貴方樣の眞御になるその王樣が、もし讓り合うてそのお姫樣を貴方樣に下されんと、貴方樣が言はつしやる通りお姫樣を掻さらうて伴れて遁げる外にしようがないからでござりますよ。けれど一つ困つたことにや、その仲直りが出來て、貴方樣が平穩にお國をお治めなさるやうになるまでは、不憫な家來は御褒美の方は上つたりでござりますわい。尤も家來の女房になる筈の、その取持ち役の腰元が、お姫樣と一緒に連なうて來て、さうして家來と一緒になつて、運が立ち直るまでその不仕合せの片荷を擔うて呉れるなら別でござりますがな、大方その御主人はやつぱりその腰元を直ぐに家來の天下晴れての女房に下さるかも知れんと思ひますからの。』

『それには誰れも故障は言へぬわい、』とドン・キホーテは言つた。

『さういふことなら、それぢやもう私らは神樣に身を任せて、どんな成り行きにならうと運任せにやつて行くばツかりでござりますぞよ。』とサンチョーは言つた。

『神は拙者の願ひとお前の望みとによつて導き給ふのぢや。また自ら卑しくするものは卽ち卑しぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『全くさういふ奴はさうさせるが宜しうござります。私は昔からのキリスト信者でござりますから、それだけでも伯爵になる價値は十分にござります。』とサンチョーは言つた。

『十分以上ぢやわい、』とドン・キホーテは言つた、『また假令お前がその信者でなうても別に差し障りはないのぢや。それは拙者は王ぢやから、別にお前が償ひとか奉公とかをせいでも、お前を貴族にすることは容易いことであるからぢや。拙者がお前を伯爵にしてやれば、さうすればお前は忽ち一と廉の紳士ぢやからの。世間では勝手に何と言はうと、必ず世間の人々は嫌でも應でもお前を「殿樣」と呼ばずばなるまいぞよ。』

『全くそれに違ひござりません。そして今にその調合に似

合ふやうにすることも分りましよわい。』とサンチョーは言つた。

『稱號と言ふものぢや、調合ぢやない。』と主人は言つた。

『さうですかい、』とサンチョーは答へた、『とにかく行儀作法も分つて來るぢやろと申すですよ。私ア生れてからたつた一度組合の小使をやりましたが、その小使の上衣が私にようく似合うたので皆組合の勘定方にしたらよささうに見えると言ひましたよ。それぢやから私が公爵樣の長着物を背中に引つかけたり、外國の伯爵樣のやうに金や眞珠を着飾つたりしたらどうでござりましよ。きつと二三百里のところから私を見に大勢やつて來ますぞよ。』

『お前は立派に見えるぢやらう。ぢやがお前は鬚髯をもよいく剃らねばならぬぞよ。お前の鬚髯は隨分濃くてごはごはしてむさ苦しいから、せめて二日目毎に剃らんと、二三百間向うからでもお前の人品は見破られるからの。』とドン・キホーテは言つた。

『それにや床屋を一人雇うて、給金やつて抱へ込んどくに越したことアござりませんの？　そして若し入り用でござりましたら、大名がたのお馬方のやうに、私の後ろにいつも床屋をお供させましよわい。』とサンチョーは言つた。

『何故、どうしてお前は大名がたが後ろにお馬方を從へ居ることを知つとるのぢや？』とドン・キホーテは訊いた。

『それはかうでござりますよ、』とサンチョーは答へた、『五六年前私は一月の間都に出て居りましたが、其處で私は、えらい大人物ぢやと言はれとるえらい小男の旦那が馬で乘り廻してござるのを見掛けました。そしてその旦那がどこに行かつしやろと馬に乘つた一人の御家來がまるでその旦那の尻尾のやうに從いとりましたのぢや。私はこの男が何故始終この旦那の後にばかりくつついて居つて他の人と一緒にならんのかと人に訊いて見ました。すると、その男はその旦那のお馬方ぢふもんで、そして貴族さんがたは自分の後にかういふ者を連れなさることになつとるのぢやと教へて呉れました。そこでそれからずつと私はそのことを知つとりますのぢや。私はついぞそれを忘れませんからの。』

『その通りぢや。そして慣習といふものは、凡て一緒に用ゐられろやうになつたわけでもなければ、凡て一度に發明されたわけでもないから、お前は同じやうに床屋を伴れて歩いてもよいのぢや。そして床屋を伴にする最初の伯爵になるがよいのぢや。それにまた、成る程、鬚髯を剃らせるといふことは、馬の鞍を置かせるよりかずつと信用のいる役目

ぢやわい。』とドン・キホーテは言つた。

『床屋の事は私に引き受けさせて下さりませ。そして貴方様は、王様になつて私を伯爵にして下さる方を引受けて下さりませ。』とサンチョーは言つた。

『さうしよう。』ドン・キホーテはかう答へて、眼を上げると次の章で話されるものが見えたのである。

第二十二章　自ら少しも行きたくないところへ、意ならずも伴れ行かれつゝあつた十餘人の不運な人々にドン・キホーテが授けたる自由のこと。

アラビア人でマンチャの村の文人シード・ハーメット・ベネンジェリがこの最も眞面目にして氣品高く、精細にして輕妙、しかも獨創的なる物語の中に錄す所によれば、二十一章の終りに記述されてあつた名高いラ・マンチャのドン・キホーテとその家來サンチョー・パンザとの議論の後、ドン・キホーテは眼をあげて見渡すと、自分等の辿つてゐる同じ道路を向うから十二三人ばかりの者が太い鐵の鎖で頸の所を珠數繋ぎにされ、銘々の手には手錠をはめられて、歩いて來るのを認めたのである。それにまた乘馬の人が二人と徒歩の人が二人引き添うて來た。騎馬の二人は各々火繩銃を携へ、徒歩の人等は手槍を持ち劍を帶びてゐた。サンチョーはこれを見るや否や言つた、『あれは、王様の命令に無理強ひされて櫂船へ行きよる船黨役の連中でございます。』（この頃には囚徒の勞役として櫂船を漕ゐせた）

『どうして無理強ひされるのぢや？　何人に對しても王が強力を用ゐるといふことがあつてよいものか？』ドン・キホーテは訊いた。

『私はそれを言ふのぢやございません。たゞこの連中は銘銘の罪科の爲めにお上の力で王様の櫂船で勤めるやうに申し渡されたといふだけでございますよ。』とサンチョーは答へた。

『その譯はどうであらうと、確かにこの連中は强力によつて引つ張られるところへ、厭々ながら行きよるのぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『全く左様で、』とサンチョーは言つた。

『いよ〳〵さうとすれば、これこそ拙者の職分を盡し、强力を打ち倒して、哀れの者どもを助け救ふべき場合ぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『貴方様、ようお考へなされませよ、天下の御法は王様がそのお手本で、あゝいふ人間に無理をし向けたり非道なことをし向けたりするものぢやございません。たゞあの人たちの科に罰を喰はせるだけのことでございますよ。』とサンチョーは言つた。

船徴役人の一繋ぎは折から近づいて來た。そこで、ドン・キホーテは警護の人々に向つて、なぜ此等の者共をこんな風にして護送して行くのか、その一つの理由なりいろ〳〵の理由なりをどうか話して下さるようにと頼んだ。馬上の警護の一人はこれに答へて、この連中は國王様の船に屬する船徴役の奴隷であつて、今その船へ行く途中である、そしてそれ以上のことは話すことも出來ねば聞く必要もないのだと言つた。

『ではございませうが、拙者はこの囚徒の銘々から別々にその不運の原因を聞きたうございますがな。』とドン・キホーテは答へた。そして尙ほ同じ意味の言葉を重ねて、彼の聞きたいと思つたことを彼等が聞かして呉れるやうに、非常に丁寧に頼み込んだので、今一人の騎馬の警護は、ドン・キホーテに向つて言つた、『この惡人どもの銘々の記錄や刑罰宣告書も此處にありはしますが、それを取り出したり讀んだりする場合ではありませんから、こいつら銘々について訊いて下さい。こいつらは話したくば話してもよろしいです。またこいつらは惡い事をしたり話したりするのを喜びますから、お話しませう。』

この許しを得て、尤もその許しは與へられなんだにしても、ドン・キホーテは無理にも取つたであらうが、囚徒に近寄つて一番目の男に、どういふ罪科の爲めにこんな哀れな境遇になつたのかと訊ねた。

その男は、自分が戀をした爲めにかうなつたのだと答へた。

『たつたそれだけの爲めにかい？　へゝえ、若し戀をした爲めに船へ送られるものなら、拙者もとうの昔から船を漕いで居つたかも知れんのぢや。』とドン・キホーテは答へた。『戀をするちふのが貴方の考へでござるのとは種類の違うたやつで、』とその囚徒は言つた、『私のは綺麗なリンネルの入つた洗濯女の笊を大層戀しまして、そいつを摑かり抱き込んだので、若し法律の手で無理やりそれを引き離されなんだら、今日只今迄も自分からは何うしたつて離しはせなんだでございましよ。私は現場で引つ捕まつて、拷問にかゝる隙もなしに、裁判はきまつて、背中を百鞭打たれて

その上に三年のグラバを受けました。それでおしまひになりました。』

『グラバとは何ぢや？』とドン・キホーテは訊ねた。

『グラバちふのは船のことでございますよ。』とその船黨役人は答へた。この男は二十四歳位の若者で、自分はピエドライタの生れだと言つた。

ドン・キホーテは同樣の問を二番目の男にしかけた。この男は非常にがつかりして鬱いでゐて、一言も答へなかつた。しかし一番目の男がこの男の代りに答へて言つた、『この男はな、旦那、カナリアで通つて居ますぜ、音樂者で歌ひ手といふわけですよ。』

『何ぢや！　音樂者とか歌ひ手ぢやとか言ふのでやはり船へ行くのかい？』とドン・キホーテは言つた。

『さうですよ、旦那、苦しまぎれに歌ふのより悪いことアありませんからな。』と囚徒は答へた。

『私はそれと反對に、歌ふ者は自分の悲しみを忘れると聞いとるがな。』とドン・キホーテは言つた。

『こゝではそれとあべこべでさア、一遍歌うたら一生涯泣き通しでございますからな。』と囚徒は答へた。

『私にはどうも分らぬのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

しかし警護の一人は彼に向つて言つた、『貴方、悪者社會で苦し紛れに歌ふと言ふのは、拷問にかゝつて白狀する事を言ふのですよ。この罪人は拷問にかゝつて牛泥棒をやつたといふ自分の犯罪を白狀したのです。その白狀に依つて六ヶ年の船黨役と、それからもう背中に受けてしまうた二百の笞刑とに宣告されたのです。そして此奴がいつも怯氣てふさいでゐるのは、此奴が白狀なんかしやがつて、「イエ」と言ひ張るだけの膽ツ玉がなかつたからと言うて、殘して來た泥棒どもゝ此處に一緒に歩いて居る奴等も皆寄つてたかつて此奴を虐めたり叱つたり悪態を吐いたり貶罵したりするからです。この連中は、「イエ」も「ハイ」も字數は同じぢや、そこで證據人の舌ぢやとか證據の品に依らないで、只犯罪人自身の舌一枚で命が助かるか助からぬか定まるといふ場合は、犯人は仕合せぢやといふのです。實際、私もそれは當らずとも遠からずぢやと思ひますよ。』

『私もさう考へますわい。』とドン・キホーテは答へた。そして彼は三番目の男のところへ行つて、前と同じことを訊ねた。するとその男は非常に手輕で平氣で答へた、『私ア十デュカット（一デュカットは五圓足らず）の金が無かつたばかりでお船樣へ五年やられることになりましたよ。』

『お前さんをその苦役から救ふ爲めに、拘者は喜んで二十デュカットを進上せう。』とドン・キホーテは言つた。

『それは丁度、海の上で餓ゑ死にしかゝつてをる人間が、何一つ自分の欲しい物を買ふ法のない時に、金を持つてをるやうなものでござりますよ。何故さう言ふかなら、今貴方樣がやらうと仰有るその二十デュカットを丁度その時に私が貰うてをりましたら、私アその金で公證人の筆を滑らかせ代言人の智慧を働かさせて、今頃はトレードのゾコドヴァーの市場の眞中に居つて、こんな道の上で獵犬のやうに繋がれもア居らなんだでござりましたらうからな。しかし神樣はおえらうござります、向うへ行つて辛抱しませうわい、それで澤山でござります。』

ドン・キホーテは四番目の、白髯を胸の下まで垂らしたどことなく尊げな顏付の老人に近づいた。この男はどういふ理由でこんな身の上になつたかと訊ねられて、一言も答へずに涙を流した。しかし五番目の男がその舌代りを務めて言つた、『この老爺さんは、お祭の長袴を着せられて馬に乘せて引き廻された揚句、五年の船へ行くところです。』

『それは、大方世間へ恥を曝したちふわけぢやな。』とサンチョー・パンザは言つた。

『全くその通りです、』とその五番目の船漕役人は答へた、『そして、さういふ罰を喰うた科は、耳仲買を、いや身體の仲買をやつたからでござりますよ。つまりこの老爺さんが女衒をやつたり、それにどうも魔法使ひ臭いところがあつたせゐでござりますよ。』

『若しその臭味が混りこんでをらなんだら、たゞの女衒だけでは船を漕ぐには當るまい、寧ろ船を差廻して提督になるべきぢやつたらう。』とドン・キホーテは言つた、『何故といへば、女衒の仕事といふものは用心深い人間のやる仕事で、普通の仕事ではないのぢや。この仕事は秩序の整うた國ではなか〳〵必要なもので、又家柄のある人達ばかりがすることぢやからの。實際この女衒の仕事にも、外の仕事同樣に檢察官とか監督官とかいふものを置いて、仲買人どものやうに人數をきめて取締ることが必要ぢや。さういふ風にすれば、この仕事なり職分なりが、現在のやうに、どうせ馬鹿げた女どもや、身分も經驗も乏しい小姓上りや幇間などのやうに愚鈍な無智な奴等の手で扱はれてをるところから起つて來る、樣々の弊害は取り除かれるといふものぢや。あの手合と來ては、最も火急の場合に當つて臨機應變の策を要する時に、食ひ物を口の端へ持つて行く途中で凍

らせたり、どつちが右の手か分らんやうになつたりするのぢや。私はかういふ國家に必要な職務を果す人は讃拳することにしたがよいといふ理由を更に進んで述べたいが、しかし此處はその場所柄でないわい。何時かは、これに注意してそれを矯正することの出來る人にこの事を說き明かすつもりぢや。今はたゞ、こんな白髪の尊げな顏付の老人が女術である爲めにかやうな苦しい身の上になつたのを見て拙者は氣の毒に感じたが、この人が魔法使ひでもあるといふのを聞いてはその心も消え失せたとだけ言つて置く。尤も私は無學な人々の思ふやうな、人間の意志を動かしたり强ひたりすることの出來る魔法などは、決してこの世に無いことはよう知つてをる。凡そ人間の意志は自由ぢやし、また人間の意志を强ひることの出來る藥草とか禁呪とかはあるものでないからの。馬鹿な女どもや山師どもの仕出來すことゝいへば、飮み料や毒で人間を氣違ひにさせる位が關の山ぢや。今も言ふ通り、意志を强ひることは出來ぬものぢやからの。』

『なる程な、』とその善良な老人は言つた、『全く、貴方樣、その魔法のお咎めだけは無實の罪でござります。女術をしたといふ方は私も打ち消しは致しません。しかし私はそれをするのが悪い事であつたとは聊かも考へませなんだよ。それと申しますのは、私はたゞ世の中の人が皆樂しんで、喧嘩も面倒もなしに穩かに靜かに暮らすようにとばかり思うてしたことでござりますからな。しかし私の善い考へからした事も何の甲斐なく、この年をして、お負けに小便詰りで一寸の間も牀樂にア居られませんのに、またと再び歸れるとも思はれんところへ行かねばならぬことになりましたわい。』と言つて、老人は前と同じく泣き崩れた。サンチョは餘り可哀さうだと思つたので、懷中から四レーェル銀を取り出して、その老人に惠んでやつた。

ドン・キホーテは更に進んで、その次の男にお前の罪はどんな罪かと訊ねた。するとこの男は前の男に劣らぬどころか遙かに氣輕に答へた、『私がかうなつた譯は、私の二人の從姉妹たちと、それから私の親類でない二人の從姉妹衆とあんまり惡戲が過ぎたからでござります。一口に申しますと、その惡戲が深入りして、どんな勘定方でも淸算のつかん程、やゝこしい身內の數が殖えてしまうたのでござります。それが皆私の咎になつて、情はかけて貰へず、錢はなし、私はすんでのこと首根つこを拔かれるところでござりましたが、六年の間艦へやられることに申し渡されました

から、言ふなりになりましたよ。それも私の過ちの罰でござります。私は若いから生命さへ繋がつとりや、また好い都合にもなれませう。もしか旦那、貴方樣が幾らなりと貧乏人をお助けなさるなら、神樣は天上で果報をお授けなされませうし、私らは、この世で貴方樣の穩かなお顏の値打だけに貴方樣の御丈夫でをられますように、神樣へお願ひ申すことを忘れますまいよ。』この男は學生の服を着てゐた。この男は大のおしやべりでまた中々戀れたラテン語の學者であると警護の一人は言つた。

一番後からは三十ばかりの男でなか〳〵押し出しの好い奴が來た、尤も彼は少し藪睨みではあつたが、この男は外の者等とは異つた風に縛られてゐた。その片脚には、身體中をぐる〳〵捲きつけてをる長い鎖を附け、頸には二つの鐶が附いてゐて、その一つは長い鎖に繋がり、今一つの鐶は所謂「友環」若しくは「友脚」といふ鐵環に繋がつてゐる。そしてそこから腰までとゞく二本の鐵棒がさがつてゐて、その先きに附いてゐる二つの手錠の中に兩手を入れて、大きな海老錠で留めてあつた。そこでこの男は、兩手を口へ持つて行くことも自分の頭を手の方へ下すことも出來なかつた。ドン・キホーテは、この男に限つて何故他の者よりも餘計の鎖を着けて居るかを訊ねた。警護はそれに答へて、この男はたつた一人で他の殘らずの囚徒のした惡事の總體よりも餘計な惡事を行うたし、またこんなに嚴重に縛つて護送して居ても、安心どころか逃亡の恐れがある位に悍々しい惡黨であるからだと言つた。

『一體どういふ犯罪があつたわけですかの、船鑒役にやられるよりも重い罰に相當せんといふと？』とドン・キホーテは言つた。

『この男は十年間の鑒役です。それは公民權剝奪と同じことです。そしてこのえら者こそ、あの評判の高いギネス・デ・パサモンテ、一名ギネシロ・デ・パラピラですと申せばもう澤山です。』とその警護は答へた。

『警護長樣、お手柔かにお願ひ申しますよ。』とその船鑒役人はこれを聞いて言つた、『私らの名前や綽名の作り換へは御免を蒙りますよ。私の名前はギネスで、ギネシロぢやありません。また私の苗字はパサモンテで、貴方の仰有るやうにパラピラぢやございませんよ。まアお互樣に御自分のことだけ世話燒くことにしませうよ。それだけで澤山でございますからな。』

『些と』と口をたしなめ、番外飛び切りの泥棒大將。齒を碎か

れて舌を叩けんやうにして貰ひたうないならの。』と警護長は答へた。

『人間は神様の御意の儘になることはわかり切つた話ですよ。然しまア何方も何時かは、私がギネシロ・デ・パラピラちふ者であるかないかお分りになるでせう。』とその船徴役人はやり返した。

『嘘吐き奴、皆貴様をさう呼んどるぢやあないか？』とその警護長は言つた。

『さうですよ。しかし私は目に物見せてさう呼ぶのを止めさせるのぢや。何處でさうするかは言ひますまいよ。ところでお武家さん、私らに何か下さるのなら、早う下さいよ。人の身の上を一々穿鑿なさるのも、大分御退屈のやうですからな。そして御機嫌よう御出立なされ。若し貴方が私の身の上を知りたかつたら、私はギネス・デ・パサモンテといふ者で、その男の傳記はこの指で書かれて居りますと申しましよかい。』とギネスは答へた。

『ありや本當のことですよ。この男は自分の身の上話を思ひ切り立派に自分で書きましてな、その本を二百リーェル銀の質草に監獄へ置いて來ましたですよ。』と警護長は言つた。

『また私は、そいつが二百デュカットで質に入つとつたにせよ、受け戻すつもりです。』とギネスは言つた。

『そんなにその本は面白いものかの？』とドン・キホーテは言つた。

『その面白いことと言うたら、「ラザリロ・デ・トルメス」スペインの浮浪人の生活を描いた小説でも、またそんな種類の本で今迄に書かれた物でもこれから書かれる物でも、私のに比べたら屁のやうなものぢや。それには本當にあつた事實が書いてある。どんな嘘でも叶はんやうな氣の利いたおもしろい本當にあつた事が書いてあると言へば澤山です。』とギネスは答へた。

『そしてその本の表題は、何といふのぢやな？』とドン・キホーテは訊いた。

『「ギネス・デ・パサモンテの傳」。』とその本の主人公が答へた。

『そして、その本は完結しとるかの？』とドン・キホーテは訊ねた。

『私の生涯がまだおしまひになつとらんのに、何でその本が完結しとりませうぞい？　それに書いてあるのは、私の誕生から、この前船徴役にやられた時までのことですよ。』

と相手は言つた。

『ぢやアお前さんは以前にもあそこへ行つたのぢやな？』

とドン・キホーテは言つた。

『この前には四年の間あそこで神樣や王樣へ御奉公しました。それでもう今ぢやビスケットや革鞭がどんなものかは承知しとりますよ。それぢやからあそこへ行きア私の本を書き上げてしまふ暇があらうと思ひますから、また今戻つて行つても、大して辛いとは思ひません。まだ澤山書かにやならん事が殘つとるし、スペインのお船に乘りやあり餘るほど暇がありますからな。尤ももうちやんと腹案は出來とるから、書くにや餘計の手間はかゝりませんがな。』とギネスは答へた。

『お前さんは悧巧な人らしいの。』とドン・キホーテは言つた。

『その上不仕合せ者です、悧巧なものはいつも不仕合せに虐められますからな。』とギネスは答へた。

『不仕合せは惡黨どもを虐めるんぢや。』と警護長は言つた。

『警護長さん、もう先程お手柔かに願ひますと申しましたぜ。』とパサモンテは言つた『あつちでお大臣方がその杖を貴方に下さつたのは、こゝで私らのやうな可哀さうな者を虐めろちふてぢやない、王樣の御命令の場所へ私らを伴れて行けちうてでござりましよ。さうでなきア、命にかけても——いや何でもありませんよ——大方宿屋で出來た汚れは、洗ひ淨められるでござりましよ。お互に舌を控へて、行儀も口も愼みませうよ。時に、もう私らアこんなお款待は澤山ぢやから、出かけるとしませうよ。』

警護長は、この脅し文句の返報にパサモンテを打たうと、その杖を振り上げた。しかしドン・キホーテは仲に入つて、そして兩手を縛られてをる者には少し舌の自由を與へても過分ではあるまいから打たないようにと願つた。それから彼は囚徒全體に向つて言つた、『さてお前さんたち、私が皆の話を聞いたところでは、お前さんたちは銘々の過失の爲めに罰されるのぢやが、お前さん等が受けようとしてをるその罰は大してお前さん等に喜ばれてをらん。それで頗る本性に逆らひお前さん等の意志に反いてあの罰を受けに行くのである、それに恐らく或る者は拷問にかけられて勇氣の不足な爲めに、或る者は金のない爲めに、また或る者は辯護の不足、或ひは裁判官の曲つた裁き方といふやうな事が、お前さん等の身を亡ぼす原因ともなり、またお前さん

等が折角自分の身の證明を立て通すことの出來なんだ原因ともなつたのぢやといふことが、拙者にはつきりと分るのぢや。今拙者の心に浮ぶ思ひは、拙者を勸め剩へ强ひ迫つて、この場合こそ、その爲めに天我をこの世に送り、拙者が屬する騎士道の職務を我に授け給うたその目的を顯揚し、且つは窮地にある者乃至强者の壓迫を蒙る者に扶けを與へんと誓うたその誓ひを現はせよと促すのぢや。しかしながら正當の手段で出來ることを汚い手段でせぬのが作法であることは拙者も心得て居る故に、この警護や警護長の方々に願うて、もつと都合の好い事情の下に王の御用を勤める人に事は缺くまいから、お前方を釋いて穩かにこゝから往なして下さるやうに賴んで見よう。神や自然が自由なものとして拵へた者を奴隷にすることは無情の仕方と拙者には思はれるからぢや。剩へ、警護の方々よ、』とドン・キホーテは附け加へた。『この不憫な者共は貴方がたに對して何も惡い事をした譯ではありませぬ。銘々の罪の報いはあの世で受けさせたが宜しうございます。天に在します神は惡人を罰し善人を賞したまふことをお忘れにはなりますまい。それ故正直な人々が他人に刑罰を加へる道具となるといふことは、その兩者の間には何の關係もないのぢやから不似合ひのことぢや。拙者がこんなに靜かに物案かにこのお願ひをするのは、貴方がたがそれを聞き届けて下さるなら、拙者は貴方がたに謝意を捧げたいと思ふためぢや。しかしながら貴方がたが若し自ら進んで承知なさらぬとあらば、この槍と劍とは拙者が腕の力と共に、武威を示して御承諾を强ひることになりませうぞよ。』

『結構な詭辯ぢや！』と警護長は言つた、『この人はとうとうおもしろい冗談を言うてのけた！　この人は私等に向つて王の囚徒を放免せいと言ふわい、まるで私等にこいつ等を放免する權限があるか、この人にそれを命令する權限がありでもするやうに！　お前さんは自分の道を行かつしやい、御無事でな。頭の上に載つけてござるその金盥を眞直ぐに被りなさい、そして三本足の猫は搜しに行きなさるなよ。』（「猫に五本の足を求めるな」というスペインの諺がある）

『お前さんこそ猫ぢや、鼠ぢや、惡黨ぢや。』とドン・キホーテは答へた。そして言ふより早く彼は急かに打つてかゝつて、警護長の防ぐ間もなく、槍の一と突きでしたゝかに手傷を負はせて地べたに倒した。そしてドン・キホーテにとつて都合の好かつたことには、それは鐵砲を持つてゐた男であつた。他の警護等はこの思ひ設けぬ出來事に吃驚仰

天してしまつた。しかし漸く心を落ち着けて、騎馬の者等

此の章の初めに作者は騎馬の人は二人居つて、何れも銃砲を持つて居るといつてゐる。この種の前後矛盾はこの作の處々に出現する

を引き抜き、徒歩の者等は手槍を執つて、落ちつき拂つて相手を待ち受けて居るドン・キホーテに立ち向つた。そして若しこの時船艦徒人どもが、自分等の眼前にある逃亡の好機會を見てとつて、彼等が繋がれてゐた鎖を引き切らうと騒ぎ立てることにならなかつたら、ドン・キホーテは疑ひもなく氣の毒な目に遇つたのであらう。警護等は劍を切らうとして居る船艦徒人どもに飛びかゝるかと思へば、今度は自分等を待ち構へて居るドン・キホーテに打つてかゝるといふ風に徒らに騒ぎ廻つて、何一つ役に立つことは仕出來さなかつた。サンチョーはサンチョーでギネス・デ・パサモンテを解く手助けをしてやつた。ギネスは一番に自由に鎖を解いてその戰の中へ飛び入り、打ち倒れてゐる警護長に打つてかゝつて、その劍と鐵砲とを奪ひ取つた。その鐵砲で相手の一人々々に狙ひをつけたので、一發も放たずして、警護等は一人殘らずこの曠野から逃げて行つてしまつた。蓋し彼等の逃げ去つたのは、一つはパサモンテの鐵砲を、また一つには、今や鎖を解いた船艦徒人どもが手に〳〵投げつける小石の雨を、免れる爲めであつたのだ。サンチョー

はこの事件で非常に心を痛めた、何故ならば、今逃げて行つた警護どもは、この事を「神聖救濟組合」に報告するであらうし、さうなればこの組合の人々は早や警鐘の響を聞いて直ちに罪人捕縛の爲めに繰り出して來るに違ひないと思つたからである。そこでこの事を主人に話して、即刻この場所を去つて、近くの山中に隱れ込むようにと勸めた。

『それはなか〳〵好い思ひ付きぢや、しかし拙者はその前にせねばならぬ事がある。』とドン・キホーテは言つた。そして丁度暴れ廻つたり警護長の身ぐるみ殘らず剝ぎ取つたりしてゐた囚徒どもを殘らず呼んで、自分の話の聞えるやうに、自分の周圍に集めた。そして次のやうな演說をした。『受けたる恩を忝けなく思ふことは良い素性の人のなすべき事であつて、神の不興を最も多く蒙る罪は忘恩といふことである。お前さん方、拙者がかう言ふのは外でもない。お前さん方は既に現在の證據によつて見た通り、拙者から恩を受けたのぢや。それの返しとして、拙者がお前さん方に望むのは、さうして貰へば嬉しいのぢやが、卽ちお前さん方の頸から拙者が解いて進ぜた鎖を携へて、直ぐさま出發してエル・トボソォの町へ行き、ドゥルシネア・デル・トボソォ姫の前に出頭して、貴女樣の騎士、「憂ひ顏の騎士」が、

私どもを遣はされて御機嫌を伺はせられますと言うて下され。それからお前さん方が長い間慕うてをつた自由を取り戻したまでの、この著しい冒險の委しい仔細をあの姫君へ殘らず細かに話して下され。それが濟めばお前さん方は何處へなりと好きなところへ行くがよろしい。そして皆仕合せよう暮らしなされ。』

ギネス・デ・パサモンテは、一同に代つて答へて言つた、『貴方樣、私等の救ひ主樣、貴方樣が私等にせいと仰有ることは、世の中の出來ぬ相談の中で一番お受けの出來ぬ相談でござります。何故と言へば、屹度あの「神聖救濟組合」の連中が私等を追つ掛けて來ませうから、それを逃げるにや地の中に身體を隱したりして、一人々々別々になつて、銘銘の道を辿つて行かにやなりませんから、とても一緒になつてぞろ〳〵道を歩いて行くことは出來ません。そのドゥルシネア・デル・トボソォ姫へのお勤めや御挨拶をば何遍かの南無マリア樣やお題目と取りかへて、貴方樣のお志の代りに私等に唱へさせて下さることにして頂きたいもので、それなら差支へはござりますまい。そしてこのお約定なら、夜でも晝でも、走つて居つても休んで居つても、無事の時でも戰爭の時でも果たせることでござります。しかも私等が今エヂプトの肉鍋の中へ返つて行くと思うて見るのは、つまり私等の鎖を持つて、デル・トボソォへ出かけると思うて見るのは、丁度まだ朝の十時ぢやのに夜ぢやと思うて見るやうなもので、またさういふことを私等にせいと言ふのは、丁度楡の木から梨の實を取らうとするやうなものでござりますよ。』

『そんなら何うあつても、』とドン・キホーテは、今や大いに怒つて言つた、『牝犬の息子どんか、ドン・ギネシロ・デ・パロピロか、名前は何でもよいが、貴樣だけは後足の間へ尻尾を挾んで鎖を殘らず背負うて行かして見せるわい。』

なか〳〵柔順しいどころでなかつたパサモンテはもう此時はドン・キホーテが自分等を解放するやうな狂態を演じたのによつて、この人は頭の調子が少し違つて居るなと全く確信してゐたので、かういふ風に罵られるのを聞くと仲間の者共に眼くばせした。すると皆引き退いてドン・キホーテに石塊の雨を降し始めた。その烈しさに彼は楯で身體を庇ふことも出來なかつた。而も哀れなロシナンテはさなから眞鍮で拵へたもの〻如くに、幾ら拍車を當てゝも氣に留めなかつた。サンチョーは自分の驢馬の蔭に立つて霰と降りかゝる石塊を驢馬で防いだ。ドン・キホーテはうま

く身體を護ることが出來ないで勘定の出來ない位の澤山の小石に烈しく全身を打たれて、とう〳〵地べたに平伏つてしまつた。そして彼が倒れる途端に例の學生の囚徒は跳びかゝつて、その頭から金盥を引奪つて、それで彼の肩を三つ四つ擲りつけ、またもつとひどく地べたへそれを敲きつけたので、金盥は殆ど粉々に碎けた。やがて彼等はドン・キホーテが鎧の上に着てゐたジャケツを引き剝いた。そして若しその脛甲が邪魔をしなかつたら彼等は靴下まで剝ぎ取つたであらう。サンチョーからは上着を奪ひ取つて、下着一枚にして了つた。そして彼等はこの戰ひの、その他さまざまの分捕品を頒けてから、ドン・キホーテに命ぜられたやうに自分等の鎖を背負つたり、ドゥルシネア・デル・トボソォ姫の前へ出頭したりすることよりか、彼等が恐れてゐた神聖救濟組合に出會はぬようにと祈りながら、銘々勝手の道を辿つた。その場所に取り殘されたのは、驢馬とロシナンテとサンチョーとドン・キホーテとだけであつた。驢馬は頭を俯げて、眞面目な顏をして、恰かも先つき自分等を襲うた石塊の暴風がまだ吹き歇んでゐないと思つてゐるかのやうに、時々その耳を振つてゐた。ロシナンテは主人の側に平伏つてゐた。彼もやはり石塊で地べたへ打倒されたからである。サンチョーは上着を剝がれて、「神聖救濟組合」が來はせぬかと顫へてゐた。そしてドン・キホーテは自分が大いに盡してやつた當の人間からこんな目に逢はされたのを思うて、不機嫌でゐたのである。

第二十三章　モレナの山中に於てドン・キホーテに降りかゝつた事。それはこの信憑すべき物語に記されてある最も珍奇なる冒險の一つである。

ドン・キホーテは自分がかういふ目に逢はされたのを見て、家來に向つて言つた、『サンチョーよ、下司野郎に善い事をしてやるのは海へ水を投げるやうなものぢやと始終私は聞いてをつたが、もしお前の言葉を聽いてをつたら、この災難に罹らずに濟んだらうに。しかしもう過ぎたことぢやから辛抱して、これから後はこの事によつて用心する外はないわい。』

『貴方樣は私を異端のトルコ人とお思ひなさる位に御用心なさるが宜しうございましよ。』とサンチョーは答へた、『ぢやが、貴方樣はもし私の言ふことを御信用なさつたら、今

度の災難をのがれたかもしれんと言はつしやる故、もう私を御信用なされませよ、さうすりやもつと大きな災難を免れますよ。なア、あの「神聖救濟組合」は騎士道なんていふものを何とも思うちや居りませんし、世界中殘らずの武者修行者が來たつて三文にも思ひやしませんからの。本當にあいつらの矢の音が今といふ今私の耳の側をヒユー〳〵飛んでゐるやうな氣がしますわい。』

『サンチョー、お前は生れつき臆病者ぢやの。』とドン・キホーテは言つた『然し、私が頑固ぢやとかお前の勸めを些とも聞き入れんとかと、お前から言はれんやうに、今度だけはお前の勸めに從うて、お前がそれ程に恐がつてをるその恐ろしいものゝ屆かんところへ引き上げよう。ぢやがそれには一つの條件がある、卽ち生前にも死後にもお前は決して、私が恐がつてこの危險から身を退いたとか引き上げたなどと誰にも言はずに、たゞお前の願を容れてしたことぢやと言ふといふことぢや。もしお前がその通りに言はぬならばお前は嘘を吐くことになる。そこで今からその嘘を吐く時まで、またその時から今までの間、私はその嘘をお前に負はせて、お前は腹の中でも口でも、いつでも嘘を吐く人間ぢやと言はう。いや、もう私に何にも返答するには及ばん。私はどんな危險からでも、まして恐ろしさうな蔭さへ餘りさしてをらん今度のやうな危險から、逃げ隱れすると思うたばかりでも、私は此處に踏み止まつて唯一人で待つて居りたうなるからの。お前が恐がつて話すあの「神聖救濟組合」はもとよりのこと、たとへイスラエル十二人支族の兄弟どもであらうが、七人のマッカビー（ユダヤ再興の英雄）であらうが、双生兒のカストルとポラクッスであらうが、また世界中の兄弟や組合仲間であらうが。』

『旦那樣、』とサンチョーは答へた、『引き上げるのは逃げるのぢやござりませんぞい。そして見込よりも危ない方の多い場所に踏みとゞまるのは智慧のない話でござります。今日の力を明日に殘して置いて有りたけを一日に使うてしまはんのが賢い人間のやり方でござりますわい。かう申しちやア何でござりますが、私ア下司下郎でござりましても、世間で怪我のないやり口ぢやというとることは、些とは心得て居りますぞよ。それぢや、まア〳〵私の言ふことをお聞き入れなさつても後悔なさる事アござりません。まアロシナンテに乘られるならば、お乘りなさりませ。もし乘れずば手をかして上げましよ。そして私の分別が、今といふ今は手よりか足が餘計に入用ぢやと教へてくれますから

の。私の後についてお出でなされ。』

ドン・キホーテは、何も答へずに馬に乗つた。そしてサンチョーは驢馬に跨がつて先に立ちつゝ、二人は直ぐ近くのモレナ連山の山腹へ入つた。蓋しサンチョーの計畫では、この連山をずつと横切つて、再びエル・ヴィソかアルモドーヴル・デル・カムポーかへ出て、そして自分等を捜索しに來るに違ひない「神聖救濟組合」の手を遁れる爲めに、その山の岩石の中に四五日も隱れて居らうといふのであつた。彼が進んでこの計畫を立てるに至つたのは、自分の驢馬に負はせてゐた糧食の貯へが、あの船鑑役人どもと喧嘩の中を無事に通つて來て居たからであつた。彼等が掠奪を恣にしたところから見れば、これだけ無事であつたのは彼には奇蹟と思はれるのであつた。

その夜二人はモレナ連山の奥に達した。その夜は勿論のこと、少くとも持ち合せの糧食が續く間は數日をそこで過すのが賢いことだとサンチョーには思はれた。そこで二人は柊の樹立の中の、二つの岩の間に露營を結んだ。しかし、眞の信仰の光を持たない人々の意見に從へば萬のことを思ふまゝに導き按配し取り定めるのであるといふ無慘なる宿命は、ドン・キホーテの德と狂氣とによつて鐵鎖から解き放されたるかの名代の惡漢にして盜賊なるギネス・デ・パサモンテをして、彼には十分恐がる理由のあつたあの「神聖救濟組合」を恐がるあまりに、この連山の中に隱れ込まうと決心させるやうなことにしたのである。そしてギネスの運命と恐怖とは彼を導いて、ドン・キホーテとサンチョーとが彼等の運命と恐怖によつて導かれ來りしその同じ場所へとギネスを連れて來たのである。而も丁度二人の新形の見分けが付く程の時刻に、而も二人が寢入つた頃に。而して凡そ惡人は常に忘恩の徒にして、窮迫は人を惡行に導き、眼前の小利は一切の遠き慮りに打ち勝つ習ひで、恩も知らねば節義もないギネスは、サンチョー・パンザの驢馬を盜まうと腹を決めた。但しロシナンテは賣に入れるにも賣り飛ばすにも向きの惡い代物であるので目もくれなかつたのである。彼はサンチョーの眠つてゐる間にその驢馬を盜んで、東の白まぬ間に遠く〳〵逃げのびた。

晨の女神はその姿を現はして地には喜びを、サンチョー・パンザには悲しみを齎した。彼は自分の連錢葦毛の失踪したことを發見したからである。そして彼はそれを取られたのが分ると、世にも悲しく哀れな慟哭を始めた。その聲が餘りに高かつたので、ドン・キホーテは眼を覺ました。する

と彼がかういうてゐるのが聞えた、『あゝ、私の家で生れた可愛い伴よ、私が子供等のおもちやよ、私の女房の樂しみよ、近所の衆の妬み物よ、私の辛勞の骨休めよ、そしても一つ、私の片腕よ、お前の日に日に儲けてくれた二貫六百ちふものは私の暮しの半分に當つたのぢやからのう。』

ドン・キホーテは、彼の悲歎を聞きその理由を知るに及んで、言葉を盡してサンチョーを慰め、我慢をせよといたはり、自分の家に居る五匹の仔驢馬の中の三匹を彼に與ふべしといふ手形を遣らうと約束した。これを聞いてサンチョーは氣が安まり、淚を止め、泣きじやくりを抑へ、そしてドン・キホーテの示した親切に向つてお禮を言つた。ドン・キホーテとしてはこの山中に入つたことを心から喜んだ、それはこの山々が丁度彼の捜しつゝある冒險に恰好の場所と思はれたからである。この山々は似よりの寂寞荒涼の地に於いて多くの武者修行者に降りかゝつた驚歎すべき樣々の冒險を彼の記憶に蘇がへらした。そして彼はそれらの事をそゞろに思ひつゞけて、恍惚として神往き、また他念なき有樣であつた。またサンチョーの方も、かの僧侶からの分捕物の殘りで食慾を充たすことより外には何の心懸りもなかつたのである。最早や、安全な場所へ逃げのびたと思つたので。そこで彼は雜嚢の中を空にして自分の胃嚢を膨らしつつ、是までは連錢葦毛が運んでゐたものを自分で背負つて主人の後について進んだ。そして彼はかういふ風にして進んで行けるなら、もう新な冒險に出會はすことなどは露ほども希はなかつた。

サンチョーはかうして歩きながら、ふと眼をあげると、自分の主人が立ち留つて、その槍先で何か地上に轉がつてゐる長張つた物を上げようとしてをるのを見た。そこで主人に追ひ付いて若し必要なら手傳はうと急いだ。そして其處に着いた時、主人は丁度槍の穗先で、半ば否寧ろ全く朽ちて破けてゐる鞍褥とそれに着いてゐる旅行鞄とを一緒に持ち上げてゐるところであつた。しかしそれは中々重かつたので、サンチョーはそれを取り上げるに力を添へねばならなかつた。そして主人はその鞄の中に何が入つてゐるかを檢べさせた。サンチョーは非常に素敏こく檢べた。その旅行鞄は鎖と南京錠で固く封じてはあつたけれど、朽ちて破れてゐたので、その內容を見ることが出來た。それは綺麗な粗麻布のシャツが四枚と幾つかの清潔な精巧なリンネル物とであつた。そして一枚のハンケチの中に少からぬ金貨の包んであるのを見出した。彼はこれを見るや否や叫んだ、『かう

いふ儲けのある冒險を授けて下さるとはありがたいことぢや！』そして尙も捜すと立派な裝幀の小形の懷中手帳が出て來た。ドン・キホーテはそれを受取り、金はサンチョーのものにして取つてしまつて置くようにと言つた。サンチョーは有難さに主人の手を接吻した。そして、鞄の中のリンネル物はすつかり取り出して自分の雜嚢の中に詰め込んだ。一伍一什のことをつく〳〵考へて ドン・キホーテは言つた、『サンチョー、こりや道を踏み迷うた旅人がこの山中を通つて追剝に襲はれて殺されて、追剝どもがその死骸をこの人里遠い處へ埋めに持つて來たのに違ひないと思ふがの——何うもさうでなうてはならんわい。』

『そんな筈はございません、若し追剝なら、この金を殘しとくわけがございませんからの。』とサンチョーは答へた。

『それもさうぢや。さうなると私にはこれは何ういふ譯か推量も說明もつかぬわい。ぢやがまてよ、この手帳の中に、私らが知りたいと思ふことの手掛りがあるとかそれが見つかるといふやうなことが書いてないか見てみよう。』とドン・キホーテは言つた。

彼はその手帳を開いた。すると眞先きに見えたのは、そんざいに、しかしなか〳〵立派な手で書いた一篇の小曲であつた。彼はそれをサンチョーに聞えるやうに朗讀したが、それは次のやうに書いてあつた。

ソンネット

愛はそも智慧を缺けりや
愛はそも冷酷の絕頂に達するや
或はわが科の應報に過ぎし
苦しみを受くるが我の運命か。
さはれ若し愛は神ならば、やがてまた
愛は全智にして、やがてまた
神は冷酷を好まざること明かなり。
さらば苦しめつゝ魅するこの呵責を下すは誰ぞや？
クローイ　ギリシヤ田園歌中の戀する少女　よ汝なりと言はゞ僞りとなりなん。
さほどの善とさほどの惡といかでかともにあるべき、
されど我はその罪を天には歸し得ず。
死ぬるがわが運命とわれは知るのみ。
何處より來し病患と知らぬものには
たゞ奇蹟のみぞ癒を與ふなる。

『その歌からぢや何にも分りませんな。尤もそいつの中にあつた絲口でその元の絲巻きがたぐり寄せられりや別でご

ざりますな。』とサンチョは言つた。

『どういふ絲口があつたのぢや？』とドン・キホーテは言つた。

『私は貴方樣が歌の中で絲口とお讀みなさつたと思ひましたがな。』とサンチョは言つた。

『私はたゞクローイと言うたのぢや。そしてそれは疑ひもなく、この詩の作者が胸の思ひを遂へて居る婦人の名前ぢや。また全くこの人は可なりの詩人に違ひない、私に分るだけのところではさうぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『それぢや、貴方樣も詩を作ることを御存じでござりますの？』とサンチョは言つた。

『お前の思ふよりはよう心得て居る。』とドン・キホーテは答へた。『いづれお前はドゥルシネア・デル・トボソォ姫に始終のことを詩で書いた私の手紙を持つて行く時に分るであらうぞよ。サンチョよ、お前に言うて置くが、昔の武者修行者たちは、皆でなくとも大方は、なか〳〵優れた戀歌の詩人でもあれば音樂者でもあつたのぢや。この二藝は、いやもつと正當に言へばこの二つの天賦の才は、戀する武士獨特の性質であるからぢや。昔の騎士たちの詩が小器用といふよりも氣込みが勝つて居つたのは本當ぢや。』

『旦那樣もつと讀んで下され、さうすりや何か手掛りになるものがあらうも知れません。』とサンチョは言つた。

ドン・キホーテはページをめくつて言つた、『こりや散文で手紙のやうぢや。』

『用向きの手紙ですかの？　旦那。』とサンチョは訊ねた。

『初めを見ると戀文のやうぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『そんなら高い聲で讀んで下されませ、私はさういふ懸想事は大好きでござりますからの。』とサンチョは言つた。

『よし〳〵』ドン・キホーテは言つて、そしてサンチョが頼んだやうに高い聲で讀んだ。その手紙は次の如くであつた——

「御身が僞りの約束と余が確實なる不運とは余を騙りてこゝに來らしめ候。余の訃音は余の怨言に先だちてこゝより御耳に達すべし。不實なる人よ、御身は余よりも富みて余よりも劣れる人の爲めに余を拒否せられたり。されど若し德を以て富と見るべくんば余は敢て他人の幸福を羨まずまた自己の不幸を泣くまじく候。御身の美しさが高め上げしものは御身の行爲これを投げ下され候。かれに依りては余は御身を天使と信じ、これに依りては余

は御身の婦人たるを知り申候。余の心を掻き亂せし御身に平和あれ、また願はくば神御身が夫の裏切りを永く御身の眼にふれざらしめ給はんことを。これ一つには御身の爲せしことを御身自ら悔いざらんが爲めにして、また一つには余の欲せざる復讐を余自から受けざらんが爲めに候。」

手紙を讀み終へるとドン・キホーテは言つた、『この手紙を書いたのは見捨てられた戀人ぢやといふ外には、この手紙にはこの詩よりも手蔓が少ないわい。』

それからその手帳の殆んど殘らずのページをめくつて見ると、尙澤山の詩や手紙が書いてあつた。その中には讀めるのもあつたが讀み兼ねるのもあつた。しかしそれは殘らず怨みや歎きや疑ひや、慕ふ心や厭ふ心や、情や無情や、或ひは歡喜或ひは悲哀、さまざまの心が書いてあつた。ドン・キホーテがこの手帳を檢べて居る間に、サンチョーは例の鞄を檢べた。彼は自分の注意や骨折の不足の爲めに一物でも遺してはならぬと、鞄や鞍褥の隅々を殘る隈なく探り廻し、覗き込み、曝け出して、縫目といふ縫目は悉く解き、羊の毛の房は悉くきれ〴〵に毟つた。彼は殆んど百個に近い金貨を見付けたので、それ程鋭敏に貪慾を刺戟されたのであつた。そしてそれ以上の獲物は、もう見付からないのであつたが、彼は、自分がこの結構な主人に奉公して以來忍んで來たところの、毛布上げや、香油の嘔吐や、棍棒のお見舞や、馬方の拳骨や、鞍嚢の紛失や、上着の追剝がれや、それからあらゆる飢や渇きや勞れやは、安いものだと思つた。彼がこの所有者不明の黄金の賜によつて受け取つた報酬は、是等のすべてを償うて餘りありと思はれたからである。

憂ひ顔の騎士は、その詩や手紙やその金貨や、そのシャツの綺麗なところなどから推して、これは必ず身分ある戀人が思ふ婦人の邪慳さ情無さの爲めに棄てばちになつたものに違ひないと思ひつゝ、尙もこの旅行鞄の持主は一體何人であらうか見出したいと頻りに氣を揉んだ。しかしながらこの人里遠き嶮しい場所では尋ぬべき人影さへも見えなかつたので、彼れは已むなくロシナンテの選むがまゝの道――この馬の歩けるところが卽ちその道であつた――を取つて、かういふ寂しい場所では何か珍らしい冒險に出會へるに違ひないと堅く信じつゝ進んで行つた。さてかういふ考へに耽りつゝ道を辿つて行くと、彼の前面に峙つてゐる山の頂に、一人の男が岩から岩へ、叢から叢へと驚くべき敏

捷さで跳んで行くのを見とめた、彼が見定め得た限りでは、その男は着物は着てゐないで、濃い黒い鬚髯を生やし、長い髪は縺れ、脛も足も裸かで、その兩股は、朽葉色の天鵞絨らしく見えるがところ〴〵肌が透いて見える位に破れてをる牛ズボンで蔽はれてゐた。その男は帽子も被らずにゐた。そして前述の如き敏捷さで通り過ぎたに拘はらず、憂ひ顔の騎士はそんな小さい點を殘らず觀察し注意したのである。また彼はその男の後をつけようとして見たが出來なかつた。何故ならばロシナンテの鈍さではそんな峻しいところを渡つて行く譯には行かなかつたし、その上この馬は生來遲足で不活潑であつたからである。ドン・キホーテはその男を例の鞍褥や鞄の持主であると立ところに定めて了つた。そして彼は、その男を見付け出す迄にはこの連山の中を一年の間彷徨はねばならぬ事にならうとも、是非とも捜しに行かうと決心した。そこで彼はサンチョーに命じて此山の一方の近路を行かせ、そして自分は別の路から進むことにした。恐らく此方法によつて彼等は極めて速く眼界を過ぎ去つたあの男を捜し當てるかも知れなかつたのである。

『私にはそりや出來ません。』とサンチョーは言つた、『私ア貴方樣に離れたら直ぐに恐うなつてしまうて、ありつ丈けの臆病風や心配が押しよせて來ますからの。それぢやから、どうぞこれから先きは、私ア貴方樣からこれツぱちでも離れるもんぢやないと思うて下さりませ。』

『そんならさうしてやらう。』と憂ひ顔の騎士は言つた、『私もお前が心から私の勇氣に賴るのを、まことに喜ばしう思ふぞよ。私の勇氣は、たとへお前の身體の中の魂がお前を見捨てようとも、お前を見捨てることは決してあるまいぞよ。さア〳〵私の後からそろ〳〵と出來るだけ從いてくるがよい。そしてお前の眼を提灯のやうにして居れ。私らはこの嶺をぐるりと廻つて見よう。大方私らは今見えたあの男に出逢ふぢやらう。あれこそきつと私らが見付けた品の持主に違ひない。』

それに對してサンチョーは答へた、『あの人を捜さん方がようござりましよ。若し私らがあの人を見付け出して、ひよいとあの人がこの金の持主でゞもあつたら、私はそれを返さにやなりませんからの。それぢやからそんな無駄な骨折りはせずに、そんなに世話も燒かず餘計なおせつかいもせずに、本當の持主の分るまでは私がしまうておいた方がよろしうござりますわい。そして大抵そりや私がこのお金を使うてしまうた時分でござりませう。その時には王樣も

私にア咎はないと思はつしやるぢやろ。』

『それはお前間違うとるぞ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『現在その持主ではあるまいかと思ふ人が居つて、而も私らの眼の前に居らんばかりぢやとして見れば、私らはあの男を捜して返さねばならぬのぢや。そして若し私らがあの男を捜さぬとなると、一旦あの男が持主ではあるまいかと思ひ込んだのぢやから、實際あの男がさうであつたと同様に私らは罪深うなる譯ぢや。そこでのう、サンチョー、あの男を見付け出せば私の心は落ち着かうから、捜す爲めにお前は何も心を騒がさずともよいぞよ。』

さう言ひつゝドン・キホーテはロシナンテに拍車を當てた。そこでサンチョーは、ギネシロ・デ・パサモンテのお蔭で、徒歩で荷を負うて後につゞいた。そしてその峰を半分位廻つた時、二人はとある峡間の中に、鞍や面勒をつけて半ば犬に啖はれ鳥に啄かれた一匹の騾馬の死骸の横たはつてゐるのを見出した。これ等はすべて、先きに逃げ去つた男こそはこの騾馬やあの鞍褥の持主であるといふ疑ひを尚更に深めたのである。

彼等が立ち止まつてその死骸を見てゐると、羊飼ひが羊群を番する時に吹くやうな口笛が聞えた。そして突然彼等の左手から多數の山羊が現はれた。その後には年取つた一人の山羊飼ひが山の頂に居てその群を番してゐた。ドン・キホーテは大聲でその山羊飼ひに呼びかけて、自分等の居るところへ降りてくれと頼んだ。すると彼は呼びかへして、山羊の足か、さもなくばうろつき廻る狼やその他の猛獣の足の外は、滅多に途絶えて踏むことのないこの場所へ、どういふ譯でやつて來たのかと訊ねた。サンチョーはそれに答へて、降りて來い、さうすれば殘らず話さうと言つた。

山羊飼ひは降りて來て、ドン・キホーテの立つてゐる場所へ近づきつゝ言つた、『きつと貴方等はその窪みの中で死んどる駄騾馬を見てござるのでしよ。そりや本當にもう半年もそこに轉がつて居りますよ。なア貴方等はあの騾馬の持主にこの邊で出逢ひましたかの？』

『私らは誰にも逢ひません。』と、ドン・キホーテは答へた、『また此處から遠くもないところで見つけた鞍褥や小鞄の外には何品にも出逢ひません。』

『私もやつぱりあれを見付けましたがな。』と山羊飼ひは言つた、『しかし、何ぞ祟りでもありやせんか、盗人ぢやと言はれやせんかと思うて、取り上げもせにや近寄りもせんのですよ。惡魔は詭計のある奴ぢやし世の中の事は人の脚下から

ら鳥の立つ様に起つて、何故やら何うしてやら知らん裡に蹟かせたり倒したりしますからの。』と山羊飼ひは言つた。『そりや丁度私の言ふ通りぢや。私もやつぱりあれを見付けたがの、私はあれから石の届くところまでは行かうと思はなんだのぢや。それでそのまゝにしといたから、元のまゝに轉がつとるよ。私は鈴のついた犬は要らんからの。』（向倒一ついてる物は欲しくはないといふ意）とサンチョーは言つた。『お前さん。一體この品の持主は誰ぢやか御承知かの。』とドン・キホーテは言つた。『私の知つとりますのはこれだけですよ。』と山羊飼ひは言つた。『かれこれ半年程前に、こゝから大方三リーグ（三里餘）もある向うの羊飼ひの小屋へ、上品な生れのよささうな様子の若い人が、そこに死んどるその騾馬に乘つて、貴方らが見付けたけれども鞍つては見なんだと言はつしやるその鞍褥や鞄を持つて來たですよ。その人は私らにこの山中ぢやどこらが一番嶮しうて奥まつとるかと訊きましたから、私らが今立つとる此處らぢやと申しました。全くさうなのですよ。貴方らがこれから半リーグも奥へ入つて行きなさつたら、大抵道を迷うてしまひなさらうからの。それぢやから、此處へ來るには路も小徑もついてをらんのに、貴方らはどうして來られたか知らんと思ますのぢや。さてその若い人は私らの返事をきくと向を變へて私らの教へた方へ行きましたのぢや。私らは皆その男振りのえゝのに惚々してしまふやら、何であんな事を訊くのか、あんなに急いで山の奥へ入つて行くのか知らんと不審がりもしましたのぢや。それからその姿は見えませなんだが五六日經つてから私らの仲間の一人の羊飼ひが小徑で出逢ひましたがな、一言ものは言はんで、つか〳〵側へやつて來て五つ六つ殴り付けたり蹴つたりして、その揚句私らの食ひ物を負はせとつた騾馬の方へ行つて、ありたけのパンや乾酪を引つ奪りましたのぢや。それがすむとまた山の奥へ素晴らしい速さで返つて行つて了ひました。私ら仲間の五六人の山羊飼ひはこの事を聞くと、その男を探索に行つて、この山の一番奥の方まで探し廻つたが、二日かゝつてやう〳〵と其男が大きな繁つた栓の樹の空洞の中に籠つてるのを見付けましたのぢや。その男は大層柔順しい様子で私らの方へ出て來ましたが、もうあの着物は破けて顏は窶れて日に焼けて、私らはその男とはよう見分けがつかん位でござりましたよ。それでも、破けては居つてもその着物に見覺えがあつたので、それでやうやく私らの捜しとる男に違ひないと分

りました。その男は私らに丁寧に挨拶をしてから、口數の少い上品な言葉で、私はこんな姿でうろついてをるけれど、これは自分の犯した澤山の罪業の爲めに私の身に背負はされた苦行を果すにどうしても脫れられん事ぢやから、不思議と思うては呉れるな、とさう申しましたよ。私らは一體お前さんは何ういふ人ぢやと訊きましたが、何うしても自分からはそれを明かしませんのぢや。私らはまた、お前さんも食ふ物なしにや居られまいから、欲しい時にや喜んで早速屆けるから貴方の居所を私らに敎へといて貰ひたい、またさういふ事が貴方の氣に入らんなら、貴方の方からやつて來て食ひ物を呉れと言ふやうにして、羊飼ひから無理に引つ奪ることはせんやうにして貰ひたいと賴みました。それを聞いてその男は私らに禮を言うて、前に亂暴をしたことを詫びて、これからは誰にも亂暴を働かずに、情に縋つて貰ふことにすると約束しました。定まつた居所のことに就いちやア、日が暮れるところで行き當りばつたりに泊るんぢやと言ひましたよ。そしてさうかと思ふと、わつと悲しげに泣き出したので、それを聞いた私らも石塊ぢやなし初めて見た時の姿と今の姿とを比べて、つい皆貰ひ泣きしてしまひましたわい。先き程申した通り、あの人は美しい優しい若者で、そして上品な垢脫けのした言葉を聞いてもその生れのえゝ事や育ちの立派なことは分りましたからの。聞いとる私らは皆田舍者ぢやが、かういふ無作法な私らにさへ、あの人のしとやかな擧動で十分それと分りましたよ。ところが、その話の途中でその人はフツと止めて默り込んで、暫らくの間、地の上を見据ゑて居りましたがの、私らはそれからどうなるかと心配してぢつと待つとりました。本當にまア可哀さうに、今迄べたを脫み詰めて、瞼も動かさずに眼を瞠つてをるかと思ふと、今度は眼を瞑つて脣を喰ひ縛つて眉を上げる、さういふ樣子からてつきりどうも、ふいと何か氣が違うたものぢやらうと思はれました。そして間もなく私らの思うたことが本當ぢやもふことが分りました。その人は今まで寢そべつて居つた地べたからやにはに起き上つて、一番手近かに立つとつた男にそりや恐ろしい火のやうな勢ひで摑みかゝりました。若しあの時私らがあの男を引き離さなんだことなら　相手の男を叩き殺すか噛み殺すかしたに違ひないですよ。そして摑み掛りながら喚きましたよ、「こら、不實なフェルナンド、さあ、貴樣が己に仕向けた非道の罰を受けるのぢやぞ。この手で貴樣の心臟を摑み出してやる、あらゆる罪業

の宿る住み家を、取り分け嘘と騙りの住み家を。』そしてその上いろ〳〵の事を言ひましたが結局皆そのフェルナンドーを罵つて、裏切りぢや不實ぢやと責めることばかりでござりました。イらは骨を折つてやつとあの男の獅噛みついとる手をこぢ離しました。するともう一言も言はずに私らの側から駈け出して、そこらの灌木や荊棘の中へ飛び込んだので、私らア追つかけることが出來ませなんだよ、これから推量すると、あの男の氣違ひは時々出ますのぢや。そしてフェルナンドーと言ふ奴に何かひどい悪い事を仕掛けられたのでござりませう。そりやこんなになつてしまうた樣子から見ても分りますわい。此事は後に、あの男が私らと出會した機會々々にだん〳〵確かになりました。それは度々ありましたが、時によると羊飼ひ等の持つとる食ひ物を奪れろと頼みますし、時によると無理に引つ奪つて行きますのぢや。あの男が氣違ひが起つとる時には、たとへ羊飼ひ等が喜んで食物を差し出しても、それを受けずに殴り付けておいて引つ奪つて行きますからの、しかし正氣に戻つとる時には丁寧慇懃にお慈悲に何卒と言うて頼みます。そして何度も禮を言うて頬りに涙を流して受け取ります。そして實を言ひますとな、貴方がたも、』とその山羊飼ひは續けた『昨日のことぢやが、私と四人の若い衆とで、その中の二人は私の下男で他の二人は私の仲間ぢやが、あの男を見つけるまで捜しに行くことに決めたのですよ。そして見付け出したら、否でも應でもあの男を此處から八リーグあるアルモドーヴルの町へ伴れて行つて、あそこで（若しあの人の病氣に療治が叶ふものなら）一つ療治に骨折るか、それともあの人の正氣の時に何ういふ人か訊いて見て、もし親類でもあることなら、不仕合せを知らせてやらうと思ひますのぢや。貴方がたのお訊ねに私が返答の出來るのはこれだけでござります。そして貴方がたの見付けなさつた品物の持主はやつぱり貴方がたの見なさつたあの裸かで素敏く走つて行つた男に違ひござりませんわい。』

蓋しドン・キホーテは既に、山腹を跳び歩いてゐた男を見たと言ふことを話したのであつた。彼は今この山羊飼ひから聞き取つたことに依つて驚きに充たされ、その不幸な狂人の何者であるかを知らうとする熱心は今までよりも更に加はつた。彼はこの人を見付けるまでは、この山中殘らず捜索して、一つの隅も洞穴も殘らず檢べようと、先刻の如く、また深く決心した。しかし偶然にも、彼の豫期し若しくは望んでゐたよりも事の樣子は都合好くなつた。丁度

この時、彼等の立つてゐた邊りに開いてゐた山の絶間から、見付けようと思つてゐたその若者が姿を現はした。彼は獨り言を言ひながら歩いて來たが、それはすぐ近くでも何の事か分らなかつたであらうから、まして離れてゐては分らなかつた。彼の着物は先きに述べた通りであつた。しかしずつと近寄つて來ると、ドン・キホーテは彼の着て居るぼろ〳〵の半ズボンには、龍涎香を燻きこんであるのに感づいたので、（この當時の上流社會では着物に龍涎香を燻き込む習慣があつた）そこから考へてかういふ着物を着て居る者は餘り卑しい身分の者であらう筈はないと思ひ込んだ。その若者は彼等に近づきつゝ、かすれた嗄がれ聲で、しかし非常に慇懃に挨拶した。ドン・キホーテもそれに劣らず丁寧に挨拶を返し、そしてロシナンテから降りて、しとやかに優しく、彼を抱擁しようと近づいた。そして恰かも長い間の知り合ひでもあるらしく、やゝ暫しひしと兩腕に抱き締めた。その若者は（ドン・キホーテが「憂ひ顏の騎士」であるから、この男を「悲しい顏の遍歴の騎士」と呼んでもよからうが）、暫らく抱擁を受けた後、ドン・キホーテを少し押し退けて、兩手はドン・キホーテの肩の上に置いたまゝ、自分の知つてゐる人であるかないかを知らうとするらしく相手を見詰めて立つてゐた。恐らくドン・キホーテの顏や、姿や、鎧を見た彼の驚きは、彼の樣子を見たドン・キホーテの驚きに劣りはしなかつたらう。要するに抱擁の後で、先づ第一に口を切つたのは「遍歴の騎士」であつた。彼の言つたことは次に語られるであらう。

第二十四章　には、モレナ山中の冒險が續く。

物語によれば、ドン・キホーテは最大の注意を以てこの不運なる山中の騎士の話に耳傾けたと記してある。その騎士はかう話し出した、『貴方、どなた樣かは存じませぬが、何方にも致せ、私へお示し下された御親切御懇篤の程は誠に有難う存じまする。若し世が世でござりますなら、貴方が心からのお歡待でお示し下された御好意に、それ以上を以てお報い申すのでございますがな。しかし私の今の境遇では、人樣から蒙る御親切に對しても、只心の中の御返禮より出來ませぬのでござります。』

『私はたゞ、』とドン・キホーテは答へた、『貴方のお役に立ちたいといふ心でございます。貴方を搜し出して、かういふ變つたお暮しをなさるところを見ると何かかう悲しい事の爲めに惱んでござるやうですから、何かその悲しみを癒

やす方法はあるまいか、それを貴方から承らんうちは、この山を立ち去るまいと決心して居つた程でござりますのぢや。またもし捜索が必要であつたら、それこそ根限り貴方をお捜し申す積りで居りましたわい。またもし貴方のお不仕合せがどんな慰めをも押し戻してしまふやうなものであつたら、拙者は力の及ぶ限り貴方と共にその悲しみを歎き悲しむつもりで居りました。不仕合せに同情する人のあるのは、不仕合せの中にも多少の慰めになりますからぢや。この拙者の心盡しがもし多少ともお認め下さるに足るならば、貴方の御立派な御人品をお見かけしてお願ひ申す故、また貴方がこの世で最も愛せらるゝ、又愛せられたものにかけて御懇望いたす故、どうか貴方はどういふお方であるか、また御容貌の示して居るやうな御身分にはかけ離れたかやうな有様でこの淋しい山中に住はれ、野獣のやうな生死を遂げるやうになられたのはどういふ譯か、それを聞かせて下されい。もしお許しあらば、身不肖にして不束ながらも、自ら受けたる騎士道の大義に誓つて、また武者修行たる自らの職分に誓つて、拙者の本分に應ふかぎりの熱誠を傾けて貴方に盡し、貴方の悲しみが慰められるものなら慰めませうし、さうでなくば先きにも申上げた通り貴方と共に歎きを分ちませう。』

「山林の騎士」は、「憂ひ顔の騎士」がかういふ調子で話すのを聞くと、たゞまじ〳〵と顔を見戍るばかりであつた。そしてあらためて顔を見戍り、頭の先から爪先まで見上げつ見下ろしつした。そして十分に檢べ終つてから言ひ出した、『もし何か食べる物をお持ちなら、後生ですから下さい。さうすれば私は食べてから、お盡し下された御厚意に報いる爲めに、貴方のお訊ねになつたことは殘らず申し上げませう。』

サンチョーは雜嚢から、山羊飼ひは辨當袋から、銘々その「襤褸の騎士」の飢ゑを癒やす物を持ち出して與へた。彼はその與へられた物を、宛ら半氣違ひのやうになつて喰つた。頬張る隙もない程に慌てゝ嚙み碎きもせず鵜呑みにした。そして彼が喰つてをる間は、彼自身も彼を見てゐる人人も一語をも發しなかつた。喰ひ終るや否や、彼はその人人に從いてくるやうに手眞似をしたので、彼等は從いて行つた。彼は一つの岩の角を廻つて、少し離れたところにある草の茂つた場所へ彼等を導いた。そこに着くと、彼は草の上に寢そべつた、他の者共もさうした。皆沈默をつゞけてゐたが、「襤褸の騎士」は居ずまゐを定めて話した、『貴方

かた、もし私の非常に澤山の不仕合せを少い言葉で打ち明けさせようとお思ひなさるならば、途中で何かお尋ねになつたり口を挿んだりして、私の悲しい話の絲を切らぬといふ約束をして下さい。もし貴方がたがさうなさると、その刹那に私の話さうとする話はおしまひになりますからな。』

「襤褸の騎士」のこの言葉は、ドン・キホーテに自分の家來サンチョーの語つた物語を思ひ起させた。あの時は河を渡つた山羊の數を算へ損なつた、そしてその話は結びがつかないで終つたのであつた。さて本題に返つて、その「襤褸の騎士」は話を進めた、『私がこんな御注意を致しますのは、つまり私の不幸の話を手短かにしたいといふ心からです。何故と申すに、その不幸を思ひ起すのは只もう新らしい不幸を加へるばかりですからな。そして貴方がたが質問を少なくなされゝばそれだけ私の話が手早くすむ譯です。尤も重要なことは一つも省かずに十分貴方がたの好奇心を滿足させるやうにお話しますがな。』

ドン・キホーテも他の人々も話の途中で口を挿まぬと約束した。これが定つたので彼は次のやうな話を初めた。

『私の名はカルデニオ、生れた處はこのアンダルシアの最も立派な市の一つで、家柄は貴族、兩親は富裕です。私の不仕合せが餘り甚しい爲めに、富の力でそれを輕くする事が出來ず、兩親は泣き葬らし家族は悲歎にくれて居ることと思はれます。蓋し富の賜物も天の與へる禍を救ふことは出來ません。さてその同じ土地の中に一つの極樂がありました。愛は其處に私の望み得る限りのあらゆる榮光を置いて呉れました。卽ち家柄も富も私と相並んだ少女ルシンダの美しさはそれ程でありました。けれど私よりはもつと幸福で、そして私の貴い熱情に報ゆるには心の誠が足りませんでした。私は幼いうら若い頃からこのルシンダを愛し、崇拜し、尊敬しました。そしてあの女も幼な心の無邪氣と誠實とで私を愛しました。私達の兩親は二人の心を感づいて居りました。しかしそれと知つても歎きはしませなんだ、それはその二人の思ひが熟すれば遂には緣組にならねばならぬことを明かに知つて居りましたからです。その緣組は兩家の家柄や富が釣り合ふところから殆んど豫め成立したやうに思はれて居りました。私達は成長しました。成長すると共に二人の間の愛もいよ〳〵成長して、とう〳〵ルシンダの父親は體面上私がその家へ行くことを拒まねばならぬといふ氣になりました。これは恐らく詩人達に歌はれてをるあのティスベの親たちを眞似たものでせう。しかしこの拒絶は

愛に愛を加へ焔に焔を添へるに過ぎませんでした。それは私らの舌を無理に黙らせても私らの筆を黙らせることは出來なんだからです。筆は舌よりも却つて愛する者に自分の心の祕密をよく知らせることが出來ます。愛の相手の居る前ではどんな確かりした決心も搖がされ、どんな大膽な舌も黙らせられるといふのは、屢々あることです、あゝ本當に！　私はあの婦人に手紙を何通書いたでせう、そして優しい淑やかな返事を何通受取つたことでせう。私は自分の心を打ち明け自分の感情を知らせる小唄や戀歌を幾つ作つたことでせう。心の切ない憧れを述べ、いろ〳〵の想出に耽り、想ひのたけをかき口說いて。私は我慢がしきれなくなり、あの婦人を見たい思ひに心はやつれ衰へて、とうとう私の望んでをる値打ちのある獲物を手に入れる最上の方法と思はれることを、卽ちあの婦人を正妻に迎へたいと、その父親に申込むことを、實際にやつてみようと決心しました。そしてそれをやつてのけました。これに對して父親の答へはかうでありました。かういふ申込みを父たる自分にして下された事も、また貴方から私の寶たる娘を貰ひたいと思はれることも有難い。けれど、貴方のお父上も御在世のことであれば、この申込みはお父上からなさるのが正當である。何故ならばお父上が滿足して喜んで贊成なさつたのでなくては、ルシンダは內證でお取りになるわけにも、また差上げるわけにも行きませんから、と言ふのでありました。私は先方のいふことが道理でもあり、また父に言へば、直ぐ承知するであらうとも思ひましたから、その好意を感謝しました。そして、さういふ考へで時を移さず自分の願ひを父に知らせに行きました。父の居る室に入ると、父は一通の開いた手紙を手にして居りましたが、その手紙を私に與へて、まだ私が一と言も話さぬうちに、父は言ひました、「カルデニオよ、この手紙を御覽、リカルド一公爵がお前を召し抱へたいといふお申込みぢや。」リカルド一公爵は、大抵もう御承知でせうが、スペインの名門で、その邸宅はこのアンダルシアの一番好い場所にございます。さてその手紙を受取つて讀みますと、それは申々慇懃な言葉で書いてありますので、私自身ですら、それに書いてある賴みに從はぬと申せば、父が間違つて居るわけぢやと思うた位です。その賴みといふのは、私にその公爵の長子の、召使ではなく、學友になつて欲しいから、また公爵の眼鏡によつて、私を適當な役につけることも引受けようから、すぐさま私をよこして呉れいといふのでありまし

た。その手紙を讀んで私は口も利けませなんだ、それに父が「カルデニオよ、お前は公爵様のお望みに應じて二日の後には出發するがよい、そしてお前にこの道を開いて下された神樣へお禮を申し上げるがよい、これでお前は私が思うて居つた通り立派な地位に上れるのぢや。」といふのを聞いては尚更のことでした。父はその上いろ〳〵父親らしい訓戒を加へました。私の出發の時は來ました。私は或る夜、ルシンダに會うて一伍一什のことを話し、またその父親にも打ち明けて、多少の猶豫を許して貰ひたい、そして結婚のことは私に對するリカルドー公爵の御用向の樣子の分るまで延期して呉れるようにと頼みました。父親はそれを約束しました。そしてルシンダも算へ切れない程の誓言や悶絶をしてそれを誓ひました。遂に私は公爵の許へ出ました。そして非常に親切に公爵から迎へられ待遇せられたものですから、直ぐと羨望を招くやうになりまして、多くの老臣等は私を嫉み、公爵の私に對する寵愛を彼等の損害と思ふやうになりました。然し私が行つて一番喜んだのは公爵の二番目の令息フェルナンドーといふ人です。この人は華美た若樣で、氣高い寛大な色好みの性質で、私が行くと間もなく二人は誰知らぬ者もないやうに非常な仲好しの友達になりました。尤も長男の方も私を愛して親切にしては下さりましたが、ドン・フェルナンドー程には親切にもてなしては下さりませなんだ。やがてする中に、親友の間ではどんな祕密も殘さず打明けるものですから、そして私とドン・フェルナンドーとの親しさは親友の間柄になつて居りましたから、あの人は自分の考へを殘らず、私に打明けました。取り分けあの人の心を少し惱ましてゐた戀の一件を。丁度あの人は一人の百姓の娘を深く戀してゐました、その娘は公爵の召使ひで、富裕な家の娘で、愼しみ深くて、身持ちがよくて、その娘を知つて居る人は、誰もあの娘ほどの點が一番優れてをるとか、天分が厚いとか定められぬ程揃うて立派でありました。この美しい百姓娘の愛くるしさにドン・フェルナンドーは心の駒を狂はせて、とう〳〵この代物を手に入れて、その堅い操を從へようために、お前の夫にならうと口約束をしようと決心しました。何故ならば他の方法ではとても從はせることは出來なんだからです。私はあの人と親友の關係でありましたので、あの人にそんなことをさせぬやうに引き留めて止めさせようと言葉を盡し、考へられる限りの有力な例證をあげて骨を折りました。しかし何の效果もないのを見て、父公爵にこの一件を

知らさうと決心しました。けれどもドン・フェルナンドーは才はじけた抜目のない人なので、私が忠良な家臣の義務として大殿様の名譽に關るやうなこんな一大事をそつと隱しては置かぬに違ひないと見て、逸早く私のその考へを先見し豫想しました。そこであの人は私を欺き瞞す爲めにかう言ひました、自分はこれ程まで自分の心を囚へたあの女のことを忘れるには四五ヶ月何處へか身を遠ざけるより好い道はないと思ふ、そしてそれにはお前と一緒にお前の親父さんの家に行くのが一番よい、その口實としては、お前の市は世界一の馬の産地だから馬を買ひに行くのだと公爵へは自分から申上げようと。あの人がさういふのを聞いた時に、それは餘りよい決心ではないと思うたにしても、私は自分の愛着に促され、懷しいルシンダに會ひに行かれる、都合の好い機會を與へるものだと考へたので、それは實に一番結構な思ひ付きですと歡迎すべきであつたのです。そこでかういふ考へや願ひから私はあの人の思ひ付きを褒め、その計畫を贊して、全くそこを離るればどんなに深く根を張つた熱情でも除かれるのだから出來るだけ早くこの計畫を實行なさいと勸めました。しかし後になつて思ひ合せると、あの人がこの事を言出した時にはもうその百姓娘を夫といふ名目で娛しんだ後であつたので、若しこの不品行が公爵に知れゝばどんな事になるか心配なところから、それが知れても自分は安全であるやうな機會を待ち構へて居つたのです。さてそれからといふものは一體若い男に取つては戀は大抵の場合色慾を出でません、色慾はとゞの詰りの目的が快樂です、そこで快樂を得ればおしまひになります、そして戀と見えたものは消えてしまひます。何故といふに色慾は自然に定まつた範圍を超えることは出來ませんからです、けれど眞の戀にはそんな制限はありません。——と申しますのは、ドン・フェルナンドーはこの百姓娘を弄んでからはその煩惱は靜まり、その熱心は冷めたといふわけです。そして初めは自分の戀を癒やす爲めに旅をしたいやうな顏をしたゞけであつたのですが、今は女との約束を守るのを避ける爲めに眞實旅に出たくなつたのです、『公爵はあの人に許可を與へました。そして私は供を命ぜられました。私達は私の市に着きました。父はあの人に身分に應はしい款待をしました。私は時を移さずルシンダに會ひました。すると私の愛は一度だつて死んだことはなかつたもの丶、また新な生命を吹き返しました。私はドン・フェルナンドーと親友の間柄ですから何一つ隱しては悪いと思

つて、つい残念なことには自分の戀の話をして聞かせました。私はルシンダの美しさや快活さや悧巧さを非常に熱心に褒めそやしましたので、その賞讃にそゝのかされてあの人は、そんなにまで人を牽き付ける力を持つた少女をば見たいと思ふやうになりました。不仕合せにも私はその望みに從つて、或夜のこと、何時も私等二人が睦言を語る窓のところで小蠟燭の光であの婦人を見せました。あの婦人が晴れ着を着てそこに現はれますと、あの人はそれまでに見たありとあらゆる美人の記憶は悉く掻き消されて了ひました。あの人は言葉も出ず、見上げたまゝ、うつとりとして結局惚れ込んでしまひました。この事は私の悲しい物語が進むにつれてお分りになりませう。私には隠してたゞ神様にだけ明かしてゐた、あの人の煩惱をます〳〵燃やすやうなことが起りました。それは或る日のこと、妾の父上へ緣談を申込んで下さいと私に宛てゝ頼んで來てゐた非常にやさしいつゝましやかなしをらしいあの婦人の手紙を、あの人が見付けたのです。その手紙を讀んであの人は、世界のあらゆる婦人の間に分ち與へられてゐる美しさと怜悧と魅力はルシンダ一人に悉く集められてゐると私に話した位でした。そして全く今は白狀しますが、その時私はドン・フェルナンドーがルシンダを褒めるのは尤もなことだとは知つては居りましたものゝ、あの人の口からそれを聞くと不安になりました。私は氣遣ひ出しました。そして自然あの人を疑ふやうになりました。何故ならば、あの人はルシンダの話となればいつでも待ち構へて居るといふ風で、また木に竹を接ぐやうに、時ならぬ時にもこの話を自分の方から持ち出したりしたのです。この事は少からず私に嫉妬を起させました。ルシンダの貞操や眞心の變るのを氣遣うたのではありませんが、しかしやはりあの婦人の心變りを蟲が知らせたのです。ドン・フェルナンドーは私がルシンダにやる手紙も、彼女から來る返事も、私たち二人の才氣や智慧が面白いからといふ口實の下に、何時も讀むやうに工夫しました。やがてするうちに、或る時ルシンダは私に武勇傳を讀むから貸してくれるやうにと頼んで來ました、それはあの婦人の大好きな「ゴールのアマディスの物語」でした。』

ドン・キホーテは、『武勇傳といふのを聞くや否や口を開いた、『若し貴公がそのお話の初めに、そのルシンダ姫が武士道の書物を好まれたといふことを仰しやつたら、もうその外の讃辭はなくとも、その御婦人の優れて怜悧なことは、拙者十分に感銘致したことでありましたらう。何故と申せ

ばお話のやうな偉い優れた婦人ならばさういふ興味深い讀み物に趣味を有たれぬといふことはあらう筈がありませんからぢや。そこで拙者だけには、その婦人の美しさや氣高さや聰明さをこの上くだ〳〵とお述べになるには及びません。それはたゞその御婦人の趣味の何たるかを承つただけで、拙者はその方を世界第一の美しい御婦人と斷定しますからぢや。そして拙者は貴方がそのゴールのアマディスに添へてあの偉いギリシャのドン・ルゲルをもその御婦人に送られたらよかつたと思ひます。そのルシンダ姫が、ダライダやガラヤや、それから羊飼ひダリネルの巧みな格言や、又そのダリネルに依つて非常に輕快に巧みに易々と歌はれ述べられたあの歎賞すべき數々の牧歌などを非常に喜ばれるであらうと思ひますからぢや。併しやがて時が來てこの不足を補はれるでありませう。そしてそれを補ふには貴方が拙者の村まで御一緒にお出で下さりさへすれば宜しいのでござりますがな。さうすれば、私の魂の喜びでまた私の生涯の慰めでござる三百冊以上の物語本を貴方へ差上げる事が出來ますからぢや。――尤も唯今は生憎と悪い怨み深い魔法使ひどもに恨まれたお蔭で、その内の一冊も持ち合はせて居りませんが。――しかし、お話中に言葉を挿まぬといふお約束を破りました段はお許し下されい。これといふのも、拙者は武士道とか武者修行とかいふ言葉を聞きますと、もうとても口を噤んで居る譯に行き兼ねますのぢや、それは丁度太陽の光が熱を出さずには居られず、月の光が濕氣を出さずには居られんやうなものでござります。それ故とうぞお許し下されい、そしてこれからが愈々肝腎のところですから、お話を進めて下されい。』

ドン・キホーテがかう話してゐる間、カルデニオは顏を胸の上に俯向け深い考へに沈んでゐるやうであつた。そしてドン・キホーテが二度までも話を進めるやうに頼んだけれども、彼は顏も上げず一と言も答へなかつた。しかし暫くたつてから、彼は顏をあげて言つた、『私はこの考へを棄てることは出來ません、またこの世の中の何人もこれを動かすことは出來ますまい。また私を考へ直させることも出來ますまい、――そして、あの極悪無道な悪エリサバットがマダシマ女王と通じたんぢやないと言つたり信じたりする奴は馬鹿ですよ。』

『それはさうでありませんぞ、斷じてさうぢやありませんぞ。』とドン・キホーテは、いつもの通りに、非常に憤つて、胸立たしげに彼の方へ向き直つて言つた、『それは甚だし

い誣言ぢや、寧ろ非道ぢや。マダシマ女王はなか〳〵優れた婦人で、あゝいふ氣高い姫君が山師風情と通じたなどとは思ひも寄らぬことぢや。して又之と反對なことを言ひ張る奴は誰であらうと嘘つきの大惡黨ぢや。拙者はさういふ奴には徒歩でなりと馬でなりと、武器を取つてなり取らんでなり、夜ぢやらうと晝ぢやらうと、またどうなりとそいつの一番好きなやうにして、思ひ知らしてくれるのぢや。』

カルデニオは彼をぢつと見据ゑてゐた。そして丁度彼の氣違ひの發作が襲つて來たので、もう自分の身の上話を進める氣はなかつた。またドン・キホーテも、最早やその話に耳傾ける氣はなかつた。それ程までに、マダシマに就いて聞いたことが彼を不快にさせた。妙な話ではあるが、ドン・キホーテは、このマダシマが宛ら眞實にこの世に生存してゐる自分の愛する婦人でもあるかの如く、彼女の味方をしたのである。それ程までに彼の讀んだ荒唐無稽な物語本は彼を惑はしてゐたのである。そして今も言つたやうにもう氣の違つてゐるカルデニオは、嘘吐きとか惡黨とかその外いろ〳〵の言葉で罵られるのを聞くと、それが厭さに、手近にあつた石ころを取るが早いかドン・キホーテの胸に投げ付けた。それが爲めにドン・キホーテは仰向けに倒れた。サンチョー・パンザは主人がかういふ目にあつたのを見て、拳固を振りあげて狂人に打つてかゝつた。しかし「襤褸の騎士」は彼を邀へて拳固で毆りつけ、サンチョーを自分の足下に平伏らせ、その上に馬乘りになつて思ふ存分肋骨を打ちのめした。それを助けに來た山羊飼ひも同じ目に逢はされた。狂人は彼等を打ちのめし敵き散らしてしまふと、その儘打ち棄てゝ悠々と山中の自分の隱れ家へ引き上げて了つた。サンチョーは立ち上つた。理由もなくこんなに毆り付けられたのに腹を立てゝ、その仇返しに山羊飼ひのところへ走つて行つて、あの男は時々氣違ひが起るといふことを何故前以て知らしてくれなんだか、若しそれを知つてさへ居つたら自分等を護るだけの用意をしたものをと言つて詰つた。山羊飼ひは、その事は言つたのであるが、それを聞かなんだのならそれは私の落度ぢやないと答へた。サンチョーはそれに言ひ返した。そして山羊飼ひも言ひ返した。其口論の果ては互に髯の摑み合ひになつた。そしてもしドン・キホーテが仲裁に入らなかつたら、互に粉々に叩きつぶしたかも知れぬ位拳固の交換をしたのである。『私だけに任せといて下さりませ、憂ひ顏の騎士樣』とサンチョーは山羊飼ひと摑み合ひながら言つた、『此奴ア私と同じに土

百姓で騎士の位は持たんから、私ア此奴と腕づくで立派にやり合うて、こいつの無禮の腹癒せをしてやつても構ひませんからの。』

『そりやさうぢや、しかし今度のことはこの男が惡い爲めでないのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

かう言つてドン・キホーテは二人をなだめた。そしてまた山羊飼ひに向つて、カルデニオの話の終りを聞きたくて堪らないから、あの男を見付けることは出來ぬものかと訊ねた。山羊飼ひは前にも話した通り、あの男の巢窟はどこにあるものか確かに知るすべはないが、しかしこの近所を非常に長くうろついてゐたら、正氣か狂氣かどちらかの彼に行き當らぬ筈はないと言つた。

第二十五章　はモレナ連山に於て、剛壯なるラ・マンチャの騎士の上に起りし奇異なる事ども、及び彼がベルテネブロスの苦行に倣ひしことを取扱ふ。

ドン・キホーテは山羊飼ひに別れを告げ、再びロシナンテに打跨がり、サンチョーに續けと命じた。サンチョーは驢馬を有たぬのでしぶ〳〵しながらそれに從つた。二人はこの山の一番嶮しいところへ分け入りつゝそろ〳〵と進んだ。その間サンチョーは主人と話をしたくて仕方がなかつたけれども、自分の上に置かれてをる口どめの禁令を犯すことを恐れて、主人の方から話しかけてくれゝばよいと思ひつゞけてゐた。しかしさういつまでも默つては居られなかつたので、自分の方から話しかけた、『ドン・キホーテ樣、私アもう家へ歸つて、何はともあれ話したり喋つたり出來る嬶や子供の處へ行きたうございますから、どうぞお情にお暇を下さりませ。かういふ淋しいところを夜も晝も連れ歩かれて、私が話したいと思ふ時にも默つとらんならんといふのは私を生き埋めにするやうなものでございますからの。それもエソップの時代のやうに獸が口を利くやうなら、頭に浮ぶことを何でもロシナンテと話すことが出來てこの苦しさを辛抱しられますから、あまり辛いこともございますまいがの。ぢやが、一生涯冒險を捜しまはつて、足蹴と毛布上げと煉瓦のかけらと拳固殿りの外にや何もなうて、お負けにさういふ災難に遇うても、まるで啞か何かのやうに、心の中に浮んで來ることをよう言はんで口を噤んで居るちふことは、いかにも辛い事で、我慢の出來るも

んぢやござりませんぞよ。』

『サンチョー、お前の言ふことはよう分るぞよ。お前は私が命じた口どめの禁令を解いて貰ひたうて堪らんのぢやらう。それでは解かれたものと思うて、お前の言ひたい事を言ふがよい。但しその放免の期限はこの山中を彷徨ふ間より長引かぬといふ條件つきぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『宜しうござります。』とサンチョーは言つた、『この先のことはどうなるか知りませんが、とにかく話させて下さりませ。さて早速お許しに甘えてお訊ねしますがの、貴方様はどういふ譯であんなにあのマジマサ女王とか何とか言はつしやるお方の味方をなされましたのかい。またあの方丈様が（サンチョーの言葉の取りちがへから「エリサバット」を「アボット」（僧院長）と稱したのである。「マジマサ」は、前章にあつた「マダシマ」の誤り）その女王のお友達ぢやつたらうがなかつたらうが、それがどうしたといふのでござりますかい？　若し貴方様がそれを打ちやつてお置きなさつたら——何も貴方様かその事柄の判者といふ譯ぢやなし——たしかにあの氣違ひさんは自分の話をずん〳〵進めて行つて、そして私らもあの石撃ちや足蹴や半ダースから上の拳固を頂かずにすんだらうと思ひますからの。』

『全く、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『もしお前が私のやうに、あのマダシマ女王がどんなに氣高い立派な婦人であるかを知つてをつたら、あゝいふ怪しからん事を言うた口を切れ〳〵に引き裂かなんだ私の勘忍袋は大したものぢやとお前も言ふであらうぞよ。苟くも女王ともある方が外科醫者づれと懇したなど〳〵言うたり想像したりするといふのは、實に非常な怪しからんことぢやからの。その物語の眞實はかうぢや、あの氣違ひの言うたエリサバット先生といふのは中々の悧巧な確かりした分別のある人で、その女王に執政兼侍醫として仕へたのぢや。しかしあの女王があの人の情人であつたなどと推量するのは、實に重罰に當る妄言ぢや。またカルデニオが知りもせんで出鱈目を言ひをつたといふ證據としては、あの人がそれを言うた時はもう氣が違つてをつたのぢやといふことを考へて見るがよい。』

『私の言ふのもそこでござりますよ。』とサンチョーは言つた、『氣違ひの言ふことを氣にかけることアありやしませんの。もし貴方様の御運が悪うて、あの石ころが胸に當らんで頭へ當りでもしたことなら、私らアとんだことで、その女王様の味方をしたばかりに、えらい目に逢うたことでご

ざりませうわい！　さうなりや、あのカルデニオも氣違ひぢやからというて只では濟みませなんだらう。』

『相手は正氣の人間であらうと氣違ひであらうと、』とドン・キホーテは言つた。『武者修行者はすべて婦人の名譽の爲めに味方をすべきものなのぢや。その婦人は如何なる人であつてもぢやが、その愛すべき性質の爲めに拙者が特に尊敬するマダシマ女王のやうに身分の高く品位ある女主方の爲めには尚更のことぢや。あの婦人は極めて美しいばかりでなく、なか〳〵賢明で、またその身にふりかゝつた鞄しい不仕合せにもなか〳〵辛抱強かつたからぢや。そしてエリサバット先生が常侍して進言したことは、あの婦人の爲めに非常な助けとなり力となつて、その様々な災難をも賢く素直に堪へ忍ばれたのぢや。そこで愚かな口さがない下民どもは、あの婦人はあの人の情人ぢやなどと言ひふらしたり思うたりしたのぢや。しかし私は重ねて言ふが、さう言うたり思うたりする人は皆な嘘吐きぢや、又この後も何百度も嘘を吐く人間ぢや。』

『私はそんな事は言ひもせにや考へもしません。』とサンチョーは言つた、『嘘の吐きたい奴等にや吐かしなされ。そんなに嘘が好きなら面々のパンと一緒に喰ふがよいのぢや。面々が悪い事をしたかせんかは神様に控へが取つてある。私ア自分の葡萄畑から來た者で何にも知らんわい。他人の生活を窺く事は私ア好かんのぢや。買うてまで嘘つく奴ア手前の財布の中に觸つて見よる。お負けに、私ア裸かで生れて裸かで居るので、損も得もありやせん、また他人が損得しようと、それが私に何ぢやい？　大抵の人は吊す釘もない處に鹽豚が吊してあると思うとる。ぢやが廣つ原に門が立てられますかい？　お負けに世間では神様は……。』

『やれ〳〵、お前は何といふ出放題をこぢ附けて居るのぢや！』とドン・キホーテは言つた、『お前が次ぎから次ぎへ手繰り出してをるその諺は、一體私らの今の話に何の關係があるのぢや？　もう一切舌を叩くな、サンチョー、そしてこれから後は、お前の驢馬だけに鞭を當てゝ他人のことにはおせつかいをせんことぢや、そして拙者のしたことも現在しよる事も、これからしようとすることも、殘らず道理の上に立つてをつて、また騎士道の掟に適うてをるといふことを、お前の五官を働かしてよう承知して置くがよい、拙者はその掟に從ふ世界中の武者修行者の誰よりも優れて掟を心得てをるからの。』

『旦那樣、道も小徑もないこの山の中をほうつき廻つて、

あの氣違ひさんを捜さにやならんちふのが、騎士道の結構な掟でござりますかいの。あの人が見付かったら、大方自分の始めた話しの方ぢやなうて、貴方樣の頭と私の肋骨を片付ける氣になつて頭や肋骨を碎いてしまひませうぞよ。』とサンチョーは答へた。

『默れといふに、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『拙者がこの山中へ分け入るのは、あの氣違ひ男を見付け出すといふ望みよりも不朽の高名を全世界にあまねく轟かすやうな偉功をば此の山中で立てたいといふ願ひの爲めぢや。拙者はその偉功で武者修行者を完全無缺な高名赫々たるものにする一切の資格に極印をつけてしまふのぢや。』

『そしてそれは餘程危ないのでござりますか、その今度の冒險は？』とサンチョーは訊ねた。

『いゝや、尤も六と六の代りに二と一の出る骰子が振り出されるかも知れんがの。しかし萬事はお前の丹精によることぢや。』と憂ひ顏の騎士は答へた。

『私の丹精で？』サンチョーは言つた。

『さうぢや、』とドン・キホーテは言つた、『拙者がお前を使ひに遣はさうと思うてをる處から、お前が早う戻つて來れば、それだけ早う私の苦行は終り、またそれだけ早う私の榮譽は始まるのぢや。しかし拙者がどんなことを言ひ出すかと待ちあぐませてこの上お前に氣を揉ませるのも惡いから、サンチョーよ、拙者はしかと申し聞かせるぞよ。あの名高いゴールのアマディスは最も完全な武者修行者の一人であつた——いや一人であつたと言ふのは宜しくない。あの人は絶倫で、第一で、唯一人で、その當時世に在つた殘らずの騎士の中の君王であつた。ドン・ペリアニスとか、アマディスと何等かの點で肩を並べられると自ら言うて居つた者どもは、哀れなものぢや。全くあいつ等は自ら欺いて居つたのぢや！　また畫工がその技によつて名を揚げようと思ふ時は、わが知れる巨匠の原畫を摸寫することに丹精するものぢや。凡て國家の飾りとなるべき最も重要な技藝や職分に於いても、それと同じ掟が行はれる。されば愼重にして忍耐ありと思はれたいものはユリシス（傳說に歌はれたギリシャの勇將）を眞似るであらう。このユリシスの人柄や事業の中にホーマーは熟慮と忍耐との生けるが如き姿を示してをる。ヴーヂルの如きもまたイーネアス（傳說に歌はれたトロイの王子）といふ人物によつて、孝心深い人の子の德や、勇敢にして練達な大將の聰明を示してをる。それはその人々のありのまゝを寫し描いたのでなうて、その人たちの美德の手本を後世に遺さう爲め

に、かうありたいといふところを寫し描いたものぢや。これと同じやうに、アマディスは勇壯にして歸依心篤き騎士の北極星で、啓明星で、また日輪でもあるところから我々戀と騎士道との旗印の下に戰ふ者は皆この人に習はねばならぬ。そこで、サンチョよ、かういふ次第故、アマディスに最も近く倣ふ武者修行者が、騎士道の奥義に最も深く達するものと拙者は考へるのぢや。さてもこの騎士が自分の思慮や德や、勇氣や忍耐や剛毅や愛を、最も著しく示した一つの實例は、オリアナ姫に拒まれて、その名をさへ、自ら好んで入つたその道にまことにふさはしく意味深きベルテネプロス（晴れ曇るといふ意）と改めて、ベニア・ホブレの山上に苦行せんとて引き籠つたことであつた。そこで、拙者に取つては此の點であの人に習ふことが、巨人を眞ッ二つに斬り割き、大蛇の頭を刎ね、龍を退治し、軍勢を追つ拂ひ、艦隊を擊沈し、或は魔法を破りなどするよりも、却つて容易いことでもあり、又この場所が苦行にはまことに適當なところでもあるから、拙者は今これほどまで都合よくその前髮を差し出し居るこの好機會を摑まずに逃してはならんのぢや』

『こんな人氣が離れたところで貴方樣がなさらうと言ふのは、一體、何事でござりますかい？』とサンチョは言つた。

『お前に言はなんだことか、』とドン・キホーテは答へた、『拙者は此處でアマディスを習うて、絶望の犧牲となつた狂人狂亂の役を演じ、それと同時にあの勇壯なローランドを眞似ようと思ふのぢや。ローランドは泉のほとりで、美しいアンゼリカがメドローと淺ましい所業をしたといふ證據を得て、その悲しみの爲めに發狂した。そして樹木を引き拔いてその澄んだ泉の水を攪き濁し、羊飼ひ共を打ち殺し、羊の群を鏖殺しにし、小屋を燒き拂ひ、家々を引き倒し、牝馬どもを引き從へ、その他名を竹帛に殘すやうな數限りない亂暴狼藉を働いたのぢや。拙者はそのローランド、或ひはオルランドーともいひ、ロトランドーともいふその人を、彼はかう幾つもの名前で通つて居つたのぢや、眞似る考へは持たぬが、彼がしたり言つたり考へたりした氣違ひじみた事どもは殘らず段々に、拙者の力の及ぶ限り、一番目ぼしいものと思はれるものをあらかた眞似るつもりぢや。併し拙者は大方たゞアマディスを眞似して滿足するであらう。この人は人に害を與へるやうな氣違ひにはならずに、只泣き悲しんだのぢやが、何人も及ばぬ高名を得たものぢや。』

『そんなことをした騎士たちは、さういふ痴けた事や苦行をせんならんやうな深い因縁があつたからぢやと思ひますがの、しかし貴方様には氣違ひにならつしやる譯が有りますかい？　どこのお姫さまが貴方に肘鐵砲を喰はせましたかい、またドゥルシネア・デル・トボソのお姫さまがムーア人なりキリスト信者なりといちやついて居つたといふ何か確かな證據でも見つかりましたのでござりますかの？』とサンチョは言つた。

『さあ其處ぢや、』とドン・キホーテは答へた、『またそこが拙者のやり方の美しい所ぢや。譯があつて氣違ひになるなら何も武者修行を有難がるには及ばんのぢや。何の因縁もなうて氣違ひになつて、そして煙もないところでさへかうであるからは、まして火のあるところでは勿論のことぢやといふことを、拙者の婦人へ知らせるのが眼目ぢや。それに拙者は、拙者が生涯の愛人たるドゥルシネア・デル・トボソ姫から久しく離れて居るのであるから氣狂となる理由は十分有る譯ぢや。先日羊飼ひのアムブロジオが言うたのをお前も聞いた通り、離れて居れば凶事ばかりを思うて氣遣はれるからぢや。それぢやから、のうサンチョー、此のやうな珍しい業しいまた前代未聞の眞似を止めなとして暇をつぶすではないぞよ。拙者は狂人ぢや、そしてお前に持たしてドゥルシネア姫へ遣はさうと思ふ書面の返事を持つて歸るまでは拙者は氣違ひで居らねばならんのぢや。そして若しその返事が拙者の信實に報ゆるやうなものであれば、拙者の狂氣も苦行も終りを告げるであらうし、またその返事が反對の結果を齎すものであれば、拙者は本當の氣違ひになるであらう。さうなれば拙者は最早苦しみは知らぬであらう。かういふ次第であの婦人の返事がどうあらうとも、お前の持ち歸る賜物を喜んで正氣で受けるか、それともお前の持ち歸る凶事を氣違ひ故に感ぜぬか、何れにしてもお前が拙者に別れて行く時の拙者の煩悶と苦痛とからは遁れるであらう。しかしサンチョー、あのマムブリノーの兜を安全に持つて來て居るかどうぢや。あの惡者があの兜をきれぎれに碎かうとして出來なんだあの折に、お前があれを地べたから拾ひ上げるのを拙者は見て居つたが、それによつて見ても、あの兜の作りの精巧な事は知られるといふものぢや。』

これに對してサンチョは答へた、『正直のところ、憂ひ顏の騎士様、貴方様の言はつしやることには我慢して聞いて居れんことが隨分ござりますよ。そして私アさういふと

ころから考へて、貴方樣の言はつしやる武者修行のことや、國や天下を手に入れるちふことや、島を下さるちふことや、また武者修行の慣ひによつてその他の褒美や位を下さるちふことは、皆な風船玉の嘘八百で、皆な繪の具の作り事か、まアそんなやうなタワイもないものに違ひないと、私アそろ〳〵怪しうなつて來ましたわい。今になつてもまだ御自分の間違ひが分らいで、床屋の金盥をマムブリノーの兜ぢやなど〵言はつしやるのを誰かゞ聞いたら、そんなことを言うて頑張る人間は頭が腐つとるぢやと思はないで、何と思ひませうかい？　私アその金盥のめちや〳〵にひん曲つとるのを嚢の中へ入れとります。が、もしや神樣のお情で何時か嚊や子供に逢へるやうな時が來たら、家へ持つて行つて、それを直して髯剃る道具に使はうと思うとりますわい。』

『これ〳〵サンチョー、』とドン・キホーテは言つた、『お前と同じやうに正直な所を言ふが、お前のやうに物の分らん家來といふものは古往今來世界中に又とはないわい。今日が日までも私に供を致してをりながら、武者修行に關する物事には表面から見ると殘らず幻で痴けで譫語で、いつでも喰ひ違ふものゝやうに思はれるものぢやといふことに氣が付かずにようも居られたものぢや。又さう見えるのは、實際さうであるからではなく、たゞいつも私らには大勢の魔法使ひが憑いて居つて、私らの係るいかなる物事をも變化させたり代へたり、あいつらの好きなやうに向けたりして、魔法使ひ等の氣分次第で私らを扶けたり破滅させたりするからぢや。さういふ譯ぢやから、お前には金盥と見えるのが拵者にはマムブリノーの兜と見え、また他の人には何か外の物にも見えるぢやらう。そして正眞正銘のマムブリノーの兜を誰の眼にも金盥と見えるやうにしたのは、私に味方する賢人の稀代の先見による次第ぢや。何故といふに、本物のマムブリノーの兜と見れば、それは大した價値のものぢやから、世界中がそれを盜まうと拵者を追つかけ廻すであらうからの。しかし唯床屋の金盥と見せて置けば、誰も骨折つてそれを手に入れようとはせぬ。それはあの兜を毀さうとした男が、あの兜を持つて行かずに地べたへ放り出して行つた事に依つても明かに分ることぢや。もしあの男がそれと知つたら、決して打ちやつて置きはせなんだに違ひないのぢや。のう、そいつを確かりと持つて居れよ、差し當り拵者は入用はないからの。なる程さうぢや、苦行をするにつけてアマディスよりも寧ろローランドに

傚はうと思へば、拙者はこの鎧を悉く脱ぎ捨てゝ生れたまの眞裸かにならねばならんのぢや。』

こんな話をしながら彼等は、高い山の麓に達した。その山はそのぐるりを取り巻いてゐる山々から切り離された高峰の如くに峙つて居た。その山裾をよぎつて緩やかな小川が流れてゐる。その圍り一面には見る眼もさめるばかりの綠の艶々しい草原が擴がつてゐた。そして鬱蒼たる森の樹々や灌木や樣々の花は更にこの場所の情趣を加へた。憂ひ顏の騎士はその苦行を行ふ爲めにこの場所を選んだ。彼はそこを見ると、宛ら氣の狂つた人の如くに大聲で叫び出した、『あゝ諸天よ、此處こそは御手づから拙者をその中に投げ入れ給ひしその不幸をば歎かん爲めに、拙者の選び定めるところでござりまする。此處こそは、拙者の責め惱まさるゝ心の受くる苦しみの證し兆しとして、拙者の兩眼より溢るゝ涙がかしこの小川の水を漲らせ、また拙者の深い果てしなき溜息がこの山々の樹々の木の葉を絶え間なく搖り動かすべきところでござりまする。山林田野の神々よ、如何なる神にもあれこの淋しき場所に現はれ給ふ神々よ、この不幸なる戀する男の哀訴に耳をかさせ給へ。この戀する男は思ふ人に長く別れ胸に宿す嫉妬の思ひに騙られて、この荒野の中にわが惡運を歎き、一切の人間の美しさの極限ともいふべきかのうるはしき情なき人のつれなさを哀しみ戀へて居りまする！　あゝ森の奥深い繁みの中に棲ませ給ふ森のニンフよドライアッドよ　山林河川の女神　願はくば御方々に拒まれたるあの素ばしこく放埒なるサタア　半人半山羊の神　によつて御方々の芳ばしき憩ひのつゆ攪き亂されざらんことを。たゞ拙者がこの不仕合せを共に歎いて下されよ、せめてその歎きを聞くことを厭うては下さりまするな！　あゝ、我が夜の日、我が苦しみの光、我が行く手の道しるべ、我が運命の星なる、ドゥルシネア・デル・トボソよ、天願はくば御身の凡ての願ひを十分に嘉し給はんことを、たゞ御身に離れ居りし爲めに拙者が立ち到りしこの場所や有樣を思ひやつて、拙者が信實に適ふだけの情を返して下されい！　ああ今日より後拙者の孤獨の侶となるべき淋しき木々よ、拙者の居るのがお前等に厭はしうないといふことを、小枝をそよと動かしてなりと知らせてくれよ！　あゝ拙者が順境にも逆境にも樂しい道連であるわが家來よ、お前はこの場のことを殘らず、その唯一の源なるドゥルシネア姫へ語り傳へられるやうに、拙者が此處ですることをしかと心に覺えて置いてくれい。』から言ひつゝ彼はロシナンテから降り

た。そして直ぐさま馬の鞍や面勒を取り外して、その臀部をピシャリと一つ打つて言つた、『自由を失うた者が自らお前に自由を與へるぞ。あゝ運の悪いだけ手柄に於て優れた駿馬よ。お前の前額には、アストルフォー武勇誉中の勇士の翼ある駒も、またブラダマンテには極めて大事であつた名馬フロンティノーも、足の速さではお前に及びもつかなんだと記されてあるから、お前の好きなところへ行くがよい。』

これを見てサンチョーは言つた、『あゝかうなりやあの連錢葦毛の鞍褥を取りのける面倒を省いて吳れた男は有難い禮ぢや！　きつとあの驢馬は臀ぺたを一つ叩かれて何かお讃めの言葉をかけられにや歩き出さなんだでござりましよ。尤も彼奴が今此處に居りましたら私ア誰にもあいつの鞍褥を剝がさせはせなんだでござりませう。何故というて、緣のつながつとつた内は私があいつの主人で、その主人の私ア戀をするとか振られて泣くちふ柄ぢやござりませんので、つまりあいつもさういふ事にやまるで緣の遠い方ぢやから、そんな目に逢ふ折がない譯でござりますからの。そして本當に憂ひ顏の騎士樣よ、もし私の出發や貴方樣の御發狂が本當の沙汰でござりますなら、やつぱりも一度ロシナンテに鞍を置いて、私の行き歸りの手間をつぶさんやうに、連錢葦毛の名代を勤めさせたがようござりませう。私アほんとに歩き下手でござりますで、歩いて行つたら何時向うへ着いて何時此方へ歸るか分りやしませんでな。』

『サンチョーよ、お前の目論見は惡うはないやうぢやから、お前の好きなやうにするがよからうぞよ。そしてまた拙者は、あの婦人の爲めに拙者が何を爲し何を言ふかをお前に見せて、それを委しくあの婦人へお前から傳へて貰ひたいのぢやから、お前は今から三日後に出發するがよい。』とドン・キホーテは答へた。

『ぢやが私が今迄見たものゝ他にまだ何を見にやなりませんのかい？』とサンチョーは言つた。

『知れたことぢや！　拙者はこれからこの着物を引き裂いて、この鎧をかなぐりすてゝ、この頭をそこらの岩に打ち付けて、それからさういふ類のことを澤山やつて、それをお前に見せるのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『後生でござりますから氣を注けて下さりませ、貴方樣』とサンチョーは言つた、『どうして貴方樣は頭を幾つも打つつけなさることが出來ませうぞ。もし岩角に打ち當てゝ打ち所でも惡かつたらホンのまツ初めの一打ちで今度の苦行の仕組はすつかりおぢやんになつてしまひますぞよ。そこ

で私が思ひますに、もし貴方様がどうしても頭を叩きつけにやならんと思はつしやれて、さうせねば事が濟まぬやうならまアこの位のところで、――もと〳〵今度の事は皆物眞似で贋ごとで、冗談でござりますから――貴方様が水の中か、それとも何か柔かい綿のやうなものに頭を叩きつける位のところで御滿足なさればよからうと思ひますがの。まア萬事私にお任せなされませ。さうすりや私があのお姫様へは貴方様が金剛石よりも堅い岩尖端へ頭をお叩き付けなされましたと申し上げますからの。』

『お前の厚意は有難いがのうサンチョー、』とドン・キホーテは答へた、『しかしお前に承知して置いて貰ひたいことは、拙者のしてをる事は何一つ冗談ではない、中々本氣の沙汰ぢや。一體本氣でせぬといふことは、私らが如何なる嘘にもせよ嘘を吐けば破門の刑に處するといふ騎士道の掟に違ふことになるからぢや。又爲すべき一つの事の代りに他の事をするのは、正に嘘吐きも同樣ぢや、そこで私の頭打ちは、それに何の言ひ抜けも工夫も加はらぬ眞實な確かな實效のあるものでなうてはならん。それ故拙者の傷口を包むために少々ガーゼを置いて行くことが必要ぢや、丁度折惡うあの妙藥の香油を失ふやうな破目に立ち至つたからの。』

『それよりか、驢馬を失うた方が餘程不運でござりましたよ。』とサンチョーは答へた、『あの驢馬と一緒にガーゼも他の物も殘らず失ひましたからの。併し貴方様、あの忌々しい水藥のことア二度と再び言ひ出さんやうにして下さりませ。その名前を聞いたばかりでも、私の胃の腑はムカ〳〵ほずものこと、私の魂までがくり返りますからの。それからも一つのお願ひは、貴方様のお演んなさる氣違ひごとを見るために許して下されましたその三日といふものが、もう經つたことにして頂きたいのでござりますがな。私アもう貴方様のその氣違ひごとは見て確かめたことにして、あのお姫様へは様々不思議なお話を申し上げますからの。それで御書面をお書きなされて直ぐに私を立たせて下されませ。早う歸つて來まして、貴方様を見棄てゝ參るこの煉獄ぢやとお前は言ふのか、サンチョー？　それよりも寧ろ地獄とか、或はもつと惡いところが在るなら、もつと惡いやうにでも呼ぶがよい。』とドン・キホーテは言つた。

『それでも地獄に落ちた人間は「到底保留せらるゝことなし」ちふことを、私ア聞いとりますからの、』とサンチョー

煉獄（ぢやう）＝地獄に至る前にあり、罪ある者の罰を洗ひ淨むるところ

は言つた。

『その「保留」といふのは何の事か私には分らん。』とドン・キホーテは言つた。

『「保留」と申しますのは、一度地獄へ墮ちた者は誰も二度と出て來もせねば、また出ることも出來んちふことでございます。』とサンチョーは答へた、『それは貴方樣の今の場合とはあべこべでございますよ。さうでなきや私アたとへロシナンテをはずませる拍車を有つとつても、それを働かせる張り合ひはございませんぞい。まア私をトボソォへ行かして、ドゥルシネア姫にお目通りさせて御覽なさりませ。私は貴方樣がこれまでなされたり、またこれからもなさらうといふ癖けたことや氣違ひごとを(まア どつちでも同じことでございますが)、お姫樣へ申上げまして、たとへあの方が枠の樹のやうに固い方でございましよと、手袋よりも柔かうするやうに致しますからの。そしてあのお姫樣の甘い蜜のやうな御返事を持つて、魔法使ひの女のやうに宙を飛んで戻つて來て、貴方樣をば、見たところ地獄らしいが、實は飛び出される望みがあるから地獄ではないこの煉獄から、救ひ出してお上げ申しませう。その飛び出すといふことは、先にも申したやうに、地獄に居る奴にや出來ぬ藝當でございます。それぢやからこの事だけは貴方樣も別に文句は言はつしやりますまい。』

『それはさうぢや、しかしその書面を書くにや一體どうしたもんぢやらうのう?』と憂ひ顏の騎士が言つた。

『それから驢馬の仔の手形もございますよ。』とサンチョーは附け加へた

『皆一緒に書くのぢやわい。』とドン・キホーテは言つた、『しかし紙が無いから、古人の致したやうに木の葉に書いたがよいであらうか。それとも蠟板に書いたものか。尤もそれは差し當り紙同樣に手に入り難いが。いや便利なことを、便利以上のことを思ひついたぞ、卽ちあのカルデニオの手帳に書くのぢや、そこでお前は學校の先生の居られる村へ着き次第立派な手でそれを紙へ寫して貰ふやうにするのぢやぞ。學校の先生でなければ寺の坊樣が寫して呉れるわい。しかしそれを公證人には寫させんやうにせい、あいつらは惡魔でも讀めんやうな七面倒くさい書體で書くからの。』

『ぢやが御署名のことは何うしましよ?』とサンチョーは言つた。

『アマディスの手紙には署名は一向なかつたぞよ。』とドン・

キホーテは言つた。

『それはそれで大丈夫結構でござります。しかし手形の方は是非お名前が要りますわい。寫さしたのぢやその署名が贋ものぢやと言はれますから、驢馬の子を貰はずじまひになりましよわい。』とサンチョーは言つた。

『その手形の方はその手帳の中へ署名をして置かうわい。』とドン・キホーテは言つた、『さうすりやそれを見て私の姪は何も六ケしいことは言はずに手形通りにして呉れよう。繼文の方は署名の代りに「死ぬるまで御身の者なる、憂ひ顏の騎士より」と書かせばよいのぢや。またそれは他の者の手で書いたところで大したことはあるまい。私の覺えて居る限りではドゥルシネアは讀みも書きも出來んし、またあの姫が生れ落ちてからついぞ一度も拙者の手蹟や書面を見たこともないからの。一體拙者とあの婦人との愛は、つゝましげに見かはすまでに止まつて、いつも清淨無垢なものであつたからぢや。又出逢ふ折とても至つて少く、眞實のところ何時かは地中に葬り去られるこの兩眼の光以上に愛して來た此の十二年の間に、四度と逢うたことはないのぢや。そして恐らくその四度といふのも、拙者に見られて居るといふことは一度もあの婦人は氣付かなんだのぢや。婦人の父ロレンゾー・コルチュエローと母親アルドンザ・ノガーレスとは、それ程箱入娘にしてあの婦人を育て上げたのぢや。』

『ハヽなる程！　ロレンゾー・コルチュエローの娘がドゥルシネア・デル・トボソ姫でござりますかい、またの名はアルドンザ・ロレンゾーですの？』とサンチョーは言つた。

『その通りぢや、又あの婦人こそは宇宙の婦人たるに恥ぢぬものぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『あゝ娘さんならよう知つとります。』とサンチョーは言つた、『そこで御免を蒙りまして申上げますが、あの娘さんは村中で一番強い若い衆位には鐵棒投げが出來ますわい。ほんとにえらいこツちや。しかしあの娘は元氣な娘で脊が高うてがツしりして居つて、今の武者修行にでも、これから後の武者修行にでも手助けになりますから、あの娘を思ふ人にすりや結構でござりますよ。あの阿魔ツちよは、何ちふ力強で大變な奴でござりましよ。何時でござりましたかの。あの娘は村の鐘撞き塔の頂邊に棒立ちになつて、自分の家の畑に居つた百姓どもを呼びましたのぢや。ところがあいつらは半リーグ（一里位に當る）から上離れたところに居りましたのに、まるでその塔の下に居つた程に、ようその聲が聞え

たちふことでござりますよ。そしてあの娘の一番よいところは、なか〳〵の愛嬌たつぷりの女ぢやで、勿體ぶるやうなところは爪の垢ほどもない。誰とでもふざけたり、何事にでも笑うたり戯れたりするのでござりますよ。そこで憂ひ顔の騎士様、貴方様は唯あの娘の爲めに氣違ひじみたことをしてもよいとか、せにやならんとか云ふばかりか、氣をおとしたり首を縊つたりしなさる理由が立派にありますのぢや。ぢやからそれを知つとる者は誰も、たとひ悪魔が貴方をかつさらうて行かうが、貴方はよう成さつたなとしきや言ひはしません。私ア あの娘をこの前見てからもう大分經ちますで、たゞあの娘に會ふためばかりに、出かけて行つてもよい位に思ひます。あの女も毎日野良へ出ますで、そして日や風に當れば女はうんと容貌を落としますから、今頃は大分變つとりませうよ。ぢやが、ドン・キホーテ様、私ア貴方様にほんとのことを白狀しますとな、今が今まで私はえらう間違うて居りましたよ。私はドゥルシネア姫ちふのは貴方様が戀をしてをらつしやるどこかのお姫様か、それでなきや貴方様が逐らつしやれたビスケイ人ぢやの、船微役ぢやの、それから私がまだ貴方様の家來にならん前に貴方様は何度もお勝ちなさつたに違ひありませんから、外にも澤山ありませうが、さういふ立派な贈り物をなさるだけの價値の十分ある偉いお方とばツかり、今日まで心から正直に思ひ込んでをつたのでござります。ぢやが、よう考へて見ると、貴方様がお遣しなさるあの負けた奴どもが、アルドンザ・ロレンゾー姫の ドゥルシネア・デル・トボソ姫のことでござりますがのその前へ行つて、膝を折つてお辭儀をしたところが、あの娘さんに何の役に立ちますかい？　大方負けた奴等が行くと、あの娘は亞麻を扱いてをるか、穀打ち臺で麥を打つて居りましよで、行つた奴は恥かくし、あの娘はその進物を見て笑ふか怒るかしませうからの。』

『拙者はこれ迄にも幾度もお前に言うたことぢやが、』とドン・キホーテは言つた、『お前は、恐ろしい大の饒舌家ぢや。またお前は鈍間のくせにいつも氣の利いたことを言はうとして骨を折つて居る。しかしお前がとんなに馬鹿であつて拙者がどんなに道理にかなうてをるかを見せる爲めに、一つ短い話を聞かせよう。それはかうぢや、或るところに一人の美しい若い足纏ひのない金持ちで、そして取り分け氣の措けぬ氣の輕い寡婦があつて、それが嚴丈な逞しい若い大學の小使に戀したのぢや。やがて其の小使取締

の人がその事を知つて、或日その金持ちの寡婦に親切からの意見をして、「奥さん、貴方のやうに身分の高い美しい金持ちの御婦人が、あの何某のやうな賤しい身分の低い馬鹿な男に戀をなさるとは驚きました。また驚いたのは無理でもありますまい。此處には澤山の先生方や、卒業生や、神學生やが澤山居りますから、其中から丁度梨の實でも選り取るやうに、それがよいあれは好かぬと、選り取り次第に出來ますのに。」と言つたのぢや。併し寡婦は氣輕に打ちあけてそれに答へた、「貴方樣、あの人は馬鹿のやうに見えますが、妾があの何某を選んだのを悪いとお考へなさるなら、貴方は大變間違うてをられますよ。またそれは頗る舊式なお考へでございますよ。それでも妾があの人に求めます事に就ては、あの人はアリストートルに優るとも劣らぬ程の哲學を知つてをりますがな。」同じ道理ぢやよ、サンチョー、私がドゥルシネア・デル・トボソに求めるところに對しては、あの婦人はこの世で最も高位の姫君に一歩も讓らぬのぢや。詩人たちが自分の婦人に好きな名を付けて、その婦人を讃めそやしたからと言うて、何も本當にさういふ戀人を銘々が持つてをつたと思つてはならん。一體お前は樣々の書物や町や床屋の店や芝居小屋の中に充ち溢れてをるアマリリスとかフィリースとかシルビアとかディアナとかガラテアとかフィリダとかその他いろ〳〵の婦人たちが、皆眞實正味血や肉を有つた婦人で、さういふ婦人を讃めそやす詩人たちの戀人であつたのぢやと思うて居るのか？　決してそんなことはないのぢや。詩人どもは、九分九厘まで、自分等の詩の題目を得る爲めとか、また自分等がさういふ戀男として、或は自分免許の戀男として、世間に通用しよう爲めに、さういふ婦人を作り出したのぢや。そこで拙者はあのアルドンザ・ロレンゾーさんを才色兼備の婦人と思ひ信ずればそれでよいのぢや。また誰もあの娘に何かの爵位を贈らうなどと思うて、その系圖を檢べたりはせぬであらうから、系圖などの事はどうでもよいのぢや。たゞ拙者は、あの娘をば世界第一の高位の姫君と思うて居るのぢや。サンチョーよ、若し知らんなら教へてやらうか、戀をそゝるものは數多いが、その中に二つの事が一番大切ぢや。それはすぐれた容貌と佳い名前ぢや。そしてこの二つのものはドゥルシネアに於いてはこの上なく立派ぢや、容貌の點では誰一人として並ぶものなく、佳い名前の方では殆ど及ぶものもないからの。一口に言うてしまへば、拙者の言ふことは拙者の言ふ通りで、それより上でも下でもないと信じて居

る。そしてあの婦人は容貌も身分も拙者の理想通りに拙者自ら心に描いて居るのぢや。ヘレンも及ばねば、リュクレティア何れも古ギリシャの美女も及ばぬ、また往昔の如何なる名高い婦人も、ギリシャ人であらうが野蠻人であらうが、ラテン人であらうが及びもつかぬ。人は好きなやうに言ふがよい。拙者はこの點でたとへ無智な奴からはとやかう言はれても、眼のある人から非難を受けることはあるまいからの。』

『貴方樣の仰有ることは全く御尤もと存じます、』とサンチョーは言つた、『そして私は馬鹿でございますわい。ぢやがどうして私の口から馬鹿ちふ言葉が出たのでございませうな。絞首刑になつた男の家ぢや、繩のことは口に出すもんぢやないと言ひますからの。いやそれよりかお手紙を下さりませ、そしたら御機嫌よう、私は立ちますわい。』

ドン・キホーテは例の手帳を取り出した。そして片隅へ退いて、極めて丁寧にその手紙を書き初めた。そして書き終へるとサンチョーを呼んで、途中でこの手紙を失うた場合の用心に、これをちやんと覺えこんで置いてほしいから一應讀んで聞かせたいと言つた。何故なれば今迄の不運から考へると、どんなことが起るか知れなかつたからである。それに對してサンチョーは答へた、

『そのお手紙をその帳面の中に二ところ三ところ書いといて下されませ。私はそれをしつかり用心して持つて行きますわい。私ア手前の名でもちよい〳〵忘れる位物覺えが悪いのぢやから、私にそれを覺えてをれと言はつしやるのは途方もないことでござりますがな。ぢやがそれにしても、聞かしてお貰ひ申したいから、讀んで聞かせて下さりませよ。きつとはんこに押したやうに書いてあるでござりましよからの。』

『よう聞くがよい、かうぢや――』とドン・キホーテは言つた、

『ドゥルシネア・デル・トボソォに宛てたるドン・キホーテの手紙

いと高きやんごとなき姫君よ――

相見ざる悲しみの切先に貫かれ、心の髓までも傷ける者、謹んでいとも美はしきドゥルシネア・デル・トボソォの君へ、自らは樂しまざる清福を祝し送りまゐらせ候。もし君が美しさわれをさげすみ、君が德わが爲めにあらず、君が侮りわれに苦しみを與へ給ふべくば、久しき艱難の道にこそは殘る方なく堪へ候ひつれ、烈しきが上にも長き〳〵この苦痛には得堪ふべくもあら

ずと存候。情知らぬ美しき人よ、いとしき敵よ、わが忠良なる従士サンチョーは、君ゆゑにわが陥れる苦境をつぶさに物語り参らすべく候。もし君幸ひにしてわれに救ひを與へ給はゞ、われは君がものたるべし。もし然らずば君が御意のまゝになさしめたまへかし。われはわが一命を斷ちて君がつれなさとわが願ひとを滿たし申すべく候。

死に至るまで君のものなる
憂ひ顔の騎士』

『いや全く、』とサンチョーはその手紙を聞き了つて言つた、『私はこんな立派な文句を聞いたことがございません。ほんとに貴方様は何でも思うた通りに書いてござるー それに「憂ひ顔の騎士」といふお名前がよう筵つとりますわい。ほんとに貴方様は魔物のやうで、何でも御存じでないことはございませんなア。』

『拙者の職分柄何事にも明るうなうてはならぬのぢや。』とドン・キホーテは言つた。

『そこで、貴方様、その裏へ三四の驢馬の子の手形を書いて下さりませ。そして一と目で分るやうにはつきりとお名を書いて置いて下さりませ。』とサンチョーに言つた。

『よし〳〵、』と言つて、ドン・キホーテはその手形を書くや否や次のやうに讀んで聞かせた——

『姪どのへ——この驢馬の子手形一見次第、余の不在中御身へ保管頼み置き一驢馬の子五四の中より三四だけ余の従士サンチョー・パンザへ御拂ひ渡しあるべく候。件の三四の仔驢馬は當所にて受け取りし同數の現物の代りとしてお拂ひ渡さるべきものに有之、この手形面に從ひ引き換へにサンチョーへ相違なく拂ひ渡す可きものなり。

モレナ連山の奥にて、
末年八月二十七日この證書を作成す』

『結構でござります。それでは御署名を願ひます。』とサンチョーは言つた。

『署名をするには及ばん。たゞ署名も同様の仮拂をして置かう、さうすれば三四はおろか、三百四の驢馬にでも通用するわい。』とドン・キホーテは言つた。

『私は貴方様を信用します。それぢや私アこれからロシナンテに鞍をつきに行きませう。そして貴方のお初めなさる御狂亂は拜見せずに直ぐ出發いたしますから、お別れの祝福を授けて下さりませ。あの娘の方ぢや迷惑な程澤山に貴

方様がいろんな事をなさるのを見て來たと話しますわい。』とサンチョは言つた。

『ともかくも、サンチョよ、是非とも——またさういふだけの理由もあるのぢやから——是非とも拙者が眞裸かになつて、物狂ひの十番や二十番は半時間かゝらん内に演てしまふから、それを見た上で立つて臭れい。お前の眼でそれを見て置けば、どんな餘計なことでも好き勝手におまけを附けることが出來ようからの。だが拙者が演らうと思うて居るだけのことを、とてもお前は話すことは出來ぬにきまつとるわい。』とドン・キホーテは言つた。

『あゝ後生でござりますから旦那樣、』とサンチョは言つた、『どうぞ貴方樣の眞裸かにならしやツたところは私に見せずに置いて下さりませ。それを見たら心から悲しうなつて、私ア涙を零さずにや居られませんぢやらう。おまけに私ア昨夜蓮錢葦毛の爲めにあり丈けの涙を出してしまひましたので、頭痛がしてとても新規に泣き出すことは叶ひませんからの。それでも是非その氣違ひごとを私に見せたいと思ひなさりや、着物のまゝで、手短かなのを、何の造作もなしに出來るのを演つて下さりませ。私アさういふ狂言は一向好きませんし、また先程も申した通り、貴方樣の待つてござる立派な御返事を少しも早う持つて歸りたうござりますからの。もしそれがさう行かんなら、それはドゥルシネア姫の故でござりますわい。もしあの娘が譯の分つた返事をせんやうならそれこそ私が生命にかけても、あの娘を蹴つたり毆つたりしてでも、是非とも好い返事を吐かせてきつと持つて參りますわい。貴方樣のやうな名高い武者修行樣が謂はれ因緣もなしに氣が狂ふちふことがあつちやどうして我慢が出來ますかい？　それも誰の爲め、あんな……いやあのお姫樣も私にそのあとを言はさんやうにする方がようござりましよ。私アたとへ商賣が上つたりになつても、きツと言ひまくつて言ひ抜いてやりますからの。私アこれでその方にかけちやア中々えらものでござりますよ。あの娘は私をよう知つとりませんがの。本當に私を知つたらあの娘もびく〳〵しませうわい。』

『本當にサンチョよ、お前も拙者樣にどう見ても氣が狂うてをるやうぢやの。』とドン・キホーテは言つた。

『私ア貴方程にや狂うて居りませんわい。しかし私はずつと短氣でござりますよ。まアそれはそれとして、貴方樣は私が戻つて來るまで何を食べてお暮でなさりますぞい？　貴方樣もカルデニオのやうに道へ跳び出して羊飼ひどもか

ら食物を取り上げるおつもりでござりますかの？』とサンチョーは答へた。

『その心配は無用にせい。たとひ食物があつたにせよ、牧者はこの牧場やそこらの木立の與へる藥草や果實の外には何物も食はぬぞよ、牧者がこの苦行の美點は何物をも口に入れず、またその他の禁慾をなすところにあるのぢや。』とドン・キホーテは答へた。

そこでサンチョーは言つた、『私が何を心配するか御存じでござりますかい？　私は戻りに此處へ來る道が分るまいかと案じますのぢや。こゝはこんな奥深いところでござりますからの。』

『目標をようつけて置くがよい。』とドン・キホーテは言つた、『牧者はこの邊から餘り離れんやうにしようし、また高い岩の上へ登つてお前の歸つて來るのが見えるかどうかを眺めるやうにしようわい。しかし、牧者を見失うたりお前の道を迷うたりせん爲めに一番好い工夫は、そこらに澤山生えてをるエニシダの枝を伐つて行つて、お前が野原へ出るまで路々ところ〴〵へそれを撒いて行くがよい。さうすればそれがあのシーシュースが迷路でたづきの絲を得たやうに、お前が歸る時に牧者を見付ける目標にならうわい。』

『さう致しませう。』とサンチョー・パンザは答へた。そしてエニシダの枝を伐つてから、主人の祝禱を求め、双方とも少からぬ涙を流していよ〳〵主人に別れを告げ、ロシナンテに打ち乘つた。ドン・キホーテはこの馬を自分自身の如く大事にするようにと心からサンチョーに命じた。サンチョーは主人の勸め通りにエニシダの枝をところ〴〵に撒きながら、野原を出發した。ドン・キホーテは自分の演る物狂ひを二つだけでもよいから見て行くようにと尚も頼んだけれども、彼はさうして行つてしまつた。けれどもまだ百歩と行かぬうちに引き返して來て言つた、『旦那樣、やつぱり貴方樣の言はつしやる通り、貴方樣の氣違ひごとを見て來ましたと誓言して氣が引けんやうにするにや、只の一番でもその氣違ひごとを見て行つた方がえゝやうに思はれますわい。尤も貴方樣が此處にかうしてござるのが、隨分と立派な氣違ひ沙汰ではござりますがの。』

『そうれ、私が言はんことかよ。待つて居れよサンチョー。お題目一遍稱へる暇に演て見せようぞ。』とドン・キホーテは言つた。そして大急ぎでズボンを脫ぎ捨てゝ、シャツ一枚だけの素裸になつた。それからもう餘計なことは省いて早速蹴上げ踊り（靴底を手で叩く踊り）を二番と蜻蛉返りを二番演じた。その

機みに何もかも見えたので、サンチョーは二度と見る氣がせず、ロシナンテの首を廻らした。そして自分の主人がまさに發狂して居たと誓言の出來るのに安心し、また心に滿足したのである。そこで我々はサンチョーが歸つて來るまでその道を辿らせて置くことにしよう。その歸るのも間もないことである。

第二十六章　にはモレナ連山にてドン・キホーテが優しくも演じたる戀人の所作が續く

一人あとに殘つた憂ひ顏の騎士の物語に立ち歸つて、此の物語の傳ふる所によれば、ドン・キホーテは、腰から上を包み腰から下は素裸で、觔斗や蹴上げ踊りの所作を演じ終り、サンチョーがその上ぢつとして氣遣ひ藝當を見ないで出發してしまつたのを見ると、とある高い岩の頂上に攀ぢ登つた。そして其處に身を据ゑて、今までにも度々熟考はしたものゝ何時も窮極の解決に達するに至らなかつたところの事を、卽ち自分の目的に對してはローランドの激烈なる狂氣を眞似たがよからうか、それともアマディスの沈鬱なる狂氣を眞似たがよからうか、どちらが適當であらうかといふことを考へ出したのである。そして獨り言つゝ彼は言つた、『ローランドが魔術を掛けられてをつて、その片方の臑に大留針を突き刺して殺さぬ以上は何人も彼を殺すことが出來ず、而も彼はいつも七重の鐵底の靴を穿いてをつたとすれば、眞實あの人が萬人の言ふ通り、えらい勇敢な騎士であつたとしたところで、別に不思議はないではないか？　しかし流石の巧妙な仕掛けも、それを知り拔いてをつたベルナルドー・デル・カルピオに向つては何の役にも立たず、ローランドはロンセスヴルレスで絞め殺されたのぢや。しかしあの人の武勇のことはともかくとして、先づその正氣を喪うたことから考へて見よう。あの人は、泉の側で見露はした證據や、アンゼリカが、アグラマンテの小姓をしてをつたメドローといふ若い捲き毛のムーア人と、二日以上も寢たといふ羊飼ひの密告の爲めに、氣の狂ひ出したことは確かぢや。かういふ事が眞實で自分の思ふ婦人が自分を裏切つたのぢやと思ひ込んだとすれば、あの人がそれで發狂したのも不思議ではない。しかし拙者は、その發狂の原因をあの人に眞似ることが出來ぬとすれば、どうしてその發狂だけを眞似られようぞ？　拙者のドゥルシネアは生れてから一度も、その獨特の衣裳をつけてをるムーア

人を一人も見たことのないのは請け合ひぢや。そして今もあの娘の生みの母のやうに操正しいのぢや。それに若し拙者が、あらぬことを妄想して、「烈火の如きローランド」のやうな同じ類の狂氣を起したら、それこそ明かにあの婦人を辱めることになるのぢや。これに反してゴールのアマディスの方を見ると、あの人は正氣も喪はず氣違ひめいたこともせずに、戀する男としてこの上ない名高い名をば得たわけぢや。あの人の傳記によると、オリアナ姫に、自分の氣の向くまでは姿を見せてはならぬと言はれて斥けられると、あの人は何も言はずに一人の隱者を伴うてペニヤ・ポブレの山へ引き籠つた。そしてあそこで思ふ存分泣き暮らしてゐたが、とう〳〵悲歎と窮乏との最中に天が救ひを遣はされたといふのぢや。もし全くこれが眞實ぢやとすれば、何故拙者は今かうやつてわざ〳〵素裸かになつたり、拙者に何の害をも加へなんだこの木々に害を加へたりせねばならぬか？　拙者が飲まうとさへ思へばいつでも飲ませてくれるこの川々の清水をば何故拙者は濁したりせねばならぬか？　あゝアマディス、どののことは忘れまいぞ。ラ・マンチャのドン・キホーテは及ぶ限りアマディスどのを眞似しませうぞ。アマディスに就いても、ローランドと同じく、たとひあの人は大業を成さなんだにもせよ、死ぬるまでそれを成さうと努めたと語り傳へらるゝであらう。又たとひ拙者がわがドゥルシネアに斥けられ拒まれては居らずとも、前にも言ふ通り、あの婦人と相見ぬといふだけで拙者には十分の理由になるのぢや。さていよ〳〵勤めにかゝらうか。アマディスの功績よ、拙者の記憶に上つて來い。さうしておも前を眞似るには先づどう初めどうらよいか教へて呉れい。あの人が專らしたことは祈念して神に身を薦め奉ることであつたといふことは、拙者は既に承知してをる。しかし生憎珠數を持ち合せて居らぬので、それをどうしたものであらうかの？』

やがてその珠數を拵へる方法がふと彼の心に浮んで來た。それは垂れてゐたシャツの裾の布を細長く裂き取つて、それに十一の結び目を拵へ、その中の一つだけを他のより大きくすることであつた。そしてこれは彼が此處に滯留して無數のお題目を稱へた間ぢう彼の爲めに珠數の役を勤めたのである。（この條は初版のまゝで、第二版には全部削られてゐる。）いま繕つて訂正されてをる。これは初版の評家の注意によつて變へられたものであらうといふ。しかし彼を非常に難澁させたのは、アマディスの場合と違つて、懺悔を聞いたり慰めを與へたりしてくれる隱者をつれてゐないことであつた。

そこで彼はこの狭い草原を彼方此方に歩き廻つたり、また木の皮や美しい砂の上に、或ひは自分の憂ひを抒べ、或ひはドゥルシネアを讃美する詩を數限りなく書き付けたり鐫りつけたりして自らを慰めた。しかし後になつて見ると、見當つた詩の中で完全に讀み分けられるものは次のものだけであつた——

汝山腹に茂る
木立よ叢よ茂みよ、凡て綠なるものよ、
戰なるこの痛き胸をし碎く
この歎きに厭き果てたりや？
その歎き汝等を煩らはし
我その贖ひをなすべくば
わが言ひわけを聞けよかし、
ドン キホーテの淚は溢れ滿てり
これも皆遠きドゥルシネア・デル・トボソォの爲めぞ。

君が爲めにやつれ果てゝ
ありとある惱みの餌となり
かゝる野山に分け入る身となりし
戀する男のこよなき誠は時こそ證すべけれ。

怨敵の如く戀は彼を惱ませども
その何故なるを彼も知らず、
彼の知るは、たゞ瀧津瀨の如く
ドン・キホーテの淚は溢れ滿てり
これも皆遠きドゥルシネア・デル・トボソォの爲めぞ。

嶮しき山を上り、こゞしき谷を下り
冒險を求めつゝ彼は行く。
されど丘にも谿にも、山にも谷にも
禍は彼が凡ての働きにともなひつゝ。
戀は尚ゝ彼を彼方此方に追ひ
その無情の笞を揮ふ——あゝ——
無慈悲の運命、果てしらぬ歎き
ドン・キホーテの淚は溢れ滿てり
これも皆遠きドゥルシネア・デル・トボソォの爲めぞ。

「ドゥルシネア」の名前に「デル・トボソォ」を附け足したことは、右の詩を見付け出した人々の間に少からぬ笑ひの種となつた。ドゥルシネアの名を出して來れば、必ず「デル・トボソォ」を附けなければ、この詩が譯の分らぬものになるであ

らうと、ドン・キホーテが思つたに違ひないと彼等が推察したからである。果せるかな、後でドン・キホーテ自身がそれを承認したので、その推察は當つてゐたのである。彼は尚澤山の詩を書いた。けれども、前にも言つた通り、この三節たけがやうやく明瞭に完全に判讀出來たのであつた。かういふ風にして、また自分に答へ、自分を慰め、自分に耳を傾け呉れよと、森のフォーン（半人半羊や牧神）やサタア（半人半山羊や流れの中の女神や濕つぽい陰鬱なエコー（木魂の意、山林に棲み縁ひ）にしてその聲だけ殘つた）（ギリシヤの女神の名）たに歎きかけ呼びかけながら、その傍ら生命を支へる藥草をも捜しつゝ、サンチョーの戻つて來るまで日を送つた。そして彼の戻るまでには事實三日經つたが、もしそれが三週間も喞どつたならば、この憂ひ顔の騎士はその生みの母親ですら顔を見分けぬ程に窶れ果て變り果てたことであつたらう。さて玆で、ドン・キホーテの方は歎息や歌に包まれたまゝにして置いて、サンチョー・パンザがその使ひの道中で何事に出遇つたかを話した方が好からう。

彼の方は、國道に出て、デル・トボソへ向つて進んだ。そしてその翌日、例の毛布の災難の降りかゝつた宿屋に差しかゝつた。彼はそれと見るや否や、又もや空に投げ上げられて居るやうな心地がした。折柄丁度食事時ではあるし、それに彼はこれまで何日も冷たい食事ばかりに有りついてをつたので、何か暖かい物が食べたくて仕方がなかつたのであるから、その宿屋へ入れば入るべき丁度の時ではあつたのだが、どうしてもその内へ入つて行く氣になれなかつた。そこで入らうか入るまいか決心はまだつかぬながらも、この一方の熱望に驅り立てられて彼はひとりでに宿屋の側へ來てしまつた。そして其處に愚圖々々して居ると、二人の人が中から出て來て、直ぐさまサンチョーと氣がついて、一人は一方の人に言つた、『牧師樣、あの馬に乘つとる男は、ありや村の冒險家の家の婆さんが私らに話したサンチョー・パンザぢやござりませんかな。それあの婆さんの御主人の家來になつて一緒に出掛けたといふ……？』

『さうぢや、又あの馬は私らの友達のドン・キホーテの馬ぢや。』とその牧師は言つた。そしてこの人々が彼をこんなによく知つてゐるのは、この二人は同じ村の牧師補と理髮師とであつて、しかも例の書物の吟味をして火刑の宣告を執行したあの人たちであつたからである。そこで彼等はサンチョー・パンザやロシナンテを見ると、ドン・キホーテのことが聞きたくなつて、近寄つて來た。そして牧師補はサンチョーの名を呼びかけて言つた、『やア、サンチョー・パンザ

どん、御主人は何處にござるかの！』

サンチョーも二人を直ぐ見とめたが、自分が主人と別れて來た本當の場所や樣子を隱して置かうと腹を定めた。そこで自分の主人はさる所でさる非常に重大な事件に關係してござるが、そのことは自分の兩眼にかけても打ち明けることは出來ぬと答へた。

『あかん／＼、』と理髮師は言つた、『サンチョー・パンザどん、もしお前が御主人の居どころを言はんとなると、私らは疾うから疑うとツた通り、お前があの人を殺して追剝ぎをしたといふ疑ひをお前にかけるぞよ。何故でもお前は現在あの人の馬に乘つとるぢやないか。本當のことその馬の御主人を出して貰はにやならん。さうせんと只では濟むまいぞよ。』

『私を威かすことはいらんわい。私ア人殺しをしたり泥棒したりするやうな人間ぢやないからの。殺すの死ぬのといふは、その人の運か神さまの仕業かぢや。私の旦那はこの山の奥で御自分の大好きな難行をやつてござるのぢや。』とサンチョーは言つた。それから出放題に息も繼がずに、自分が主人に別れて來た樣子や、降つて湧いた樣々の冒險や、また自分は今、主人が首つたけ惚れこんでござるロレンゾー・コルチュエローの娘のドゥルシネア・デル・トボソ姫へ戀文を持つて行くところであるといふことなどを話した。二人ともサンチョー・パンザの話すのを聞いて驚いた。ドン・キホーテの狂氣やその狂氣の性質は豫ねて知つて居たものゝ、聞けば聞くほど今更の如く新たな驚きに充たされたからであつた。やがて彼等はサンチョー・パンザに、ドゥルシネア・デル・トボソ姫のところへ持つて行くその手紙を見せてくれと賴んだ。サンチョーは、それは帳面の中に書いてあるので、人里へ出次第紙に寫し更へて貰へといふ主人の指圖であつたと答へた。そこでその牧師補は、若しその手紙を自分に見せるなら自分が綺麗に寫してやらうと言つた。サンチョーは手を懷に入れて帳面を搜したけれども見付からなかつた。またそれは假令彼が今日に至るまで搜し續けてみたところで見付かりやうはなかつたのである。何故なれば、ドン・キホーテがその帳面をしまひこんでゐて初めから彼に渡しはしなかつたのであるし、又彼もそれを催促しようとも思はなかつたからである。サンチョーはその帳面がいよ／＼見付からぬと分ると、顏は死んだやうに眞蒼になつた。そして大急ぎで身體中を撫で廻した。それでもやはりどうしても見つからないと分ると、いきなり兩手で賻髯を

摑んで半分がた引き擘つてしまつた。それが濟むと出來るだけ手早く立ち續けに、自分の顏にも鼻にも、半ダースからの拳固を見舞つて、とう〳〵血塗れにしてしまつた。

牧師補と理髮師とはそれを見て、そんなに我が身をひどいことをするとは一體何事が起つたのかと訊ねた。

『何が起つたも起らんも、一匹がお城一つにかけ合ふ程の騾馬の子を三匹も、ちよつとの間に、右から左へ棄てゝしまうたのぢや。』とサンチョーは答へた。

『そりやどうしてぢやい？』と理髮師は云つた。

『私ア帳面を落としたのぢや。その中にや今のドゥルシネア姫へ宛てた手紙と、それから旦那さんがお家に置いてござる四匹か五匹の騾馬の子の中から三匹私へ下さるちうて姪御へ指圖して、ちやんと旦那さんの名前のある手形が一枚ありましたのぢや。』とサンチョーは言つた。それから彼は自分の連錢葦毛を失うたことを二人に話して聞かせた。

牧師補は、帳面の中に書いた手形は通用もせねば信用もされんから、今度主人に會うたら手形を更めて振り出して貰うて、通常の習慣に從つて新規の手形を紙に書いて貰うてやらうと言つて、サンチョーを慰めた。

それを聞いてサンチョーは氣を取り直した。そしてさういふ譯ならドゥルシネア宛ての手紙を紛失したことは大して困りはせぬ、何故なれば、この方は大抵空で覺えてをるから、何時何處でなり御都合のよい時に口で言へますからと言つた。

『サンチョーどん、それぢやその手紙を讀み上げてお呉れ、私らがそいつを後で書くから。』と理髮師は言つた。

サンチョー・パンザはその手紙の文句を思ひ出さうと頭を掻き出した。そして片足に身體をもたせるかと思ふと、また片足に身體をもたせ、一寸の間地べたを見据ゑて居るかと思ふと、次には空を脫み、爪を半分も噛み切つて、二人を、今にも始めるかと默つて待たせて置いた揚句に、やゝしばらく間を置いてから言つた、『本當に、牧師樣。えゝ畜生、根ッから思ひ出せませんわい。しかし書き出しのところは、「いと高き、やんやとござる姫君樣」とありましたわい。』

『やんやとござる」ちふ筈はないよ　そりや「やんごとなき」とか、「世にすぐれたる」とかぢやよ。』と理髮師は言つた。

『さうぢや〳〵、』とサンチョーは言つた、『それから私の覺えとるだけを言ふとかうでござります。「傷を負うて、寢不

足で、突き刺された者が貴女樣のお手を嘗め申候。情け知らずの、なか〳〵見られたもんでない別嬪のお方樣、」それからまだ外に丈夫ぢやとか病氣ぢやとかをあの娘へ送るちふことが書いてあつて、それから段々尻尾を引いて、おしまひには「死ぬまで貴方樣のものなる憂ひ顏の騎士より」とありましたわい。』

サンチョーがいかに良い記憶力をもつてゐたかを見て、二人とも少からず面白がつた。そしてそれに就いて彼を非常に讃めやした。それから、手紙を後で書いて置きたいから、自分等もよう語んじられるやうにもう二度だけ繰り返して吳れと賴んだ。サンチョーはそれを三度繰り返してさうする間に譯の分らぬことをその上何千といふ程喋つた。それから彼は主人のことを尙も話したが、しかし自分が嫌がつて入らなんだその宿屋で、自分の身にふりかゝつたあの毛布上げのことに就いては一言も話さなかつた。彼は更に、もし自分がドゥルシネア・デル・トボソ姫から色よい返事を主人のところへ持つて行けば、主人は皇帝か、少くとも國王になるだけの働きをする筈であること、それは主從二人の間に極められた事であつて、また主人の人品と武勇とを以てすれば、さういふ者になるのは容易い事柄であること、そして主人がさうなれば、自分も新に花嫁を迎へることになり(何故といへば、もうその時には勿論自分は鰥夫になつて居るであらうから)、しかも皇后の侍女の一人を自分の妻に下さるので、それは、大陸の或る富裕な大國の世嗣ぎの姫であること、但し自分はもうたとへどんな種類の島でも島はほしくはないから用はないのであるといふやうなことを話した。かういふ話をサンチョーは落ちつき拂つて——時々鼻を擦りながら——そして二人の聞手が、ドン・キホーテの狂氣の力は、この哀れな男の正氣までも狂はせることが出來たのかと、又しても驚きに滿たされた程、まるで正氣外れに述べ立てたのである。彼等はわざ〳〵サンチョーの迷ひを醒まさせることをしようとは思はなかつた。それはこの迷ひは少しも彼の良心を傷けなかつたので、そのまゝに打ち遣つて置く方が却つてよくもあるし、また彼の馬鹿げた話を聽くのは却つて面白からうとも思つたからである。そこで彼等はサンチョーに向つて、お前の言ふ通り、やがてそのうちにお前の主人が皇帝樣か、もしくは少くとも大僧正か、或はそれに匹敵する高位高官に昇るといふことはあの人に取つていかにも有りさうな本當らしいことであるから、お前の御主人の健康を神に祈るがよか

らうと言つた。

それに對してサンチョーは答へた、『貴方樣方、もしか私の旦那樣の思うてござるやうに物事がうまく行つて、皇帝樣にならつしやらんで大僧正樣にでもならつしやつたら、どんなもんでござりませうか？　その大僧正の武者修行ちふものは、自分の家來に大抵どんなものを與れるのでござりませうかの？』

『あの衆は大抵家來には一寸した扶持か、住職の役目か、さもなきや坊主のやうな役を授けるが、この坊主は可なりの定まつた收入がある上にお賽錢が上るが、その方がずつと餘計なものになるんぢや。』と牧師補は答へた。

『それはさうでも、』とサンチョーは言つた、『坊樣は嫁を持たずにをらにやなりませんの。それにとにかく、供養法事を勤めることを心得とらにやなりませんの。さうなると、私アもう鳴ア持ちぢやし、いろはのいの字も知りませんから、困つたこツてござりますわい。もし私の旦那樣が、武者修行の慣ひどほりに、皇帝樣にならずに、大僧正にならうちふ氣にでもなつたら、一體、私アどうなりませうぞい？』

『心配するなよ、のうサンチョーさん。』と理髮師は言つた、『お前さんの旦那は文よりか武の道の人ぢやから、大僧正になるよりか皇帝樣になる方が易しい故、その方になりなされと、私らが賴みもすりや勸めもするわい。良心に愧へてゞもさうするわい。』

『私もさう思うとりましたよ、』とサンチョーは言つた『尤も旦那は何にでも似合ふお方でござりますがの。私はまあ私で、旦那樣に一番よう似合うて、そして私が一番餘計に御褒美の貰へるやうな、さういふお役を旦那樣に授けて下さりませと神樣へお祈りするつもりですよ。』

『お前はなか〳〵分つたことを言ふわい。』と牧師補は言うた、『そしてお前は、信心の篤いキリスト信者らしい行ひをしてをるわけぢや。しかし差し當つては、お前の主人を和めて、その無益な苦行を止めさせる道を講ずることぢや。そしてそれにはどういふ方法を採つたがよいかよう考へても見にやならんし、また丁度時ぢやから食事もせにやならんから、ともかくこの宿屋へ入つたがよからう。』

サンチョーは、貴方がたはお入りなされ、しかし自分は戸外で待つて居ります、そして自分が何故入るのがいやであるか、また入るのが具合が悪いかといふことは後で話しませうと言つた。しかし自分の食べる物を何か戸外へ持つて

來て吳れるように　そしてそれは暖かいものであつてほしい、それからロシナンテにも大麥を持つて來て吳れるようにと二人に賴んだ。二人はサンショチーを殘して內へ入つた。そして直ぐに理髮師はサンチョーに食べ物を持つて來てやつた。二人の間にはどうやつて自分等の目的を果さうかといふことが愼重に熟慮されたが、やがての事、牧師補はドン・キホーテの氣にも入り、自分等の目的を果すにも非常に都合のよい一つの考へを思ひついた。そして彼は理髮師に自分の思ひ付きを說明してきかせたが、それはかうであつた、卽ち牧師補自身は旅の少女に姿を變へ、床屋の親方は出來るだけ家來らしく見えるやうに姿を拵へ、さうして二人はドン・キホーテの居るところへやつて行く、そして牧師補は、歎き苦しめる少女のやうな風をして、ドン・キホーテに賴み入る、ドン・キホーテは剛勇なる武者修行者としてどうしてもそれを聞き容れない譯には行かぬ。そこでその賴みといふのは、或る惡い騎士がその少女に加へた辱めに仕返しをするために、その少女の導くところへドン・キホーテに一緒について來て貰ふことである。それと同時にその惡い騎士を懲らして少女の恥を雪ぐ迄は、彼女の被つてをる假面をはづせといふことも、彼女の身の上に就いて尋ねることもして吳れるなと賴むのである。かうして賴めば、ドン・キホーテはどんな賴みでも承知するであらうし、またこの方法に依つて、彼を今居るところから引き出して故鄕の村へつれて行けるでもあらうし、歸りさへすれば途方もない彼の狂氣が何とか療治のしようのあるものかどうかを知る工夫もして見られるといふことを、牧師補は疑はなかつたのである。

第二十七章　牧師補と理髮師とが彼等の計畫を實行せし次第、及びこの偉大なる物語に記載するに足るべきその他の事ども。

牧師補のその計畫は理髮師にも惡いものと思はれよう筈なく、それどころかなか〳〵結構と思はれたので、彼等は立ちどころにその實行に取りかゝつたのである。彼等は、牧師補の新調の法衣を抵當に入れておいて、宿屋のお上さんの下袴と頭巾とを借りうけた。そして理髮師は、宿の亭主が、櫛を挿しこんで置くのに用ゐてゐた赤白斑の牡牛の尻尾で、鬚を拵へた。お上さんは、そんな品物を何にするのかと彼等に訊ねた。そこで、牧師補は手短かに、ドン・キ

ホーテの發狂のことや、また今彼の居る山中から彼を連れ出して來る爲めにこの變裝をするのであると話した。亭主と主婦とはすぐさま、その發狂人こそ自分の家へ泊つたあの香油の男で、又毛布上げにされた家來の主人であるあの客人だと思つた。そしてその客人と自分等との間に起つた事どもを殘らず、先きにサンチョーが口を噤んで話さなかつたことまで省かずに牧師補に話した。到頭お上さんは一點申し分のないほど上手に牧師補の着附けをさせた。お上さんは彼に、幅五六寸もある黒い天鵞絨の緣の附いた、總飾りのある木綿の下袴や、また白繻子の緣の附いた綠の天鵞絨の胴衣などを着せたのである。それは、いづれ下袴と同じく、ワムバ王（紀元六七二年から六八〇年まで在位したゴス朝の王）時代に拵へられたものに違ひなかつた。牧師補は女頭巾は被せて貰はずに、その代り自分が夜帽に使つてゐたリンネル製の小さな綿入れ帽子を被つた。そして黒い絹の切で前額を卷き、同時に今一筋の同じ絹切で髯鬚や顏をうまい具合に隱して、假面の代りにした。それからその上に、雨傘に使はれるほどのつば廣の帽子を被つた。それから、外套で身を包んで、自分の騾馬の上に婦人の恰好をして乘つた。理髮師の方も、自分の騾馬に乘つたが、その赤白斑の長髯は腰の邊まで垂れさがつてゐた。これは先にも述べた通り、赤牡牛の尻尾であつたからである。彼等は皆の者に別れを告げた。善良なマリトルネスにも別れを告げた。この女は、罪深い者ではあつたが、二人の者が今まさに取りかゝる熱心なキリスト信者らしい働きを成功せさせ給へと神に祈念を捧げませうと約束した。しかし牧師補は宿屋から出るか出ないに、ふと自分がさういふ風裝をしてをるのが悪事をしてゐる居るやうな氣がした。但し、牧師としてそんな風を裝ふのは、假令その爲めにどういふ效驗があるにしても、不行儀な事に違ひなかつたからである。そこで彼は理髮師にそのわけを言つて、お前さんが惱める少女になつて、私は家來の役を演じた方が、自分の品格を下げることが少いであらうから、着物を取り換へて下さらぬかと賴んだ。もしさうしないなら、彼はもうこの事件には一切關係しないで、ドン・キホーテは打ち遣つておかうと決心したのであつた。丁度この時サンチョーがやつて來た。そしてそんな裝をして居る二人を見ると噴き出さずには居られなかつた。しかしながら、理髮師は牧師補の望み通りにすることを承諾した。そこで今までの計畫を變へて、牧師補は理髮師にどういふ具合にその少女の役を演ねばならぬか、またドン・キホーテにその

無益な苦行の爲めに選んだ場所を棄てゝ、自分等と一緒に來るやうに瞞しすかすには何と言つたらよいかといふことなどを教へ始めた。理髮師は別に教へを受けなくとも、具合よくその役をやりこなせるからと言つた。そして彼は、ドン・キホーテの居るところへ近付くまでは變裝したくなかつたので、その衣裝を疊みこんでしまつた。そこで牧師補は自分の鬚を撫で揃へた。二人はサンチョー・パンザの案内で出かけて行つた。彼は二人を案内しつゝ、かの山の中で例の狂人と出會つたことを話して聞かせた。けれども例の旅行鞄とその內容とを見付けた事に就いては何にも言はなかつた。蓋しこの男は馬鹿正直ではあつたが、少々吝嗇であつたからである。

その翌日彼等は、サンチョーがその主人を置いて來たところへ歸る道の目標にとエニシダの枝を置いて來た場所へ到着した。サンチョーはその目標を認めて、二人の者に、此處が入り口であるから、もし自分の主人を救ふには姿を變へねばならぬのなら、此處で着更へたがよからう、と言つた。蓋し彼等は、かういふ風に變裝して行くことが、その有害な生活から彼の主人を救ふ爲めには、最も重要であると彼に話して聞かせたからである。そして彼等はサンチョーに嚴しく言ひつけて、自分等が誰であるといふことも、またサンチョーがそれを知つて居るといふことも、主人に言うてはならぬ、そして主人は、ドゥルシネア姫へ例の手紙を渡したかと訊くであらうから、さう訊いたら渡しましたと言つて、そしてあの方は讀むことが出來ませぬから、その御返事は口上で、貴方が直き〳〵お出でになつて妾にお逢ひ下さらねば、妾は氣を惡く致しますよと言つたと主人に言ふがよい、そしてこれはサンチョーに取つてなか〳〵大事なことである。何故といふに、こんなにして、また二人がサンチョーに今言うたやうなやり方をすれば、大丈夫サンチョーの主人を立派な暮しに戻すことが出來るし、またあの人が大僧正になる氣遣ひは更にないから、皇帝か王樣かになる手段を早速講じさせることになるであらうと言つた。サンチョーはこの言譯を殘らず熱心に聽いて、良くその記憶に据ゑつけて置いた。彼等が自分の主人を、大僧正にでなく皇帝になるやうに推擧しようと思うて居るのに對しては心から感謝した。何故なれば、皇帝は大僧正よりも一層豐かにその家來どもに褒美を與へることが出來ると信じたからであつた。サンチョーはまた、彼等よりも一足先へ行つて主人に逢うて、そしてドゥルシネア姫の返事を聞かせる方がよか

らうと言つた。蓋しその返事は、彼等二人に様々の面倒をかけないでも、主人を今居る場所から引つ張り出すだけの效果があるかもしれないからである。二人はサンチョーのこの申出を賛成した。そして彼がその主人を見付け出したといふ知らせをもたらすまで、待ち受けることに定めた。

サンチョーはモレナ連山の深い谷々の奥へと突き進んだ。

二人は細い静かな溪流の流れてゐる谷間に取り殘された。そこには木立や岩石が涼しい快い蔭をなげてゐた。それは暑さざかりの八月の日であつた。しかもこのあたりの暑さはことに烈しかつた、それに時は午後の三時であつた。そんな様々の理由から、この場所は餘計に二人を誘ひ引き寄せて、こゝでサンチョーの歸りを待つことにさせたのである。また彼等は實際待つてゐたのであつた。やがて彼等が木蔭に憩うてをると、何の樂器の調べをも藉らずして、而も美しい樂しい音色の聲が彼等の耳に聞えて來た。それを聞くと彼等は、そんな上手な歌ひ手の居りさうなところとも思はれぬ場所がらだけに、少からず驚かされたのであつた。森や野原には珍らしい佳い聲をもつた羊飼ひたちが居ることがあるといふことはよく聞く話ではあるが、それは事實といふよりは寧ろ詩人天來の空想である。またその聞えてくる歌が鄙びた羊飼ひの唄ではなくて、垢脫けのした氣の利いた都人の歌であると氣がついて、彼等は尚更驚いた。そしてその歌は次のやうなものであつたから、彼等のさう感じたのも尤もであつた——

幸福を求むるを、無益と思はするは何ならん？
　轉�chu ゆゑ。
安樂の希望をば、棄てよといふは何ならん？
　嫉妬ゆゑ。
心がかりの苦しさを、胸にうゝるは何ならん？
　逢はぬゆゑ。
さらばわれ、何處にたより歎きをば
救はれんとは求むべき？
逢ひ見ぬと、嫉妬と、さげすみとのゆゑに
希望はすべて亡せにしを。
かゝるわが悲しみのもとの起りは何ならん？
　それは戀。
わが榮譽をばいつも憎むは何ならん？
　それは運。
苦しみの赦しは何處より來るならん？
　それは天。

さらば、われ、たゞ待ちて
是非なき運に打たれんのみ。
戀、運、天のこの三つが、
打ち揃ひわれを惱ます上からは。

救ひを得るにはいかにすべき
　死あるのみ。
穗に出づる戀のよろこび末はいかに
　心變りよ。
あゝさらば心の悲しみを癒やすは何？
　發狂よ。
さらば憂ひを癒やすべき
すべを求むるもおろかのわざのみ
そは何處にと尋ね見よ、
心變りか、發狂か、死ぬてふことにありと答へん。

時刻といひ、夏の季節といひ、淋しい場所といひ、その歌ひ手の聲や技倆といひ、すべてのものがこの二人の聞き手達に驚きと喜びとを與へた。彼等はもつと何か聞きたいものと尙待つてゐた。けれども、やゝ暫らく沈默がつゞくのを見て、彼等はあれほどの良い聲で歌つた音樂者を捜しに行かうと決心した。しかし丁度彼等がさうしようとしてゐる途端に、同じ聲が起つた。その聲はまたもや彼等の耳に響いてかう歌つた——

聖き友情よ、汝がみ空なるふる里を
求めて空へ昇り行き、聖者にまじり
高き御座に着きし時
自が姿は下界に殘して
その上に自が面被をかけんとこそ汝は思ひしなれ。
その面被もて折りにふれ僞善は、
汝が姿をばよそひつゝ、人眼を欺き、
その卑しさを、美德のごとく輝かしく見えしむ。。
友情よ、下界へ歸り來れかし、さもなくば
今「僞り」の纏ひ居る汝が制服をば取り返せ、
僞りは、その衣をば力にて、誠心を屠りたり。
汝を僞り裝へる假面を汝が手に剝がざらば、
世はまたも劫初の亂れの時のごとく
爭ひの餌となりなまし。

その歌は深い溜息を以て終つた。二人の聞き手はその歌ひ手が更に歌ひ出すかと固唾を飲んで再び耳を欹てた。しかしその音樂が今や泣きじやくりとなり胸も裂くるばかり

の歎きとなつたのを見て、彼等はその聲の見ごとな溜息の哀れげなその不仕合せな人は一體何者であらうか、それを見屆けようと決心した。そして彼等がまだ幾らも行かず、やつと一つの岩角を廻ると、サンチョーが彼等にカルデニオの物語をして聞かせた時に彼等に話したのと同じ顏付や容貌の男を見出したのである。その男は、彼等を見ても別に吃驚した樣子も見せず、初め不意に二人が出て來た時にちらと一と目見たばかりで、それからは眼をあげて彼等を見ようともせず、想ひに耽る人の如く顏を胸の上に垂れてぢつとして立つてゐた。牧師補は、既に話によつてこの男の不幸のことも容貌のことも知つてゐたので、言葉上手の人であつたから、その側に進み寄つて、口數少いしんみりした言葉で、こんな慘めな生活をして居れば、こゝで果てるかも知れないし、さうなれば不幸中の最大不幸であるから早くかういふ生活は止めるようにと賴んだり勸めたりしたのである。カルデニオはこの時は、屢々正氣を喪はしめる發狂の發作に襲はれずに正氣でゐたので、この山中で常に見慣れた人々とは違つた風裝をして居る二人の人を見ると、多少の驚きを現はさずには居られなかつた。殊に彼等が自分の事を、さもよく知つてをるかのやうに（牧師補の言葉がさういふ風に思はせたので）、話すのを聞いた時には尙更さうであつた。そこで彼はかう答へた、『貴方がたは、どなた樣かは存じませんがお聞き下さい。善人に助けを與へ、また屢々惡人にも助けを與へ給ふ神樣は、この人里離れた邊鄙の土地にも拘らず私の爲めに、一體私はそれに與かる價値はありませんが、大勢の人々を遣はされます。そしてその人々はかういふ生活を私が致してをるのが間違つて居るといふことをいろ〳〵有力な議論によつて示され、此處よりももつとよい隱れ家へ私を連れて行かうとなさいます。然しその人達は私の知つてをることを知つてをりません、即ち若しも私がこの不仕合せから遁れるならば今度はもつとひどい別の不仕合せに陷るでせうし、恐らく人々は私を心の弱い者と思ふか、それとも、もつと惡くすれば正氣のない男と思ひませう。それにまた、私自身の不幸を思ひ起せば、身も世もない程に强く深く感じるのは自分でも知つてをりますから、時には我れ知らず何の覺えも感じもない石塊のやうになるのは別に不思議ではありますまい。そしてそれを眞實に私が感ずるやうになるのは、恐ろしい發作に襲はれてゐる間に私の仕出來した事の證據を聞かされたり突き付けられたりする時でございます。私に出來ますこと

は只、徒らに我が身の上を歎き、空しく我が運命を呪ひ、そして、私の狂氣の顚末を物語つて、それを聞きたいと思うて下さる方々に愬へるだけでございます。その顚末を聞かれたら、道理を辨へ居る人なら誰一人私の今の始末を不思議とは思はれぬからです。そして聞いた人々は私を助けて呉れることは出來ないまでも、せめて私を責めることだけはしますまい。また私の氣違ひ沙汰を厭に思はれたのも、私の悲しみに對する憐れみと變りませう。そこで貴方がた、もし貴方がたの此處へ來られたおつもりが、今まで來られた人々のと同じことでありますなら、貴方がたの御賢明な御議論をお進めなさる前に、私の數限りない不幸の物語をお聞きになつて下されたいのです。私の物語をお聞きになれば、多分私の悲しみはとても慰められるものでないとお分りになつて、無駄なお骨折りはなさらずにすむかと思ふからでございます。』

聞き手は二人とも彼の惱みの原因を彼自身の口から聞くことをこの上もなく願うて居たので、彼の望み通り、何の氣休めも慰めも言ひ出さぬといふ約束で、その物語を話して聞かせるように頼んだ。そこでこの不幸な紳士は、三四日前ドン・キホーテや山羊飼ひに話したのと殆ど同じ言葉や話しぶりで、その悲しい物語を始めた。あの時は、この物語に既に記して置いた通り、エリサバット先生のことやドン・キホーテが嚴密に騎士道の掟を守るといふことで、その話は未完のまゝになつて居たのである。しかし今度は幸ひに氣違ひの發作が遠のいてゐたので、終りまで語ることが出來た。そしてドン・フェルナンドーが『ゴールのアマディス』の巻の中で見出だした手紙の事件に及ぶと、カルデニオは、その手紙を完全に記憶してをるが、それは次のやうであると言つた——

ルシンダよりカルデニオへ

日にまし御許樣の貴さを發見いたし候につけ、ますます高く御許樣を仰ぎまゐらせざる可からざるの已むを得ざることゝ相成申候。もし御許樣にして妾の名譽を損ねたまふことなく此の已むを得ざることより妾を免れしめんと思し召し候はゞ、そはいと容易くおはし候ことゝ存じ參らせ候。妾の父は御許樣を御存知いたし居り、また妾をもいと〳〵愛し居り候。また御許樣にして仰せの如くまた妾の信じ參らせ候如く、妾をいとほしく思召し候はゞ、父は妾の心には些かの抑壓をも加ふることなく、御許樣の御申し出なさるべきこと

ども差し許し呉れ候こと〳〵存じ參らせ候。

『この手紙によつて、先きお話ししました通り、私はルシンダを私の妻として求める氣になりました。またドン・フェルナンドーが彼女を當代の最も愼み深く賢明な婦人の一人と思ふやうになつたのもこの手紙によつてゞありました。又この手紙は、私の結婚問題が事實となつて現はれる前に私を亡ぼす目論見をあの男に思ひ付かせたものです。私はドン・フェルナンドーに殘らず話しました。ルシンダの父親は私の父から彼女を申し受けに行くのを待つてゐるのだが、私は父がその事に贊成しなからうと氣遣ふから、父にはそれを匂はせも得せずにゐる。それは父がルシンダの身分や性質や婦德や美しさを十分に知つてゐないからとか、又あの女の品性はスペインのどんな家柄に持つて行つても名譽であるといふことを知つてゐないからといふわけではない。只父はリカルドー公爵が私に對してどういふお扱ひを遊ばすか、それの分らぬ内に急いで私が結婚することを好まなんだことを私は知つて居るからであると。つまり、私は右に申す面倒な點や、その外私にははつきり分つては居らぬけれど何やら私の願つてをる事はとても事實となつて來さうにもないと思はれるやうな、いろ〳〵の私を尻込みさせるやうな事柄の爲めに、この事を父親にまだよう打ち明けぬといふことをフェルナンドーに話したのです。この一伍一什を聞いてドン・フェルナンドーは、自分が引き受けて私の父にも打ち明けてやらうし、又父にルシンダの父親へ話し込むやうに勸めてもやらうと答へました。あの野心深いマリウス！（紀元前二世紀頃のローマの將軍）あの慘酷なカティリン！（同上、ローマの執政官）あの姦惡なシルラ！（同上、ローマの政治家）あの背德漢ガネロン！（ロランドにわざわざ裏切つた人）あの執念深いジュリアン！（十一世紀頃のスペインの反逆者）あの強慾なユダ！（私怨の爲めにアラビア人の侵入軍をヒ國スペインに導き入れし人）慘酷な執念深い、二た心ある反逆人、心の祕密と悦びとを、さほどまでも打ち明けてお前に見せたこの哀れな奴は、何處に一點忠誠に反いたことをしたか？　どういふ罪を私が犯したか？　お前の名譽や幸福を進めることを目的とせぬやうなどんなことを、私が言うたり勸めたりしたぞ？　しかしあゝ〳〵、何で私は愚痴をこぼすのぢや？　禍が星から湧く時は、地上のどういふ力を以てしても、人間の如何なる工夫を以てしても、それを途中で遮つて來させぬやうにすることの出來ぬやうな狂猛な激烈な力で空から我々の上に落ちかゝつて來るのは確かなことぢや。高貴の

生れの紳士で聰明で、私の忠勤を忝けながつて居たあのドン・フェルナンドーが、自分が愛情をかける程の戀の獲物は殘らず手に入れることの出來るあの人が、世間でいふやうに私のものにさへまだなつてをらぬだつた一匹の牝羊の子を私から盜み取るまでに魔がさすとは、誰が考へられませうぞ？　しかしこんな無用な無益な思ひ出はさて措きまして、私の不幸な物語の絲口をつなぎませう。

『さても、それから、ドン・フェルナンドーは、私が居れば自分の不實非道な計畫を遂げる邪魔だと思つて、六匹の馬の代金を請け取りにやるといふ口實の下に、私をその兄さんのところへ遣ることに定めました。その馬は、自分のおそろしい計畫を都合よく運ぶために私を留守にさせようといふ唯一の目的から、丁度私の父へ例のことを話してやるというたその日にわざ〳〵買ひ込む約定をしたのです。そしてその代金を取りに私に行つて貰ひたいと言ひました。この裏切りを私が覺れましたらうか？　何かの手蔓で私がそれを邪推することが出來ましたらうか？　いや〳〵それどころか、私はその良い買物の整うたのを滿足に思うて、すぐさま大喜びで出發しようと申しました。その晩私はルシンダと話をして、ドン・フェルナンドーと打ち合せのしてあることや、私らの立派な正しい願ひが叶ふといふ強い望みを持つて居ることなどを語りました。私と同じくルシンダも、ドン・フェルナンドーが裏切らうなどとは疑ひもしませなんだので、私たち二人の望みの成就は、私の父から彼女の父親へ申込むのが長びけば長びくだけ遲れると思うて、私に早く戻つて來るようにと申しました。それを申しますと、あの女は、その眼に涙を一杯浮べて、そしてまだまだ外に話したいことも澤山あるやうに見えましたが、どうしても咽喉に固まりがつかへて、もう一言も出ませなんだですが、そのわけは私には分りませんでした。私はいつもと違つたこの樣子に吃驚しました。そんなことはついぞ一度も見たことがなかつたのです。私たち二人が話す時はいつも幸ひにも、また私も考へて、涙や溜息や嫉妬や疑ひや心配の言葉などは混ぜないでこの上なく陽氣に晴れやかに話すことが出來たのです。私の方では、神樣があの婦人を私の思ひ人として下された幸福を讃美するばかりでありました。私はあの女の美しさを賞め、あの女の人品才智をたゝへました。彼女も私を愛する心から讃美するに足ると思うただけの私の美點を賞めてくれました。そしてその外、私たちは近所の人たちとか知り人などのさま〴〵の他

愛もないことを暗しました。それから私はありたけの勇氣を揮つて、殆んど無理無體に、二人の間を隔てゝゐた低い格子の目の容す限り、彼女の美しい白い手を取つて、そして私の脣にあてるのが高々でありました。しかし、私の出發する不幸な日の前夜は、彼女は泣いたり、歎いたり、吐息をついたりしました。そして奥へ引つ込んでしまひましたが、私はルシンダの悲歎の樣子のいかにもたゞならず懷かしげなのを見て、どうしたことかとたゞ驚いて氣も顚倒してしまひました。しかし私の希望を挫かぬやうに、その樣子は凡て私に對する愛の深い故や、また深く愛する人の感ずる別れの辛さの爲めだと思ひました。心の中には樣々の物思ひや疑ひに充たされ、しかも自分の思ひや疑ひが何であるかはよく分らずに、物悲しく氣落ちしながらもとう私は出發しました。明らかな凶兆は私を待つてゐた悲しい出來事や不仕合せを指さしてをりましたのに。

『私は差し向けられたところへ到着して、書面をドン・フェルナンドーの兄上に渡しました。すると兄上は親切に私を迎へて呉れましたが、中々急には私を還して呉れませんだ。私は氣が氣でないのに、そのお父さまの公爵の目にかからぬやうな場所で、八日の間待つて居れと命じられました。それは弟の方から、公爵に知らさずに、その金を持たしてよこして呉れるようにと手紙を書いてあつたからです。これは凡て裏切りものゝドン・フェルナンドーの謀計でありました。何故といへば、彼は直ぐさまその金を持つて私を返して貰ふ必要がなかつたからです。

『この命令は、私にはどうもそれに服從せぬやうなことになりはせぬかと思はれるものでした。それは私にはルシンダに別れて、殊にお話し申しましたやうな悲しい心で別れてから、そんなに幾日もぢつとして待つて居ることは出來ないやうに思はれたからです。けれども私は忠實な奉公人として、自分の幸福を犧牲にするやうに感じながらもその命令に從ひました。しかし四日經つてから、一人の男が一通の手紙を持つて私を尋ねて來ました。その手紙を受け取つて見ると表書によつてルシンダからと分りました。手蹟も彼女のでありましたから。彼女は近くに居る時でも餘り手紙を呉れたことがないのに、遠方に來て居るところへよこすからには、屹度何か差し迫つた重大事が起つたに違ひないと思うて、心配しながら、慌てゝそれを開きました。それを讀む前に、私はその使ひの者に、これを渡したのは誰であるか又持つて來るにどれだけ暇がかゝつたかと訊ねま

した。と、その男の言ふには、あの市の或る街路を眞午頃通つて居たら、とある窓口から非常に美しい婦人が自分を呼んで、そして眼には一杯涙を浮べて慌だしくかう言つたさうです「のう、お前様、お見かけする通りお前様がキリスト信者でござるなら、どうか後生故この手紙を寸時も早くそれに書いてある宛名の人に屆けて下さい、その所も人もよく知れてをりますから。さうして下されば神様に大變なお勤めをなさることになります。そしてそこへの往き來に不便のないやうに、このハンケチに包んであるものを取つて下さい」と。そしてその男は言ひました「その御婦人はこの手紙と一緒に窓から百リールと一つの金の指環とを包んだハンケチをよこして下されました。それもその手紙と一緒に此處に持つて居ります。さうしてから私の返事も待たずに窓際から引つ込んでしまはれました。尤もそれは私がこの手紙やハンケチを受け取つて、言ひつけられた事を果しますといふ合圖を御覽になつてからのことです。そこで私はそれを貴方に屆けるだけの骨折りの賃銀としては過ぎると思ひまして、また(貴方様、私は貴方をよく存じて居りますから)宛名書きで貴方ぢやと知りましたし、お負けにあの美しい御婦人の涙を見ては拒むわけには行きませんし、と言ふやうなところから私は誰にも頼まずに私が自分で來て手づからお渡ししませうと、これを受け取つてから十六時間の間旅をつゞけて參りました。それは貴方も御承知の通り十八リーグ(一リーグは一里餘でござります。)

『その人の善い臨時の飛脚さんが、かういふ話をしてゐる間、私は殆んど立つて居られない位に兩脚をがた〳〵顫はせてその男の言葉に聞き入りました。しかし私は手紙を開いて次のやうな文句を讀みました——

ドン・フェルナンドー様が、御許様の父上様を說き勸めわが父へ御話し入れ有之やうかねて御許様に被成候御約束は御許様の御爲めと申すよりも却つてドン・フェルナンドー様御自身の御滿足を充たすこと〳〵相成り申候。御許様、妾は御許様に申し上げねばならぬことこれあり候。そはあの方が妾を妻に御所望遊ばされ候事にて、妾の父もドン・フェルナンドー様を御許様に優る御方と思ふ心より、その緣談の御申し込みを心よく御受け申し上げ、今後二日の內に、立會人としては只上天と家內の二三の者とを立つるのみと申す程に極めて祕密にまた極めてうちわに婚姻の式をあぐるまでに相成り申し候。目下の妾の境遇を御許様自ら御思ひやり下されたく、また御許様の御歸りが如何許り急を要し

候かは御判じ下されたく候。妾が御許様を愛し候や否やはこの事の成り行きこそ證し申すべく候。願くばこの文の、一旦立てし誓ひを守らざる人の手に妾の手をば繋ぐやう強ひられぬうちに御手許に屆き候はんことを偏に念じあげまゐらせ候。

『つまりその手紙の言葉はそんなもので、その言葉は私を最早例の返事や金を待つて居らせずに直ぐさま出發させたのです。ドン・フェルナンドーが私をその兄上のところへ使ひによこしたのは、馬を買ふ爲めではなくて、自分の快樂を買ふ爲めであつたといふことがもう明白に分つたからです。ドン・フェルナンドーに對して感じた忿怒の情と、あれほど長い年月の愛や誠に依つて手に入れた獲物を失ふかも知れぬといふ心配とが一緒となつて、私に翼を貸してくれました。そこで殆ど飛ぶが如くに私はその日のうちに丁度私がルシンダといつもよく話すことにしてゐた時刻に歸りつきました。私は人に氣付かれずに着きまして、乘つて來た騾馬は、私に手紙を屆けて呉れた親切な人の家で乘り捨てました。そして今度限りの運命のおなさけで、私たち二人の戀の證人である例の格子のところでルシンダに逢ひました。彼女はすぐ私を、私は彼女を互に見とめました。しかし彼女も私もいつも逢うたときとは樣子が違うて居りました。しかし女のぐら〳〵する心や變り易い性質を測り知つたとか會得したとかと大きな口の利ける者が世の中にありませうか？　眞實一人もありません。それはさて置き、ルシンダは私を見るや否やかう言ひました、「カルデニオさん、私は花嫁の衣裳を着てゐます、そしてあの裏切りものゝドン・フェルナンドーと慾ふかい私の父は、他の立會人たちと一緒に大廣間で私を待つてゐます。あの立會人たちは私の婚禮に立ち會ふ前に、私の臨終の立會人になりませう。貴方、氣をお落しなさらずに、この犧牲の式に列なるやうにして下さいませ。もし私の言葉でその式が止められませんなら、私の隱して居る短刀が私の生命を斷つて貴方に捧げて居りました私の愛の第一の證據を貴方にお見せ申し、たくらみにたくらんだ暴虐の仕打を止めるでございませう。」と。私は返事をする暇のないことを恐れて、慌て急いで彼女に答へました、「貴女が言葉の貴女の行ひで證明して下さい。そしてもし貴女は貴女の名譽を救ふべき短刀を持つてをられるなら、私は運命が私たちに禍する場合に貴方を護衞し私を殺す爲めの劍を持つてをりますぞ。」と。

『私は彼女がこれらの言葉を殘らず聞くことは出來なかつ

たと思ひます。花婿が待つてゐたので、人々が慌だしく彼女を呼び立てるのが聞えたからです。今や、私の悲しみの夜は迫り、私の幸福の日は沈みました。私は眼の視力も心の分別も奪はれたやうに感じました。私はその家の中へ入ることも出來ねばどんな處置をも取ることが出來ませなんだ。しかしその場の出來事の前に私の居合はすといふことが如何にも大切ぢやと思ひ返して、出來るだけ自ら元氣をつけて中へ入りました。私はその出口入口は殘らずよく知つてをりましたし、その上家の中は內々ながらも總體に混雜して居ましたから一人として私を見咎める者もなかつたのです。そこで私は誰にも見られずに、大廣間の窓の凹所に身を置いて、二枚の壁掛の裾や縫ひで身をかくす機會を得ました。その壁掛の間からは、人に見露はされずに、その中の室で起ることは殘らず見ることが出來ました。そこに立つてゐた間に、私の感じた心の動亂を——私に浮んで來たさま〴〵の考へを——私の心を通つて行つた思ひを、誰が述べられませうぞ？　それは話しの出來るものでもなく、また話してよいものでもありませんでした。花婿はその室に平服のまゝ何等の飾りもなく入つて來ました。介添人としてはルシンダの從兄弟が一人一緒についてゐました。それにその家の召使どもを指いて外には一人もその室には居りませなんだ。間もなくルシンダは次の間からその母親と二人の侍女にかしづかれて、彼女の身分や容貌によく似合ふやうに着飾り、禮式の盛裝で現はれました。私は心配で氣が氣でなかつたので、あの女が何を着けて居たか仔細に見たり氣を注けたりすることは出來ませなんだ。私の見とめ得たのは只その色の深紅と純白であつたことや、彼女の被布や着物やについてゐる寶玉珠玉の煌きでありました。しかしそれも、その貴重な寶石や大廣間に立つた四つの松火の光を競負して一番輝しく光つてゐたあの女の艶々しい褐色の髮の美しさには及びませなんだ。あゝ、わが平安の怨敵なる思ひ出よ！　何故またしてもあの私が慕うた敵の類もない美しさを、私の眼の前に持つて來るのか？　無情な思ひ出よ、その後であの女がしたことを思ひ起させてくれたが却つてよいではないか？　その大それた非道の爲めに、私は今復讐こそしようとは思はぬが、せめてはこの生命を棄てたいと思ふ程に傷つけられたのぢや。貴方がた、こんな枝葉の話をお聞きになるのを厭と思うて下さいますな。一つ〳〵の出來事に澤山の言葉を使はねばならぬやうに思はれますので、私の悲しみは、小ざつぱり

と手短に話しの出來ることでもなければ、話してよいものでもないのですから。』

これに對して牧師補は、自分等は彼の話に聞き倦きて居らぬばかりか、彼の話す枝葉は決して省略されるべき種類のものではなく、本筋の話し同樣傾聽に値するものであるので非常に面白く思ふと答へたのである。

『さて、そこで(とカルデニオは續けた)、皆大廣間に集つたので監督區の牧師が入つて來ました。そして定例の儀式を行はうと新郎新婦の手を執つてから言ひました「ルシンダ孃、貴女は此處に居られるドン・フェルナンドー殿を、神聖なる母教會ローマ教會の法規に從うて貴女の正當なる夫となされますか?」私は壁掛の間から顏と頸とを出しました。そして耳を欹て胸を躍らせながらルシンダの答へに死の宣告があるか生の許可があるかと、その返答に耳をすましました。あゝ、その刹那もし私が飛び出して「ルシンダ、ルシンダ! お前の言ふことに氣をつけなさい、お前の私に負ふところを思ひなさい、お前は私のものであるから他の人のものになれないことを考へなさい。お前の「はい」と言ふ一語と同時に、私の生命の終りが來るといふことを思ふがよい。おゝ、裏切りものゝドン・フェルナンドーよ! わが光の盜人よ、わが生命の死神よ! 貴樣は何をしようとするのぢや? 何を貴樣は求めるのぢや? 貴樣はキリスト信者としては貴樣の望む物を手に入れることは出來ぬといふことを考へて見よ、ルシンダは私の妻ぢや、私はルシンダの夫ぢや!」と大聲で呶鳴りさへすればよかつたが。私は馬鹿です! 遠く危險を離れてから、自分のしなかつたことをすればよかつたと言ひます。自分の貴い寶を盜まして置いた今となつて、私が自分の不運を歎く代りに、それ丈けの勇氣さへあれば復讐の出來たその男を盜人と罵ります。つまりあの時私は臆病者で馬鹿であつたので、今恥しさに打たれ、後悔して、氣が狂うて死にかゝつてをらうとて何の不思議もないのです。

『牧師は、稍暫らく返事を控へてゐたルシンダの返事を待ち構へて居りました。そこで私は彼女が自分の名譽を守る爲めに懷劍を取り出さうとしてゐるか、それとも私の爲めに今にも事實を打ち明けようとしてあせつて居るのだと思つて居りました。丁度その途端に、私は彼女がかすかな弱弱しい聲で「はい」と言ふのを聞きました。ドン・フェルナンドーも、同じことを言ひました。そしてあの女に指環を與へ、二人はどうしても解くことの出來ない絆で繫がれたの

です。やがて花婿は花嫁を抱かうと近寄りました。するとかの女は片手を胸の上へ押しつけながら氣絶して、母親の腕に倒れかゝりました。もうこの上は、私の聞いたその承諾の言葉で私の希望は殘らず嚮られ、ルシンダの言ひ草や約束は僞りと分り、そしてその刹那望ましい獲物を取り返すことはもう永久に出來なくなつてしまつたのぢやと分つた時の、私の心持さへ申し上げればよいのです。私はぽかんとして宛ら全く神に棄てられ、私を載せてゐる大地の仇敵と呼ばれ、空氣は私の吐息の呼吸をも拒み、水は濕氣を拒んで涙さへ流させないやうに感じました。たゞ火だけは勢を集めて、私の總身を忿怒と嫉妬で燃やしました。人は殘らず、ルシンダの悶絶で上を下へと騒いで居りました。そして母親が彼女に風を入れてやらうと、その襟元を寛ろがせて居ると、緊と封をした紙が彼女のふところから出て來ました、ドン・フェルナンドーは、直ぐさまそれを取り上げて、松火の光りでそれを讀み始めました。あの男はそれを讀み終へるや否や、椅子に身をおろし、深く思ひに沈んだものゝやうに頬杖ついて、自分の花嫁の氣絶を囘復させようととつくしてゐる介抱には、何の手傳ひもしませんだ。

『家内中が混雜して居るのを見て、私は人に見付からうが見付かるまいがまゝよと、構はずに隱れ場所から出て來ました。そしてもし見付かつたら、あの裏切りものゝドン・フェルナンドーを罰する爲めに、また氣絶してゐる心變りの女をも罰する爲めに、私の胸の正しい憤怒を全世界に示すやうな何か烈しい振舞ひをしようと決心してゐたのです。しかし、私の運命は、疑ひもなくもつと大きい悲しみに、もしそんなのがあるとして、私をかけるつもりでゐたか、丁度その大切な場合には、その後の私に缺けてゐる分別を十分持たせて置いてくれるやうにしたのです。そこで私は、自分の大敵に復讐しようともせずに（復讐しようとさへすれば、あいつらは皆私を少しも氣にかけてゐなかつたから、容易に出來たかも知れなかつたが）、その復讐を私自身の上に加へよう、そしてあいつらの當然受くべき苦痛を、否あの時たとひあいつらが私に斬り殺されたとしても、それであいつらが受けるよりも恐らくもつとひどい苦痛をさへ、私自身の上に負はうと決心しました。何故といへば、刹那の苦痛は直ぐ終ります、しかし拷問で長引かされる苦痛は、生命を斷たずに絶えず殺しつゞけて居るやうなものだからです。つまり、私はその家を去つて、さつき私が騙

馬を預けた人の家へ行きました。私はその人に鞍をおいて貰つて、「左様なら」も言はずに驟馬に乗り、そして市を出ました、丁度第二のロト（ロトは舊約聖書中の人物。ソドムの天災を逃れん爲め後を顧みずして市を去つたと記されてある）のやうに顏をふり向けて見返りもようせずに。そして私は只一人ひろ〳〵した田舍へ出ると、夜の闇に包まれ、その寂寞に誘はれて人に見られたり聞かれたりする恐れも懸念もなくなり、思ふ存分自分の苦しみを吐き出さうと思ひました。そこで私は沈默を破つて聲を張りあげてルシンダとドン・フェルナンドーを呪ひました。それで以てあいつらが私に加へた罪科の仕返しが出來でもするやうに。私は彼女を無情ぢやの、恩知らずぢやの、嘘吐きぢやの、わがまゝ勝手ぢやのと呼びましたが、取り分け、私の敵の財產があの女の愛情の眼をくらまして、その愛情を私から取り去つて、私よりもつと寬大に潤澤に仕合せを受けてをる男の方へ向けたのですから、あの女を慾ばりぢやと呼びました。しかしさうやつて喚きちらして惡口を言うてゐる最中にも私は彼女をかばふ心が起つて、兩親の家に閉ぢ籠められて、いつも兩親に從ふやうにと敎へこまれしつけられた若い娘が、兩親があんな身分の高い金持の名門の婿がねを持てとすゝめた時に、その兩親の望みに立ちどころに從ふといふに不思議はない、またもしそれを拒みでもしたことなら、正氣の沙汰でないと思はれるか、それとも他に心を許してをるといふ自分の操や名譽を傷ける疑ひを受けるに違ひあるまいと言ひました。しかしまたかうも言ひました、もし彼女が、私を自分の夫ぢやと明らさまに言うてしまつたら、兩親とて彼女が私を選んだのをさう選びそこなひとは思はずに、却つて、それを許したらう、何故と言へば、ドン・フェルナンドーが申し込まなんだ以前には、もし兩親の望みが道理に叶うたものであつたとすれば、自分等の娘の望ましい婿としては私に越した者は望むことが出來なかつたからである、そしてあの女も、その手を與へるといふ最後の運命をきめる段取りに行かぬ前に、私の手を既に受けて居りますと、何でもなく言はれた筈である、私が出て行つてあの女の言ふことは何處までもその通り貫かせてやつたらうから。つまり結着するところ、弱い愛情と淺い思慮と大きな野心と高い身分を欲しがるのと、さういふものが、私の堅い希望や、清い愛情に力づけられ助けられて出た言葉を、彼女に忘れさせ、そして私を瞞させたのである。

かういふ風に獨り言ちながら、興奮して、私はその夜の

殘りの時間を旅しつゞけました。そして夜明けにこの連山の中の一筋の小徑に辿りつきましたが、路も小徑もないこの山中を三日の間さまよひ廻つて、遂に一つの草原へ出ました、それはこの山のどつち側にあるのか私は知りません。その草原で私は或る牧者にこの山脈の一番嶮しいところほどの方角かと訊ねました。牧者等は、今居ります此處らがさうぢやと教へました、そこで私は此處で生命を果たさうと思つて直ぐさまこゝへ進んで來ました。しかしこゝらの嶮しい巖間を歩いて居る間に、私の騾馬は疲れや餓の爲めに斃れました。それとも私のやうなつまらぬ荷物を運ぶのを止めよう爲めであつたと言うた方がよいかも知れません。私は徒歩にされてしまひ、疲れ果て、飢ゑかつゑ、私を助ける人もなければ、助けを求める考へも起りませなんだ。さういふ風で私は地べたに打つ倒れてゐたら、どれ程經つてからか分らんが、やがて飢ゑは癒えて起き上りました。すると私の傍には四五人の山羊飼ひが居りました。この人たちは疑もなく私の困窮を救うてくれた人です。その人々の話では、私は倒れて、確かに正氣を失うた者と思はれるやうな譫言を言うて居つたさうです。そしてそれ以來、私はいつも正氣で居るわけでなく、時には自分の着物を引き裂いたり、こゝらの淋しい所で大聲に泣いたり、自分の運命を呪うたり、私の敵であるあの女の懷かしい名前を徒らに呼んだりして、ひたすら悲歎にくれて自分の命を斷たうとするやうな、いろ〳〵さま〴〵の氣違ひじみたことをやり出す程に氣が狂うて正氣を失うて居るといふことは、自分でもちやんと知つてをります。そして正氣に戻つた時には、もう身動きも出來ぬほどに疲れて弱り果てゝ居るのが分ります。私の住居は大體いつも、この淺ましい身體を藏ふに足るほどの大きな栓の樹の洞穴です。この山中にしば〳〵やつて來る羊飼ひどもや山羊飼ひどもは、可哀さうと思うて、私に食ひ物を當てがうて呉れますが、それを大抵私が通りかゝつて見付けるだらうと思はれるやうな道端とか岩の上などへ置いて行きます。さういふ風で、私はたとひ正氣を失うて居る時でも、餓じうなれば、自然自分の生命を支へるに入り用なものが分りまして、それを欲しがり、それを取らうとあせります。私が路へ跳び出して羊飼ひらが村から山の小屋へ運んで行く食ひ物を、彼等は喜んで呉れるのに、力づくで奪ひ取るといふことを、この間も私が正氣で居る時を見かけて羊飼ひどもは話してくれました。かうして私は殘つて居るこの淺ましい生命をば、

神様の御意で果てるまでは、それから私の記憶からルシンダの美しさも裏切りも又ドン・フェルナンドーの犯した罪も消え去るまでは、續けて參ります。若しその事が生命のある内に出來るやうでありましたら私の心は今少し良い方に向きませう。若しそれが出來なんだら、私の力では神様の十分なお慈悲を祈り求めるばかりです。私自身としては、自ら進んで入つたこの窮境から身を脫する權能も力もあるとは思はぬからでございます。

『貴方がた、これが私の不幸の悲しい物語でございます。これが今御覽になつたよりももつと落ち着いた調子で話せるものでせうか？　貴方がたは、私を救ふに役立つらしいと道理上思はれるやうなことを、私に强ひたり押し付けたりするやうな面倒はなさいますな。それは丁度名醫の調合した藥も、それを飮まうとせぬ病人には効能のない程にしか、私には效能がないからです。私はルシンダなくては健康を望みません。そして、彼女が私のものであり、またあらねばならぬのに、彼女の好みで、他人のものになつたのですから、私が幸福を享けてよいのに、不幸の餌食となるのは、私の好みに任せて下さい。彼女は自分の移り氣で、私の破滅を取り返しのつかぬものにすることを骨折りました。私は身を亡ぼすやうにして彼女の望みを充たすやうに骨折りませう。そして殘らずの不仕合せな人々が有り餘るほど有つて居るものを、私だけは奪はれたのだといふことが末代までも分りませう。不仕合せな人々には慰められることは出來ぬといふことが、取りも直さず一つの慰めです。しかし私に取つては、慰めといふものはます〳〵大きな悲しみや苦しみの原因なのです。それは私が死んでからさへも、その悲しみや苦しみは終らぬであらうと思ふからです。』

こゝでカルデニオの、不幸と愛とに充ちた長い議論や物語は終りを告げた。しかし牧師補か彼に何か慰めの言葉を言ひかけようとして居ると、丁度その時、その耳に達した一つの聲に依つてそれを遮られた。その聲は憂鬱な調子で、この物語の第四篇で述べられることを言つた。丁度ここで賢人にして慧敏なる歷史家たるシード・ハーメット・ベネンジェリは第三篇を完結せしめてゐるからである。

第四篇

第二十八章　は同じ連山に於いて牧師補と理髪師の上にふりかゝつた奇異なる面白き冒険を説く。

最も勇壯なるラ・マンチャの騎士ドン・キホーテが、この世に遺はされた頃は、日出度く幸福な時代であつた。蓋し彼が、長く失はれて殆んど消滅してゐた武者修行制度を再び世に蘇へらせ恢復させようといふやうな、そのやうな立派な決心をしたが爲めに、我々は輕い娯樂に極めて乏しいこの今の時代に於いて、實に彼の眞實なる物語の妙味を味ふばかりでなく、またこの物語の中に含まれたさま〴〵の小話や挿話をも味ふからである。その小話や挿話も大抵、この物語の本文に劣らず、面白く巧妙にして眞實である。この物語は、梳き分けられ、紡ぎ合はされ、織込まれた挿話の絲を再び繰り出して記して言ふやう、牧師補が丁度カルデニオに慰めの言葉を言はうとして居る時に悲しげな調子で次のやうに言ふ聲が耳に入つて、彼は言葉を遮られたのである。

『あゝ！　このやうにいや〳〵ながら持ちこたへて居るこの身體といふ物憂い重荷の人知れぬ墓場となるやうな場所をば、見付け出したとはほんとのことであらうか？　この山々の寂しい樣子が瞞かしでないのなら、それはほんたうぢや。あゝ！　情けない！　私の心のまゝに神樣、この不仕合せを訴へさせるこの岩や叢との交際こそ、人間の交際よりもどれほど私の心には嬉しからう。世の中には一人として疑ひを露らし悲しみを慰め、また艱難を救うて貰へる人はないからぢや。』

これはすべて牧師補や彼と一緒に居た人々によつてはつきりと聞かれた。そしてその聲の出どころは、實際さうであつた通りすぐ近くのやうに思はれたので、彼等はその話し手を見付けようと立ち上つた。彼等は二十歩と行かないうちに、一つの岩蔭の栓皮の根元に腰をおろしてゐる、百姓の裝をした一人の若者を見出した。丁度その途端に若者は前を流れてをる小川に兩足を浸けながら前屈みになつてゐたので、彼等にはその顏を見ることは出來なかつた。彼等は極めて靜かに近付いたので、一心に足を洗うてゐた若者は彼等に氣がつかなかつた。その足は、小川の石塊の間につゝまれた光り動く二本の水晶と見られる程に美しかつた。その足の白さと美しさは彼等を吃驚させた。それがそ

の足の持主の風采から推測されるやうに、土塊を砕いたり鋤や牡牛の後に喰つついて行つたりする爲め作られた百姓の足とは思はれなかつたからである。そこで、自分等が氣附かれて居ないのを幸ひ、眞先きに立つてゐた牧師補はあとの二人に、そこらに轉がつてゐた岩蔭に身を隱すやうに目配せした。二人は隱れて、一體この若者は何をしようとしてをるのかとじつと見戍つてゐた。若者は廣い二重裾のある鼠色のジャケットを白木綿で身體にしつくりと卷きつけてゐた。それにまた鼠色の木綿のズボンや甲掛けをはめて、頭には鼠色の木綿帽（旅行帽に似た拵へで、中部スペインの農夫の被るもの）を被つてゐた。そして彼は、まるで純白な雪花石膏で作られたやうに見える脛の中程まで甲掛けをたぐりあげてゐたのである。

若者はその美しい足を洗ひ終ると直ぐ、木綿帽の下から取り出した手拭でそれを拭いた。その手拭を取り出す時、彼はその顏を上げた。そして彼を見戍つてゐた人々はその途端に非常な美貌を見たのである。それでカルデニオは小聲で牧師補に『これはルシンダでないからには人間ではないうて神さまです。』と言つたほどであつた。

若者はやがて木綿帽を脫ぎ去つた。そしてその頭を左右に振つて、太陽の光線さへも羨みさうな房々した髮を解き亂した。これによつて彼等は一農夫と見えたこの若者が可愛らしい女、否三人中の二人の眼にはまだ夢でも見たことのない絶世の美人であることを知つた。カルデニオも後でルシンダの美しさのみがこれに比べられると斷言したから、彼の眼にすら若しルシンダを見知つてゐなかつたら、やはりさう見えたのである。その長い褐色の豐かな髮は彼女の兩肩を蔽ふばかりか、剩へその房で兩足の外悉く全身を見えぬやうに隱したほどに長くて豐かであつた。彼女はやがてその手を櫛代りに使つた。もしその足が水中の水晶のかけらと見えたとすれば、その手はその髮の毛の中に吹き込まれた雪片とも見えたのである。それは悉く、この三人の見物の感歎の思ひを募らせたのみならず、また彼女が何人であるかを知りたいといふ心を募らせたのである。この目的を懷いて彼等はそこに立ち現はれようと決した。すると、彼等の立ち上りしなに立てた物音で、その美しい少女は顏を上げ、そして顏の眞中から兩手で髮を二つに掻き分けつゝ、その首を立てたのは誰かと見やつた。そして彼等を見とめるや否や跳り上つて、靴を穿く暇もなく、慌ててその傍に置いてゐた衣類やうの包みを引つ抱へ、驚き怖れて、一生懸命に逃げ出した。然し、彼女のか弱い足は石

塊のとげ〳〵しさに得堪へずして、六歩とは進まないうちに地べたに倒れた。それを見て三人は彼女の方へ走りよつた。そして牧師補は眞先に彼女へ言葉をかけて言つた、『どなたかは知りませんが、お嬢さん、まア、お待ちなさい。此處に御覽になる人々はたゞ貴女のお役に立ちたいと思うて居るばつかりですからの。さうむやみにお逃げなさるには及びません。それは貴女の足も堪へられんし、又私たちもさうはさせませんからの。』

彼女は吃驚してどきまぎして、その言葉には返事もしなかつた。しかし彼等は彼女の側に來た。牧師補は彼女の手を取つて言ひつゞけた、『お嬢さん、あなたの着物が隱してをるものを、あなたの髪が私たちに知らせましたのぢや。そのお美貌をばこんな不似合な扮裝でお隱しなさつて、こんな淋しいところへ來られるのは、よく〳〵の事からぢやと明かに讀まれますが、幸ひ此處で私たちがお會ひ申したからには、たとひ貴女の悲しみを取り去つて上げることは出來ずとも、せめて慰めてでも差し上げたい。どのやうな悲しみでも、生命を奪うてしまはん限りは、好意からの慰めに耳を貸すことも出來ぬほどに、人を痛めつけるものでもたければ、そんなに極端なところまで行くものでもありませんからな。そこで、お嬢さん、いや貴女、となり何なり、貴女のお好み通りでようございますが、私たちが立ち現はれて來た爲めの御心配なら御無用になさつて、あなたの幸不幸いづれなり私たちに打ち明けて下されませ。私たち一同からか、それとも私たちの銘々からか、貴女の御難儀に對して御同情をいたしませうから。』

牧師補がかう話して居る間、この姿を奪してゐる少女は宛ら村の土百姓が今まで一度も見たこともない不思議なものを突然見せられた時のやうに彼等を見詰めて、脣も開かず、一語も出さず、呪文で縛られたやうに突つ立つてゐた。しかし牧師補が尚言葉を進めて、彼女にその身分を訊ねたので、彼女は深き吐息をつきながら沈默を破つて言つた、『人里離れたこの深山も身を隱すことが出來ませず、また亂れた髪を見られましては口先きで嘘を言はれもしませんから、もうこの上作り飾りを申し上げて、貴方がたにたゞお義理に信じて戴きますやうなことは、たとひそれが出來るにしても、無駄なことでござりませう。さう言ふわけですから、皆樣がた、貴方がたの折角のお言葉は有難くお禮を申します。そして私へのお訊ねには喜んでお答へ致します。尤も申し上げようと思ひます私の不仕合せのかず〳〵

は、とてもそれを癒やす術や緩める慰めなどはなか〳〵思ひつかれはしませんから、皆様から大層同情して頂きますとともに、御心配をもかけますことかと氣遣はれます。とは申しながら、もはや皆様がたに女の身と見露はされ、それに若い身でたつた一人、こんな淋しいところにかういふ裝で、つまりそれらのことを一緒に考へて見ても、別々に考へて見ても、どのやうな美名をも十分傷けるだけの様々の事柄をお目にかけましたからには、どうか私の貞操を皆様の心に疑念として殘したうないと思ひますから、私が今まで出來ることならどうか祕密にして置きたいと思うてをりましたことも、お話し申さねばならぬと存じます。』

いよ〳〵美しい婦人であると分つた彼女は、以上のやうなことを何の躊躇もなく、美しい聲ですら〳〵と述べたので、彼等はその美しさに恍惚りしたと同じやうに、彼女の才氣にも魅せられたのであつた。そして彼等は再び自分等の申し出を繰返し、そして彼女の今の約束を果たして呉れるやうに賴んだ。そこで彼女はもうその上催促を受けないで、先づしとやかに兩足を包み、また髮を束ねて、一つの石に腰をおろし、三人をその周りに坐らせた。そして兩眼にせき上げる涙を努めて抑へて、はつきりと落ちついた聲で、その物語を次のやうに始めた——

『このアンダルシア州に一つの町があつて、その町から稱號を受けて、所謂スペインの名門の一人となつて居る公爵があります。この華族には二人の子息がありまして、長男の方は公爵の後取りで人品も父君のやうに立派らしうございます。次男の方は誰の後取りですか、大方ヴェリドーの二心とガネロンの僞りの後取りでございませう。私の兩親はこの公爵の部下で、身分の卑しい者です。しかし非常の金持ちで、もし家筋にも富と並ぶほどに厚く惠まれて居りましたら、兩親はもうその上に何の望むところもありませんし、また私としても現在のやうな苦勞をする譯はなかつたのでございます。私の不仕合せは兩親が貴族の家柄でなかつた爲めに起つたと申してもよろしいからでございます。尤も私の兩親とて自分等の地位を恥ぢねばならぬほど卑しいものではございません。しかし又私の不幸が兩親の生れの低いところから起つたのぢやといふ心の傷を私から取り去つて呉れるほどに高いものでもございません。つまり兩親は、農夫で、平らの平民で、由緒のある血筋の跡もなく、諺に申します古錆びたキリスト信者「さびたといふ原語は何にでも喩へられる言葉で、盥肉や

酒やに譬えて言ふと、長く保存して特に味を帯びたといふ意味となる

でござります。しかし財産もあつてゆたかに暮しの立つところから、家柄でも身分でもおひ〳〵貴族と見られるやうになつたほど富んでをりました。兩親はその財産のことや家柄のことよりも私を娘に持つて居るのを一番の誇りとして居りました。そして兩親にはその後取りになる他の子供がありませんなんだので、また子煩惱でありましたので、私は世にも深く兩親にあまやかされた娘の一人でござりました。

『私は兩親が自分の姿を見る鏡で、老の杖で、また神の御旨に從うて、その望みを殘らず集めた的でありました。そして私も兩親のありがたさを知つて居りましたので、私の心も兩親の心に反きませんでした。私は兩親の心の主でありましたやうにまた兩親の財産の主でありました。私を通じて、兩親はその雇人を雇ひ入れたり暇をやつたりしました。蒔かれる種子も收穫れられる實も私の手を通じて出し入れしました。油搾車も、酒藏り臺も、羊や山羊の群の勘定も、蜜蜂の巢も、一口に申せば、私の父のやうな富裕な農夫の持つても居れば持つことの出來ます程のものは、殘らず私が取り締りを致しまして、自分の口では申し上げ兼ねる程に、私の方では熟心に、兩親の方では滿足するやうに、執事兼女主人として働きました。私は羊飼ひや頭男日傭取りなどへ必要な言ひ附けを言ひ渡して了ひますと、後は暇になりますので、若い娘子として致してよろしいところか是非入り用な仕事を、針や縫ひとりの座蒲團や絲車の仕事をして過しました。そして氣晴らしに暫くさういふ仕事を止しては、信仰の書物を讀んだり竪琴を奏でたりして娛しみました。音樂が氣苦勞を安め元氣を恢復させるといふことは、今までにも覺えがあつたからです。兩親の家での私の暮しはかういふ風でござりました。そして私がこんなに細々と連べ立てましたのは、自慢の爲めでもなければ、私の富んで居るのをお知らせする爲めでもござりません。たゞどうか貴方がたへ、私には何の落度もないのに、今申し上げたやうな仕合せな境遇から御覽の通りの慘めな有樣に陷つたといふことを知つて頂きたいばつかりでござります。本當に私は修道院に居るやうに引き籠つて、また自分のつもりでは家の召使ひの外の人には誰にも見られずに(それは、私は聖餐祭ローマ教會で行ふ儀式に出るのにも朝早く行き、それに母親や女中等にちやんと連れられて、また自分の眼でやつと自分の踏んで行く脚下だけしか見えない程に深く面被に顏をかくして恥かしがつて居りました)、そんな忙

しい暮しを續けてをりました、それにも拘らず戀の眼は、いゝえもつと何合はしく申せば、山猫の眼も及ばぬほどのやくざな眼が、ドン・フェルナンドーの執心の力で、私を見付けました。それが先程お話し申した公爵の御次男の名前でござります。』

そこで話し手がドン・フェルナンドーの名を言ふや否や、カルデニオは顔色を變へて汗を流し、非常に興奮したらしく見えたので、それを牧師補と理髪師とは、彼に時々襲うて來ると聞き及んでゐる氣違ひの發作が、またもや、やつて來るのではないかと氣遣つた。しかしカルデニオは、この女は誰であらうかと思ひ出したので、その百姓娘をまじまじと見据ゑつゝ、それ以上の激昂も示さず靜かにしてゐたのであつた。けれども、彼女はカルデニオの興奮に氣も附かず、自分の物語を續けて、話し出した——

『ドン・フェルナンドーの眼が私を見付け出すか出さないに、あの人は後で白狀しましたやうに、もう私に對する劇しい戀に打たれました。それは明らかに人目につくやうになりました。しかし私の悲しみの數々を長々と讀み立てるのを端折りまして、私はドン・フェルナンドーがその思ひを私に打ち明ける爲めに用ゐたさま〴〵の手管は申し上げずに置きませう。あの人は私の家中の者に賄賂を使ひました。また私の兩親へも贈り物や遣ひ物をしました。毎日々々家の前の街路はお祝ひかお祭のやうでありました。夜になれば音樂で誰も眠れませなんだ。始終私の手へとゞきました戀文は、それがどうして屆いたかは誰も知りませなんだが、數へもきれぬ程で、どれにも只の文字よりも約束や誓ひの文字の方が多くて、如何にも優しい口説きや誓言に充たされてをりました。そのやうなものは幾らあつても私の心をやさしくさせるどころか、却つて、あの人を私の一生の敵でもあるやうに思はせ、また私を從はさうとてあの人の爲すことすることは皆裏へらの心からされてでも居るやうに、ます〳〵あの人に對して私の心をつれなくさせました。ドン・フェルナンドーの生れの良い樣子が厭らしかつたといふでもなく、またその口説きが頓はしうなつたといふのでもありません。私は自分があのやうに身分の高い紳士からそれ程に求められ尊ばれて居ると思へば何となく滿足にも思はれました。また(私たちは、どんなに醜うても、自分を美しいと褒められゝばいつも嬉しいやうに思はれます

から)、あの人の手紙の中にある褒め言葉を見ては悪い心持はしませなんだ。しかし私の道徳心は、もう既にドン・フェルナンドーの心組を——あの人はそれが世間に知られても飽り憚りませなんだので——明かに感附いてゐましたし、また私の兩親の度々の戒めも、それには反對でございました。兩親は自分等の面目も名譽もたゞ私の操と正義とに賴ることぢやと申しまして、ドン・フェルナンドーと私との身分の違ひを篤と考へよと言ひ附けました。その事からして私には、あの人の志は、たとひ口ではその反對のことを言はれたにしましても、私の爲めを思ふよりも、只御自分の快樂の爲めぢやと判斷せられたのでございます。そして兩親は「お前が若しあの方の道理に反いた緣談の邪魔をして貰ひたいと願ふなら、すぐさま誰なりとお前の好きな人を選んで緣付けて上げませう、この町の主だつた人たちの中からでも、またこの町の近所の人たちの中からでも」と申しました。兩親の富と私の評判のお蔭で、どこからでも對手は見付かりさうでございましたからです。この勸めや、兩親の分別ある戒めは私の決心を強めました、そして、ドン・フェルナンドーに向つてはその願ひの叶ふらしく少しでも望みをかけさせるやうな答へは一ことも與へませなんだ。

『この私の用心は、それをあの人は羞恥の爲めと取つたに相違ございませんが、それがあの人の淫らな慾を——あの人が私に對する戀情を私はさう名づけますが、その慾をそり立てることになつたらしいのでございます。若しあの人の思ひが、あの人の口で誓うたやうなものでございましたなら、皆樣は今その事を御承知にはなりませなんだでせう。それは、それをお話し申す折がありますまいからです。とう〳〵あの人は私の兩親が私を緣付けて、あの人に私を手に入れる望みを絕たせようと思つて居る、少くも私を見張る番人を增さうと思うて居るのを聞き知りました。そしてこの知らせや懸念の爲めに、あの人は次にお話ししますやうなことを仕出かしました。或る晚、私は一人の侍女とたつた二人きりで、少しの不注意から自分の名譽を犯されないやうに戶締りを嚴重にして私の部屋に居りました時、どうしてそんな事が起つたのか分りもせねば考へられもしませんが、これ程に奧まつた用心堅固な物音もない私の居間の中で、あの人が私の前に突つ立つてをるではございませんか。その姿を見て私は吃驚してしまひまして、眼も見えず言葉も出ませなんだ。私には聲一つ立てる力もありませなんだし、またあの人も私に聲を立てる暇を與へなん

だやうに思ひます(私はすつかり氣を呑まれて、ほんとに自分を護る力も持ちませなんだので)。あの人はづか〳〵と私に近寄つて來まして、私を兩腕に抱いて、嘘がどうしてかうまでに眞實らしく見えるやうに飾り立てられるものか分らぬ程に、いろ〳〵口說き初めたのでござります。そしてこの嘘吐きは自分の言葉を眞實と見せるやうに淚を流し、自分の眞實心一現はすやうに吐息をつくといふやうな手管をつくしました。

『まだ年の行かぬ者で、家のひとり娘で、そんなことには慣れない私は、どうしてか自分でも分りませんが、その數數の嘘の言ひ草を眞實と思ひだしました。尤もあの人の淚や吐息ではたゞ無垢な憐れみの情だけしか動かされませなんだが。さう言ふ風で、初めの當惑した心は消えて、幾らか我れに返りまして、我れながらよくこんな勇氣があつたと思ふ位に私は言ひました、「貴方さま、私は只今貴方の兩腕に摑まれて居りますから、言はゞ私は恐ろしい獅子の爪に摑まれてをるので、此處を逃れるにはどうしても私の貞操に取つけるやうな行ひか言葉かによらねばかなはぬ破目になつてをりますが、行ひにせよ言葉にせよ、今までのことが悪かつた筈はないのですから、それに反いたことをすることは出來ません。それですから、もし貴方が私の身體を貴方の腕にしつかり摑まへておいでなさるなら、私は貴方のと全く違つた操を守る心から自分の靈魂をしつかりと抱き締めて居りませう。それは貴方がその汚れたお心を無理に果たさうとなされゝばお分りになることです。私は貴方の御家來の身ではござりますが、奴隷ではありません。貴方の高貴な御身分も、この卑しい私の身分を汚したり墮したりなさる權利はなく、またない筈です。私は現在この通りの卑しい生れの百姓ではありますが、殿樣で紳士でおいでなさる貴方さまと同じやうに、自分を敬ふ心をもつてをりまする。私には、貴方の手荒い手籠めもお役に立てません。貴方の財産も壓力とはなりません。貴方のお言葉も私を瞞すことは出來ますまいし、また貴方の淚も吐息も私を懷けることは出來ますまい。こんなものゝうちのどれかが、兩親に夫として許されたその人にあることなら、私はその人の意のまゝになつて、私の意をその人の意に從へませう。たとひ私のすき嫌ひの心は滿足しませずとも私の貞操が清く保たれゝば、今貴方が手籠めで奪はうとなさるそのものを私は喜んで自分の夫に捧げませう。私がかう申しますのは、私の夫でない人はとても私から何一つ取ること

は出來ぬとどうか貴方に御承知を願ひたい爲めでござります。」するとあの不實な紳士は申しました「たゞそれだけでお前が躊躇してをるのなら、世にも美しいドロテアよ、これがこの不幸なる女の名前であつた、さア私の手をお前に上げよう。そしてその前に何ものも隱れることの出來ぬ上天と、お前が此處にもつてをる聖母の像をこの誓約の證人に立てませう。」と。』

カルデニオは彼女がドロテアといふ名前であると言ふのを聞くと、更に興奮の色を現はした。そして自分がさつきからさうではないかと思つてゐたことが眞實であつたと思つた。しかし彼はその物語を遮ることを好まなかつたし、また既に殆んど知り盡して居るのだが、その前後を聞きたかつたので、たゞかう言つた、『えゝ！　貴女、貴女のお名前はドロテアさんですか？　私は貴女の不仕合せに大方劣らぬほどの同じ名前の別人のことを聞きましたよ。しかしお話を進めて下さい。おひ〳〵私も貴女をお驚かせ申したりまた貴女の御同情をお起させ申したりするやうなことをお話しするかも知れません。』

ドロテアはカルデニオの言葉にも亦彼の異樣なむさ苦しい身裝にも驚かされた。そしてもし彼が自分のことに就いて何か知つて居るのなら、直ぐに聞かせて呉れるやうにと頼んだ。蓋し運命が若し彼女にまだ何等かの祝福を殘して呉れてゐるとすれば、それは如何なる禍ひが自分の上にふりかゝつて來ようとも、それに堪へ得るだけの勇氣があることであつた。彼女はこれまで既に自分の堪へ忍んだ苦しみに多少でも加へることの出來るやうなことはないと自分の心に固く信じて居たからである。

『お嬢さん、若しやと私が疑うて居ることが眞實なら、私の思ふことを貴女にお話しする折を脫がしたくありません。しかしまだ今までのお話では其處まで進んでも居りませんし、それに又私の考へを貴女にお知らせする大した必要もありません。』とカルデニオは答へた。

『まアそれはどちらとも。私のお話をすゝめませう。』とドロテアは答へた——

『ドン・フェルナンドーは部屋に立てゝありました一つの聖像を取つて私等の婚約の證人として置きました。そして本當にのつびきならぬ言葉や非常な誓ひをたてゝ私の夫になると約束しました。尤も私はあの人のその誓ひの終らぬ

ちに、よく〳〵御自分のなさることをお考へなされてまたお父様が家來の一ちの百姓娘づれと結婚したのをお知りになれば御立腹なさるといふこともよくお考へなさるやうにと申しました。私はあの人にたゞこれしきの私の美貌で眼をくらましてはいけません、それでは貴方のお間違ひの言ひ譯には足りませんからと申しました。それから若しあの人が私を愛して何か私に親切をしたいと思はれるのなら、私の身分相應の相手に、私の運の向くまゝに打任せておいて下さいとも申しました。こんなに釣合はぬ結婚はとても仕合せに納まるものでもなし、また始めの喜びは長くつゞくものではございませんからです。

『今繰返したことは殘らず、それにまだ今思ひ出すことの出來ぬやうないろ〳〵のことも申しました。けれどもあの人の思ひを飜へさせる力はありませなんだ。拂ひをしようと思はぬ人は、買ひ入れの約定をす　時の面倒には氣を揉みません。それと同時に私は心の中で手短にこの事柄を思ひ回らしてかう考へました、「結婚のお蔭で卑しい身分から高い身分へ昇るのは私が初めてゞはあるまいし、また美貌の爲めに、もつと適切に言へば、向う見ずの執着の爲めに自分の身分よりも下の者と連れ添ふやうになつた人はドン・フェルナンドーが最初でもあるまい。それならば私は何も新しい慣例や風習を始めるのでもないから、幸ひと與へられるこの譽を、出來るだけわがものとしてもよからう。私に對するこの人の好みがよしんばその願ひの遂げられると共に消えたとしたところで、やはり私は神樣の御前ではこの方の妻であるもの。それに、若し私が嘲り罵つてこの人を撥ねのけようとしたとても、この人は恥も外聞も構はずに私を手籠めにする氣でをるのは分つてゐる、そして私は辱めを受けたまゝで、私がかういふ破目に立ち至つたのは私の罪ではないといふことを知らぬ人々に、私の清淨潔白を明かし立てる手段もないことになるであらう。何故といへば、どんなに言葉を盡して言ひわけをしたとて、私の兩親や他の人々は、この紳士が私の承諾なしにこの部屋へ入つたとはよもや信じはすまいから、」と。

『かういふ問答は、瞬く間に私の心に浮びました。けれどドン・フェルナンドーの誓言や、あの人が證人に立てた聖像や、あの人の流した涙や、また最後にはあの人の人品や氣高い樣子、それにさま〴〵の本當の愛情のしるしが添はつて、私のよりもつとおぼこな內氣な心でも容易く捕へられさうなものが取り分け私を動かして、知らず識らず身の破

滅に導いて行つたのでござります。私は天にまします證人の外に地上の證人もほしいと思ひ、私の侍女を呼びました。ドン・フェルナンドーは再びその誓言を新に繰り返し、證人として前にあげたのに加へてまた別の聖者を呼びかけ、これから後もしも自分が誓約を破りでもしようものならかうだと言うて、自分の上に數百度の呪詛を呼びおろし、更にまた涙を流し、吐息を重ね、そして私をひしと抱きしめました。そしてその手から私をどうしても離しませなんだ。さう言ふ風で侍女には行つてしまはれ、私は獨りになり、そしてあの人は嘯吐きとなり、誓言破りとなりました。

『私の不仕合せのあつた晩の次の日は、ドン・フェルナンドーが願うた程に、早くは來なんだと思ひます。何故と言へば、情慾はその目的を達してしまへば、その快樂の席から逃げ出すのが一番の快樂でござりますから。とさう申しますのは、ドン・フェルナンドーは大急ぎで私の側から離れて行かうとしまして、私の侍女(これが全くあの人を部屋に伴れこんだのでござりますが)、それの氣轉で夜の明けぬ前に街路へ出たのです。しかしあの人は私に別れしなに、來た時ほど眞劍でも熱心でもありませなんだが、自分の信實心に賴つてわが誓言の神聖と眞實とに安心してをるやうにと私に申しました。そしてその言葉を確かめる爲めに、自分の指から立派な指環を抜き取つて私の指へはめて呉れました。そしてあの人は立ち去り私は後に殘つて、悲しいのか嬉しいのか自分でも分りませなんだ。たゞ私は、その出來事の爲めに、心をかき亂され惱まされ殆ど當惑してしまひました。そして私は、私の部屋へドン・フェルナンドーを置しておいたその侍女の裏切りの罪を責める元氣もなければ、さうしようといふ氣も起りませなんだ。まだ私は身の上にふりかゝつた事が善か惡か決めることが出來ませなんだからです。ドン・フェルナンドーに別れる時に、私はかう申しました、私はもう貴方のものでござりますから、貴方の御都合でこの事を世間へ公けになさるまでは、かういふ風にしていつの夜も遭ひに來て下さるようにと。けれども、その次の晩の外は、それつきりもう來ませなんだ。それのみか一と月餘りもあの人は街路へも會堂へも少しも姿を見せませなんだ。私の方ではあの人を一と目見たいと思ひに窶れてをりましたのに。けれども私はあの人が市の中に居て、あの人の大好きな娯樂の狩りをしに、大方毎日出かけるといふことは聞いて居りました。その頃の毎日毎時間がどんなに私には悲しく佗びしかつたか、それはよう覺

えて居ります。日が經つにつれて疑ひ始め、ドン・フェルナンドーの信實を信ぜぬやうになつたのをよう私は覺えて居ります。また私の侍女がその大それた事の爲めに、それまで聞いたことのない叱言を聞いたといふことも、また私の兩親から何故さうふさいで居やるのぢやと訊ねられて嘘の返事を無理やりに捧へ上げねばならぬやうなことのないようにと、淚も顏の色も無理に抑へて居られねばならなんだことを覺えて居ります。けれともそれも俄におしまひになりました。そんな樣々の工夫も何にもならぬことになつて、名譽も何も問うて居られぬ時が來ましたからです。私の辛抱が負けて私の心の祕密が廣く世間に知れ渡る時が來ましたからです。そのわけはかうでござります――その後四五日經つと市に噂が立ちまして、ドン・フェルナンドーが隣り市で或る非常に美しい娘と結婚をしたと申すのでした。その娘は持參金の多い爲めそんな立派な花婿を搜し當てたと言ふほどに金持ちではなけれど、その兩親は歷々の方だと聞きました。また噂によるとその娘さんの名はルシンダと言うて、またその婚禮の時何か變つたことが起つたとも申すことでした。』

カルデニオはルシンダの名を聞いた。しかしたゞ肩をすぼめ、脣を嚙み、眉をひそめたばかりであつた。そしてやがてその兩眼から二た筋の淚をおとした。けれどもドロテアは自分の物語を中絕させずにかう語りつゞけた――

『この悲しい消息が私の耳に入りました。すると私の心は冷たくなつてしまふことか、却つて激しく火のやうに怒りに燃え、私を犧牲にしたその不實と裏切りとを高聲に喚き立て明らさまに言ひふらしながら街路へ飛び出すことを、もう〳〵抑へかねました。けれどもこの取り逆上せた憤りは、やがて一つの固い決心でせき留められました。それをその晩に果たしましたが、それはこの着物を着ることでありました。この着物は私の父の下男、農家で申します作男の一人から手に入れました。私はその男に自分の不仕合せを殘らず打ち明けて、そして私の敵の居ると聞いて居りました町まで私を連れて行つて呉れるように賴みました。その下男は私の大それたやり方を諫めて私の決心を咎めはしましたものゝ、私の一生懸命になつて居るのを見ますと、下男は世界の果てまでもお供いたしませうとさう申しました。私は直ぐさま臙の枕袋の中に婦人の着物を一枚と、それ

からまさかの時の用意にと幾らかの寶石やお金を入れました。そして寂靜まつた深夜に裏切つた侍女には知らさずに、例の下男と限りない心配とを供にして、家から出かけました。そしてその町を指して徒歩で歩き出しました。けれども、私がすでに仕出來させたことは取り返しがつかぬまでも、せめてはドン・フェルナンドーがどんな心でそれを仕出來したかそれを聞かうと思ひまして、その町へ行きたい一念から丁度襲でも生えたやうにして參りました。私は二日半かゝつて目指すところへ着きました。そして町に入つてからルシンダの兩親の住居を人に訊ねました。私が訊ねかけた第一番の人が私の聞かうと思うて居らなんだことまで答へて呉れました。その人は私にその家を教へた上に、その娘の婚禮の席で起つたといふ、最早この市では町のあらゆる閑人たちの噂に上つて居る位る評判になつて居る事件を殘らず話して呉れました。その人の申しますには——ドン・フェルナンドーとルシンダの婚禮の時、ルシンダは「はい」と言うてあの男の花嫁になると承諾するかしないかに矢庭に氣絶しかゝりました。そして花婿が近寄つて風を通してやらうとその女の着物をあけてやりますと、懐ろから女の自筆で書いた手紙が出て來ました。その中には、私はすでにカルデニオの花嫁でありますからドン・フェルナンドーの花嫁にはなれませんと、ちやんと明らかに書いて居りました。カルデニオといふ人は、私にその話をして呉れた人の言ふところでは同じ町で知れ渡つた紳士ださうでござります。それに又あの女がドン・フェルナンドーを承諾したのは、只その兩親に從ふ爲めばかりからぢやさうです。その人の話では、つまりその女は婚禮が濟めば自殺するといふことや、またさうする理由などを、その書付に明らかに記して居りましたさうです。そのことは、その女の着物のどこかに懐劍を隱して持つてをつたのが見付かつたので、いよ〳〵本當と思はれたさうでござります。これを見てドン・フェルナンドーは、ルシンダが自分を馬鹿にし輕んじ侮つたのぢやと思ひ込んで、その女がまだ正氣も附かぬうちに打ちかゝつて、その見付かつた懐劍で突き刺さうと致しました。もし兩親や居合はせた人々がそれを遮らなんだなら、やり終せたでござりませう。それからまた噂によれば、ドン・フェルナンドーは直ぐさま何處へか行つてしまひ、そしてルシンダはその翌日まで正氣に返りませなんだ。しかし正氣に返ると、自分は貞操にあのカルデニオの花嫁であると兩親に言うたさうでござります。それに噂で

は、カルデニオもその婚禮の席に出て居つたさうでござります。しかしルシンダが、自分の豫想に反いて婚禮するのを見て、あの人は、その女が自分にし向けた非道や、また自分は再び人に會はぬやうなところへ行くといふ考へやを手紙に書き遺して、絶望してあの町を出たと申します。この事件は、あの町ではもう大變な評判で、到る處その噂でござりました。取り分けルシンダが親の家にもその町にも見えなくなつたといふことが知れ渡つた時には大變でござりました。それはルシンダの行方が知れぬといふので、その娘を捜す手段もなく途方に暮れた兩親が亂心してしまうたからでござります。そんなことを聞いて私の希望は甦へりました。そしてドン・フェルナンドーが結婚して居らぬのを喜びました。それは私の悲しみにも慰めの戸口がまだ全くは閉ざされて居らぬと思はれましたし、また神樣は多分ドン・フェルナンドーに前の結婚に對する務めをば守らせ、キリスト信者としてすべて肉身のことよりも魂のことを思はねばならぬといふことを考へさせようとて、この二度目の結婚に邪魔をお入れなされたのぢやと思ひましたからでござります。こんなことが殘らず私の心に浮びました。そして私は、今では厭はしいこの生命を生きながらへて行かうといふ遠いかすかな希望に釣られて、慰めのない我が身を慰めようと努めました。

『しかし私はドン・フェルナンドーを見付けることが出來ませなんだので、どうしてよいか分らずに市に居ります間に、布令歩き屋が私を見付けた者には大層なお禮を出すと言うて、私の年齡から着物まで仔細にふれ廻つて居るのを聞きました。そしてまた私が伴れて居ります若者が私を父の家から伴れ出したのぢやと言はれて居るのを聞きました。私の評判がどんなに下落して居りまするかはこれでも分りますので、私は胸を斷たれる思ひでありました、私とても逃亡しましたからには評判をおとす位では濟みますまいが、それでも誰と逃げたかを言うて貰はねばなりません。そしてそんなに卑しいつまらぬ者ぢやと言ふのですもの。私はその布令歩きを聞きますと、もう私に對する忠義の心のぐらついて來て居りましたその下男をつれまして、直ぐその町を去りました。そして見付かるのが恐さに、その夜私たちはこの連山のうちの一番林の深いところへ入り込みました。しかし、凶事に凶事を招き一つの不幸の終りはとかく更に大きな不幸の始めになりがちぢやとよく諺にも申しますやうに、私もさういふ事になりました。それまでは中々忠義

で頼みになりましたその大事な下男が、この淋しいところに私を連れて來ますと、私の容貌からと言ふよりもあれの卑しい心に騙られまして、人里離れた此處でこそと折りを目がけて、恥もなければ神樣も恐れず、また私をも侮つて私に言ひよりました。そして、そのづう〳〵しい申し出に相當のきつい言葉で私が答へてやりますと、あれは初に使うて居つた口說きの言葉を止めまして、手籠めにしようと致しました。けれども、善心を守り助け給ふに疎漏のない正しい神樣は、私の心をお助け下され、このかよわい力でほんの少し骨折つてあれをば崖の上から突き落しました。そしてそのまゝ打ち棄てゝ置きましたが、死んだか生きたかは存じません。それから私は、この恐れと疲れではとてもさうはと思はれる程の早足で山の中へ分け入りました。父や父の言ひ附けで私を捜しに來る追手の者から脫れたいといふ考へばかりで。さう思うてこゝへ參りましてからもう幾月になりますか分りません。こゝへ參りましてから私は、この連山の一番奥の或る處で一人の羊飼ひの下男として雇はれました。それから私は只今思はずも私の正體を見露はされるやうになりましたこの髮の毛を隱す爲めに、成るべくいつも家の外に居るやうにして、ずつとその羊飼ひの下男として奉公して居りました。しかし私の心配も骨折りも全く無駄でござりました。その主人が私を男子ではないと見破つて、さつきの下男のやうな卑しい心を懷くやうになりましたからです。そして幸運は、いつも困難な場合の救ひになつて呉れるといふではありませんし、又私が下男を突き落した時のやうに、この主人を突き落して、その煩惱を癒やしてやるやうな崖や峽間もすぐ手近にはなかつたものですから、私の力を試して主人と爭うて見ようよりも、そこから逃げてまたもやこの岩間に身を隱した方が上分別と思ひました。そこで今申しました通り、再び私はどこか身を匿す場所を探しに行きました。其處で吐息と涙で神樣へ、この不仕合せを憐れんで下さりませ、この不仕合せから免れる助けと力を授けて下さるか、さもなければ、自分の落度の故でもないのに、國内でも外國でも話の種となつて罵られるやうな事になつた不仕合せな者の跡形ものこさずに、この淋しい山中で私を死なして下さるようにとお祈りすることの出來ますやうに。』

第二十九章　は戀に傷けられたる我等の騎士を、自ら課したる烈しき

苦行より救ひ出さん爲めに用ゐられたる滑稽なる手段方法に就いて說く。

『皆さんがた、これが私の悲しい不仕合せの本當のお話でございます。貴方がたがお聞きなさつた吐息や、歎きや、わたしの眼から流れる涙には、たとひもつと心行くまで恥つたとて、無理か無理でなからうか、貴方がたの方で判斷して下さりませ。そしてもし貴方がたが私の不仕合せをよう考へて下されましたら、その悲みを癒やすすべはないほどに、慰めても無益ぢやとお分りになりませう。たゞ皆樣がたにお願ひしますのは、追手の者から見付けられる心配や懸念に煩はされずに暮して行けますところを敎へて頂きたいので、それは皆樣にはおやさしい何でもないことでございます。私の兩親は大層私を可愛がつてをりますから必ず私をやさしく迎へて呉れることとは思ひますものゝ、兩親が私に限つては間違ひのないことと信じて居りました淸淨潔白を失ひながら顏を會はせるかと思ひますと、なまじひそんな思ひをして兩親の顏を見るよりも未來永劫この身を隱して眼にとまらぬ方がましぢやと思ふほどに恥しう存じます。』

かう言つて彼女は口を噤んだ。彼女の顏に擴がつた色は、その心に感ずる苦痛と恥とを明かに示した、聽き手等もその銘々の心の中に彼女の不幸を憫れみ且つ驚いた。しかし丁度牧師補が何か慰めや忠吉を彼女に持ち出さうとしてゐた途端に、カルデニオは先を越して言つた、

『お孃さん、それでは、貴女があの金滿家のクレナルドーさんの一人娘の、容貌よしのドロテアさんですか？』ドロテアは自分の父の名前を聞き、それを言うた人の見すぼらしい風裝を見て吃驚した。カルデニオが如何にむさ苦しい着物を着てゐたかは既に述べたところである。そこで彼女は彼に言つた、『貴方は一體どなたでせう、私の父の名をよう御存じのやうでございますが？　私の覺え違ひでなければ、私の不仕合せのお話の中では父の名前は申しませなんだのですが。』

『お孃さん、私こそ貴女が先程仰有つた通り、あのルシンダが自分の夫ぢやと言ひふらしました、その不仕合せな男ですよ。』とカルデニオは答へた、『私があの不仕合せなカルデニオです。この私こそ貴女を今の有樣にさせたその同じ男の惡事のために、御覽の通りのこの有樣になり下り、

跣足で、襤褸を着て、人間の樂しみは悉く失ひ、それどころか正氣まで失つて居ります。私はたゞ神さまの御心次第でもよいとの間正氣に返るだけです。ドロテアさん、あのドン・フェルナンドーの惡事を見屆け、ルシンダが、自らあの男の花嫁ぢやと言うて「はい」と言ふのを聞いて居つたのは私です。彼女の氣絶のおしまひがどうなつたか、またその懷中から出た書付がどういふことになつたかを、見るだけの勇氣を持たなんだのは、この私です。私の心は、一度にあんな澤山の不運の打擊を堪へる力がありませなんだ。それで、もう堪へ切れずにあの家から飛び出して、私の知人に一通の手紙を渡して、それをルシンダの手に屆けて呉れるように賴んで置いて、自分の怨敵のやうに憎らしかつたこの生命を此處で果たさうと決心して、この山中へやつて來ました。しかし運命は、多分私を貴女に回りあはせるといふ仕合せを私に取つて置いて呉れるとて、たゞ私の正氣を取り上げるだけで滿足して生命を捨てさせようとはしませなんだ。もし貴女のたつた今仰有つたことが本當だとしますと、私はそれを本當と信じますが、まだ〳〵神樣は私たちが思うて居るよりももつと仕合せな結末をこの不幸の後につけようと私たち二人の爲めに善へてござるやらも知れませんからな。ルシンダは、自分で明らさまに申したやうに私のものですから、ドン・フェルナンドーと結婚は出來ず、またドン・フェルナンドーも貴女のものなので彼女と結婚は出來ぬといふことを思へば、私たち銘々のものゝ神樣が銘々へ返して下さるであらうと望みのは、無理ぢやありますまいからな。まだどちらも生きて居つてあの世へ行つても居らねば死んでも居らんのですから、そしてこんなことを心やりに思ふのも、何も夢のやうな望みや他愛もない想像から湧いて來たのぢやありませんから、どうかお孃さん、私もさうする積りなのですから貴女ももつと氣を落ちつけて新たに決心をなさつて、先き〳〵もつと仕合せな運を待つやうになさいませよ。私は紳士たりキリスト信者たることにかけて誓ひます、ドン・フェルナンドーが貴女のものになるのを見るまでは、貴女を決してお見捨て申しは致しません。またもし私がドン・フェルナンドーを說いて貴女に對する義理を認めさすことが出來ませなんだら、その時こそは紳士たる私の身分が與へてくれる權利を利用してあの人が貴女に加へた辱めの爲め一立派な筋を立てゝ果し合ひを申し込みませう。私自身に受けた非道は、その仕返へしを神樣にお任せして置いて、この世にある間私はたゞ

貴女の受けられた辱めの爲めに身を捧げます。』

カルデニオの言葉はドロテアをすつかり驚かせてしまつた。そしてそんな申し出に對して、どう禮を言つてよいか分らないので、彼女は彼の足を接吻しようとした。しかしカルデニオは、それを許さなかつた。そこで牧師補は二人に答へて、カルデニオの分別ある考へを褒めた。そして最初に彼等二人は自分と一緒に自分の村へ來て、そこで二人の入用な物を調へ、且つドン・フェルナンドーを捜す方法をとるか、或はドロテアをその兩親の許へ歸らすか、でなければ一番上分別と思はれることをするやうにと、頼みつ、勸めつ、說きつしたのである。カルデニオもドロテアも彼に感謝して、その親切な申し出を受け容れた。それに今までこの一伍一什を耳を濟まして默つて聞いてゐた理髮師はまた理髮師で、何か親切な言葉を言つて、牧師補に劣らぬほどの好意から、二人の者の役に立つことなら何なり力を盡さうと言ひ出した。彼はまた彼等に自分たちが此處にやつて來た目的や、ドン・キホーテの狂氣の質の變つて居ることや、またドン・キホーテを捜しに行つてゐるその家來の歸りを待つて居る事などを手短かに說明した。夢の思ひ出のやうに、ドン・キホーテとの爭ひのことがカルデニオの記憶に甦へつて來たので、彼はそれを人々に話してきかせた。しかしその言ひ爭ひの起りは何であつたか、それはどうしても言へなかつた。

丁度この時彼等は一と聲叫び聲を聞いた。それはサンチョー・パンザの聲と分つた。サンチョーは彼等を置いて行つた場所を見失つたので、大聲で彼等を呼んでゐたのである。彼等はサンチョーを迎ひに行つた。ドン・キホーテのことを訊ねられてサンチョーは、彼がシャツ一枚になつて痩せて黃色くなつて、飢ゑて半分死にかゝつてゐながら、その意中の婦人ドゥルシネアを慕うて吐息をついてゐることや、また自分は、彼がその場所を捨てゝドゥルシネアの待ちこがれてゐるエル・トボソォへ來るようにといふ姫の命令であつたと言つたけれど、彼はかの婦人の寵愛を受けるに足るほどの手柄をした上でなうてはあの美しい人の前には出ない決心であると答へた、といふことなどを話した。そしてサンチョーの言ふには、もしこのまゝで行けば、旦那樣はひよつとすると、どうしてもならねばならん皇帝樣にならつしやることは愚か、その一番なり易い筈の大僧正樣にさへなれないかも知れぬ、それぢやから、どうか旦那樣をあすこから連れ出す工夫を考へて下されと。牧師補は、無理にも連れ

出してやるから決して心配するなと答へた。そして彼はカルデニオとドロテアとに向つて、ドン・キホーテを癒やす爲めに、またともかくも彼をその故郷へ連れ歸る爲めに、自分等の目論んでゐることを話して聞かせた。するとドロテアは、その「悲歎に暮れた少女」を、床屋さんよりも自分の方が上手に出來ませうと言つた。殊に彼女は、その役を本物らしく演れるやうな衣裳をこゝに持つて居るし、それに又彼女は、澤山武勇傳を讀んで居るので、苦しめられた婦人等が、武者修行者の情を求める樣子は精しく知つてゐるので、今度の計畫を實行するに必要なことは一點一劃も洩度なく、大丈夫演ずることが出來ようと言つた。

『さういふことなら、疑ひもなく幸運は私等の味方をして居りますから何はともあれ早速仕事に取りかゝりませう。思ひがけなく貴女にも慰めの戸口が開きかけましたし、私たちの目的にも道が滑らかになつて來ましたからな。』と牧師補は言つた。

そこでドロテアは自分の枕袋の中から、何か立派な地で出來た一揃ひの下袴や、何か別の精巧な地の綠色のマントを取り出し、別の小箱からは襟飾やその他の飾りを取り出し、そしてそれ等の品で忽ち身分の高い立派な婦人らしく見えるやうにと身支度を整へた。こんな品物やその他のものを、彼女はまさかの場合の爲めにと、家を出る時持つて來たのであつたが、これまではまだ一度もそれを使ふ折がなかつた、と彼女は言つた。彼等は皆、その上品さしとやかさ美しさに非常に心を牽かれ、このやうな可愛い人を捨てるとはドン・フェルナンドーも隨分眼の見えぬ男だと言つた。しかし彼女を最も賞讃したのはサンチョー・パンザであつた。彼には生れ落ちてこの方まだ一度もこんな可愛らしい人を見たことがないと(またそれは全くさうであつたが)思はれたのである。そして彼は非常に熱心に、一體この美しい姫君は誰であつて、この人里離れたところで何をなさるのかと牧師補に訊ねた。

『この美しい姫君こそは、のうサンチョー、』と牧師補は言つた、『このお方こそ卽ち、あの大ミコミコン國(アフリカにあるさいふ國)の正系の御代とりの姫君で、お前の主人に一つお頼みがあつて尋ね搜してお出でになつたのぢや。そのお頼みといふのは或る惡い巨人がこの姫君に加へた非道惡事の仕返しをして欲しいといふことぢや。そしてお前の主人が遠く廣く轟かしたえらい騎士といふ名前を慕うて、この姫君はギニア(アフリカの地名)からはるゝ〳〵尋ねてござつたのぢや。』

『捜し方も運が好い、見付け方も運が好い！』とサンチョ・パンザはそれを聞いて言つた、『私の旦那が運好うてその悪者に仕返しして、その非道を直して、そして貴方様の言はつしやるその大男の畜生野郎を殺してもなさりや尚のことでござりますわい。全くそいつが幻でさへなけりや私の旦那は出會ひ次第殺しますわい。私の旦那は幻にかいつちやアから駄目でござりますでなア。ぢやが先生様、貴方様に一つ取りわけてお願ひ申し上げますがの、私の旦那が大僧正にならうといふやうな氣を起さつしやりはせんかと心配しますで、そんな事のないやうに、直ぐさまこのお姫様と旦那様と婚禮さつしやるやうに貴方様から勸めて下さりませんかい。さうなりや、もう旦那は大僧正の位を取ることは出來んから、易々と御自分の天下をとらつしやらうし、さうなりア私の願ひも叶ふのでござりますからの。私アその事をつく〳〵考へましたがの、やつぱりどう考へても旦那様が大僧正にならつしやるのは私の爲めになるまいと思ひますのぢや、何故でも私は學ア持つとりますから御本山にや不向きでござりますからの。それに、女房も子供も持つとりますし私ぢやから、もう早や御本山の儲け役の勤まる特別免許を手に入れようとしたとて、無駄な骨折りでござりますからの。そこで、貴方様、このお姫様と――私はこのお方様のお名前を承知しとりませんからお名前を申し上げることが出來ませんので――私の旦那様とを手早く夫婦にするに限りますわい。』

『このお方はミコミコナ姫と仰有るのぢや、何故といふにその御領國がミコミコンぢやで、それがお名前になるのは明白なことぢやからの。』と牧師補は言つた。

『そりやそれに相違ござりません、』とサンチョは答へた、『生れどころから名前や稱號をつけて、アルカラのペドローとかウーベダのジュアンとかヴラドリッドのデイーゴーなどと名乘つて居る人を私は澤山知つとりますからの。さうして又ギュアあたりでも女王様かたはやつぱり同じやうにそのお國の名を取つて自分の名前になれませうでなア。』

『さうであらうよ、』と牧師補は言つた、『またお前の主人の結婚のことに就いては私の力の及ぶ限り骨を折ることにしよわい。』それを聞いてサンチョは非常に喜んだ、牧師補は彼の愚直さや、また彼が主人の妄想にかぶれてゐるのを見て驚いたのである。それはサンチョは主人が今に皇帝になると明らかに信じてゐたからであつた。

もうこの時はドロテアは牧師補の騾馬に乘つてゐたし、

理髪師はその顔に例の牡牛の尻尾の髯を當てがつてゐた。そして今や彼等はサンチョーを威めて、お前の主人が皇帝になるのは全くあの人が私らをそれと氣附かぬといふことによるのだから、知り合ひの牧師補たとも理髪師とも主人には言はぬやうにせよと言ひ含めて、ドン・キホーテの居る處へ案内せよと言つた。しかし、牧師補もカルデニオも彼等と一緒に行くには當らないと思つた。カルデニオはドン・キホーテにこの間の爭ひを思ひ出させることを氣遣ひ、また牧師補はまだ今といふ今は自分が出るに及ばぬので、自分等二人は徒歩でそろ〳〵後からついて行くから、お前さんたちは先へ行つて下されと言つた。牧師補はドロテアにいろ〳〵仕草を教へる事を忘れなかつた、しかしドロテアは、萬事は武勇傳の中に書いてある通りに遣りますから、皆樣御安心なさるやうにと云つた。

彼等は一里半ばかり行つてから、岩石の荒地にドン・キホーテを見出した。この時はもう彼は着物はつけてゐたがまだ鎧は着てゐなかつた。ドロテアは彼を見て、これがドン・キホーテだとサンチョーに言はれると、自分の乘馬に鞭をあてた。長い髯の理髪師は彼につゞいた。そしてドン・キホーテの側に來ると、その家來は騾馬から降りて彼女を助け降さうと近寄つた。彼女はひらりと騾馬からおりて、ドン・キホーテの足許に行つて跪づいた。ドン・キホーテは彼女を起ち上らせようとしたけれども、彼女は立ち上らずにかういふ風に物を言ひかけた、『おゝ猛く勇ましき騎士さまよ、貴方が御滯切御厚意からわたしのお願ひを聞き届けて下さりますまでは、この場所から起き上りは致しません。そのお願ひと申しますのは、貴方の御面目御高名を添へますことで、またこの日の下に二人となき寄るべない憐める少女の助けとなることでござります。もし貴方の強い御武力が貴方の朽ちぬ名前に添ふほどのものならば、貴方の御高名を曇うて海山隔てた異國から災難の御助力を仰がうとて參りましたこの憐れな者をお救ひたさらねばなりませぬかと存じます。』

『美しい姫君よ　貴女がその地べたからお起ち上りにならぬ内は、拙者は一言もお答へ致しますまい。また貴女のお身にかゝはつたことはこの上何事も承りますまい。』とドン・キホーテは答へた。

『貴方樣、貴方が先づ私のお願ひをお許し下さいませねば私は起き上りは致しません。』とその憐める少女は答へた。

『それは承知仕りました。』とドン・キホーテは言つた、『も

しそのお頼みが拙者の王道や、王國や、拙者の心と自由とに鍵を持ちをる婦人などに對する損傷若くば不利益でない限りは、御承引して宜しうございます。』

『それはさういふものに對して損傷にも不利益にもならぬことでござります、貴方さま、』と惱める少女は答へた。そしてこの時サンチョー・パンザは主人の耳の側へ寄つて、極めて低い聲で囁いた、『貴方樣はこの方のお頼みを聞き屆けておやんなさつても大丈夫でござりますよ。そりや何でもないことで、たゞ巨い大男を一匹殺すだけのことでござりますわい。そしてこの頼みに來とるお方は、これこそエテオピアの大ミコミコン王國の女王樣で、ミコミコナ姫君殿下でござりますぞい。』

『たとへ如何なるお方であらうと、拙者は拙者の守る騎士道に從つて、なすべき義務のあるところと、拙者の本心の命ずるところを致すのぢや。』とドン・キホーテは答へた。そしてその少女に向き直つて言つた、『どうぞ、美しい姫君、お起ち上り下されませ、お頼みのことはお聞き容れ申しませうほどに。』

『それではお言葉にあまえまして、』と少女は言つた、『寛大無量の貴方樣に、すぐさま私の御案內致しますところへ御一緒に來て頂きたう存じます。そして又貴方樣が、天地の掟に背いてわたしの王國を横領しましたあの謀反人に私の仇を打つて下さるまでは、どのやうな冒險にも探索にもお取りかゝりなさらぬと約束して下さるようにお願ひ致します。』

『重ねて申しますがそれは承知しました。』とドン・キホーテは答へた、『そこで、姫君、もう今日からは貴女を惱ますその憂ひを振り捨てゝ、消えかゝる希望に新しい生命と力とをお與へなされませ。如何に双向ふ極惡人があらうとも神の助けと拙者が武力の助けによつて、貴女は間もなく御自身の王國にお歸りなされて、由緒ある强大な領土の玉座へお坐りになりませう。諺にも言ふ通り、遲滯のうちにはやゝもすれば危險ありぢや、さア早速に取りかゝりませう。』

惱める少女は非常に執拗く彼の手を接吻せうとした。しかし萬事にかけて垢脫けのした上品な騎士であるドン・キホーテは決してそれを許さなかつた。それのみか却つて彼は非常に禮儀厚く鄭重に彼女を起して抱擁した。そしてサンチョーに命じて、ロシナンテの腹帶を檢べさせ、且つ一瞬の猶豫もなく自分に鎧を着せるようにと命じた。サンチョー

は、宛ら分捕品のやうにして木の上に懸けてあつた鎧を取り下した。そして時の間に馬の腹帯を檢べ、主人にも鎧を着せた。主人は鎧をつけてしまふや否や聲を立てゝ言つた、『このおん姫君を助けんため神の御名によつて出發いたさう。』

理髪師はこの間ぢう跪づいて、その笑ひを隱さうとて、またその髯を落すまいとて、非常に骨を折つて居た。これはその髯を落さうものなら、この立派な計畫が無駄にならうも知れないからであつた。しかし最早その賴みが聞き容れられ、そして、ドン・キホーテが早速それに應じて出發に取りかゝつたのを見て、彼も起ち上つて婦人の手を取り、そして兩手を添へて彼女を騾馬に乘せた。やがてドン・キホーテはロシナンテに打ち跨がり、理髪師は自分の騾馬に乘つた。サンチョは徒歩のまゝで行かねばならないので、今になつて自分の連錢葦毛の必要を見出し、それを失つたことを今更しみ〴〵と感じたのである。しかし今や自分の主人が潔く出發してまさに天子樣にならうとするところであると思うて、何事も快活に堪へ忍んだ。蓋し彼は少しの疑ひもなく主人がこの姫君と結婚して、少くともミコミコンの王樣になるであらうと思つたからである。たゞ彼を心配させたのは、その王國は黑ん坊の國にあると言ふことと、それから自分の家來として與へられるのは凡て黑ん坊ばかりであらうといふ考へであつた。しかしこれは直ぐさま思ひ返すことが出來、そして腹の中で思つた、『私の家來どもが黑ん坊ぢやらうが、それが私にどうしたといふのぢや？ そいつらを船荷にして、スペインへ送つてやつて、其處でそいつらを賣り飛ばして錢に代へる、さうしてその錢で何かの稱號か役目を買ひ入れて、私の一生を安樂に暮らす、たゞさうすりやよいのぢやないか？ なアお前さん、寢とぼけて居つて、さうかう言うとる隙に片づけて三千や六千や一萬の家來どもを買りとばすだけの才覺や手並が利かんやうぢや、だめですぞい！ 私はきつとあいつらを大かいのも小さいのも、私の出來るだけ追ひ立てゝ、さうしてどんなに黑うても片端から白か黃色に變へて見せう。はてまア私は何ちふ馬鹿ぢやろぞ！』こんな考へに耽つて心樂しく、徒歩で旅してをる難儀はすつかり忘れて彼はのろくさと歩み續けた。

カルデニオと牧師補とはとある叢の中からこの有樣を殘らず見てゐたが、どうしてこの一行と一緒になればよいか分らなかつた。しかし極めて工夫に富んでゐた牧師補は、

間もなく自分等の目論見を果たす方法に氣がついた。彼は自分の手箱の中から鋏を取り出して、手早くカルデニオの髯を剪り落し、自分の着てゐた鼠色の胴衣を着せ、その上に黒い上着を與へたので、自分は下着とズボンだけになつたが、カルデニオの姿は今までと打つて變つて、彼自ら鏡に映して見ても、われながら見違へるほどになつた。これをすませたので、姿を變へる間に一行の者どもは既に先きへ進んでゐたけれど、二人はやすやすと一行に先んじて國道へ出ることが出來た。彼等は乘馬の連中が徒歩の人々のやうに早く歩けないやうな荊棘や峻しい箇所を突ツきつて進んだからであつた。廳て彼等はこの連山の出口に近い平地に待つてゐた。そしてドン・キホーテとその一行がその出口から現れて來るや否や、牧師補は恰もドン・キホーテを知つて居てどうにも出せないといふ風に、まじ〳〵と仔細に檢べ出した。やゝ暫し彼を見詰めてから、兩腕をひろげてつか〳〵と彼の方へ急いで、聲高く叫んだ、『あゝこれは何と仕合せな邂逅でせう、武道の龜鑑、わが畏友ラ・マンチャのドン・キホーテ殿、士道の精華、惱める者の杖柱、武者修行の精髓！』そしてさう言ひながら彼は自分の兩腕に、ドン・キホーテの左の脚を抱き込んだ。ドン・キホーテは、この見識らぬ人の言葉や振舞ひに吃驚して、つく〴〵と彼を見詰めたが、遂にそれと氣が附いたので、こんな處で、この人に逢ふことを非常に驚いて、そして慌てゝ馬から降りようとした。しかし牧師補はどうしてもそれを許さなかつたので、ドン・キホーテは言つた、『これは先生、どうかお免し下され。拙者が馬上に居つて勿體なくも貴方のやうなおん方を徒歩でお立たせ申すといふ法はござりませんわい。』

『いえ、それはどうあつてもお許し申しません、』と牧師補は言つた、『前代未曾有の大功績大冒險は馬上でこそ遂げられるのですから、貴方は馬上にお止まりなさらねばなりません。貧僧づれの私は、貴方に從いてござるこの方々の騾馬をば、もし御不承なくば、拜借出來れば十分間に合ひませう。それでも私は駿馬ペガサスか、或ひはかの名高いムーア人ムザラク——といふのは今日に至るまで大コムプラタム（スペインの地名、作者の故郷の近くにあり）から程遠からぬズレマ大丘に魔術で縛られて居りますが——あの勇士を乘せた斑驅や軍馬にでも、打ち跨つたやうな心地が致しませう。』

『いや、先生、それ位のことを何でお拒み申しませう、』とドン・キホーテは答へた、『またそれは、この姫君が私に對

するお心やりから、喜んでその家來に命ぜられ、家來の乘つて居る騾馬を貴方へ御用立てられること、思ひます。また騾馬さへ我慢が出來ますれば家來も貴方の背後へ乘れませう。』

『さやう、大丈夫でござりませう。』と姫君は言つた、『そしてまた、申すまでもなく、私の家來はなか〳〵禮儀の厚い者でござりまして、またなか〳〵善良なキリスト信者でござりますから、とても教會のお方を、乘り物のあるのにお歩かせ申しは致しませんから、私が言ひつけずとも左樣致しませう。』

『全くその通りで、』と理髮師は言つた。そして直ぐさま下馬して、その鞍を牧師補に勸めた。牧師補は多く勸められるのを待たずしてそれを受けた。併し理髮師がその背後へ乘らうとしてゐた時、運惡くもその騾馬は偶々賃貸しものであつたので、賃貸しはどれも〳〵ぼろ馬である習ひで、騾馬は後足をあげてびん〳〵と二つほど宰を蹴つた。それが若しもニコラス親方の胸か頭かに當つたことなら、彼はドン・キホーテ捜しの旅を地獄の旅としたことであつたらう。それは實際危ないところであつたが、彼はこの足蹴に仰天した餘り、自分の髯が落ちたのにも氣がつかずに地べたへ落ちた。そして髯のないのに氣がつくと、彼はどうすることも出來ないので、たゞ慌てゝ兩手で顏を蔽ひ、そして齒が叩き折られたと見せかけて叫き出した。ドン・キホーテは落馬した家來の顏から、その一束の髯が頰も血もつかずに切り離されたのを見て叫んだ、『はてまア どうした事ぢや、これこそ一大奇蹟ぢやわい！ わざと剪り落しでもしたやうに、あの顏から髯が蹴落されて引きちぎられたとはどうぢや。』

牧師補は自分の計畫が今にも見破られさうな危險を見て、やにはにその髯を摑み捕つて、それを持つて急いで、尙も呻きつゝ橫たはつてゐるニコラス親方の側へ寄つた。そして彼の顏を自分の胸元へ引き寄せて、靜く暇に髯を膠附け、その上に何かぶつ〳〵と囁いた。そして、それは今に皆に分らうが、髯を膠附ける爲めの特別の呪文であると言つた。そして彼は髯をつけてしまふとすぐその側を離れた。するとこの家來衆は立派な髯を生やしてそつくり前の通りに見えた。それを見てドン・キホーテは非常に驚いて、牧師補に向つて、まさかの時の爲めにその呪文を教へて呉れと賴んだ。それは髯を附ける以上に效能があるに違ひないと思はれたからである。蓋しその髯の引き攣られた跡の

肉は必ず引き裂かれ千切られてをるに相違ない、そしてそれを癒やすことの出來る位であるから、必ず靱より外のものにも利き目があるに相違ないといふことは明白であつたからである。

『全くさうです、』と牧師補は言つた。そしてその機會があり次第その咒文を教へようと約束した。そこで彼等は先づ差し當り牧師補が騾馬に乘つて、そして此處から六リーグばかりもあらうと思はれる宿屋に着くまでは、三人の者が交る〳〵乘つて行くことに決めた。

やがて三人は乘馬した、卽ちドン・キホーテと姫君とそれから牧師補とである。そしてカルデニオと理髪師とサンチョ・パンザの三人は徒歩で行つた。ドン・キホーテは姫君に言つた、『姫君よ、どうか何方へでも貴女のお好みの方へお伴れ下さいませ。』しかし彼女が答へぬうちに、牧師補は言つた、『貴女さまは何と申す國の方へ私どもをお伴れなさるのでございませうか？　それは或ひはあのミコミコンの國へではございますまいか？　それに違ひございますまい。でないとなりますと、私にはどこの國へか分り兼ねますが。』

彼女は既に萬事を心得てゐたので、『左樣でございます』と答へねばならぬことを知つてをつた。そこで彼女は言つた、『左樣でございます、貴方樣、私の行く道はその國の方へ向いて居ります。』

『それでは、』と牧師補は言つた、『私たちは、私の村を眞直に通り抜けて行かねばなりませぬ。そしてそこから、貴女樣はカルタゲナへの路をお取りになりまして、あすこからは日和次第に船出をなさることが出來まする。そしてもし風が追ひ手で海がなだらかに穩かでございますなら、大抵九年とはかゝらずにメオナの大湖水——と申しますのはメオタイデスのことですが——の見えるところへお着きなされます。あそこからは貴女さまのお國の濱邊までは百日の上は出ぬ旅路でございます。』

『まア、貴方樣は間違へてお出でなされます、』と彼女は言つた、『私が國を立ちましてからまだ二年とは經つて居りません。そして天候の具合も一向好くはございませんなんだが、それでも私はお慕ひ申してをりました方にこゝでお目にかゝつてをります。それは卽ちラ・マンチャのドン・キホーテの殿樣のことで、その御高名は私がこのスペインの土地を踏みますと直ぐもう耳に入りましたので、それで私はどうでもそのお方をお捜し申して、そのお方にお目にかゝ

り、私の申し立ての正しいことを天下に敵なき御武力に縋つて證して頂かうとて參りましてござります。』

『もう澤山でござります、この上御賞讃は御無用になされませ。』とドン・キホーテはその言葉を聞いて言つた、『拙者はあらゆる諛ひを憎みます。またたとひ貴女の今のお言葉は諛ひでないにせよ、それらしい言葉は、拙者の清淨な耳に忌はしう響きます。姫君よ、拙者はたゞ、この腕が力を有つて居りませうと居りますまいと、その有ち得る限りのものを傾け盡して死に至るまでも、貴女の御奉公に獻げますと申しませう。それはその時が來てからの事として、只今のところ、私は先づ牧師さんへお訊ねしたいのでございますが、一體先生はこんな處へたゞ獨り供も伴れずに、驚くほどの御輕裝で、何の爲めにお出でになりましたのか、それを聞かして頂きたい。』

『それは手短にお答へしませう、』と牧師補は答へた、『さてお聞き下さい、ドン・キホーテ殿——實は私はあの仲好しの理髪師のニコラス親方と同道して、幾年も前に印度へ行きました私の親類の者から私へ送つてよこしました金を請取りにセヴィルへ出かけて居りました。その金高といふのは少々ではなくて、八リーェルの銀で正味六萬リーェルから上で、相當の金高です。そして昨日此處を通りかゝりますと、四人の剽盜に襲はれて、私たちは髯までも剃ぎとられましたのぢや。それであの理髪師は已むなく贋髯を附けることになりましたし、また此處にをります若者も——カルデニオを指さして——すつかり姿を變へてしまひました。併しそれは兎に角一番大事なことは、この近在に傳はつてをる專らの噂では、その襲うて來た賊は船艦役人の群で、そいつらは何でも丁度それと同じ場所あたりで、或る非常な勇壯な男の爲めに警護長や數人の警護の附いてをつたに拘らず解き放されたといふことです。そして疑ひもなくその解き放してやつた男は、正氣を失うてゐたのか、その船艦役どもと同樣の惡黨か、さうでなければ狼を羊の中へ入れ、狐を鷄の中に入れ、また蠅を蜜の中へ入れるやうな人情も良心ももたぬ男であつたに相違ありません。その男は、王樣の御命令に反いたのぢやから、正義を無みして、わが王たり君主たる君に反いたことになりますな。その男は、王樣のお船の足を奪ひとつて、そして今まで長い間事もなかつた「神聖救濟組合」を騷がせて、そしてつまり、自分の肉身には何一つ得をせずに、魂を亡ぼすやうなことをしでかしたのですなア。』サンチョーは既に牧師補や理髪師にその船

懲役人の事件は話してゐたのである。彼も鼻が高かつたのである。そこで牧師補は、そのことを取り立てゝほのめかして、ドン・キホーテがそれに對して何と言ふであらうか、又どうするであらうかと試したのである。ドン・キホーテはその結構な人間たちを解放したのは誰であつたと言ひも得せずに、その一語々々に顏色を變へた。

『さうして見ると、私らを追ひ剝ぎしたのはそいつらでありましたわい。それで神樣はどうかあれらが當然受くべき刑罰を受けさせることを好まなかつた人をば、お慈悲を以てお赦し下さるやうに。』と牧師補は言つた。

第三十章　は美しきドロテアの述べたる演說、及びその他さま〴〵の愉快に面白き事柄を說く。

牧師補が言ひ終つたか終らぬ內に、サンチョーは言つた、『そんならほんとに、先生樣、それを仕出かしたのは私の旦那樣でござりますぞい。そして私も旦那樣へ前以つてよう考へなされませ、あいつらは皆んな銘々てんでの咎で護送られて居るのぢやから、あいつらを放してやつちや罪になりますと言うて、お諫め申さなんだことぢやござりませんわい。』

『阿呆め！』とドン・キホーテはこれを聞いて言つた、『天下の大道であゝいふ風に護送され、あゝいふ風にさいなまれてゐる者に會へば、その惱まされ鎖に繫がれ虐げられて居る者が何人であらうとも、また銘々の罪科の爲めであらうと、銘々の不仕合せからであらうと、それを一々詮議立てするのは武者修行者の仕事でもなければ知つたことでもないのぢや。たゞ武者修行者のすべきことは、その者どもの罪は見ず、只その苦痛を見て、助けを要する者として助力をしてやるまでのことぢや。拙者は不憫な不仕合せな者共の、一と鎖りといふか一と連ねといふかに出逢うたので、拙者のせねばならぬと感じたことを彼等の爲めにしてやつた丈けのことで、その外のことはどうあらうと知つたことぢやないわい。ぢやから、この牧師先生の貴い神聖な御職分に對しては失禮な言ひ分ぢやが、何者にもせよ、拙者のしたことに故障を申し出る者があるなら、それこそ武士道の何であるかを知らず、また無賴な惡黨同樣に嘘を吐く奴ぢや。さういふ奴にはこの劍で十分その事を知らせてやらうわい。』さう言ひながら、彼はその鐙を踏みしめ、その兜

をしツかと抑へた。蓋し、彼に從へばマムブリノーの兜である例の床屋の金盥を、かの船懲役人どもにしてやられた損所の修繕の出來るまで、鞍の前輪に吊るして彼は運んでゐたのであつた。

ドロテアは、拔け目がなくて快活で、そして今ではもう全くドン・キホーテの狂氣の性質も會得し、サンチョー以外の人々は皆な彼をおもちやにしてをるのだといふことも分つて來たので、彼の憤慨するのを見て、人には後れて居ず口を出した、『騎士樣、貴方が私へお約束なさいましたお願ひのことをよう覺えてゐて下されませ。それに又そのお約束によつて別の事柄には何にも手出しはなさらぬといふことも、必ず堅く守つて下されませ。まア〳〵氣をお靜めなされませ。この先生樣が、もしもあの船懲役人を釋き放つてやつたのは天下に敵なき貴方樣のお腕に依つてぢやと御承知でござりましたら、三度も四度も口を塞いだり、三度も舌を噛まれた上でなければ、貴方樣を蔑ろにするやうなことは一言も申されなんだでござりませうから。』

『そりやもうそれに相違ござりません。また私は口髭までも引き攣りましたでせう。』と牧師補は言つた。

『貴女さま、拙者は默つて居りませう。』とドン・キホーテは言つた、『拙者　この胸に起つて來た自然の怒りを抑へませう。そしてお約束を果たすまでは靜かに穩やかにして參りませう。しかしこの勘辨の代りとして、もしお差支なくば、一體貴女樣の御心勞はどういふ性のものか、また拙者が怨みを霽らすべき敵手は一體幾人くらゐで、どういふ者どもでござりませうか、また貴女の爲めに誰に仕返しをすればよいのか、それを承はりたう存じますのぢや。』

『それはもう喜んでお答へ致します。いろ〳〵の不運不幸の話をお聞きなさるのが御退屈でさへござりませんならば。』とドロテアは答へた。

『姫君、それはなか〳〵退屈どころではござりません、』とドン・キホーテが言つたので、ドロテアは答へた、『はい、左樣ならば、どうぞお聞き下さいまし。』かう彼女が言ふや否、カルデニオと理髮師とは、頓才のあるドロテアがどんな物語を作り出すであらうか、それを聞きたがつて、その直ぐ側に身を寄せて來た。そしてサンチョーも同じやうにした、といふのは、彼も主人に劣らず彼女に引きつけられてゐたからである。そこで彼女は鞍の上に居心地よく身を据ゑて、咳拂ひやその他の前支度で考へる隙をこしらへてから、非常に氣輕な調子で次のやうに始めた——

『皆樣かた、先づ第一に申し上げたいのは私の名前でございますが、それは――』と此處まで來ると、彼女は先きに牧師補が與へた自分の名前を忘れてしまつてゐたので、一寸つかへた。しかし牧師補はその行き詰つたのを見て、彼女の助太刀をして言つた、『姫君、貴女樣が不仕合せのお物語をなさるとて、お心の亂れ騷ぐといふことは、そりや御無理もございません。何故と申しますに、そのやうな惱みの爲めには、自分の名前すらも忘れる位に記憶を奪ひ去られるといふことは、得てあり勝ちのことですから、貴女樣もその例に洩れず、只今御自身がミコミコン大王國の正統のお世嗣ミコミコナ姫と仰有ることをお忘れになつたのでございますよ。そこでこれを某りにして、もう貴女樣は私たちへお話し下さらうといふ悲しい御記憶を殘らずお思ひ出しなさることが出來ませう。』

『その通りでございます、』と姫は言つた、『けれどもうこの上は別に何の御指南も要らぬと存じます。私はその眞實の物語を無事に納め結びませう、そしてそれはかうでございます――私の父君は、物識りのティナクリオ王と呼ばれまして、人の謂ふ魔術といふものには隨分達してをられました。そこで御自分の術によつて、私の母君が、それはジャラミラ女王と申されましたが、御自分に先きだつて亡くなられることや、又その後を追うて間もなく御自分もこの世を去られることや、それからこの私が父も母もない孤兒となつて遺ることなどを知られました。しかし父君の申されますには、それだけのことならば大して自分を苦しめも悲しませもせぬが、わが王國に隣り合うて居る大きな島の領主の蹙め顏のパンダフィランドといふ大巨人のことが氣懸りぢやと申されました――その巨人にそんな名前の付きましたのは、その二つの眼は當り前に眞直ぐについてをるのにいつも藪睨みのやうに横睨みをするからで、それは全く、その見る者を恐れ慄へさす爲めにわざと惡心からさう致すのでございます――この巨人は、私が孤兒になつたと知ればば必ず大軍勢を率ゐて私の國を攻め荒し、私の身を隱すべき小村一つも殘さずに、みんな私の物を奪ひ取るであらう。しかし若し私が進んでその男と結婚すれば、凡てこの滅亡や不幸は脫がれることが出來るといふことを、父君は知つてをられたのでございます。さりとて、父君の考へられました限りでは、私がそんな釣り合はぬ結婚を承知しようなどとは決して思うては居られませなんだ。そしてこの事に就いては全く父君の先見が當つてをりました。私の心には、

その巨人であらうと如何にすぐれた巨大な別の人であらうとも、結婚することなどは心に浮びもしませなんだからです。また父の申しましたことは——父の死後に、バンダフィランドがわが國に攻め入らうとすることが分れば、それを待ち構へて防がうなどとは企てぬがよい、さうすれば身の破滅を招くであらうから、それよりも、もし私が死を免れ忠良な臣民の鏖殺しになるのを免れようと望むなら、悉く國をあの巨人に明け渡すがよいと言ふことでございました。何故と申しますと、あの巨人の悪魔のやうな勢ひに敵對しては、とても身を防ぐ力はないからと申すのでございます。それで私が直ぐさま幾人かの供人を伴なうて、スペインへ渡れば、折柄スペイン國中に武名を轟かしてござる一人の武者修行者に出逢うて、その人によつてわが不運の助けを得るであらうと申しました。そしてその方の御名は——私の覺え違ひでございませんなら、たしかドン・アゾーテとかドン・ジゾーテとか申されるであらうと、申しました。』

『お姫樣、そりや「ドン・キホーテ」と言はつしやれたに違ひございませんわい。』とサンチョーはそれを聞いて言つた、『またの名は憂ひ顔の騎士でございます。』

『あゝ、さうぢや、』とドロテアは言つた、『それからまた、「その騎士は脊が高くて痩せ顔ぢや」、それから「その騎士の左の肩下の右側か、そのあたりには、剛毛のやうな毛のある鼠色の黒痣を有つて居るであらう」と父は申しました。』

これを聞いてドン・キホーテは自分の家來に言つた、『さア、サンチョーよ、拙者はその賢明な王樣が豫言なされた騎士であるかどうかを檢べねばならんから、手を貸して着物を脫がして吳れい。』

『どうして貴方樣はお召し物を脫がうと仰しやるのでございますぞ?』とドロテアは言つた。

『貴女の父君が言はれましたその黒痣を拙者がもつてをるかどうかを見ようと思ひますのぢや。』とドン・キホーテは答へた。

『着物を脫がつしやることはございませんわい。何故ちうて、且那樣は、脊骨の眞上に丁度さういふ黒痣をもつてをられますからの。あれは強い人間の標でございますわい。』とサンチョーは言つた。

『それで澤山でございますよ、』とドロテアは言つた、『お友達同士の間では、つまらぬことを餘りやかましう穿鑿してはなりませんから。それにまた、肩にあつても脊骨の上

にあつても大した違ひはございません。黒痣がありさへしますれば、何處にありませうとも、同じ身體のことですから、それで澤山でございます。全く私の父は一々些細の點まで眞實のことを當てました。また私もドン・キホーテ樣にお任せ致しましたので仕合せをいたしました。この騎士樣こそは、そのお顏の樣子といひ、またスペインのみならずラ・マンチャ中にまで轟き渡るそのお名前といひ、正しく私の父の申しました方でございますからです。私がオスナに上陸するかせぬうちに、もうこのお方のお手柄話を聞きまして、このお方こそはるゞ〳〵私の捜しに參りましたその方ぢやと直ぐさま心に思ひ當りました位でございました。』

『ぢやが、姫君、貴女はオスナにどうして上陸なされましたのぢや、あそこは港でもございませんのに？』とドン・キホーテは訊ねた。

しかし牧師補はドテロアには答へさせないで、それを引き取つて言つた、『姫君の仰しやるのはつまり、マラガに上陸せられて後、オスナで初めて貴方樣の噂をお聞きになつたといふことなんです。』

『丁度わたしもさう申さうと存じて居りましたのです。』とドロテアは言つた。

『勿論さうでありませう。さてどうか貴女樣のお話をお續け下さいませんか？』と牧師補は言つた。

『もう別に附け加へることもございません。』とドロテアは言つた、『尤も、私がドン・キホーテ樣を捜し出しましたことは非常な仕合せでございまして、それは丁度もうはや自分で全領土の女王となり主となつたやうに思はれる位でございます。何故と申しますと、このお方は御丁寧に、御立腹さへなく、私の願ひをお聞き容れ下さつて、私の御案内致しますところへお出でになり、そしてあの蟲め面のパンダフィランドに直き〳〵に立ち向うて、あいつを打ち殺し、あいつが理不盡にも横領してをります物を私に取り返して下さるからでございます。この事は殘らず、私の父が——物識りのティナクリオ王が豫言したことでございますから、必ず遺憾なくさうなる筈でございます。それにまた父はカルデア語かそれともギリシャ語の(と申しますのは、私にはそんな文字が讀めませんので)、書き物の中でちやんとかう豫言致して居ります——もしやこの豫言されてをる騎士がその巨人の咽喉を切つた後で、私と結婚することを喜ばれるならば、私は直ぐさま躊躇なくその方の正妻となつて、そして私の身と共に國家をも捧げねばならぬと申すの

でござります。』

これを聞いてドン・キホーテは言つた、『おい、サンチョー、さアお前は何と思ふぞ？　あれ聞いたか？　拙者がお前にさう言はなんだ事かい？　私らはもう治めるに國あり、娶るに妃ありではないか？』

『眞實誓言の通りでござりますよ。さうしてそのバンダフィランド様の咽喉笛引き切つてから夫婦になるのを嫌がる者は馬鹿の骨頂でござりませうよ！　それに、このお姫様は何ちふ容貌よしぢや！　あゝ私の寢床の蚤が殘らずかう言ふ奴ぢやつたらえゝがなア！』とサンチョーは言つた。そしてさういひながら頻りに嬉しくて堪らぬといふ様子をして二つ三つ空へ跳ね上つた。それが濟むと走つて行つてドロテアの騾馬の面勒を摑んで引き止め、その前に跪づいて彼女が自分の女主たりまた女主人たる印にその手を接吻させて呉れるようにと願つた。見物人中の何人が、この主人の狂氣と家來の愚直を見て、笑ひを禁ずることが出來たらう？　そこでドロテアは手を與へて、そして神のお許しで自分の國を取り返して治める時節が來れば、彼をその國内の大名にしてやると約束した。これに對してサンチョーは、またもや皆の者を笑はせるやうな言葉でお禮を言つた。

『皆様がた、これが私の物語でござります、』とドロテアは續けた、『たゞ申し殘してをりますのは――私が國を出發します時伴うて參りました從者は皆な殘らず、丁度港が見え出す時になつてから出逢うた大暴風の爲めに溺れてしまひまして、生き殘つてをるのはこの髯の立派な家來だけでござります。そして奇蹟のやうに私とこの者とが銘々板一枚に縋つて岸につきました。また本當に私の全生涯は、御覽の通り一つの奇蹟であり不思議でござります。若し私の話が餘り細か過ぎたり、精しかるべきところに粗略でありましたら、それはこの學士様が私の物語の始めに仰しやいましたやうに、絶え間もない非常な悲しみは悲しむ者の記憶を奪ひ去るものぢやと思うて下さりませ。』

『氣高く貴き姫君よ。』とドン・キホーテは言つた、『貴女様への御奉公の爲め拙者にふりかゝる心勞は如何に烈しく前代未聞のものでありませうとも、なか〳〵拙者の記憶はそれに依つて奪はれは致しません。そこで先きに貴女へお約束しました筋を改めて確言いたします。私自ら貴女の恐ろしい仇敵に出逢ひますまでは、世界の果てまでも御一緒にお供して神の御助力と私の武力の助けによりまして、そいつの倨れる首をこの――名劍とは敢て申しません、私の

剣はあのギネス・デ・パサモンテに盗まれましたから(これだけは口の中で言つた、そして後を續けた)——この剣の切先にかけて斬りまして、そしてそれから貴女が御無事に御領國を支配なさるやうになれば、その曉には最もお氣に適うたやうに御一身の始末をなさるのは貴女の御決心一つでござりますのぢや。それはかの婦人が拙者の記憶を充たし、拙者の本心を縛り、また拙者の分別を囚へてをりますので——いやその上は何も申しませんが——拙者としては只今のところ、たとへフェニクス(エヂプト神話の不死の鳥)とでも結婚しようと考へることは出來ぬことでござりますから。』

この結婚を欲しないといふ、主人の最後の言葉はサンチョーに取つて非常に氣に入らぬものであつた。それで彼は非常に激して聲を勵まして言つた、『これ〳〵ドン・キホーテ樣、貴方樣は氣でも狂はつしやれましたかい？　何故ちうて、こんなえらいお姫樣をお嬪樣に貰ふのを何でまアいやがつたりなされますのぢや。一體貴方樣は、今持ちかけられとるかういふ上運氣が何時でも見付かると思うてござりますかい？　それともあのドゥルシネア姫の方がもつと美しうでもありますかい？　何でまアあの女が、この半分も美しうはない。それどころか、あの女はこゝにござるお方の靴までも追付きはせんと言うてもえゝのでござります。もし貴方樣が「御馳走をさがしに海の底へ行かつしやる」やうなら、私の待ち焦れてをるその領地を手に入れることは駄目でござりますぞい。どうでも夫婦におなりなされ、おなりなされ、さうして何の骨折りもせずに手に入るそのお國をお取りなされ。そして貴方が王樣にならしやつたら、私を侯爵樣か總督かに取り立てゝ、さうして後のことはえゝ加減に打つ棄つてお置きなされませ。』

ドン・キホーテは、自分の婦人ドゥルシネアに對してこのやうな無禮の言葉の吐かれるのを聞いてそれを堪へることは出來なかつた。そこで槍を振り上げつゝ、サンチョーには一言も言はず、また聲も立てずに、續けざまに二つほどサンチョーに喰はしたので、彼は地べたに平伏つてしまつた。そして若しもドロテアがドン・キホーテに許してやれよと聲をかけなかつたら、疑ひもなくその場で彼の生命を取つてしまつたであらう。暫く間を置いてから彼はサンチョーに言つた、『おい、こらッ、汚らしい土百姓め、お前は何時も拙者にいらぬ世話を燒いて、そして何時も叱られては、いつも赦して貰ふものぢやと思うてをるのか？　そんな事は思ふなよ、この無禮な奴め、お前は天下に並びなきドゥ

ルシネアに對して惡口をたゝいたからには、無禮者に違ひないのぢや。土百姓、宿無しめ、乞食め、お前は一體あの婦人が拙者の腕に力を吹き込んで呉れなんたら、拙者は蚤一匹殺すだけの力もないのぢやといふ事が分らんのか？こら、蝮の舌を持つた痴れ者め、お前は一體、この王國を手に入れ、この巨人の首を叩き斬り、そしてお前を侯爵に封じたのは（まアさういふものが、殘らず既に成し果され、成就されたものと、拙者は看做して言ふのぢやが）、拙者の腕をその手柄の道具として用ゐたドゥルシネアの力でなくて誰の力ぢやと思ふのか？　あの婦人は拙者に宿つて戰ひ拙者に宿つて征服し、また拙者はあの婦人に宿つて生き且つ呼吸するのぢや。そこで拙者は生命も存在もあの婦人に負うて居るのぢやゝあゝこの汚らはしい惡黨奴、お前は何たる恩知らずぢや。お前は大地の塵から取り立てられて、一廉の大名にまで上げられながら、しかもその大恩義に報いるに、その位を與へ給うたお方を惡口するといふことは、何たることぢや。』

サンチョーは全く氣絶してはゐなかつたので、この主人の言つたことは殘らず聞き取つた。そして可なり敏捷に起き上つて、ドロテアの乘馬の背後に走つて行つた、そこから自分の主人に言ひかけた、『どうでござりませう、旦那樣、もしか貴方樣がこの姫君樣と結婚せんと腹を極めさつしやれたら、そのお國は貴方樣のものにならんちふことは分り切つたことでござりませうがな。そこでそれが貴方樣のお手に入らんとなると、どうして貴方樣は私へ御褒美を下されますかい？　私の愚痴をこぼすのはそれでござりますわい。貴方樣、このお姫樣は天からでも降つて來たやうにしてござらつしやつたのぢやから、どうぞ當分の間でも、このお方と結婚して下さりませ。そして後でまた貴方の思うてござるドゥルシネア姫へ返らつしやれても構ひはしません。世の中には側妾を置いてござる王樣も屹度ござりませうからな。お二人の中のどつちが美しいちふことにや、私は喙は容れません。ぢやが本當のことを言はにやならんとすれば私は二人とも好きでござります。尤も私はドゥルシネア姫は一度も見たことはござりませんがな。』

『何ぢやと！　あの婦人を一度も見たことがないと、この無禮者め！　たつた今貴樣はあの婦人から返事を持つて來たではないか？』とドン・キホーテは叫んだ。

『へい、それは、』とサンチョーは言つた、『つまり私はあの方の御美貌の細かいところや、またその愛嬌のあるところ

を一々見るほどにはゆつくりは見ませんなんだといふことでござります。ぢやけど總體から言へば、私はあのお姫樣は好きでござりますよ。』

『そんなら赦してやらう、又お前も拙者がお前に加へた無禮を赦して呉れい。最初のはずみは仲々自分の思ふ通りにもならんものぢやからの。』とドン・キホーテは言つた。

『それはさうでござります。』とサンチョーは答へた、『そして私は饒舌りたいのが何時も初めのはずみでござりましてな。そこで舌の先へ上つて來たことはどうせ一度は饒舌らんわけには行きませんのぢや。』

『それはさうでも、サンチョーよ、自分の言ふことに氣を附けるがよいぞよ。何故といふに、度々井戸へ行く土瓶「度々井戸へ行く土瓶はその把手かロかをおとす」といふ諺をいふ――とそこまで言へばもう後はよからう。』

『へい、へい、神樣は天にござつて、そして殘らず奸策を見てござりますから、言ふことの曲つた私と、することの曲つた貴方樣とは、どちらが餘計に惡いのか裁いて下されませう。』とサンチョーは言つた。

『サンチョー、もうお止し、』とドロテアは言つた、『走つて行つて、旦那樣のお手に接吻してお赦しを願ひなさい。そしてこれから後は讃めるにも誹るにも、もつと用心をおし。それからそのトボソ姫を辱めるやうなことは一切言はぬことになさい。そのお方に就いては、私はたゞ自分がその方の召使ぢやといふことだけしか知りません。またお前は王樣のやうに暮されるやうな威光を必ず得られるから、神樣を信じておいで。』

サンチョーは首を垂れて進んだ。そして主人に手を貸して呉れるように願つた。とドン・キホーテは嚴めしい樣子でその手を彼に與へた。そして彼がその手に接吻し終るや否や、祝禱を與へた。それが濟むと彼は何か訊ねたいこともあり、また非常に重大なことで共に相談したいこともあるから、少しばかり先きになつて進むようにと、サンチョーに命じた。サンチョーはその通りにした。そして二人がやゝ暫くの間進んでからドン・キホーテは彼に話しかけた、『お前が歸つてからと言ふもの、私はその折もなければ暇もなうて、お前の使ひやまたお前の持つて來た返事に就いていろ〳〵の細かいことを訊ねることも出來なんだのぢやが、しかし今は丁度好い塩梅に、その折も暇も出來たから、お前は何も包まずに、その好い晉づれの喜びを私に與へて呉れるがよいぞよ。』

『どうぞ貴方様のお心のまゝに何なりと訊ねて下さりませ。』とサンチョーは答へた、『私は業々と入り口を見付けたやうに、また樂々と何にでも出口を見付けませうからな。ぢやが、且那樣にお願ひ致しますが、どうかこれからは、あのやうに仕返しはして下さるなよ。』

『何でお前はそんな事を言ふのぢや、サンチョー？』とドン・キホーテは言つた。

『それを申しますわけは、』とサンチョーは答へた、『只今の御打擲は、私がドゥルシネア姫樣のことを惡口言うたせゐぢやなうて、先夜私ら二人の間に惡魔奴が起しをつたあの喧嘩のせゐぢやと思ひますからでござりますよ。私はドゥルシネア姫樣が貴方樣のものぢやといふばかりに、丁度御寶物か何かのやうに——尤もあのお方にやさういふところはござりませんがな——大事に思うてをりますがの。』

『その事に就ては、一生もう何も言ふでないぞ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『拙者はそれを聞くと面白うないからぢや。その事では拙者はもはやお前を赦したのぢや。またお前は「新しい罪科には新しい苦行」といふ諺を知つて居らうかの。』

こんな話をしてゐる折から、その同じ道を向うの方から、一人の男が驢馬に乘つて來るのが見えた。その男はずつと接近して見ると、ヂプシー人（漂浪種族にて渡り乞食のやうな者）といふことが分つた。しかしサンチョー・パンザは、眼も心も驢馬さへ見れば引きつけられてしまふので、その男を見てとるや否や、これこそギネス・デ・パサモンテであると思つた。そしてそのヂプシー人の絲口からして、自分の驢馬といふ絲卷を探りあてたのであつた。蓋し、そのパサモンテを乘せてをるのは、全くあの連錢葦毛であつた。彼はその筋の眼を逃れて、そして驢馬を賣り飛ばさう爲めに、幸ひヂプシー語やまだ澤山の國語を自分の國語のやうに自由に話せたところから、ヂプシー人に身を窶してゐたのであつた。サンチョーは彼を見て彼と氣が附いたので、直ぐさま彼に向つて叫んだ、『ギネシロー、泥棒野郎、己の寶をよこせ、己の命に代へる物を放せ、己の休みの邪魔をするな、己の驢馬を打つちやつて行け、おれの喜びを殘しとけ、行つてしまへ、ごろつき、失せをれ盜人め、貴樣のものでないものは返しやがれ。』

ギネスはその第一の言葉で驢馬から飛び降りて、そして駈けつくらでもするやうに逸足早く逃げ去つて、後を晦ましてしまつたので、そんな澤山の言葉や罵詈は必要がなか

つたのである。サンチョーは自分の連錢葦毛の方へ急いだ。そして彼を抱きながら言つた、『お前はどうしてをつたのぢや、私の喜び、私の眼玉のやうな連錢葦毛よ、友達よ！』さう言ひつゝも、宛ら人間でもあるかの如く彼を接吻し抱擁した。驢馬はぢつとしてゐた。そして一言も答へずにサンチョーの接吻や抱擁のまゝに任せた。一行の者は殘らずやつて來て、そして連錢葦毛の見付かつたことを祝つた。ドン・キホーテは、取り分け喜んで、これが見付かつたに拘らず、自分がサンチョーに與れようと約束した例の三匹の驢馬の子の手形は取り消すまいと言つた。これに對してサンチョーは感謝した。

この二人がかういふ風に話してをる間に、牧師補はドロテアに向つて、その物語の簡潔であつたことにも、物語そのものにも、非常に彼女の賢さが見えてゐたし、またその物語は、武勇傳中のものに似てもゐたなどと言つた。彼女は自分はたび〳〵さういふ書物を讀んで娯んだけれど、しかし、方々の州や港の所在地を知らなかつたので、そこで出鱈目にオスナに上陸したと言つたのだといふことなどを話した。

『さうぢやらうと思ひました、』と牧師補は言つた、『そこで私は慌てゝあゝ言ひましたのぢや、あれで以て凡てがうまく納まりましたよ。しかしこの不仕合せな紳士が、唯もう自分の讀んだ武勇傳の風や形の通りでさへあれば、どんな作り事でも嘘でも直ぐに信ずるところを見ますと、實に不思議ではございませんか？』

『さうですな、』とカルデニオは言つた、『隨分並外れな前代未聞の話ですよ、これを小説に作つたり拵へたりしようと目論んだところで、誰もこれ程の鋭い才智で想像をめぐらすことは出來ますまいと思はれる位です。』

『しかしそれに就いちやア、もつと不思議なことがありますよ、』と牧師補は言つた、『それはこの立派な紳士は、その氣狂ひじみたことに關しては實に馬鹿々々しいことを言ひますが、それを離れて外の問題になりますと、この人は全く筋の通るやうに口を利いて、その心のちやんと澄んで落ちついとることが分りますよ。ですから、一旦武士道に關係のないことになれば、誰でもこの人を全く健全な分別のある人としか思ひませんよ。』

彼等がこの話をしてゐる間に、ドン・キホーテは、サンチョーと自分の話を續けて言つた、『のうパンザ、私らはお互に赦して今の喧嘩のことは忘れよう、そこで、お前も怒

りや腹立ちを水に流して、お前は一體ドゥルシネアに何處で、どうして、何時逢うたのか、それを聞かせて呉れい。あの女は何をしとつたのぢや？　お前はあれに何と言うたのぢや？　あれは何と答へたのぢや？　私の手紙を讀む時、あれはどういふ顏をしたぞ？　誰があの手紙を寫して呉れたのぢや？　何でもお前が知つたり、訊ねたり、聞いたりする値打ちのあると思ふことは殘らず、附け加へも僞り作りもせずに私に聞かして喜ばして呉れい。しかしまた、餘り端折つてしまうては却つて私の喜びを奪ふことにならうわい。』

『且那樣、隱さずに申しますれば、私は手紙はまるで持つて行きませなんだので、誰にも寫して貰ひませなんだよ。』とサンチョは言つた。

『そりやお前のいふ通りぢや、』とドン・キホーテは言つた、『といふのは、その手紙を書き込んだ手帳は、お前が發足してから二日して私の手許に在るのを見つけたからぢや。それで私は、お前が手紙を持つて行かずにどうするぢやらうか、それが分らんのでひどく心配したわい。それでお前がその手紙のないことを發見し次第途中から引き返して來るぢやらうと思つてをつたぞよ。』

『私はさうせにやなりませなんだらう、』とサンチョは言つた、『もしか私が、貴方樣のあれをお讀みなさつた時に、よう腹にしまうて置きませなんだらな。それでも私はよう覺えとつたので、その通り寺番に言うて聞かせました。寺番は私から聞いた通りに一字違はずに寫しましたが、その男の話では、生れてこの方、澤山の破門狀を讀みはしたが、これくらゐ立派な手紙はまだ見たことも讀んだこともないちふことでござりました。』

『そしてお前は今だにその手紙を覺えてをるか、サンチョ？』とドン・キホーテは言つた。

『いゝえ、且那樣、』とサンチョは答へた、『私はあれを讀み聞かせてやりますが最後、もうそれから先きは要らんことぢやと思ひましたから、忘れるやうに致しましたのぢや。それであの手紙の中で覺えとりますのは、まア「やきもきする」ちふことでござりますなア、それはあの「やんごとなき姫君」ちふことでござりますよ。それから尻尾の、「死に至るまで君のものなる憂ひ顏の騎士より」といふところですよ。そしてこの二つの言葉の間に「わが魂よ」とか「わが生命の」とか「わが眼」といふやうなことを、私は三百から上入れときましたわい。』

第三十一章　ドン・キホーテと家來サンチョ・パンザとのおもしろき議論及び其他の出來事ども。

『すべて不滿足には思はんぞよ、』とドン・キホーテは言つた、『それから、お前はあのお方のところへ行つたのか、そしてあの美しい姫君は何をして居られたのぢや？　あの方は屹度眞珠の玉の絲を貫して居られたか、それともこの生命を捧げ居る騎士の爲めに金絲で何か紋章でも縫ひ取りして居られたであらうがの？』

『さうぢやアござりません。たゞあの方は自分の家の外庭で一二俵の小麥をひいてござりました。』とサンチョは言つた。

『それ、そこぢや。その小麥の粒々は、あの姫の手に觸れれば眞珠の玉になつたのぢや。そしての、お前はそれが白麥ぢやつたか黑麥ぢやつたか見て來たかの？』とドン・キホーテは言つた。

『どつちでもござりませんで、赤でござりました。』とサンチョは言つた。

『それなら、確かに、あの姫の手で篩はれると、疑ひもなく眞白なパンが出來るのぢや。ぢやが話を進めるがよい。お前が私の手紙をあの姫へ渡した時、姫はそれに接吻したか？　頭に頂いたか？　姫はあのやうな手紙に適ふ何かの禮式を行うたか、それともどうしたのぢや？』とドン・キホーテは言つた。

『私があの手紙を渡しに行きますとな、』とサンチョは答へた、『丁度あのお姫さまは篩の中にうんと麥を入れたのを抱へてあつちこつちへ搖ぶつてをりました時なもんで、手紙が手に取れなんだので、私にかう言ひましたのぢや「おお前さん、その手紙イその囊の上へ置いて下され。わたしやこれを殘らず篩うてしまうまではそれを讀むひまアないから」と。』

『愼み深い婦人ぢやのう、』とドン・キホーテは言つた、『それはあの手紙を、暇の折に讀んで樂しまう爲めぢや。それからサンチョ、あの方はその自分の仕事をしてござる間に、お前とどう言ふ話をされたのぢや？　拙者に就いて何と訊ねられたのぢや？　またお前はそれに何と答へたのぢや？　早う〳〵殘らず私に言うてしまうて、後には滴も殘すまいぞよ。』

『あのお姫樣は何にも訊ねませんのぢや、』とサンチョは

言つた、『ぢやが私は、貴方樣があのお姫樣へ御奉公の爲めに、腰から上素裸かになつて、この山中で野蠻人のやうに地べたへ寢て、食卓にもつかずに飯を食うて、髭鬚の手入れもせず、御自分の運命を泣いたり呪うたりして苦行をしてござるちふことを話しましたよ。』

『拙者が自分の運命を呪うたとお前が言うたのは、間違うとる。何故といふに、拙者はドゥルシネア・デル・トボソ姫のやうな、あのやうに氣高い姫君を繼するやうな心になつた運命を寧ろ祝福し又今後も一生涯祝福するからぢや』とドン・キホーテは言つた。

『なか〳〵あのお姫樣は高うござりましてな、私よりや手の幅一つから上高い位でござりますよ。』とサンチョーは言つた。

『何ぢやと！　サンチョー。お前はあの方と脊較べをしたのか？』とドン・キホーテは言つた。

『脊較べはかういふ風にやりましたよ、』とサンチョーは言つた、『あの方が　麥の囊を驢馬の背中へ積むのを私が助けに行きますとなア、二人の身體がぴつたり並んで、さうするとあの方が私よりか樂に手の幅一つよりも上高いことが分りましたのぢや。』

『なる程！』とドン・キホーテは言つた、『それであの人は眞實、その身體の大きさに加へて心立ても限りなく優しいのではないかの？　ぢやが、サンチョー、お前はこの事だけは否むわけには行くまいな。お前があの姫の近くへ寄つた時セビア名香料の産地の薫りを嗅いだであらうの、それは何と名をつけてよいか分らんが、快い芳ばしい匂ひぢや。つまりそれは丁度上等の手袋店にはいつた時のやうな芳香、香氣ぢや。』

『私はたゞ、山羊臭いやうな匂ひが些と鼻についたちふことしか申し上げられませんわい。そりや、あの姫樣がひどう働いて汗まびれになつてござつたからに違ひござりません』とサンチョーは言つた。

『そんな筈はない。』とドン・キホーテは言つた、『さうぢやないぞよ、それはお前が鼻風邪を引いて居つたか、それとも自分の匂ひを嗅いだのぢや。何故と言ふに、拙者はあの荊棘の中の薔薇や野の百合や、浴かした琥珀などの香氣はどういふものか、よく承知してをるからのう。』

『ひよつとしたら、さうかも知れませんの』とサンチョーは言つた、『あの時あのドゥルシネア姫から出たやうに思はれたやうな、あゝいふ香氣が時々私の身體から出ますでなア。

ぢやが、「一匹の悪魔は他の悪魔に似とります」から、それも不思議はございませんわい。』

『そこで、もりあの姫が麥飯ひを終へたことにして、それはそこでおしまひにしてぢや、あの姫が手紙を讀んだ時には、どうしたのぢや？』とドン・キホーテは續けた、

『あの手紙でございますかの、ありやお姫様は讀み書きが出來ませんから、讀みませなんだよ。その代りに、わたしの内證ごとが村中へ知れでもしたら大變ぢやで、誰にも讀まれんやうにしたいちうて、お姫様は、あの手紙を寸々に引き裂きましたよ。そして私が口上で貴方様のあの女を思うてござることや、またあの女の故で途方もない苦行をしてござるちふことを話しましたら、そんなことはもう澤山ぢやて言ひました。それからあの女はさう言ふ苦行を止めさせようとて、貴方様へ手紙書くよりか、却つて貴方様のお手に接吻して、そして貴方様に頻りに逢ひたがつて居ると言うてくれと申しました。それから、どうぞ貴方様がこれを御覽になり次第、この山の中からお出なさつて、さういふ氣違ひじみたことをするのを切り上げて、何か別の大事件の起ら限りは、早うエル・トボソへお出でになるやうに、あの女は非常に貴方様に逢ひたがつてござるからと、さう申して呉れとでござりますよ。貴方様の「憂ひ顔の騎士」と言はれてござることを話しますと大層笑ひましたよ。私は、この間のビスケイ人があしこに行つたちやらうと訊きましたら、確かに來たし、また中々の正直者ぢやつたとあの女は言うて居りましたよ。それから、あの船戀役どものことも訊ねたら、まアだ一人も來んと言うとりましたよ。』

『そこまでは皆申し分なしぢや、』とドン・キホーテは言つた、『しかし、お前の歸る時私の消息を持つて行つたお禮として、あの女はお前にどういふ寶玉を呉れたのぢや？　と言ふのは、騎士とか姫とかいふものは昔からの慣例として、姫の消息を騎士へ持つて行つたり、騎士のを姫へ持つて行つたりする家來や侍女や小人には、その嬉しい消息に對するお禮として、又その使命の屆いた證として何か立派な寶玉を與へるものぢやからの。』

『そりやいかにもさうでござりませうな、』とサンチョーは言つた、『また結構な慣例のやうに思はれますな。ぢやがそりや昔のことに違ひござりませんよ。何故と申しますに、今時は、只パンの一片と乾酪を呉れるだけが慣例ぢやと見えますわい。私がドゥルシネアのお姫様にお暇を戴きますときに、あの方が外庭の塀垣越しに私に下さつたのが、そ

れでござりましたからの。そしてお負けにそいつは確かに羊の乳の乾酪（チース）でござりましたよ。』

『あの方は至極物惜みをせぬ人ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『そしてあの方が、お前に金の寶玉を與れられなんだのは、言ふまでもなく丁度持ち合せの寶玉が無かつたからぢや。ぢやが袖は復活祭の後でも良いもんぢやからの。（復活祭は三月下旬より四月上旬にかけて行はるゝ祭で、その後でもまた袖を温かくして置かねばならぬほど寒いこともあるので、「良い事は季節はづれでも結構」といふ意味）私はあの方に逢はう。さうすれば萬事具合ようなるのぢや。併し、サンチョー、何で拙者が驚いたか分るかの？お前は屹度宙を飛んで往き歸りしたものと私には思はれるのぢや。こゝからエル・トボソまでは三十リーグの上ぢやのに、お前は往復にたつた三日より掛らなんだからの。其事からして拙者はどうしてもかう思ふのぢや、拙者の友人であつて、拙者の利害を常に守護してをる例の賢人の魔術師が（といふのは、どうしてもさう言ふ者が居るし又居らねばならぬのぢや。もし居らなんだら拙者は正當な武者修行者でないことになるのぢや）、その魔術師がお前の知らぬ間にお前の旅を助けてやつたに違ひないと信ずるのぢや。一體さういふ賢人といふものは、寢床の中に眠つてをる武者修行者を捕へて、どうして又どう云ふ風にしてさうなつたかは知らせずに、その眠つて居る處から千リーグ以上も離れた處で翌る朝眼を覺させたりするのぢや。もし武者修行者たちがかういふお蔭を被らなんだら到る處で見る如く危地に陷つてをる他の武者修行者を助けることは出來なんだであらうわい。或る騎士の如きは偶々アルメニア（西部アジアの地名）の深山で、龍か毒蛇か或は他の騎士と闘うて、而も却々の惡戰で最早や死ぬばかりになつてをる。そして助けなどは露程も待ち設けてをらぬ時に、丁度今しがたまでイギリスに居つたその友達の騎士が、一人、雲か火の戰車かに乘つてやつて來て、助太刀して、生命を救うてくれる。そしてその晩にはもうその騎士は自分の室に居つて、なか〳〵の上機嫌で夕飯を食うて居るのぢや。而もその兩所の隔りは二三千リーグもあつたらうぞ。そしてかう言ふことは殘らず、その勇壯な騎士たちの世話をしとる賢人の魔法使ひの巧みと熟練とですることぢや。それぢやからのう、サンチョー、お前が此處からエル・トボソまでそのやうな短時間で往復したといふことは何でもなく信じられるのぢや。それは今も言うたやうに、私の味方をしとる賢人が、お前の知らぬ間に、宙を飛ばせて運んだに違ひないからぢや。』

『そりや、それに違ひござりません。ほんとにまア、ロシ

ナンテが丁度耳に水銀（クヰックシルヴァー）を注したヂプシー驢馬のやうに歩きましたからなア。『水銀を耳に注ぐのはヂプシーの伯樂が贋物の驢馬の速力を早める爲に用ゐる方法である』

『クキックシルヴァーぢやと！』又の名マーキュリー、ギリシャ神話に出る足の早い使者の神で、商人及び盜賊の守護神

とドン・キホーテは言つた、『さうぢや、それにまた自分等もまた他の者も疲れずに思ふまゝに旅をしたりさせたりする神通力を持つたあの惡魔の軍勢もさうぢや。しかしそれはさて置いて、拙者の婦人が拙者に逢ひに來るようにと言うたその命令に就いてはどうすればよからうとお前は思ふのぢやな？　拙者はその命令に從はねばならんとは思ふものゝ、それと同時に、此處に一緒にござる姫君にお受け合ひした例の懇願に依つて身は縛られてをるし、それに騎士道の掟も自分のすき好みよりか自分の言葉を重んじねばならんと强ひるやうにも思はれるからぢや。一方に於いて自分の婦人に逢ひたいといふ願望が拙者を勸め迫るし、又一方には、拙者の嚴そかな誓約や今度の戰で得られる武名やが私をせき立て招くのぢや。しかし拙者のしようと思ふことは、精一杯の早さで、その巨人の居る處へ手早く行つて、そして到着次第その首を斬り落し、この姫君を安らかにその領國に据らせて、直ぐさま引き返して拙者の總身を照らす光りの姫君を拜まうといふことぢや。そのお方に對しては、拙者はその遲參のお許しを下さるだけのお詫びが出來ようぞよ。何故といへば、その遲參も全くあの姫の光榮と名譽を增し加へる爲めぢやと御承知なされようからぢや。これ迄にも現在もこの後も一生涯を通じて拙者の武勇によつて手に入れたものは、殘らずあの方が拙者へ下さる恩惠の賜物であるし、また拙者があの方の騎士であるからぢやでのう。』

『やれ〳〵！　貴方樣のお頭は何ちふお氣の毒なことになつて居りますことぞ！』とサンチョーは言つた、『そも〳〵且那樣、貴方はこの旅をたゞでなされるお積りですかい。また一國持參してござるやうな、かう言ふ金持ちの立派なお嫁さんを取り逃がして失くするお積りですかい、そのお國は正直正味の話が、周り二萬リーグから上あつて、人間の暮しを立てるに入用なものは、殘らずあり餘るほどあつて、そしてポルテュガルとカスティルと一緒に合せたのよりも廣いちふことでござりますぞい。後生ぢやから、もう默つとつて下さりませ！　今のお話を有難いと思うて、私の申し上げることを聞かつしやれて、失禮ながら、直ぐさま、今度牧師さまのござる村へ出次第、結婚さつしやるが宜しうござりますわい。さうでなくば、此處にござる私らの

村の學士さんも立派に婚禮をして下さりますわい。私がもう他人に意見の出來る年輩ぢやちふことも、またこの御意見は貴方のお心にぴつたり合うてをるちふことも考へて下さりませよ、「手のなかの燕は、飛んでをる化鷹より優しぢや」からな。また「えゝものを手に持つとりながら悪いものを欲しがる人は、欲しがるえゝものにあり付けまいぞ」ぢやからなア。』サンチョーは長い諺の時は大抵いつも間違へる、これも正確に云へば「善きものを有ちながら悪きものを欲しがる人は、その身に來る悪きものに對し不平言うてはならぬ」である

『これ〳〵、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『その巨人を屠つて直ぐさま私が王様になつてそしてお前に恩惠を授けて例の約束した物を遣はすことが出來る爲めに、お前が拙者に結婚せよと勸めるのなら、拙者は結婚せずともお前のその願ひは易々と叶はせてやれるのぢや。拙者はその戰にかゝる前に、一つの約定を結んで、もし拙者が戰に勝つた曉には假令結婚はせずとも、拙者の好きな者に呉れたいから、その王國の一部分を拙者に下されたいと言ふのぢや。さうすれば、それを受け取つてからお前に呉れいで誰にやらうぞい？』

『そりやよう分ります。』とサンチョー言つた、『ぢやが貴方様そいつは濫漫の方を取つて下さるやうに氣を附けて下さりませ。さうすりや、若しそこに住むのが嫌になつたら、先きに申し上げました通り、黒ん坊の家來どもを船に積んで行つて、賣り飛ばすに都合がようござりますからなア。只今のところはドゥルシネアのお姫様に逢ひに行かつしやらずに、その巨人のところへ行つてあいつを殺して、さうしてこの仕事を片付けて下さりませよ。それこそ全く大きな名譽で大きな利益であらうと思はれますからなア。』

『サンチョー、そりやお前の言ふ通りぢや。』とドン・キホーテは言つた、『それでは拙者もお前の勸めを聞いてドゥルシネア姫に逢ひに行かずに、先づこの姫君と同道しようわい。ぢやが、私らが今相談して打ち合せた事に就いては、一切誰にもこの一行の人々にも、話してはいけぬぞよ。そのわけはドゥルシネア姫はなか〳〵愼み深くて、その心の思ひを人に知られることは好まれんから、拙者にせよまた拙者の代りに何人でも、それを發くといふことは宜しうないのぢや。』

『へい、さういふわけなら、』とサンチョーは言つた、『貴方様が御征伐なされた者等を殘らずドゥルシネア姫の御前へ行かせるちふことア、つまり貴方様があのお方を思うてござつて、又向ふも貴方様を思うてござるといふことに印形

捺すやうなものでござりますが、そりやどうなりませうかの？　そしてそこへ行く者らは是非共あの方の前へ跪いて、貴方樣の御命令で參りましたと言はにやなりませんから、どうして貴方樣がたお二人の戀が隱されませうぞい？』

『あゝ、お前は何といふ馬鹿な痴氣ものぢや。』とドン・キホーテは言つた、『サンチョーよ、それこそあの姫を愈々高く崇めるわけぢやといふことが、お前には分らんのか？　何故といふに、騎士道に在る私らの考へ方に依ると、婦人に取つては、自分に仕へる多くの武者修行者のあることは、非常な名譽なのぢや。その騎士たちは一向にその婦人自身の爲めに仕へることの他を知らず、またその深く厚き歸依の報いとしては、只その婦人の騎士ぢやとして心から受け容れてさへ貰へれば、それ以上を望まんのぢや。』

『私らもさういふ風な愛情で私らの神樣を、たゞ神樣ばかりを愛すべきで、名譽の望みや罰の恐さから神樣を愛するやうになつてはいけんと、牧師さんたちから聞かされましたわい。尤も私だけは、まア〳〵御褒美下さるやうな方を愛して御奉公したうござりますがの。』とサンチョーは言つた。

『ほんにこの土百姓めが！　それで居てお前は時々滅法氣の利いたことを言ふの！　人はお前を學者ぢやと思はうも知れん。』とドン・キホーテは言つた。

『ぢやが、ほんとは、字も讀めませんのぢや。』とサンチョーは答へた。

この時ニコラス親方は一寸待つて呉れいと、彼等に呼びかけた。それは背後から來る人々が、そこらにあつた小さな泉のところに休んで水を飲みたがつてゐたからであつた。ドン・キホーテは、馬を止めた。サンチョーは少からず喜んだ。何故なれば、彼は最早そんなに澤山の嘘を話すことにも疲れてゐたし、またあのドゥルシネアはエル・トボソの百姓娘といふことは知つてゐたものゝ、生れてからまだ一度も見たことがないので、つい口を滑らして主人に看破られはせぬかと恐れてゐたからでもあつた。カルデニオは、今やドロテアが初め山中で着てゐた例の百姓の着物を着てゐた。そしてその着物は餘り良くはなかつたが、彼が今まで着てゐたものよりは遙かに優つてゐた。彼等は一緒に泉の傍で下馬した。そして牧師補があの宿屋で用意して來てゐたものによつて、彼等が皆感じてゐた鋭い食慾を、十分にとは行かないまでも兎に角癒やしたのであつた。

彼等がそこでさうしてゐる折柄、偶々一人の若者が通りかゝつた。若者は立ち止つて泉の邊りの一團をまじ〳〵と

見たが、間もなくドン・キホーテのところへ走つて來てその兩脚を抱いて、ワツと泣き出して言つた、『まア、旦那樣、私を覺えてぢやござりませんかい？　よう私を見て下され。私はあの榊の木に縛られとツたところを貴方樣に解いて貰ひましたアンドレスちふ若者でござりますぞい。』

ドン・キホーテはそれと氣が附いた。そして彼の手を取りながら、其處に居る人々に向き直つて言つた。……『皆さん、この世の中の惡い橫着者どもの行ふ罪科惡事を正すに武者修行者が如何に重要かといふことをこれから說明しませうから聞いて下され。拙者が數日前或る森の中を通つてをると、苦み惱む人間の聲と思はれる叫び聲や悲しげな泣き聲が聞えましたのぢや。直ぐさま私はこの身に負うた本分に强ひられて、その悲しげな聲の出どころと思はれる方へ急ぎました。すると、これこゝに皆さんの前に立つて居るこの若者が榊の木に縛り付けられてをるのを見附けましたのぢや。幸ひこの男がこゝに居りますので、拙者が事實をそのまゝ作り飾りせぬといふ生きた證據になりませうから、拙者は心嬉しう思ひますわい。さてこの男が、腰から上は裸かにせられて、榊の木に縛られてをる。そして百姓が、それはこの男の主人ぢやと後になつて分りましたが、自分の牝馬の手綱で散々にこの男を折檻してをりましたのぢや。拙者はそれを認めるや否や、何故さう慘い折檻を致すのぢやと訊ねました。するとその百姓はそれに答へて「こりや私の下男で、のろまちふよりか不正直な爲めに不調法を出來しましたから折檻しとります」と言ひますのぢや。さうするとこの子が「旦那樣、私はたゞ給金催促したばつかりでこんなに毆られとりますわい」と言ひます。その主人は譯の分らん申し立てや言ひわけをしたのぢやが、拙者はそれを聞きはしたが、承知はしませなんだのぢや。つまり、拙者はその土百姓に强ひてこの子を釋かせて、そしてこれを一緒に連れて行つて一文缺けず拂はせて、そつくり始末をつけさす事にしたのぢや。こりや殘らず眞實であらうがの、アンドレスよ？　拙者が彼奴に嚴然と命令したことや、また彼奴が拙者の條理立つた言ひ付けや命令を殘らず致しますと如何にも神妙に誓言したことは、ちやんとお前も見て居つたらうがの？　どぎまぎしたり周章へたりせずと返事をするがよい。こゝにござる方々へその成り行きをお話しして、私の言ふ通り武者修行者が世間に居ることは非常に有益ぢやといふことをよう承知して貰ふがよからうぞよ。』

『貴方様の言はつしやれた事ア皆んな全く本當でござります。ぢやがそのおしまひは貴方様の御推量とは丁度あべこべになりましたわい。』とその若者は答へた。

『なに！　あべこべぢやと？　それではあの土百姓はお前に給金を拂はなんだか？』とドン・キホーテは言つた。

『拂はんばつかりぢやござりません、』と若者は答へた。『それればかりか、貴方様が森を通りぬけてしまはつしやれて、私ら二人きりになりますと、彼奴アまた私を同じ樹の木に括りつけて新たに折檻を初めまして、とう〳〵私をば皮を剝がれた使徒バーソロミュウさまのやうにして了ひましたよ。そして私を一つ打つては貴方様をあざけるやうな串戯を言うたり笑うたりするもんぢやから、私アもし痛うでもなかつたら、その言ひ草で噴き出したに違ひござりませんわい。つまりは、私アあの土百姓のお蔭で、あの時彼奴から受けた傷養生で今まで病院にをらにやならんやうな目に遇ひましたのぢや。それも元の起りを言へば皆んな貴方様が悪いからでござりますぞい。何故ちふにもしあの時貴方様が自分の頼まれもせん處へ來ずに、また他人のことにおせつかいをせずに、自分の勝手な方へ行つてしまはつしやれたなら、私の主人も十か二十私を毆れればそれで腹が癒えて、私を許して給金は拂うて呉れたでござりませう。それを貴方様が彼奴を無暗に怒りつけて、あんなにいろ〳〵酷いことを言はつしやれたので、彼奴は眞赤に怒り出しましたのぢや。それでも貴方様にや仕返しが出來んので、貴方様が行つてしまはつしやるかしまはつしやらん内に、その暴風が私の方へ口を開けてきて、その物凄いことちうたら、もう私ア生きとる内にや二度と滿足な人間ぢや居るまいかと思うた位でござりますわい。』

『その災難は、拙者が行つてしまうたからぢや。』とドン・キホーテは言うた。『拙者は、お前が給金を受け取るのを見屆けん内に立ち去るではなかつたのぢや。何故といふに拙者は長い間の實驗に照して、百姓といふ奴は一人として自分の結んだ約束を、それが身の利益にならんと分ると、なかなか守るもんぢやないとよう承知して居る筈であつたのぢや。ぢやがのうアンドレス、彼奴がお前に拂はなんだら、拙者が行つて彼奴を搜して、たとへ鯨の腹の中へ身を隱してをらうとも、誓つて見付け出してやらうというたことは覺えて居らうがの。』

『そりやさうでござりますが、それももう何の益にも立ちませんわい。』とアンドレスは言つた。

『益に立つか立たんか今に見せてやる。』とドン・キホーテは言つた。そして言下に彼は慌しく立ち上り、サンチョーに命じて、人々の食事をしてゐる間、草を食うてゐたロシナンテに面勒をはめさせた。ドロテアは、何をなさるのですかと彼に訊ねた。彼はその百姓を捜して、その不義の行ひを懲らし、そして世間の百姓が擧つて反對しようとも、最後の一文までもアンドレスに拂ふのを見屆ける積りだと答へた。それに答へて彼女は、貴方樣はお約束の通り、私のことを片付けておしまひなさらぬ內は、何事にも手をお出しになつてはならぬといふことをお忘れになつてはなりません。またこの事は誰よりも貴方が一番よう御承知の筈ですから、私の國からお歸りになるまでは、その逸る心を抑へておいでにならねばなりません、と言つた。

『そりやさうですな。』とドン・キホーテは言つた。『それでは貴女の仰しやる通り、アンドレスは拙者の歸るまで我慢せねばなりませんのぢや。しかし拙者は彼奴に復讐してその拂ひをさせん內は誓つて止めんといふことを、今一度誓言しますわい。』

『その御誓言は一向信じません。』とアンドレスは言つた、『私アもうこの世でありつたけの仕返しをして貰ふよりか、セギールへ行かれるやうにお助けを願ひたうございます。もしや持つて行けるやうな食べ物がございましたら私に下されませ。貴方樣や他の武者修行さんにも、皆さんおさらばでございます。そして丁度私の身にふりかゝつたやうに、お手前の身にも武者修行騒ぎがふりかゝつて見ればよいわい。』

サンチョーは、自分の蓄へから一片のパンと乾酪とを取り出して、若者に與へながら言つた、『それ、アンドレスよ、これを持つて行けよ。私らア殘らずがお前の不仕合せの分け前を受けとるからの。』

『何ぢや、何の分け前を受けたのぢや？』とアンドレスは訊ねた。

『お前さんに與れるこのパンや乾酪の分け前ぢや。』とサンチョーは答へた、『そしてこいつを私が惜しいと思ふか思はんかは分りはせん。何故ちうて、なア、私ら武者修行の家來ちふ者は、餓じい思ひや難澁や、またその他口でいふよりか當つて見りや直ぐ分るやうなことをうんと辛抱せにやならんのぢやからの。』

アンドレスはそのパンや乾酪を摑んで、そしてもう誰もその上何も與れないと分つたので、お辭儀をして歩き出し

た。しかしその別れ際にドン・キホーテに言つた、『後生ぢやから、武者修行さん、いつかまた私にお逢ひなさることがあつたら、たとへ私がずた〳〵に刻まれてをるところでも、私を助けも救ひもして下さらずに私の不仕合せのまゝ打棄つといて貰ひましよ。私の不仕合せは大したことでもあるまいが、お前さんに助けられると大變なことになつてしまひますわい。お前さんにも、今迄世に生れた殘らずの武者修行にも、どうか神樣の呪の下りますやうに。』

ドン・キホーテは彼を懲しめようと立ち上りつゝあつた。しかし彼は逸早く、誰れも追付き兼ねるほどの速力で走り去つた。ドン・キホーテはアンドレスの物語でひどく氣落ちして居たのであるが、他の人々は、まる〳〵彼の面目を失はせまい爲めに、自分等の笑ひを抑へようとて大いに氣を揉まねばならなかつた。

第三十二章　は宿屋でドン・キホーテ一行の上に起つたことどもを述べる。

彼等はその御馳走の中食が濟んだので、直ぐさま銘々乘り物に打ち跨り、そして道中別に記すに足る事變もなしに、その翌日、サンチョー・パンザの心配と恐れとの種である例の宿屋に着いたのである。サンチョーはその宿屋に入りたくはなかつたけれども、他に仕方もなかつた。亭主も主婦もその娘もまたマリトルネスも、ドン・キホーテとサンチョーがやつて來るのを見て心からの喜びを表はして出迎へた。この出迎へをドン・キホーテは嚴かに重々しく受けた。そしてこの前の時よりはもつと上等の寢臺を用意するやうにと命じた。それを聞いて主婦は、この前よりも拂ひさへ好うして貰へれば大名の爲めに使ふやうな寢臺を用意しませうと答へた。ドン・キホーテが拂ひを好くしようと言つたので、彼等は前と同じ屋根裏の室に可なりの寢臺を彼の爲めに用意した。彼は心から疲れて眠かつたので直ぐさま臥てしまつた。

その室の扉を閉めてしまふや否や、主婦は理髮師の側へ行つて、その髯を摑んで言つた、『ほんとにお前さん、いつまでも私の內の尻尾で髯を附けてゐてはいけませんよ。內の尻尾は返しなされ。私の旦那の物をさう床の上へ引き摺り廻されるのは恥でござんすからよ。その重寶な尻尾はいつも櫛差しに使うとりましたのぢや。』しかし主婦がいかにそれを引つ奪らうとしても、理髮師は渡さうとしなかつた

が、とう〳〵牧師補はその毒の計略は最早用がないから、返してもよいと言つた。その譯は、もはや理髪師は自分の名で名乗り出で、素顔で現れて、そしてドン・キホーテには、例の騎士の盜賊に剝ぎ奪られた時、この宿屋へ逃げ込んだのであると言うてもよかつたからであつた。そしてドン・キホーテがもし姫君の家來はと訊いたら、その男は姫君より一と足先きに國へ歸つて、その領内の人民どもにやがて姫君が御歸國なされる、しかも全國民の救ひ手を伴れてござると、先觸れする爲めに行つたのだと言うても差支へなかつたからである。茲に於て理髪師は快くその尻尾を主婦に返した。またそれと同時に彼等がドン・キホーテを救ひ出しの爲めに借りた附屬物は殘らず返却した。宿屋の人々は皆ドロテアの美しさに、また羊飼ひカルデニオの美しい姿にさへ驚いた。牧師補は、この宿屋で出來るだけの御馳走を用意するやうに命じた。そこで亭主は、拂ひが好いと當て込んで、可なり立派な御馳走を、彼等の爲めに調へたのである。この間中ドン・キホーテは眠つてゐた。そして彼等は、今のところ彼には食ふより眠る方が却つて立派な御馳走であらうと思つた。

食事の時、亭主を始め、主婦や娘やマリトルネスやその他殘らずの旅人たちの一團は、ドン・キホーテの不思議な狂氣の沙汰や、彼が山中での有樣などを話し合つた。そして主婦は彼と馬方との間に起つた喧嘩のことを話した。それから彼女はそこにサンチョーの居るか居ないかを見廻して、ゐないと見ると、彼の毛布上げの話を一伍一什話して聞かせたので、居合せた人々は、少からず面白がつた。しかし牧師補が、ドン・キホーテが讀んでその爲めに頭を狂はせてしまうたものは樣々の武勇傳であると言ふと、それを聞いて亭主は、「どうしてさういふことになるのか私にや分りませんわい。何故といふと、私の考へぢや世の中には武勇傳ほど面白いものア本當にありやしませんからの。そして私は武勇傳二三冊と他の書物を少し持つとりますが、そいつア私の生命でござります、いや、私ばかりぢやない、まだ大勢の者等の生命でござりますよ。それと申しますのは、收穫時になりますと、休み日にや百姓たちが此處へ集つて來ましてな、その中にや大抵本の讀める男が居りまして、その男が私の内の武勇傳を一册取り出しますと、そりやもう三十人もその上もその周圍に車座になつて、さうして白髪頭が若返るほど有頂天になつて皆じつとして聽き入りますのぢや。他人は兎に角私だけは、あの騎士が火花を散ら

して恐ろしう打ち合ふ話を聞くと自分も同じやうなことをやつて見たうて堪らんやうになりますわい。そしてさういふ話なら晝も晩も聞いて居りたうございますよ。』

『全くその通りでございますよ。』と主婦は言つた、『本當にまあお前さんが何か讀み物をじつと聞いてゐなさる時の外は、一寸でも家ぢや平穩な時はないのぢやからの、その間たけは夢中になつてしまうて、がみ〳〵叱るのを忘れてゐなさるから。』

『ほんとでございますよ、』とマリトルネスは言つた、『ほんとは私さういふものを聞くのが大好きでございますよ。あれはほんとにおもしろうございますからの。とりわけて、あの何とかいふお姫樣が蜜柑の樹の下で自分の思うてござる騎士樣の腕へ抱かれて、さうして二人の見張りをして居る年取つた侍女が妬ましいやら恐いやらで死ぬる思ひをするといふところはな。さういふところは皆んな蜜のやうでございますよ。』

『そしてお孃さん、貴女はどうお考へです?』と牧師補は亭主の娘に向つて言つた。

『私はほんとに存じません。』と彼女は言つた、『私もやつぱり聞きますが、ほんとの事を申しますと、分らぬながらに聞くのが好きでございます。けれど私の好きなのはお父さんの好きなやうな打ち合ひぢやございません。只あの騎士たちが自分のお姫樣に別れる時に口說く嘆きでございます。ほんとに時によりますと、あの嘆きを聞いて私は貰ひ泣きをすることがございますよ。』

『それではお孃さん、もし貴女の爲めに騎士たちが泣きましたら、貴女はあの人達を慰めてお上げなさいますか?』とドロテアは言つた。

『どうしますか私は知りません。』と娘は言つた、『たゞ私は、中には贅分ひどいお姫樣があつて、御自分の騎士たちを虎ぢやの獅子ぢやの、それからまだ澤山の他のいやな名前で呼ばれるといふことしか知りません。まあ本當に、あの偉い殿方を、一目逢うて上げぬばつかりで、死なせたり氣狂ひにしたりするやうな、そんな情知らずの不人情なお姫樣はどういふお方ですやら、私には分りません。そんなに氣取つてそれが何になるのか私には分りません。もしそれが操の爲めぢやと言ふのなら、何故夫婦にならんのでございませう? さうなることがあの殿方の望みぢやのに。』

『黙んなさい、これ、お前は大層さういふことを心得てをるやうぢやの。娘のくせに、さういろ〳〵知つたり話した

りするもんぢやないぞよ。』と主婦は言つた。

『この旦那樣がお訊ねになつたので、御返事せんわけには行かなんだもの。』と娘は言つた。

『さて、それでは御亭主、その武勇傳を拜見したいものですが、どうか持つて來て下さらんか。』と牧師補は言つた。

『承知致しました。』と言つて、亭主は自分の居間へ行つて細い鎖で括られた一つの古い鞄を持つて來た。それを開けて、牧師補は大形の本を三册と非常に達筆で書かれた可なり大部の草稿とを見出した。第一に彼が披いたのは「スレーヌのドン・シロンジリオ」（ベルナルドーの作、一五四五年セヴィルで出版）第二は「ヒルカニアのドン・フェリクスマルテ」（第六章の註々見よ）そして第三のは「大將帥ゴンザロー・ヘルナンデス・デ・コルドヴの傳、附ディエゴー・ガルシア・デ・パレデス傳」（一五五九年サラゴサで出版されたもので、ゴンザロー大將帥はグラナダでムーア人を、ネープルスでフランス人を討つた名將であつた。牧師補は初めの二册の表題を讀むと、理髮師を見やつて言つた『あのドン・キホーテさんの家婢さんと姪御が今此處にをればよいのに。』

『いゝや、それにや及びませんわい。こいつを中庭か爐邊へ運んで行くのは私でも結構出來ますよ。あそこへ行けば火はどん〳〵おこつて居りますわい。』と理髮師は言つた。

『何でございます！　貴方樣は私の本を燒くおつもりでござりますかい？』と亭主は言つた。

『只この二册だけぢや、ドン・シロンジリオとフェリクスマルテと。』と牧師補は言つた。

『そいぢやア、私の本は貴方が燒かつしやれにやならんやうな邪宗ぢやの半ばもんぢやのでござりますかの？』と亭主は言つた。

『お前さん、半ばもんぢやない、分派者ちふことぢやらう。』と理髮師は言つた。

『さう〳〵。』と亭主は言つた、『ぢやが、もしどれか燒かうと思はつしやるなら、どうぞこの大將帥の方かディエゴー・ガルシアの方かにして下さりませ。他の二册の內のどつちかを燒かれるよりか自分の倅でも燒かれた方がましでござりますわい。』

『お前さん、』と牧師補は言つた、『その二册の本は嘘で捏ね上げて、馬鹿らしいたはけばかり書いてあるのぢや。しかしこの「大將帥」方は眞實の歷史であつて、コルドヴのゴンザロー・ヘルナンデスの事蹟が書いてある。あの人はいろいろの偉い手柄によつて、大將帥といふ稱號を全世界から與へられたのぢや——それは赫々たる名高い名前で、それを受けるだけの人はあの人一人しかないのぢや。そしてこ

のディエゴー・ガルシア・デ・パレデスといふのは剛勇無二の強者で、エストレマンデュラのトルジロー市の有名な騎士ぢや。そしてその腕力の強さというたら、力一杯に廻つてをる水車でも指一本で止める程ぢや。また兩櫂の劍を提げて橋の袂に衝立つて、無數の軍勢をば喰ひ止めて渡らせなんだのぢや。それから又その外澤山の大勳功を樹てたから、若しあの人が書いたやうに、騎士としての謙遜や、自分の傳記を自分で書く爲めの餘計な遠慮が混らずに、誰れか自由な偏寄りの無い作者にその事蹟を書かせたら、それこそヘクトルギリシヤ神話に出づるトロイの最勇者づれや、アキリーズヘクトルを討ち取つたギリシヤ方の勇者づれや、ローランドづれの功名は殘らず蹴押されてしまうたらうぞよ。』

『さういふことは私の親父にでも話しなされ。』と亭主は言つた。『吃驚する話ぢや、水車を止めるなんて！　貴方樣は私の讀んだものを讀まつしやれば分るが、あのヒルカニアのフェリクスマルテが、たつた一と打ちの返し擊で五人もの巨人をば、丁度子供等がこしらへる小さい托鉢坊主のやうに、莢豆ででも拵へたやうにさや豆の一部を切り離せるは、中から豆の上向が恰も僧帽を被つた托鉢坊主の顏のやう眞中からまつ二つに斬り離したのぢや。また或る時は非常に仰山な強い軍勢を攻めたのぢや、その軍勢には頭の先から爪先まで甲冑で身を固めた百六十萬人から上の兵隊が居つたのを、あの人はそれを羊の群か何かのやうに殘らず追ひ散らしたのぢや。またそれから、あの強い大膽なスレースのシロンジローさんのことを、貴方はどう思はつしやるのぢや。その本に書いてあるのは、かうありますのぢや——あの人が河の上を船で通つてをると、水の中から恐ろしい大蛇が出て來たので、あの人はそれを見ると直ぐさまそれに跳び付いてその鱗立つた首ねッこに馬乘りになつて、兩手で頸をうんと絞め付けたので、大蛇は息が窒りさうになつたが、どうすることも出來んので、手を離さんその騎士を、一緒に水の中へ引き込まうと、河の底へ身體を沈めたのぢや。そして河の底へ行き着くと、そこは見るも不思議な立派な御殿やお庭の中であつたのぢや。その時は大蛇はもう年とつたお爺さんに姿を變へて、そして今迄聞いたこともない事をいろ〳〵話しましたのぢや。且那、まア〳〵じつとしてお出でなされ。これを聞いたら餘り面白うて氣が違ひますぞよ。貴方さんの好きな「大將帥」やディエゴー・ガルシアなんざア、とても話になりませんわい。』

ドロテアはこれを聞いて低聲でカルデニオに言つた、『この亭主も大方ドン・キホーテの二の舞を演りさうでござり

ますよ。』

『私もさう思ひますよ、』とカルデニオは言つた、『あの様子で分りますやうに、この人はあゝいふ本に書いてあることは殘らず、文字通りに寸分違はず本當にあつたことのやうに思ひ込んでをりますからな。これでは素足の托鉢坊さんでも、それをさうぢやないとはこの人に信じさせることは出來ますまいよ。』

『しかしお前さん、よう考へて見なさい。』と牧師補は今一度言つた、『世の中にはヒルカニアのフェリクスマルテといふ者も居らねば、スレースのシロンジローといふ者も居らなんだし、また樣々の武勇傳に書いてあるやうな、さういふ類の騎士なんていふ者は一人も居らなんだのぢや。凡て皆、丁度あの百姓衆がそれを讀んで暇を潰すやうに、暇つぶしの爲めに工夫された、他愛もない思ひ附きで出來た作り事や拵へ事ばかりなのぢや。眞實書言、決してさういふ騎士などはこの世の中には居らなんだのぢや。又さういふ手柄話や馬鹿けた事はどこにもありはせなんだのぢや。』

『そんな骨は他の犬にやつて貰ひましたよ。』と亭主は言つた、『何ほと何ぼが五つになるやら、自分の靴の足擦のとこ ろ 何處ぢややら、それさへ私が知らんやうなことを言ひなさるの。私は阿呆ぢやないからな、パン粥で養はうなどと思はつしやるなよ。かういふえゝ本に書いてあることが皆んな嘘けぢやの嘘ぢやのと私に教へ込まうとさツしやるのは、御冗談もんですよ。そしてまたかういふ本を刷つてもえゝちふ免許を下されたお上の大臣さんがたは、何でゝ嘘八百や人の氣を狂はせるやうないろ〳〵樣々の戰や魔術を刷るのを許しておくちふ人間になりますわい。馬鹿々々しい。』

『お前さん、今も言うた通り、これは私らの所在ない心を慰める爲めに、出來て居るものですよ。』と牧師補は言つた、『そして好く制度の整うた國では、仕事をしようと思はなんだり、するに及ばなんだり、することの出來なんだりするやうな人達の暇潰しの爲めに、象棋ぢやの球遊びぢやの玉突きぢやのが許されてをりますのぢや。それと同じ道理から、かういふ武勇傳は、まさか誰も之を本當の物語ぢやと思ひ込むやうに馬鹿な奴はあるまいといふ推量から、またそりや實際それに違ひないので、印刷してもよいと許されてをりますのぢや。そして今許して頂けるなら、また此處にござる方々がそれを望んでをられるなら、私はこの武勇傳なるものが、多くの人の爲めにもなり面白くも思はれる

には、どういふ特長を持つて居らねばならぬかといふことを少し言はして貰ひたいのぢや。しかし誰れかこれを改良することの出來るやうな人に、私の考へを知らせる時が來るやうに望む次第ぢや。それはさうと御亭主、私の言うたことを信じて、お前さんのその本を見なさい。そしてそれが本當の事か嘘の事かお前さんの腹を決めなされ。さうすりやお前さんには餘程ためになりませうわい。さうしてどうかお前さんも、あの客人ドン・キホーテが跛になつたと同じ足を跛にせんやうに願ひますのぢや。』

『その御心配にや及びません。』と亭主は答へた、『私は自分で武者修行するほどに氣が狂ひはしませんわい。何故と申しますと、私はもう、あのやうな名高い武者修行たちが世界を歩き廻つたといふ時代と今時とは、世間の樣子が違ふのをちやんと知つとりますからの。』

サンチョーはこの會話半ばに其處へ出て來た。そして最早今日は武者修行が流行らないといふことや、また武勇傳は皆な癇けや嘘だと言はれてをることなどを聞いて、彼は非常に氣を揉み、力を落したのである。そこで彼は、主人の今度の旅の結果がどうなるかを見屆けて、若しそれがうまく主人の期待してをるやうにならぬなら、彼を捨てゝ自分の妻子や平常の働きに歸らうと決心したのである。

亭主は鞄や本を持つて行かうとしてゐたが牧師補は彼に言つた、『アもし、そんな上手な手で書いてあるその書き物は何ですか見せて下され。』亭主はその草稿を取り出して、お讀みなさいと彼に手渡した。そして彼はそれが八帖綴の寫本で、その始めに大きな文字で「無分別なる好奇心の小說」といふ表題の認めてあるのを見た。牧師補は三四行默讀してから言つた、『全くこの小說の表題は惡うはないやうに思はれる。私はこれを悉皆讀んでみたいと思ふ。』それに對して亭主は答へた、『それぢや先生樣讀まつしやれたらようござりませう。こりやどのお客さんが讀まつしやれても、中々面白いと言うて呉れろ〳〵となか〳〵熱心にせがまれた位ですからの。ぢやが私は、この鞄や書き物を此處へ忘れて行かつしやれたお方が、何時かまた返つてござるぢやらうと思ひますで、人にや與りませなんだ。そして私はこの本を手放すのは惜しいが全く持主へ返さうと思ひますのぢや。私は宿屋家業こそしてをりますが、やつぱりキリスト信者でござりますからな。』

『なるほど、そりや尤もぢや。しかしそれはさうと、この小說がもし面白かつたら、寫しとるだけは許して貰はにやな

りませんぞ、』と牧師補は言つた。

『そりアもうお易いことで。』と亭主は答へた。

彼等が話してをる間に、カルデニオはその小説を取り上げて少し讀んで見たが、牧師補と同じやうに考へたので、これを皆なに聞えるやうに讀んで下さいと牧師補に頼んだ。

『讀みませうとも。もし、讀むよりも、眠つて時をすごした方がよいと、思はれさへせんならば。』と、牧師補は言つた。

『何かの物語を聽きながら時を過ごせますなら、私には十分休息になります。私の心はまだ十分に靜まつてをりませんので、時が來ましてもなか〳〵眠れませんから。』とドロテアは言つた。

『さてさういふ事なら、たとへこれが好奇心一點張りの作であらうと讀んで見ませう。大方これにや何かおもしろいことがありさうです。』と牧師補は言つた。

ニコラス親方も讀んで呉れるやうにと附け加へて頼んだ。サンチョーもまたさうした。牧師補はそれを見て、それが皆の者に樂しみを與へ、且つ自分もそれを受けるのだと思つたので、かう言つた、『さてそれでは、皆さんお聽きなさい、小説の始まりです。』

第三十三章　には『無分別なる好奇心』といふ小説が書いてある。

イタリーのタスカニーといふ州の富める名高き市なるフロレンスに、富德を兼ねたアンセルモーとロザリオーの二人の紳士があつた。この二人は、凡ての友人知人から、特に「二人仲好し」と呼ばれるほどの大の仲好しであつた。二人とも未婚で、若くて、年輩も同じく趣味も同じかつたので、それがやがて二人の間に友情を結ばせる理由になつたのであつた。尤もロザリオーの一番好きなのは狩獵の娯みであつたが、これに比べるとアンセルモーの方は幾らか色戀にその娯みを求めがちであつた。しかし折に觸れて、アンセルモーは自分の趣味を棄てゝロザリオーのに從ふやうにするし、又ロザリオーは自分の趣味を抑へてアンセルモーのに合はせるやうにした。さういふ風で二人の好みは最も正確な時計でもこれに上越すことの出來ない程にぴつたりと互に歩調を合せてゐた。

アンセルモーは同じ市の生れの美しい良家の處女と深い戀に陷つた。それは非常に上品な兩親の娘で、また娘自身

も非常に上品な人であつたので、遂に彼は、自分のする事は何一つとしてこの人を措いてはせぬといふ程の親友ロザリオーの承認を經て、彼女をその兩親から妻に貰ひうけようと決心するに至つた。そしてそれを實行した。ロザリオーはその使ひの役を受け持ち、そしてその談判をうまく運んで、間もなく望みのものを友の手に入れさせて滿足させた。またカミラ頌の名のは、アンセルモーを自分の夫とすることが出來たので非常に喜び、こんな目出度い仕合せを自分に與へる橋渡しとなつて呉れた神樣やロザリオーに絶えず感謝を捧げたのであつた。

婚禮の後數日間は慣例の祝ひ日であるから、その最初の二三日は、ロザリオーはこれまで行き慣れてゐた通りその友人アンセルモーの家へ度々行つて、友人に對しまたその目出度い祝ひに對して敬意を表し、出來得る限り何かにつけて友人を滿足させるやうに力めた。しかし祝ひの數日が過ぎて、訪問や祝賀もいくらか間遠になる頃になると、彼はわざとアンセルモーの家へ行くのを止めるやうになつた。それは、常識ある人々は自然と誰れも感ずるであらうやうに、結婚した後には獨身時代ほど、さう度々友人の家を訪問するものではないと思はれたからであつた。その譯は、たとひ眞實な純粹な友情はどんな事があつたとて疑ひを懷くやうになりやうもなし、またなるべきものでもないとはいふものゝ、それでも結婚した人の感情は、この骨肉の兄弟からでも傷けられがちだといふ位微妙なものであるから、友人からはましてのことである。アンセルモーはロザリオーの訪問の絶えたことに氣が附いて、もし結婚のために今迄通り二人の交際が續けられぬと前以て分つてゐたら、決して結婚するのではなかつたと言うて、そのことを恨んだ。そしてまた、自分の獨身の時代に、二人が肝膽相照らして、あの「二人仲好し」といふやうな美しい名前を得たとすれば、やきもきと無用の心配をして、あのやうな珍らしい目出度い名前を失くするには忍びない、そこで彼は、もし二人の間にかういふ言葉を使つてよいものならば、どうか私の家を自分の家と思うて以前の通りに往來して下さい、家内のカミラは私が彼女に持つて欲しいと願ふやうな氣心よりは持たないし、また私ら二人の友人が互に愛し合うてをることをよく知つてをるから、貴方がこのやうに冷淡になつたのを見て心を痛めて居ると言つて、訪ねて來るやうに頼んだ。

アンセルモーがロザリオーを說いてこれまでの習慣通り

に自分の家へ遊びに來て呉れるやうに言つた以上のやうな言葉や、まだその上のいろ〳〵の言葉に對して、ロザリオーは考へ深い賢い分別ある答へを與へて、自分の好意によつてアンセルモーを十分に滿足させた。そしてそれは一週間に二日と、その上休日とに、ロザリオーが彼と共に食事をする爲めに必ず訪れて來るといふ約束であつた。しかしこの約束は二人の間に出來たとはいふものゝ、ロザリオーの方では自分の面目よりも寧ろ友人の面目を重んずるところから、それは友人の氣のすむやうにするだけに止めて置かうと決心したのであつた。美しい妻を天から授かつて結婚した男子は、その妻の交際する朋輩がどういふ人々であるかを好く考へると共に、自分の家にはどんな自分の友人が出入りするかをも好く考へなければならぬ。何故といふに、市場や敎會やお祭りや又は參拜（祭禮の儀式の時間外に個人の場合的に敎會へ參拜すること）に（これは常に夫たる者が、その妻に禁ずることの出來ない機會である）、出來ない事や相談されない事が、最も心易い婦人朋輩なり親類なりの家では容易に果たされるからである。ると、ロザリオーはかう言つたが、それは正にその通りである。ロザリオーはまた言つた、結婚した男子は皆その行ひに於て得て陷りがちな怠慢の罪を殘らず指摘して呉れるやうな友人を有つて居らねばならぬ。何故といふに、夫がその妻に對して有する深い愛着の心から妻を戒めなかつたり、或ひは妻を煩はせまい爲めに、それをするとせぬとは夫の名譽不名譽に拘はるやうな事でも、せよとかするなとかと妻に言ひ兼ねることが往々あるからである。そしてこんな種類の過失は、もしそれを注意してくれる友人さへ有つて居れば、やす〳〵と改められるのであると。しかしながらロザリオーの欲しがつて居るやうな、さういふ正しい忠實な誠實な友人がどこにあらうか？

實際、私は知らない。たゞロザリオーのみはさういふ友人であつた。蓋し、彼は最善の注意と用心とを以て、その友人の名譽を擁護し、カミラのやうな美人のをる家に、自分のやうな富裕で良家の生れで、その上我れながら氣附いてをる通り人好きのする若者がさう度々訪れて行けば、やくざな世間の物好きな意地悪い眼には屹度變に見られるに違ひないと思つて、それで約束に依つてその家に行くべき日數を力めて少くし、切り縮め、節減するやうにしたのである。また彼の潔白と令聞とはよく讒誣の舌に轡をかけ得るであらうが、それにしても、彼は尙自分の美名をも友人の美名をも傷けたくなかつた。そこでこの理由から、約束

の日は大方、さも已むを得ない事のやうに見せかけて、何か他の用事にそれを費した。そこでその日になるとその大半を、一方では催促に、他方では言ひ譯にとられてしまふ位であつた。しかし三人が市外の或る牧場を一緒に散歩してゐた時、ふとしたことから、アンセルモーはロザリオーに次のやうなことを話しかけた。

『ねえロザリオーさん、神樣は私をあんな立派な兩親の子として生んで下されて、そして物惜しみなさらぬ御手によつて財産も謂はゆる天賦の才能も下さつたし、そしてまた殊に何よりも友人としては君を、妻としてはカミラを——眞價通りに尊敬することは出來ないまでも、せめて精一杯私の尊敬してをる二つの寶を——與へて下さつたので、私は神樣へどれ程お禮を申しても十分とはいはれんと思うて下さい。まア普通には人はこれだけ立派なものがあれば幸福に暮らして行くに何の缺ける所もないものですが、それでも尚私は、全世界の中で最も不滿足な不仕合せな者ですよ。といふのは、もう何時からのことか自分にも分りませんが、私は實に異樣な法外な一つの望みに惱まされ苦しめられ通しで、自分獨りになると我れながら吃驚して、我れと我が身を責め叱り、そんな考へは抑へて隱して置かうと努めて居りますが、到底その效もなく、どうしても自分でそれを公に世間に知らせるやうに一生懸命骨折つて居るやうに思ふ位です。そこで詰り、それは必ず世間に知られねばなりますまいから、私はいつそ、君だけにはそれを打ち明けて置かうと思ひます。さうすれば屹度君は眞の親友として快く私を慰めて下さるから、その爲めに掻き亂されて居る私の心の痛みも直ぐさま取り去られるであらうし、また君の智慧を借りれば自分の愚かさから來たこの不仕合せも却つて仕合せに變らうと思ひますからな。』

アンセルモーの言葉はロザリオーを吃驚させた、それはかういふ長々しい前觸れや前置きの眞意を圖り兼ねたからである。そしてロザリオーはその友人の心を煩はして居る願望とは一體どういふことであらうかと想像して見たけれども、彼の推測はなか〳〵その眞相に達しかねた。そこでこんなことに氣を揉んで心配するのを免れるために、彼は友人に向つて、我々二人の親しい間柄に、そんなに遠廻しに君のその一番祕密な考へを打ち明けるとは怪しからんことである。私がその相談に與つて心配を除き、望みを成就させるやうに力を貸す事の間違ひのないことはよく分つて居るのにと言つた。

『全くその通りです』とアンセルモーは答へた、『ではロザリオーさん、お言葉に甘えて話しますが、私を苦めて居る願望といふのは、私の妻のカミラは、私が今思つて居るやうに立派な申し分のない者であらうかどうか、それを知りたいと云ふことですよ。そしてこの點を本當に十分確めるには、どうしても黄金の純不純を火力で試めすやうに、彼女の操の純不純を試めして見る外はないと思ふのです、ねえ君、私の考へでは女の貞不貞は唯その女が誘惑されるかされぬかによつて分るのです。また執念深い男の約束や贈り物や涙や口説に從はぬ女だけが堅固なのです。一體誰一人からも悪い方へ誘はれぬやうな女が操が正しいからといつて、何でそれを有難がるに及びませう。又操を破られるやうな機會に一度も出逢はなんだやうな女や、或ひは女房の不埒を見露はすが最後生命を奪つてしまふ夫なことを分つて居るやうな女が、しとやかで愼み深いとて、それに何の不思議がありませう？　それですから私は、恐いためや機會のない爲めに操を正しくしてきた女と、また誘惑や試みに逢ひながらも勝利の冠を獲て來た女とを、同一視しようとは思ひません。そこでかういふ理由から、また私の抱いて居るこの考へを是認し辯護するだけの力あるその他の理由から、妻のカミラにも一度かうした虎口を通らせ、言ひ寄られたり口説かれたりして、自らその火に練られ試めされるやうな目に逢はせて見たいのです。しかもその戀を持ちかける者は相當の立派な男子と云ふことにして。そしてもしか、今私の思うて居る通りに、彼女がその試みから見事凱旋して來れば、私は自分の幸福を無二のものと思ひませう、私は「我が望みの杯は充ち溢る」とも、また「誰か見出さんや」と古聖の言はれたその貞節の婦人が、私の手に入つたとも言ひませう。また若しもその結果が私の期待とあべこべになれば、私の考へが間違うて居らなんだことを知り得たことに滿足して、自ら高價を拂うて購うた經驗から當然起つて來る心の痛みは、愚痴をこぼさずに忍びませう。そして、君が私のこの望みに反對して幾ら意見をしたところで、私はそれを實際にやつて見ずには置かぬから、ねえロザリオーさん、どうか君は私の心をこめたこの目的を果たす爲めの道具になることを承知して下さい。私はその目的の爲めに機會を君に與へて、操の正しい、立派なたしなみ深い、心の氣高い婦人を漁るに必要ぢやと私の考へるだけのことは、何一つ缺かしはしますまい。それにまた殊に相手が君であれば、假令カミラが征服せられたにせよ、その征

服は大詰まで押しつめられることはなく、德義心に阻まれて、まづ行つたものと認められるやうなところで行きどまりにならうと思ふので、それでこの骨の折れる仕事を君にお頼みしたいと思ふのです。かうすれば、私は唯さういふ心を抱いただけで外には何の間違ひもせぬことになるし、またその心の上の咎も君の沈默の德の中に葬り去られるでせう。さうなれば私にかゝはつた事はもう永遠の闇に葬られたも同じことです。それ故もし私に人生と呼ぶことの出來るものを樂ませようと思はれるなら、いや〳〵ながらぐづぐづしながらでなく、私の切望する通り熱心に一生懸命でまた私の信ずる私ら二人の友情の眞實を捧げて、直ぐさまこの繼の仕事に取りかゝつて貰ひたいのです。』

アンセルモーがロザリオーに言つた言葉は右の通りであつた。ロザリオーは、先きに述べたやうなことを言つたきり、非常に注意ぶかくこれに耳傾け、友人の話し終るまで口を噤んでゐた。やがてもうその上言ふことのないのを見て、恰も未だ嘗て見たことのない程の不思議なものを見て居る人のやうに稍しばし彼の顏を見戍つてから言つた。『アンセルモー君、君の言つたことは到底冗談としかとられませんよ。もし君がそれを眞面目で言うて居ると思うたら、私は其處まで言はせはせなんだでせう。つまりそれに耳を假さずに、その長談議を止めさせたでせう。全く私は、君が私を解してゐないのかそれとも私が君を解してゐないのかと疑ふのです。しかし、いや〳〵、私は君をアンセルモーと知り、また君は私をロザリオーと知つて居る。たゞ悲しいかな、君は元のアンセルモーでなく、隨つて私をばもとのロザリオーでないと思うて居るに相違ないと私には思はれる。何故といふに、君が今私に言うたことは、私の親友のアンセルモーの言ふべきことではないし、また今私に求めた事は君の知つて居るロザリオーに賴むべきことではないのぢや。眞實の親友は、或る詩人の言うたやうに「祭壇までも」眞の友たるを示し、互に役に立ち合ふものです。その詩人の言葉の意味は、神樣の御意に逆らつたことにはその友情を役立てまいといふことぢや。そして、もしこれが友情に關する一異教徒（プリュタークがペリクの感じであつたとすればまして神聖なる友情は如何なる人間の友情のためにも失ふべきでないと知つてをるキリスト信者の友情に對する感じは尙更のことではないか？　若し或る人がその友人への義務を果たすために、神への義務を棄てるまでになるといふには、此細な事や一時の事の爲めであつてはならぬ、必

ずその友人の生命や名譽にかゝはるやうな大事の場合でなければならぬ。そこでまづ、アンセルモーさん、一體君の生命と名譽の二つの中のどれが危ないというて、私が君を滿足させる爲めに身を危くし、また君の賴むやうなそんな厭らしいことをせねばならんのぢや？　確かに、何方の爲めでもない。それどころか、私の見るところでは、君は君の生命や名譽を剝ぎ奪らせ、隨つて同時に私からもそれ等のものを奪はせよう爲めに、私に骨折らせ働かさうとして居るのぢや。何故といへば、私が君の名譽を奪へば、名譽なき人は死せるに劣るだから、私が君の生命まで奪ふことになるのは明白です。隨つて、君の望み通りにそんな君を傷けるやうなことの道具になつた私も、やはり名譽を失つて、その果ては生命をも失ふことにはなるまいか？　まア聞きたまへアンセルモーさん、君の目論見について私の感ずることを言うてしまふまでは返事をあせるには及ばんよ。後でゆつくり君の答へる暇も私の聞く暇もありませうからな。』

『どうなりとも、君の好きなことを言ふがよい。』とアンセルモーは言つた。

そこでロザリオーは言葉をつゞけた、『アンセルモーよ、君の心持は、今といふ今は、ムーア人らが常にもつて居るやうな心持ぢやと私には思はれる。ムーア人らは聖書の文言によつても、また分別の吟味を經た道理や、信仰箇條に基いた道理によつても、自分らの教理の誤りを覺ることが出來ずに、明白な、たやすい、見易い、「各同量のものより各同量を減ずれば、その各の殘りの量も同量なり」といふやうな否み難い數學上の證明で一點の疑ひも殘さずに證明の出來る實例がなければ分らんのです。そしてあいつらがその教義の誤りを言葉で直しても分らんとすれば、また事實分らんのですが、手眞似で以てその眼の前へ見せつけねばならんのです。そしてこんな事までしても矢張り私等の神聖な宗教の眞理を彼等に分らせることは誰にも出來はしません。これと同じ手續を君に對しても採用しようと思ふのです。何故といふに、君の心に起つてをるその願望は非常に馬鹿々々しくて、道理らしい一切のものから非常にかけ離れてをつて、その君の愚かさを——といふより外に今のところ名づけやうがないが——理窟で正さうとしても只隙潰しに過ぎまいと思ふからです。そこで私は君をそのまゝ、その善からぬ願望の罰として、愚かさのまゝに打ち棄てゝ置きたい程です。が、しかし君に對するよしみから、とても

君をばみす〳〵破滅の中へ捨てるには忍びないから、それほど苛酷に君を取り扱ふわけにも行きません。さうでせう、アンセルモーさん。君は無理にも私に命じて、つゝましやかな婦人を口説かせ、操正しい婦人を釣り出させ、純潔な心の婦人に言ひ寄らせ、愼み深い婦人に戀を仕掛けさせようと言うたではないか。さうでせう？　さうぢや、君はさう●ひました。そこで、もし君が自分の妻をつゝましやかな操正しい純潔な愼み深いものと思つて居るとすれば、君の求めるものは一體何ですか？　またあの婦人が私のあらゆる襲撃を排して見事に凱旋するであらうと――そりや疑ひなくさうでせうが――信ずるとすれば、その時になつてあの婦人が現在有つてをられる美名に優つた美名を與へることが出來ると君は思ふのか？　それともその時にあの婦人が、何かの點で現在よりも立ち優ることになると君は思ふのか？　君はあの婦人を自分で言ふ通りのものとは思つてゐないのか、それとも自分の求めてをることの何であるかが自分に分つてゐないのか、この二つのどちらかです。もし君が口でいふ通りにあの婦人を思つてゐないなら、何故君はあの婦人を罪あるものとして取り扱ふ代りに、君に取つて最上と思はれる方法で吟味しようとはしないのか？　しかしあの婦人が若し君の信ずる通りの貞女なら、眞實そのものを試すやうなことは無用の業ぢや。何故といへば、試した後も試さん前と同じ値打ちであらうから。そこで結着するところは、身の爲めになるといふよりも却つて毒になるやうなことを企てるのは、無分別な無鐵砲な人間のすることである。ましてこれは、どうしてもせねばならぬと强ひられた譯のものでないばかりか、却つてそんなことをしたら、それこそ遠くから見てさへ明かに狂氣と見えるやうな事柄なのだから尚更の事です。

「難事は、神の爲めか、世のためか、又はこの二つの爲めに企つべきものです。神の爲めになされることといふのは、聖者たちが人間の身體でをりながら天使のやうな生活をしようと企てゝするやうなことで、世の爲めになされる事とは、即ち渺茫たる大海や、種々の風土や、樣々の異境を超えて行く人々の、所謂運命の惠みを得る爲めにする事業です。また神と現世と兩方の爲めになされる事とは、勇敢な兵士等の事業です。彼等は敵の城壁に大砲の彈丸で出來た程の裂け目を見つけるや否や、一切の恐れを捨てゝ、何の躊躇もなく、又彼等を威嚇する眼に見えた危險をも物ともせずに、その信仰やその國家やその國王を護らうとする一念に勵

まされて、大膽に身を躍らせて、待ち構へてをる萬死の中へ突進するのです。かういふことこそ人々の常に企てる事柄です。またこれを行うてこそ、たとへいかほど困難と危險とに充ち滿ちて居らうとも、そこに名譽も榮光もまた獲物もあるわけです。しかし君がやつて見たいと言つて居る事は、神の榮光も目出度い幸福も、人間の世の譽も君に與へはせぬ。何故といふに假令その結末が望んで居る通りにならうとも、君は現在の君に優つた幸福も富も名譽も得るわけではない。また若しその結果が思はん方に行つたなら、君はとても想像も及ばん程の不仕合せに陷つてしまふのです。といふのは、さうなつた時、君はその身にふり掛つた不仕合せは誰も知らぬと思うたとて何の役にも立つまいからな。それを君が自分で知つて居るといふことだけで君を責め苦しめるには十分です。そこで私の今いふ事に誤りがないといふ證據として、私はあの名高い詩人ルイジ・タンシローが彼の作「聖ペテロの涙」の第一篇の終りに書いてをる一節を誦んで聞かせませう。それはかうぢや——

夜明け徐ろに近づく程にペテロの心には
苦惱と慚愧はいやましにますばかり。
我れを見る人眼はなしと、よく知れども、
尙われとわが身にぞ慚愧を覺えし。
百千の人の眼に曝さるゝとも、匿るゝとも、
氣高き胸の痛みは同じからん。
罪ある魂こそ慚愧の贄なれ、
よしや天地の外は何人もその慚愧を知らずとも。

『君もその考へを祕密にしておいても悲しみは脫れられないで、却つて絶えず淚を流すであらう。それは眼の淚でなければ、胸からの血の淚を、丁度わが詩人アリオストが傳へてゐるあの魔術の盃（貞婦の夫がこの盃から飮まうとすればこぼれるといふ）から飮んで見ようとした馬鹿な醫者の流した淚のやうに、血の淚を流すであらう。それをあの賢いリナルドー（アリオストの作に出る武士）は分別してその盃から飮むことを拒んだのです。これは詩中の作り話であるかも知れんが、それでも尙よく心してこれに學びこれに倣ふに足るだけの敎訓はもつてをる。その上私がこれから話すことを聞いたら、君がしようとして居る大誤りを悟るやうになるでせう。

『さてアンセルモーさん、假りに君がふとした仕合せから、最上等の金剛石を手に入れてその正當な持主になつたとするんぢやな——その金剛石といふのは、それを見るかぎりの寶石商がこの玉の優秀純粹なのを感嘆してしまう

て、異口同音に金剛石としてはこれ以上に純粋で優秀で精巧なものはありやうがないと言ふのです。君もまた、その反對のことは知らう筈がないので、やはりさう信じてをるとする。然るに君が、もしその玉を取つて、鐵砧と鐵鎚との間に置いて、それが果して人々の言ふやうに堅くて質のよいものであるかどうかを、腕の力や鎚の打撃で檢べたいと思ふとしたら、それは道理にかなうたことでせうか？そして君がそれをやつたとする。そして若しその玉がさういふ馬鹿な試しに堪へたとしても、別にその値打ちが增すでもなければ評判が高まるでもあるまい。しかしその玉が或は萬一碎けたら、それこそ萬事休せりではあるまいか？言ふまでもなくさうに定つてゐる。お負けに玉の持主は皆から馬鹿と思はれることになるのです。そこでねえアンセルモーさん、考へて御覽なさい、つまりカミラは君が見ても他人が見ても同じく最上等の金剛石で、隨つてあの婦人を碎くやうな危險を冒すといふことは、道理に反したことです。若しあの婦人がその儘で害を受けなんだところで、現在持つてをる値打ちが增すことにもならんし、もしあの婦人がそれに堪へ切れずに負けたとすれば、君はあの婦人を奪はれるのです。しかもその破滅の源は君の身から出たことなので、我れと我が身を嘆くより外に仕方はないのですよ。世の中には貞節な操堅い婦人にました寶玉はなく、また婦人の名譽は全く評判にあるといふことも考へて御覽なさい。また君の細君の名譽の立派なことは君も承知のことなのに、一體何の爲めにその事實を疑はうとするのです？ねえ、女といふものは不完全な動物で、女の行く道には躓かせたり轉ばせたりするやうな邪魔物を置かずに、さういふ物を取り除けて、あらゆる障碍物を取り拂うて、何の差し障りなく自由に行くべき道を往かせて、完成の域、即ちそれは操堅いことですが、それに到達させねばならんではありませんか。博物學者の言ふところでは、貂は小さい獸で純白の毛皮を持つてをる。それで狩人が捕へようとする場合には、かういふ仕掛けを用ゐるさうです、即ち貂がいつもやつて來て通行する場所をちやんと確かめてをいて、泥でその通り路を遮るのです。さうして置いてから、聲を立てゝ貂をそゝり出し、その場所の方へ追ひつめる。すると貂はその泥のところまで來るや否や、立ち止る。そしてその泥の中を通つてよごれて、自分の生命よりも自由よりも大事に思つてゐるその純白の毛を汚すよりは、寧ろ甘んじて生捕りになるのです。貞節ある操堅い婦人は貂のやう

なものです。婦徳といふものは雪よりも白く純潔なものです。そこで婦人にその徳を失はせずにそれを保存させて置きたいと思ふ人は、狩に用ゐられるのとは違つた方法を採らねばなりません。さういふ人は婦人の前に、しつこい戀男どもの贈り物や御機嫌とりなどといふやうな泥を置いてはならんのです。何故なれば、恐らく——いや恐らくではない——婦人は自分自身の中には、かういふ邪魔物の上を通つたり踏み越えたりする程の十分な徳や生來の力をもつては居らんからです。さういふ物は取り除けて、そして徳の輝かしさや美名の美しさを婦人の前に置かねばなりません。また貞婦は、呼吸がかゝれば直ぐ澤を失うて曇りがちな澄み輝く水晶の鏡のやうなものです。貞婦は恰も寶物を取り扱ふやうに扱ひ、崇めて、それに觸つてはなりません。貞婦は丁度薔薇やその他の花の咲きこぼれる美しい花園をば、その庭の持主が何人にも侵入させず、また花を摘みとらせずに護つて大事にするやうに、さういふ風に大事に護られねばならんのです。持主でない者等は、遠いところから鐵の格子を透かして、その薫りと美しさを見せて貰へばそれで澤山です。最後に、丁度心に浮かんで來た詩の文句を誦んで聞かせませう。それは私が或る當世喜劇の中で聞いたもので、私等が論じてをる點に丁度當て嵌ると思ひます。一人の賢い老人が、若い娘をもつてをる今一人の老人に忠告して、その娘を閉ぢ籠めて、見張り番をして大事に匿まうて置けといふのです。そしてそのいろ〳〵の言葉の中にこんな言葉を用ゐてをる——

女は鏡のやうなもの
毀れ易いが常なれば
物好き餘りに試すなよ
試した果はどうならう？

毀すのは易いこと
直しのきかぬ代物を
毀させるのは馬鹿なこと。
元にかへせぬ代物を。

されば、人皆これを信ずべし、
またそのわけも明かぞ。
ダナエさへ居るならば
黄金の雨さへ降るものを。

ダナエはギリシヤ神話中の女神にて、その父これを銅製の城中に閉ぢ籠したるも、ジユーピス神黄金の雨と化して來り、ペルシユースを生ましむ、との傳話がある

『アンセルモー、私がこれまで言うたことは殘らず、君の事に就いて言うたのです。これからは私の事に就いて言ふが順當です。また私が餘りに長談議をしても、それは御免を願ひたい。つまり君は迷宮に入り込んでゐて、私に救ひ出して貰はうとしてをるから、已むを得ないことです。『君は私を自分の友人と思うて居て、しかも私から名譽を奪はうとしてをられるが、それは全く友情と兩立せんことでせう。また君はそれを望んでをられるばかりでなく、その上君の名譽をも私に奪ひ取らせようと思うてをられる。君が私の名譽を奪はれることは明白です。何故といふに、もし私が君の求めに從うてカミラへ戀を持ちかけたら、もとより私は自分の位置なり君の友情なりに對する義務に甚だしく叛いたことをすることになるのですから、あの婦人は必ず私を恥も人情も無い男と思ふでせう。また君が私をして君の名譽を奪はしめるのも疑ひない。何故といふに、私が横戀慕を持ちかけるのを見れば、カミラは自分の方で何か輕々しい隙を見せたので、そこにつけ込んで私が卑しい願ひを打ち明けるやうな元氣を得たものと推量するであらう。そしてあの婦人が辱められたと思へば、その辱めは連合ひの君にもさし響くことになる。さうなるとそこから普通ありがちのことが起つて來る、卽ち不身持ちな女の亭主は、たとへ自らそれを悟らずとも、また自らその女房の不品行に導火を與へなんだにしても、或ひは又(不注意や不精から)身の恥を防ぐ力を持たなんだとしても、さういふ事情に拘らず、厭はしい惡名を負はされて、女房の罪狀を知る限りの人々からは、氣の毒がられはせずに却つて一樣に輕蔑の眼で見られるのです、たとへその人々は、亭主が自分の身の落度からではなく、惡い連合ひの亂行のお蔭で不仕合せになつたのぢやとは知つて居ても。しかし不貞な女房の亭主は、たとへその亭主が女房の不身持ちを知らずに居らうと、またそれが自分の咎でなからうと、自分では何もしなかつたとしても、また女房にもさうするやうな導火を與へなんだとしても、何故やはり辱を受けるか？　その譯を君に話しませう。辛抱して私の言ふことを聞いて下さい、皆君の爲めになることであらうから。

『神樣がこの世の樂園で私等の最初の兩親をお造りになつた時のことを聖書はかう記してをる——神樣はアダムを深く睡らせて、その睡つてをる間にその左の脇から肋骨を一本取つて、それで私等の母なるイヴを造り給うた。そしてアダムは眼覺めてからこの女を見て言つた、「これこそわ

が骨の骨、わが肉の肉」ぢやと。そして神様は仰有つた、「これ故に人はその父母を離れて、その妻に好合ひ、二人一體となるべし」と。その時、わづかに死によつてのみ解かれるほどの強い羈絆を以て、神聖な結婚の典禮が定められた。そしてこの不思議な典禮は、二人の異なつた人間を同じ一體とするやうな力と德をもつてをる。まして操堅い二人が結婚した時にはそれどころでない。それは、たとへ二つの魂を有つてゐても、意はたゞ一つであるからです。それ故またかういふことになる、妻の身はその夫の身と一體になるから、妻の身にふりかゝる汚れやそれの招く害は、前にも言うた通り、たとへ夫は何等その導火を與へなんだにしても、またその夫の身にもふりかゝるのです。足とかその他の身體の一部の痛みは、皆同じ一つの身體にあるのだから、全身に感ぜられる。また頭が、足の傷に何の導火も與へないでも、やはり痛みを感ずるやうに、夫は妻と一體であるから、妻の不名譽の分け前を受けるやうになるのです。また世間の名譽不名譽は凡て肉體から來るものである。そして不屈きな妻の不名譽はその類のものであるので、その夫は、自分ではそれに氣附かずにゐても、不應なしにその分け前を擔うて、恥をかゝねばならんのです。そこでアンセルモーよ、君は自分の操堅い細君の平和を掻き亂さうとするの危なさを知りたまへ。何といふつまらぬ無分別な好奇心から、君の操堅い細君の胸に今は靜かに休らうて居る煩惱を煽り立てやうとして居るかを知りたまへ。君が一切を賭して得ようとするところは極めて少なくて、而もその失ふところは極めて多く、到底私にはそれを言ひ表はす言葉はないので、言はずに置きます。しかし私がこれ程までに言うても、君のその善からぬ志を變へさすことが出來んとあれば、君はその不名譽や不仕合せを作る道具としては誰れか別の人を見付けなさい。私はたとへこのことで君の友情を失ひ、私にとつてはこの上ない大損害を受けようとも、さういふ者になることはお引受け出來ません。』

かう言ひ終つて、賢い善良なロザリオーは默した。そしてアンセルモーは、氣を揉んで考へ込み、稍しばしは何と答へることも出來なかつた。しかしとう〳〵言ひ出した、『ねえロザリオーさん。君が見て居られた通り、私は君が、事を分けて私へ言はれたことは殘らず氣をつけて聞きました。また君の議論や實例や比較を聞いて、君が優れた智力をもつて居られることも、また君の眞の友情が完全の域に達してをることもよく分りました。それと共に、もし私が君の

意見に從はずにわがまゝを通して行つたら、私は善から逃れて惡を追ふのであるといふことも認めて白狀します。それはさうですが、つまり私は今女どもがよく惱まされる病氣に罹つてゐるのですよ。その病氣が起ると女たちは土塊とか、漆喰とか、木炭とか、それからその他まだもつとひどい、喰ふは愚か見るばかりでもいやなやうなものを食べたがるのです。それで私を癒やすには何かの手段に賴らねばなりますまい。そしてそれは、若し君がほんのよい加減なお役目ばかりの遣り方ででもよいから、カミラへ戀じかけの序幕だけでもやつて下されば、やす〳〵と癒るのです。カミラはその最初の襲撃で自分の操を破るやうなそれ程弱い女ではありますまいから、それだけ試みて下さりさへすれば、私はそれで滿足しようし、また君もそれで私の生命を救ふばかりでなく、私の名譽を墮さぬやうに說得したといふわけで、友人としてなすべきことを果たしたことになりませう。そしてそれはどうしても君がせねばならぬことなのです、そのわけは只一つです、卽ちこの通り私はこの實驗を行はうと決心してゐるのですから、君として私の弱點を他人に打ち明けさせるには忍ぶまいし、また君が失はせまいと力めてをられる私の名譽を墮させるのが本意でもありますまいから。そして君が戀を持ちかけて居る間は、君の値打ちはカミラの眼にはその價値を失うてしまはうけれども、それは何でもない、大したことではありません。何故といふに、間も無く、私等の期待してをる通りの貞節をカミラがもつてをると分れば、君は私等の計略をあからさまに彼女に打ち明けてもよいからです。さうすればまた君は彼女の眼から元の通りに見られるやうになるからです。それで君は大した冒險をするわけでなく、しかもそれ程の冒險に依つて大した滿足を與へることになるのですから、よしんば思ひがけぬ困難が出て來たところで、この事は拒まずにやつて下さい。つまり私は、前にも言うた通り、君が序幕さへやつて下されば、その大詰は決つたものと認めませうからな。』

ロザリオーはアンセルモーの動かすべからざる決心を見てとり、且つそれを思ひ止らせる爲めにこの上どんな先例を持ち出してよいか、またどうして說きつければよいか分らなくなつたので、それに又彼がその上有害な計略を誰れか他の人にでも賴み兼ねない勢ひを認めたので、一層大きな禍ひを避けるために、カミラの心を汚すことなくして彼を滿足させるやうに事を運ぶつもりで、彼

の求めるところを行はうと決心したのである。そこでロザリオーはその仕事は自分がやらうと思ふからまた何時でも君の望みの時に始めようから、君の心組を他の人に言はないやうにせよと答へた。アンセルモーは、熱心に愛情をこめて彼を抱擁した。そして何か非常な恩惠でも與へて呉れたかの如く、彼が承諾したことを感謝した。そして二人の間にはその翌日その仕事を始めることに約束が決つた。アンセルモーは、ロザリオーとカミラと二人きりで話す機會や時間を與へ、且つ、彼女に贈るための金や寶をも與へることにした。アンセルモーはまた、彼女に音樂を聞かせ、また彼女を褒めた詩を書いて呉れるように、そして若し詩を作るのが面倒臭くて嫌なら、自分が手づからその面倒を引き受けようとも言つた。ロザリオーは、アンセルモーの想像したのとは全く違つた意向から悉くそれを承諾した。かう相談が纏まつたので二人はアンセルモーの家へ戻つた。其處にはカミラが、今日に限つていつもよりも夫の歸りが遲いので、やきもき氣を揉んで待つてゐた。ロザリオーは自分の家へ歸つた。アンセルモーは家にゐて、丁度ロザリオーの心配してをるだけ自分では滿足してゐた。蓋しロザリオーは、この無分別な仕事からは何等の滿足すべき將來を見ることが出來なかつたからである。しかし、その夜彼は、カミラに害を與へずしてアンセルモーを欺き得るやうな一つの方法を考へだした。その翌日彼は友人の家へ御馳走によばれた。そしてカミラに愛想よく迎へられた。彼女は自分の夫がこの人を非常に愛してゐると知つてゐるので、ちやほやと彼を迎へてもてなしたのである。食事が濟んで食卓が片附けられると、アンセルモーはのつぴきならぬ仕事にかゝらねばならぬので、一時間半經てば戻つて來るから、カミラと一緒に此處に居て呉れいとロザリオーに言つた。カミラは行かないで呉れと言ひ、ロザリオーは行くなら自分も一緒に行かうと言つた。しかしアンセルモーはどうしても聽かずに、却つてロザリオーを無理に押し留めて、後で非常に重大な事件を相談したいから待つてゐて呉れと言つた。それと共に、カミラにも、自分の戻つて來るまでロザリオーを一人ぼつちにして置くなと命じた。要するに彼は自分の席を外す理由を——或ひは愚策を非常にうまくこしらへて、誰れにも、それが口實であると疑はれないやうにしたのである。

アンセルモーは出て行つた。そして、家内の殘りの人々も皆な食事をしに行つてしまつたので、そのテーブルには

カミラとロザリオーだけが殘つた。ロザリオーは、友人の望みに從つて、この試合場の中で、而もその美貌の力だけで武裝した一聯隊の騎士を敗り得る程の敵手と、面接して居ることになつた。彼に心配するだけの理由があるか否かは讀者の判斷に任せる。しかし彼はたゞ自分の肘を椅子の腕にもたせて、頬杖をついて、そしてカミラに不作法を詫びながら、アンセルモーの歸るまで少し眠りたいと言つた。カミラはそれに答へて、お休みになるならその椅子の上よりも客間の方がお樂でせうと言つて、その方へ行つて眠るように勸めたが、しかしロザリオーはそれを斷つて、そのまゝアンセルモーの歸るまで假睡をしてゐた。そこでカミラは自分の居間に退き、ロザリオーは假睡んで居るのを見ると、歸つて來たアンセルモーは、自分が席を外してからもう長い間經つたので彼等二人は話す時間も眠る時間までも十分にあつたものと思つた。そこでロザリオーが早く眠を覺まして、自分と一緒に外に出て、その成否如何を訊ねたくてたまらなかつた。萬事は彼の望み通りになつた。ロザリオーは目を覺ました。そして二人は直ぐさま戸外に出た。アンセルモーは知りたくて堪らぬことを訊ねた。ロザリオーはそれに答へてかう言つた、最初からすつかり打ちまけてしまふのは策の得たものでないと思つたから、そこで只カミラの美貌を褒めるだけに止めて、この市の人々は殘らず彼女の才色を讃めたゝへることに忙殺されてをると言つた。まアかうして彼女の甘心を買つておいて、そしてこの次の時に機嫌よく自分の言ふことを聞かせるやうにするのが良法だと思はれたので、惡魔がいつも油斷のない者を欺く時に用ゐるこの手管を、自分も應用してみたのである。一體惡魔は暗黑の天使でありながら、その身を光明天使に變へて見せる立派な皮を被つてゐて、遂にはその本性を現はし、もし最初に自分の手管が見露はされさへせねばその思ひ通りに仕遂げるものであると。これはアンセルモーに大滿足を與へた。そして彼は毎日家に居てさういふ機會を與へ、且つカミラにこの計畫を覺らせないやうに、何か家でする仕事をこしらへることにするからと言つた。

やがて、かやうにして數日は過ぎた。そしてロザリオーは、カミラには一と言も口を利かずにおきながら、アンセルモーへ報告して言ふには——彼女といろ〳〵話してみたけれども、とても操を破るやうなことを承知するらしい樣子は、少しも誘ひ出すことが出來ず、また出來さうな兆候もない、却つて自分がもしさういふ惡い考へを棄てぬならば、

夫にそれを知らせますと言つて彼女から嚇かされた位である。

『そこまでは結構です、』とアンセルモーは言つた、『カミラはこれまでのところ口説は斥けたのです。さアこれからは彼女が行爲をも拒むかどうか、それを見ねばなりません。私は明日君に正金で二千クラウン（一クラウンは約二圓五十錢）上げますから、それを彼女に贈ると言つて下さい、その他彼女を釣り出す爲めの寶玉を買ふ金を別にそれだけ上げませう。女といふものは綺麗に飾り立てゝ、華やかな風裝をするのを好むからです。殊に美しければ美しいほど、たとへどんなに操の堅いものでも、さうなのです、そして若しこの誘惑を彼女が斥けるなら、私はそれで滿足して、もうその上君を煩はしますまいよ。』

ロザリオーは、もう初めたからには、たとへ今度のことで疲らされ閉口させられることが分り切つてゐようとも、最後までやり通さうと答へた。その翌日彼は四千クラウンの金を請取つたが、それと共に四千の當惑を請取つたのである。といふのは、今度は新しい嘘をどう吐いたものか、それが分らなかつたからである。しかし遂に、彼はかう言はうと決心した。卽ちカミラは贈り物や心盡しの品に對しても、口説に對すると同じく固く取つて動かなかつた。それでもはやこれ以上骨折つても何にもならぬ、何故といふにたゞ時を無益に費すばかりであるからと。しかし風の吹きまはしが變つて來たので、今度はアンセルモーはいつもの如くロザリオーとカミラとを二人きり一室に殘して、自分は次の一室に閉ぢ籠つて、二人の間に何事が起るかを鍵穴から見戍り立ち聞きすることにしたのである。そして半時間以上も經つたが、ロザリオーはカミラに一言も口をきかず、またよしんば一生涯彼がそこにゐたとても一言も言はぬであらうと見て取つた。そこで彼は遂にかう判斷した。つまり、これまで自分の友人がカミラの答へだこして話してきかせたのは悉く作りごとの僞りであると。そこで彼は、自分の判斷が當つてをるかどうかを確かめようと、出て來て、ロザリオーだけ別に呼んで、樣子はどうかカミラの機嫌はどうであるかと訊ねた。ロザリオーは、彼女が餘りがみ〳〵つけ〳〵と自分に返事をしたので、もうそれ以上何も言ふ元氣がないからこの仕事を進める氣にはなれぬと答へた。

『あゝ、ロザリオーさん、ロザリオーさん。』とアンセルモーは言つた、『君は實に私に義理を缺いてゐる。而も私は非

常に君を信じて居る！　私は丁度今この鍵穴から見てゐたのですが、君はカミラに一ことも言はなんだではありませんか。それで私は、これまでの場合もやはり君は彼女に何にも話さなんだものと判斷したのです。そして若しさうぢやとすると、そりや全くさうに違ひあるまいが、何故君は私を欺くのです？　また何の爲めに君は、私の願望の達せられるかも知れないこの手段をごまかしてしまはうとするのです？』

アンセルモーは此處で口を噤んだ。しかしこれだけ言へばロザリオーを恥と當惑で蔽ふには十分であつた。そこでロザリオーは、嘘を見露はされたといふことに依つて、恰も名譽を傷けられたかの如く感じて、聲を勵ましてアンセルモーに言つた、卽ちもうこれから後は、何の嘘僞りもなく君を滿足させることに專心努めよう。それは君が見張りをしたければそれで分るであらう。尤も君はもうそんな面倒をする必要はない。私は君の心から疑念を取り去る爲めに、どんな骨折をしてなり君を滿足させる積りであるからと。アンセルモーは彼を信じた。そして尙一層自由な一層落ち着いた機會を彼に與へる爲めに、アンセルモーは、この市から遠からぬ村に住んでゐる自分の友人の家に身を外して、八日の間自分の家を留守にしようと決心した。そしてカミラへは自分の出發のことを具合よく取り繕ふため、その村の友人から非常にのつぴきならぬ招待が來るといふ手筈にしたのである。不仕合せな先見のないアンセルモーよ、お前は何をしてゐるのだ、何を目論んでゐるのだ、何を企てゝをるのだ？　お前は自らに逆らつて事をなし、自らの恥辱をもくろみ、自らの破滅を企てゝをるのであるぞ。お前の妻のカミラの操は堅いのだ。お前は無事平穩に彼女を我がものにしてゐるのだ。何人もお前の幸福を荒しはしない。彼女のあらゆる思ひは、お前の家の壁の外にさまよひ出はしないのだ。お前は彼女にとつて地上の樂園である。お前は彼女の願望の的である。彼女の願望の成就である。お前こそは彼女が萬事につけてお前の心や神の御心に適はせようとて自分の心を計つてゐる尺度である。そして、もしも彼女の名譽や美貌や貞操や婦德の鑛山が、そのありたけの、またお前の欲しがるだけの富をば、勞なくしてお前に貢ぐとすれば、お前は何が故に新規な鑛脈や新な未知の寶物を搜さうとて、あのかよわい女の弱々しい支柱で僅かに支へられてをる土臺を掘りかへして、あらゆる物を崩壞させてしまふやうな冒險をしたがるのだ？　出來な

いものを欲しがる者には、出來るものも當然取り上げられるであらうぞ、丁度或る詩人がこれを上手に歌うてをるやうに――

わが願ひは死に生を求め
病の中に健康を求む、
我は牢獄の中に自由の呼吸を求め
反逆者に忠義を求む、
されば運命は神寵をも恩惠をも
常に我に與ふるを拒む。
遂に有り得ざるものを求むる故に
有り得るものをも我に拒む。

その翌日アンセルモーは、例の村の方へ出發した。そして立ちがけに、自分の不在中にロザリオーは家を監督に來て、お前と一緒に食事をするであらうから、彼を私同樣に待遇するようにとカミラに言ひふくめた。カミラは自分の夫の言ひ殘す言葉を聞いて、愼み深い心の正しい婦人の常として、非常に困じ果て、夫の不在中に男の客が同じ食卓につくといふことは、たとへどんな人にもせよ似つかはしくないことである、また若しかういふことをなさるのが、不在中に家の切り廻しが私に出來兼ねるであらうとの御心配からならば、今度だけ試しに私に任せて下さい、さすれば、この實驗によつて、私はもつと大事な責任にも堪へ得ることがお分りになりませうと頼んだ。アンセルモーはそれに答へて、今言つたやうにするのが自分の好みであるから、お前は只從順に從ひさへすればよいのだと言つた。カミラは、さうしたくはありませんけれども、それではさう致しませうと言つた。

アンセルモーは立つた。その翌日ロザリオーはその留守へ來た。カミラは彼をやさしくつゝましやかに迎へた。しかし彼女は自分一人きりではロザリオーに逢はなかつた。彼女はいつも大勢の男女の召使ひを侍らせた。殊に自分の小間使で、レオネラといふのを側に置いた。この主從は子供の時からカミラの實父の家で一緒に生長したので、彼女はこの女が非常に氣に入つてゐて、アンセルモーと結婚してからも自分と一緒に連れて來てゐたのである。最初の三日間ロザリオーは彼女には何も話さなかつた。尤も彼は食事が濟んで、小間使どもが退いて急いで食事をしてをる間に、話し出せぬことはなかつた。召使等をさうさせることはカミラの手配りであつた。それのみかレオネラはカミラよりも早く食事をすまして、些とも彼女の側を離れるなと

命ぜられてゐた。しかしレオネラは自分の好きな他のことや何かに氣を奪られて、このよい折を自分の嫉みの爲めに使ひたかつたので、いつも奥様の言ひつけを守らなかつた。それで却つて自分がさう命ぜられてでも居るかの如く、主人と客とを二人きりにしてしまふのであつた。しかしカミラの愼ましやかな素振りや、その靜かな顔色や、その落ち着いた様子は、ロザリオーの舌を抑制する十分であつた。けれども様々なカミラの美點が、ロザリオーの舌を沈默せしめる爲めに働いた力は、彼等二人に取つて有害なものとなつた。といふわけは、彼の舌は默してゐてもその思ひは忙しく働いて、缺けるところなきカミラの美質や美貌を、人の胸は言はずもがな大理石の石像をさへ愛を以て暖めるに足るその魅力を、一つ〳〵ゆつくり思ひめぐらすことが出來たからである。ロザリオーは彼女に話しかければかけられる時でも、たゞ彼女を見詰めてゐた。そして如何にも愛するに足る婦人であると思つた。かうしてその思ひは、少しづつ、アンセルモーに義理をつくす方から逸れだした。そこで彼はこの市を去つて、アンセルモーにも見られず、自分もカミラを見ることの出來ないところへ行つてしまはうかと、幾百度も考へた。しかし既に彼女を見ることのうちに見出された悦びは、堅く彼を遮り止めたのである。彼は自らを抑制し、そしてカミラを眺めることの裡に見出されるその樂しさを斥け抑へようともがいた。一人ある時は、自分の弱さを我れと我が身に責めて、自分を悪友と、否、悪心のキリスト信者とさへ呼んだ。やがて心の中でこの事柄をとやかうと考へて、そして自分とアンセルモーとを比べて見た。いつも歸するところは、つまり自分の不信實よりもアンセルモーの愚行と輕率とが一層悪いことになり、また自分の心の思ひが、神の前に於ても人の前に於ける如く容易く言ひ譯の出來るものならば、自分の罪に對しては如何なる刑罰をも恐れぬと思つた。

要するに、カミラの美貌と美質とは、その盲目な夫がロザリオーの手に置いてくれた好機會と相俟つて、ロザリオーの誠實を覆へしてしまつたのである。そこで彼は自分の欲望の導き行く目的の外には一切顧慮することなく、アンセルモーの留守になつてから三日の後には(それ迄は、絶えず煩惱と戰つてゐたが)、非常に熱烈な激越な言葉を以てカミラを口説き始めたので、彼女は驚き呆れて、たゞもう一言も答へずに席を離れて自分の居間へ引き込んでしまつたのであつた。しかしながらロザリオーの方では、絶えず戀と

ともに湧き立つ望みは、この拒絶の擧動に依つて弱められはしなかつた。反對にカミラに對する彼の煩惱は增し募つた。そして彼女は夢にも思ひ設けなかつた彼のこの有樣を見て、どうしてよいか分らなかつた。そこで、二度とさういふ事を言はせる機會やはずみを與へては大變でもあり怪しからぬこととも考へて、すぐその晩にさうしたのであるが、一人の下男に手紙を持たせてアンセルモーのところへ遣はさうと決心した。その手紙の中で彼女は次のやうに夫へ申し送つたのである。

第三十四章　には、小說『無分別なる好奇心』がつゞく

「將軍なき軍隊や城主なき城砦はまことに見苦しきものとは世の人の申すことに候が、それにもまさりて見苦しきは、若き人妻の身として、已むに已まれぬわけもなきに、その良人と別れ居ることならんと存じ參らせ候。妾は御許樣お留守にていと〳〵心安からず、かゝるお留守居にはもはや堪へがたく覺え申候まゝ、すぐさま御歡館遊ばされまじく候はゞ、たとひこのお邸は一人のお留守居役もなく打棄て置き候ことに相成候とも、妾は里方へ歸りてこのわびしさをのがれたく存じ參らせ候。そは、御許樣が當家へおのこし遊ばされ候彼のお留守居役——と申す名目に眞實ふさはしき方ならば左樣申上ぐべきが——あの方は御許樣のことよりも却つて御自分の快樂に心を傾けらるゝ方と存じ候。妾は最早この上は、何ごとも申上ぐるに及び申すまじく、また申し上ぐること然るべからずと存じ參らせ候。何ごとも御推察のほど願ひ參らせ候。」

アンセルモーはこの手紙を受け取つた。そしてこれに依つて、ロザリオーが既にその仕事に取りかゝつたことや、またカミラは果して自分のさうありたいと望んでゐた通りに返事をしたに違ひないと判斷した。彼はこの吉報に接して無暗に喜んだ。そして自分は間もなく歸るであらうから、どうあつても家を明けてはならぬと、彼女へ言ひ送つた。カミラはアンセルモーの返辭を聞いて驚いた。そして今までよりも一層當惑を感じた。といふのは、そのまゝ思ひ切つて家に留まつて居りもされず、さればとて自分の兩親の家へ行くわけにも行かなかつたからである。何故なれば、そのまゝ留まつてゐれば自分の操が危いし、行つてしまへば良人の命令に背くことになるからであつた。遂に彼女は、自分の召使ひどもに噂の種を與へまい爲めに、ロザ

リオーの前から逃げ出すまいと心を決めて、そこに留まるといふ、自分に取つて一層都合の悪い道を取ることに決心した。さてさうなると彼女は良人にあんなことを書いて送らねばよかつたと後悔しだした。それは詰り、自分がロザリオーに何かの隙を見せたので、彼に今迄の敬意を棄てさせることになつたのだと良人に思はれはしまいかと氣遣つたからであつた。しかし彼女は自分の潔白を信じて神にすがり、自分自身の操正しい心に信頼したのである。そこで彼女は自分の良人までも喧嘩や面倒の中へ捲き込むまいと思ひ、何事も告げ口せずに黙つてゐて、ロザリオーの誘惑は凡て黙つて拒絶しようと思つた。そしてまた、若しアンセルモーが、どういふ譯であんな手紙を書くやうになつたかと自分に訊ねたら ロザリオーをどう辯護しようかといふことまで彼女は考へ初めた。聰明とか時宜に適したとかいふよりも寧ろ氣高いかういふ決心を以て、彼女はその翌日家にとぢまつてロザリオーの言葉に耳をかした。彼は非常に熱烈に迫つて來たので、とう〳〵カミラの堅い心もゆるぎ始めた。そしてロザリオーの落涙や歎願によつて彼女の胸に目覺めて來たやさしい同情のきざしをば、自分の眼に現はすまいとする爲めには、彼女の貞操を以てしても中々容易のことではなかつた。ロザリオーは殘らずこれを見てとつた。そしてそれは益々彼に煩惱の火を燃やさしめた。要するに、彼はアンセルモーの不在によつて與へられたこの時間と機會とにこの城砦を攻め落さねばならぬと感じたのである。そこで彼は彼女の美を讃美して彼女の自尊心を攻め落さうとしかゝつた。何故なれば、美しい婦人の虚榮心の城塔を陷れ引き倒すには、追從の舌の上にある虚榮そのものを以てするに越した捷徑はないからである。事實、彼は一生懸命の努力で、假令カミラが眞鍮で出來て居ても倒れなければならんやうな器械を以て、彼女の貞操の礎を掘り返したのである。彼は泣いた、彼は懇へた、彼は誓言を立てた、彼は媚び諂うた。彼は切りに願うた。彼は上べにいかにも感じ深さうに眞實らしく見せかけた。そして遂にカミラの堅い決心を覆へして、彼が夢にも思ひ設けずしてしかも非常に憧がれてゐた勝利の喜びを得たのである。カミラは負けた。カミラは倒れた。しかしロザリオーの友情さへも搖がざるを得なかつた事をみれば、それに何の不思議があらう？ これは我等にとつて、戀の煩惱を征服するにはたゞそれから逃げ去る外はなく、また、何人もこのやうな强敵と戰ひを結ぶものではないといふ事の明らかな

證據である。蓋しこのやうな人間の力に打ち勝つには、神の力が必要である。さてもレオネラのみは自分の女主人の弱點を知つた。つまりこの二人の不義の友、新しい戀人たちはそれを彼女には匿すことが出來なかつたのである。ロザリオーは、アンセルモーが目論んでゐた目的も、またかういふ結果に達するやうな機會を自分に與へたことも、カミラには話さなかつた。そんなことをすれば、彼女は屹度今度の戀を見さげ、そしてさういふ心組もなく、また自分の本心からでもなく、只偶然に戀を持ちかけたやうに彼女に思はれることを恐れたからであつた。

二三日經つてからアンセルモーは、自分の家へ歸つて來た。そして、自分が左程に輕々しく取り扱ひながらも、しかも非常に大事に思つてゐたそのものが、既に失はれてゐることには氣がつかなかつた。彼は直ぐさま、ロザリオーの家へ行つた。ロザリオーは家に居た。彼等は互に抱擁した。そしてアンセルモーは自分の生死に關はる消息如何と訊ねた。

『ねえ、アンセルモーさん。私が君に知らせることといふのは、』とロザリオーは言つた、『つまり、君は凡そ良妻と云はるべき者の手本ともなり冠とも仰ぐに足る細君を持つて居られるといふ事です。私があの婦人に言うた言葉は馬耳東風に聞き流され、私の誓言は輕蔑され、私の贈り物は突き戻され、私の流した淚は嘲けられてしまひました。つまりカミラさんは一切の美の精髓でもあれば、また清淨潔白の住ふ寶の藏なのです。その上その藏には、凡そ婦人に對して賞讃や名譽や幸福を授けることの出來る一切の美德とともに、しとやかさもおとなしさも宿つてをるのです。君の金は納めて下さい。さアこれを。何しろカミラさんの操堅いことと言うたら、贈り物とか記念品とかいふ卑しい物には眼もくれられぬので、これには觸れる必要もなかつたのです。アンセルモーよ、もうこれで滿足して、もはやこの上試めすことは止めたまへ。そして君は、婦人に就いて懷けは懷かれるだけの疑惑と猜疑の海を、靴も濡らさずに通り越して來たのだから、この上新たな當惑の大海へ再び躍り込まうとはせんがよいでせう。また、この世の海を渡つて行かうとて、神樣が君に授けて下さつた方船の品質や丈夫さを、別の水先案內を賴んで試めすやうなことはせぬ方がよいでせう。たゞもう平穩に港へ入つたものと思ひ、自ら分別心の碇を卸して、現世ではいかなる富者も拂はねばならぬ負ひ目を拂ふ爲めに神樣に呼ばれるまでは、無事

に慰ふのがよいでせう。』

アンセルモーはロザリオーの言葉によつてすつかり満足した。そしてその言葉が宛ら神託によつて告げられたものの如くに、全くそれを信じたのである。それに拘らずアンセルモーは、この仕事を中止せずに、好奇心と娯樂の爲めばかりにでも、それを續けるやうに頼んだ。尤も今後は今までのやうな眞劍な努力をするには及ばなかつたのである。彼がロザリオーにして欲しかつたのは、クロリスといふ名前でカミラを賞讃した詩を作つて、それを彼女へ贈つて呉れよといふことであつた。蓋しアンセルモーは彼女へかう言うて聞せる積りであつた、ロザリオーは或る婦人に戀をしてゐるが、その婦人に禮を失はずしてその美しさを讃め歌ふことが出來る爲めに、クロリスといふ名前をその婦人に附けてゐるのであると。そして若しロザリオーがさういふ詩を作る面倒をしたくなければ、自分でそれを書かうとアンセルモーは言つた。

『その必要はないでせう。』とロザリオーは言つた、『詩想は私とも左程仲が悪くはなく、一年の間に時々私を見舞うてくれるからです。君は、今君の持ち出された、その私の贋戀の一件をカミラへ話して下さい。詩の方は私が作るとしませう。そして、その題にふさはしい程立派には出來ずとも、せめて私の精一杯のところを作りませう。』このことに就いては、二人の友人、無分別者と嘘つきとの間に約束が出來た。そこでアンセルモーは家へ歸つてカミラに向ひ、この間あゝいふ手紙を自分に寄つたわけは何であつたかと——彼女は早くから何故その事を訊ねないのかと怪しんでゐた——その問ひを持ち出した。で、カミラはあの時は何だかロザリオーが私に對して、貴方のおいでになる時よりも、少し狎々しくなつたやうに思はれましたからでした。しかしもはやその思ひ違ひが分り、それはたゞ自分の思ひなしからであつたと思はれます。それは、只今ではロザリオーは私に逢ふことも避けますし、私と二人きりで居ることも避けますからですと答へた。アンセルモーは彼女に言つた、その疑ひならば別に心配しなくてもよい、何故なれば、ロザリオーはこの市の或る身分ある處女を戀してゐて、その處女を、クロリスといふ名で讃めたゝへて居ることも私は知つて居るし、またそれがなくても、あの男の誠實と友情には氣遣ひの餘地がないからであると。しかしながら、若しロザリオーが前以て、このクロリスとの戀は作り事であるといふことや、またこの戀のことをアンセル

モーに話したのは、カミラのことを時々、讃めたゝへることの出來る爲であるといふことを、カミラに知らせて置かなかつたなら、疑ひもなく彼女は身を裂くやうな、嫉妬の苦しみに陷つたであつたらう、しかし前以て知らされてゐたので、彼女は、この大變な消息を聞いても氣を揉まなかつた。

その翌日三人が食卓に就いてゐた時に、アンセルモーはロザリオーに、何かその戀してゐる婦人クロリスの爲めに作つたものを朗讀して呉れよと請うた。それは、カミラはその婦人を知らぬから、彼の好むまゝに何を言はうとも差支へがないからであつた。

『奥さんがその婦人を御存じであつても、私は何も隱しはしますまいよ。』とロザリオーは答へた、『一體戀して居る男がその相手の婦人の美しさを讃めたり、またその婦人のつれなさを嘆いたりしたところで、そりや何もその婦人の美名を讒るわけにはならんのですからな。兎に角、私は昨日そのクロリスの無情に就いて一つの小唄を作つたのですが、それはかうです——

ソンネット

眞夜中の寂寞に、幸ある人の眠
すや〳〵と睡りにとづる時、
われは限りなき悲しみの物憂き思ひを
わがクロリスへ、はた神へ、たえず愬ふ。
日の光還りて東天の門を
薔薇の色に染むる時
わが悲しみは今日もまた衰へず漲るゝ、
鳴咽の聲となり、燃ゆる太息となりて。
日は高き星の座に昇り行き、
眞晝の光りを地上に注ぐ時、
白日もたゞわが哀泣の涙を新たにするに過ぎず。
やがて夜と共にわが歎きも募る。
さはれ、わが斷腸の思ひは遂に
神もクロリスも聞かずとぞ見ゆ。』

この小唄はカミラを喜ばせた。しかしそれ以上にアンセルモーを喜ばせた。それで彼はその短詩を賞讃して、そしてそれ程眼に見えた眞實に對して何の報いもせぬその婦人は隨分の情知らずであると言つた。これを聞いてカミラは言つた。

『それでは戀に惱んだ詩人たちの言ふことは皆眞實でございますか？』

『あの人等は詩人としては眞實のことは言ひません。』とロザリオーは答へた、『あの人たちは戀人としては言ひ現はし方のうまい割には眞實ではありません。』

『全くその通りです。』アンセルモーは、ロザリオーの考へに肩を持つてカミラにも信じさせようと思つてかう言つた。ところがカミラはロザリオーを深く戀してゐたから、良人のさういふ工夫には無頓着であつた。さういふ風で、カミラはロザリオーのものといへば何でも嬉しくて、そして彼の考へや詩歌が自分をその本尊にしてゐることも、また自分こそその眞實のクロリスであることも承知してゐたので、まだ他の小唄か詩を思ひ出せるなら歌つて呉れるやうにとロザリオーに頼んだ。

『承知しました。』とロザリオーは答へた、『しかし今度のは今のほどよいとは思ひません。いや、もつと正直に言へば、前のより少しは悪いと思ひます。しかしそれはすぐお分りになりませう、それはかうです——

ソンネット

われは運命の逃れ難きを知る。情なき美しき人よ、
わが君を戀ふるを悔ゆることあらば
必ず先づ屍となりて君が足下に横たはらん、
その如く死は必ずわれに來らん。
たとひ生命なく、名なく、榮なく、
死の闇に葬られんとも
君が像は胸の奥ふかく彫りつけられて
世の人皆これを見ん。
君が像はわがための聖き寶ぞ
そは君の情なき心より生れ出でたる
わが身の悪運よりわれを救へば。
あゝ悲し、かき曇る大空の下に
迎ふる港なく、しるべする星なき
道知れぬ海原をあてなく渡る人こそ。』

アンセルモーは、この第二の詩もまた第一の詩のやうに讃めた。さういふ風にして彼は我が身を縛り我が恥を絡む鎖に段々環を附け加へて行つた。それはロザリオーが最も自分を辱めることをしてゐる時に、彼はロザリオーを最も賞揚してゐたからである。かうして、カミラが一歩々々不貞のどん底へ下つて行くのは、その夫の考へによると、彼女が一歩々々貞節と名譽の絶頂へ登つて行くことであつた。

或る時カミラは自分の小間使と二人きりの時を見計らつて、かう言つた、『ねえ、レオネラや、わたしは何でかろ〳〵

しく我が身を安賣りして、ロザリオーさんにあのやうに手早く心を許したのであらうぞ。自分の身をすつかり許す位なら、せめても少し手間をかけさすやうにすればよかつたのに、さう思へば恥かしい。わたしは、もしやあの方が、御自分でなされた矢も楯も堪らぬ口説き樣のことは思はれずに、わたしの脆いのや輕はずみなのを惡く思うては居られぬかと心配します』

『その御心配は御無用になされませ、奥樣。』とレオネラは言つた、『何故と申しますに、どうせ本當に價ひが高くて値打ちのあるものなら、早く與りましたところで、何もその贈り物の値打ちを無くしたり下げたりは致しませんから。それどころか、よく人が申しますやうに、早く與る人は二倍與ることになりますよ。』

『人はまたかうも言ふよ、「安いものは値打ちが少ない」と。』とカミラは言つた。

『その諺は奥樣には當てはまりません、』とレオネラは答へた、『戀は飛ぶ時もあれば歩く時もあると私は聞いてをりますよ。ある人の時には走り、ある人の時にはのろ〳〵と歩きます。戀はある人を冷やし、ある人を燃やします。またある人を傷けある人を殺します。戀は思ひ初めると一緒に、もう出來上つて思ひを遂げます。戀を防ぐやうな力はございませんから、朝方に一つの砦を攻め始めれば、夕方にはもう陷してしまひませう。それをそのまゝ、ロザリオー樣の上にも同じことがふりかゝつて、結ぶの神樣が貴女樣を口説く爲めに旦那樣のお留守を拵へて下さつたのですもの、何で恐がつたり氣遣うたりなさることがございませう？　そしてあのお留守中には、結ぶの神がお決めになつたやうにどうしても仕上げねばなりませんなんだので、アンセルモー樣を戻らせて戀の仕事を中途で斷ち切るやうな邪魔をさせる隙は拵へなんだのでございますよ。何故と申しますれば、結ぶの神樣が御自分の目論見を仕遂げられる一番の道具は機會といふものでございますから。そして結ぶの神樣はどんな事にもその機會といふものを使はれますが、取り分け初めにはさうでございます。これは殘らず、人の話で聞いたことではなく、身に覺えのあることでございます。奥樣、わたしもやつぱり若い身空でございますから、何時かはこれに就いて貴女樣へお話し致しませう。それにまた、カミラ樣、もし貴女樣が最初にロザリオー樣のお眼や吐息やお言葉や御誓言やお贈り物の中にあの方の魂を御覽になるやうなこともなく、またロザリオー樣の上品

なお人柄がいかにも貴女様のお慕ひ遊ばしてもよい方ぢやとお考へにもなりませなんだら、あんなに早く身を任せたり従うたりはなさらなんだでござりませう。さういふ次第でござりますから、何もそんな控へ目な用心深いお考へから御心配なさらずと、たゞ貴女様があの方を大事に思うてござるやうに、あの方も貴女様を大事に思うてござるのぢやと安心しておいでなされませ。そして貴女様は戀の係蹄にかゝつておいでなさるからには、貴女様を捕へた方こそ偉いお手柄をなされた方で、また眞實の戀人の必ずもたねばならぬといふ四つの資格（S's）四つのSとは即ち Sabio, 賢きこと、Solito, 孤獨なること、Solicito, 氣苦勞すること、Secreto 秘密なることばかりでなくアルファベットの文字だけの資格までももつてござる處御ぢやと滿足して喜んでお出でなされませ。まア私の申すのをお聞きなされませ、私がどんなに請んじて居りますかお分りになりませう。あのお方は私の眼にも心にも愛嬌のある（Amiable）、凛々しい（Brave）、慇懃な（Courteous）、素晴らしい（Distinguished）、上品な（Elegant）、情深い（Fond）、陽氣な（Gay）、名譽のある（Honorable）、名高い（Illustrious）、誠實な（Loyal）、男らしい（Manly）、氣高い（Noble）、鷹揚な（Open）、丁寧な（Polite）、氣の利いた（Quickwitted）、富裕な（Rich）、その上、四つの資格（S's）は諺の通りで、おやさしくて（Tender）、實直な（Veracious）方でござります。Xは粗末な文字でござりますからあのお方には向きませぬ、Yは前に申しました、Zは貴女様の御名譽のためには一生懸命（Zealous）におなり遊ばすといふことでござります。』

カミラは小間使の「アルファベット」を聞いて笑つた。そして戀の道にかけてはレオネラは日で言ふよりももつと實際の經驗には長けてゐると見て取つた。小間使も、最早それを隱さずに、自分もこの同じ市の身分のよい若者と戀をして居ることをカミラに打ち明けた。カミラはこれを聞いて、或ひはこれが自分の名譽を危くするやうな緒になりはせぬかと恐れて不安になつた。そしてその內證ごとは言葉のやりとり以上に進んではゐないかと訊ねた。すると小間使は何の臆面もなく颯々しく、それ以上に進んでゐると答へた。蓋し奧樣の不身持ちは確かに召使らを颯々しくするのである。召使らは奧樣の過ちを見ては自分らが邪な道へ踏みこむことを何とも思はず、またそれを知られても氣に懸けないのである。そこでカミラも、レオネラに向つては、唯わたしのすることをお前の戀人ぢやといふその人へ話さぬやうに、またお前のすることもアンセルモーやロザ

リオーへ知れないやうに祕密にしてお呉れと賴む　り外は出來なかつた。レオネラは、さう致しませうと言つた。しかし彼女の約束の守り方は、カミラがこの女のせゐで自分の名譽を失ふことになりはせぬかと懸念した事を、事實にしたに過ぎないものであつた。といふのは、この厚かましい横着なレオネラは、自分の女主人の今までと變つた態度を見て取るや否や、たとひ女主人は自分が情夫を引張りこんでゐるのを見付けても、それをよう發き出しはしないと信じて、大膽にも情夫を家へ引き入れるやうになつたからである。蓋し女主人らの不身持ちは殊にかういふ弊害を釀すものである。さういふ女主人らは自ら身をその召使らの奴隷となし、そして召使らの不行跡も不身持ちも大目に見なければならぬやうになるのである。その例に洩れずカミラは、一度ならず幾度も、小間使がその情夫を家の中の一室に引張り込んで一緒に居るのを見つけはしたが、敢て彼女を叱らなかつたのみならず、却つてその情夫を良人の眼に見付けさしては大變だと思つて、情夫を匿す機會を與へ、且つは樣々の邪魔を取り除けてやつたのである。しかしながらカミラの骨折も甲斐なく、或る日の明け方にその情夫が家から出るところを、ふとロザリオーに見られてしまつた。ロザリオーはこれを何者とも知らなかつたので、最初は幽靈かと思つた。しかしその男が外套で顏を包み、注意深く用心深く身を隱しつゝ慌てゝ行つてしまふのを見るや否や、ロザリオーはそんな馬鹿げた考へを棄てゝ、外の考へを取つた。その考へといふのは、若しもカミラが救治策を見出さなかつたら、凡ての人々の破滅のもとゝなつたであらうやうなものであつた。ロザリオーには、こんな時ならぬ時刻にアンセルモーの家から出て行つたその男が、レオネラの爲めにその家へ行つてゐたのだとは、とても思ひも寄らなかつた。またレオネラといふやうなものがその家に居ることさへ彼は思ひ出さなかつた。彼は只自分にもあれ程氣輕に身を任せたカミラのことであるから外の人にもその通りであるのだとしか思はなかつた。蓋し、手を變へさまを代へして自分を口說き落した當の男からさへも自分の貞操を疑はれるのは、身持ちの惡い女の罪惡に伴ふ附加刑である。そしてそんな男はその女が外の人にはもつと容易く從へられるものだと信じて、そして自分の心に浮ぶあらゆる邪推を譯もなく信じてしまふものである。この大事の場合に際してロザリオーはその分別を悉く失つたものと見えた。彼の賢い格言は、殘らずその記憶から脫け去つた。彼

は一度も筋を立てゝ考へて見るといふこともなく、その上何一つ手を盡さずに、その心を嚙む嫉妬の憤怒に眩昏んで我慢が出來ず、自分に對しては何の咎もないカミラへ復讐したくてたまらぬ一念から、まだアンセルモーが床を離れぬうちに大急ぎで行つて彼に言つた、『ねえ、アンセルモーよ、私はこの五六日といふものは、君に知らすまいとて散散氣を揉んでゐたのだが、もうそれを君に匿して置くことは出來もせんし、またさうしては善くもあるまいと思ふのです。それはカミラの祟が降參して今にも私の心のまゝに從ふといふことです。そして私がこの事實を君へ知らすのが遲かつたとすれば、それはつまり、あの婦人のちよいとした氣まぐれからではあるまいか、それとも私が君の許しを受けてあの婦人へ持ちかけた戀を眞劍な心から出たかどうかとあの婦人が私を試して確めようとして居るのではあるまいかと、それを見る爲めであつたのです。それからまた、若しあの婦人が、人妻として恥しからぬ、私らが信じて居るやうな婦人であるとすれば、今私がこれを君に話さぬ前に、あの婦人から私の橫戀慕のことを君に言ひ付けさうなものですよ。しかしあの婦人が今まで言はずに置くところから見ると、君が今度家を不在にしたら、君の寶玉の藏つてある納戸の中で私に逢うてやらうと言うたあの婦人の約束は、眞實に違ひないと思はれる（そしてカミラがいつもその納戸で彼と逢曳きしてゐたのは本當であつた）。しかしまだその罪は心に懷いただけのことであるし、またカミラの心は今日からその逢曳きをする時までの間には變つてしまうて、懺悔の念が代つて起るかも知れぬから、どうか君はあまり性急に罰を加へんやうにしてほしい。今までのところ君はいつも私の忠告に悉くか一部分かは從うてくれたのだから、今度の忠告にも從うてその通りにして下さい。さうして早まらんやうに熟慮に熟慮を重ねて、君に、一番よいと思はれる方法を取りたまへ。君はこの前々にしたやうに、二日三日家を明けるやうに見せかけて、そして例の納戸の中へ身を匿すやうに工夫したまへ。すれば、あすこには掛毛氈や何かゞあつて、君の身を隱すに大變な便利を與へようし、さうすれば、君はその眼で、私は私の眼で、直接にカミラの本心如何を見られよう。そして若しあの婦人の本心がさうであらうと豫期するわけではないが、どうも怪しいと思はれるのだが、もし果して惡ければ、君は何も言はずに用心深く愼重に、加へられた侮辱を罰する人となれるわけです。』

アンセルモーは、こんなことを聞かうとは夢にも待ち設けてゐない時に、ロザリオーのこの言葉を聞いたので、吃驚仰天して呆れてしまつた。といふのは、彼はもはやカミラがロザリオーの僞りの襲撃に打ち勝つてしまつたものと思つて、彼女の光榮ある勝利を喜んでゐたのだからであつた。彼は床を視つめたまゝ、やゝ暫らく默つてゐた。そして、遂に口を開いた、『ロザリオーよ、君は私の望んでゐる通り友達の誼みを盡して呉れた。私は萬事君の忠告に從はう。君のよいやうにして呉れたまへ。そしてかういふ思ひがけぬことになつて來れば、外聞もあること故どうぞ祕密にして置いて呉れたまへ。』

ロザリオーはそれを請け合つた。しかしアンセルモーに別れた後で、如何に自分が馬鹿な振舞ひをしたかと氣が附き、彼にそんなことを言つたのを後悔した。それは今少し手柔かに體裁よくカミラに復讐をすればよかつたと思つたからであつた。彼は自分の分別の足らなかつたのを自ら罵り、輕率な決心を呪つた。そしてこの過ちを取り消すか、またそれから直ぐさま免れるにはどうすればよいかを知らなかつた。遂に彼は萬事をカミラに打ち明けようと決心した。そしてさうする機會は幾らもあつたので、同じ日に彼は彼女と二人きりで逢つた。しかし彼女は、自分が口を開く折を得るや否や、かう言つた、

『ロザリオーさん、わたしは今にも胸が張り裂けるかと思ふほど胸一杯に悲しみをもつてをりますのですよ。これで胸が裂けなんだら、それこそ不思議でござりませう、と申しますのは、レオネラのづう〳〵しさは實に甚だしく、毎晩自分の情人をこの家に引き入れて、私の手前も憚らず朝まで二人で居りますのです。それでもしその男がさういふ時ならぬ時刻にわたしの家を出かけるところを見付けた人なら誰でも疑ひを起します。しかし、わたしと貴方の祕密をその女に知られてをりますので、そんなところから身の破滅を招くまいと思へば、あの女の內證ごとも口を抑へて默つて見脫がさねばなりませんから、あれを罰したり叱つたり出來ないのがまことに辛うございます。』

かうカミラの言ふのを聞いて、ロザリオーは初めのうちは、これは、この家から出て行くところを見付けた例の男といふのがレオネラの情人であつて、彼女のではないといふ考へに瞞し込む手管であると思つた。しかしながら、彼女が非常に泣いて苦しんで、どうか助けを與へて呉れるやうにと頼むのを聞くに至つて、彼は全くその眞實であるこ

とを信ずるやうになつた。そしてその確信によつて彼の當惑と悔恨とはその絶頂に達したのである。けれども彼は、自分でレオネラの無作法を止めさすやうな方法を講ずるから、さう心配をせぬやうにと彼女を宥めた。それと同時に、彼は自分が恐ろしい嫉妬の憤怒に驅られてアンセルモーに打ち明けてしまつたことや、またアンセルモーは自ら例の納戸に匿れて目のあたりその妻の貞操の如何に薄きかを目睹するやうに仕組んであるといふことなどを、彼女に話した。そして自分のこの狂氣の沙汰を彼女に詫び、且つはこれをどうすれば取り消せるか、また自分の無分別から自ら陷つたこの錯綜せる迷宮からどうすれば安全に逃げ出されるか、それに就いての助言を求めた。カミラはロザリオーの言ふことを聞いて吃驚した。そして非常な憤りと非常な分別とで、彼を責め、彼の仕でかした卑劣な仕組や馬鹿げた有害な決心やを詰つたのである。しかし女といふものは生來善にまれ惡にまれ男よりも一層鋭い頓智をもつてゐるものであるが、尤も、女が深い考へごとをしようとしだせば得て失敗しがちであるが、カミラも咄嗟の間に、見たところどうしても挽回されさうにもないものを挽回する一つの方法を思ひついた。そこでロザリオーに言つた、明日アンセルモーを今のお話の納戸に隱れて居らすやうに仕組んで下さい、さうさせて置いて、わたしと貴方とがこの後何の懸念もなく娯んで行けるやうな方法を作つて置かうと思ひますからと。そして彼女は自分の計畫をすつかり彼に打ち明けずに、たゞアンセルモーが隱れると直ぐさまレオネラに貴方を呼ばせるから、直ぐ私のところへ來て下さい、そして私が何か言ひかけても、恰もアンセルモーの立ち聞きしてゐることに知らぬやうなつもりで答へるやうにと賴んだ。ロザリオーは、自分が必要と思つたことは、十分確かに、また用心深くやつてのけるから、念の爲めそのもくろみを悉皆打ち明けて呉れよと迫つた。

『貴方はね、只わたしのお訊ねすることに御返事さへして下されば外に何にも御心配はいりませんのですよ。』とカミラは言つた。何故なれば、彼女は自分がしようと思つてゐることを前以て彼に打ち明けたら、自分には中々よい考へと思はれるその考へに、彼が甘んじて從はなかつたり、或ひはまた、それよりも役に立たぬ外の目論みを始めたり工夫したりしはしないかと恐れたので、それを打ち明けることを好まなかつたのであつた。

そこでロザリオーは歸つた。そして翌日アンセルモーは

田舎の友人の家へ行くといふ口實の下に出發した。そしてやがて家へ戻つて來て身を匿した。カミラやレオネラがその機會を與へるやうに氣を利かして置いたので、容易くさうすることが出來たのである。さうして隱れてゐながらも、彼は恰かも自分の名譽の死活の急所が今にもまざ〳〵と眼の前にさらけ出されるのを待つてゐる人が感ずるであらうと想像されるやうな、わく〳〵した氣持ちで匿れ場所に身を置いてゐた。そして自分の愛するカミラの中に自ら所有してゐると思つてゐたその最高の幸福を、今將に失はうとしてゐるのであると思つた。アンセルモーがその隱れ場に居るのを確かめてから、カミラとレオネラとは納戸へ入つた。そしてそこへ一と足踏み入れるか入れぬにカミラは深い吐息をついて言つた、『あゝ！　レオネラや、お前に知らせたら屹度止めるであらうと思つて、今までお前に知らさずにしようと思うてゐたことがあるけれども、それをせぬ前に、いつそのこと眞つ先にお前に賴んでおいたあのアンセルモーの短刀を出して、お前の手でこの私の卑しい胸を突き刺して貰うた方がよくはあるまいか？　けれどお待ち、わたしは何も他人の過ちの罰を身に受けねばならぬといふわけはないのぢや。第一、ロザリオーがあのづうづうしい、いやらしい眼でわたしのどういふ點を見たればとて、自分の友人もわたしの名譽も構はずに、あゝいふ賤しい計畫をわたしによくも打ち明けることが出來たのであらうぞ。レオネラ、その窓へ行つて、あの男を呼んでお呉れ。きつとあの人は卑しいもくろみを果さうとて、街路に待つて居らうから。けれど殘酷ではあつても操を守るわたしのもくろみから、先づ第一に仕遂げませう。』

『まア、奥樣、』と自分の役割を承知してゐる、拔かりないレオネラは言つた、『貴女樣はこの短刀で何をなさるのでございます？　一體まア貴女樣は、これで御自分のお生命なりロザリオー樣のお生命なりを取らうとしてお出でになるのでございますか？　どちらのおつもりにしましても、それは貴女樣の御評判や御名譽を失ひ遊ばすことになりませう。貴女樣は御病氣のふりをなさいまして、今は私たち二人きりのこの家へはあの惡者を入れんやうになさつたが宜しうございます。奥樣、考へても御覽なさいまし。私たちはかよわい女の身で、向うは男で、しかも棄てばちになつて居ります。また戀の煩惱に惱られて眼も昏み、あゝいふ卑しい心を抱いてやつて來ますからには、おほかた貴女樣が御自分のたくらみをお果しなされぬうちに、あの男は貴

女様のお生命を奪るよりもつとひどい事を致しませう。あの恥知らず奴にのめ〳〵とこのお家へ出入りをお許しなさるアンセルモーの旦那様こそよい災難でござります！そして奥様、若しやさういふお心ではないかと思ひますが、貴女様があいつをお殺しなさるとすれば、あいつの死骸はどう致しませう？』

『何をお前は言ふのだえ？』とカミラは言つた、『あの人の死骸はそのまゝにしておいて、アンセルモーさまに片付けて頂かうよ。全くあの方には、御自分の恥を地の下へお隠しなさる位のことはわけもないお骨折りだもの。彼奴を呼びなさい、急いで。私としてはあの非道の仕返しを遅らせれば遅らせるほど、良人に對する操が汚されるやうに思はれるから。』

アンセルモーは殘らずこれを聞いてゐた。そしてカミラの一語々々は彼の心を變へさせた。しかしロザリオーを殺す決心と聞いた時、彼の感じた最初の衝動は、飛び出してさういふ禍を防ぐために身を現はさうといふのであつたが、そのやうに大膽な操堅い彼女の決心の結果がどうなるか、それを見たくて堪らなくもあつたので、愈々となつたら、その時飛び出して遮らうと思つて我慢してゐた。この時カミラは、直ぐ傍にあつた寢臺の上に身を投げかけて、氣絶した。レオネラは烈しく泣きだして、叫んだ、『あゝ情けなや！　この世の婦人の花を、眞の妻の冠を、操の鑑を、此處で私の腕に抱きながら死なせることにならうとは！』かういふやうなことはまだこの上にも言つたので、これを聞くほどの者は皆な彼女を世に二人となき氣だての優しい忠義深い召使ひだと思つたであらうし、またその女主人を第二のルクレチア（ギリシャの英雄ユリシスの妻、夫の不在中久しく貞節を守つた女）とも思つたであらう。

カミラは間もなく氣絶から回復した。そして正氣づくとかう言つた、『レオネラや、何故お前は行つて、此處へあの友達を、日の照る世にも夜の闇にもまたとない偶りのあの友だちを呼んでは來ぬのぢや？　さア、走つて、急いで、大急ぎで！　ぐづ〳〵するとわたしはもうこの憤りの火が燃えつきて、わたしの望む正義の復讐は、脅かしや惡口の中に溶けてしまほうに。』

『奥様、只今呼びに參るところでござります、』とレオネラは言つた、『けれど貴女様は先づその懷劍を私にお渡し下さいまし。もしや私の居らぬ間に、その短刀で貴女様が、貴女様を愛する殘らずの人々に生涯の歎きの種をお蒔きに

なつてはなりませぬから。』

『安心してお出で、レオネラや。わたしはそんなことはしませんから。』とカミラは言つた、『わたしは自分の操を護るためには、そゝつかしい愚かなものとお前には思はれるかも知れぬが、わたしはあのルクレティア（ローマの傳說中の女）のやうにはなりません——あの婦人は身に何の咎もないのに、またその身の不幸を作つた罪ある男を先づ第一に殺しもせずに、自殺したといふことぢや。が、死なねばならぬ身ならば、わたしは死なうよ、けれどそれは、わたしに何の罪もないのに私を泣かせるあの無法者に、思ふ存分の仕返しをしてからのことぢや。』

レオネラは、ロザリオーを呼びに行くまでには大分催促を受けたのである。しかしとう〳〵行つた。そして彼女の歸りを待つ間、カミラは獨りごとのやうに言ひ續けた、『あア〳〵！　たとへロザリオーの迷ひを解くまでの短い間とは言ひながら、現在かうしてこの身を不貞な卑しいものと思はせようよりは、以前に度々したやうにあの人をはねつけた方が、賢くはなかつたらうか！　きつとその方がよかつたに違ひない。けれど、あの人が自分の不心得から好んで陷つた窮境をあまり綺麗に脫け出せるやうになつたら、それこそわたしの仕返しも出來ず、良人の名譽も護られずにしまふであらう。あの裏切り者には、その身の厚かましい淫らな欲望の代に生命を拂はせてやりませう。そして、（もしやふとそれが世間に知れ渡るなら）、このカミラこそは良人に對する忠實を守つたのみか、良人を辱めようとした男に仕返しをしたのぢやと世間へ知らせてやりませう。それにまた、わたしはこれをアンセルモーへ打ち明ける方がよいと思ひます。けれどその事は、何時ぞや良人が田舍に居られた時に差し上げたお手紙でお注意を促して置いた筈ぢや。それでも良人はわたしの申し上げた禍を少しも防がうとはなさらなんだところを見れば、良人はおほかた人を信ずる誠實なお心から、あのやうに義理堅い友だちの胸に、自分の名譽を傷けるやうな考へが宿らうとは、信じようともなさらねば信じられもなされなんだのであらう。良人のみならずわたしさへ長い間そんな事は信じなんだし、また若しあの人が厚かましくも、しきりに贈り物をくれたり、無暗に約束をしたり、絕えず涙を流したりして、自分の心を見せかけるほどのことをせなんだら、わたしもそれを信ずる筈ではなかつたのぢや。けれどわたしは、何でこんな事を言ふのであらう？　大膽な決心にとかくの文句が要ら

うか？　全く要りはせぬ。もう〳〵恐れは去れ！　仕返しよ、力をかしてくれ！　あの悪者よ来るがよい、近よるがよい、進むがよい、そして死ぬがよい、生命を渡すがよい、その後はどうならうと構ひはせぬ。わたしは神様の御心のまゝにその定め給うた良人のところへ清淨無垢で來たからには、清淨無垢で良人の許を去りませう。そしてもし運拙くば、わたしの潔白な血汐とあのまたとない裏切り者の汚れた血汐を浴びませう。』から言ひながら、彼女は鞘を拂つた懐劍を手にして、部屋の內を歩いてゐたが、その足どりは亂れて定まらず、その身振りは正氣を失うた者のやうに見え、またしとやかな婦人とよりは寧ろ亂暴な狼藉者と思はせるやうなものであつた。

アンセルモーは、その身を隱してゐた掛け毛氈の後ろから、一伍一什を見て驚いた。そして今までに見たり聞いたりしただけで、もはやこの上の嫌疑までも晴らすに十分であると感じたのである。そして彼はもし間違ひがあつては大變だと思つたので、假令ロザリオーがやつて來れば分る筈の證據は見ずに濟ますとも、もう十分に滿足したであつたらう。然るに丁度彼が身を現はしてその妻を抱擁し、その妻の思ひ違ひを說き明かさうとて出て來ようとしてゐた途端に、ロザリオーを案內してレオネラが歸つて來るのを見たので、彼は止まつた。カミラはロザリオーを見ると、その懐劍で自分の前面の床の上に長い線を引いて、彼に言つた、『ロザリオーさん、わたしの言ふことをよくお聞きなさい。——貴方が若しこの線を越えでもなされば、いや近寄りでもなさらうものなら、さうするところを見つけ次第に、私は手に持つこの劍でこの胸を刺しますぞ。貴方が御返事をなさる前に私は少し貴方に聞いて頂くことがあるのです。その後で貴方の御隨意にお答へなさい。ロザリオーさん、先づ第一に伺ひたいのは、一體貴方はわたしの良人アンセルモーを御存じなのですか？　またあの人をどう思うてお出でですか？　また第二に伺ひたいのは、一體貴方はわたしといふものを御存じなのですか？　それを答へて下さい。何も貴方に謎をかけたのではないのですから、まごついたり御返事の筋を深く考へたりなさらずとも宜しいのです。』

ロザリオーは、カミラがアンセルモーを匿すやうにせよと自分に命じたその時から、それがどういふ積りであるかを覺らないやうな間抜けではなかつた。そこで彼は彼女のもくろみを早速機敏にのみこんで、本當のこと以上に本當

らしく見えるやうに二人の間に芝居をし了せたのである。それで彼は、カミラに答へた『カミラさん、私は貴女がさういふことを訊かうとて、私をお呼び付けなさらうとは思ひもかけませなんだ。それは私が當てにして來たことゝはまるでかけ離れて居りますよ。しかしこれが貴女が下さる筈のお約束のものを延ばさうためでありますなら、もつと長くお延ばしになつても宜しいのです。嬉しいものに對する憧れは、それを手に入れる望みが近くなればなる程、心配が加はりますからです。併し今のお訊ねに返事をせぬと言はれても何ですから申しますが、私は貴女の御良人アンセルモーを存じてをります、しかも私たちは子供の時分からお互ひに知り合つてをるのです。貴女も知つてをられる私等二人の友情に就ては今更何も言ひません。大きな過ちにも有力な言譯をしてくれる戀の爲めに、あの人に加へた自分の罪を自分で擧げるのも本意ではないですから。貴女も私は存じてをります。そして貴女をも御良人同樣に尊敬して居ります。何故といひますに、若しさうでなかつたら、貴女がつまらぬ方であつたら、何も私は自分の位置に相當する義務や眞の友情の神聖な法則に反くやうな振舞ひはしなかつたでせう。今ではその法則もあの戀といふ强敵の爲めに破られ汚されることになつてしまひましたがな』

『正當に愛せらるべきあらゆるものゝ仇敵よ、』とカミラは答へた、『貴方はさうと知りながらどの顏さげて、づう〳〵しくも私の前へ來たのです？　私こそはアンセルモーが己れを映す鏡であり、またアンセルモーは少しも貴方から辱めを加へられるやうな人でないことも、貴方はよう御存じではありませんか。けれど、まアどうしませう。今になつて私は貴方に人間の本分を忘れさせたのは何であるかゞ分ります。それは屹度私が何か隙を見せたからに違ひないのです。それは何も私の深い本心から出たのではなく、女が遠慮をするに及ばぬと思ふ時には、ふとした粗相からしでかすやうな、さういふ不注意から出たものですから、私はそれをふしだらとは言ひません。けれど一體何時わたしは、貴方の下劣な願ひの叶ふやうな望みの影でも起させるやうな御返事をば、言葉なり、身振りなりで、貴方の歎願に報いたことがありますか？　貴方の戀の口說が手嚴しく散々に撥ねつけられ詰られなんだことが何時ありましたか？　貴方の度かさなる誓言やそれにもまさる度々の贈り物がわたしに信じられたり受け取られたりしたことが何時ありましたか？　けれど何の希望もかけられぬ戀ならば、それを

手に入れようとて長く執着して居る者はないと聞いてをりますから、貴方にさういふ心當てを持たせた罪は喜んで私の身に引き受けませう。それは全く私の不注意から今まで貴方の希望を育んで來たからです。それ故私は自分を罰して貴方の罪に相應する刑罰をば私の身に受けませう。私は自分に對してもそれほど無慈悲であるからは、貴方に對しても、違つた風には出來ないと御承知を願はう爲めに貴方を此處へ呼び寄せて、私の立派な良人の名譽を傷つけた償ひに捧げる私の犧牲の立會人になつて頂くつもりです。それは貴方の一生懸命の執念や、また貴方の卑しい目論見をそそのかしたり見のがしたりする折を——もし私が與へたとすれば——悉く避けるだけの注意がわたしに無かつた爲めに、良人の名譽は傷つけられたのです。いま一度言ひますと、私の至らぬところから、貴方にさういふ無法な考へを起させたのではないかといふその懸念が一番わたしの心を痛めます。それで私は自分の手で自分に罰を加へたいと思ふのです。それはもしや他の手段を用ゐて罰を加へたら、わたしの罪はいよ〳〵廣く世間へ擴がるかも知れませんから。けれどさうする前に私は人を殺して死ぬるつもりです、私がかねての願ひの今こそ叶ふその復讐の望みをば、十分に充たしてくれるその人を死出の道づれにつれて行きます。私はどういふことにならうとも、私を淺ましい今の身にしたその人に、假借なき、嚴しき正義の懲罰を加へずには置きません。』

かう言ひ終るとともに彼女は、その懷劍を抜き放つて、驚くべき勢ひですばやくロザリオーに飛び掛つた。それは明らかにその懷劍を彼の胸に突き刺さうと思ひ込んでゐるやうに見えたので、ロザリオーもこの威かしが本當なのか、嘘なのか、殆んど判じ兼ねた位であつた。そこで已むなく彼は自分を斬らせぬやうに防ぐ爲めに、ありたけの手練と力とに訴へなければならなかつた。彼女はこの異樣の道化芝居の眼つぶしに、眞實らしい色をつけるために、わが血をそれに塗らうと決心した程までに本當らしく演じたのである。本氣か嘘かは知らないが、ロザリオーを傷つけることは出來ぬと思つたらしく、彼女はかう言つた、『あゝ私の正しい願望を十分に遂げることは許されぬらしい。けれど、せめて幾らかは遂げられぬこともあるまい。』そして懷劍を握つてゐる片手をロザリオーの手から引き離さうともがいて、とう〳〵それをふり離した。そして深傷を負はすことの出來ないところへその切先を向けて、肩に近い自

分の左脇の上の方へズブリと突き刺した。そしてそのまゝ悶絶せるものゝ如く身を床の上に倒したのである。

この不慮の事變にレオネラもロザリオーも吃驚仰天してしまつた。そして血汐にまびれながら床の上に打ち倒れてゐるカミラを見ながらも、尚二人ともこの所業の眞僞を確かめ得なかつた。ロザリオーは身を顫はせ息を切らせて、その懷劍を引き拔かうと慌てゝ走りよつた。しかしその傷がまことに輕いのを見て、彼は今までの心配を忘れ、今更の如くその美しいカミラのかしこさや沈着さや當意卽妙の才を嘆賞したのである。そして自分の演ずべき役割を更に好く勤めるために宛ら彼女が死んでゐるかの如く、その身體に向つて夥しく悲しげな嘆きの言葉を並べ立て、ひとり自分の上のみならず自分をかういふ立場に置くやうにしたアンセルモーの上にも呪詛をかけ出した。また友人のアンセルモーが立ち聞きしてゐることを承知してをるので、彼は聞く人がカミラを死んだのだと思つたにしても、尚その人をしてカミラよりもアンセルモーを餘計に氣の毒に思はせるやうな風に言つたのである。レオネラはロザリオーに、誰か内密で傷を始末して呉れる人を呼んで來て呉れるやうにと賴みつゝ、彼女も兩手に抱へて寢床の上に臥かした。それと同時に、もし奥樣の傷がお直りにならぬ内にアンセルモー樣が歸つてでも來られたら、これを何と申し上げたら宜しいでせうかと、ロザリオーの忠告や意見を訊いた。ロザリオーは何とでも好いやうに答へるがよい、自分は今役に立つやうな智慧を貸すどころではないと答へた。彼は、自分はもはや再び姿を見られぬやうなところへ行つてしまふ積りであるから、その出血を止めてやるやうにして呉れとしか言ふことが出來ないと言つた。そしていかにも深く悲しみ歎けるもの如く彼はこの家を去つた。しかし獨りきりになつて誰も見てゐる人のないところに來ると、彼はカミラの巧さや、レオネラの立襟を合せるやり方に舌を巻いて絶えず十字を切つたのである。彼はアンセルモーがさぞかし第二のポーシャ〔シェークスピアの「ヴェニスの商人」に出る才色すぐれた女〕を妻にして居るやうに思ひ込んでゐるであらうと思つた。そして早く彼に逢つて、とても想像の及ばぬほど巧妙に蔽はれてゐる虚僞と眞實とを、ともど〳〵に喜び合ひたくて堪らなかつたのである。

レオネラは、ロザリオーに命ぜられた通り、奥樣の血を止めたが、その血はほんのその狂言をごまかすに足るだけしかなかつたのである。それからその傷口を少しばかりの

葡萄酒で洗つて熟練の眼りをつくして繃帯をした。さうして居る間中彼女はカミラに向つて、たとひ今までに何一と言も言はなかつたとしても、今言ふことだけでアンセルモーをしてカミラこそ清淨無垢の模範であると思はしめるに足るやうなことを言ひつゞけた。レオネラの言葉に對してカミラは言葉を附け加へて、自分を卑怯者腑甲斐なしと呼んだ。それは彼女がさほどまでに厭うてゐた自分の生命を斷つためには何よりも勇氣が入り用であつたのに、丁度それだけの勇氣を持つてゐなかつたからであつた。彼女は今日の出來事を殘らず自分の愛する良人へ話したものかどうかと小間使の考へをきいた。すると小間使は、これに就ては何も言つてはいけませんと言つた。その譯は、若し話せば良人はロザリオーに復讐せねばならぬやうな義理になるし、さうすれば良人の身の上を非常な危險に曝さねばならぬことになる、それ故貞の人妻の道としては、その良人をして爭ひを起さしめることなく、出來るだけ爭ひのもとを除くべきであると言つた。

カミラは、お前の言ふことは尤もと思ふからそれに從はうけれど、しかしどうしてもこの傷を良人に看破られぬわけには行かぬから、これをアンセルモーには何と言ひ開きしたものであらうか、ともかくそれを考へて置いた方がよからうと答へた。これに對してレオネラはたとひ冗談にも嘘を吐くすべは私は知りませんと答へた。

『それではお前、私はどうすればよいの？』とカミラは言つた。『私はたとへ身の生き死ににかゝらうとも、嘘僞りを作つたり續けて行つたりすることは、とても出來はしませんもの。もしこの面倒から脫れるすべがないとすれば、嘘の話をして旦那樣に看破られるよりも却つてありのまゝを打ち明けて申し上げた方がよからうよ。』

『奥樣、御心配には及びません。』とレオネラは言つた、『今日明日のうちには、何と旦那樣に申し上げてよいか考へも出しませう。そしてお傷もおほかた旦那樣のお眼に止まらんやうな所にござりますから、神樣は喜んで私どもの殊勝な立派な考へにお味方をして下さりませう。奥樣、どうぞ御安心なされませ。そして取り亂したところを旦那樣が御覽になりませぬやうに、貴女樣の御氣分をお靜めなさりませ、あとの事は私と神樣とにお任せなされませ。神樣は心の正しいものをいつもお助け下さります。』

アンセルモーは最も深い注意を以て、自分の名譽の破滅の悲劇を見たり聞いたりしたのであつた。その悲劇は、そ

の役者たちが宛らその演ずる役割の本物に銘々なりきつてしまつたかと見える程に、驚くべき巧みな眞實を以て演ぜられた。アンセルモーは、早く夜になつてこの家から脫け出て、善良なる友人ロザリオーに逢ひ、自分の妻の潔白を證明し得た爲めに彼が得たこの貴き寶玉を共に喜び合はうと待ちこがれた。女主人も小間使もともに氣を利かして彼に家を脫け出る時間と折とを與へたのである。そのお蔭で彼はその家を脫け出て、直ぐさまロザリオーを訪ねて行つた。そして彼がロザリオーに逢つた時に彼を抱擁した次第や、また心から喜んで彼に言つたことどもや、またカミラに對して與へた讃辭などは、とても記すことが出來ぬのである。ロザリオーは少しの喜びも現はすことが出來ないで、それ等のことに耳傾けた。何故といふに、彼はこの友が如何に瞞着されてをるか、また自分はこの友を如何に辱めたかを忘れることが出來なかつたからである。アンセルモーはロザリオーの喜ばないの見るには見たが、それでも尙それは只彼がカミラに怪我をさせたことや、又その起りが彼自身であるから、そのせゐであらうと思つた。そこで特に彼は、カミラの怪我に就ては心痛することはない、といふのは、あの二人の女どもがその傷を自分に隱すことに定めたところから見ると、明かにその傷は輕微なものであるからと言つた。そしてまたさういふわけであるから、何も氣遣ふことはない、たゞこの上は自分と共に機嫌よく喜んで呉れるやうに、何故なれば、彼の取つた手段や巧みによつて、自分は望むことも出來なかつた程の幸福の絶頂に上げられてゐる、それでこの上の望みには、未來永劫にその美名を傳へる爲めにカミラ讃美の詩を作ることが無上の樂みであるとアンセルモーは言つた。ロザリオーはその志を推賞した。そして彼は、彼として一つの立派な記念碑を建てることに助力しようと約束した。

かうしてアンセルモーは、世に又とあるまじくうまゝと瞞着し了されたのである。彼は自ら、自分の名譽の道具として働いてをるものとのみ信じこんでゐたが、その實は自分の名譽を悉く破滅させる因であつたロザリオーを案內して自分の家へ歸つた。カミラはロザリオーを見て心では微笑みながら顏をそらして迎へた。この瞞着は暫くの間つづけられた。が、遂に二三ヶ月經つと、好運はその車の輪を廻らして、その時に至るまでいとも巧みに隱されてゐたその罪狀も世間に知れ渡つた。そしてアンセルモーは、自分の無分別なる好奇心の科料として、自分の生命を拂つたの

である。

第三十五章　は赤葡萄酒の革嚢に對するドン・キホーテの勇壯絶烈なる戰ひを述べ、小說『無分別なる好奇心』を完結させる。

その小說の讀み殘しが、まだ少しあるところへ、サンチョー・パンザが荒々しく意氣こんで、ドン・キホーテの臥てゐる屋根裏の室から、喚きながら跳び出して來た。『皆さん、早う起つて行つて、私の旦那樣に助太刀して下さりませ。旦那は、今まで私が見たこともない烈しいきつい斬り合ひのまつ最中ぢや。ほんとに、私の旦那樣はこのミコミコナ姫樣の仇敵のあの巨人を叩つ斬つて、蕪菁のやうにすつぽり首を落しておしまひなされたのぢや。』

『おい〳〵、お前は何を言うてをるのぢや？』と牧師補は小說の殘りを讀み續けようとしてゐたのを止めて言つた。『サンチョーよ、お前は正氣かい？　お前の言ふやうな馬鹿なことがあらうかい。あの巨人は二千リーグも向うに居るのに』

丁度その時、その部屋の方で大きな物音が聞えた。そしてドン・キホーテの喚くのが聞えた、『止まれ、この泥棒め、追剝め、惡黨め。もはや貴樣はわが手の內のものぢや、貴樣の偃月刀も役には立たぬぞ！』そして刀に任せて壁を滅多斬りにして居るらしく思はれた。

『じつとして聞いてをらずに、あそこへ行んで、あの人等を引き分けるなり、旦那樣に助太刀するなりして下され。』とサンチョーは言つた。『尤ももう今時分は、あの巨人の奴め、きつと死んでしまうて、神樣にこの世で犯した惡事の勘定をしとるに違ひないから、それにやア及びますまいがな。私は見て來たのぢやが、血は床の上に流れとるし、頭は斬られて脇の方へ叩き落されとるし、そして、その頭のでつかいことうたら、大きな酒嚢ほどもありましたのぢや。』

これを聞いて宿屋の亭主は言つた、『そりや大變ぢや、それはきつと、あのドン・キホーテかドン・デヴィル（惡魔どのといふ意か知らんが、あいつの枕頭に一杯入れて並べてある赤葡萄酒の革嚢を叩き斬つたに違ひない。そしてこの奴さんが血と思うたのは、きつと零れた葡萄酒に違ひない。』さう言ひながら亭主はその室へ行つた。それに續いてあとの人々も行つた。すると其處にはドン・キホーテが世にも不思議な風裝

をして居つたのである。彼はシャツ一枚であつた。それの前の方は太股を十分蔽ふに足らず、背後の方はそれよりも六寸ほども短かつた。その脛は非常に長くて、痩せて、毛むくじやらで、その上ひどく汚れてゐた。頭の上には亭主の物である脂じみた赤い縁なし帽子を被り、左の腕には寝具用の毛布——これに對してはサンチョーは遺恨がある、その理由は自分でよく覺えてゐた——をぐる〳〵と巻きつけ、右の手には抜身の劍を持つて、それで八方を切りまくりつゝ、恰も、本當に巨人と闘つてでもをるやうに喚き立てゝゐたのである。殊に振つてゐるのは、彼の眼は開いてゐなかつた、といふのは、彼は熟睡してゐて、例の巨人と闘つてをる夢を見てゐたからである。彼はこれから仕遂げようとしてゐる冒險の爲めに非常にその想像力を働かせた結果、既にかのミコミコン國へ到着して、自分の敵と斬り合ひを始めた夢を見るに至つたのである。そこで彼はその巨人に打つてかゝつて居るものと思ひ込んで、幾つもの酒嚢にやたらに斬りつけ、部屋中を葡萄酒の海にしてしまつたのである。これを見るや、宿の亭主は眞赤に怒つてドン・キホーテに飛びかゝつた。そして拳を握り固めてドン・キホーテを毆り出した。もしカルデニオと牧師補とが亭主を引つ張り退けなんだら、巨人との戰ひも何もないことになつてしまつたであらう。しかしこの哀れな紳士はそんな目に逢つてもどうしても目を覺まさぬので、遂に理髪師は井戸から水を大きな壺に一杯汲んで來て、そしてその身體に一どきにビシャリと浴びせかけた。それに依つてドン・キホーテは目を覺ました。けれども一體どうしたのか、それが分るほど全くは覺めなかつた。ドロテアは、彼の着物が餘りに短く手薄なのを見て、この自分の戰士と自分の敵との戰ひを見に入つて行く氣はしなかつた。サンチョーはサンチョーで、その巨人の首は何處かと床一面を捜し廻つたが、見當らないので、かう言つた、『はゝア、それではやつぱりこの家では何もかも魔法にかけてあるのぢやな。この前の時も、丁度私が今居る此處んところで、私はこつん〳〵びしやりびしやり、のべつに叩きつけられたが、誰がどやしたかも分らねば、人の子一匹も眼にはいらなんだわい。今度もまた、あの首は此處らにや一向見當らん。あの首の斬り落されるところもその身體から血が泉のやうに流れるのも、私はちやんとこの眼で見たのぢやがなア。』

『この罰あたりめ、手前の言ふその血ぢやの泉ぢやのは全體何のこつちやい？』と亭主は言つた、『この泥棒め、手前

が血ぢやの泉ぢやのいふのは、この突き刺された酒嚢や、部屋中で泳いどる赤葡萄酒のこつちやが分らんかい？……ほんとにこの酒嚢をやぶいた奴の魂を地獄の中で泳がせてやりたいわい。』

『そりやア私の知つたこつちやない、』とサンチョーは言つた、『私はたゞその巨人の首が見つからんとなると、私の貰ふ國が水の中の鹽のやうに溶けてしまうて、不仕合せを見るかと心配するだけぢや、』——蓋し覺めてゐるサンチョーは、眠れるその主人よりも一層ひどかつた。それほどまでにその主人の約束は彼の正氣を亂してゐたのである。

亭主はこの家來の落ち着き拂つてゐるのや主人の怪しからぬ仕業を見て夢中になつて怒つた。そして今度こそはこの前の時のやうに拂ひをせずに行かせはしないし、又今度といふ今度は、いくら武者修行の特權を振り廻したところが、二人の中のどちらかに、駄目にした酒嚢に嵌める栓の代金までも拂はせずには置かぬぞと呶鳴つた。牧師補はドン・キホーテの兩手を摑んでゐた。するとドン・キホーテは今や巨人との戰ひを終へてミコミコナ姫の前に出て居るものと思ひこんで、牧師補の前に跪づいて言つた、『やんごとなき麗はしき姫君よ、殿下は最早今日よりはこの賤しい奴の手から、何の毀害をも受けさせらるゝ御心配なくお暮らしになれまする。また、上天にゐます神樣のお助けと、拙者の生命も呼吸をも支配するあの婦人の恩惠とによりまして、貴女樣にお約束致したことをかくも見事に成就しましたからには、拙者とても今日からは重荷を卸したといふものでございます。』

これを聞いてサンチョーは言つた、『私が言はなんだことかい？　私は醉うてはをらなんだぢやらうがの。私の旦那樣はもうはやあの巨人を鹽漬けになさつたのぢや。牡牛にや疑ひございませんのぢや。（スペイン名物の闘牛の前夜、世間一般が牛の勝負を豫想して心配するにかけて言ふ大丈夫の意）私の國は確かなもんぢや。』

この一對の主人と家來との愚妄をば誰が笑はずに居れよう。それでぷり〳〵怒つてゐた亭主の外は皆笑つた。しかしとう〳〵理髮師とカルデニオと牧師補とは樣々に骨を折つて、やつとのことでドン・キホーテを寢床の上へのせた。彼はいかにも甚だしく疲れ切つた樣子をして眠りこんだ。皆は彼をそのまゝ眠らせておいて、宿屋の入口へ出て來て、サンチョー・パンザが巨人の首を見出さなんだことを慰めてやつた。しかしそれに優つて骨の折れたのは、葡萄酒の革嚢を急に無くした爲めに火のやうに怒つてゐる亭主を宥め

ることであつた。そしてお上さんは半ばは叱りながら半ばは泣きながら言つた、『ほんとにこの武者修行は私の家へ時も時悪い時にやつて來たものぢや……ほんとに損の行くお客樣ぢや、こんな人にや出逢はにやよかつたのに。この前にもこの人は、己は武者修行ぢやからと言うて——どうぞ神樣この人にも他の殘らずの武者修行どもにも不仕合せな修行をさせて下さりませ——また武者修行の捉では何も拂ふには及ばぬのぢやと言うて、自分と家來衆と痩せ馬と驢馬とに使うた晩飯ぢやの寢床ぢやの藁ぢやの麥ぢやのといふ一晩中の勘定を踏み倒して行つてしまうたのぢや。そして今度はまた、それも皆この人の爲めに、別の旦那がやつて來て、私の家の牛の尻尾を持ち出して、家の夫の役に立たんほどに毛を擦り切らしてしまうて、二クワルティロ（約五錢）がも惡うして戻すんぢやもの。そればかりかおしまひには家の葡萄酒の囊を破つて酒を零してしまうたのぢや！ほんとにこの人は自分の血を零して見せればよかつたのぢや！　けれどこの人を逃がしはせんぞよ、私の親父さんの骨やお袋の亡靈にかけても、きつと一文も缺かさずに拂はせる。さうせんことにや私の名前は嘘の名前で、私は私の親父さんの娘でもござりませんわい。』お上さんは、非常な立腹でこんなやうなことをいろ〳〵と述べ立てた。またそのよい女中のマリトルネスもお上さんに肩を持つたが、娘は始終にこ〳〵しながら默つてゐた。牧師補はその酒囊のみならず、その葡萄酒も、また殊に彼等が大事にしてゐる尻尾を傷めた損害も、すべて自分の出來るだけ償なはうと約束して、この事件を落着させた。ドロテアはサンチョーを慰めて、お前の御主人が巨人の首を斬つて下されたことが確實になつて、私が自ら無事に自分の國を治めるやうになり次第、その王國の中の最上等の國をお前に上げるつもりで居ると言つてきかせた。これに依つてサンチョーは自ら慰めた。そして尚も姫君に向つて、彼がその首を見たこと、確かにその首は腰だけも屆く髯をもつてゐたこと、またその首が今見つからんとすれば、それは一體この家が、自分等がこの前に泊つてよく知つて居る通り、魔術の家であるからであるといふこと、これは凡て信賴すべき事實であると言つた。ドロテアは、自分は十分それを信じてをるし、また萬事お前の望み通りに成り行くであらうから、少しも心配することはないと言つた。そこで萬事が治まつたので、牧師補は例の小說の讀み殘しが少しばかりあるので、それを讀み續けたくて堪らなくなつた。ドロテアも外の人々も

それを讀み終へるやうにと彼に頼んだ。そこで彼は、それを讀んで人々をも喜ばせたく自分も樂しみたかつたので、その物語を次のやうに讀みつゞけた——

その結果、アンセルモーは、カミラの貞操を全く信用して、何の懸念もなく幸福に暮らした。そしてカミラは、自分とロザリオーとの仲をアンセルモーには實際と反對に思はせようために、わざと冷やかにロザリオーを遇した。そしてロザリオーはその立場を一層確かにする爲めに、カミラが自分のこの家へ來ることを喜ばぬのが明かに見えるから、最早この家へ來ることを免して貰ひたいと言つた。しかし馬鹿にされてゐるアンセルモーは、さういふ事はどんな事があつても許しはせぬと言つた。そして彼は自分の幸福を保險してゐると信じつゝ、いろ〳〵さま〴〵にして自分自身の不名譽を作り出すことになつたのである。その一方で、レオネラは自分の情事をつゞけて行くことが出來るやうになつたので非常に滿足して、その果は遂に、女主人が自分を託うて吳れる上に、褒へ、安全に逢ひ曳きする手段を教へてまで吳れるものと信ずるやうになつて、あらゆる事に頓着なく、縱まに自分の快樂を追ふやうになつたのである。遂に或る夜、アンセルモーはレオネラの部屋で跫音を聞きつけた。そこで彼は、誰であるか入つて見ようとしたが、その扉は閉めてあつた。それでます〳〵扉を開けようと決心した。そして力任せに揺ぢ開けて部屋へ入ると、丁度一人の男がそこの窓から街路へ飛び下りるところを見つけた。彼は急いで走つて行つて、その男を捕へるなり誰であるか見現はすなりしようしたが、どちらの目的も達することが出來なかつた。レオネラが彼に縋りついて叫んだからである、『旦那樣、お靜かになされませ。どうぞ短氣をお起しなされて、此處から逃げた人を追つかけては下さりますな。あれは私のもので、まつたく私の良人でございますから。』

アンセルモーはそれを信じないで、大いに怒つて短刀を拔き放ち、もし本當のことを白狀せねば殺してしまふぞと言つてレオネラを刺さうと嚇した。彼女は恐ろしさのあまりに、われながら何を言うて居るかも考へずに——叫んだ、『旦那樣、生命はお助け下さいませ。貴方樣のお思ひがけもない一大事をお話し申し上げますから。』

『それでは直ぐに言へ、言はねば殺すぞ。』とアンセルモーは言つた。

『只今は氣が顚倒して居りまして、とても申すことが出來ません。』とレオネラは答へた、『明日までお許し下さいませ。明日になりましたら、貴方樣を吃驚おさせ申すやうなことをお耳に入れます。けれど今この窓から跳び下りましたのはこの市の若者で、私の良人になるといふ約束のある男でございますから、それは御安心なされませ。』

これに依つてアンセルモーは宥められた。そして彼女の願うた時刻まで待つことに同意した。蓋し彼はカミラの惡事を聞くのだとは夢にも待ち設けなかつたからである。彼はそれ程まで彼女の貞操に滿足してゐたのである。そこで彼はその部屋を去る時、レオネラに、その話さうとしてゐることを殘らず話さぬうちはこの部屋から出てはならぬぞと命じて、彼女をそこへ置いたまゝ錠を卸した。彼は直ぐさまカミラに逢ひに行き、自分と小間使との間に起つた出來事や、彼女が非常な重大事を話すと約束したことなどを、殘らずありのまゝに打ち明けたのである。

カミラが狼狽したかしないかは言ふ必要もない。驚に傷持つ身の、自分の不貞操に就いて知る限りをレオネラがアンセルモーへ打ち明けるであらうと信じて、彼女の心配と周章とは一通りでなく、この懸念が事實となるか否かを見るまで待つて居る勇氣はなかつたのである。そこでその夜のうちに、アンセルモーの寢つくのを見るや否や、自分の持ち物の中で最も値打ちのある寶玉と金とを携へて、誰にも見付けられないやうにその家を脫け出し、ロザリオーの家へ往つて、事の次第を物語り、自分の身を何處か安全な場所へ連れて行つて呉れるか、それともアンセルモーの手の及ばないところへ一緒に駈落ちするかして呉れるやうにと賴んだ。ロザリオーはカミラの話を聞いて全く途方に暮れてしまひ、その善後策を講ずることは愚か、一言の返答もすることが出來なかつた。彼は遂に自分の姉が院主をしてゐる或る尼僧院へ彼女を連れて行くことに決めた。カミラもそれに同意したので、この急場の間に合ふやうに大急ぎで、ロザリオーはその尼僧院まで彼女を送り屆けてそこへ置き、それから自分は何人にも自分の出發を知らせずにこの市を去つたのである。

夜明けになるや否や、アンセルモーは自分の側にカミラがゐないことには氣附かずに、レオネラが話す筈になつてゐる話を聞きたい一念から床を離れて、彼女を閉めこんでおいた例の部屋へと急いだ。彼は扉を開けて入つたけれども、レオネラの影さへなかつた。たゞ彼女が身を吊りさげ

て逃げた明白な證據として、そこの窓には敷布がしばりつけてあつたばかりである。彼はこれをカミラへ話さうと氣も落ち着かずに歸つて來た。しかし彼女は寢床の中にも家中のどこの隅にも見付からなかつたので、彼は吃驚仰天してしまつた。下男下女等に彼女のことを尋ねたけれども、一人としてその樣子を知つた者はなかつた。彼がカミラを搜してゐると、ふと彼女の手箱が開け放しになつて、その寶玉の大部分が失くなつてゐるのに氣がついた。茲に於いて彼は自分の恥辱も、また自分の不幸の源がレオネラでないといふことも、十分に分つて來た。そこで彼は丁度今しかけてゐた身支度を終へて、鬱々として力なく、自分の悲しみを知らす爲めにその親友ロザリオーの家を訪づれた。しかし、ロザリオーにも逢はれないばかりか、その召使等の言ふところでは、昨夜から彼は家を明けて歸らず、しかもありたけの金を持つて行つたといふことなので、アンセルモーは宛ら正氣を失うてしまふやうに感じた。そして剩へ自宅へ歸つて見ると、家中の下男も下女も一人殘らず出奔して家はがらん洞になつてゐた。彼は何を考へ、何を言ひ何を爲すべきかを知らなかつた。彼の理性はだん〳〵彼を見棄てゝ行くやうに思はれた。彼は自分の位置をつく〴〵と顧みた。そして一瞬にして妻も、友も、召使をも無くしたことを思うた。上天には見棄てられ、殊に自分の名譽は殘らず剝ぎとられたと感じた。それはカミラの逃亡は自分の破滅であると思つたからである。久しく思ひ廻らした末に、遂に彼は、自分のこの入り組んだ不幸をば組み立てさせる機會を與へる爲めに逗留してゐた例の田舍の友人の家へ往かうと決心した。彼は家の戸口には殘らず錠を卸し、馬に乘つて、しを〳〵と元氣なく旅に出かけた。然るにまだ道の半分も行かぬうちに、樣々の悔恨に惱まされて、彼は遂に馬から下りるに至つた。そして馬を一本の樹に繫いで、その樹の根元へ身を投げかけ、腸を斷つやうな痛ましい吐息を吐いたのである。そして其處にそのまゝ日暮れ近くまでじつとしてゐると、市の方から一人の男が馬に乘つて近づいて來るのが見えた。そこでこの男に挨拶をして、フロレンスには何か變つたことはないかと訊ねた。

その市人は答へた、『近頃にない實に不思議な噂が立つてをりますよ。サン・ジオヴンニに住んでゐるアンセルモーといふ金持ちの親友で、ロザリオーといふ人が、昨夜アンセルモーの女房カミラをつれて駈落ちしたといふ噂です。そのアンセルモーも姿を隱しました。この仔細は殘ら

ず昨夜アンセルモーの家の窓から敷布につかまつて降りるところを警察の手で捕へられたカミラの小間使が話したのです。そのことの仔細はどうか詳しいことは私も存じません。たゞ私の知つて居ることは市中の人々がこの出來事を聞いてびつくりしるといふことです。何故といふに、噂によればあの二人は「二人仲好し」と言はれた程に大の仲好しであつたので、かういふことにならうとは誰れも思ひ寄らなんだからでござります。』

『そのロザリオーとカミラは何方へ逃げたか手掛りはありましたか？』とアンセルモーは言つた。

『その筋ではなか〳〵機敏にあの人たちを捜したが根つから手掛りがありませんさうな。』と市人は言つた。

『いや、どうも有難うございました。』とアンセルモーは言つた。

『では、左樣なら。』とその市人は言つて、自分の旅をつゞけた。

この不幸の消息はひとりアンセルモーの正氣を奪つたのみならず、その生命までも奪つたのである。彼はありたけの力を絞つて立ち上つた。そしてその友人の家へ着いた。友人はまだ彼の不仕合せのことは何にも知らなかつたけれど、彼が眞つ蒼で、疲れ果てゝ、憔悴してやつて來たのを見たばかりで、何か非常な心配をしてをるものと感づいた。アンセルモーは直ちに、休ませて呉れるやうに、そして筆と紙とを貸して呉れるやうにと賴んだ。彼の願ひは聞き容れられ、彼は唯獨り寢床の上に横になつた。これが、いな、その扉に鍵を卸してでも貰ひたいのが彼の望みであつた。獨りきりになると、その身の不幸の思ひは胸に迫つて、何となく蟲が知らせるやうな心持ちになり、自分の生命が最後に近付きつゝあることがはつきり分つた。それ故彼は自分が異樣な最後を遂げる理由を記した書置を遺して置かうと決心した。彼は書き始めた。しかし、その書かうと思つた丈けを書き終へないうちに、その息は絶え、その無分別な好奇心によつて招いた苦しみの犧牲となつてその生命を捧げたのである。その家の主人は、大分時が經つけれどもアンセルモーが一向呼ばないので、若しやその病氣がひどくなつたのではないか行つて確めようと思つた。行つて見ると、半ばは寢臺の上に、半ばは書字臺の上に身をもたせて、彼は俯伏しになつてゐた。書字臺の上には開いたまゝになつた書付があり、手にはまだペンを持つてゐた。主人は先づ呼んで見たが答へがないので、側に近寄つてそ

の手を取つて見るともう冷たくなつてゐた。そして彼の死んでゐることが分つた。主人は非常に驚き悲んで家の者を呼び集めて、アンセルモーに降りかゝつたこの悲しい運命を目撃させたのである。やがて彼は、アンセルモーの手蹟と見て取つた件の書付を讀んだ。それにはかう記してあつた——

「愚かにも無分別なる願望はわが生命を奪ひぬ。若しわが計カミラの耳に達することあらば、われは彼女を赦すとの旨を傳へられたし。彼女には奇蹟を行ふべき責めなく、またわれは彼女にそを行はしむべき權利を有たざりしなり。而してわれはわれ自らの汚辱を作り出したるものなれば何の故ありてか……」

そこまでアンセルモーは書いてゐた。これに依つて明らかに、その記さうと思つたことを記し終へないうちに、そこで息が切れたことが分つた。その翌日友人は、アンセルモーの親類どもへ彼の計を報じたが、その人々は既に彼の不仕合せのことも、またカミラの居る尼僧院のことも知つてゐたのである。その尼僧院で彼女は丁度その時、自分の良人の死んだ知らせの爲めではなくその戀人の出奔の知らせを受けた爲めに、あはや良人のあとを追うて死出の旅路に上らうとしてゐたのである。彼女は寡婦にはなつたけれど、その尼僧院を去ることも、また喪裝の面紗を着けることも肯んじなかつた。しかし間もなく、後悔することの遲過ぎた彼女の戀人ロザリオーの赴いたネープルスの國内での、ド・ラウトレック氏とコルドヴの大將帥ゴンザロー・フェルナンデスとの戰ひで、そのロザリオーが殺されたといふ消息がカミラに達した。これを聞いて彼女は面紗を着けた。そして悲嘆と憂愁との爲めに間もなく死んだ。これがこの三人の最後であつた。

『私はこの小說が好きぢや』と牧師補は言つた、『しかしこれが本當のことぢやとはどうしても受け取れん。そしてこれが拵へ出されたものとすれば、この作者の思ひ付きは間違うてゐる。アンセルモーのやうな、こんな大した試驗をやつて見ようと思ふやうな馬鹿々々しい良人はとても想像することも出來ません。これがもし情夫と情婦との間に起ることを寫したものとすればありさうなことぢやが、良人と妻との間にはどうもありさうにないことです。しかしこの物語の書き方には、別に難はないやうですな。』

第三十六章　はその宿屋で起つた更に珍らしい出來事を述べる。

ちやうどその時、宿屋の門のところに立つてゐた亭主は叫んだ、『やア、あそこに一と組立派なお客さんがやつてござる。あの人等が家で休んだら「どうぞ御ゆるりなさりませ」と言はうよ。』

『どんな人達ですな？』とカルデニオは言つた。

『アラビア風に乘つて（鞍を高く鐙を短かくする乘り方）手槍や圓楯を持つた男が四人、そして皆な黑い面紗をかぶつてをりますよ。それと一緒に白い着物を着て女鞍に乘つた女が一人、その顏にも面紗がかゝつとる。それから徒歩の家來が二人ぢや。』と亭主は言つた。

『もう直ぐそこへ來ましたかい？』と牧師補は言つた。

『へえ、もうつい、此處へ來ました。』と亭主は答へた。

これを聞いてドロテアは顏に面紗をかけるし、カルデニオはドン・キホーテの部屋へ隱れた。が二人がそれをし終るか終らぬ内に、亭主の言つた一行は悉く宿屋へ入つて來た。そして身分の高い服裝や擧動の馬上の四人は馬から降りて、女鞍に乘つてゐる婦人を助け降さうとてつか〳〵と進んだ。彼等のうちの一人が婦人を抱きおろして、カルデニオが身を隱してゐる部屋の戸口に置いてあつた椅子へ彼女を掛けさした。かうしてゐる間中、その婦人も男子等も銘々の面紗を取り去りもせず、一言も口をきかなかつた。たゞその婦人は椅子に身を置く際に深い吐息をついて、恰も病氣で弱つてをる人の如くにその兩腕をだらりと垂らした。徒歩の家來どもはやがて馬どもを廐へ連れて行つた。これを見て牧師補は、こんな風裝をしてこんなに默りこんでゐるこの人々の何者であるかを知りたい好奇心から、その家來どもの居るところへ行つて、その一人に尋ねて見た。するとその男はかう答へた。『旦那樣、實はこの人たちがどういふ人やら私も知りませんよ。たゞ私の知つとるのは、如何にも身分の高い人らしいちふことだけで……その中でも貴方さまも見さつしやれた通り、先きに立つてあの奧樣を抱きおろしなされたお方が一番えらさうぢや。といふのはな、外の方々は皆なあの人を敬うとるし、またあの人の指圖や言ひ付け通りにしか何事もなさりませんのでな。』

『そしてあの奧樣は一體どういふお方ぢやの？』と牧師補は訊いた。

『それもやつぱり私にや分りませんのぢや。』とその召使は

言つた、『何故と申しますと、私はまだ一度もこの道中であのお方の顔を見たこともございませんからの。ほんとに私は何遍もあの奥様の吐息を聞きましたし、息でも切れさうに呻きなさるのも聞きましたよ。けれど今話したことより外に何一つ知らんかて、私らとしちや不思議ではございませんよ。何故というて、私もこの仲間の男もあの人らのお供してからたつた二日しか經ちませんでな。それといふのは、私らは道であの人等に遇うて、賃金を氣張るからアンドゥルジアまで供して呉れろと賴まれて、それを承知して來たばつかりでございますからの。』

『それでお前さんたちは、あの人らのうちの誰れかゞ名前を呼ばれるのを聞かなんだかい？』と牧師補は言つた。

『いゝえ、全く、』と下男は答へた、『あの人らは道中ぢや皆なそりや魂消るくらゐだまり切つて居りますのぢや。あの可哀さうな樣子の、氣の毒らしい吐息や泣きじやくりの外にや、物音一つ聞えん位でございますでな。私らの思ふにや、あの女の方はどこへ行かつしやるのか存じませんが、行くのを嫌がつてござることはたしかでございます。またあの方の着物から考へると、尼さんか、それともおほかた尼さんにならうとしてござるところでございましよ。そして傍から見ると氣の毒なやうに悲しんでござるところを見ると、その尼になることもおほかた自分の本心から出たことぢやございますまいよ。』

『或はさうかも知れんの。』と牧師補は言つた。そして彼はその人々を離れてドロテアの居るところへ歸つた。ドロテアは面紗をかぶつた婦人の吐息を聞いて、心からの同情に動かされつゝ、その側に寄り添うて言つた、『あなた樣、どうして貴女はさうお胸を痛めておいでなさいますか？　もしや女の身でお慰めのできますやうな有りがちのことでござりますなら、私と致しましても喜んで何かのお役に立ちませう。』

これに對してその不幸な婦人は何の答へもしなかつた。そこでドロテアはいよ〳〵熱心にその申し出を繰り返したけれども、やはり彼女は默つてゐた。そこで遂に面紗をかぶつてゐる一人の紳士、他の者が皆なその人の言ふことを聽くと下男の言つたその人は、そこへやつて來てドロテアに言つた、『貴女、どうかその婦人へは何の申し出でもなさらずに置いて下さい。その婦人は何をして貰つてもお禮を申さないのが持ち前でございますからな。それでその婦人の口から嘘を聞かうとお思ひでなくば、返答させようとな

さつてはいけません。』

『わたしはまだ一度も嘘を言うたことはありません。』と今まで黙つてゐた彼女は立ち處に答へた、『それどころか、わたしが今こんな慘めな有樣になつたのはあまり誠實で、嘘をつく術を知らなんだせゐでございます。貴方こそその現在の證據ですよ、貴方を嘘つきにしましたのも、つまりは私の汚れない眞實からでございますもの。』

カルデニオはこの話し手とすぐ接近してゐたので、これ等の言葉をはつきりと明瞭に聞いた。その間にはたゞドン・キホーテの部屋の扉一枚しかなかつたからである。そしてそれを聞くや否やカルデニオは大聲を出して叫んだ、『ああ！　一體これはどうしたことぢや？　私の耳に入つたこの聲は何ぢや？』この聲を聞くと吃驚して、その婦人はふり向いた。しかしその物言ふ人が見えぬので、彼女は立ち上がつてその部屋へ入らうとした。それを見ると、例の紳士は彼女に一歩も動かせまいと、取り抑へた。彼女が慌てて身體を動かしたので、その顏を蔽うてゐた絹が滑り落ちて、比ぶべきものもない絶世の美人の、しかし蒼白く慄えてゐる顏が現はれた。彼女は、恰も正氣を失うた人のやうに、一生懸命に、眼の及ぶ限りそこら中を見廻したのである。その樣子は、ドロテアを始め彼女を見てゐた凡ての人を、何の爲めかは知らぬながらに、いかにも哀れと思はせたほどであつた。例の紳士は彼女の肩をしつかりと摑んで、彼女を取り抑へることに一生懸命になつてゐたので、自分の面紗の落ちかゝつたのを手を出して直すことが出來なかつたから、それはとう〳〵すつかり落ちてしまつた。そこでその婦人を前の方から抱いてゐたドロテアが眼を上げて、自分と同じくその婦人を抑へてゐるその人を見ると、それこそ自分の良人ドン・フェルナンドーであつた。それと見るや否や、彼女は胸のどん底から引き出された長い痛ましい一聲とともに、氣絶して後へ倒れかゝつた。その直ぐ側にゐた理髮師が兩腕でその身體を受け留めなかつたら、彼女はばつたりと床の上へ倒れたであつたらう。時を移さず牧師補は急いで彼女の面紗を取り去り、顏の上へ水を掛けた。牧師補がさうして居る時、ドン・フェルナンドーはもう一人の婦人を抱きとめてゐたので、ドロテアを見て取つて、宛らこの有樣に失神したかの如くつゝ立つた。けれども彼はルシンダを放さうとはしなかつた。その婦人はルシンダで、カルデニオがその聲でルシンダと氣づいたやうに、彼女もやはりその聲でカルデニオと氣づいたので、

一生懸命にドン・フェルナンドーの手から身を脫がれようともがいてゐたのである。カルデニオもやはりドロテアが氣絶する途端に出した叫び聲を聞いた。そしてそれをルシンダの聲と思つたので、愕いてその部屋から飛び出して來た。彼が出會ひ頭に見たのはルシンダを腕に抱へてゐるドン・フェルナンドーであつた。ドン・フェルナンドーも立ち處にカルデニオだと知つた。そこでルシンダ、カルデニオ、ドロテア　少し前には彼女が正氣づいたらしくなつてゐるこの作の處々にある作者の粗漏の一つである　の三人は、一體どうしたことか分らずにたゞ唖然として立つてゐたのである。

ドロテアはドン・フェルナンドーを、ドン・フェルナンドーはカルデニオを、カルデニオはルシンダを、そしてルシンダはカルデニオを互に見戍つて一言も口を利かなかつた。その沈默を先づ第一に破つたのはルシンダであつた。彼女はドン・フェルナンドーに向つてかう言つた、『ドン・フェルナンドー樣、貴方は御身分に免じて私をお放しなさいませ、別に理由がおありでなければ、私といふ常春藤をば壁にすがらせて下さいまし。貴方の無理無體も、脅かしも、誓言も、贈り物も、私を裂き離すことの出來ぬこの支へ柱に私をすがらせて下さいまし。神樣は人の眼に隱れた不思議な手段で、私をこの本當の良人に廻り合はせて下さいましたのです。そして私の心の中からこの人を消してしまふことの出來るものは死より他にはないといふことが、價の高い實驗で貴方にもよくお分りになりましたでせう。こんな飾りのない言ひかたが、貴方の戀を怒りとなし、貴方の愛情を恨みとさせ、そして、貴方としてはそれより外になされやうもございますまいから、私の生命をもお取りになりませうとも、それでも私は厭ひません。自分の愛する良人の眼の前で、自分の生命を棄てるのなら、私は、生れ甲斐があると思ひます。この身を殺してこそ、死ぬる今はの際までも良人へ操を立て通したと、良人も信じて呉れませうから。』

折からドロテアは我に返つた。そしてルシンダの言葉を聞いた。それに依つてそれが誰であるかを推察した。しかしドン・フェルナンドーが尙も彼女を手離さず、又何の返辭もせぬのを見ると、あらん限りの力を奮つて起きあがり、彼の脚下に跪づいて、清らかないぢらしい瀧なす涙を流しつゝかう言ひかけた——

『あなた、貴方が兩手で蔭らしておいでなさるその太陽の光りが、貴方のお眼の光りを昏まし奪うて居りませぬな

ら、あなたは今かうして、貴方がさうさせて置かうとお思ひ遊ばす限り、お脚下に跪ついてをりまするこの哀れな不仕合せなドロテアがお見えなさるでございませう。私こそは貴方様がお情でかお弄みにかお取り立て下さいまして自分のものぢやと言うて下さいました、あの身分卑しい百姓娘でございます。私こそは、おぼこな箱入り娘として安らかな日を送つて居りましたのに、貴方の口説や、いかにも眞實らしいやさしいらしいお心で、とう〳〵自分の操の門を開けて、貴方様へ自由の鍵をお渡し致しましたあの娘でございます。その贈り物を貴方は有難いとも思はずにお受けになりました。それは、私が御覽の通りのこのやうな所へ逃げねばならぬやうになつたことや、また貴方をかうしたところでお見かけ申すやうなことになつたので明かに分つてをりまする。けれど、私は何も自分の恥から、已むを得ずこんな處へ來たのぢやと思うて頂きたうはございません。それはたゞそゝのかされた貴方に棄てられたといふ悲しさ情なさからでございます。私を御自分のものにしようといふのが貴方のお心でございました。そして貴方はそのお心のまゝになさつて、今となつては、たとへ御悔悟なされようとも、私の良人におなりなさらぬわけには行きません。あなた、あなたが私をお棄てになつた元はといへば、容貌や身分の缺けてをる爲めでございますが、その代りに私は誰にも劣らぬ愛情をあなた樣に捧げてをります、それを思うて下さいませ。貴方は私のものでございますから、その美しいルシンダ樣の連れ合ひにおなりなさることは出來ません。また、そのお方も、カルデニオ樣のものでございますから、貴方の奥樣におなりなさることは出來ません。それ故よく考へて下さいませ——貴方を憎んでをる人に可愛がつて貰はうとなさるよりも、貴方を慕うてをる者を可愛がる氣におなりなされる方が容易いことでございます。貴方は私の世間知らずを見かけてお口説きなさいました。私の操を破らうとなさいました。貴方は私の身分もよう御承知でございました、又私が貴方のお心にすなほに身をお任せ申したこともよう御存じでございます。それ故貴方は何も瞞されたと仰有るわけも理由もありません。全くその通りなら、また貴方が歷々のお方でお出でなさるやうにキリスト信者でおありなさるなら、何でそんな言ひ抜けをなさつて、初めのやうにしまひまで私を仕合せにしては下さらぬのでございますか？　貴方が私を本當の身分にして、貴方の本妻にしてやらうとお思ひなさらぬなら、私は

たゞ貴方のものにさへなつて居れば嬉しくも仕合せにも思ひますから、せめて貴方の召使ひとして使うて下さりませ。私を振り棄てゝ、私の恥を世間の噂の種にはして下さりますな。私の年よつたふた親に、憂き目を見せて下さりますな。あの人達は忠義な御家來として永年の間貴方の親御さま方へ忠勤を盡して居りますから、こんなお報いを受ける筈はござりません。又もし貴方が、御自分の血にわたしの血を混ぜれば血統を卑しくするとお思ひなされますなら、世間の大家にこんなやうな道筋を通らなんだのは殆どないといふことや、また由緒ある血筋には女の血はどうでもよいのぢやといふことなどを、ようお考へなされませ。それぱかりか貴の名門の貴さは美德にあるのでござります。もし貴方が當然私に負うておいで遊ばす義理をおつくしなさらぬなら、貴方は、その美德をお缺きになりますことになり、その時は貴方よりも却つて私の方が名門の血統を繼ぐ値打ちのあるものになりませう。おしまひに、今申すことが私の最後の言葉でござります——貴方はお好きでもお厭でも、私は貴方の妻でござります。貴方の御誓言に證を立てゝ下さりませ、あの御誓言は、たとへ貴方が御身分の高いのを笠に被て、身分の低い私をおさげすみなさるとも、僞りであらう筈もござりませねば、またさうあつてよいものでもござりません。貴方が私に下さつたあの記念の品に證を立てゝ下さりませ。また私に向つてお立てになつたあの御誓約の證人として自分でお呼びかけなさつた神樣へも證をお立て下さいませ。さういふものは皆な役に立たずとも、御自分の良心こそ、貴方が浮れ切つておいでなさる時でもきつと聲なき聲を立てゝ、私の申す貴の證を立て、この上ない貴方の御機嫌や御愉快を損ふに相違ありません。』

この上さま〴〵のことをば、傷けられたドロテアが非常な熱誠と涙とを以て述べたので、そこに居合せた殘らずの人々は、ドン・フェルナンドーと共に來てゐた人々さへ、つひ貰ひ涙を流すに至つたのである。ドン・フェルナンドーは、彼女に何の答へもせずに聽いてゐたが、遂に彼女は言葉を止めて、これほど深い悲しみを見てやさしくならぬものは、眞鍮の胸でなければならぬと思はれる程に竣り泣きや吐息をはじめた。ルシンダは彼女の才氣や容貌に感心するとゝもに、その悲しみに對する同情を以て彼女を見戍つた。そして彼女を何とか慰めてやるためにその側に近寄らうとしたが、ドン・フェルナンドーがしつかりと自分をつかまへてゐるので、それは出來なかつた。當惑と驚きとに氣も顚倒

したドン・フェルナンドーは、稍しばしじつとドロテアを見戍つてゐたが、やがてその腕を解いて、ルシンダを手放しつゝ叫んだ、『あゝドロテアよ、お前は勝つた。お前は勝つた。それだけ多くの眞實を集めた力をば、打ち消す心はとても持てぬ。』

ルシンダはドン・フェルナンドーに放されると、床の上へ倒れようとした位に弱つてゐた。しかしドン・フェルナンドーに氣附かれまいとて背後へ身を退いて彼女の側に立つてゐたカルデニオは、今までの恐れをふり棄て、何事が起らうとも構はずに、走り出でて彼女を支へた。そして彼女をその兩腕に抱いて言つた、『あゝ、眞實な、操正しい、美しい、わが心の君よ、もし神が哀れと思召して、つひにお前に休息を與へ給ふとすれば、それは今お前を受ける、またお前をわがものと呼んで以前にも受けたことのある、この手にまさる安全な休息の場所はあるまいぞよ。』

この言葉を聞いてルシンダはカルデニオを見上げた。先づ彼の聲音で彼と知り、次には自分の眼で彼を見て滿足したので、自分のすることの後前も忘れ、一切の禮儀作法も構はずに、その腕を彼の頸のまはりに投げかけ、その顏を彼の顏に擦りつけて彼女は言つた、『さうですとも、貴方、貴方こそこの卑しい者の眞の主人でございます。たとへ再び惡運が二人の間を遮りませうと、貴方のお生命を頼りとする私のこの生命に新たな危險が迫りませうと。』

これはドン・フェルナンドー始めそこに居合せた人々にとつて不思議な光景であつて、皆々この思ひ設けぬ突然の出來事に驚いてしまつた。ドロテアには、ドン・フェルナンドーがカルデニオに復讐でもしようとするかの如く血相を變へて見てゐるやうに思はれた。それは彼がその佩劍に手をかけるのを見たからであつた。そこで彼女はハッと思ふと、行きなり驚くべき素早さで彼の兩腕を抱きしめて、そして接吻しつゝ彼を抑へて動けぬやうにしたのである。そして彼女ははふり落ちる淚と共にかう言つた、『わたしのたつた一つの賴りの貴方は、この思ひがけない時に何をなさるおつもりでございます？　貴方のお脚下に居るのは貴方の妻です。貴方が御自分の妻にしようとなされた婦人は、その良人の手に抱かれてをります。あなた、神樣のなされたことを打ち消さうとなさるのは、貴方樣として正しいことでござりませうか、またお出來になることでござりませうか、考へて下さりませ。またあらゆる障碍に拘らず誠あつく操堅く、貴方のお眼の前で、愛の淚にその正しい良人の顏

と胸とを洗つてゐる婦人をば、自分の連れ合ひにせうとなさるとは似合はしいことでございませうか？　どうぞ神様の爲めにまた貴方のおためにお願ひ申しますから、このあけすけと申す言葉にお腹を立てないで下さりませ。どうぞそのお怒りをお靜めになりまして、この二人の戀人たちを安らかに暮らさせ、神様のお許しある間は、どうぞ貴方はこの人々に少しの邪魔もせずに置いて上げて下さりませ。さうして下されば、貴方は氣高い貴いお心の寬さをお示しなさることになり、世間では煩惱よりも分別心のすぐれたお方と貴方を見るやうになりませう。』

ドロテアがかう言つてゐる間中、カルデニオはその腕にはルシンダを抱きながらも、つひぞその眼をドン・フェルナンドーから離さなかつた。そしてもし彼が何か敵對の振舞ひでもしようものなら、たとへ自分の生命を賭けても、自分に手向ふ者に對しては力のあらん限り防ぎ戰はうと心を決めてゐたのであつた。しかしこの時、ドン・フェルナンドーの友人等を始めそこに居合せた例の牧師補や理髮師や、さてはサンチョー・パンザ君までが、皆々走り寄つてドン・フェルナンドーの周圍を取り巻き、どうかドロテアの涙を無駄にせぬやうに、また彼女の言ふところは殘らず道理のある事だと皆の者も信ずるから、その道理にかなつた希望を失くさせぬやうにと賴んだ。また、かういふ巡り合ひは何人も思ひ設けることが出來なかつたのに、こんなところでかうして皆々落ち合ふといふことは、一寸見れば偶然のやうに思はれるけれども、實はさうでなく、これ全く特別な天の攝理と見ねばならぬと、ドン・フェルナンドーに告げた。牧師補はまた次のことをよく心に留めるやうにと彼に言つた——カルデニオからルシンダを離し得るものは唯死のみである、たとへ刄を以て彼等を裂き離すことが出來たとしても、彼等はその死を最も幸福なものと思ふであらう、そこでこの上施すべき策のない場合に當つて、ドン・フェルナンドーの取るべき最も賢こき道は、自分自身を征服し抑制して、寬大な心を示し、心から喜んでこの二人に神の許せる幸福を享けしめることであると。また牧師補はかうも言つた——眼をあげてドロテアの美しさを御覽なさい、これに並ぶものはあつても極めて稀であり、これに優るものは尙更ないといふことが分りませう。ましてその美貌の上にその淑德や、貴方に對する無上の愛情があるのです。しかしそれ等のことは別として、もし貴方が自ら一個の紳士たりキリスト信者たることを誇りとせらるゝならば、貴方は

御自分の誓はれた言葉を守るより外はありません。そして左様なさればつまり神樣に從ふことになり、すべて心ある人々の賞讃を得ませう。心ある人々は、美人の特權として、よしや生れは卑しくとも美德さへ備へて居れば、どういふ高い階級へ引き上げても、それを引き上げて自分と同等の位置に置く人には少しも恥にならぬことを、承知もすれば認めても居りますのぢや。その上、強い煩惱の力が頭を擡げて來るときには、その中に罪の混りものさへない限りは、その煩惱に負けたとて、その人は必ずしも咎むべきではないのですと。

要するに、以上の言葉に附け足して尚いろ〳〵有力に說きつけたので、ドン・フェルナンドーの猛き心も、さすが名門の血をうけただけあつて、深く動かされ、よし彼が逆らはうと思つてもとても逆らひ了せることの出來ない道理に服したのであつた。そこで彼は從順を示し、與へられたその善き忠告を請け容れて、身を屈めてドロテアを抱擁しつゝ彼女に言つた、『さアお立ち。私の胸に抱く人が足許に跪づくといふことは宜しくない。今言ふことを、今まで私が形に現はさなんだとすれば、それは、お前が私を愛する變らぬ心を見て、眞實なお前の値打ちを私に知らせる爲めの神樣のお差圖であつたかも知れぬ。お願ひだから、どうか私の罪深い恐ろしい非行を咎めずに置いて貰ひたい。お前を私のものにさせようとて私を騙り立てたその同じ原因や力が、私をお前のものにさせまいと逆らはせたのぢや。その證據には、あれ、あのもう晴れ〳〵しいルシンダの眼を御覽、あの眼の中に私のあらゆる過ちの言ひ譯が見えるであらう。あの婦人もその望みの吻を見付けて手に入れたし、また私もお前を見出してすべての望みは滿たされるのであるから、私がこの可愛いドロテアと共に暮らさせて下さりませと神樣に跪いてお祈りするやうに、どうかあの婦人とカルデニオも、一緒に行末永く幸福な月日を無事平穩に送るやうにありたいものぢや。』かう言ひながら、彼は今一度ドロテアを抱擁した。そして淚を流せば、凡ての人の見てをる前で自分の愛情と悔悟の證據を立てゝしまふことになるので、それを自ら制する爲めに非常に氣を附けねばならなかつた程やさしく彼女の顏に自分の顏をすり付けたのである。ルシンダやカルデニオや、また殆んどすべての外の人々は、さういふ風ではなかつた。彼等は思ふ存分に淚を流したのである。或る者は自らの幸福のために、或る者は他人の幸福のために、宛ら一同の上に何か大災難でもふ

りかゝつたかと思はれるやうに泣いた。サンチョー・パンザさへも泣いてゐた。尤も彼の泣いたのは、たゞドロテアこそ自分に大恩惠を施して呉れる筈のミコミコナ女王だと思つてゐたのに、その當がはづれたからである、と彼は後になつて言つた。一同の驚きもその泣くこと〳〵同じく驚らく續いた。やがてカルデニオとルシンダはドン・フェルナンドーの前に行き跪づいて、自分等に與へてくれたこの恩惠に對して非常に鄭重に禮を述べたので、ドン・フェルナンドーはそれに答へる言葉を知らなかつた。そこで彼は二人の者を助け起しつゝ、愛情と禮讓のありたけを盡して二人を抱擁したのである。

ドン・フェルナンドーはやがてドロテアに向つて、お前は自宅からこんなに離れたところへ一體どうして來られたのかと訊ねた。彼女は先きにカルデニオに話したことを殘らず巧に手短に物語つた。それを聞いてドン・フェルナンドーもその連れの人々も、その物語が今少し長ければと望んだほどに面白かつた。そんなにいぢらしくドロテアは自分の樣々の不仕合せを話して聞かせたのである。彼女の話がすむと、ドン・フェルナンドーは、ルシンダの懷ろから、わたしはカルデニオの妻ですから貴方の妻にはとてもなることは出來ませんと明言した例の書付を見出して後、その市で自分の身にふりかゝつたことどもを、詳しく話した。彼の話によれば、彼は彼女を殺さうとした。そして若しその兩親に妨げられなかつたら殺してゐたであらう。彼は怒と恥とに充たされてその家を去つた。そして今少し都合のよい機會もあらば復讐をしようと決心した。その翌日ルシンダがその父の家から出奔して、誰一人その行方を知る者がないと聞いた。數ヶ月の後遂に彼女が或る尼寺に居ること、またカルデニオと苦樂を共にすることが出來なければ、殘る生涯を、悉くその尼寺で送るつもりであることなどを確かめた。それを知るや否や、彼は此處に居る三人の紳士を同伴者として彼女の居るところへ到着した。しかし若し自分のそこへ來たといふことを知らせたら、尼寺の方でも一層嚴重な警戒をするであらうと氣遣つたので、彼女に物言ふことは避けてゐた。そして門番の小舍が開いてゐる時を見計らつて、二人の友を門の見張りに殘して置いて、彼は今一人の友と一緒に中へ入つてルシンダを搜した。すると彼女はとある尼僧と話してゐたので、拒む隙も與へず攫ぎ出して、前以て彼女を連れ去る爲めに必要なものを用意して置いた場所へ運んで來た。かういふことが全く何の差障

りもなく行はれたのは、その尼寺が市から非常に遠く離れてゐたからであつた。更にドン・フェルナンドーは附け加へた、ルシンダは彼の手に落ちたと知ると、全くその知覺を失つてしまつたが、正氣に歸つてからも、たゞもう泣いて溜息を吐くばかりで、一言も口を利かなかつた。そしてさういふ風にたゞ默つて涙を流しながら、この宿屋へ到着したのであつた。そしてこの宿屋へ着いたことは、彼に取つては、あらゆる地上の不幸の終りを告げる天國へ到着することであつたのである、と。

第三十七章　には名高いミコミコナ姫の物語の續きと、その他滑稽な冒險譚が收めてある。

この一伍一什に耳傾けてゐたサンチョーは、自分の出世の希望の色が褪め烟と消えてしまつて、美しいミコミコナ姫はドロテアになつてしまひ、巨人はドン・フェルナンドーになつてしまつて居るのに、自分の主人はそんな事になつたとは少しも知らずに、すや〳〵と眠つて居るのを見て、少なからず心を痛めた。ドロテアは自分の現在の喜びが全く夢でないと信ずることは出來なかつた。カルデニオも同じ心持であつた。またルシンダの思ひも同じ方角へ走つた。ドン・フェルナンドーは與へられた神の恩寵を感謝し、自分の名譽や魂を殆んど破滅に導かうとしてゐたこの錯雜せる迷宮から、救ひ出して貰つたことを神に感謝した。つまりこの宿屋に居るものは誰も彼も、このやうな面倒な望みのない事件が目出度い結果になつたので、滿足と喜悅とに充たされてゐたのである。牧師補は分別ある人として萬人に善い分別を與へた。そして各々の人々の幸福を祝した。しかしその中でも一番元氣がよくて上機嫌であつたのはお上さんであつた。といふのはドン・キホーテの手を通じて被らされた損失や毀害を殘らずカルデニオと牧師補とで拂つてやらうと約束したからであつた。既に述べた通りサンチョーだけは、氣落ちして悄氣てがつかりしてゐた。そこで彼は冴えぬ顏をして、丁度覺めたばかりの主人のところへ近づいて來て言つた、

『憂ひ顏の騎士樣、貴方樣はもう巨人を殺したり、あのお姫樣にお國を取り返して上げたりする骨折をさつしやれんで、寢たい放題寢てござつてようございますわい。もうはや萬事濟んでしまうて、決まりがついてしまひましたからの。』

『拙者もさうぢやらうと思ふぞよ。』とドン・キホーテは答へた、『何故といふに、拙者はあの巨人と、生れてこのかた嘗て覚えのないほどな素晴らしい滅法界の大戦争をやったからの。そしてズボリ……と一太刀背撃ちでな……あいつの首を地べたに轉がしたのぢや。するとその身體から迸り出る血汐は滾々として、まるで水のやうに小川をなして地面を流れたよ。』

『赤葡萄酒のやうにと言はつしやれた方がようございますわい。』とサンチョーは答へた、『それはな、御存じなけりや言うて聞かせますがな、その死んだ巨人ちふのは滅多切りにされた酒嚢で、その血といふのはその嚢のどてつ腹から出た六斗からの葡萄酒でな、またその切り落された首つ玉ちふのは眞つ赤な嘘の皮でございましたのぢや。何もかも怪體なことばかりぢや。』

『貴様は何を言うとるのぢや、阿呆めが。貴様は氣でも狂うたのか？』とドン・キホーテは言つた。

『まア旦那様お起きなされませ。』とサンチョーは言つた、『さうすれば、貴方のなされた見事なお仕事も、幾ら拂はにやならんかちふこともよう分りませうわい。それからあの女王様がドロテアといふ唯の女になつてしまうたことも、もし貴方様に分つたら、びつくりなさるやうないろ〳〵のことも分りませうわい。』

『拙者は左様なことでは少しも驚くまいぞよ。』とドン・キホーテは答へた、『この前こゝへ泊つた時に拙者がお前に言うてきかせたやうに、こゝで起ることは皆魔法の仕業ぢやといふことをお前がよう覚えてをりさへすれば、たとへ今度も同じやうであらうと、何も不思議がることはあるまいぞよ。』

『私の毛布上げもやつぱりそれと同じことでございましたら、私も貴方の言はつしやることを皆な本當にしましたらうかな。』とサンチョーは答へた、『生憎さうぢやなうて、あの毛布上げは眞事本事でございましたのぢや。今日もこゝに居るあの宿屋の亭主も、あの毛布の片隅を持つて、なかなか手際よう手厳こく力任せに私を空へ擲り上げて笑うたのを、私はちやんと見ましたからの。人を覚えとるといふことになりますとな、私は無學な罪の深い奴ではございますが、私としちやア少しでもそれに魔法があるとは思はれません、散々傷を受けて散々災難に遇うたと思ふばかりでございますからの。』

『よし、よし。それは神様が癒やして下さらうわい。』とド

ン・キホーテは言つた、『拙者はお前の言ふやうな變身やその他のものを見たいと思ふから、着物を取つて呉れい、すぐに行かう。』

サンチョーはその着物を取つてやつた。ドン・キホーテが着物を着てゐる間に、一方では牧師補がドン・フェルナンドー及びそこに居合せたその他の人々へ、ドン・キホーテの狂氣のことや、また彼が自らその想ふ婦人の不興のために留まつて居ると思ひこんでゐたボブレ山から、彼を引き出さうとて用ゐた例の計略のことなどを話してきかせた。牧師補は先きにサンチョーの話した樣々の冒險をも殆んど殘らず彼等に物語つた。それを聞くと彼等は皆、それこそ氣の狂つた頭でひねり出すことの出來るこの上もない奇妙な氣違ひの沙汰であると思つて、少からず驚きもし笑ひもしたのである。しかし最早ドロテアは、お目出度いことになつたので、今までの目論見に加はつて行つて貰ふわけに行かなくなつたので、ドン・キホーテを自宅へ連れて行くには、何か別の方法を工夫するか發見するかしなければならぬであらう、と牧師補は言つた。

カルデニオは自分等が始めた今までの計畫を遂行することを主張して、ドロテアの役はルシンダが代つて十分立派に演りこなせるであらうと言つた。

『いや、さうしてはいけません。』とドン・フェルナンドーは言つた、『私はドロテアにその思ひつきを何處までもやらせたいと思ひます。そしてもしその紳士の村があまり遠くなければ、私も何かその方のお役に立つことが出來れば仕合せです。』

『その村はこゝから二日の路程よりありません。』と牧師補は答へた。

『もつと遠からうとも、そんな善い働きをする爲めなら私は喜んで旅をしませう。』とドン・フェルナンドーは言つた。

丁度この時、ドン・キホーテは、頭には例の通りすつかり凹んだマムブリノーの兜を戴き、手には圓楯を持ち、棒切れの槍を杖にし、十分に甲うて出て來た。彼の現はしたこの異樣な姿は、ドン・フェルナンドーを始め皆の人々をびつくりさせた、殊に彼等が、その痩せて黃色い半里もあるかと思はれる長い顏や、寄せ集めものゝ鎧や、そのもの〳〵しい擧動などを眺めたときには。一同は、彼が何を言ひ出すかと皆な默つて待つてゐた。すると彼は眼を美しいドロテアに据ゑて、非常に重々しく落ちついて言ひ出した、

『麗はしき姫君よ、家來より承るところによれば、貴女樣

はその資格を失はれ御身分を失はれて、今までの女王にしてやんごとなき姫君たる御自分から、唯の娘におなりなされたと申しますな。もしやそれが、拙者が骨惜しみをするかとの御懸念から、貴女の父君なる魔術師の王の命によつてなされた事としますれば、貴女の必要とせられまた當然受けらるべき筈の御助力について、失禮ながら御父君は御存じもなく、武士道の記錄にも全く通じて居られぬと申さねばなりません。もし御父君が拙者のやうに、武士道の記錄をば熟讀翫味せられたことなら、拙者ほども名のない騎士でさへ、この上の難事を成し遂げてゐるといふことを、到る處で見出されたでありませう。たとへ如何ほど傲慢な奴であらうとも、巨人の一匹ぐらゐ殺すのは大したことではございません。拙者は自ら一人の巨人と戰うてからまだ幾時も經つて居らぬのぢやが、それでも……いや、それを言へば私が嘘を吐くと言はれうから、これは言はずに置きませう。しかしながら、萬事を明かにする「時」が、思ひもよらぬ頃に、やがてその物語をして聞かせませう。』

これを聞いて亭主は言つた、『お前さんは二つの酒嚢と戰うてをつたのぢや、巨人とぢやありません。』しかしドン・フェルナンドーは、口を噤んで何事があらうともドン・キホーテに逆らうてはならぬと亭主に命じた。ドン・キホーテは續けた、『つまるところかうでござります、御身分高い慶嫡の姫君樣。もしや貴女の父君が、今申すやうな譯合から貴女のお身にさういふ變化を招かれたとしますれば、何もそれを大變と思召すには及びません。この世の中には拙者の劍で貫くことの出來ぬやうな危險は一つもありませぬ。それ故拙者はその劍を以て多く日數の經ぬ内に、貴女の仇敵の首を打ち落して、貴女に王國の冠を戴かせて差し上げませう。』

ドン・キホーテはこれだけ言うて、姫君の答へを待つた。姫はドン・キホーテをその自宅まで送りとゞけるまでは、やはり例の芝居を續けようといふドン・フェルナンドーの決心を知つてゐたので、すら〳〵と、しかも重々しく答へた、『勇ましい憂ひ顏の騎士樣、誰が申し上げたにしましても、わたしの身に、何かの變りが起つたと申すのは、本當ではございません。私はやはり昨日と同じ私でございますから。尤も、ある不意の仕合せが起つて來て、思ひも寄らなんだ望みが叶うて、幾らか私の身に變りが出來たのは本當でございます。けれどその爲めに、これまで通りの私でなくなつたとか、貴方のお勇ましい天下に敵無き御武勇にお頼

り申さうと思うてをりました私の願ひを棄てるやうになつたとか、さういふことはございませぬ。それ故どうぞお情けに、私を生んだ父親を悪くお思ひなされずに、賢い分別に富んだ人ぢやとお信じ下さりませ。父は自分の巧みによりまして、こんなにたやすく又確かに私の不幸を救ふ道を發見したのでございますから。まことに貴方のお蔭を蒙りませなんだら、現在手に入りましたやうなこんな仕合せは、とても私に授し當てられるものではなかつたのでございます。そしてかう申しますのは全く眞實でございます。それは此處にござる皆さまが十分證を立てゝ下さいます。後に殘つて居りますことは、明日は旅に出るといふことでございます、今日はあまり道が捗りませなんだから。私の待ち望んでをりますこの上の目出度い成り行きは、唯もう神様と貴方様の御勇武とにお賴り申すばかりでございます。』

快活なドロテアはかう言つた。ドン・キホーテはこれを聞くと、サンチョーに向き直つて、立腹の様子で言つた、『こら、サンチョーの小童め、貴様はスペイン中で一番太い小童ぢや。この泥棒の宿無しめッ、貴様はたつた今の先、このお姫様がドロテアといふ唯の娘に變つてしまはれたぢやの、拵者が巨人から切り落したと思うとるその首は眞つ赤な嘘の皮ぢやの、その他拵者に生れて初めての大變な混雜をさせるやうな痴言を言うたぢやないか？　見てをれ、（と言つて天を睨んで齒ぎしりして）、拵者はきつと、世間の武者修行者の嘘つきの家來どもの今後の好い見せしめになるやうに、貴様に大成敗を加へてやる考へぢやぞ。』

『且那様、どうぞお靜まりなされませ。』とサンチョーは答へた、『そのミコミコナのお姫様が變らつしやれたちふことは、私の間違ひであつたかも知れませんがな。けれどその巨人の首つ玉のことや、またあの酒嚢破りのことや、あの血が葡萄酒ぢやつたちふことは、丁度神様がござるやうにたしかな間違ひのない事でございますわい。その證據には貴方様の寢臺の枕もとに破れた嚢がころがつて居ります、それから赤葡萄酒は部屋中を溜にしとりますわい。それが嘘なら卵の油揚られる時如何な言葉を以て現はせる道理もその眞僞を判せらるゝ時の意になつたらよう分りませうわい。それは、此處にござる御亭主さんがその損害の償ひをして呉れろと催促さつしやる時になつたらといふことでございますよ。その他のことは、このお姫様がもと通りお姫様ぢやちふことで、そりや私も心から嬉しうございますのぢや。その事は、私にも人並に關りがございますからの。』

『サンチョー、やつぱり貴様は阿呆ぢやの。もう赦して呉れ、もうそれで澤山ぢや。』とドン・キホーテは言つた。『もうそれで澤山でせう、』とドン・フェルナンドーは言つた、『もうその事は言はぬことにしませう。そこでこのお姫様は、今日はもう遅いから明朝出發しようと申されますから、さうするとして、そこで私らは今夜ひと夜を愉快に語り明かして、明朝はドン・キホーテ様のお供をいたしませう。私らは、貴方が取りかゝつてござるこの大冒險の行はれる間、またやがて勇ましい無類の大手柄をなさるのを、拜見したいからでございます。』

『拙者こそ貴方に仕へてお供致すのです、』とドン・キホーテは言つた、『貴方の御鄭重な御挨拶に對し、また拙者に對する御厚意に對しては、まことに滿足に存じます。それにつけても、拙者は御期待に背かんやう努めませう。若しさうでなかつたら、この生命を拋つことはおろか、もしその上のことが出來さへすれば、その上の事でも致しませう。』

ドン・キホーテとドン・フェルナンドーとの間には盛んな口上や挨拶がさま〴〵取り換されたが、丁度その時一人の旅人がその宿屋へ入つて來たので、それは切り上げられた。その旅人といふのは、その服裝から見ると、ムーア人の國からつひ近頃來たばかりのキリスト信者のやうに見えた。といふのは、靑い布で拵へた半袖で、カラーのない裾の短い上着を着けてゐたからである。そのズボンもやはり靑い色の布であつた。またその帽子も同じ色であつた。そして彼は黃色の半長靴を穿いて、その胸に劍にかけてゐる飾帶にはムーア風の短劍を吊るしてゐた。彼の背後には、ムーア人風の裝をした一人の婦人が驢馬に乘つてついてゐた。その顏には面紗をかぶり、その頭には頸布をかけ、そして小さい刺繍のある帽子を戴き、兩肩から足まで蔽ふマントルを着てゐた。その男の方は、筋骨逞しい釣り合ひの好い體格で、四十を些と越した位の、どちらかと言へば黑い顏色で、口髭は長く頸筋は濃く生えてゐた。つまり彼の容貌は、好い身裝をしてをれば、身分ある生れの人と思はれさうなものであつた。彼は入つて來るなり部屋はあるかと訊いた。がこの宿屋には一つも明き間がないと言はれて、彼は失望したやうに見えた。そして、その身裝から見ればムーア人と思はれる例の婦人に近づいて、驢馬の上から抱きおろした。ルシンダもドロテアも、宿屋の上さんもその娘も、マリトルネスも、この異樣な、全く見たこともない服裝に引きつけられて、その婦人の周りに集まつた。そし

て、何時も親切で慇懃で頓智のあるドロテアは、この婦人も、一緒に來たその男の人も、部屋がないと言はれて困つてをるのに氣が附いたので、その婦人に向つてかう言つた、『あなた樣、何しろ街道筋の宿屋のことでございますから、まことにむさくるしくて贅澤なものはございませんがお氣を惡くしては下さいますな。それでもお構ひなくこの私たちがルシンダを指さしつゝと一緒にお泊りなさらうと思召すなら、少しは外よりもよいと思召すかもしれません。』

これに對してその面紗の婦人は何も答へなかつた。たゞその席から立ち上つて、胸の上に兩手を組み合せて、お禮を言ふしるしに頭をさげ體を曲げたばかりであつた。彼女の默つてゐるところからして、これは屹度この國の言葉の話せないムーア人に違ひないと皆々判斷したのである。

丁度この時、今まで何か外のことをしてゐた例の捕虜（作者セルヴァンテスはこの男の捕虜であることを言ひ忘れてゐたのである）がそこへやつて來て、自分の伴のまはりに婦人たちが立つてゐて何か言うたのに、その女が答へをしないのを見て、かう言つた、『御婦人がた、この娘は私たちの國語が殆んど分りませんで、自分の國の言葉しか話せません。それで尋ねられたことに返事もせずまた出來もせぬのでございます。』

『いゝえ、別に何にもお尋ねはしませなんだ。』とルシンダは答へた、『たゞ今夜は私たちのお仲間になつて私たちの居ります部屋で合ひ宿をしませうと申したばかりでございます。私たちは、困つて居られる旅の方にはどなたにも、取分けそれが御婦人であれば尚のこと、御親切にして上げねばなりませんから、このお方にも、事情の許します限り心持ちよくして上げるつもりでございます。』

『それはどうも奧樣がた、』とその捕虜は答へた、『この婦人からも厚くお禮を申します。そしてその御親切は、こんな場合と言ひ、またお見かけ申しますところお歷々らしい貴女樣がたから頂くのでございますから、まことに有難いことに思はれます。』

『ねえ、貴方、』とドロテアは言つた、『この御婦人はキリスト信者ですか、それともムーア人ですか？　お身裝や默つて居られるところから見ますと、どうしても、私たちが、さうでなければよいがと思ふ御婦人のやうでございますが。』

『その身裝や表面から申しますれば、ムーア人でございます。』と彼は言つた、『しかしその心は、全く善良なキリスト信者でございます。そしてこの人は、キリスト信者にな

りたいと非常に望んでをります。』

『それでは、まだ洗禮はお受けになつて居りませんの？』

とルシンダは言つた。

『この婦人が、その生れ故郷のアルジールス（アルゼリアの港）から離れて以來、その折が無かつたのです。』とその捕虜は答へた、『それに只今までは、まだ私たちの聖母教會（ローマの教會）で定められた儀式をすつかり覺えぬうちに、どうしても洗禮を受けねばならぬといふやうな、さほど生き死にに關はる程の急な目に逢はなんだのでございます。しかしどうか、遠からんうちに、私たちの身裝に見えますよりはずつと高いこの婦人の人品に似つかはしい儀式で、洗禮を授かることゝ存じます。』

これ等の言葉によつて、それを聞いた人々は皆、このムーアの婦人とその捕虜との何者であるかを知りたいといふ望みを懷いた。しかし丁度今といふ今は、二人の身の上を訊ねるよりも、彼等を休ませるやうにしてやるべき時であると思つたので、誰もそれを訊ねることは好まなかつた。ドロテアはそのムーアの婦人の手を取つて、自分の傍に坐らせ、そしてその面紗を取り去るやうに賴んだ。その婦人は、何と言はれてをるのか又どうすればよいのかと訊ねるかの如く、その捕虜を見やつた。彼はアラビア語で、お前のその面紗を取るやうにといふのであると言つてきかせた。そこで彼女はその面紗を取り去つて、美しい顏を現はした。それはドロテアにとつてはルシンダよりも美しいと見え、ルシンダにとつてはドロテアよりも美しいと見えた。そしてそこに立つてゐた凡ての人々は、もしこの二人の婦人の美しさに比べられる美しさがあるとすれば、それはこのムーア婦人の美しさであらうと思つた。それどころか、このムーア婦人の美しさがいくらか優つてをると思ふ者さへあつた。人の心を捕へ好意を得るのは美貌の特權であり魅力であるので、殘らずの人が、忽ちこの美しいムーア人に熱心に親切をつくし氣を附けるやうになつた。ドン・フェルナンドーは捕虜に彼女の名前を訊ねた。すると彼は、レラ・ゾライダといひますと答へた。しかしそれを聞くや否や、彼女は、その尋ねた事の何であつたかを察して、幾らか不機嫌に力を込めて、慌てゝ、『いゝえ、ゾライダでありません。マリアです、マリアです！』と言つて自分の名前はゾライダではなくマリアだといふことを人々に分らせた。これ等の言葉や、それを言つた時の彼女のいぢらしい熱心は、聞いてゐた人々のうちの或る者に少なからぬ淚を

催させた。生れつき心の優しい同情の深い婦人等は殊にさうであつた。ルシンダは『さうです、さうです、マリアさん、マリアさん。』と言ひつゝ眞心こめて彼女を抱擁した。それに對してムーア人は、『さうです、さうです、マリアです。ゾライダ、マカンゼ、』と答へた。それは『ゾライダではない。』といふ意味であつた。

今や夜は既に近づいて來た。そこで亭主は、ドン・フェルナンドーの供人等の差圖に從つて、自分の手で出來る限りの最上等の夕飯をこの人たちに備へようとて苦心した。やがて時刻が來たので、人々は殘らず、食堂用のものらしい細長い食卓の座席についた。但しこの宿屋には圓い食卓も四角なのも一つもなかつたからである。そしてその上座の主賓席は、頻りに辭退はしたけれども、ドン・キホーテに當てがつた。彼は自分がその保護者であるところから、ミコミコナ姫を自分の傍に坐るように所望した。彼女の次にはルシンダとゾライダとが席につき、それに向つてはドン・フェルナンドーとカルデニオと、その次には捕虜やその他の紳士たち、そして婦人の側には牧師補と理髮師が着席した。かうして一同は非常に愉快に食事をしたが、ドン・キホーテが食事を止めて、いつぞや山羊飼ひらと夕飯を共にした時にしたやうな長演說をしたいといふ氣になつて、次のやうに述べ立てるのを聞くと、一同の愉快は益々加はつたのであつた——

『まことに皆樣がた、よく〳〵思ひ廻らして見まするに、武者修行の道を奉ずる人々の見るところは、いかにも大きく驚くべきものがありまする。今といふ今この城門に入りこんで、我々がかうして居るところを見て、我々の何者たるかを推察し想像し得る者が一人としてこの世の中にありませうか。拙者の傍にござるこの御婦人こそ、拙者らがよく承知して居る通りの大女王であるといふことや、拙者こそは評判の口に傳へられて廣く遠く轟き渡れる憂ひ顏の騎士ぢやといふことを、誰が分る者がありませうぞ？　そこで、この業とこの職分は、人間の作りだした一切のものに立ち優つてをることや、いよ〳〵烈しい危險に曝されれば曝されるほど、いよ〳〵譽れを得るに足るものとなることは、疑ひやうのないことぢや。文こそ武に優れ、と言ふやうな手合は退りをれ。さういふ手合は、たとへ何人であらうとも、自分の言ふことが自分に分つて居らぬのぢやと、拙者は彼等に言うてやらう。彼等が何時も引き出して、專ら賴みとする理由といふのは、心の勞役は身體の勞役よりも優

るとか、武勇はたゞ身體のみを使ふものぢやとか言ふに過ぎん。この武士の職分を、手足の力より外に何も入らぬ人足の仕事のやうに心得る。また拙者らこの道を奉ずる者の武勇と稱へるものには、深い智慮があつて初めて決行されるやうな剛勇の行ひといふものが含まれてをらんかのやうに心得る。また一軍を統べ、一都市の守備を預かる武人の精神は、たゞ身體によつて働くのみで智慮によつては働かぬものゝやうに心得る。何の何の。敵の意向や、計畫や、戰略や、防備などを測り知り、或ひは敵の襲撃に備へることなどが、肉體の力に依つて出來るか出來ぬか考へて見るがよい。つまりさういふことは凡て智慮の働きであつて、それには肉體は少しも與らぬのぢや。それ故武も文に劣らず智慮を要する次第であるから、そこで文の人（これは主として法律家の意味す）の智慮と武人の智慮とは何れが餘計に役立つか考へて見よう。そしてそれを見るには、その雙方がめい〳〵達しようとしてをる目的なり目標なりを見れば分る。つまりその目差す目的の高い方が優れることになるわけぢや。文の目的目標は――拙者は今聖書のことを言ふのでありませんぞ、あの聖書の目差すところは人間の魂を天に高め導くのであつて、いかなるものもさういふ無限の目的には較べられませんからの。拙者の言ふのは人間の文なのぢや――その目的は差當的の捉を建て〳〵、個人々々に所有權をもたせ、立派な捉が遵奉されるやうに監督するところにある。その目的もたしかに貴い高い賞讃に値するものではあるが、しかしながらその賞讃は武によつて求められる目的に與へられるやうなものではない。武は人間が現世で願ひ求め得る最大の恩澤たる平和をその目的とし目標としとるのぢや。この世間と人類とが受けた最初の福音は、私らの豊であつたあの夜に、天使等が大空で「いと高きところには榮光神にあれ、地には平安、人には恩澤あれ」と歌うて告げ知らせたそのものぢや。そして天地の大いなる主がその十二使徒や選ばれた弟子たちに教へられた挨拶は、どの家へ入つても「この家に平安あれ」と言ふことぢやつた。また「我わが平安を汝等に與ふ、我はわが平安を汝等にのこす、平安汝等と偕にあれ」と何遍も仰有つたのぢや。さういふ恩澤の手によつて、寶玉や尊い賜物が與へられ遣された、これなくば、天にも地にも幸福なしといふやうな寶玉が。この平和こそ戰爭の眞の目的ぢや。そして戰爭は取りも直さず武の別名ぢや。そこで、戰爭の目的は平和であり、また隨つて文の目的に優るといふことが承認されたと

すれば、今度は文の人と武道を奉ずる者との身體の勞力を檢べて見て、どちらが烈しいか見るとしませう。』

ドン・キホーテは、立派な態度と正確な言葉とを以てこの演說を述べた。そこで一時の間聽き手は皆々彼を狂人と思ふことはとても出來なかつたのである。それどころか、聽き手の大方は武器を生れながらの附屬物として居る紳士なので、皆々非常に喜んで彼の續きを傾聽したのである、『さて、そこで、一體學者なるものは何を忍ぶかと言ふのぢや。先づ第一に貧乏ぢや。皆が皆貧乏といふわけではないが、しかし出來るだけ強めて言ふのぢや。そこで學者が貧乏を忍ぶと言へば、その困窮の樣はもはや多言を要せぬと思ひます。貧しき人は人生の立派な事物には與ることはないのぢやからな。この貧乏を學者は樣々に、飢ゑとか、寒さとか、裸かとか、或はこれらを一どきに受けますのぢや。しかしそれに拘らず、たとへいくらか時分を外れることはあらうとも、また金持ちの食ひ餘しではあらうとも、何も食ふものが無いといふほどまでに押し詰りはせんのぢや。何故といふに學者の一番情ながるものは、自分等の仲間で「ソップ貰ひに行く」（修道院で貧民に施しをすると言うて居ることなのぢや。また世間には何時も誰か知らん隣人の火鉢や煖爐があつて、彼等を迎へて晃れるから、それに依つて暖くはならんまでも、せめて寒さを凌ぐことは出來る。のみならずあの人々は夜になればぬく〳〵と屋根の下に眠られるのぢや。その他たとへばシャツの着更へがないとか、靴の穿きかへがないとか、着物が薄うて擦り切れてをるとか、またひよつとした廻り合せで何かの御馳走によばれると、彼等はガツ〳〵と意地汚く腹一杯に詰めこむといふやうな、さういふ細かいことまでは言ひますまい。今述べたやうな峻しい困難な道を通つて、此處によろけ、彼處に倒れ、起き上つてはまた轉びして、あの人々は漸くその望みの地位に達するのぢや。そして一旦そこに達すると、サーテス、シラ、カリブディス（何れも流れ、渦巻、海の怪物など通過し難き障碍などの難所をば、恰かも幸運の翼にでも乘つて飛び越えるやうに、通り過ぎた人々が隣分多いのぢやが、つまりさうなると、その人たちは坐りながら世を治め世を支配して、その飢ゑは變じて滿腹となり、その寒さは暖かさになり、その裸は上等の着物となり、莚の上の眠りは舶來の晒布や綿子の上の休息となる。それはその人々の德に依つて得た正當の報いぢや。しかしそれを武人の忍ぶところのものと並べて比べるなら、さういふ人々の忍ぶところは遙かに劣るといふこと

は、これから次に述べる通りぢや。』

第三十八章　は文武兩道に關してドン・キホーテの述べた珍らしい演説を記す。

ドン・キホーテは演説を續けて言つた、『文人の場合では貧乏のことやその附屬物のことを第一に申しましたから、今度は武人がそれよりも富んでをるかどうかを考へて見ませう。さうしたら我々はこの貧乏といふことに於ても世にこれほど貧乏なものはないといふことを知るであらう。何故といふに、武人は全く情けない報酬に賴つてをるもので、その報酬はなか〳〵遲く、時には全く無いこともある。或ひは生命と良心とを賭して掠奪し得るものを心當てにするのぢや。時としては斬り裂かれた胴衣一枚で軍服と下着との用をさせるといふ程に非常な薄着をするであらう。また武人は冬の最中にも廣野の中で極寒に曝されて、身を防ぐものはたゞその口から出る息ぐらゐのものぢやが、しかも、息すらも空つぽの腹から出て來るので、自然の法則に反して冷たくなければならぬといふことは、拙者が言ふまでもないことぢや。確かに武人は自分に備へてある寢床の上で、かういふすべての不愉快の補ひをつけようと夜の來るのを待つてをるのぢや。しかしその寢床は自分の手拔かりでさへなければ、決して狹すぎるといふやうなことは無い。そのわけは武人は雜作なく自分の好むだけ何尺でも地面を測り取つて、身體から敷布が滑り去る心配もなく、思ふ存分その上に身を轉がし廻つてよいからぢや。かういふ風にして、さて自分の職分に於ける位地に就くべきその日その時が來たとするがよい。戰の日が來たとするがよい。その時になると、恐らくその彈丸を射貫いた彈痕を療治して貰ふために麻で拵へた患者帽を被せられるか、それとも片腕か片脚を刺かんやうにされてしまふであらうわい。また假りにさういふことにならずに、お慈悲ぶかい神樣が無事健全に身を護つて下されたとしてもぢや。やつぱり以前に變らず貧乏で、立身出世をするまではまだ〳〵幾度もの戰場を往來して連戰連勝して來なければならぬのぢや。しかしかういふ種類の奇蹟も偶には見られるものぢや。皆さん、どうです。皆さんは戰で出世した人々の數よりも討死した者の數がどれほど多いかといふことを考へられたことがありますか？　申すまでもなく、兩者は、とても比べられるものぢやなし、生き殘つて賞與を獲たものは千とはな

い位ぢやが、討死した者は數限りがないわけぢや、と皆さんは言はれませう。ところが文人の場合になると、それが全く反對ぢや。つまり、袖で取るのは言はずとも、袴で受ける分（前者は臨時及び役得、後者は定まつた俸給）だけでも、友人等は暮しに差し支へはないわけぢや。それから言ふと武人は骨は餘計に折つても受けるところは遙かに少ないのぢや。しかしこれに對してはかうも言へませう、三萬の武人よりも二千人の文人に賞與を與へる方が容易である。何故（なぜ）といふに、文人に褒美を與へるには、つまり職分に從ふ者に是非とも與へねばならぬやうな位地を持たせればよいのぢやが、武人には、是非とも彼等が仕へてをる君主の財産から報いねばならぬからぢやと。しかしこの不可能なことこそ却つて拙者の議論を強めるものぢや。

『しかしこれは解答を得るに困難な問題ぢやから、しばらく預つて置いて、武は文に優るといふ問題に歸りませう。これは何方（どちら）の側からも議論百出する問題ぢや。そのわけは、拙者が述べた樣々のことは別として、文の方では戰爭にもその法則があつて、それによつて支配されてをる、しかも法則は文および文の人の領分に屬するものであるから、そこで文が無ければ武は成り立たんと言ひますのぢや。これに對して武の方ではかう答へる、武がなければ法則は守られぬ、何故といふに、武に依つてこそ國家は守護され、國土は保たれ、都市は鎭（まも）られ、往來は安全に海は海賊の難がないのぢや、つまり、もし武がなかつたら國家も國土も王國も都市も海陸の往來も、戰爭に伴ふ橫暴と慘禍とに曝されるのぢや、戰爭といふものが世の中にあつて、その特權と力とを自由に振り廻す間はさうぢやと。そこで一番資本（もうけ）のかゝるものが、最も値打ちがあり、また最も値打ちありとしてよいといふことは明かぢや。文の方で偉くなるには、時間と勉強と飢ゑと裸かと頭痛と不消化と、その他そのやうな樣々のものが（その中の幾つかは拙者が先きに擧げて置いたが）入用なのぢや。しかし普通一般の順序から立派な武人にならうとする人には、先づ文人の受ける一切の苦痛は受ける、しかもその度合ひから言うたら、とても比べものにならん位ひどいものぢや。といふのは時々刻々に身命を失ふの危險を冒すからぢや。學者たちの達したり惱んだりする困窮貧乏の如何なる恐怖が、武人の嘗める苦しみと較べられようぞ？　武人は攻圍せられてをる城砦の中で半月堡や封壕（ふうごう）（一種の防禦工事）に登つて歩哨を動めてゐると、自分の立つて居る持ち場の方へ敵軍が地雷火坑を掘り進めて居るこ

とは分つてゐても、しかも如何なる事情があらうとも自分に差し迫るその焦眉の危險から退くことも逃げることも出來んのぢや。たゞ自分の隊長に事の次第を知らせて逆坑によつて、その危險を救ふやうにするまでぢや。そしていつ何時自分の身が翼なくして雲に昇り再びまた心ならずも奈落の底に落される時が來るやらと、恐は〳〵待ちながら、自分の立ち場に立つて居るのぢや。けれども若しこれ位ではまだ些細な危險と思はれるなら、それでは二艘の軍艦が船首と船首を衝き合せて、大海の眞唯中で互にもつれ合ひ絡み合ふ、その時の武人の身には尖つた舳先の板の間二尺より居るべき處も無いのぢやが、さういふ戰に比べられ、又それに優る危險があるかどうか。しかもその武人は、たとへ自分の身と槍一本の長さも隔つて居らぬところから敵の大砲をさしつけられて、夥しい死の使者が眼前に迫つて來ようとも、僅かに一歩を誤れば落ちてネプチューン海神の底へ見舞ひに行くとは知りつゝも、尚且つ不屈の勇氣を以てわれを勵ます名譽の念に動かされ、あらゆる射撃の的となつて、その狹い路を敵船へ乘り移らうと爭ふのぢや。それに尚更ら驚くべきことは、一人の兵が、世界の終りまでは再び起きて來られぬどん底へ落ち込まぬに、外の兵がその後を受け持つ。そして若しこの兵が敵のやうに待ち構へてゐるその海へまたもや落ちると、後から後からと、その間に一瞬の隙も置かずに續くのぢや。これはまことに戰場に於てのみ見られる勇壯剛毅の極みなのぢや。この大砲といふ憎むべき器械の暴威を知らなんだ時代はまことに幸福であつたのぢや。思ふにこの大砲を發明した奴は、この惡魔のやうな發明によつて、卑劣卑怯な武器を以て勇士の生命をやす〳〵と取るやうにしたのぢやから、その報いとして地獄に居るに違ひない。してその勇士が勇ましい胸を勵まし躍らせつつ、勇氣と熱誠との絶頂に達してをると、その途端に、どうして來たか何處から來たか分らぬやうな流れ彈か、恐らくこのいま〳〵しい飛道具の火藥を自分で切りながら、その火花の閃きに魂消て逃げた奴の打ち出した流れ彈だらうが、一瞬にしてその勇士の様々の目論見に終りを告げさせ、まだ〳〵何十年と長らへてよい者の生命を斷つてしまふのぢや。そこで拙者もこれを考へて來ると　我我の生きてをるこの厭はしい時代に、この武者修行の職に就いたといふことを、內心後悔して居ると言はうかといふ氣になりますのぢや。拙者はどういふ危險をも恐れぬとは言ふものゝ、それでもやはり煙硝や鉛のために、折角拙者が

この腕の力とこの劍の切先で、全世界に冶く名聲を轟かせ知れ渡らさうとする好機會を奪はれはすまいかと、幾らか不安心になりますわい。しかし何事も神の御意のまゝになるのぢや。拙者がもしこの企てに成功すれば、拙者は往昔の武者修行者たちが身を曝したよりも以上の危險に向ふわけぢやから、更に一層の名譽を得ることになりませう。』

他の人々が食事をしてゐる間中、ドン・キホーテはその口に肉を持つて行くことを忘れて、この長い演說をしたのである。尤もサンチョーは、食事をすましてからでも言ひたいことを殘らず言ふだけの時間はあらうから、先づ食事をなされと一度ならず主人に勸めた。彼の演說を聞いた人々はこの人が一見常識を備へて、その論ずる事々には道理に適つた意見を持つてゐながら、一旦例の厄介千萬な武士道の問題になつて來ると、情ないほど分別を缺いてゐるのを見て、今更氣の毒な感じを起した。牧師補はドン・キホーテに向つて貴方が武の爲に辯ぜられたことは、すべて悉く正しい、そして私自身は文の人で、大學出身ではあるが、同じ意見をもつて居りますと言つた。

彼等は食事を終へ卓布は取り除けられた。そして宿屋の上さんと娘とマリトルネスが、今夜婦人客ばかりで泊るやうに定めてあつたラ・マンチャのドン・キホーテの屋根部屋を片付けてゐる間に、ドン・フェルナンドーは、例の捕虜にその身の上話をしてくれと頼んだ。蓋し、その捕虜がゾライダと共にそこに到着した際にふと洩らした言葉の端から判斷すれば、それは異樣な興味あるものに相違なかつたからである。これに對して捕虜は、喜んでお求めに應じますが、唯氣遣ひなのは、私の物語はお望みほどに面白くなくはあるまいといふことです。しかしお言葉を否むのも何ですから、お話し申しませうと答へた。牧師補やその他の人人は彼に禮を言つて、どうぞと附け加へた。さういふ風にせがまれたので、彼は、お命じ下されば宜しいのに、何もお頼みには及びませんと言つて附け加へた、『貴方樣がたがよくお聞き下さいましたら、大方滑稽な凝つた細工で拵へ上げた作り話も及ばぬ眞實の話しぢやと思うて下さいませう。』この言葉に、人々は銘々の席に着き、深き沈默を守つた。人々が無言の裡に自分の話を待ち構へて居るのを見て、彼は氣持のよい穩かな聲で次のやうに話し出した。

第三十九章　では捕虜が自分の身の上話や冒險譚を述べる

『私の一家はレオン山（ピレニース山脈の西續きの裾にある）の中のある村から出まして、財産よりもむしろ親切な物斉みせぬ氣質ですぐれてゐました。尤もその邊の部落は一體に貧乏でしたから、私の父はどちらかと言へば金持ちとして通つてゐました。父がもし財産を費すと同樣に貯へることにも悧巧でありましたら、實際金持ちでありましたらう。父のこの鷹揚な大ざつぱな氣質は、若い時分兵隊をやつてゐたのでそこから來たのです。つまり兵隊の生活は、吝ん坊が物斉みせぬ者になり、物斉みせぬ者が放蕩者になる學校なのです。そこで若し兵隊でありながら守錢奴である者があつたら、それこそ滅多にない怪物です。私の父は物斉みせぬところを通り越して、放蕩に近い方でした。これは自分の名前や地位を繼がすべき子供を持つた有妻の男には決して褒めた氣質ではありません。父は男の子ばかりを三人持つてゐましたが、しかも皆な職業に就かねばならん位の年頃になつてゐました。さうなつても父は自分の惡癖を直す力のないことを思うて、その放蕩散財の手段になるものを、つまりその財産を我が身から脫き棄てようと決心しました、それなくばいくらアレキサンダー大帝でも吝に見えたでありませうその財産を。それで或る日私等三人を離れた一室に呼んで、さうして次のやうなことを申しました——

「息子たちよ、私がお前たちを可愛がるといふ證據としては、お前たちは私の息子ぢやと言へばそれで澤山ぢや。また私がお前たちを可愛がらんのではないかといふ疑ひを深めるには、私はお前等に讓る財産を保管するだけの自制心のない者ぢやと言へば、それで十分ぢや。そこで私といふ者は父らしくお前たちを可愛がつて、纏父のやうにお前たちを零落させようとは思はぬ者ぢやと、この後までもお前たちに信じて貰ひたいので、私は長い間考へて、熟考の上で決心したことをお前たちにしてやりたいのぢや。お前たちは最早銘々の暮し方なり、せめて年取つてから名利を得られるやうな職業なりを選ばねばならん年輩になつた。そこで私のしようと決心したことは、私の財産を四つに分けることぢや。その三つはお前たち面々に同じやうに分けてやつて、殘りの一つは私の方に取つて置いて、餘命はどれほどあるか知らんが、とにかく天命のつづく間それで以て暮しを立てゝ行くつもりぢや。しかしお前等は皆な自分の分け前を受け取つたら私の差圖する路に銘々從うて貰ひたいのぢや。このスペインの國には實に尤もと思はれる諺がある——諺といふものは長い間の實際の經驗から出た短い格

言で、殘らず眞實ぢやが――私の言ふのは「教會か、海か、王樣の家か」といふ諺ぢや。これは平たい言葉で言へば、立身し金持ちにならうと願ふ者は、教會に行くか、貿易商になつて海へ出るか、それとも人も言ふやうに「殿樣の御寵愛よりは王樣の端役」ぢやから宮中へ入つて王樣に御奉公するか、その三つに一つをするがよいと言ふことぢや。私かから言ふのは、お前たちの內から、一人は文に從ひ、一人は商業に、そしていま一人は戰場で王樣へ御奉公して貰ひたいのが私の願ひであり喜びであるからぢや。戰場と言うたのは、宮中へ入つて王樣のお側に仕へるやうなお許しを受けるのは大層むづかしい事ぢやから、戰ならば、たとへ金にはならんでも非常に出世も出來、名譽も得られるからぢや。八日の後にお前たち銘々の取り前を、その時になればよく分るであらうが、一文も間違ひなく渡しませう。さてお前たちは今言うたこの私の考へや勸めに從ふ氣かどうか言うて吳れい。」

『長男だから、お前が先きに答へよと言はれましたので、私は、その財產は分け與へてしまはずに貴方のお好きなやうに殘らず使つて下さい、私らは若い者ですから自分の暮しを立てることは出來ますと勸めた後で、父の志に從うて私は武人の職に就いてそれによつて神と王とに仕へる望みですと言ひました。私のすぐの弟もやはり同樣に父の言葉に從ひ自分に與へられる分を船に積んで印度へ渡ることに決めました。一番若くて、そして私の考へでは一番賢かつた末の弟はむしろ僧侶になるか、若くばサラマンカ（當時スペイン第一の學問の都、マドリッドの西北百餘里にあり）に行つてもつと勉強したいと言ひました。私らがかう話をきめておの〳〵職業を選擇してしまひますと、父は私らを皆な抱擁しました。そしてその約束しただけのことは、間もなく實行致しました。父が銘々にその分け前を與へますと、それは確か正金で三千デュカット（一デュカットは四百五十錢位）づつであつたと記憶しますが（といふのは、私どもの土地を他人の手へ渡すまいとて私どもの一人の叔父が買ひ取つてその代價を拂ひましたから）即日私たちは皆なこの慳しい父に暇乞ひをしました。がそれと同時に私はこの老年の父をそんな乏しい金で暮させるのは不人情と思ひましたので、私は自分の三千デュカットの內から二千だけを強ひて父に渡しました。軍人になるに入り用なものを用意するにはその殘りだけで十分と思つたからです。二人の弟も私の例に動かされて銘々一千デュカットづつを父に贈りましたので、父の許には現金で四千デュカット殘ることになりまし

たが、その上父の許には父の分け前で賣らずに殘して置いた三千デュカットの價格の土地がありました。すでに申したやうに、とう〳〵私らは、父や今言ひました叔父に暇乞ひをしました。行く方も殘る方も、少からず悲しんで涙を流し、二人の老人は、折もあらば善きにつけ惡しきにつけどう暮してゐるか消息(たより)をせよと私らに頼みました。私らはさう致しますと約束しました。そして、父に抱擁され祝福を受けますと、私らはめい〳〵一人はサラマンカへ、一人はセヴィールへ、そして私はアリカンテ(スペインの東海岸の港)へ出發しました。私は其處へ行つて、ゼノア人の船でイリー(イタリーの港)へ向つて羊毛を積み出すのがあると聞きました。

『私が父の家を去りましてから、もうかれこれ二十二年になります。そしてその間に私は幾度も手紙を出しましたけれども、私の方には父のことも弟等のことも一向消息(たより)がありません。この年月の間に起つた私の冒險を、いま手短にお話ししませう。私がアリカンテを船出して、愉快な船路を經てゼノアに到着し、そしてそこからミラン(イタリー北部の都市)へ參りました。其處で私の武具や少しの兵士の軍裝を調へました。私の心組では、其處からピードモント(イタリー北西端アルプスに接した地方)へ行つて勤務するつもりでありましたが、しかし私が既にアレクサンドリア・デラ・バグリアへの道中で、アルバ大公爵がフランダース(北海に面した地方で現今ベルジユムあたり)へ進軍中であるといふことを聞きました。私は自分の計畫を變へて、この方の隊につき、その部下として戰役に從ひまして、エグモント、ホルン兩伯爵の戰死にも際會しました。そしてディエゴ・デ・ウルビナといふグワダラジャラの名將の麾下の旗手に昇進いたしました。私がフランダースに着いてから暫くすると、あの評判のよい法皇ピウス第五世猊下がヴェニスやスペインと聯合して、共通の敵トルコ軍に當られるといふ報知が來ました。トルコ軍は丁度その頃、海軍を以てヴェニス領の有名なサイプラス島を占領して、ヴェニスに悲しむべき莫大な損害を與へたのでありました。事實として知られたところでは、われ等の國王ドン・フィリップ陛下の肉身の兄弟に當られる、アウストリアの沈着無双なドン・ジョン殿下が、その聯合軍の總司令官になられるといふことでありました。そして、戰備は既に十分に出來てをるといふ世間の噂でありましたから、それやこれやで私の心は動かされ、來るべき大戰役に從軍したさで一杯になりました。そこで、機會があり次第隊長に昇級すると信じてよい譯合もありましたし、また殆んど確實な約束もありましたけれども、私

は自ら好んで一切を棄てゝ單身イタリーへ行くことに決心し、その通り實行しました。それはちやうどドン・ジョンがゼノアに到着して、ヴェニスの艦隊と聯合するためにネープルスへ進まうとしてゐる時で、私には非常に仕合せでした。後になつて彼はメッシーナで聯合しました。つまり、私はもはやその時は、自分の軍功に依つてと言ふよりは、寧ろ僥倖で歩兵の一隊長といふ名譽の役目に昇進して、この光榮ある遠征軍に從つてゐるのでした。そして其時こそ——それまで世界萬國の人々が信じてゐた迷信、海上ではトルコ軍決して負かされないといふ迷信が破られたので、キリスト教國に取つては非常に目出度い日ですが——その日こそ即ち、オットマン（マホメットの別名）の高慢不遜が打ち挫かれたその日こそ（その日討死したキリスト信徒等は、生き殘つて凱旋した者よりも却つて一段幸福であつたのでし）、すべての人人が悦んで居る中に、私だけは悲しめでありました。何故といふに、もしこれがローマ時代でありましたら、私は海軍の王冠でも望んでよかつたでせうが、それとは打つて代つて、その史上に有名な日の夜になると私は、手には手枷、足には足枷をはめられることになつたのです。

それはかういふ譯でありました——剛膽な運のよい海賊の、アルジールスの王エル・ウチャリが、マルタの旗艦を（それには唯三人の騎士が生き殘つてゐて、しかし彼等は重傷を蒙つてゐました）襲撃して分捕つたので、私どもの乘つてゐたジョン・アンドレア旗艦はそれを救ひに行きました。そして私はかういふ場合にせねばならぬ通り、その敵艦の甲板に跳び込みました。すると敵艦は今まで攻撃してゐた船を棄て走り出しましたので、私の部下は甲板の後につゞくことが出來なくなりました。そこで私は唯一人、防ぎ切れないほどの多勢の敵の中に殘されました。結局私は澤山の傷を受けて生捕りにされたのです。皆さん御承知の通りエル・ウチャリはその總艦隊を率ゐて逃げました。そこで多勢の人々は歡喜に滿ちてゐる中に、私は唯一人の悲しめる者として、また多勢の人々は自由になつた中に唯一人の捕虜として、彼の手中の虜となつてしまつたのです。さういふのは、一萬五千からのキリスト信徒が虜となつて殘らずトルコ艦隊の櫂を漕いでゐましたが、あの日に悉く憧れてゐた自由を囘復したからです。

『私はコンスタンチノープルへ連れて行かれました。其處でトルコのセリム大王は、私の主人のエル・ウチャリが戰爭でよくその義務を果し、且つその勇武の證としてマルタの

指令旗を分捕つた手柄で海軍提督に任じました。その翌年の七十二年（千五百七十二年のこと）私は三個の燈火（提督の乗艦のしるしといふ標）のある旗艦の漕手になつてナヴリノー（ギリシヤ半島の西端にある港）に居りました。そこで私は、碇泊してゐたトルコの總艦隊を分捕りする好機會の失はれたのを目撃しました。實はトルコ艦隊についてゐた水兵も親衛兵も殘らずこの港の内で今に襲撃されるものと信じて、襲撃を受けないうちにすぐさま陸上へ逃げようと、荷物もバサマック即ち靴もちやんと用意してをるといふ位、それ程キリスト教徒の艦隊はトルコ人を恐がらせてをりましたのですからな。しかし天の命令はこれとは違つて居りました。それは何も私たちの方を指揮してゐた大將の過失や怠慢からではありません。たゞキリスト教國の罪惡の爲でした。自分を懲らす刑罰の道具を私たち自身が持つて居るといふことは神樣の思召しであるからです。實際、エル・ウチャリはモドンといふナヴリノー近くの島へ逃げてその軍勢を上陸させ、その港の口を堅めてドン・ジョンの退却するまで靜かに待つて居りました。この戰ひでは「獲物（プライス）」といふ軍艦が分捕られました。その船の艦長は名高い海賊バルバロッサの息子でした。それを分捕つたのは「牝狼（シーウルフ）」といふネープルスの旗艦でしたが、その船は、戰の雷雷、部下の父、向ふところ敵なき大將と言はれた彼のサンタ・クルズの侯爵、ドン・アルヴロー・デ・バザンに指揮されて居りました。私は、この「獲物（プライス）」の分捕の時に起つた事柄を話さずには居られません。

『そのバルバロッサの息子は餘りに殘酷で、餘り自分の奴隷をひどく取扱つてゐましたので、「牝狼」艦が肉迫して來て、方にこの船を分捕りにしようとするのを見るや否や、櫂を漕いでゐた奴隷等は、直ぐさま櫂を投げ棄てゝ、丁度船尾の臺の上に立つてしつかり漕げと叱咤してゐたその艇長を引つ捕へました。そして彼を船尾から船首の方へ、座席から座席へと順送りしながら毆りつづけたものですから、帆柱のところを少し通り越した時には、もうその魂は地獄に着いてしまつて居りました。今も申した通り、それほどまでに彼はその部下を苛酷に取扱ひ、また部下は彼を憎んで居りました

『私たちはコンスタンチノープルへ歸りました。そしてその翌年、即ち七十三年にドン・ジョンがテュニス（北アフリカの地中海沿岸の國）を攻めて、その國主をトルコ人から奪つてムーレー・ハメットの所領としました。それでかの世界無雙の殘忍兇猛なムーア人ムーレー・ハミダが、その國へ歸つて再び治めるとい

ふ希望を水泡に歸せしめたといふことが知れ渡りました。トルコ大王はこの損失を非常に殘念がりました。しかしこの民族の凡てがもつてゐる例の賢さで、彼は、彼よりも一層餘計に乘り氣になつてゐたヴェニスの人々と和を結びました。そして明くれば七十四年、トルコ大王はゴレッタ（テュニスの顎）湖の咽喉にある港（とりで）と、ドン・ジョンがテュニスの近くに半ば築きかけて置いた砦（とりで）とを攻撃しました。かういふ出來事の起りつゝあつた一方で、私は自由を得る望みも全くなく橈（かい）を漕いで居りました。少くとも身の代金（しろがね）を拂うて自由を得るといふ望みはなかつたのです。何故なれば、私はこの不幸を父に書き送るまいと堅く決心してゐたからです。遂にこのゴレッタも落ち、そこの砦（とりで）も落ちました。それ等の場所にはトルコの常備兵が七萬五千と、アフリカの各地から集まつたムーア人やアラビヤ人が四十萬以上も押し寄せて、しかもこの大軍にはそれ相當の軍用品や軍器が備はり、また一人一握りづつの土を以てするも、ゴレッタとその砦（とりで）とを蔽ふことの出來るやうな、多勢の工兵がをりました。第一に落ちたのはゴレッタです。それまでは難攻不落と思はれてゐたのですが、それが落ちました。それは守備兵等の過失からではありません。彼等は出來得る限り成すべき限りを盡したのです。だそれは、砂漠の砂地ではいかに塹壕がたやすく作られるかといふ實例を示したからです。普通は一尺も掘れば水が出るのですが、トルコ軍は二ヤードも掘つたが水が無かつた。そこで彼等は澤山の砂嚢を積み上げて、その砦（とりで）の城壁を見おろす程に高い堡壘を築いて、其處から恰も高い胸壁（ばうへき）の上からするやうに突進したので、砦の方では一人として踏みこたへて防ぐことは出來なかつたのです。

『一般の意見では、この守備兵はゴレッタに立籠らずに、却つて上陸地點に敵を迎へ擊つて野戰をすればよかつたのぢやと申します。しかしそんなことをいふ人は出鱈目にさういふので、かういふ事柄に通じてゐないのです。何故といへば、ゴレッタや砦の中に、わづかに七千の兵が居つたとすれば、いかに死を決したればとて、そんな小勢でもつて、どうしてあれだけ多勢の敵に對して攻めかゝつたり守つたりすることが出來ませう？　そしてまたどうして援けのない城砦が落されずにすみませう？　まして敵の國内で、必勝を期した大軍の敵に取り圍まれたことですもの。しかしながら、あの武勇絶倫のチャールス五世に依つて占領されたといふ記念を保存するより外には何の役にも立たず、たゞ無益に費される無限の富の饗食者であり海綿であり蠹魚で

あるに過ぎなかつたこの害毒の源泉なる伏魔殿を、打ち毀させ給うたことは、これはスペイン國に對して示された神の特別の恩寵であると、多くの人々は思ひました。私もやはりさう思ひました。現在もまた將來も、その記念を不朽にする爲めらしく、その城砦はこれを支へる爲めに必要があつたのですが、その砦も同じく落ちました。しかし守備の兵士が非常に勇敢に頑強に戰うて、敵の二十二回の總攻撃中に二萬五千人以上を殺した程であつたので、トルコ人はジリジリと乘り取つた次第です。城内に生き殘つた三百人の中に、一人として傷を受けずに生捕りされた者はなかつたので、それは彼等の勇氣と決心と、如何に彼等が頑強に防戰して銘々の立場を保つたかといふことの明白な證據です。その鹹湖の眞中にあつた小さい堡壘、卽ち塔は、ヴレンシアの紳士で名高い軍人ドン・ジュアン・ザノゲラの指揮の下にありましたが、これは降伏しました。全力を盡して防戰したゴレッタの指揮官ドン・ペドロー・プェルタカルレローは捕虜になりましたが、この敗戰のことで非常に心を傷め、捕虜としてコンスタンチノープルへ護送される途中で死んでしまひました。またガブリオ・セルベロンといふその砦の指揮官も捕はれました。この人はミランの紳士で優れた技師でまた非常に勇敢な軍人でした。この二つの城砦で名高い人が多勢死にましたが、その中には、セント・ジョン勳章の騎士パガノー・ドリアといふのがゐました。この人は、その有名な兄弟のジョン・アンドレア・ドリアに對して示した非常な寬大を以て知られる通り、なか〳〵鷹揚な性質の人でした。そしてその死を一層悲しましめたものは、彼がアラビヤ人等に斬り殺されたことです。彼は自分の砦の陷つたのを見て、自分の信賴してゐたアラビヤ人等の勸めるがまゝにムーア人に身を變して、タバルカといふ珊瑚取り場で使はれてゐるゼノア人たちが守つてゐる、海岸の小さな堡壘卽ち屯所へ向つて落ちました。そのアラビヤ人等が彼の首を打つて、それをトルコ艦隊の司令官に持つて行きました。するとその司令官は、わがカスティリアで「裏切りは喜ばれても裏切り者は憎まれる」といふ諺の通りに、そのアラビヤ人等を成敗しました。つまりその贈り物を持つて來た者どもが、それを生捕りにして來なんだといふ廉で縛り首にしたといふ譯です。

『その砦で生捕られたキリスト教徒の中には、ドン・ペドロー・デ・アングラールといふ人が居りました。この人はアンダルジア州の何とかいふ處の生れで、この砦の旗手をして

あたなか〳〵名高い珍らしい智慮のある軍人でした。この人は殊に所謂詩といふものに堪能でした。私がかう申すのはこの人が不圖したことから、私の船に、しかも私と同じ席に連れて來られて、同じ主人の奴隷になつたからです。そして私らがまだその港を出ぬ前に、この人は碑銘風の短詩（ソネット）を二つ作りました。一つはゴレッタに就いて、いま一つはその砦に就いて。私はそれを暗記して居りますから何なら歌うて見てもよろしいのです。それは人に好かれても嫌はれはすまいと思ひます。』

この捕虜がドン・ペドロー・デ・アングラールの名を口にするや否や、ドン・フェルナンドーは自分の二人の仲間を見た。そして三人とも微笑した。そして捕虜がソンネットのことを話してゐる時に彼等のうちの一人が言つた、『貴方が話をお進めなさらん内に、今仰有つたそのドン・ペドロー・デ・アングラールはその後どうなりましたかそれを聞かして下さいませ。』

『私の存じてゐます限りでは、』と捕虜は言つた、『あの人はコンスタンチノープルに二年居りましてから、アルノート人に身を窶して、ギリシャ人の間諜と連れ立つて脱走しました。しかしあの人が再び自由の身になつたかどうかは分りません。尤も私はなつたらうとは思ひますがな。と言ふのは、その後一年してから、コンスタンチノープルでそのギリシャ人を見かけましたからです。しかしその脱走の結果がどうなつたかは尋ねることが出來ませなんだ。』

『なる程、それでは貴方の仰有る通りです。』とその紳士は答へた『そのドン・ペドローは私の兄弟ですよ。そして只今あれは私どもの村に丈夫で富裕で妻を迎へ三人の子供をもつて居りますよ。』

『そりやどうも結構なことで、神様のお慈悲は有難いことでございます。失うた自由を回復することに比ぶべき幸福はこの世にないと私は思ひますからな。』とその捕虜は言つた。

『そればかりではありません、私はあれの作つた短詩（ソネット）も知つて居りますよ。』と紳士は言つた。

『それでは、貴方の方が私よりもよくお歌ひなさるでせうから、どうぞそれを歌つて下さい。』と捕虜は言つた。

『承知しました。』と紳士は言つた、『ゴレッタを歌うたのはかうです。』

第四十章　には、捕虜の物語がつゞく。

ソンネット

『この死ぬべき殻より釋き放たれし幸ある靈は、
神勳の報いとして祝福せられ
我等がこの下界より昇り行きて、
天上と不滅の世繼にこそなりたれ。
力のつゞく限り汝らは戰ひに
義憤と輝く熱誠とをもて力を盡しぬ。
砂漠の地をも環れる海をも
自らと敵との血汐に染めて
生命の血流れて萎えたる腕こそは衰へぬれ、
剛き心は遂に撓まざりき。
敗れたれども、汝らは勝利の冠を得たり。
弔はれつゝも、なほその落城は勇ましかりき。
汝ら劍と砦との間にありて、
天には榮えを地には譽を得たればなり。』

『私の覺えて居るのも全くその通りです。』と捕虜は言つた。

『さうですか、それでは、砦の方の歌を、』と紳士は言つた、

『それは、私の記憶が間違つて居らればかりです——

ソンネット

壘壁も天守塔も壞滅に歸したれば、
その荒廢の地より、その粉碎せる死骸より、
ますら男の子の三千の靈は天翔りつゝ
輝く惠の御殿に住まんと昇り行きぬ。
刀折るゝまで、攻め寄する敵を防がんと
努めしも、あはれ、あだとなりぬ。
今は早や死あるのみ、
戰ひ疲れし殘んの誰彼も遂に斃れぬ。
あゝこの焦げ乾きたる地こそ
往にし日も今も亦
無限の哀れを留むるところなれ。
さはれ、かくまで淸き靈の天に昇りしことなく、
あらがねの土より
またかくまで勇ましき人の死骸の地上に在りし例も聞かず。』

これ等のソンネットは面白いと思はれた。また捕虜は自分の同僚の消息を聞いて悦んだ。そして自分の物語を續けて話を進めた——

『ゴレッタもその砦も手に入つたので、トルコ軍は——その砦の方は既に掠奪すべき一物も殘つてゐないほどの狀態になつてゐましたので——ゴレッタの防禦設備を取り除けるやうに命じました。そしてその工事をなるたけ早く容易にするために、三ヶ所から掘り返しました。しかし何處も手弱な箇所と思はれる部分は見當りませんでした。さう申すのは古い壘壁の方のことで、一方あの「小法師」ジャコーメ・パレアローの綽名が築いた新堡壘の建ち殘つてゐた方はやす〳〵と崩れました。やがてトルコ艦隊は勝ち誇つて意氣揚々とコンスタンチノープルへ凱旋しました。それから二三ヶ月すると私の主人のエル・ウチャリは死にました。この人の又の名はウチャリ・ファルタクスといひましたが、それはトルコ語で「痂病み(かさぶたや)の脫宗者」といふ意味です。あの人はさうでした。トルコ人の慣はしとして、銘々のもつてゐる長所や短所からその人の名前を付けるのです。その譯は、トルコ人の間では、オットマン家の流れを汲んだ家門に屬するたつた四つの苗字しかありません。そこでそれ以外の人々は、今申しました通り、銘々の身體(からだ)の瑕(きず)や人品からその姓名を附けます。この「痂(かさぶた)男(おこ)」も大王の奴隷になつて、十四年の間船漕ぎをしてゐましたが、四十三歲を越した頃に、或る時櫂(かい)を執つて居ると一人のトルコ人に毆られたので、それを遺恨にその男に復讐したいばつかりで、信仰を棄てゝ脫宗者になりました。そしてその人は非常に剛勇なところから、大王の一番の寵臣等が出世の手段にするやうな、そんな卑しい方便に賴らずに昇進して、アルジールスの王になりました。そしてその後海軍司令官といふ、トルコ大王國での第三位の要職につきました。この人はカラブリアの生れで、心がけの立派な人で、その部下の奴隷には大層情(なさけ)をかけてやりました。この人は三千の奴隷をもつて居りましたが、その死後は遺言書に差圖してあつたやうに(大王は誰が死んでもその後繼(こうけい)になつて、その故人の子供等と財產を分けますので)、その大王とこの人の一族との間に、奴隷は分配されました。私はヴェニスのある脫宗者のところへ行くことになりました。この人は或る船の客室のボーイをしてゐたところをウチャリに捕はれて、それから非常に可愛がられて遂にその一番お氣に入りの若者となりました。この人は世にも最も殘酷な脫宗者となりました。その名はハッサン・アガといひ非常に金持になつて、アルジールスの王になりました。この人に從つて私はコンスタンチノープルからアルジールスへ

行つたので、スペイン國が非常に近くなりまして私は寧ろ悦びました。といつて別に身の不幸を誰かに書き送らうと思つたのではありません、たゞ今までコンスタンチノープルでは、いろ〳〵にして脱走を企てたけれども、遂に都合よい時も折もなかつたので、このアルジールスではうまい工合に行きはせんか試めして見ようと思つたからです。しかしアルジールスに來てからは、私は心中大切に懐いて居るこの目的を果すには外の手段を見付けようと決心しました。自由を得たいといふ希望をば私はつひぞ棄てなんだからです。そして私の計畫や企てや試みの結果が私の期待通りにならずとも、私は失望してしまはずに、直ぐさま何か自分を支へる新しい希望を、たとへ如何に弱い微かなものであつても捜すなり拵へるなりすることに掛りました。

『さういふ風にして私は、トルコ人のバニョーと呼ぶ建物、即ち牢舎の中に閉ぢ込められて暮しました。其處には王に屬したのも個人に屬したのも、またアルマセンと呼ばれたのも(それは詰り市有奴隷で、市の公けの仕事や、その他の働きに使はれるものゝことですが)凡てキリスト教徒の捕虜が禁錮されて居りました。しかしこのアルマセンといふ捕虜になると、市の共有財産で、これと決つた持主がありませんから、たとへ身請け金の算段が出來る者であつても、その買ひ戻しの相談に乘つて呉れる人がないので、なかなか自由を回復することは困難です。これ等のバニョーには今も申しました通り、普通の市民が銘々の捕虜を、取り分け身請けの見込みのある捕虜を容れて置く習慣になつてゐます。といふのは、その身請け金の濟くまで安全に住みよく捕虜を保留して置けるからです。王の捕虜もやはり身請けの話のついたのは、その身請け金が遲れない限りは外の仲間と一緒に外へ出て働きはしません。つまりさういふ場合には、その身請けの催促狀を急き立てゝ書かせる爲めに、無理にも働かせて賃を取らせにやりますが、これはなかなか輕い勞働ではありません。

『しかし私は身請け話のついた中に入つてゐました。何故なれば、私が隊長であつたといふことが分つたので、いかに私が身請けの算段の乏しいことや財産のないことを言ひ張りましても、係りの者等はそれを聽き入れずに、とう〳〵私を紳士や身請けの見込のある人々の中に入れてしまつたのです。私は一筋の鎖を掛けられました。これは私を安全に繋いでおくといふよりは、むしろ身請けのついてゐるといふ記號なのです。さういふ風にして、私は身請けの記號の

ついた數人の紳士や身分のある人々と一緒に、このバニョーの中で暮しました。しかしながら時々、いや寧ろ殆んどいつも、私たちは空腹や着物の不足で苦しみましたが、最も心を痛めたものは、私の主人がキリスト教徒に加へる無理非道な前代未聞の大虐待を到るところで見聞きすることでした。毎日主人は或る者を絞め殺し、或る者を磔にし、また或る者の耳を斬り落しました。そしてそれは皆ほんの少しの立腹からすることで、いや寧ろ全く何の譯もなくすることでしたから、トルコ人等もあの人は唯さうしたい爲めに、生れつき全人類に對して殺伐な性質をもつて居るからさうするのだと認めてゐたのです。たつた一人、何につけてもあの人の氣に入つたのは、何とかデ・サーエドラ（これは言ふまでもなくセルヴンテス自身のことである、彼自から捕虜となつた經驗がある）といふスペインの軍人でした。この人は長年の間そこの人の記憶に殘るやうなこともすれば、自分の自由を回復する爲めのあらゆる手段も取りましたが、つひぞ一度も主人が自分で毆つたこともなければ、人に命じて毆らせたこともなく、またきつい言葉一つ言ひかけたこともありません。そしてこの人がしたいろ〳〵の事の中で、一番輕いことに對してでも、磔にされはせぬかと私等は皆恐がつて居りました、またこの人自身も一度ならずそれを氣遣つたことがありました。この軍人のしたことをお話しすれば、きつと私自身の身の上話よりも貴方がたを面白がらせ驚かせることゝ思ひますが、どうも時間がないので殘念です。

『餘談はさて置き、私たちの牢舍の中庭は或る身分の高い富裕なムーア人の持ち家の窓から見下されて居りました。そしてこの窓は、ムーア人の家の普通のものと同樣に、窓といふよりはむしろ銃眼に類して居りました。その上厚い目の込んだ目隱しで蔽はれて居りました。やがて、はからずも或日のこと、外のキリスト教徒は皆な働きに出拂つてゐたので、後に殘つてゐる私と三人の仲間とは、共に牢舍の高臺に出て、暇潰しに鎖を身にかけたまゝでどの位跳べるか試つて見て居りました。そしてふと眼を上げて見ますと、その小さい鎖された窓の一つから一筋の蘆が出て來てその端に布がくつ附けてあるのです。そしてその蘆は丁度私たちに取りに來いといふ合圖をするやうに前後に振動かされて居りました。私たちはそれを見戍つてゐましたが、私と一緒にゐた一人がその蘆の下へ行つて、それを落す積りなのかそれともどうしようといふつもりなのかとその下に佇みました。しかしその男がそこに行くと同時に蘆は上にあが

つて、丁度かぶりを振つて「いゝえ」といふやうに左右に動きました。そのキリスト信徒が戻つて來ると、蘆は再び垂れて、前のやうにお出で〳〵をするのです。私の仲間のいま一人の者が行くと、やはり最初の男にしたと同じことが繰り返されました。そこで第三の者が出て行つたが、やはり第一第二の者と同じ結果になりました。これを見て私は自分の僥倖を試めさずには居れなくなりました。そして私がその蘆の下へ行きますと忽ちそれが落ちて來て、バニョーの中の私の足許に落ちました。私は慌てゝその布を釋きました。するとそれに結び目があつて、そこには十シアニー入つてゐました。これはムーア人の間に通用する不純金貨で、私共の金にすれば一シアニーが十リールに當ります。『この賜物を私が喜んだことは言ふまでもありません。そして嬉しくもあるがまた不思議でもあるので、一體われわれに、いや取り分け私に、かういふ幸運が降りかゝるとはどうしたわけかと頻りに想像を逞しうしました。何故といふに、私以外の者にこの蘆を落すことは明かに嫌やであつたのですから、この恩惠は私の爲めであるといふことが明かであつたからです。私はその有難い金を取つて、その蘆を折つて、そして元の高臺へ戻りました。それから窓を見上げますと、その開いた窓から、眞つ白い手が出て、そして、非常に手敏しこく其處を閉めるのが見えました。これから推して私たちはこの親切をしてくれたのは、その家に住んでゐる婦人に違ひないと想ひました。そして私たちはその親切を感謝するしるしに、頭をさげ體を曲げて兩腕を胸の上に組み合せて、ムーア人の風によつて敬禮をしました。間もなくその同じ窓から蘆で拵へた小さい十字架が差し出され、そして直ぐさま引つ込められました。このしるしによつて私たちは、或るキリスト教徒婦人がその家に捕虜になつてゐて、そしてその婦人が私たちに親切をしてくれたのだと信ずるやうになりました。しかし私ともの眼についた、その手の白さや腕環やはこの考へを棄てさせました。尤もキリスト教徒の脫宗者ではないかとも見ました。この種の婦人を奴隷に有つてゐる主人たちは喜んで往々正妻にすることがあります。それは自國の女よりも、さういふ女を好むからです。私たちの當て推量は、すべて事實とは大いに外れて居りました。その後といふものは、その十字架の差し出された窓を、宛ら北極星ででもあるかのやうに見戍り眺め暮らすのが私たちの唯一の仕事でありました。しかし少くも十五日の間に、十字架も手もその他何の

しるしも見ずに過ぎました。そして一方にはその家に住んでゐるのは何人であるか、またそこにキリスト教の脫宗者がゐるかどうかを確めようと一生懸命苦心をしましたけれども、そこに住んでゐるのは、ムーア人中での顯職であるラ・バタ（アルゼリアのオラン港附近にある城砦）の城主を以前に務めてゐたハヂ・モラトーといふ名前の身分高い富裕なムーア人だといふことより外には、誰も何も知らしてくれることは出來ませなんだ。しかし私たちがあそこからまたもや金貨が降つて來ようなどとは夢にも思つてゐない時に、突然蘆が現はれて、その端にはこの前のより大きい結び目のある布が附いて居るのを見ました。そして今度も、前と同じく、バニョーには人が居らずにがら空きになつてゐる時でした。

『私たちは前の通りに、同じ三人の一人々々を私の前に行かせて見ました。しかし蘆は私以外の誰にも渡されませんでした。そして私が近づくと蘆は落ちて來ました。私がその結び目を釋くと、スペインの金貨が四十枚とアラビヤ語で書いた書付とが出て、その書付の終りには大きく十字架が描いてありました。私はその十字架に接吻して、その金貨を取つて高臺へ戻りました。そして皆は揃つてお辭儀をしました。また例の手が現はれたので、私はその書付を讀むといふ合圖をしました。すると窓は閉ぢられました。私どもは皆この出來事を喜びはしたものゝわけが分らなくなつてしまひました。そして私たちは誰もアラビア語は分らないので、その書付に書いてあることを知りたい心は山々でありましたが、それを讀んで貰ふ人を見付けることはなか〳〵の困難でありました。遂に私はムルシア（スペイン國内の縣）生れの或る脫宗者にこれを打ち明けようと決心しました。その男は私に非常に友情を有つてゐると申しまして、私に賴まるればどんな祕密でも必ず守ると誓つてゐたのです。これは、脫宗者が再びキリスト教徒の土地へ歸らうと思ふ時は、身分のある捕虜から證明書を貰つて行く慣はしであつたからです。その證書はどんな形式ででも差し支へはないのですが、つまり某々の脫宗者は常にキリスト教徒に親切を盡し、且つ機會あり次第邪宗の地を脫走せんと熱望してゐた立派な人物であるといふやうに身元を保證するのです。或る者は善用する爲めにかういふ證明書を手に入れるし、或るものはこれを惡用します。彼等がキリスト教徒の土地へ劫奪に行つて、もし偶々難船したり捕虜になつたりすることがあると、その身元證明書を出して見せて、この證書によつて分る通り自分等が來た目的はキリスト教徒の土地に在

住する爲めである、またその爲めにトルコ人の中に交つて侵略しに來たりであると申し立てます。かういふ風にして最初の氣勢を折つて面倒を逃れて置いて、何の害も受けぬうちに教會と和睦します。それからまた折を見て元の異教國へ歸つて、前の通りの者になるのです。しかし今一方にこんな證明書を正直に使ひ、キリスト教徒の土地に留まるものもあるのです。さて私のこの友達も今申したやうな脫宗者の一人でした。彼は私の同僚の殘らずから證明書を貰つてゐましたが、それには私たちは出來るだけ言葉を強めて彼の爲めに證明しておきました。それで若しムーア人どもがその證書を見つけでもしたら、彼を生きながら焚いたでありませう。

『彼がアラビヤ語を非常によく知つてゐて、話せるばかりでなく書けもすることを私は知つてゐました。しかし私は先づすつかり事情を打ち明けないで、自分の監房の小穴から偶然この書付を見付けたから讀んで呉れいと賴みました。彼は書付を開いて稍暫らくじつと見入つて、それを飜譯しながら口の中でぶつ〳〵言つて居りました。それが分るかどうかと私が尋ねますと、彼はすつかり好く分ると答へて、もし私がこの書付の文字通りの意味を知りたいと思ふなら、ペンとインキとを貸して貰ひたい、さうすれば一層滿足に飜譯が出來るからと言ひました。私たちは彼の求めるものを直ぐさま與へました。彼は少しづつ飜譯して行つて、やがて譯し終ると言ひました、『このムーア人の書面に書いてあるものを殘らずスペイン語にすればかうです。そして御注意なさらねばならんことは、これに "Lela Marien"（レラ マリエン）とありますのは、「われ等の聖母處女マリア」といふ意味です。』と。私たちはその書付を讀みましたが、それはかう書いてありました——

「私が子供の時に、私の父のつれてをりました一人の奴隸が私の國の言葉でキリスト教徒の祈禱を教へてくれました。そしてレラ・マリエンのことをいろ〳〵と話してくれました。そのキリスト教徒は死にました。そして私は彼女が地獄へは行かないでアラー（アラビア語で神の意）のところへ行つたことを知つて居ります。その後私は彼女を二度も見ました。そして彼女は私に、キリスト教徒の國へ行つて、貴女を非常に愛しておゐでになるレラ・マリエン樣を御覽なさいと申しましたからです。私はどうして行けばよいのか存じません。私はこれまで多勢のキリスト教徒を見ました。けれども貴方の外には一人として紳士らしい方を見かけませんだ。

私は年若く美しく、持つて行くべき澤山の金があります。お出來になることなら御一緒に參れるやうに工夫をして下さい。そして貴方さへおいやでなくば、向うへ行つてからは貴方は私の夫です。しかしおいやでも、決して私は歎きはいたしません、レラ・マリエンは私の嫁ぐべき方を見付けて下さいませうから。私は自分でこれを認めました。これを讀んでお貰ひなさる人に氣をおつけ下さいまし、決してムーア人はお信じなさいますな。彼等は皆信義のないものでございますから。私はこれを誰にも打ち明けて頂きたくありませんから、そのことでは非常に心配して居ります。若しこれを私の父が知りましたら、忽ち井戸の中へ投げ込んで上から石で埋めませうから、私の蘆の端に絲をつけて置きますから、御返事をそれに結へて下さい。もし貴方のためにアラビア語の手紙を書いて呉れる人がありませんなら、手眞似で返事をして下さい。レラ・マリエン樣は私に分らせて下さいませう。レラ・マリエンとアラーと、あの捕虜の言うた通りに私が始終接吻してをりますこの十字架とが、貴方を守護して下さいますやうに。」

『この手紙の文言を見て驚き喜ばずに居られませうか、皆さんの判斷に任せます。そして驚きも喜びも、ともに非常なものでありましたので、遂にその脫宗者はこの手紙が偶然に見付かつたものではなく、私たちの中の何人かへ實際に宛てたものと感附いてしまひました。そして彼は私たちに向つて、若し自分のこの推測が眞實ならば、自分は貴方がたを自由の人にして上げるためには自分の身命も惜しまぬから、どうか自分を信用して殘らず打ち明けて下さいと賴みました。さう言ひながら彼は懷中から金屬十字架の聖像を取り出しました。そしてこの神の御像にかけて、私たちに忠誠を盡し、私たちがどのやうなことを打ち明けても祕密を守ると言つて頻りに涙を流して誓ひました。彼は罪深く性の惡い者ではありましたが、神は眞實深く信じてゐたのです。また彼はこの手紙を書いた婦人の助けによつて自分も私たちも殘らず自由を得て、自分はその罪と無智とによつて、現在腐つた手足のやうに、切り離されて居る聖母教會の懷へ復歸するといふ多年の望みの目的を達するであらうと思ひもし、また殆んどそれを豫想してゐたのです。この脫宗者は頻りに涙を流し、悔恨の太息をついてから言ひますので、私たちは事の次第を殘らず打ち明けることに皆々同意したのです。そこで何事も隱さずに殘らず十分に話しました。私たちは例の蘆の現はれた窓をも指さして教

へました。それによつて彼はこの家といふことに目標をつけて、そこには何人が住んでゐるか特別に注意を拂つて確かめようと決心しました。私たちはそのムーアの婦人の手紙に返事をやる方がよからうといふことになりましたので、一瞬の躊躇もなく脫宗者は私の口授する言葉を書き下しました。それは私が今お耳に入れるものと一言一句違はない手紙です。この事件の中に起つた重要なことは一つとして私の記憶から脫けてをりません。また、その後も息のある間はさうありませうからな。そこでムーアの婦人への返事はかうでありました——

「令嬢よ、眞の神御身を護り、神の眞の母なる惠まれしマリエン、御身を護りたまはんことを。聖母は御身を愛し給ふが故に、御身の胸にキリスト教徒の國に行かん心を起させられました。聖母に願ひをかけて、與へ給うた命令を成就することの出來る道を示し給へとお祈りなさい、さうすればお慈悲深いお方故必ずお聽き容れになりませう。私としても、また私と共に居る凡てのキリスト信者としても、力の及ぶ限りは、たとへ死すとも御身の爲めにすることを誓ひます。御身のしようと思はれることは、必ず手紙で私に知らして下さい。私も必ず返事を上げませう。大いなる神は御身がこの書面によつて御覽の通り、お國の言葉を立派に話せもし書けもする一人のキリスト信者の囚徒をば私どもへ授けて下さいました。それ故御心配なく思ふまゝを殘らずお知らせになつても差し支へありません。お申し越しの通り、キリスト教徒の土地へお着きになつた曉には、御身は私の妻です。私は善良なキリスト教徒としてそれを誓ひます。キリスト教徒はムーア人よりも好く誓ひを守ることを御承知下さい。令嬢よ、神とその聖母マリエンの、御身を護らせ給はんことを。」

『この手紙を書いて疊んで待つてゐるうちに、二日經つてから、前の通りバニョーはがら空きになりました。そこで直ぐさま高臺へ行つて例の通り散歩しながら、その窓から何か鷹の合圖がありはせぬかと見てゐると、間もなくそれが現はれました。それを見るや否や、私は誰がそれを差し出してゐるか見分けることは出來なかつたけれども、例の手紙を示して、その鷹に絲をつけよといふ合圖をしました。しかし既にその鷹には絲がついてゐました。そこで私は手紙をそれに結び付けました。そして間もなく私たちの星は平和の白旗なる小さな包みを持つて再び現はれました。その包みが落ちたので拾ひ上げてその布を開いて見ると、金貨

銀貨とりまぜて五十クラウン（一クラウンは二圓五十錢）から上入つて居りました。これは私たちの喜びを五十倍にもして、自由を得る望みを強めました。ちやうどその夜例の脫宗者は私たちの許へ歸つて來て、私たちが聞いてゐたムーアはその家に住んでゐること、その名前はハヂ・モラトーと言うて、すばらしい金滿家であること、その財產全部の跡取りのたつた一人の娘があること、しかもその娘がこのアルゼリア國に並びない美人であるのはこの市中の評判であること、また五六人の總督たちがその娘を妻に申し受けようとして來たこと、しかし娘はいつも結婚を嫌やがつたことなどを聞いたと言ひました。その上、その娘はキリスト教徒の女奴隸をもつてゐた。それはもう死んだといふことも聞いて來ました。これ等は殘らずかの手紙の內容と合ひました。私たちは直ぐさまその脫宗者と、どういふ手段を用ゐてそのムーアの婦人を連れ出し、また我々一同皆がキリスト教徒の領內まで逃げたものかと相談しました。そして結局今のところはこのまゝにしてゾライダ（つまり、これが今マリアと呼ばれたいと思つてゐる彼女の名前です）からの、第二の消息を待つことに決めました。何故と言へば、彼女を措いては、何人も此等の困難を切り脫ける方法を見付け得ぬのは私たちに明白であつたからです。私たちがかう決めた時に、その脫宗者は、何も御心配はいりません、貴方がたを自由にして差し上げるか私の身を殺すかですと言ひました。四日の間バニョーは人で一杯でした。その爲めに例の蘆の出現もその間だけ遲れました。しかし四日經ちますと、バニョーはいつもの通りがら空きになつたので、蘆が現はれて、それには目出度い結果を豫想させるやうな嵩ばつた包みがついて居りました。蘆と包みとは私のところへ落ちて來ました。そして私は一通の手紙と、外の貨幣の混らない金貨ばかりの百クラウンとを見出しました。脫宗者も居合せましたので、私たちの監房へ入つて、その手紙を讀ませました。すると彼はかういふ風に讀みました——

「貴方樣、私はスペインへ渡る工夫を考へ出すことが出來ません。またレラ・マリエン樣へお尋ね致しましたけれど、どんな工夫も教へて下さいません。私の出來ますことは唯この窓から澤山の金貨を貴方に差し上げることだけでございます。その金で貴方御自身とお友達との身請をなさつて、その內のお一方をキリスト教徒の領內へお遣はしになり、そしてあちらで船を買うて外の方々を迎ひに來てお貰ひなさいませ。さうすれば私は海岸近くのババゾン門（「羊の門」の意、アルジ

ールス市の南門にある私の家の花園に居りますから来て下さい。この夏中は父や召使どもと一緒に其處で暮らします。貴方はあそこから、夜分に、無事に私を連れ出して船へ連れて行つて下さることがお出來になります。そして貴方が私の夫におなり下さることは、よく覺えてゐて下さいまし。さうでないと私はマリエン樣へ貴方を罰して下さるやうに祈ります。もし信用してその船を求めにおやりになる人がありませんなら、貴方御自身を身請けなさつて御自分でお出でなさい。何故と申せば貴方はキリスト教徒で紳士でおいでなさいますから、他の人よりも確かに戻つて來られませうから、御自身であの花園をようくお見覺え置き下さるやうに願ひます。今度そちらで散歩してお出でになるのを見ましたら、その時こそバニョーに人の居らぬものと思うてお錢を澤山差し上げませう。神の貴方を護り給はんことを。」

「第二の手紙の文言と中身はかうでありました。これを聞いておの〳〵自ら自分こそその身請をされる者にならうと申し出で、船を買ひに行つても立派に几帳面に約束通り歸つて來ると誓ひました。私もやはり同じ申し出をしました。しかし脫宗者はこれに全然反對して、今までの經驗に照らして見ると、自由になつた者はその入牢中に立てた誓ひを中々守らぬから、皆な揃つて一緒に行かないうちに一人だけやるといふことには、どんなことがあつても贊成しないと言ひました。それは、これ迄もしば〳〵身分のよい捕虜たちが、この方法を採つて一人の男の身請け金を拂つてやつて、そしてその身請けをしてやつた人々を迎へに來るようにとてグレンシア（スペイン東海岸の海港）やマジョルカ（スペインに近き地中海のバレアリック群島中の一）などへ三本帆柱の船を用意するだけの金を持たせてやりました。しかし、さういふ男は決して再び歸つて來ません。つまりそれは、自由を取り返したことや、それを失ひはせぬかといふ心配から、世の中の一切の義理が心の中から消えてしまふのです。そこでその脫宗者は自分の言つたことの眞實を證據立てる爲めに、ほんの近頃或るキリスト信者の紳士の身の上にふりかゝつた出來事を話して聞かせました。それは驚くべき事件が常住不斷に起りつゝあるこの地でさへ、又とないほどの不思議なことでありました。要するに、その脫宗者の話の最後はかうでした——出來る事でもあり、またせねばならぬことといふのは、私たちキリスト信徒のうちの一人を身請けするつもりのその金を自分に與れることだと言ふのです、さうすれば自ら商賣人になつて、テテュアン（モロッコ迄海岸に沿うて商賣をするといふ口實の

下に、このアルジールス市で一艘の船を求める。そしてその船の持主になれば、私たちを殘らずバニョーから連れだして、船へ乘せるやうな方法を案出するのは雜作もないことであらう。殊にあのムーアの婦人が言うた通り皆なを身請けするだけの金を吳れゝば尚更である。何故といふに、一旦自由になれば白晝船出することも、世にも容易いことである。しかし最も困難なのは、ムーア人等は如何なる脫宗者に對しても、海賊に行く大船であれば格別、一切船を貸しもせねば賣りもせぬことである。蓋し小さい船を買ふ人は、とりわけそれがスペイン人であると、たゞキリスト敎徒の領内へ逃げるために欲しがるものと思はれてゐるからである。しかし一人タガリン（次章の初めを見よ）のムーア人が居りますから、あれを仲に立てゝ船の買ひ入れや商品の利益分けに一と口入れゝば、この面倒を脫れられる、そしてさういふ具合にごまかして、その船の持主になつてしまへば、後のことはもう成就したのも同じであると。併し私にも私の仲間の人々にも、あのムーア婦人が洩らした通り、船を買ひにマジョルカへ私をやるといふ方法が却つて好いやうに思はれはしたものゝ、私たちはこの男に强ひて逆ひ得なかつたのです。といふのは、もし私たちがこの男の言ふ通りにしなかつたら、私たちを告發し、もし私たちとゾライダとの關係を發くことにでもなれば、私たち一同の生命を失ふ危險に逢ふかも知れぬと心配したからです。そのゾライダの身代りに私たちは皆な生命を捨てる積りでは居りました。そこで私たちは自分の身を、神樣とこの脫宗者との手に任せることに決心しました。それと同時にゾライダへ返事を出して、貴女の御忠告はレラ・マリエンの賜はつたやうに結構と思ひますから、凡て仰有つた通りにします。そしてこのことを延ばすか直ぐに實行するかは、たゞ貴女のお心一つで決りますと言つてやりました。私は重ねて彼女の夫になると誓ひました。かうして、その翌日偶然にもバニョーがら明きになりましたので、いつもとは違つた時刻に、彼女は蘆や布を用ゐて金貨で二千クラウンと一通の手紙とを吳れました。その手紙には今度のジュマに、卽ち金曜日に、彼女は父の花園へ行くことになつてゐるが、しかしその前にもつと金を吳れるとありました。そしてまた、もしそれで足りないなら、知らせてさへ吳れゝば幾らでも言ふだけ上げます、私の父はその金の無くなつたことには氣が附かない程に澤山もつてゐるし、お負けに鍵は皆自分が預つて居るから、とありました。

『私等は卽座に脫宗者へ船を買ふために五百クラウンを渡しました。そして私は八百クラウンで自分を身請けしました。その金をその頃たま〳〵このアルジールスの市に來てゐたヴレンシアの商人に渡して、その商人から、今度ヴレンシアの便船が着き次第この人の身請け金を拂ひますからと保證して貰つて出獄したのです。何故かうするかと言へば、もし商人が卽座にその金を拂へば、その私の身請け金はずつと前からアルジールスに來てゐたのに、この商人が自分の利益の爲に今迄匿して置いたのだと王に疑はれるからなのです。實際私の主人はどんな事があつても卽座には金の拂へない位扱ひにくい人であつたのです。美しいゾライダが花園へ行くといふ金曜日の前の木曜日に、彼女はまた千クラウンだけ吳れました。そして自分の出發のことを念を押して、もし私が身請けされたら、直ぐさま父の花園を尋ね出して、どんな事をしてゞも自分に逢ひに其處へ來る機會を見つけて吳れるようにと賴みました。私は手短にさうする旨を答へて、嘗て女奴隷に教へられた祈禱によつて、私たちの身をレラ・マリエン樣へお賴みする事を必ず忘れないようにと彼女へ言つてやりました。それがすんだので私は三人の仲間の身請けをして、バニョーを去らせる運びにしました。私だけ身請けをして、金の當てはあるにしても彼等を身請けせずに置けば、或ひは彼等が面倒の種になつて、惡魔が彼等を唆かして、何かゾライダに害を加へるやうな事でもしはせぬかと心配したからです。彼等の身分としては私にそんな杞憂を抱かせるには足らなかつたのですが、それでもやはりこの事では危いことをしたくありませなんだ。そこで私は自分と同じ方法で、卽ち例の商人が大丈夫信用して保證をして吳れろやうに、殘らずの金を渡して、彼等の身請けをして貰ひました。しかし劍呑だと思つたので、私たちの手筈や祕密を打ち明けることはしませなんだ。』

第四十一章　には、尙も捕虜の冒險譚が續く。

『十五日たゝないうちに、脫宗者ははや、三十人以上も乘れる立派な船を手に入れました。そして取引を安全に取りつくろふために、彼はアルジールスから二十リーグばかりオラン港寄りにあるシェルシェルといふ、乾無花果の商賣の盛んな場所へ一と航海する方がよいと考へました。そして實際さうしました。彼は、先きに申したあのタガリンと俱に

二三度其處へ航海しました。このアルゼリアの國では、アラゴン（スペイン東北部の州の名）のムーア人等や、またグラナダ・ムデジル（スペインの西部ジブラルタル海峽寄りの州名）のムーア人等のことをタガリンと申します。しかしフェズ國（モロッコのこと）ではムデジアル・エルチエと呼ばれて、王樣からは主に戰のために使はれます。話はもとに歸りまして、脫宗者は船で通りかゝる度にゾライダの待つてゐる側の花園から二三町と離れてゐない、とある入江に碇を下しました。そして船漕ぎの二人の若いムーア人と一緒に、わざ〳〵そこへ止まつて、祈禱に耽つたり、或は自分が眞劍にやるつもりの祈禱を冗談らしくしたりしました。かうして彼は、よくゾライダの花園へ果物を貰ひに行きますと、父親は誰とも知らずに果物を呉れました。しかし、彼が後で話しました通り、彼女に口を利く折を得て、自分の何者であるかを、また私に賴まれてキリスト教徒の領内へ彼女をつれて行かうとしてゐることを打ち明けて、彼女を滿足させ安心させようとしたのですが、どうしてもそれは出來なかつたさうです。何故といへば、ムーアの女は、自分の良人か父親かに命ぜられない限りは、決してムーア人やトルコ人に逢ひません。けれどキリスト教徒の捕虜に對しては、度を過しはせぬかと思はれる位にまでも、自由につき合つたり話したりするのです。しかし私としては、もし彼が彼女に物でも言つたら困つたでせう。それは、彼女の一件を脫宗者に話したことが分れば、ゾライダは恐らくびつくりしたでせうから。しかし神意はそれを好まずして、この脫宗者の殊勝な目的には、良い折を與へられませなんだ。彼はシェルシェルへ容易に往復ができることや、自分の思ふまゝに何時でもどんなにでも何處でも碇泊の出來ることや、その組合のタガリンは自分の思ふ通りに從ふといふことや、私は既に身請がすんだので、この上はたゞ數名のキリスト教徒の漕ぎ手を見付ければよいのであるといふことなどを見まして、私に向つてあの身請を濟ました人たちの上に、漕ぎ手として貴方のお望みだけの人を搜し出して、出發日と決めてをる今度の金曜日に雇ひ入れるやうにして下さいと申しました。そこで私はスペイン人で嚴丈な漕ぎ手で、いつでも故障なくこの市を去ることのできる者十二人に話をしました。しかし丁度その時それだけの人を見付けるのは容易なことではありませなんだ。何故といふに、巡航に出てゐる船が二十艘もあつて、漕ぎ手は皆なそれに取られてゐたからです、それでもし或る船主が船の修繕をすませるためこの夏は海に出ないで居るといふことがなか

つたら、とてもそれだけの漕ぎ手は見付からなかつたのですが、幸ひさういふのがありました。その人々は、たゞ今度の金曜日の晩にひとり〳〵そつと脱け出して來て、ハヂ・モラトーの花園の邊でぶら〳〵しながら私の行くのを待つて居るやうにと、それだけしか言ひませなんだ。私はこの命令を一人々々に別々に與へて、その上若しそこへ行つてから外のキリスト教徒の居るのを見ても、唯私がその場所で待つて居れと言つたとより他には、何にも言つてはいけないぞと命じました。

『この端緒がすでに立つたので、今度はも一つ更に大事な處置を取らねばなりませなんだ。それはゾライダが前以て準備して待ち受けて居るやうに事の成り行きを知らせて置いて、彼女がまだ〳〵キリスト教徒の船は回漕されまいと思うてゐる時に、突然私たちが彼女を連れに行つても、吃驚せぬやうにして置くことでありました。そこで私は彼女に話すことが出來るかどうかその花園へ行つて試して見ようと決心しました。そして出發の前日、菜を摘むといふ口實を拵へて私はそこへ行きました。私が第一に逢うたのは彼女の父でした。父は、廣くこのアルゼリア國やコンスタンチノープルでさへも、捕虜とムーア人との間の媒介になつて居る言葉を以て私に話しかけました。その言葉はムーア語でもなくカスティル語でもなく、また如何なる國の言葉でもなく、たゞ樣々の國語を混じたもので、それによつて私たちは互ひに了解が出來たのです。卽ちさういふ言葉で、彼は私に、この花園に何の用があるか、またお前は誰の奴隷かと訊ねました。私はアルノート・マミ（セルヴンテスが自分の兄弟と共にスペインへ歸る時更乘した「ソルヴィマの奴隷捕獲者の名前である）の奴隷ですと答へた（といふのは彼はこの人と大の仲好しだとちやんと知つてゐましたから）、そして生菜料理を拵へるので菜が欲しいのですと言ひました。すると彼は、お前は身請をする方なのかしない方なのか、また主人はお前に幾ら請求するのか、と訊ねました。こんな問答が進んでゐる間に、美しいゾライダはもう先き程から私だと感づいてゐましたので、家を出て花園へやつて來ました。そして、私が前にも申したやうに、ムーアの婦人はキリスト教徒に見られても少しも氣にかけず、また少しも羞かしがりもしませんので、何の躊躇もなくその父と私との立つてゐるところへやつて來ました。それのみか、彼女がそろ〳〵近寄つて來るのを見て、父は彼女に此處へ來いと呼びました。私の眼前に姿を現はした時のなつかしいゾライダの優れた美しさや、上品な樣子や、立派な輝かし

い衣裳などのことを、こゝで皆さんに申すことはとても私の力には及びません。彼女の美しい頸や耳や髪には、その髪の毛の數よりも多い眞珠が掛かつてゐたと、それだけ申して置きませう。習慣に從つて裸にしてゐました彼女の足頸には、純金のカルカジェ（腕環も踝（くるぶし）の飾もムーアの言葉ではさう申しますので）、それをはめてゐましたが、それに飾り着けてあつた澤山の金剛石は、あとで聞きますと、彼女の父親が一萬ドゥブルーン（一ドゥブルーンは約十六圓）と値（ね）ぶみしたもので、またその手頸にはめてゐたのはそれよりももつと高價であつたさうです。眞珠は數限りなく、なか〳〵美しうございました。ムーアの婦人たちには大きい眞珠や小粒の眞珠で身を飾るのが一番の誇りでもあり飾りでもありますので。それにこの眞珠は、ムーア人の國には他國によりも澤山あります。ゾライダの父は非常に澤山、しかもアルジールス中での一番純粋なものをもつてゐるといふ評判でした。それにまたスペインの金で二十萬クラウン以上ももつてゐるとの評判でした。そこで只今はもう私といふものだけの持主に過ぎませんゾライダも、その時はその殘らずの品の持主でありました。そんなに飾つてゐた時のゾライダがどんなに美しかつたらうか、その盛りの時にはどんなであつたらうか、それはいろ〳〵の苦勞を經ながらも殘つてゐる美しさでお分りになりませう、と申すのは、何方（どなた）も御存じの通り、女によつてはその美貌にも時と季節がありまして、ふとしたことからよくなつたり惡くなつたりします。そして心の思ひは自然に容貌（かほかたち）をよくしたり惡くしたりします。尤も大抵の場合は容貌を全く壞してしまひますが。つまり、あの日は、この上なく輝かしく裝うてこの上なく美しくなつて私の前に現はれました。とにかく私には自分の見たうちで一番美しいものと思はれました。その上私が彼女に負ふところを考へますと、宛ら救ひと幸福をもたらして地上に天降つた天女に向つて居るやうに感じました。

『彼女が近づいたので、父は自分の國語で、これは私の仲好しのアルノート・マミの捕虜で、菜を貰ひに來たのぢやと話しました。

『彼女は會話を自分に引き取つて、例のまぜこぜの言葉で、私が紳士であるかとか、何故（なぜ）身請けをしませんかとか訊ねました。

『私は、自分はもう身請けされてゐる、そして私の爲めに千五百ゾルタニ（ゾルタニは約三拂うたのであるから、その値段によつて、私の主人がどんなに私を値ぶみしてゐるかはお分圓八十銭の金貨）

りになりませうと答へました。すると彼女は答へました、「もしお前が私のお父さまの捕虜だつたら、ほんとに、私はその二倍の高さでもお父さまに手放させはせなんだらうよ。何故といふに、お前たちキリスト教徒はいつも嘘ばつかりついて、ムーア人を瞞さうとて貧乏なふりをするのだもの。」

「お孃様、それはさうかも知れませんが、しかし本當に私は世の中の誰とでもする通り、またしようと思ふ通り、正直に私の主人と取引きをしましたよ。」と私は言ひました。

「そして何時お前さんは立ちますか？」とゾライダは言ひました。

「明日と思ひます。」と私は言ひました、「フランスの船がちやうど來てゐて、それが明日出ますから、それに乘つて行かうと思ひます。」

「スペインの船の着くのを待つて、それで行つた方がよくはないの。」とゾライダは言ひました、「お前のお友達でもないフランス人と一緒に行かずに。」

「いゝえ、」と私は言ひました、「尤もスペインから今に船が來るといふ知らせでもあれば、大抵それを待つて居るかも知れませんが、しかしどうも明日立つことになりさうでございますよ。何故と申しますと、私は自分の國へ歸つて懷しい人たちに逢ひたくて逢ひたくて堪りませんから、たとへどれほど便利が多からうと、遲くなるのなら、とても次の便まで待つては居れません。」

「きつとお前は自分の國にお嫁さんがあるのですね、それで早く歸つてお嫁さんに逢ひたくて堪らないのですよ。」とゾライダは言ひました。

「私はまだ結婚はしてゐません。しかしあちらへ着き次第結婚するといふ約束はしてをります。」と私は言ひました。

「お前の約束してゐなさるその御婦人は美しいのですか？」とゾライダは言ひました。

「その女の容貌を立派に間違ひなく申しますと、全く貴女にそつくりだと申したい位美しうございます。」と私は言つた。

『これを聞いた彼女の父は、心から笑つて言ひました、「なるほどな、お前さん。私の娘はこの國第一の美人ぢやで、この娘のやうであれば、なか〳〵美しい女に違ひあるまい。お前さんこの娘をよく見なされ、さうすれば私の言ふのが本當ぢやと分らうわい。」

『ゾライダの父は外國語に堪能であつたので、これ等の言

葉や文句は大方通辯してくれました。といふのは、ゾライダはそこで使はれてをる例の雜種語を話しはしたのですが、自分の意味を言ひ現はすには言葉よりも手眞似を多く用ゐたからです。

『私たちが尙もかうして話して居りますと、一人のムーア人が走つて來て、四人のトルコ人が庭園の垣根の塀を乘り越えて來て、まだ熟してもゐない果物をもいでゐると大聲で叫び立てました。老人もゾライダもびつくりしました。ムーア人等は一般に、また言はゞ本能的に、トルコ人どもを、しかも殊にその兵隊を恐がつてゐます。兵隊等は自分等の權力の下にあるムーア人に對しては非常に無作法に威張りちらして、奴隷でもかうは扱はぬと思はれる位苛酷に取り扱ひます。そこで父はゾライダに申しました、「娘よ、私がその犬どもに物を言ふ間、お前は家へ入つて引つこんでゐるがよい。それからキリスト教徒さん、お前さんも、その槳を摑んで、無事に行きなさるがよい。そして神のお守りで國へ無事にお着きなされ。」

『私はお辭儀をしました。父は私とゾライダと二人きりにして、そのトルコ人を搜しに行つてしまひました。彼女は父に命ぜられた通り今にも家へ入らうとして居るやうにしてゐました。しかし父が庭園の木蔭に隱れるや否や、彼女は兩眼に涙を溜めて私の方へ振り向いて申しました、「タメジ、クリスチャノ、タメジ、」それは卽ち、「貴方は行くのですか、キリスト信徒、貴方は行くのですか？」と言ふのです。

『私は答へました、「ハイ、お孃さん、けれどどんなことがあらうとも、貴女を措いては行きません。今度の金曜日には私を待つてゐて下さい、そして私らを見てもびつくりなさいますな。きつとキリスト教徒の土地へ行きますから。」

『これを私は、二人の間の心持ちが彼女にすつかり分るやうに申しました。彼女は私の頸の周りに片腕をなげかけて、弱々しい足どりで家の方へ歩き出しました。しかし時も時とて（またもし神樣が違つた方へお導きなさらなかつたら、飛んでもなく不仕合せになりましたらう）、丁度私たちが今申したやうな風にして、彼女の腕を私の頸にかけながら家の方へ歩いてゐるところへ、彼女の父がトルコ人を追ひやつて歸つて來て、私たちの歩いてゐる樣子を見ました。また私たちも見られたことに感づきました。しかし素敏こい氣轉の利いたゾライダは、その手を私の頸から取り去らずに、却つてます〳〵私にくつついて、私の胸へその頭をもた

せ、その膝を少し曲げて、悶絶の身振り様子を悉く見せるやうに氣を利かせました。同時に一方で私は、いや〳〵ながら彼女の身を支へてゐるかのやうに見せかけたのです。父は私たちの居る處へ走つて來て、自分の娘のこの様子を見て、どうしたのぢやと尋ねました。けれど彼女は返事をしませんので、父は「この娘はあの犬どもが入つて來たので魂消て氣絶したのに違ひない、」と言ひました。そして彼女を私から受け取つて自分の胸へ引き寄せました。すると彼女はまだ眼を涙で濡らしたまゝ、吐息をつきつゝ重ねて言ひました、「アメジ、クリスチャノ、アメジ、」——「行け、キリスト教徒、行け」。それに對して父親は答へました、「娘よ、このキリスト教徒は行くには及ばんのぢや。この人はお前に何も悪いことはせなんだのぢや。またあのトルコ人どもはもう行つてしまうたぞよ。吃驚するな。今も言ふ通りトルコ人どもは私の言ふことを聞いて元來た方へ行つてしまうたから、もう何もお前を害するものはないのぢや。」

「貴方樣の仰有る通り、お嬢さまを脅かしましたのはあいつらでござりましたよ、」と私は彼女の父に言ひました「けれどお嬢さまが私に行けと仰有いますから、御機嫌に逆はぬやうにいたしませう。どうぞ御機嫌よろしう。それからお許しを得ましたから、もし要ります節はこのお庭へまた菜を頂きに參ります。私の主人の申しますには、生菜料理に使ふ菜としては何處のよりもこちらのが一番よいさうでございますので。』

「要るときは何時でも來なさるがよい。」とハヂ・モラトーは答へました、「この娘がかういふことを言ふのは、何もお前さんやその他のキリスト教徒を嫌ふからぢやありませんからの。この娘はたゞトルコ人どもを行かさうとて言うたことで、お前さんではないのぢや。或ひはお前さんにもう菜を摘む時ぢやと言うたのかも知れん。」

『そこで直ぐさま私はこの二人に別れを告げました。彼女は、宛ら胸も裂くるやうな樣子をして、父と共に家へ入りました。菜を捜すふりをして私は悠々と花園を廻つて、細かく總ての出入口や家の戸締りや、その他私たちの仕事を容易くする爲めに役立つやうな一切のことを調べました。それを濟ましてから私は脱宗者や仲間のところへ行きまして、ありし次第を殘らず物語りました。そして私は、あらゆる心配がなくなつて、幸運が私のために差し出してくれた、美しい愛らしいゾライダといふ獲物をば、我がものにすべきその時を、待ち兼ねて居りました。遂に時は經ち、私たちが待ぬやうにいたしませう。どうぞ御機嫌よろしう。それから

ち兼ねてゐたその日は參りました。そして細心な熟慮と長い評議との末に、私たちが決定した畫策計略を悉く行なつて、望み通り十分に成功しました。私がゾライダと花園で話しましたそのあくる日の金曜日に、例の脫宗者は暮れ方にゾライダの居る場所の殆んど眞向ひに船をつけました。漕手になる筈のキリスト教徒等は既に用意が出來て、彼方此方その邊に身を隱して皆私を待ちながら、今か〳〵と氣も昂つて、その眼前に横たはつてゐる船へ今にも押し出さうと逸つてゐました。彼等は脫宗者の仕組みを知らなんだので、船の甲板に居るムーア人を殺せば、武力によつて自分等の自由が得られるものと思つてゐたのです。やがて私の仲間の者等が姿を現はすや否や、隱れてゐた者どもは私たちの來たのを見て直ぐさま集つて來ました。最早市の門も閉まつた時刻なので、市外には人影も見られません。私たちは一緒に集まると、第一に、ゾライダを連れて行つたがよいか、それとも先づ船に居るムーア人の漕手等を捕虜にした方がよいかと評議しました。私たちがまだあやふやで居るところへ、あの脫宗者がやつて來て、もうすでに時刻が來て、ムーア人どもは殘らず守備を撤して大方眠つてゐる時なのに、何をぐづ〳〵してゐるかと訊ねました。私たちはその躊躇の譯を話しました。すると彼は、第一に船を手に入れる方が肝心である、それは誠にやす〳〵と手もなく出來るから、それを濟ませてからゾライダをつれに行けると申しました。私たちは皆それに贊成して、もはや何の躊躇もなく、彼を先頭にして船へ行きました。彼は眞つ先きに甲板へ跳び乘りさま、短劍を引き拔いて、「生命が惜しくば何奴も此奴も此處から動くまいぞッ、」とムーア語で言ひました。もうその時は、殆んど殘らずのキリスト教徒が甲板に上つて居りました。すると臆病なムーア人等は、自分等の船長がかう言ふのを聞いて度膽を拔かれ、一人として武器を取る者もなく(そして實際彼等は少しの武器しか、否殆んど一つももつてゐませなんだので)、一と言も言はずにおとなしくキリスト教徒の縛に就きました。そこで私たちは、もし少しでも聲を立てたら、片つ端から斬り殺してしまふぞと脅かしながら、手早く繩をかけました。それを濟まして、私たちの中の半分は後に殘して、この者等の見張りをさせ、その餘の者は再び脫宗者を案內にして、ハヂ・モラトーの庭園へと急ぎました。そして門に當つて見ますと、運よくも、鍵さへが下してなかつたものゝやうに、やす〳〵と開きました。そこで私たちは全く音も立てず靜かに、何人にも見咎

められることなくその家へ參りました。愛らしいゾライダは窓によつて私たちを見てゐました。そしてそこに人影を認めると、忽ち低聲で、私たちに「ニザラニ」かと訊きました。それはつまりキリスト教徒かと聞いたわけです。私はさうだと答へて、彼女に下りて來るやうに言ひました。彼女は私を見るや否や一瞬の躊躇もなく、たゞ一言も答へずに直ぐと下りて來て戸を開けて、私たち一同の前に、言葉にも盡しがたいほど美しく立派に着飾つたその姿を現はしました。私は彼女を見ると忽ちその手を取つて接吻しました。そして脫宗者もまた私の二人の仲間も同じことをしました。そして殘りの人々も、事情は何にも知らぬながら、私たちのするのを見てその通りにしました。それは、私たちは彼女にお禮を言つてゐるので、私たちに自由を與へてくれた人として認めてゐるのであるとしか見えなかつたのです。脫宗者はムーア語で父親は在宅かと彼女に尋ねました。父は在宅で今眠つてゐると彼女は答へました。

「それでは起して一緒に連れて行かねばなるまい。」と脫宗者は言ひました、「それからこの立派な邸にある金目の品も殘らず。」

「いけません、」と彼女は言つた、「どんなことがあらうとも私の父にさはつてはいけません。それにこの家には私の持ち出す物の外には何にもありません。またそれだけあれば貴方がたを皆滿足させて十分に金持ちにして上げられます。一寸待つておいでなさい、今に分りますから。」とさう言ひながら、彼女はすぐ來るから皆音を立てずに靜かにして居るやうにと私たちに命じて、再び家へ入つて行きました。

『私は脫宗者に向つてゾライダに何を言つたのかと訊きました。彼の答へを聞いて私はゾライダの心に背くやうなことは一切してはならぬと言ひました。彼女は自分でやつと持てる位に金貨の一杯入つた小形の鞄を持つて戻つて來ました。かうしてゐる間に、運惡く彼女の父親は目を醒ましました。そして庭の物音を聞きつけて窓のところへやつて來ました。そして忽ち其處に居る者は皆キリスト教徒であると見て、恐ろしい大きな聲を張り上げて、アラビア語で「キリスト教徒、キリスト教徒！　泥棒、泥棒！」と怒鳴り出しました。この叫び聲を聞いて私たちは皆非常に慌て惑うてしまひました。しかし脫宗者は我々の危險を見て、人に聞きつけられぬうちに、是非とも此方の方の目論見を果してしまはねばならぬと思つたので、一生懸命に素早くハヂ・

モラトーの居るところへ登りました。すると仲間の誰彼もその後に續きました。然し私は殆んど氣絶して私の腕に倒れかゝつたゾライダをよう手離しませなんだ。ところで二階へ上つて行つた連中は非常に敏活に働いて、見て居る間にハヂ・モラトーの兩手を縛り上げ、その口は手拭で結へて言葉を出せないやうにし、もし一言でも聲を出さうとすれば、卽座に殺してしまふぞと言つて引き立てゝ降りて來ました。娘は父の姿をちらと見ると、見まいとして眼を蔽ひました。父は娘がどうして自から進んで私たちに身を任せてゐるのか分らぬので、魂消てしまひました。しかし私たちに取つて一番大事なことは前進するにありますので、私たちは用心しながら手早く船に戻りました。船では殘つてゐた連中が、私たちの上に何か災難が起りはしなかつたかと、心配しながら甲板で待つて居りました。私たちが殘らず船に乘り込んだのは、日が暮れて僅か二時間の後でした。そこでゾライダの父の手の細索を釋き、口の手拭を外してやりました。しかし脫宗者は父親に向つて、一言も聲を出してはならぬ、出しでもしたら殺してしまふぞと重ねて言ひました。父親は自分の娘が其處に居るのを見ると、辛さうに吐息を吐き出しました。そして彼女が私にしかと抱かれてゐながら、それを拒みもせねば不平も言はず、少しも嫌さうにもせず、靜かに泣りかゝつて居るのを見ては尙更でありました。けれども彼は、脫宗者が言つたその重ね〳〵の威嚇を實行されはせぬかと恐れて、そのまゝ默つて居りました。

『ゾライダは今や自分も船に乘せられ、その船は漕ぎ出さうとして居るのに、自分の父親も此處に居るし外のムーア人等も縛られてゐるのを見て、どうかそのムーア人等を釋いて、父を自由の身にしてやるやうに私に賴んで呉れいと、脫宗者に申しました。ゾライダは自分をあれほど可愛がつてくれた父親を、自分の面前で、しかも自分のことの爲めに捕虜として引き立てゝ行かれるのを見るよりは、わが身を海に沈めたいと思つたのです。脫宗者はこれを私に通辯しましたので、私は喜んでさうしようと答へました。しかし脫宗者はそれは不得策だと答へました。何故といへば、もし放してやつたら、彼等は忽ち全國を煽り立て全市を起たしめて、船足の速い巡洋船を出して私たちを追かけさせるであらう、さうなれば私たちは海にも陸にも遁れ路はないから捕まつて了ふ、それ故キリスト敎徒の土地へ着き次第、そこで放してやることしか出來ないと言ふのです。私たち

は皆それに賛成しました。そしてゾライダにも、私たちが卽座にその願ひを聽き兼ねる理由を説明してやつたので、彼女も滿足しました。やがてわが屈強な漕手等は、無言の喜びと晴やかな元氣とで、めい〳〵楫を取り、みな〳〵心から神に祈りをこめて、一番近いキリスト教徒の土地である、マジョルカ島へと舵を向けて漕ぎ出しました。しかしトラモンタナ（アルプス颪が北風のこと）が少し出て、海が幾らか荒れましたので、マジョルカへ眞直の航路を取ることは出來ませなんだ。それで止むを得ず、私たちはオランの方へと、海岸に沿うて進みましたが、私たちの方では、シェルシェルの町から見咎められはせぬかと、隨分心配せんでもなかつたのです、その町はアルジールスから六十哩しかない海岸にあるのです。その上、この航路では、テテュアンから荷物を積んで來る定期の荷船に出逢ふ恐れがありました。尤も私たちは、誰も彼も皆揃うて、たとへ商賣船に出逢うても、それが巡洋船でさへなければ、こちらが負けぬばかりか、もつと安全に航海をし遂げられるやうな船を、分捕ることさへ出來るわけだと信じて居りました。私たちが航海を始めますと、ゾライダは自分の父に顏を合はせまいとて、私の兩手の間にその顏を押しつけて居りました。そして私たちを助け給へとレラ・マリエンに祈つて居るやうでありました。

私たちが三十哩も進んだかと思ふ頃に、夜が明けて、見ると私たちは陸地から三着彈距離ばかりのところに居りましたが、其處は無人境と見えて人影も見えませなんだ。しかしそれに拘らず、私たちは、最早海も幾らか穩かになつて居りましたので、力を入れて漕いで、少し沖へ出ました。そして二リーグばかり進んだので、食事をする間、代り番こに漕げといふ命令が下りました。船には十分食物の用意がありましたからです。しかし漕手等は、今は決して休む場合でない、漕いでゐない人等には食事をさせてよいが、私たちはどんなことがあらうとも櫂を離さぬと言ひました。それでその通りにしました。しかしやがて強い風が吹き出して、どうしても漕ぎ方を止めて、直ぐ帆を上げてオランの方へ舵を向けねばならぬやうになりました、その他の航路はどうしても取れなんだのです。それは悉く非常に敏活にされました。私たちは、沖をうろついてゐる巡洋船に出遇ふといふ他には、何の心配もなく、帆を上げて一時間八哩以上も走りました。ムーア人の漕手等へは食物を與へました。脫宗者は彼等を慰めて、機會が來次第お前たちは自由にしてやる筈だから、決して捕虜にはしないと言ひました。

『それと同じことをゾライダの父親に言ひますと、彼は答へました、「あゝ、キリスト信徒よ、外のことなら何でも、お前等が寛大に優しくしてくれると望まれもし考へることも出來ようけれど、お前等が私を自由にして呉れると思ふ程に、私を世間知らずとは思うて貰ひますまい。お前等としても、それ程寛大に私の自由を返してくれる位なら、何もこんな危い思ひをしてまでも、私の自由を奪ふことはなかつたらう。殊にお前等は、私の身分も、また私の身請からどれほどの金額が取れるかといふことも、ちやんと承知してをるのぢやからな。そこでお前等が、たゞ幾らゝゝとさへ言へば、その望みだけのものは、この私とそこに居る不仕合せな娘との身の代として上げませう。それでなけりや娘ひとりの代としてなりと。何故と言ふに、この子は私の大事な大事な一番の寶ぢやからな。」

『かう言つて、彼は非常に痛々しく泣きましたので、私たちは皆深く氣の毒に思ふし、ゾライダは我知らず父の方を見ました。そして泣いてゐる父親を見ますと、もう堪へ兼ねて私の足許から起つて、走つて行つて、父親を兩腕に懐き、顔と顔とを擦りつけて、二人ともはらゝゝと涙をこぼしましたので、私たちのうちにも何人かは、その附き合ひをせずには居られませなんだ。

『しかし父親は、盛裝してありだけの寶玉を身につけてゐる自分の娘を見ますと、自國の言葉で言ひました、「娘よ、これはどうした事ぢや？　昨夜、この恐ろしい災難の身にふりかゝらぬ前には、お前は平生の通り部屋着でをつたのを見たのに。それぢやのに、今は着飾る暇もなければ、裝り立て飾り立てる理由になるやうな、嬉しい音づれを私が持つて來たといふのでもないのに、見ればお前は私らが一番仕合せであつた時に、私が及ぶ限り拵へてやつた最上の衣裳を着けて居るではないか。返事をしなされ。これこそ今の災難よりも餘計に私を心配させびつくりさせるわい。」

『脱宗者はこのムーア人が娘に言つたことを私たちに通辯してくれました。彼女はしかしそれには答へませなんだ。しかし父親は、娘がいつも寶玉を入れてゐた小形の鞄を、それはアルジールスに遺して置いて、庭園へは持つて來てゐなかつたとよく覺えてゐたのですが、それをこの船の片隅で見た時には、尚更に驚いて、一體この鞄がどうして私たちの手に入つたか、また中には何が入つてゐるかと、彼女に問ひました。これに對して脱宗者はゾライダの返事を待たずに答へました、「もし、私の一言の返事だけで萬事は分り

ませうから、さういろ〳〵のことをゾライダさんにお訊ねなさるには及びません。卽ちこのお孃さんはキリスト信者です、そして私たちの鎖を切つた鑢となり囚はれの救ひ人となつたのはお孃さんですよ。お孃さんは御自分から望んで此處へ來られたので、多分こんな身分になられたのを、ちやうど闇から光りへ、死から生へ、惱みから榮えへ遁れた人のやうに喜んでおいでですせう。」

「娘、この人の言ふことは本當か？」とそのムーア人は叫びました。

「えゝ、」とゾライダは答へました。

「お前が本當にキリスト信者ぢやと？　またお前が自分の父親を敵の手へ渡したのぢやと？」と老人は言ひました。

『これに對してゾライダは答へました、「私はキリスト信者でございます、けれどお父さんをこんな處へお伴れ申したのは私ではございません。私はつひぞ貴方を見棄てたり貴方に害を加へたりしようと思うたことはありません。ただ自分に善いことをしようと思うたばかりです。」

「ぢや娘よ、お前は一體自分にどんな善いことをしたのぢや？」と父は言ひました。

「それはレラ・マリエン樣にお訊き下さいませ、」と娘は言ひました、「私よりもあのお方の方がよく貴方に話して下さることが出來ますから。」

「そのムーア人はこの言葉を聞くか聞かぬに、はつと言ふ間もなく眞つ逆さまに海中へ身を投げました。若し彼の着てゐた長い重ねた着物が、暫らくの間水の面へその身體を浮ばせてゐなかつたら、疑ひもなく溺れてしまひましたらう。ゾライダは父を助けてと私たちへ聲高く叫びました。私たちは皆大急ぎで助けにかゝり、その長上衣を摑んで、半ば溺れかゝつて氣絶した彼を引き上げました。ゾライダはこれを見て非常に心を痛め、父の身にすがりついて、すでに事切れたかのやうに、哀れげに痛々しく泣きました。彼を俯伏にしますと、澤山の潮を吐き出して、二時間經つて正氣に歸りました。折から風向きが變つて來たので、餘儀なく陸地の方へ向つて、岸に吹きつけられないやうにせつせと漕ぎました。しかし運よくも一つの入江に着きました。それはムーア人等が「カヴ・ルミア」と呼び、私たちの國語では「惡い女のキリスト教徒」といふ意味の、一つの小さい出鼻卽ち岬の片側にあるのです。一體ムーア人等の間には、スペインを負かしたラ・カヴはこの場所に葬られて居るといふ一つの傳說があります。「カヴ」はムーア語で「惡い女」に當り、

「ルミア」は「キリスト教徒」に當ります。その上、彼等は已むに已まれぬ場合にでも、此處へ碇を下すことは緣起が悪いとしてゐるので、さうでない場合には決して碇を下しません。しかし今や海が非常に荒れ出したので、私たちに取つては此處は悪い女の休み場であるどころか、私たちの救ひの安らかな港でありました。私たちは常に一人の見張りを立てゝ、銘々櫂は決して手離さずに、脫宗者が用意して置いた食物を食べました。そして好運の首途を好運に終らせ給ふやうにと、神樣やマリア樣に皆々一心に祈りました。ゾライダの願ひによつて、父親その他縛られてゐたムーア人等を上陸させるやうに命令しました。彼女は、自分の眼の前にその父を捕へ、同國人を囚徒として置くことは堪へられなかつたし、またその優しい心に忍びなかつたのです。彼等を此處で釋き放したところで、無人境であるから何の危險もないのです。だから出發間際にさうしようと私たちは彼女に約束しました。

『私たちの祈りは、天に屆かぬほどに效ないものではありませんでした。間もなく風は順風に變じ、海は靜まつて、元氣よく再び航海をつゞけるように私たちを誘ひました。そこでムーア人どもを釋いて一人づつ岸へ上げたので、彼等は驚いてしまひました。しかしゾライダの父を上陸させる段になりますと、今や全く正氣を回復してゐた彼は申しました、「キリスト教徒たち、お前らが私を自由の身にするのを、何故この悪性の女が悦こんで居ると思いますぞ？　それは彼女が私をいとしいと思ふからぢやと思ひなさるか？　なか〳〵以て、それは唯私が居れば此奴の卑しい目論見を果たす邪魔になるからぢや。また此奴が自分の宗旨を變へるやうになつたのは、私らの宗旨よりはお前らのが優れとると信じたからぢやとは思ひなさるな。それはたゞ私らの國よりもお前等の國に居る方が、餘計に不身持が出來るからぢや。」それからゾライダに向き直つて言ひました（その間私と今一人のキリスト信者とは、彼女に何か無法な行ひでもしかけはせぬかと恐れて、彼の兩腕をしつかりと抑へて居りました）「恥さらしの女子よ、無分別な娘よ。お前は私らの生れながらの敵の手に、この犬どもの手に曳かれて、盲ら滅法に何處へ行く氣ぢや？　お前を生んだ時が忌々しい！　お前を榮耀榮華に育てたのが忌々しい！」しかしなか〳〵急には止めさうもないので、私は急いで彼を岸へ上げました。するとそこから大聲で悪口や歎きを續けました。彼はマホメットに呼びかけて、私たちを破滅させ困らせ殺して下

さいと神に祈りました。やがて私たちは帆を上げてしまつたので、もう彼の言ふことも聞えず彼のすることも見えずなりました。彼はどんなにその鬚髯を引き抜き、その髪の毛を引き抜いて、地べたにのた打ち廻つたことでせう。しかし唯一度その言つてゐることが私たちに聞えた程にその聲を張り上げました。「歸つてくれ、可愛いゝ娘や、岸へ歸つてくれ。私はお前をすつかり赦してやる。その人らには金をやる。もう金はその人らのものぢやから。そして歸つて來て悲しんで居るお前の親父を慰めてくれ、お前がこのまゝ私を棄てゝ行けば、私はこの荒磯で死んでしまはうぞ。」

『ゾライダはこれを殘らず聞きました、悲しみと涙を以て聞きました。しかし彼女はその答へに、たゞこれだけしか言へませなんだ、「あゝお父さま、どうぞ神樣が、私をキリスト信者になされましたレラ・マリエン樣に、貴方の悲しみを慰めさせて下さいますやうに。私がこれより外にどうすることも出來ませなんだのも、このキリスト敎徒たちが、何も私の本心に强ひたのでないことは神樣が御存じでございます。たとへ私がこの人たちと一緒に行かずに家に留つて居らうと望みましても、とても私には出來なんだでございませう。それほどまで私の心はこの一念を果たすやうに私をそゝり立てました。お父さま、その一念は貴方に悪いものと見えますやうに、私には正しいものと思はれます。」

『しかしこれをその父は聞き取ることも出來なかつたし、彼女がかう言つてゐる時には、彼はもはや見えなかつたのです。そこで私はゾライダを慰めつゝ、私たちの船の進行に氣を配りました。船は順風を受けたので、そのお蔭で、大丈夫明日の明け方には、スペイン沖に差しかゝると思はれました。しかし吉い事といふものは、滅多に、いや決して純粹に混りものなしには來ないもので、必ず何かそれに打撃を與へて、攪き亂す凶事を供に伴れて來るものですが、私たちの運命は、いや恐らくあのムーア人が自分の娘に擲げかけた呪詛は(どんな父親の呪詛にしても、常に恐るべきものでありますから)、私たちをそんな目に逢はせました——卽ち、私たちが海の眞中に出て、日が暮れてから三時間ばかり經つた後、順風のお蔭で漕ぐ骨折りが助かりましたので、殘らず帆をあげて、檣は結へ付けて走つて居りますと、私たちのすぐ近くに眞帆を孕ませた一艘の橫帆仕立ての船が、向う風に船首を向けて私たちの行手を遮つて居るのを、皎皎と照り輝く月の光りで認めました。そしてもう非常に接近してゐますので、私たちはその船と衝突を避けるために、

餘儀なく帆を下しました。すると向うの方でも、やはり私たちを通らせようとて、うんと舵を抑へて居りました、その乘組の者等は舷側に出て、私たちに何處から何處へ行くのか、何處から來たのかと尋ねました。しかし彼等がこれをフランス語で訊きましたので、例の脫宗者は言ひました、「誰も答へてはならんぞ、きつとこいつらは通航船を片端から掠奪するフランスの海賊ぢやから。」この警戒を守つて、誰も一と言も答へませんでした。然るに私たちが少し前進して、その船が風下になると思ふと、突然二門の砲を發射しました。そして二門とも明かに連續彈を籠めてゐたのです。何故といふに、その一發は此方の檣を眞中から折つて、柱も帆も海に落し、同時に打ち出された他の一發は、船の中腹に命中して、そこをすつかり破壞してしまひました。がそれ以上の損害はありませなんだ。しかし私たちは沈みかかつたので、助けを呼び、向うの船の者等に、水が充ちて來たから上げて吳れと叫びました。さうすると、彼等は船を停めて、小船を卸して、十二人からのフランス人がおのおの火繩銃を携へて、しかも火繩には火を點けて、その小船に乘り込んで舷側にやつて來ました。そして私たちがいかにも小人數で、船も沈みかけてゐるのを見て、かうなつたのは、私たちが彼等に返事をしなかつた無禮のためだと言ひながら、私たちを收容してくれました。脫宗者はゾライダの寶の入つてゐる鞄をとつて、何を思つたか誰にも感づかれないうちに海へ落しました。やがて私たちは、そのフランス人等と共に向うの船へ行きますと、彼等は知りたいだけ私たちのことを確かめてから、宛ら不俱戴天の仇敵でもあるやうに、一物も殘さず私たちから掠奪しました。そしてゾライダからはその足に嵌めてゐた踝飾まで取りました。しかし彼等がゾライダの身に引き起こしたこの悲しみは、私が氣遣つてゐたこと程には、私を悲しませなかつたのです。その私の氣遣ひといふのは、彼等は彼女から立派な貴い澤山の寶石を奪つた上に、尚も進んで、彼女が何よりも貴しとしてゐる最も貴重な寶をば、彼女の身から奪ひはせぬかといふことでありました。しかし彼等の慾は、金錢以外には出ません。しかし彼等のその慾の深さと來たら飽くことを知らぬほどで、その時もまたそれが甚だしく、私たち捕虜の着てゐる着物さへも、それが幾らかになりでもしたら、剝ぎかねないばかりでした。そのうちの或る者は、私たちを一緒に帆布に卷いて海へ擲り込まうと言ひ出しました。一體彼等の眼ざすところは、ブレトン人と僞つてスペイン

のどこかの港で商賣をすることなのですから、もし私たちを生かして連れて行けば、强盜犯の露はれ次第罰せられるわけであるからです。しかし(私の可愛いゝゾライダの物を剝ぎ奪つた人ですが)、その船長は既に手に入つた獲物だけで滿足だから、スペインの港には何處へも寄りたくないから、ジブラルタルの海峽を、夜の間にか何時か出來る時通り拔けて、自分等の船出して來たロシェル(ビスケイ灣にあるフランスの港)へ行かうと言ひました。そこで彼等一同は、その船についてゐる小船と、それから後の私たちの短い航海に必要な物とを、私たちに與れるといふことに一致しました。そしてその翌日スペインの海岸の見えるところに來てから、その通りにして與れました。それやこれやの嬉しさで、私たちは恰かも何の苦しみも受けなかつたかのやうに、あらゆる艱難も辛苦も忘れてしまひました。失つた自由を回復するうれしさはそれ程です。

『彼等が二樽の水と幾らかのビスケットとを與へて、私たちを小船に乘せたのは、眞晝頃でもありましたらう。そして船長は、どうした憐愍の情に動かされたのか知りませんが、可愛いゝゾライダがまさに乘船しようとする時に、金貨を四十クラウンばかり與れまして、そして彼女が今着て居りますあれだけの着物には、その部下の者等に手を觸れさせませなんだ。私たちは彼等の親切に對して禮を言うて、小舟に乘り移りました。そして感謝の情をこそ現はせ、怒りはしませなんだ。彼等は海峽の方へ船を進めながら、海面を眺めて立つてゐました。私たちは前方に見える陸地の外には何の目標にも目を與れず、非常な勢ひで漕ぎ出しましたので、日沒頃には早や、夜の更けぬ内に容易く上陸されさうな見込がつきました。しかしその夜は月が現れず、空は曇つてゐましたので、それに私たちはどの邊に居るのか方角も分りませなんだので、仲間の數人の者が主張したやうに、岸に船を進めることは私たちにとつて上分別とは思はれませなんだ。その連中は、たとへ岩石の上でも、人里遠いところでも構はぬから、早く岸へ着けねばならぬ、さうすれば私たちが自然に感じてゐたあのテチュアンの海賊船の心配から救はれるからと言ふのです。その海賊は、暮れにアルゼリアを立つて夜明けにスペインの海岸へ來て、こゝらで大抵獲物を得て、それから家へ歸つて寢るのです。しかし意見を戰はした結果、採用されたのは、徐々岸に近づいて、もし上陸される位海の靜かなところがあれば、そこで上陸しようといふことでした。その意見が實行されました。そして眞夜

中すこし前に、私たちは海岸に餘り接近せず、而も上陸するに便利な狹い餘地を殘して立つてゐる、或る大きな高い山の裾に近づきました　私たちは小舟を砂濱へ乘り上げました。そこで皆々飛び降りて地面に接吻し、そして喜ばしい滿足の涙を流して、主なる神樣に、我々の航海中に賜はつた類なきお惠みを感謝しました。私たちは小舟に積んで來た糧食を下ろし、小舟は濱へ引き揚げて置いて、その山を隨分上の方へ登りました。何故と言ふに、其處でさへ私たちは安心が出來ず、また現在自分の足の下にあるのは、キリスト教徒の土地であると、心から信じきれなかつたからです。『夜明けは、私たちの思ふよりもゆつくりして來たやうに思ひます。私たちは、この山の頂から人里か羊飼ひ小屋かゞ見付かりはすまいかと、それを見る爲めに登りつめました。しかし出來るだけ眼を見張つても、人の住家も、人影も、小徑も往還も見ることは出來ませなんだ。しかし私たちの居る此處は、一體何處であるか、知らせて呉れる人に、今に逢ふに違ひないと思ひましたので、更に進んで行くことに決しました。けれど最も私の心を痛めたのは、この險しい土地をゾライダが歩いて行くのを見ることでありました。暫らく私は彼女を背負つて居りましたが、彼女は私の疲れてゐるのを見ると、自分で歩くよりも却つて疲れたのです。それで再び私に骨折りをさせずに、私に手を引かれて、非常に辛抱して快活さうに歩きました。私たちがかれこれ半里も行かないうちに、小さい鈴の音が私たちの耳に入つて來ました。それは直ぐそこらに家畜の群の居るといふ明かな證據です。そこで私たちは、誰か見えはしないかと注意ぶかくあたりを見廻しますと、とある栓の樹の根方に、一人の若い羊飼ひが、靜かに何の懸念もなささうに、小刀で杖をこしらへてゐるのを見出しました。私たちはその男に呼びかけました。すると彼は顏をあげさま、素早く駈け出しました。それは後で聞きますと、眞先きに彼の眼に映つたのは脫宗者とゾライダでありましたから、この二人のムーア人風の裝を見て、てつきりこれは異敎徒國のムーア人等が、自分を捕へに來たのだと思つたのださうです。そこで彼はすばらしい速さで、その前方にあつた數の中へ飛び込みながら、恐ろしい叫び聲を立てました、「ムーア人だ——ムーア人が上つて來た！　用心しろ用心しろ！」私たちは皆この叫び聲を聞いて、どうしてよいか分らず困つてしまひました。しかしこの羊飼ひの叫びがこゝらを騷がせて、例の騎馬の海岸巡邏どもが、何事かと即座に見に來るであらうと考

へつきましたので、私たちは脫宗者にそのトルコ風の着物を脫がせて、誰かのジャケツか上着かを着せることに相談をきめました。私たちの仲間の一人は、自分はシャツ一枚になつてすぐさまそれを與へました。そこで私たちは神樣へ一心に祈りつゝ、今にも海岸巡邏がやつて來るかと待ちながら、今の羊飼ひの取つた同じ道路を辿りました。その期待は私たちを欺きませなんだ、といふのは、二時間と經たぬうちに、ちやうど私たちが林を通りぬけて空地へ出た時、五十騎ばかりの人々が、跑をうたせて速歩に私たちに近づいて來るのを見ました。これを認めるや否や、私たちはじつと立ち止つて彼等を待ちました。しかし彼等はずつと近寄つて見ますと、自分等の搜してゐるムーア人はゐないで、哀れなキリスト教徒の一團を見ましたので、呆氣に取られてしまひました。そしてその中の一人は、あの羊飼ひに「用心しろ」といふ叫び聲を立てさせる元になつたのは、一體お前さんがたでありましたかと、私たちに訊ねました。私はさうですと答へて、そのことの仔細や、私たちが何處から來て何者であるといふことなどを話さうとしてゐますと、私の仲間の中の一人のキリスト教徒は、私たちに問ひかけた騎馬の人をそれと覺つて、私がその上何も言はないうちに叫び出しました、「皆さん、これは有難い、こんな願つたり叶つたりの地方へ上陸られたといふのは。私の感ちがひでさへなければ、私らの立つてをるこの土地が、つまりヴェレズ・マラガがスペイン南海岸マラガ港近くの海岸地方の土地ですよ。本當に、長い〳〵囚はれの年月の爲めに私が覺えちがひをして居るのでさへなけりや、私等を何者ぢやとお尋ねなさる貴方こそ、ペドロー・デ・ブスタメンテの叔父樣でございませうがな。」

『このキリスト教徒捕虜がかう言ひ終るか終らぬうちに、その騎馬の人は馬から跳び降り、走り寄つてその若者を抱きつゝ叫んだ、「あゝ可愛いゝ、いとしい私の甥か！　やつと見わけがついた。私はもう長いことお前は死んだものと歎いて居つたのぢや。私も、私の姉のお前の母御も、その外生きて居るお前の親類のものは皆さう思うとつたのぢや。これは目出度くお前に逢はせて喜ばさうために、神樣が生き殘らせて置いて下さつたのぢやな。私らはずつと以前からお前がアルジールスに居るとは聞いてゐたのぢやが、その着物の風やこの連れの衆の風から見れば、お前等は不思議な脫れ方をして來たのぢやな。」

「その通りでございます、まアゆる〳〵後で殘らずお話し致しませう。」とその若者は答へました。

『騎馬の人々は私たちのキリスト教徒捕虜であることが分ると、直ちに馬から降りて、銘々自分の馬を勧め、私たちを、そこから一リーグ半のところにある、ヴェレズ・マラガの市へ乗せて行かうと言ひました。その内の數人は、私たちの乗り棄てゝ來た小舟のある所を聞いて、それをその市へ回漕するために行きました。その餘りの人々は、銘々の背後へ私たちを乗せました。そしてゾライダは例の若者の叔父の背後へ乗せられました。私たちの到着を先觸れにして、一人だけ先きへ行つてゐたので、市中の人々は私たちの來たのを聞いて出迎へに來ました。この海岸の人々は、放免された捕虜もムーア人の捕虜も、よく見なれて居りましたので、どちらを見ても驚きはしませなんだ。しかしゾライダの美しさには皆々驚きました。その美しさは、キリスト教徒の土地に着いて、旅の苦勞や、一切の心配の無くなつた悦びで、今やその絶頂に達して居りました。この悦びが彼女の顔に非常な輝きを生じたので、彼女に對する愛着の爲めに、私の目が眩まされて居らぬなら、私は敢て世界中に、少くとも私の見たうちには、これより美しい人間はないと言ひたい位でした。

『私たちは、自分等の受けた恩惠を神に感謝しようとて、眞つ直に教會堂へ行きました。教會堂に入るとゾライダは、レラ・マリエンの顔に似た顔が幾つもあると言ひました。私たちは、それこそ皆あのお方の御像であると彼女に教へました。そして脫宗者は、一生懸命に、それらの意味を彼女に說明して聞かせました。その何れも〳〵を、嘗て彼女に話しかけたそのレラ・マリエンその人として彼女が崇め敬ふやうにと思ひまして。彼女はすぐれた智慧と敏い明かな本能を有つてゐたので、これに就いて彼の話した事は、殘らず直ぐさま會得しました。人々はそこから私たちを連れて行つて、この市の彼方此方の家々に宿割をしてくれました。しかし脫宗者とゾライダと私とは、私たちと共に來ました例のキリスト教徒につれられて、その親の家へ行きました。親たちは大層豐かな財産を持つてゐて、私たちを自分の息子同樣に大層親切に持てなしてくれました。

『ヴェレズには六日逗留しました。その最後の日に、脫宗者は、すでに自分のしなければならぬことは悉く果しましたので、神聖宗教裁判所の仲立によつて、教會の神聖な胸へ復歸しようとて、グラナダの市へと發足しました。自由になつた他の捕虜たちも、おの〳〵一番善いと思ふ道を選んで出立しました。そしてゾライダと私とは、二人つきり取り殘さ

れ、しかもあのフランス人の情でゾライダに與れた金より外には、何も持つて居りませなんだ。その金の中で彼女の乘る馬を求めました。そして私は差し當り彼女の良人としてではなく、その父として家來として附き添ひながら、私の父がまだ生きて居りますか、私の弟等が誰か私よりも好い運に出會ひましたか、それを確かめようとて、かうして只今行くところでございます。尤も、神樣が私をゾライダの連れ合ひにして下さいましたからには、いかに幸福なればとて、これに優ると思はれるやうな廻り合せは、とても割り當てられるわけのものではないと存じます。彼女が貧乏に伴ふ艱難辛苦を堪へ忍ぶその忍耐と、キリスト信者にならうために見せるその熱心とは、まことに感服の至りで、私は彼女の爲めにこの一生を捧げようと思ひます。尤も、この自分の國で、この婦人を宿らせる片隅でも見つけられるかどうか、また時と死とは私の父や、弟等の生命や財産に非常な變化を與へて、もしあの人たちに逢はれねば、もう一人も私を知つたものはないのであるまいか、さういふことが分りませんので、自分がこの婦人のものであり、この婦人は自分のものであると思うて感ずる私の幸福は、掻き亂されがちではありますけれど。

『皆さん、もうこの上お話しする物語もありません。これが面白い珍らしい話であるかどうかは、皆さんのすぐれた御判斷にお任せいたします。たゞもつと手短にお話しすればよかつたのにと申すまでございます。尤も皆さんを御退屈させぬかと心配して、ところ〴〵抜かしはしましたが。』

第四十二章

は宿屋に於けるその後の出來事、及びその他數々の知るに足る事どもを述べる。

かう言つて、捕虜は口を噤んだ。するとドン・フェルナンドーは彼に言つた、『まことに大尉殿、その目覺しい冒險のお話し方は、全くその斬新奇抜な事柄に適して居りますよ。全體のお物語が珍らしく奇抜であります上に、聽き手を驚かせ不思議がらせるやうな事件もなか〳〵豐かでありました。それで私たちは非常に面白く拜聽して居りましたので、たとへ今一度その同じ物語をお始めになつて、明朝まで徹夜して聞かされましても結構でございませう。』彼がかう言つてゐる一方で、カルデニオ始めその他の人々は、自分等の力の及ぶ限り、どういふ方法でも大尉の爲めに盡さうと、親切と眞心をこめた言葉で申し出たので、彼もその

好意を厚く喜んだ。殊にドン・フェルナンドーは、もし自分と共に家へ行つて呉れるなら、ゾライダの洗禮式には自分の兄の侯爵を教父に立てゝやり、そして自分の方では、大尉がその身にふさはしい品位や威嚴を保つて故郷へ顏出しの出來るだけの、取り賄ひをしてやらうと申し出た。これ等のことに對して、捕虜は非常に丁寧に禮を述べた。けれどもさういふ慇懃深い申し出の何れをも受けようとはしなかつた。

この時はもう夜が迫つてゐた。そして晩になると、幾人かの騎馬の家來に護られた一臺の箱馬車が、この宿屋にやつて來て、家來どもは部屋の支度を命じた。それに對してお上さんは、この宿屋には掌ほども塞らぬところはないと答へた。

『さうではあらうが、しかし、』とその騎馬で乘りこんだうちの一人が言つた、『この判事殿の御用ぢやから部屋を都合して貰はねばならぬ。』

その名前を聞いてお上さんは驚いて言つた、『貴方樣、實は寢床がござりませんので、けれど判事樣は、申すまでもなく御自分の寢床はお持ちになつとりませうから、もしさうでござりましたら、どうぞお入り下さりませ、夫と私の居ります部屋を、判事樣へ御都合いたしませうから。』

『それで結構、さうしてくれい。』と家來は言つた。しかしそれと同時に一人の男が馬車から出た。その服裝は一見してその人の官職と位地とを示した。卽ち彼の着てゐる襞のついた袖のある長上衣は、その家來が言つた通り、控訴院の判事であることを示した。彼は旅行服を着た若い娘の手を取つて下りた。それは見たところ十六ばかりの、非常に品の高い美しいしとやかな娘であつたので、その姿を現はすと、皆見とれてしまつたのである。それで、もしこの宿屋に居るドロテアやルシンダやゾライダなどを、見てさへゐなかつたら、皆この娘の美貌ほどの容貌は見つからぬと思つたであつたらう。判事がその若い婦人と共に入つて來る時に、ドン・キホーテも居合せた。そして彼は判事を見るや否や言つた、『閣下何卒この城内へ安心してお入りあつて、お寬ぎ下さるやうに。部屋の設けは乏しく貧しうはござりませうが、いかに窮屈で不便でも、文武を招ずることの出來ぬ程の場所といふものはあるものではありません。取り分け文武がおの〳〵美人をその先達導とする段になれば尙更のことぢや。貴方によつて代表される文の方には、この美しい處女子がをられます。この方に對しては城が自ら門を

開いて明け渡さねばならぬのみか、巌石とても自ら割れはじけ、山々とても自ら裂けて叩頭三拝してこの方を迎ふべきぢや。さアどうぞ貴方、この樂園へお入り下さい。貴方がお伴れになつたその「天」の好伴侶たる、星辰や日月がこゝをられまする。こゝでこそ貴方は至高絶倫の武と、絶世完璧の美とを見られるでござりませうわい』

判事はドン・キホーテの言葉を聞いて面喰つて、頭の先から爪先までつく〴〵と見てゐたが、その言葉よりもその姿に尚更吃驚したのである。そして彼に答ふべき言葉の見つからぬうちに、自分の眞ん前にルシンダやドロテアやゾライダの居るのを見て、彼は更にまた驚いた。その婦人たちは新來の客人やその若い婦人の容貌のことを聞きつけて、その婦人に逢うて歡迎しようと出て來たのである。しかしドン・フェルナンドーやカルデニオや牧師補は、もつと悧巧に品よく彼に挨拶した。要するに判事はその入り際に見るもの聞くもので、仰天してしまつた。またこの宿屋の美しい婦人たちはその綺麗な少女を親切にもてなした。判事は、概してこゝに居る人々は皆善い人であることを看て取つた。しかしドン・キホーテの姿や顔つきや振舞ひには、判斷がつきかねた。そこで挨拶も悉く交換され、宿の部屋割りの相談も出來て、前に決まつてゐた通りに決まつた。卽ち婦人等は殘らず旣に述べた例の天井裏に退き、男子は皆それを護衞するものゝ如く外側に居るといふのであつた。そこで判事は、非常に喜んで自分の娘を（これは判事の娘であつたので）その婦人たちと一緒に行かせた。娘も亦心から喜んでさうしたのである。そして亭主の狹い寢床の一部に、判事の携帶してゐた寢床を足して、彼等が思ひ設けてゐたよりも、心持のよい夜の設けを作つたのである。

その判事を見た途端に、何だかこれが自分の弟のやうな氣がしてたまらなかつた件の捕虜は、彼の伴れてゐた召使等の一人に、彼の名前や、彼の出身地はこの國のどの地方であるか、それを知つてゐるかと訊れた。彼の名前は學士ジュアン・ペレズ・デ・ギェドマ、そして聞くところによればレオン連山中の或る村の出身であるとその召使は答へた。その言葉や、自分の目擊したところから、捕虜は、これこそ自分の父の勸めによつて學問の道を選んだ自分の弟であると確信した。そこで氣も浮き立ち喜んで、彼はドン・フェルナンドーやカルデニオや牧師補を傍らに呼び、その判事は確かに自分の弟ですと言つて、事の次第を物語つた。例の召使は、尚彼が今メキシコの高等法院判事に任ぜられて、印度

諸國（アメリカの印度人の國）へ行くところであると知らせた。それにまた、その若い婦人は彼の娘であつて、その母はこの娘を產む時死んだといふことや、また娘のために遺されてある持參金の故に、彼が非常に富裕であるといふことなども聞かしてくれた。捕虜は、自ら名乘り出るにはどんな方法を取つたものか、またさう名乘り上げた場句に、こんな見すぼらしい自分を見れば弟が恥と思ふであらうか、それとも溫かい心で受けてくれるであらうか、それを前以て確かめるにはどんな方法を採つたものかと、三人の者に相談したのである。

『それを確かめることは私にお任せなさい、大尉殿、』と牧師補は言つた、尤も貴方がやさしく受け容れられまいと想像する理由は少しもないのですがな。といふのは、あの素振りでも分る通り、貴方の弟さんは人品も智慧も備へて居られますから、高慢ぶつたり不人情なことをしたり、或ひはまた、運の廻り合せといふものを、それ相當の値打ちに見るすべを知らなんだりしさうなではありませんよ。』

『でもやはり、私は不意に名乘り出ずに、何か遠まはしの方法でやりたいと思ひますが。』と大尉は言つた。

『今も申す通り、私たちが皆な滿足するやうなやりかたで、私がそれを始末しませう。』と牧師補は言つた。

折柄夕飯の用意が出來た。そこでこの捕虜と、自分等の室で自分等だけで食事をした婦人連を除いて、あとの人々は皆食卓についた。（作者はここで筆が既に食事を終へた事をこゝで忘れてゐる）夕飯の半ばに牧師補は言つた、『判事殿、私がコンスタンチノープルで數年間捕虜になつて居りました時、貴方と同姓の仲間が一人居りましたがな。その仲間は、スペイン全體の步兵隊中、最も強い軍人なり將校なりの中の一人でありました。しかしその男は、その夥しい俠氣や勇氣に劣らぬ夥しい不運に逢ひましたよ。』

『そしてその大尉は何といふ名前でしたか、貴方？』と判事は尋ねた。

『ルイ・ペレズ・デ・ヰエドマといふ人でした。』と牧師補は答へた、『そしてその男はレオン連山中の或る村の生れでした。そしてその男は父や弟たちに關係した或る事情を話して聞かせましたが、それをもしあんな誠實な人からでも聞かなかつたら、お婆さんたちが多火に當りながら話すやうな、お伽噺とでも思つて取り上げなんだらうと思ひますよ。その男の話では、その親父（おやぢ）さんは三人の息子に財產を分けてやつて、そしてめい〳〵にケートー（紀元前三世紀より二世紀の間のローマの賢明な監査官）

の一番よい忠告にも優つた分別に富んだ忠告を與へたさうです。然るに私の知つてゐるところでは、彼は自ら好んで戰爭に行きましたが、それが非常な成功で、遂に自分の勇氣と勇ましい働きで、たゞ自分の手柄ばつかりの力で、僅か二三年の間に歩兵の大尉に昇進して、そして遠からず軍團を指揮するやうな地位に昇らうとして居りましたのぢや。しかし運が悪かつたのか、好い運を手に入れさうなところで失つたのです、その好運と一緒に身の自由までも。しかもそれはレパントーの海戰であの澤山の人々が自由を回復した日出度い日に。私はゴレッタで捕虜になりまして、いろいろ危ふい目に逢うてから、コンスタンチノープルでその人と友達になりました。あそこからその人はアルジールスへ行きましたが、あの市であの人は、世の中の誰一人として出逢うたことのないやうな、稀代の珍事に出逢うたのです。』

こゝで牧師補は判事の兄とゾライダとの奇縁を手短に物語つた。それに對して判事は、今まで自分の聞いた如何なる訴訟にも與へたことのない程の熱心な傾聽を與へた。しかし牧師補は、例のフランス人があの小舟に乘つてゐた人々の中に取り殘されたといふところまでしか話さなかつた。その人々はその後どうなつたか、果してスペインへ着いたのか、それともフランスへ連れて行かれたか、それは知ることが出來なかつたと牧師補は言つた。

大尉は少し離れて立ちながら、牧師補の話しに殘らず耳傾けつゝ、自分の弟のあらゆる動作を見戍つてゐた。弟は牧師補が話を終つたのを見るや否や、深い吐息をついて、眼には一杯涙を浮べて言つた、『あゝ、貴方、今のお話が私にとつてどんなものであるか、どれほど胸に迫りますか、それは世間も知り自制力もある私ですが、この通り涙をこぼして心の痛みを現はすのでも、御推察下さい！　貴方のお話になつたその勇敢な大尉は、私の一番上の兄です。あれは私よりもいま一人の兄よりも勇ましい氣高い心を有つてゐましたので、貴方のお仲間であつたその捕虜が、昔噺のやうに思はれる話の中で申しました通り、父が私らに持ち出した三つの仕事の中の貴い譽れある武の職を選びました。私は文官の職に從ひましたが、私は神樣や私自身の努力のお蔭で御覽の通りの地位に昇りました。中の兄はペルー（ヌエバ・メリカの國名）に居りますが、あれは非常に富裕になりまして、今までに父や私やに遂つてくれましたものだけでも、優

に自分の貰つた割前を拂ひ戻したばかりでなく、父の生來の潤達を滿足させるに足る資財をさへ父の手に供へて晃れました。同時に私も更に立派に見苦しからず自分の研究を續けまして、現在の地位に達することが出來ました。私の父はまだ生きてゐます。尤も死ぬるほどに長男のことを知りたがつては居りますが。そして、息子の顏を見てから自分の眼をつぶらせて下さるやうにと始終神樣へお祈りをして居ります。しかし長兄のことで合點の行きませんのは、あれだけの常識を持つてをりながら、自分の困難辛苦につけ、或ひは立身出世につけて、何の消息もせずに打ちやつて置くといふことです。父なり私たち二人の弟のどちらかなりが兄の境遇を知りさへしましたら、何もその蘆の奇蹟を待たずに身請けが出來ましたらうに。しかし差し當り心配になりますのは、そのフランス人等が兄を自由にしてやつたか、それともその掠奪の形跡を隱すために殺してしまつたか、不確かなことです。私の今度の旅は、折角滿足を以て始まりましたが、そんなことの爲めにこの上なく陰氣な悲しい心持ちで續けることになりませう。あゝ懷しい兄上！　たゞ貴方の今居られる處さへ分れば、たとひ私はどんな苦勞をしませうとも、すぐに貴方を捜しに行つて貴方を苦しみから救ひ出しませうに！　あゝ貴方はたとひ鬱地の最も深い牢獄の中に居られようとも、たゞ生きて居られるといふ消息さへ、年取つた父上にお聞かせ申すことが出來ればよいのですが、さうすれば父上や中の兄上や私の財產で、そこから貴方を救ひ出して上げませうから！　あゝ美しい情ぶかいゾライダ、私は兄さんへの御親切を報いたいのです！　私は貴方の新たな靈の誕生日に洗禮式にまた一同にとつて目出度い貴方の結婚式に出席がしたいのです！』

判事は自分の兄の消息を聞いて非常に深く感動して、この他さま〴〵なことを言つたので、聞き居る人々は皆誘はれて彼の悲みに同情を表した。かやうにして牧師補は、自分の目論見や大尉の願ひの遂げられたことを見てとり、最早この上彼等を悲ませて置きたくはなかつた。そこで彼は食卓を離れてゾライダの部屋に行き、手を引いて彼女を連れて來た。その後からルシンダやドロテアや判事の娘などが續いた。大尉は牧師補が何をする積りなのか見ようと待つてゐた。すると牧師補は彼をも一方の手で引いて、判事その他の紳士等の居るところへ一緒に進んで、そして言つた、『判事殿、どうか涙をお止め下さい。そしてお望み通り十分に貴方のお心を滿足させて下さい。貴方の前に居られ

るのが、貴方の立派な兄上と善い嫂上です。此處に御覧になりますのが、ギェドマ大尉で、これが令兄に親切を盡されたムーアの佳人です。先きに申し上げたフランス人等はこの方々をこの通り見すぼらしい有様にしてしまひましたから、どうぞ貴方の優しい御親切をかけて上げて下さい。』

大尉は弟を抱擁しようとして走り寄つた。が弟はその顔をよく見ようとて、兩手を相手の胸の上に置いて支へてから少し間隔を取つた。しかし、十分にその見分けがつくや否や、心から湧き出る嬉し涙と共に、彼を兩腕に堅く抱いたので、並み居る人々も大方皆それにつれて涙を流さずには居られなかつた。兄弟の交した言葉や、彼等の現はした感動は、書きしるすことは愚か、想像さへ出來ないと思はれる。彼等は互ひに今までの身の上を手短に語り合つた。彼等は眞實な兄弟の愛情の力の限りを示したのである。それから判事は、自分の所有は殘らずゾライダに捧げませうと言つて彼女を抱擁した。その次には娘と彼女とを抱擁させたので、美しいキリスト教徒と愛らしいムーア人とは四つの眼から新たな涙を流した。ドン・キホーテは一語も發せずに、熱心にこれ等の不思議な成行を眺めつゝ、その悉くを武者修行の幻想に歸してゐたのである。やがて大尉とゾライダは、弟と共にセギールまで歸つて、父親が來て結婚式やゾライダの洗禮式に出席の出來るやうに、長男の無事で居所が知れたといふ知らせを送ることに相談が纏まつた。艦隊はこれから一ヶ月のうちに新スペイン（メリカのスペイン領）へ向つてセギールを拔錨するので、その便に遲れると非常な不便を來たすであらうと聞いてゐたので、判事は自分の旅立ちを延ばすことは出來なかつたからである。要するに誰も彼も捕虜の好運を非常に喜び且出度がつた。そして最早夜は三分の二も過ぎてゐたので、皆々殘りの時間を退いて休むことに決めた。ドン・キホーテは、巨人か惡意ある惡漢かゞ、この城内にある美人といふ大寶物を欲しがつて襲つて來るかも知れぬから、自分はこの城の護衞をして居らうと申し出た。彼を了解してゐる人々は、その勤務に對して禮を述べた。そして彼の異常の氣質に就いて判事にも話して聞かせたので、彼は少からず面白がつた。サンチョー・パンザ一人は、退いて休む時刻の遲れたのをぶつ〳〵言つてゐた。そして一同の中で彼が一番寢心地よくしたのである。それは彼は自分の驢馬の馬具の上に寢そべつたからである。ところがこの馬具は、段々話して行けば分るが、彼になか〳〵えらい目を見せる事になる。

そこで婦人たちは自分等の部屋へ退き、その他の人々も出來るだけ寢心地のよいやうに具合をよくしたので、ドン・キホーテは、約束した通り、城の番兵の役を勤めるために宿屋の外へ出た。然るにたま〳〵夜明の近づく少し前に、非常になだらかな良い聲音がふと婦人たちの耳に入つて來たので、みな〳〵思はずもそれに聽きとれたが、かねて目覺めてゐたドロテアは殊にさうであつた。彼女の側にはドニャ・クラ、・デ・ギェドマが（それは判事の娘の名であるが）、眠つてゐた。こんな良い聲で歌ふのは誰であるか、誰も想像することが出來なかつた。そしてその聲は如何なる樂器にも合してはゐなかつた。或る時はその歌ひ手がちやうど中庭に居るやうに思はれ、或る時は廐の中に居るやうにも思はれた。そして彼等が皆不思議がりながら聽き入つてゐると、カルデニオが戸口まで來て言つた、『眠つて居られぬお方は何方もお聽きなさい。ほれ〳〵とするほどに歌うてをる騾馬追ひの聲が聞えませうがな。』

『貴方、わたし達はもう先きから聽いてをりますの。』とドロテアは言つた。そこでカルデニオは行つてしまつた。そしてドロテアはその聲にあらゆる注意を集中して、その歌の言葉を次のやうに聞き分けた——

第四十三章

には騾馬追ひの面白き物語及びこの宿屋で起つたその他の奇異なることどもが述べてある。

やんれわが身は、戀のふかみの大海を
帆かけてわたる戀の水夫、
どこに港があるやら知らず、
そこへ着くことも望みやせぬ。

はるかあなたの、獨りぼつちの一つ星
あれこそわが身の道しるべ、
あれはパリヌルス（ヴィージルの「エーニース」に出る水先案内者にて、航海中海に落ちて溺死した）を照らしてやつた
昔の星よりや明るかろ。

しかもわが身は、彼方此方へ吹き流されて、
何處へ行こやら分りやせぬ、
あの星ばかりを見つめて居れば
他の星には構やせぬ。

されどあんまり用心深い用心や
つめたい内氣が雲となり、
是非とも光りをほしがるときに、
つれなやこがるゝ星かくす。

照る星さまよ、私の上から照るうちは、
焦がれるわが眼の目標で、
君の姿の隱れる時は
身の終りぞと思ひましよ。

歌ひ手が此處まで進んだ時に、こんな佳い聲をクラゝに聞き落さすのは殘念だと思つたので、ドロテアは彼女を頰りに揺ぶつて目を覺まさせてかう言つた、『お目を覺まさせて御免なさいよ。けれど、貴女もこれまでこんな佳い聲をお聞きになつたことはございますまいから、これを聞かせて喜ばせて上げませうと思ひまして。』クラゝは全く睡さうに眼を覺ました。そしてその時にはドロテアが何を言つたのか解らなかつたので、何ごとですかと彼女は訊ねた。ドロテアは今言つたことを繰り返したので、クラゝは直ぐさま聞き耳を立てた。しかしその歌ひ手が續けるのを二行と聞くか聞かないうちに、彼女は宛ら烈しい四日熱の發作に襲はれたかの如く、異樣な身顫ひをし始めた。そして兩手をドロテアに投げかけて言つた、『あゝ、ほんたうに貴女樣！　何故私をお起こしになつたのです？　もうあの不仕合せな歌ひ手を見も聞きもせぬやうに、この眼も耳も塞いで頂くのが、今の場合私への一番の御親切でございます。

『まア、貴女は何を言つておいでなさるのです？　あの歌ひ手は驛馬追ひださうではありませんか！』とドロテアは言つた。

『いゝえ、あれは澤山の領地の持ち主ですよ、』とクラゝは答へた、『それに私の心の持ち主で、私の心を堅く捕へて居られますので、あの方が御自分からそれをお棄てにならぬ限りは、とてもそれをあの方から奪ひ取ることは出來ませんのです。』

ドロテアは少女のこの熱烈な言葉に驚いたのである。それはその言葉が、彼女ほどの若い年輩の少女にありがちな人生の經驗を、遙かに越えてゐるやうに思はれたからである。そこで彼女は言つた、『どうも貴女の仰有るのは私には

分りかねますよ、クラヽさん。もつとはつきり言つて下さい、そして心とか領地とか、またそれほど貴女を感じさせたあの歌ひ手に就いて、貴女の仰有るのはどういふことなのですか、私に話して下さい。けれど今は何も仰有るな、貴女の熱情に氣を奪られて、あの歌ひ手の歌の面白いのを聞き損ねるのはいやですから。あれ、また新しい節や新しい調子で歌ひ出しましたよ。』

『どうぞ、お聞きなさい。』とクラヽは答へた。そして自分はそれを聞くまいとて両手で両耳を抑へた。それを見てドロテアは再び驚いた。しかし、注意をその歌の方へうつすと、それは次のやうなものであつた——

わが力、麗しの「希望」よ
汝がこゝろざす目標にむかひて
汝こそ進め、

障りも碍けものかは、
更に恐れず
たとひ歩々にして死は近づくとも。

禍なるは
雄々しき面を運命に向け得ざるものよ、
勝ちどきも
勝利のよろこびも臆せる心はこれを知らず、
身も魂も
たゞ懶惰の奴僕とぞなる。

戀の取り引き
價ひ高くば、必ずや戀の力ぞ現はるゝ。
黄金も何かせん、
戀の極印押したるものに比ぶれば。
人も皆知る如く、
得やすきものはこれを貴ばず。

戀の一念は
「かなはぬ」といふ言葉を知らず。
よしやわが求婚も
果てなき碍けに惱まされんとも、
いかなる絶望かよく
我を地上に縛りて上天せしめざらん。

此處でその聲は止まつた。そしてクラ、の啜り泣きは更に始まつた。この樣子はドロテアの好奇心をそゝつて、あれほど心をこめて歌ひ、あれほど痛ましく泣く譯を知りたく思はせた。そこで彼女は先に聞きかけてゐたことを更めてクラ、に尋ねた。そこでクラ、は、ルシンダが洩れ聞きはせぬかといふ心配から、外の人には誰にも聞かれる心配なく安心して話されるやうに、兩手を堅くドロテアに卷きつけて、その口を彼女の耳にぴつたりとつけ、そして言つた。「貴女、あの歌うて居る人は、アラゴン（スペインの東北地方）の富豪で二ヶ村の領主で、そしてマドリッドの私の家の眞向ひに住んで居られる方の息子さんでございます。私の家の窓には多は窓懸、夏は簾がかけてありますが、どうかして――それは私は存じませんが――御勉強最中のあの方が、敎會でか他の處でか分りませんが、私を御覽になりました。そして實は私に戀をなさいまして、お宅の窓からいろ〳〵の手眞似や涙でそれを私へお知らせになりました。私もどうせよと仰有るのかは分らぬながらに、餘儀なくその方を信ずるやうになり愛するやうにさへなりました。その手眞似のうちに、あの方は私と結婚したいといふ心を見せる爲めに、何時も二つの手をつなぎ合せてお見せになりました。それが私に出來さへすれば私は嬉しいのでございますけれど、私はひとりぼつちの母なし子で、誰に心を打ち開けてよいやら分りませんので、あの方へは何の愛想も致さずにそのまゝ打棄つて置きました。尤も私の父もあの方のお父さまもお留守の時は、窓懸か簾を少したくし上げて、はつきり姿を見せては上げました。さうしますとあの方は、まるで氣でも違つたやうに思はれる程お喜びになりました。そのうちに私の父の出發の期日が參りました。あの方もそれをお聞きになりました、けれど私はとてもそれを申し上げることは出來ませんだので、私からではありませんでした。するとあの方は病氣になられました――悲しみの爲めぢやと私は思ひます。それで私たちの出發の日には、たとへ眼と眼とだけでもお別れを申し上げることは出來ませなんだ。けれど二日の間旅をしまして、此處から一日路の或る村の旅籠屋に入る折に、私はあの方が騾馬追ひに身を窶して、そこの入口に居られるのを見ました。非常に上手に姿を變へて居られましたので、もし私の心にあの方のお像をちやんと彫つけて持つてゐませなんだら、とても見分けることは出來なんだでござりませう。けれど私はあの方と氣がついて、驚きもし嬉しうもございました。あの方

は私の歩く道中でも立ち寄る宿屋ででも、私の前を通る時はいつも父の眼からは隠れられるので、私を見てをられても父には疑はれませなんだ。私はあの方のことは存じて居りますし、また徒歩で旅をなされるかうした難儀は、すべて私を愛して下さる爲めぢやと思ひますと、お氣の毒で身も世もございません。それであの方の踏んで行かれるところに私の眼は止まります。まあ、あの方はどうしようとてお出でになりましたか、またどうして、お父樣の側を離れることがお出來になつたか分りません——お父樣は他にお世嗣は一人もなし、それにあの方は、貴女が御覽になれば分りますが、なか〳〵お可愛らしい方ですから、非常に可愛がつて居られます。それにあの歌は皆な本當に御自分のお作りになつたものでございますよ。人の噂ではあの方はなか〳〵の學者で詩人でおありになるさうですから。それにまた、私はあの方を見たりその歌を聞いたり致しますごとに身體中が顫へまして、父があの方と感づいて私たちの戀を看破りはせぬかとびく〳〵しますのです。私はまだあの方には一言も申したことはございませんが、それでもやつぱりあの方がなくては生きる甲斐のないほどに愛して居ります。貴女、あれ程貴女をお喜ばせ申したあの聲の主について申し上げることはこれだけでございます。そしてこれだけでも貴女は、あの方が驟馬追ひでなく、先に申しました通り私の心の持ち主、村々の持ち主ぢやと容易にお分りになりませう。』

ドロテアはこれを聞くと、彼女を幾度も〳〵接吻して言つた、『クラ、さん、もう何も仰有いますなよ、もう何も仰有いますな、たゞ明日までお待ちなさい。明日になればその貴女の事件は大丈夫神樣がちやんと始末して下されて、その無邪氣な始まりにふさはしい日出度い終りをつけて下さいませう。』

『まア、貴女、』とクラ、は言つた、『あの方のお父樣はあんなに御身分が高くあんなに金持ちでゐらつしやるのですから、私をその息子さんの奥樣には愚かのこと、お女中にも向かぬとお思ひなさいませうから、どんな結末が望まれませう？　それに私の父に知らさずに結婚するやうなことは、どんな事があらうとも致したくございません。私はただもうあの方に私を棄てゝ歸つて下さいとお願ひする外はございません。あの方を見ずにずつと遠方へ旅して行きましたら、大方唯今のこの苦しみは樂になるでございませう。尤も私のこの療法はあんまり利き目がないかとも思ひます

けれど、ほんとにどうした因果でこんな事になり、どうしてあの方を戀するやうになつたのでせう。私はこんな小娘で、あの方もほんの坊ちやんでございます。私たち二人はきつと同い年であらうと思ひます。そしてその私はまだ十六にもなりません。父の申しますのでは、今度のミカエル祭の日が來ますと私は滿十六になるさうでございますから。』

ドロテアは、ドーニャ・クラ、がいかにも子供らしく話すので笑ひ出さずには居られなかつた。

『お孃樣、もう眠みませう、』とドロテアは言つた、『まだ夜明けまでには少し間があると思ひますから……神樣はすぐ私たちに日の光を送つて下さいませう、そしたら萬事を都合よくしませう、さうしなければ大變です。』

かうして彼等は眠りに就いた。宿屋中はしんと寢靜まつてしまつた。眠らずにゐたものは宿屋の娘と女中のマリトルネスだけであつた。この二人はドン・キホーテの性質の弱點を承知してゐたし、彼が中庭に身を堅め馬に乘つて宿屋の戸外を警護してゐることも知つてゐたので、何か彼に惡戯をしてやるか、或ひはせめて暫くの間彼の痴言を立ち聞きして面白がらうと思つたのである。ちやうどこの宿屋中には外側へ向いた窓とては一つもなく、たゞ藁置き部屋の壁に藁を投げ出す爲めに使はれる穴が一つあるばかりであつた。この穴のところに二人のお孃さんたちは陣取つた。そして見ると、馬上のドン・キホーテは槍に身を凭せて、その一つ〳〵でその魂を根こぎにでもするかと思はれるやうな悲しげな吐息をば、時々ついてゐるのであつた。そして低い優しい甘つたるい調子で、かう言つてゐるのを聞くことが出來た、『あゝわがドゥルシネア・デル・トボソよ、一切の美の完璧、婦德の頂上、婦德の冠、優雅の寶庫、貞節の貯藏庫、而して結局、この世の善きもの譽れあるものの喜ばしきものの一切の理想よ！　御身は唯今何をして居られるぞや？　たゞその御身に盡すために、自ら進んでかかる大危險に身を曝すこの獻身の騎士のことを、御身は心にかけて居られますか？　あゝ三貌の月光樣（女神ダイアナを指す言葉で月の異名）、あの婦人の音づれを聞かして下さりませ！　あなたは今もあの婦人の貌を羨ましさうに照らしておいでございませう。ちやうどあの婦人が、あの壯麗な宮殿の渡殿を彼方此方とそゞろ歩きしながら、或ひはまた露臺の欄に倚りかゝりながら、如何にせば彼女の清淨無垢を失はずに、彼女の爲めに惱み居る拙者の哀れな胸の苦みを和げてやら

れようか、拙者の艱難には如何なる榮譽を以て報い、拙者の勞苦には如何なる報ひを、また最後に拙者の生命には如何なる死を、拙者の奉公には如何なる恩賞を授くべきかと、思案に暮れてをるところをば。また日輪よ、あなたもまた唯今は疑ひなく、時に遲れずさし昇つて拙者の婦人を見にござらうと、大急ぎで駿馬に馬具をつけておいでござりませう。あなたがあの婦人を御覽になりましたら、どうか拙者の爲めに御挨拶をなされて下されい。しかしあの婦人に逢うて挨拶をなさる場合には、あの婦人の顏には接吻なさらぬやうにお氣をつけて下されい。何故なれば、昔あなたが、あの足疾の情け知らず（女神ダフネを指す、アポロ（日の神）に追はれんとするや月桂樹に變じたりとのギリシヤ神話による）をお妬みなされたよりも以上に、拙者はあなたを妬みますからの――あなたはその妬みと戀とのために汗を流して（あの時あなたが走られたところは今精確には思ひ出せませぬが）テッサリー（古ギリシヤの一地方）の平原か、それともペニウス河（テッサリーを流るゝ河）の堤かを走つてあの女神を追はれたのぢや。』

ドン・キホーテがその哀れげな口說きごとを此處まで進めた時に、宿屋の娘は忍び聲に彼を呼んで言つた、『貴方、どうぞこゝへ上つて來て下さい。』

ドン・キホーテはこれ等の呼び聲や言葉を聞いて振り向くと、今や恰も明皎々と輝き渡つてゐる月の光によつて、何人かゞその壁の穴から自分を呼んでゐるのを見た。その穴は彼には窓と思はれたのみならず、その窓には、立派な城（そんな城と彼はこの宿屋を信じてゐたので）に必ずある筈の金碧燦爛たる格子が附いてゐると思はれた。そして即座に彼は想像を逞しくして、この前の時と同樣に、こゝの城主の姫君である美しい少女が彼を戀ふる心に堪へずして、今一度その情を得ようと努めて居るのであると思つた。かういふ考へから、彼は自ら禮儀や情を知らぬ者と見られたくないので、ロシナンテの首を轉じてその穴に近づき、二人の女どもを目にとめて言つた、『美しい姫君よ、貴女がその優れた御人品や高貴な御身分に、適はしい返しをお受けになることの出來んやうな方角へ、戀の思ひをお向けになりましたことは、お氣の毒に思ひます。それぢやとて決してこの不仕合せな武者修行者を責めては下さりますな。この拙者は、この兩眼でたつた一と目見るや否や心の無上の君主と崇めることになりました婦人の外には、何人に對しても心を許すことの出來ぬ身となつて居りますでな。姫君よ、お赦し下されい。もはやお居間へお引き取りなされまして、

貴女様の御執着をこの上尚もお打ち明けになつて、この拙者にこの上の情ない素振をさせては下さりまするな。そして若しや拙者を思うて下さるところから、何か拙者の力で貴女様へお盡し申すことの出來るものをお見つけ下さいませうならば、戀のことでさへなければ、何なりと仰せ付け下さりませ。それは此處に居りませぬ拙者の愛する婦人の名にかけて、たとへ御所望のものは、悉く蛇であつたといふメヅサ（ギリシヤ神話の女性、アテネ女神の怒りにより頭髪悉く蛇と化し、これを見る人皆石に化せりと傳へらる）の頭髪でありませうとも、また壞詰にした太陽の光線でありませうとも、必ず即座にお引き受け致しませう。』

これを聞いてマリトルネスは言つた。『武者修行さま、お孃様はさういふものは少しも欲しがつては居られませんよ。』

『そんなら、お孃様は何を欲しがつてござりますのぢやな、しとやかなお侍女よ。』とドン・キホーテは答へた。

『たゞ貴方のお美しい片手だけを。』とマリトルネスは言つた、『その手の上にお孃様は深い〳〵思ひをお洩らしになりませう。お孃様はそればかりに、名譽にもお構ひなく、この銃眼へお出でになりましたのですよ、もしや大殿様がお聞きにでもなりましたら、一番安う積つてもお孃様の耳は斬られませうよ。』

『さうなさるのを見たいもんですな、』とドン・キホーテは言つた、『しかし城主殿はさういふことを愼まれるがよろしいのぢや。さうでないと、戀に惱んだ娘御のしなやかな手足に手をかけたために、世界の父親が未だ曾て招いた例のないやうなひどい目を見られようも知れぬ。』

マリトルネスは自分の求めた通り大丈夫ドン・キホーテは手を差し出すであらうと思つたので、さうすればかうしてやらうと心を決めて、その穴から下りて廐へ行つた。そしてそこからサンチョー・パンザの驢馬の羈絆を取つて、大急ぎで元の穴のところへ歸つて來た。すると丁度ドン・キホーテは、そこに戀に惱める少女の居ることゝ思ひ込んでゐた、その格子つきの窓に屆かう爲めに、今しもロシナンテの鞍の上に身を衝つ立てたところであつた。そして彼は彼女に手を差し出しながら言つた、『姫君、この手を、いや、世の惡漢を懲すこの笞をお取りなされい。さアこの手をお取りなされい。この手にはまだ婦人の手は一つも觸つたことがありません、拙者の全身を悉く生擒にしてをりまするあの婦人の手さへも。これを貴女に差し出しますのぢやが、しかしそれは貴女に接吻させませうためではなく、たゞこ

の筋骨の組立や堅い肉の塊りや血管の太さ強さをお目にかけて、かういふ手を持つ腕の力はさぞかしであらうと推察して頂かうためでございますわい。』

『今にそれを見せて貰ひませう。』とマリトルネスは言つた。そしてその繃絆に投げ輪差を拵へて、それをドン・キホーテの手首の周りに引つかけ、穴を下りて、その一方の端を藁置部屋の戸の閂にうんときつく縛りつけた。

ドン・キホーテはその索の硬さで手首が痛くなつたので、叫んだ、『貴女様は拙者の手を撫でられるといふよりは擦つて居られるやうぢやな。さう手荒にしては下さるな、何も拙者の決心の堅いのはこの手の罪ではありません。また貴女の恨みをこんな小さい箇所でお晴らしなさるには當りません。それほどに繼する人は、かやうにひどく復讐するものではないではありませんか。』

しかしもはや誰もドン・キホーテの是等の言葉に耳傾けるものは無かつた。マリトルネスが彼を縛りつけてしまふや否や、彼女も合棒の娘も、死にさうに笑ひこけながら、彼の身をとても脫けられないやうに縛りつけたまゝ、行つてしまつたからである。

彼はその片手を穴に入れ、手首は戸の閂に縛られたまゝ

先に述べた通りロシナンテの上に立つてゐた。そしてロシナンテが何方へか少しでも身動きをしたら、片腕でぶらさがつたまゝにならうといふ大恐慌に陷つてゐたのである。そこで、ロシナンテの沈着な性質や忍耐力から推して、全一世紀の間でも動かずに立つて居られるであらうと豫期する十分な理由はあつたものゝ、ドン・キホーテは些との身動きも敢てし得なかつた。やがて身はしかと縛られ、しかも婦人たちは引つ込んでしまつたことに氣がついたので、彼はこの前に同じくこの城で馬方に化けた魔術使ひのムーア人に殿られた時のやうに、これは悉く魔術に依つてなされたことゝ思ひ初めた。そして、初めての時あれほど散々な目に逢ひながら、またもや敢てこの城内へ入り込んだ自分の分別判斷の乏しさを心の中で呪つた。一體武者修行者の掟として、或る冒險を試みて、それが巧く成し遂げられなかつた場合には、それはその冒險を自分以外の武者修行者の爲めに保留して置くべき徴なので、自分は二度とそれを試みる必要はないのであつた。魔術とは信じながらも、尙彼は脫れぬことは出來ぬかとその片腕を引いて見た。然し彼の一切の骨折も甲斐がないほどに堅く縛つてあつた、尤も彼はロシナンテが動かぬやうにと、そつと腕を引いて見た

だけではあつたが。しかし鞍の上に身を据ゑようとていかに力をつくして見ても、たゞしやんと突つ立つか、或は手を引きもぐかより外はなかつた。そこで彼が欲しいと思つたのは、どんな魔術も之には効能のないといふアマディスの剣であつた。さて又彼は自分の不運を呪つた。その次には、自分がかやうに魔術にかけられて居る間に、彼の不在の爲めに世界の受くべき損失を、誇張して考へた。何の疑ふ餘地もなく魔術のためであると彼は信じてゐたのである。次には今一度自分の愛するドゥルシネア・デル・トボソォの事を考へて見た。次には自分の重寳な家來サンチョー・パンザを呼んだ。が彼はちやうどこの時は自分の生んだ母のことを打忘れて、驢馬の荷鞍の上に大の字なりに眠りこけてゐた。その次には二賢人リルガンデオとアルクィフェ（何れも中世騎士物語中の魔術使ひ）に助けを求めた。その次には自分の親友ウルガンダに援助を求めた。そして最後に夜が明けて、彼はそこに絶望し當惑して牡牛のやうに唸つてゐた。蓋し彼は自ら魔法にかゝつてゐる以上は未來永劫この苦みが續くであらうと信じてゐたので、晝が來ても何かの救ひがあらうといふ望みは持たなかつた。そして彼がさうと堅く信じたのは、ロシナンテが決してビクとも動かぬのを見たからである。そこで彼は悪い星の廻りが過ぎ去るか、もつと偉い賢人の魔術使ひがこの魔術を自分から釋いてくれるまでは、自分も馬もこの儘の姿勢で、食ひも飲みも眠りもせずに居なければならぬと思ひ込んでゐたのである。

しかしこの結論は非常に間違つてゐた。といふのは、日の光が差すか差さぬに、身支度旅裝も立派にして、鞍の前輪には、各〻短銃を横たへて馬に乘つた四人の男が、この宿屋へやつて來た。彼等は大聲を立てゝまだ閉まつてゐた宿屋の門をドン〳〵と叩いた。それを見るや、ドン・キホーテはまだそのまゝの位置にはありながらも、歩哨として爲すべきことは忘れなかつた。そして聲高い威張つた調子で言つた、『騎士か家來か何であるか知らんが、お手前等はこの城の門を叩く權利はないのぢや。言はずも知れたこと城中の人たちはまだ眠つて居られる。さうでなくとも日の光が大地の面に冶ねく擴がるそれまでは、この砦を開け放すやうな習はしではないのぢや。遠くの方へ引き退れい、そしてあか〳〵と夜の明けるまで待つてをれい。その上でお手前たちは此處へ入れてよい者であるかどうかを檢べてやらう。』

『私らにそれ程儀式張らさうと言ふが、一體こゝがどうい

ふ城や砦ぢやと言ふのぢや？』と一人が言つた、『お前さん、亭主なら此處を開けるように言ひ付けなさいよ。私らは旅の者で、急いで居るから馬に飼糧さへやつて貰へば、直ぐ行くんぢや。』

『貴方がたは、揃者が宿屋の亭主と見えると思はれるかな？』とドン・キホーテは言つた。

『お前さんがどう見えるかは知りません、』と今一人の男は答へた、『しかしこの宿屋を城ぢやと言ふのは痴けごとぢや。』

『これは城ぢや、』とドン・キホーテは答へた、『いや、それも、この縣中第一の城ぢや。そしてこの城の中には、笏を手に持ち冠を頭に戴いた人々も居るのぢやわい。』

『そいつをあべこべにしたらよからうに。』と旅人は言つた、『頭の上には笏を置いて手には冠を持つて。ぢやが、さうとすると、こゝにはお前さんの言ふやうな冠や笏を平生に持ち歩く役者の一座が居ると見えるな。こんな小ぼけな宿屋に、しかもこんなしんとした處に、冠や笏を持つやうなお歴々の人が宿を取らうとは思はれんからな。』

『お前はまるで世間を知らんのぢや。』とドン・キホーテは答へた、『お前は騎士道の一と通りのことさへ辨へて居らん。』

しかしこの話し手の仲間どもはドン・キホーテとのこの問答が嫌になつたので、新に非常な勢ひで門を叩き始めた。そこで宿屋の亭主は、いや彼のみならず宿屋中の人々は殘らず目を覺ました。そして亭主は何方ですかと尋ねようとて起きた。丁度この時表に待つてゐる四人の乘馬のうちの一匹がロシナンテを嗅ぎに來た。ロシナンテは、悲しげに悄氣て耳を垂らして、じつと動かずに立ちながら、ひどくぐんなりしてゐる主人を支へてゐた。この馬は宛ら木で作られたやうに見えては居たけれど、やはり生き物であつたので、自分の方へ氣を寄せて來た馬に誘はれて嗅ぎ返さずには居られなかつた。しかし彼がほんの少し身動きをするや否や、ドン・キホーテは足場を失つた。そして彼は鞍から滑つたので、片腕で吊りさげられてゐなかつたら地べたへ落ちたであらう。その爲め彼は手首が切れるか腕が抜けるかと思ふ程の痛みを感じた。そして足の爪先がもうすぐ地べたに觸る位になつたので、彼にとつては愈々具合が悪くなつた。それは、もうホンの少しで足をしつかり立てられると思つたので、一生懸命に足場を得ようともがいて身を伸ばしたからであつた。それは丁度かの吊り落し（兩手を後ろに廻して吊り下げる刑

の拷問にかゝる者等が、足の「觸るか觸らぬか」の位置に吊るされると、今少しで地べたへ屆くであらうといふ氣遣ひから、もしやの希望に欺かれて、體を伸ばさうと烈しくもがくので、ます〳〵その苦痛を大きくするやうなものであつた。

第四十四章　には前代未聞の宿屋の冒險が續く。

實際ドン・キホーテの叫び聲は非常に大きかつたので、亭主は大急ぎで宿屋の門を開けて魂消て飛び出しながら、誰がそんな聲を立てたのかを見ようとて走つて來た。そして戸外に居た人々も亭主につゞいた。ちやうどこの時、この同じわめき聲で目覺まされたマリトルネスは、それと覺つて驢馬を部屋へ馳せ上り、誰にも見られずに、ドン・キホーテを吊るしてあつた羈絆を解いた。そこでドン・キホーテは亭主や旅人等の眼の屆く地面へ降りて來た。彼等はドン・キホーテに近づきながら、どうしてそんなに喚いたのかと訊ねた。彼は一言も答へないで、その腰から索を除けて立ち上りさまロシナンテに飛び乘り、腕に楯を括りつけ、槍を橫たへて、廣場を大きく一と廻りしてから跪を打たせつゝ叫びながら歸つて來た、『拐者が魔術にかけられて居つたのは當然ぢやといふ奴は、何者であらうとも、もしわがミコミコナ姫が拐者にさうせよとお許しなさるなら、さういふ奴は嘘つきぢやというて、拐者と一騎打ちをさせませうわい。』

新來の旅人等はドン・キホーテの言葉に吃驚した。しかし亭主は、彼の人柄を說明して氣狂ひだから氣にかけることはないと言つて、彼等の驚きを取り去らせた。そこで彼等は亭主に向つて、年頃十五歲ばかりで、騾馬追ひの裝をして、これ〳〵の容貌をして——とクラヽの纖人の容貌を數へあげて——さういふ若者がひよいとこの宿屋に泊つてはゐないかと訊ねた。すると、この宿屋には非常に大勢の客が泊つてゐるからお尋ねになる人には氣がつかないと、亭主は答へた。しかし旅人等の一人は判事の乘つて來た箱馬車を見とめて言つた、『あの人が隨いて來よるのは、この馬車ぢやで、疑ひなく此處にゐなさるのぢや。この中から誰か一人この門に立つてをつて、他の者は內へ捜しに行かうよ。それとも、おゝさうぢや、あの人は中庭の塀を越えて逃げるかも知れんから、誰か一人この宿屋の周りを廻る方がよからう。』『それがえゝ。』と他の者が言つた。そこで

二人が内へ入ると、こちらでは一人が門にとゞまり、いま一人は宿屋の周りを廻つた。それを見て亭主は、どういふわけでそれほどに用心深くするのか判じ兼ねた。尤も彼等が自分に聞かしたやうな人相の若者を捜すのだとは承知してゐたが。

もうこの時はあか〳〵と日が照り出してゐた。それもさうであつたし、その上ドン・キホーテの立てた騒ぎ聲の爲めに、誰も彼も目を覺まして起き上つた。クラヽとドロテアとは取り分けさうであつた。といふのは、その夜この二人はよく眠れなかつたからである、一人は自分の戀人がすぐ手近かに居るので氣が落ち着かなかつたからであり、一人はその戀人を見たいといふ好奇心からであつた。ドン・キホーテは、例の四人の者が一人として自分に氣を留めず、また自分の挑戰に答へもしなかつたので、ぷん〳〵腹を立て躍起となつて怒つてゐた。そこで、武者修行者たる者が或る事業に身を捧げて、それを成し遂げるまではどんな事業にも捲き込まれないと言葉や節義をかけて誓つて置いて、更に何か他の事業に手出しをしたり從事することは正當であるといふことが、もしや騎士道の掟の中にありでもしたら、彼はその四人を一どきに攻撃して、そして彼等を

して心ならずもそれに應じさせたであらう。しかしミコミコナ姫をその王國の玉座につかせないうちに、別の新たな冒險を始めることは、自分に似つかはしくもないしまた正しくもないであらうと考へたので、彼は逸る心を靜かに抑へて、その旅人等のする事の成り行きがどうなるかを見るために、おとなしく待つことにした。その中の一人は、例の若者が或る騾馬追ひの側に眠りこんでゐるところを捜し出した。若者は自分が見つけ出されるとは愚か、誰か自分を捜しに來てゐるとも知らずにゐたのである。

その男は若者の腕を摑んで言つた、『ドン・ルイス樣、ほんとに貴方樣は着てござる着物によう似合ひなされますな。また寢てござるこの寢床も、お母樣が貴方を育て上げなさつた驕澤さとよく釣り合うてをりますなア。』

若者は眠たい眼を擦つて、自分を摑んでゐる男を暫く見据ゑてゐたが、直ぐに自分の父の下男の一人だと見分けがついた。そこで非常に狼狽して、稍暫くの間は何と言つてよいか口も利けなかつた。その間に下男は續けて言つた、『ドン・ルイス樣、もうかうなりやどうすることもございません。たゞおとなしく言ふ事を聽いて家へ歸らつしやるばつかりぢや。お父樣の大旦那樣は、貴方がゐなさらんのを

氣に病んで御壽命も縮まるほどでござりますよ、貴方もそれがお嫌なら歸つて上げて下さいませ。』

『けれどもお父樣は、どうして私がこの道をこんな裝りで來たといふことを御承知になつたのか？』とドン・ルイスは言つた。

『貴方樣がもくろみを打ち明けなさつたちふ書生さんな、』と下男は答へた、『あの人が、貴方が行方を晦ましなさつたのでお父樣が氣落ちして居られるのを見るに見兼ねて、殘らず知らせて呉れましたわい。そこでお父樣は貴方樣を捜しに四人の男をお出しになりました。それで私らは殘らずお跡をつけて此處へ參つて居りますのぢや。まアこんなに早う、貴方樣に焦れてござるお父樣の眼の前へ、貴方樣をつれて行けるんで、私らの喜びは御推量にも及びませんわい。』

『歸るかどうかは私の勝手ぢや、でなければ神樣のお差圖通りぢや。』とドン・ルイスは答へた。

『貴方樣の御勝手でも神樣のお差圖でも、歸らつしやらん事がありますかい？　それより外にはどうも出來はしませんのぢや。』と他の下男は言つた。

二人の間のこの會話は、ドン・ルイスの側に寢てゐた騾馬追ひに洩れ聞かれた。そこで彼は起き上つて、この場の出來ごとを知らせようとて、今しも身拵へを濟ましたドン・フェルナンドーやカルデニオやその他の人々の所へ行つた。そして下男がかの若者に「ドン」といふ敬稱をつけて呼んだことや、二人の間に交はされた言葉や、また、下男がお父樣のところへ歸つて下さいといふけれど若者はそれを嫌がつてゐるといふことなどを話した。それを聞いて、またその若者が天稟稀なる美聲を有つてゐるのを既に皆々知つてゐたので、彼等はその若者の素性をもつと細かに知つて、若し彼に無理なことでも仕向けるなら加勢でもしてやりたいと非常に熱心に思つたのである。そこで彼等は、若者が尚も下男と言葉のやり取りを續けてゐるところへと急いだ。丁度この時ドロテアは身體中顫へてゐるドーニャ・クラ、をつれて部屋から出て來た。そしてドロテアはカルデニオを離れたところへ呼んで、例の歌ひ手とドーニャ・クラ、との物語を手短に話した。と同時に、カルデニオも今朝の出來事を——彼の父の下男等が彼を捜しに來てゐることを話した。しかし彼がさう話した時に聲が十分低くなかつたので、その話をドーニャ・クラ、に聞かれてしまつた。それを聞くや彼女の驚きは一方ならず、もしドロテアが大

急ぎでその身體を支へて呉れなかつたなら床の上へ倒れたであつたらう。そこでカルデニオは、この事件は自分がすつかり都合よく取り計らふやうに骨折るから、貴女がたは部屋へ歸つてお出でなさいとドロテアに言つた。二人はその求めの通りにした。ドン・ルイスを捜しに來た四人の者は、今や殘らず宿屋の中へ入つて、彼を取り巻きながら、一瞬間の猶豫もなく卽座に家へ歸つて父を安心させるやうにと言ひ聞かせて居つた。ドン・ルイスは自分の生命と名譽と心とを賭けてゐる或る事件の始末をつけないうちは、どんなことであらうとも歸らないと答へた。下男等はどうしてもかうしても彼を連れずには戻らない、否でも應でも引つ張つて行くと言ひながら、彼に迫つてゐた。

『お前たちにそりア出來まいよ、』とドン・ルイスは答へた、『私を殺して連れて行かん限りはな。それでも連れて行くなら、命のない私を連れて行くんぢや。』

この時は、もうこの宿屋にゐた大抵の人々はこの問答に氣を取られてゐた、取り分けカルデニオとドン・フェルナンドーと、その同伴者たちと、判事、牧師補、理髮師及びドン・キホーテとは。蓋しドン・キホーテは最早この城を警護して居る必要がないと考へたからである。カルデニオは、既にこの若者の物語を知つてゐるところから、彼を連れて行かうとしてゐる人々に向つて、一體どういふわけで、この若者の意に逆つてまでも連れて行かうとしてゐるのかと訊ねた。

『そのわけは、』と四人のうちの一人が言つた、『この方のお父さんの生命を助ける爲めです。そのお父さんはこの方が行方を晦ましなさつた爲めに生命が危いのです。』

それを聞いてドン・ルイスは叫んだ、『私のことを他人樣に知らす用はないのぢや。私は自由ぢや。私の氣が向けば歸るのぢや。氣の向かんものをお前等は誰も强ひるわけには行かん。』

『道理が貴方樣を强ひるんでござりますよ、』とその男は言つた、『その道理が、貴方樣には效能がなくても、私らには、かうして出向いて來た用事や、せねばならん務めをさせる力を有つてをりますのぢや。』

それを聞いて判事は『一體このことの一伍一什はどうしたといふのです。』と言つた。そこで判事を近所の人として見知つてゐたその男が答へた、『判事樣、この若樣を貴方樣は御存じでございませんか？　この方は貴方樣の御近所の息子さんで、御覽の通り身分に不似合ひな、かういふ身裝

でお父さんの家を逃げ出して來られましたのです。』

それを聞いて判事はよく〳〵氣をつけて見ると、それと見分けがついたので、若者を抱擁して言つた、『ドン・ルイスさん、これは何といふ馬鹿げたことですか。またどうしたわけで、貴方の身分に不似合ひなこんな裝で、こんな方面へやつて來られるやうなことになつたのですぞ？』

若者の眼には涙が浮んだ。そして判事には一と言も答へることは出來なかつた。判事は四人の下男等に向つて、萬事うまく片付けてやらうから心配せぬやうにと言つた。それからドン・ルイスの手を取つて、人々から少し離れたところへ連れて行つて、どうしてこゝへ來たのかと訊ねた。

しかし彼がかう訊ねてゐた時、宿屋の入口に大きな喚き聲が聞えた。その譯は、此處に夜を明かした二人の爺が、誰も彼も、例の四人の男の何事で來たのかを知らうとて氣を取られてゐるのを見て、自分等の拂ふべき物を拂はずに行かうといふ惡心を起したからであつた。しかし他人のことよりも自分のことを餘計に心配するこゝの亭主は、彼等が門を出ようとするところを見つけて勘定を催促した。そして彼等の不正直を餘りに口汚なく罵つたので、とう〳〵鐵拳の返禮を受けるまで彼等を怒らせた。二人は非常な勢ひで殴り出したので、この可哀さうな亭主は已むなく泣き出して助けを呼び求めたのである。お上さんも娘も、この加勢にはドン・キホーテほど手の明いてゐる者はないと見たので、娘は彼に言つた、『お侍樣、どうぞ後生でございますから、私の可哀さうなお父さんを助けて下さい。二人の惡者がお父さんを目茶々々に殴つて居りますから。』

それに對して、ドン・キホーテはねつちり〳〵落ち着き拂つて答へた、『お美しい少女子よ、時も時とてそのお頼みには生憎でございますのぢや。といふわけは、拙者が誓ひを立てた一つの冒險に目出度い結末をつけぬうちは、外の冒險にこの身を委ねるわけに行きませんのぢや。しかし折角のお頼みぢやで、かう爲さつたら宜しからうと考へますわい、走つて行つて貴女の父君へ、「この戰には精一杯その立場を踏みこたへて、どういふことがあらうとも決して負けてはなりませぬ」と仰有るのです。その間に拙者はミコミコナ姫樣のところへ行つて、困つて居られるその父君に助太刀してもよいといふお許しを願ひませうわい。そしてもしその許しがあつたなら、拙者が父君を救うて上げるによつて、まア御安心なさるがよからう。』

『まア魂消た！』と、傍に立つてゐたマリトルネスは叫ん

だ、『お前さんがその許しを受けなさらんうちに、私の旦那はあの世へ行つてしまふぢやらうに。』

『お嬢さん、まア拙者のいふその許しを受けさせて下さりませ。』とドン・キホーテは答へた、『その許しさへ受くれば、父君があの世に行つてござらうとも大したことぢやありませんわい。何故といへば、地獄が一生懸命に拒んでも、拙者がそこから救ひ出して上げやうからぢや。それでなくとも、せめて父君をあの世へ送つた奴等に手ひどく復讐をして上げませうから、貴女がたは十二分に満足なさらうぞよ。』そしてそれ以上は何事も言はずに、ドロテアの前に行つて跪いて、騎士らしい武者修行者らしい口調で、どうぞ姫君様この城の城主が今や悲しむべき危地に陥つて居りますから、彼に助太刀をして救ふやうお許しを賜りたうございますと願つた。姫君は情深くもそれを許し給うた。そこで彼は即座に楯を片腕に掻い込み、剣を抜き放つて宿屋の門へと急いだ。其處ではかの二人の客がまたも亭主をぶん殴つてゐたのである。しかしその場所へ近寄ると、彼は少し手前で立ち止つた。マリトルネスとお上さんとが、自分等の主人なり良人なりに何故早く加勢して呉れないかと言つたけれども、彼はじつと立つてゐた。

『こんな従士風情の人間どもに向つて剣を抜くのは法に適はんので、かうためらうて居りますのぢや。しかし私の従士のサンチョーを呼んで下され。この防禦や復讐はあれの勤める仕事ぢやでの。』とドン・キホーテは言つた。

宿屋の入口の事件はさういふ風で、つまり拳固打ちや平手打ちが非常に活潑に交換されて、その果ては、亭主のひどい損失となり、マリトルネスやお上さんや娘やの憤りとなるに至つた。この女等はドン・キホーテの意氣地なさや、また自分等の主人であり良人であり父である人の受けてゐる侮辱やを見て火のやうに怒つた。しかし亭主のことはこのまゝにして置かう。彼は必ず自分を助けて呉れる人を見つけるであらう。もしそれが出來なければ、自分の力に及びもせぬことをしようと思つた報いに、散々虐められても、黙つて居らせることにしよう。我々は五十歩後へ退つて、かの判事に對してドン・ルイスが何と答へたかを檢べよう。我々はあの判事が、何故そんな卑しい身裝をして徒歩でやつて來たかと、その理由をひそかに訊ねるところで話を切つたのであつた。

この間ひに對して若者は、何か非常な悲みに胸を痛めてゐると見えるやうに手を絞つて、瀧なす涙を流しつゝ答へ

た、『貴方、私の申し上げますことはたゞこれだけです——ふとした縁で、また御近所に居りましたせゐで、お懐しい貴方のお嬢様を、ドーニャ・クララ様を、初めて見ましたその時から、私の心の君と致しました。私のまことの主人なるお父様、もしや貴方のお心にも別にお差し障りがございませんなら、今日只今からお嬢様を私の妻に申し受けませう。私はお嬢様ゆゑに父の家を棄て、お嬢様ゆゑにかうして身を窶して、あの方がたとひ何處へ行かれうとも、矢が的を目がけ水夫が明けの明星を目がけるやうに、私は從いて參りました。お嬢様は時々遠いところから私の眼に一杯涙のあるのを見られて、それで推量なされたかも知れませんが、それ以上は深く私の心を知つては居られません。貴方様、貴方は私の兩親の財産や家柄や、また私がたつた獨りの後取りといふことも、とうに御存じでございませう。もしこれだけで私を何不足ない仕合せ者にして下さるだけの謂れがあるとお考へ下さいますなら、直ぐに貴方の息子として私をお受け下さいませ。私の父がもしや自分ひとりの違つた考へに昏まされて、私が自分の爲めに求めましたこの幸福に異議を申しませうとも、物事を作り變へて行く力は、人間の心よりも、時』が優つて居りますから。』

かう言つて、戀に惱む若者は口を噤んだ。判事はこれを聞くと、ドン・ルイスが心の祕密を白狀したしとやかさ賢さにも、また自分自身が立ち至つたこの立場にも、びつくりもし驚きもし當惑もしたのである。そしてこんな出し抜けの思ひがけない事には、どうしてよいか分らなかつた。それ故その答へとして彼がドン・ルイスへ與へたのは、たゞ差し當りのところは先づ安心して居るがよい。そして今日は連れて歸らんやうに下男どもへ相談するから、とだけであつた、それはつまり、雙方に取つて一番良い方法を熟慮する暇を作らうためであつた。ドン・ルイスは强く判事の手を接吻した。いな、判事の胸はおろか大理石像の胸をも感動させるやうな風情にその手を涙で洗つた。判事は抜け目のない人であつたから、この結婚はいかに自分の爲めに得であるかを疾くに感づいてゐた。尤も彼は、ドン・ルイスの父親が自分の息子の爲めには有爵の者を求めてゐるのを知つて居たので、出來ることなら、その父親の同意を得てから事をきめる方がよいと思つて居た。

もうこの時は、例の客人等は亭主と仲直りをしてゐた。つまり客人等は、脅文句でよりも却つてドン・キホーテの說諭やなだめ言葉によつて、亭主に催促されただけのものを

拂つたのである。そしてドン・ルイスの下男等は、自分等の主人と判事との相談の纏まりの結局を待ち受けてゐた。折しもあれ、決して眠ることのない悪魔は、いつぞやドン・キホーテにマムブリノーの兜を分捕られ、そしてサンチョー・パンザには驢馬の馬飾りを取り換へられた、あの床屋を、丁度この時この宿屋へ來るやうなことに立ち至らしめたのである。驢馬を厩へひいて行くと、その床屋は、サンチョー・パンザが何かと荷鞍の手入れをしてゐるのを見とめた。そしてその馬飾りを見るや否やそれを知つたので、床屋は勇を鼓してサンチョーに跳びかゝりさま叫んだ、『やい、この盗人め、もう逃がさんぞ！　手前の盗んだ己の金盥も荷鞍も馬飾りも皆返しやがれ。』

サンチョーはかく思ひがけなくも喰つてかゝられ、罵詈の言葉を浴びせかけられたので、片手ではその荷鞍を摑み、片手ではその床屋を殴つて歯から血を出させた。しかし床屋は自分の抑へたその荷鞍を、直ぐさま手離すことはしなかつた。それどころか彼は非常な喚き聲をあげたので、宿屋中の人々は殘らずこの騒ぎや喧嘩の譯を知らうとて馳せ集まつた。『まア〳〵ほんとに聞いて下さい！』と床屋は叫んだ、『この盗人め、追ひ剝ぎめは、私が自分の物を取り返さうとすると私を殺さうとしますのぢや。』

『嘘をつけ、』とサンチョーは言つた、『私は追ひ剝ぎぢやないぞ。立派に戰をして私の旦那のドン・キホーテ樣がかういふ分捕物を手に入れさつしやれたのぢやわい。』

この時ドン・キホーテも側に立つてゐたが、自分の從士が攻めるにも守るにも勇敢なのを見て非常に喜んだ。そしてこの時以來、彼はサンチョーを元氣者と見なし、そして騎士道の位階を與へても恥しくないと確信するところから、その機會の來次第に、彼に騎士の稱號を授與してやらうと心のうちに固く決した。

この言葉のやり取りの進むうちに、床屋はこんなことも言つた、『旦那樣がた、この荷鞍が私のぢやちふことは丁度私が神樣に壽命を借りてをるやうに確かでござりますのぢや。そして私は自分でこいつを生みでもした程によう知つてをりますし、またそこの厩に居る私の驢馬も私に嘘はつかせませんのぢや。まア試して見なされ、さうした上で、もしそれが私の驢馬の沓のやうに、ちやんと合はなんだら、私を惡黨と言ふがよい。その上に、こいつを盗まれた同じ日に、まだ一度も使うたことのない、何時賣つても一クラウンはする新しい眞鍮の金盥も一つ盗られましたのぢや。』

それを聞くとドン・キホーテも答へずには居られなかつた。そこで二人の間に口を挿んで、彼等を引き分け、事實が落着するまで人の眼につくところへ置かうとて、その荷鞍を地上に置いて、そして言つた、この立派な従士が、昔も今もこの後もマムブリノーの兜であるものを、金盥ぢやといふのが間違ひであることは、皆さんもはつきりと明白にお認めになりませうな。あれは晴れの戰で拙者がこの男から分捕りまして、さてこそ拙者自ら法に適うた正當な所有品の持主となりましたのぢや。この荷鞍は拙者の騾ばり知つたことぢやない。がしかしこのことに就いて申したいのは、拙者の従士サンチョーが、自分の馬を飾らうために、この負けた腰抜け男の駿馬の馬飾りを剝ぎ取りたいと拙者に許可を願うたといふことです。拙者はそれを許しました。そこでサンチョーはそれを取りました。そしてそれを馬飾りから騾馬の荷鞍に變へたといふことに就いては、拙者は普通の説明より出來ません。それは卽ち、武者修行の冒險の間にはかういふ取り變へは屢々生ずるといふことです。この事を一切確かめる爲めに、これサンチョー、走つて行つて、その男が金盥ぢやと言うてをるあの兜をこゝへ持つて來い。』

『あゝ、旦那樣、』とサンチョーは言つた、『もし私らの申し分の證據が貴方樣の言はつしやるだけなら、この男の馬飾りが騾馬の荷鞍でござりますやうに、やつぱりあのマムブリノーの兜も金盥でござりますぞよ。』

『私の言ひ付け通りにせい、』とドン・キホーテは言つた、『この城内の何も彼もが魔術にかゝつて居るといふことは、よもあるまいて。』

サンチョーはその金盥のあるところへ急いで行つて、それを持つて來た。ドン・キホーテはそれを見て、手に取り上げて言つた、『あの従士は、これを拙者の言ふ通りの兜ではない金盥ぢやと、どの顔で言ひ張れたものか、皆樣よう見て下されい。そして拙者は自ら従ふ騎士道にかけて誓ひますが、これはこの男から分捕りました兜で、何の附け足しも取りのけもせぬ、そつくりそのまゝの物ですわい。』

『そりや全くその通りでござります、』とサンチョーは言つた、『私の旦那はこれを分捕つてから今日まで、これを被つて戰をなさつたのは、あの鎖に繋かれとつた不仕合せ者を逃がしてやんなさつた時でござりましたよ。あの時は大變石つぶてが飛んで來たから、もしこの金盥兜のお蔭がなかつたら、旦那樣は御無事ぢやなかつたでござりましよ。』

第四十五章　ではマムブリノーの兜と荷鞍との疑はしい問題が遂に解決する。尚眞實眞劍に起つたその他の冒險のことども。

『旦那樣がた、さアこの旦那がたの言はつしやることアどうでござりますのぢや、』と件の床屋は言つた、『この人らはこれを金盥ぢやなうて兜ぢやと言ひ張らうとまでさつしやるが。』

『さうぢやないと言ふ者は誰彼の用捨はせん、』とドン・キホーテは言つた、『もしそれが騎士であらうなら、その僞りを言ふことを揃者が思ひ知らせてやらうし、またそれが從士ならば百千倍も思ひ知らせてやらうわい。』

先程から此處に居りもし、またドン・キホーテの氣質もすつかり呑み込んでゐる我々の方の理髮師は、ドン・キホーテの妄想に後援して、一つ皆の嬲みにしてやらうと考へついた。そこでもう一人の床屋に向つて言つた、『床屋さん、かな、私もやつぱりお前さんと同じ職業誰かは知りませんが、をしとる者で、鑑札を受けて店を出してからもう二十年から上になつて、理髮職の道具は一つ殘らず隅から隅までよう承知しとるものなのぢや。それにまた若い頃しばらく兵隊もしとつたから、兜や圓兜や庇のある鐵帽や、それからその他兵隊の仕事に入り用な品物、つまり兵隊の武器ぢやが、さういふものもやつぱり知つて居りますのぢや。そこで私は立派な考へは取つて置いて何時も着實な判斷に從ふのぢやが——今私らの眼の前でこの旦那さんの手に持つてござる品物は、床屋の金盥でないどころぢやない、まるでそんな物とは黑と白とほどに、嘘と眞ほどにかけ離れて居りますわい。それにまた、これは兜は兜ぢやが、滿足な兜ぢやありませんよ。』

『全くさうぢや、』とドン・キホーテは言つた、『その半分が、卽ち頰當が缺けて居りますのぢや。』

自分の友人の理髮師の心組を見て取つた牧師補は、『全く本當ですよ。』と言つた。それにカルデニオもドン・フェルナンドーもその伴侶の人々も、また判事さへも、もし彼の考へがドン・ルイスの事件で充たされてゐなかつたなら、この冗談を仕上げる爲めに加勢したであつたらう。しかし判事はこんな冗談には、少しゝか、いな少しも注意を拂はなかつた程、眞面目な問題に沒頭してゐたのである。

そこで彼等のおもちやにされてゐる床屋は叫んだ、『まア

こりア魂消てしまふ！　こんな身分のあるお仲間で、これを金盥ぢやない兜ぢやと、どうしてまアよくも言はれたものぢや！　ほんとに、こりア、どんな賢い大學者でも皆魂消てしまふやうなことでございますわい。まアようございます。もしこの金盥が兜なら、それぢやまアこの旦那の言はつしやるやうにこの荷鞍も馬の馬飾りの筈ぢやな。』

『拙者には荷鞍のやうに見えるのぢや、』とドン・キホーテは言つた、『しかし今も言うたやうに、その問題には拙者は與からんのぢや。』

『それが荷鞍であるか馬飾りであるかに就いては、たゞドン・キホーテ殿が言はれる通りです。かういふ騎士道の事柄については、この紳士たちも私も殘らずこの方のお考へに從ふのですからな。』と牧師補は言つた。

『實は皆さん、』とドン・キホーテは言つた、『拙者が宿泊する度に二度ともこの城内では不思議なことが餘り澤山起りますので、此處でのことは何事にかゝはらず確とした返答はどうも拙者には憚られますわい。この城内で行はれることは殘らず魔術によつて行はれると信じますからぢや。初めの時は、こゝに居る魔術使ひのムーア人がしたゝか拙者を苦しめたし、サンチョーとてもその手下の者の爲め善くは扱はれませなんだのぢや。そして昨夜は大方二時の間もこの腕で拙者は吊り下げられてゐたのぢやが、どうして又何故にそんな災難に出逢ふのか拙者には分りません。そこで唯今も、拙者としてこんな逢ひ易い問題に進んで意見を持ち出しては、輕率な斷案を下す恐れがありませう。これが兜ではなうて金盥ぢやとの説に向つては、すでに拙者が答へを與へました。しかし、これが荷鞍か馬飾りかといふ問題については、拙者は確とした意見を出すのは憚つて、ただ皆さんの優れた御判斷に任せませうわい。恐らく皆さん方は拙者のやうに騎士の位を有つてはござるまいから、此處の魔術も貴方がたには效能がありますまい。それで貴方がたの能力は邪魔をうけぬので、この城内の諸物は皆さんに本當に眞實にありのまゝに見えて、拙者の眼に映るやうではありますまいぞ。』

これを聞いてドン・フェルナンドーは言つた、『そりアもうその通りですよ。ドン・キホーテ殿はまことに賢くも言はれました。この事柄は私らがきめます。そこで私らはこれを成るべく確かな寄りどころによつて決めたいので、皆さんの祕密投票を願ひまして、その結果をすつかり明瞭に公表しませう。』

ドン・キホーテの氣質を知つてゐる人々にとつては、これは全く非常に面白いことであつた。しかしそれを些とも知らない人々に取つては、世の中にこれほどの馬鹿げたことはないと思はれた。特にドン・ルイスや、その四人の下男どもや、また偶然この宿屋に來てゐた三人の旅客などには、その旅客等は實は「神聖救濟組合」の巡邏であつたのだが、いかにもさう思はれた。誰よりも呆氣にとられた者は、自分の本當の眼の前で、自分の金盥がマムブリノーの兜に變つたのを目撃し、そして自分の荷鞍に違ひないものが、立派な馬飾りに成るのを見た床屋であつた。ドン・フェルナンドーが、一人々々に投票を集めながら、かくまで爭ひの的になつてゐるこの寶は、荷鞍であるか馬飾りであるか銘々のお考へを言つて下さいと囁きつゝ歩くのを見て、皆な吹き出した。しかし彼は、ドン・キホーテを知つてゐる人々の投票を集めてしまつてから、聲高く言つた、『なお前さん、實を言へばこんなに數多い人たちの考へを集めるには私も疲れたのぢや。といふのは、私が知りたいと思ふことを訊ねて廻るに、皆な、この品を馬に使ふ馬飾り而も駿馬に使ふものぢやと言はずに驢馬の荷鞍と言ふのは不條理ぢやと、私に言はぬ人とてはなかつたからぢや。そこでお前さんもそれに從はねばならん。つまりお前さんやお前さんの驢馬は何と言うても、これは馬飾りであつて荷鞍ではないのぢや。そしてこの事件についてお前さんの申し立てや證據は殆んど役に立たぬのぢや。』

『貴方がた皆さんが間違うてござらんなら、私は天へは行けいでもよござります。』と可哀さうな床屋は言つた、『これが私にや馬飾りぢやない荷鞍と見えるやうに、私の魂も神樣の眼にうつりますやうに。ぢやが「捺は王樣の好きなやうになる」——私アもう何も申しません。私アほんとに醉うてはをらん、私ア罪業のせるでこそないが、お精進しとりますからの。』

床屋のこの愚痴はドン・キホーテの痴けた事どもに劣らぬ慰みを與へたのである。ドン・キホーテは言つた、『かうなれば最早銘々自分のものを、また神樣に授かつたものを取るより外はないのぢや、どうか聖徒ペテロ（イエスの十二弟子の長）樣が祝福を下さるやうに。』

しかし四人の下男のうちの一人は言つた、『まアこりやよく〳〵巧んだ冗談でなければ、こゝにござるかういふ賢い、いや、さう見える方々が、これを金盥でないといひ、それを荷鞍でないと言うて何處までも言ひ張らつしやるち

ふことは、どうも私の腑に落ち兼ねますよ。けれどもそれをこの人たちが言ひ張りなさるところから見ると、どうしてもまざ〳〵見えすいとる實物や本當の事に逆うたことを頑張らつしやるこの裏にや、何か隠し事があるとしきや判斷されませんのぢや。何故というて』――と此處で彼は率直な聲言を呶鳴り立てゝ――『私ア誓つて言ひますが、世の中の殘らずの人間が來ても、これを床屋の金盥ぢやない、それを牡驢馬の荷鞍ぢやないと私に思ひ込ませることは出來ませんからの。』

『そりや手もなく牝驢馬の荷鞍にもなりませうがな。』と牧師補は言つた。

『どちでも同じ事ですよ。』とその下男は言つた、『私アそこを言ふんぢやありませんわい。たゞ貴方樣がたの言はつしやるやうに、これは荷鞍であるかないかちふのですよ。』

この言ひ爭ひに耳傾けてゐた新來の「神聖救濟組合」の巡邏の一人は、これを聞くと、立腹と癇癪とを抑へ兼ねて叫んだ、『これが荷鞍ぢやといふことは私の親父は私の親父といふやうに確かなことぢや。これをさうぢやないと言うたり言はうとしたりする者は皆な醉つぱらひぢや。』

『お手前は土百姓のやうに嘘をつく人ぢや。』とドン・キホーテは言ひ返した。そしていつも手から離したことのない例の槍を振り上げて、相手の頭を狙つて恐ろしい一擊を加へたので、もしその巡邏が身をかはさなかつたら、長々と蹈反り返つたであつたらう。槍は地べたに當つて切れ〳〵に碎けた。そしてその餘の巡邏等は、自分等の仲間が打ちかゝられたのを見るや、大聲を揚げて、「神聖救濟組合」の助けを呼んだ。その組合員であつた宿屋の亭主は、即座にその職の杖と自分の劍とを取りに走つて行つて、自分の仲間の側に立ち並んだ。ドン・ルイスの下男等は、この混雜に乘じて主人が逃げ出しはせぬかと、その周りに集まつた。家中上を下への騷ぎを見て、床屋は今一度その荷鞍に手をかけた。とサンチョーも同じことをやつた。ドン・キホーテは劍を抜いて巡邏等に打つてかゝつた。ドン・ルイスはその下男等に向つて、自分は一人きりにして置いてドン・キホーテやその加勢をしてをるドン・フェルナンドーやカルデニオを助けに行け、と叫び出した。牧師補は聲の限りに叫んでゐるし、お上さんは黃色な聲を出すし、その娘はわあわあと泣き、マリトルネスはめそ〳〵と泣き、ドロテアは仰天し、ルシンダは吃驚してしまひ、ドーニャ・クララは氣絶した。床屋はサンチョーを毆りつけ、サンチョーは床屋を叩

きつけた。ドン・ルイスは自分を逃がさぬやうに捕へて置かうとて無遠慮にも腕を摑まうとした一人の下男に鐵拳を一つ見舞つたので、その男の齒は血まみれになつた。判事は彼の味方をした。ドン・フェルナンドーは、巡邏の一人を投げ倒して思ふ存分ひつ叩いてゐた。亭主はまたもや大聲をあげて「神聖救濟組合」の加勢を呼んでゐた。そこでこの宿屋中は悉くこれ叫喚、叱咤、號叫、混雜、戰慄、驚駭、災害、劍撃ち、拳打ち、棒打ち、足蹴、流血の巷となつた。そしてこの混雜と騒ぎとどさくさ紛れの眞つ最中に、ドン・キホーテは自らアグラマンテ「オルランドーに出るアフリカの王、回教徒の諸王侯の主將としてパリ包圍中に會議の陣營の騒擾の眞つ唯中に身を跳り込ませて居るかのやうに思つたのである。そこでこの宿屋中を雷鳴の如く搖り動かす大音聲で叫んだ、『皆の者控へろッ、皆な劍を鞘に收めるのぢや。生命を惜しいと思ふ者は皆靜まつて拙者の言ふことを聞くがよい！』

この大音聲で皆な靜かになつたので、彼は言葉を續けた、『貴方がた、この城には魔術がかゝつてをるし、一聯隊かそこらの惡魔どもが住んでをると、拙者が申さなんだことですか？　その證據には、貴方がた御自身の眼で、これ見られい、アグラマンテの陣營の騒動が此處へやつて來て、拙者等の眞つ唯中に移つたではありませんか。その人々が、此處では劍の爲めに、彼處では馬の爲めに、彼方では軍旗の爲めに、此方では兜の爲めに、鬪うてをるのを御覽なされい。拙者等は殘らず戰うてをりますのぢや、しかも互に心を知り合はずに戰うて居るのぢや。そこで、さア、貴方、判事殿、それから、貴方、牧師殿、お出でなさい。一方はアグラマンテ王を、一方はソブリノー王を代表して、拙者等を和睦させて下されい。實に、實に、拙者等のやうな優れた人々が、かうも夥しく、些細な種から互に殺し合ふといふことは嘆かはしい次第でありますからな。』

その巡邏どもは、ドン・キホーテの話し風も解せなかつたし、またドン・フェルナンドーやカルデニオやその仲間の人人やに散々虐められたので、仲々鎭まりさうにもなかつた。しかし床屋は、その鬚髯も荷鞍も摑み合ひの爲めに更に痛んでゐたので、鎭まつた。サンチョーは忠良な僕らしく、その主人の些細な言葉にも從つた。それからドン・ルイスの四人の下男どもは、靜かにしてゐないでも得るところは始んどないと見たので、じつと靜かにしてゐた。亭主ひとりが、この宿屋に來るたびに騒ぎを起すこの氣狂ひの無禮を罰せねばならぬと言つて聽かなかつた。しかし遂に

差し當りこの大騒動はやんだ。唯ドン・キホーテの想像の中には、世の終りの審判の日まで、その荷鞍は馬飾りとして、金盥は兜として、またこの宿屋は城として殘つてゐたのである。

判事や牧師補の說諭で今や凡ての人々が平和になり仲好くなつたので、ドン・ルイスの下男等は、直ぐさま一緒に歸りませうと、またもや主人にせがみ始めた。彼が下男等とこの事を言ひ合うてゐる間に、判事は事のなり行きやドン・ルイスが自分に言つたことなどを打ち明けて、ドン・フェルナンドー、カルデニオ及び牧師補に、この場合、自分の取るべき方法に就いて相談したのである。その結果遂に、ドン・フェルナンドーがドン・ルイスの下男等に自分の身分を打ち明けて、ドン・ルイスを自分と共にアンダルシアまで連れて行き、其處なる自分の兄の侯爵の家でそれ相當の待遇を以て客分にする、といふことに話が纏まつた。つまりかうしなければ、ドン・ルイスは今のところ、たとへ身を切れ切れに引き裂かれても父の家には歸らぬであらうとは、彼の決心から極めて容易に見て取ることが出來たからである。ドン・フェルナンドーの身分やドン・ルイスの決心を知つたので、そこでその四人の下男等は、そのうちの三人が事の次第を報告する爲めに父親の許へ歸り行き、あとの一人がドン・ルイスに附き添うてゐて、三人が再び歸つて來るまでか、或は父親の命令の知れるまでは、その側を離れないやうにするといふことに話が定まつた。かういふ風に、アグラマンテの權威やソブリノー王の智慧によつて、このごたくさした爭論もすつかり片づいた。しかし和合の敵、平和の憎み手は、自分が輕んぜられ馬鹿にされたと感じ、そしてかくも骨の折れる紛亂の中へ卷き込まれた後で如何にも得るところの無かつたのを見て、今一度新たに喧嘩や騷動を惹き起すことにしてやらうと決心したのである。

それはかういふ風にして起つた　その巡邏どもは、自分等の相手になつてゐる人々の身分を聞いたので、この喧嘩の結果はどうあらうとも、どうせ自分等の不利益になりさうだと考へつゝ仲直りをして、その取つ組み合ひから身を引いたのであつた。しかしそのうちの一人は、卽ちドン・フェルナンドーに散々毆られて蹴られた男は、自分が或る犯罪者を捕へる爲めに持つてゐた多くの逮捕令狀の中に、ドン・キホーテに對するものゝあつたことを思ひついた。サンチョーがいかにも尤もな理由から氣遣つた通り、「神聖救濟組合」は、ドン・キホーテが船奴隷を逃がしてやつた爲め

に彼の逮捕方を命じてゐたのであつた。そこで若しやと疑ひながら、その巡邏はドン・キホーテの人相とその令状とが一致するかを十分に確めようと思つた。そして自分の懐から一通の書附を取り出すと、偶然にもそれは自分の捜してゐた書附であつた。そこで入念にその書附に讀み耽りながら、彼は手早く讀める男ではなかつたので、一言拾ひ讀みしてはドン・キホーテに眼を据ゑつゝ、逮捕令状に記してあるものと彼の人相とを較べて行つた。そして彼こそ全く疑ひもなくそれに記してある人間だと見破つた。彼はそれを十分確めるや否や、その書附を疊んでしまひ、左の手にその令状を持ちながら、右の手ではドン・キホーテの襟元を呼吸もつけぬほどにむんづと摑んだ。そして大聲に叫んだ、

『神聖救濟組合の御用だツ！　この盜賊を逮捕しろと命じてあるこの令状を讀まれたらば、誰でも私が本氣でかうすることが分りませう。』

牧師補がその令状を取つて見ると、その巡邏の言つたのは本當であつたし、またドン・キホーテの人相と合つてもゐた。ドン・キホーテの方では、この土百姓づらにこんなに手荒く扱はれるのを見て、憤怒の絶頂に逆せ上げ、激怒の爲めにありだけの節々をがた〳〵と鳴らせながら、兩手に全力を注いでその巡邏の咽喉を締めつけたので、もしも仲間の助けがなかつたなら、ドン・キホーテが手を緩めぬうちに彼の息は切れたであつたらう。自分の仲間を助けねばならぬ義務のあつた宿屋の亭主は、即座にその加勢をした。お上さんは、自分の良人が新たな喧嘩にかゝり合ふのを見て、新たにその聲を張り上げた。そしてその聲音は直ちにマリトルネスや娘やに取り次がれて、或は天に向ひ或は其處に居合せる人々に向つて助けを呼んだ。サンチョーはこの有樣を見て叫んだ、『やれまア私の旦那樣がこの城にや魔法があると言はつしやるのは全く本當ぢや。こゝでは一時間と無事には暮らされんものなア。』

ドン・フェルナンドーはその巡邏とドン・キホーテの間へ割つて入つた。そして一方は相手の上着の襟を、片方は相手の咽喉を、おの〳〵摑んでゐた互の手を緩めさせて、雙方を納得させた。しかし、それに拘らず巡邏どもはその科人を請求し、人々に助力を呼び、そして科人を縛つて渡せと言つて聽かなかつた。それはつまり王への勤めや「神聖救濟組合」への勤めとしてさうせねばならなかつたので、本道や脇道を荒すこの盜賊追剝召し捕りの實をあげる爲めに、彼等はまたもや王や「神聖救濟組合」の名を並べて加勢

援助を求めたのである。

ドン・キホーテは此等の言葉を聞くと微笑して、落ちつきすまして言つた、『こら、賤しい生れ損ねの蟲けらども。貴樣等は、あの縛られた者等に自由を與へ、四人を釋し、不幸の者を助け、倒れた者を起し、求めてをる者に惠んでやつた人に向うて、大道の盜賊呼ばはりを致すのか？　この忌々しい奴ども、貴樣等は卑しい惡智慧のお蔭で、武者修行に含まれてをる德も知らせて貰へねば、また貴樣等が、武者修行者の本人は勿論のこと、その影法師をも敬はぬ爲めに犯す罪業や無智をも教へて貰へぬのぢや！　やいこら、役人ぢやない盜人どもの一隊よ、「神聖救濟組合」の鑑札有つた追剝どもよ。一體拇指のやうな騎士を召し捕る爲めの逮捕狀に印を捺した馬鹿者は何奴ぢや？　武者修行者は一切の法律に縛られず、武者修行者の法律は卽ち劍であり、その法典は武勇であり、その勅令は己が本心であるといふことを知らぬ奴は一體何者ぢや？　重ねて言ふが、武者修行者が一旦騎士の位階を授けられて、骨の折れる騎士道の職に身を獻げた曉に與へられる特權や免除は、如何なる貴族の特許狀も與ふることの出來ぬやうなものであるといふことを、知らぬほどの馬鹿者は一體何奴ぢや？　全體武者修行者が今まで人頭稅や普通稅や王妃の化粧稅や王の割當稅や通行稅や渡し錢を拂うた例があるか？　武者修行者に着物を拵へてやつて拂ひを受けた仕立屋があるか？　自分の城中に武者修行者を泊らせて宿賃を拂はせた城主があるか？　武者修行者を食卓に招かなんだ王があるか？　武者修行者に戀をしかけて、全くそのすき好むまゝに身を任さなんだ處女があるか？　そして最後に、萬一敵對して來た時に、たつた一本の手で四百人の「神聖救濟組合」の巡邏に四百の鐵拳を見舞ふほど勇敢でない武者修行者が、昔も今もこの後とても世にあらうか？』

第四十六章　「神聖救濟組合」の巡邏等の著しき冒險の終局、並びに我が優れたる騎士ドン・キホーテの大勇猛のことども。

ドン・キホーテがかういふ調子で喋舌つてゐる間に、一方では牧師補が頻りと骨を折つて、その行爲や言葉で認められる通り彼が全く正氣を失つてゐることや、またたとひ彼を捕縛して連れて行つたところで、氣違ひのことであるので、どうせ釋さねばならぬであらうから、最早この事はこれ

より以上に逍窮するには及ぶまいと言つて、巡邏どもを宥めたのである。それに對してその逮捕狀を携へてゐる者が答へるには、自分等は何もドン・キホーテの狂氣のことは詮議だてしてゐるのではない、たゞ上役の命令を執行するまでであるから、一旦引致して行つて、若し此方の氣に向いたら三百度でも放免しようと言つた。

『さうではありませうが、』と牧師補は言つた、『貴方がたは今度はこの人を引致してはいけません。また私の考ではその人も引致されることを肯きますまい。』

要するに牧師補は非常に言葉を盡し、ドン・キホーテは非常に氣違ひめいたことをしてのけたので、もしそれでこの巡邏どもが彼の正氣の無いことを認めなかつたら、彼等こそ彼にまさつた氣違ひであつたらう。そこで彼等はまづ我慢をするに越したことはないと考へた。そして今尚鋭い言葉のやりとりを續けてゐる、例の床屋とサンチョー・パンザとの仲裁役をさへすることになつた。とう〳〵彼等は、公儀の役人として、たとひ雙方を完全に滿足させることは出來なかつたまでも、或る程度まで滿足させた仲裁によつて、この問題を落着させたのである。つまり二人は荷鞍だけを取り換へて、腹帶や面勒には及ばなかつた。そしてマムブリノーの兜に關しては、牧師補がこつそりと、ドン・キホーテに知れないやうに、その金盥の代として八リールを拂つたのである。そこで床屋は今日以降未來永劫最早この上の請求は致さず候アーメン、と悉皆辨濟の證書を作つた。最も重要で且つ最も眞面目であつたこの二つの爭ひが落着したので、後には唯ドン・ルイスの下男どもを納得させることだけが殘つた。それは詰り、そのうちの三人を家へ歸して、あとの一人を主人と共に殘して置いて、ドン・フェルナンドが連れて行かうと思つてゐるところへ一緒に行かせることであつた。好運や僥倖は、この宿屋の戀人たちや勇士たちを祝福して、すでに困難を解決し障碍を除去し始めてゐたので、氣を變へずに、よろづのことに喜んで目出度い結末を齎したのであつた。つまり下男等はドン・ルイスの望み通りにすることに同意した。これはドーニャ・クラリに非常な悦びを與へた。丁度その時彼女の顏を見た人は、誰もその心の喜びを見とめぬわけには行かないのであつた。ゾライダは自分の見るすべてのものを十分に會得する事は出來なかつたものゝ、いろ〳〵の顏色を見まもつて推測しては、その譯は解らぬながらに沈んだり陽氣になつたりした。殊に自分が何時も眼を離さずに魂を打ちこんでゐる懷かし

いスペイン人の顔色に就いては、取り分けさうであつた。牧師補が床屋に與へた心づけや賠償は、宿屋の亭主の注意を脱れなかつた。そこで彼は、ドン・キホーテの勘定と、その他葡萄酒の嚢の損害高や葡萄酒の損耗を請求して、これを一文缺けず拂つて貰はぬうちは、ロシナンテもサンチョの驢馬も決して放さぬと嚴談しかけた。牧師補は萬事を穩かに片づけ、ドン・フェルナンドーがそれを拂つた。尤も判事もやはりその勘定を拂はうとまさに言ひ出すところであつた。そこで凡てが平和に穩かになり、この宿屋はもはやドン・キホーテが言つたやうなアグラマンテ陣營の騷擾には似もよらず、却つてオクタヴィアス（アウガスタス大帝のこと即ちローマの第一の帝王）時代の平和靜穩に歸したのである。これは殘らず、牧師補の大熱誠と雄辯と、それからドン・フェルナンドーの比類なき義俠に當然感謝すべきであるとは、一般の意見であつた。

ドン・キホーテは今やあらゆる喧嘩から、自分自身のからも家來のからも、全く身を脱し得たので、既に始めてゐる旅を續けて、特に自分に賴まれてゐる大冒險を片づけるのが上分別であると考へた。そこでこの大なる決心を以てドロテアの前に行つて跪いた。が彼女は彼が立ち上らないうちは、一語も口を利かせなかつた。そこでその命に從つて立ち上り、そして言つた、『美しい姫君よ、「精鬪は好運の母なり」とはありふれた諺でござりまして、また談判する者の熱誠によつて危ない事件に上首尾の結末をもたらすことは、よく重大な事件の場合に實地に示されてをります。しかしこの眞理が一番明らかに示されるのは戰ひに越したものはございません。つまり戰ひにおきましては敏速活潑は敵の謀略の機先を制して、敵が自ら防禦を備へぬうちに勝利を得ますのぢや。いと高くやんごとなき姫君よ、拙者がかやうに申し上げますのは、拙者は最早この上はこの城の逗留も無益でござりませうし、それにまた唯今のところはまだそれと分りませんが、かうして居ればどういふことが拙者等の不爲めになるやらも計られません。貴女樣の仇敵の巨人が、祕密に入念に間諜を入れて、拙者があれを討ち滅ぼしに行くところであるといふことを聞き知らぬとも限りませんからです。あれがもし左樣な機會を得ましたなら、得たり賢しと、何處か難攻不落の城か要塞に立て籠るべきでございませう。さうなれば、如何に一生懸命に不撓不屈のこの腕力を盡しましても、效果は餘りありますまい。そこで姫君、今も申しますやうに拙者等は迅速に先方の計畫に先んじませう。そこで直ぐさま出發してその幸運を手

に入れませう。つまり拙者と貴女の仇敵との出會が遲れるばかりに、貴女がその幸運を心のまゝに存分にお受けなさる日を遲らすことになりますから。』

ドン・キホーテはこれだけ言ふと黙りこんで、美しい姫君の答へを靜かに待ち構へた。姫君はいとおごそかな威嚴を以て、ドン・キホーテの物言ひ振りに釣り合ふやうな風で次のやうに答へた、

『騎士殿、孤兒や貧乏人を助けるのを生れながらの義務とする善良な騎士のやうに、この苦境に在る私に扶けをお與へ下さる貴方の御熱誠にはお禮を申します。神樣はどうか貴方の願望も私のをも適へて下さいますやうに。さうすれば貴方樣は、この世には恩を知る婦人があるとお分りになりませうから。私の發足のことに就いては、私として貴方樣のお考へより別に何もありませんから、すぐに致しても構ひません、全く貴方のお氣の向いたやうに私を導いて下さりませ。一旦貴方樣に一身の保護を委ねて、貴方樣の手に領土回復のことをお任せしました上からは、貴方樣のお考へから割り出されたことに異議を申し立てようなどと思うてはなりません。』

『おゝ、それでは誓つて、』とドン・キホーテは言つた、『苟くも婦人が自ら卑下せらるゝ場合には、拙者は必ずその方の身をもり立てゝ御先祖よりの玉座に卽かせて上げずには置きますまい。「危險は遲滯の內に在り」といふありふれた諺も、拙者に旅立てよと促しますから、卽座に發足致しませう。そして拙者を威嚇し恐怖せしめ得るものは、天も未だ造り出さず、地獄も未だ見たことがございませぬ。こらサンチョー、ロシナンテに鞍を置け。そしてお前の驢馬もこの姫君の御乘馬も用意せい。拙者等はこゝの城主にもこの紳士がたにもお別れして、今の今こゝを發足するのぢや。』

この間始終側に立つてゐたサンチョーは、頭を振りながら言つた、『あゝ！　旦那樣、旦那樣、皆さまがたの御免を蒙つて申しますとな、この村にや聞いたこともない惡戲がござりますぞい。』

『何ぢや、阿呆め。私の美名を傷け得るやうな惡戲が、どこの村にも、また世界のどこの市にもあらうかい？』とドン・キホーテは言つた。

『そりや立派な御家來として私が是非申し上げにやならんことぢやし、また立派な下男ならきつと自分の主人へ申し上げにやならんことでござりますがな、もし貴方樣が怒らつしやるなら私はこの舌を抑へて申し上げずに置きましよ

わい。』とサンチョーは言つた。

『お前の言ひたい事を言ふがよい、』とドン・キホーテは言つた、『尤もその言ひ草が拙者に恐がらせんやうなことならばぢやよ。といふ譯はの、お前は恐がる時がお前らしいのぢやが、拙者は恐がらん時が拙者らしいのぢやからの。』

『眞實誓言、さういふこつちやござりません。』とサンチョーは言つた、『たゞそれはな、御自分からミコミコナ大王國の女王樣ぢやというてござるそのお姫樣はな、まるでさうぢやないちふことが、確かな勘かんところぢやと私は思ひますわい。何故と言うて、このお人がもし自分で言はつしやるやうなお人なら、こゝらにござる誰かさんと、行きつく先きでいつもかも、鼻を擦り合せるやうなことはなさるまいがな。』

ドロテアはサンチョーの言葉で赫くなつた。といふのは實は、彼女の良人のドン・フェルナンドーが時々他人の見てゐない時を覗つては、彼女の脣から自らかち得た戀の報いを收めてゐたからである。サンチョーはこれを見て、かういふ惡戯をするのは大國の女王といふよりは娼婦にふさはしいと思つたのであつた。しかしドロテアはかう言はれても何と答へも出來かねて、或ひは答へたくなかつたので、サンチョーの言ふに任せたので、彼は續けた、『旦那樣、私がこれを申し上げますわけはな、私らが脇路や大道を旅して行つて辛い苦しい月日を過ごした後で、もしや今この宿屋で自分ひとりで樂しんでをる人が、私らの骨折りの果實を收穫れてしまふやうなら、何も私が慌てゝロシナンテに鞍を置いたり驢馬に鞍褥をかけたり、婦人乘の馬の用意したりすることはござりませんからの。私らはじつとして居るがようござりましよわい。そして性惡阿魔にはめい〳〵の絲を紡がせて、私らは御馳走くひに行きましよかい。』

あはれ、ドン・キホーテがその從士のかゝる傍若無人の言ひ草を聞いた時の、彼の憤怒はどうであつたらう！　激怒のため舌はもつれて發音は不明瞭になり、眼は炎々たる火と輝いて、彼は叫んだ、『橫着な土百姓め。無禮な、づうづうしい、馬鹿な、口の惡い、口ぎたない、禮儀を知らぬ蔭口きゝの惡口吐きめ！　貴樣はこの拙者の前で、またこの名だたる婦人がたの前で、よう〳〵さういふことが言へたもんぢや？　貴樣はその濁つた頭の中にようも〳〵そのやうな賤しい恥知らずな考へを宿したな？　拙者の前からさがり居れ、この生れながらの怪物めッ、嘘の置き小屋、僞りの蓄へ所、惡業の物置き、惡口作者、譫言の觸れ太鼓、至尊

の御身を敬はぬ無禮ものめッ！　失せ居れ、二度と拙者の前に姿を見せたらどういふ目に遇ふか分らんぞ。』かう言ひながら眉を皺め、頰をふくらませ、あたりを睨み廻して、自分の胸にせき上げて來た激怒をあらゆる方法で示しつゝ、右の足で烈しく地面を踏みつけた。サンチョーはこの言葉や猛烈な身振りによつて恐れて縮み上つてしまつた。もしその刹那地臺に穴があいてその身を飲み込んでくれたなら、嬉しかつたかも知れぬ程に。それで彼方へ向いて、この怒つてゐる主人の前から逃げて行きたいとばかり思つた。

しかし、もはやドン・キホーテの氣質を非常によく會得してゐた機轉の利いたドロテアは、彼の怒りを宥めようとて言つた、『憂ひ顏の騎士樣、貴方のよい御家來がつまらぬ事を言はれたとて、さうお怒りなさいますな。この人とて大方何の理由もないことは申しますまいし、それにこの人は正氣もありキリスト教徒の本心も有つて居りますから、誰に對してもない事を言ひふらすやうなことはありますまい。それ故私たちは何の躊躇もなくかう信じてよろしいでせう、つまり貴方樣の仰有るやうに、この城中での出來事はすべて魔術の力で終始して居りますから、サンチョーもその惡魔の力によつて、自ら見たと申すことを、私の婦德を傷けるやうなことを、見たのでございませう。』

それを聞いてドン・キホーテは叫んだ、『なる程御尤もぢや、貴女樣は圖星をお指しなされましたわい。そりやきつとサンチョーといふこの罪人の眼の前に何か卑しい幻想が起つて、それで魔術の力に依らねばとても見ることの出來ぬものをこの男に見せたのでござりませう。此奴のおとなしい惡氣のないところから考へますと、この男が誰に對してぐも僞りを言ひかけるやうなことの出來ぬのは拙者も十分會得して居りますのぢや。』

『全くそれに違ひない、』とドン・フェルナンドーは言つた、『ドン・キホーテ殿、さういふわけなら、この男がそんな幻想で正氣を失はんうちにお赦しなさつて、そして貴方のお慈悲の懷へ取り返しておやりなさらねばいけませんな。』

ドン・キホーテは直ぐさまサンチョーを赦した。そこで牧師補がサンチョーを連れに行くと、彼は非常におとなしく歸つて來て、自分の主人の前に跪づいてその手を求めた。すると主人はその手を差し出して彼に接吻を許し、彼を祝福しつゝ言つた、『のうサンチョーよ、この城中での出來事は殘らず魔術の力によるのぢやと、拙者が幾度も言うて聞かせたことを、お前もよう信じてをらうがの。』

『へい、私も信じて居りますわい、』とサンチョは言つた、『尤もあの毛布の一件は別ですよ。ありや當り前に本當に起つて來ましたのぢや。』

『さう思うてはならぬぞ、』とドン・キホーテは言つた、『何故といふに、若しさうであつたら拙者はあの時、いや今でも、お前の仇敵を取つてやれたであらうぞ。しかし拙者はあの時にせよ今にせよ、お前を虐めた奴に復讐をしてやることも出來ねば、又その相手も見つからんのぢや。』

人々は、皆なこの毛布事件の何であるかを知りたがつた。そこで亭主はサンチョの胴上げを詳しく話した。それを聞いて人々は少からず笑つた。そしてそれを聞いてサンチョは、もし主人があれも凡て魔術であつたと今一度彼に確かめなかつたならば、少からず恥しい思ひをしたであらう。それに拘らずサンチョは、自分は自分の主人が信じて主張して居るやうな正體のない妖怪變化に依つてゞなく、血あり肉ある人間に依つて毛布上げにされたのだと思つてゐるので、その事を、何等の迷妄もつき纏はない明白簡單な事實では無いと思ひ込むことが出來るほどに、愚直ではなかつたのである。

この名高い一團の人々は、はやこの宿屋で二日を暮した。そこで彼等も出發すべき時だと思つたので、ミコミコナ女王の復位といふ口實で、ドロテアやドン・フェルナンドにドン・キホーテの村まで從いて行く勞を取らすことなく、牧師補と理髪師とが言ひ出した通り、この二人で彼をその村へつれ歸ることにして、そして牧師補がこの氣違ひを自宅に監禁することの出來るやうな一策を工夫したのである。そこでその策略を實行する爲めに、ふと前を通りかかつた牛車の人足を賴んで、次のやうな風にしてドン・キホーテを運ばせた。卽ちドン・キホーテの身が樂に入れるだけの大きさの、木柵づきの檻みたやうなものを拵へた。それから牧師補の差圖や忠告に依つて、ドン・フェルナンドやその伴侶やドン・ルイスの下男どもや、それに「神聖救濟組合」の巡邏とも、及び宿屋の亭主は、銘々その顏を蔽うて、いろ〳〵の風に變裝して、ドン・キホーテがこの城内で既に見た人々とは全く違つて見えるやうに作つた。それが出來あがると、一同は今しもドン・キホーテが先の騒動の疲れを休めて眠つてゐる部屋へ默つて入り込んだ。そして彼が、そんなことの起らうとは夢にも知らずに、すや〳〵と眠つてゐるところへ押し寄せて、彼を引つ捕へ、その手も足もきり〳〵とふん縛つた。そこで彼がびつくりして目を覺

ました時には、動くことも出來ないで、唯自分の前にある異樣な姿を見て驚き惑ふばかりであつた。玆に於て彼はその狂つた心の迷ひから、限りなく自分の前に拵へ上げた幻想に、すぐ沒頭してしまつた。それらの姿は殘らずこの魔術のかゝつた城の內の怪物で、自分は動くこともどうすることも出來ないので、言ふまでもなく魔術にかけられてゐると考へたのである。この策略の拵へ手である牧師補の豫期してゐたことが、そつくりそのまゝに起つた譯である。そこに居合せた凡ての人々の中では、サンチョーひとりが正氣でもあり、また自分の本當の姿をもして居つた。彼も主人の病氣にかぶれんばかりであつたけれども、それらの變裝した人々の誰であるかを、感づくことは出來た。しかしこの不意の襲撃や、自分の主人の生捕りの結果が、どうなるかを見るまでは、敢てその脣を開かなかつた。また主人も、自分の災難の結果を待つて見ようとて一語も發しなかつた。その結末はつまり、彼等は檻の中へ彼の身體を運び入れて中に閉ぢ込め、そして容易にこゝ開けられぬやうに、しつかりと柵を釘づけにしたのである。それから彼等はそれを肩の上にかついで部屋を出ると、その途端に、荷鞍の床屋でない今ひとりの理髮師が、出し得る限りの嚴かな聲で言ふのが聞えた——『あゝ、憂ひ顏の騎士よ、汝は今のこの囚はれの境涯を歎くまいぞよ。それは汝の大なる心を籠めし冒險の成就の日を、いよ〳〵早からしむる爲めに必要な事である。その冒險は荒れ廻るマンチャ村の牡獅子とトボソォの白鳩とが手をつなぎ合せて、その尊大な頸をへりくだらせてやさしい婚姻の軛に入るれば、直ちに成就するであらうぞよ。その不思議なる結合により、その勇ましい父親の鉤爪にも匹敵するほどの牡の兒が生れ出でて、世の光ともならうぞよ。そしてこの事は、逃ぐるニムフを追ふ者（アポローの事、太陽を指す）が、その持ち前の速き歩みによつて、天の星座を二廻りとせぬうちに起るであらうぞ。而してまた汝、劍を片脇に佩び、顏に鬚髯を生やし、嗅ぐに鼻ある者のうちにて、いとも氣高き忠良なる從士よ。汝は、今汝の眼前にて、この「武者修行の花」が連れ去られようとも氣を落す勿れ、歎く勿れ。もし宇宙の造り主の御意に叶はゞ、やがて間もなく汝は自から思ひかけなき出世をなして、汝の良き主人が立てし契約は必ず汝を欺くまいぞよ。予は賢人メンティロニアナ（Mentiroso〈嘘を言ふ〉から作られた名前）の權威にかけて、汝に受け合ふのぢや、卽ち汝の給金は、その時が來れば分るであらうが、必ず汝に支拂はれようぞ。それ故この魔術にかけられてをる勇壯なる

騎士の足跡に從いて行け。それは汝等兩人の爲めに前世から定められてをる宿命へ汝を導く旅路ぢやわい。あゝ、もはや我はこの上告ぐることを許されてをらぬによつて、おさらばぢや。我はこれより住みなれしところへ歸り行かう。』

この豫言を述べ終る時に、彼はその聲を高く張り上げて、それから段々と低くして行つたので、これを冗談だと知つてゐた人々でさへも、つひ本氣に聞くやうになつたのであつた。

ドン・キホーテはこの豫言を聞いて心を安んじた。蓋し彼は、忽ちその意味を隈なく會得して、自分は屹度、自分の愛するドゥルシネア・デル・トボソと神聖な正當な婚姻によつて結びつけられ、その婦人の祝福された母胎から、牡の兒即ち自分の子息が生れ出て、ラ・マンチャの永遠の榮えとなるといふことを約束されたものと思つたからである。そしてこれを悉く確かに信じこんだので、聲を張り上げて深い吐息を吐いて叫んだ、『あゝ、拙者にかくも心嬉しきことを豫言なされた貴方はどういふ方かは存ぜぬが、どうか拙者の利害を見戍つて下さるその魔術使ひの賢人へ、拙者に代つて、唯今拙者に向つてなされた左樣な悦ばしい比類なき約束を果たさぬうちに、現在かうしてつれて行かれるこの囚はれの境涯で我身を滅ぼさせては下さらぬやうにと、願うて下されたい。その約束を果たしてさへ下されたら、拙者はこの囚はれの苦痛を榮譽と思ひ、縛られてをるこの鎖をも樂しと思ひ、また拙者を横たはらせてをるこの寢床を、辛い戰場ではなうて嬉しい婚禮の寢床と見ませうわい。また拙者の從士サンチョー・パンザを慰めることに就いては、拙者はこの男が順境にも逆境にも拙者をふり棄てぬその正直律義に信賴しますのぢや。といふのは、もしやこの男か拙者か何方かの不仕合せによつて、拙者が約束したあの島をも、またそれと同等の別品をも授け得ぬやうなことにならうとも、せめてその給金だけには間違ひがないからです。拙者は既に拵へてをる拙者の遺言狀の中に、この男に拂ふべき金額を明記して居りますからの。尤もそれはこの男の數多い忠勤によつて勘定したわけでなく、たゞ拙者の勝手元の都合によりましたのぢや。』

サンチョーは非常に恭しく頭を下げて、主人の兩手を一時に接吻した。その手は一緒に縛られてあつたので、片手だけを接吻することは出來なかつたのである。それがすむと、怪物等はその檻を肩の上に持上げて、それを牛車の上に据ゑ付けた。

第四十七章　ラ・マンチャのドン・キホーテが魔術をかけられて伴れ行かれる異様の有様、及びその他注目に價する出來事ども。

ドン・キホーテは、さういふ風にして檻に入れられて荷車の上にのせられるのを見て言つた、『拙者はこれまで武者修行者たちの嚴肅な傳記を數多く讀んだが、かういふ風にして、またこんなのろい遲鈍な動物の歩きさうな、そんなのろくさい足どりで、魔術をかけられた武者修行者が運び去られたといふことは、まだ一度も讀みもせねば見も聞きもしたことはないのぢや。一體武者修行者を運び去る時は、いつも眞つ黒なむら雲に包むか、火の戰車に載せるか、或ひはまたヒッポグリフ（半馬半鷲の怪獸）やそれに似よつた獸にのせて、恐ろしい速さで宙を飛んで伴れて行くのぢや。然るにかういふ風に牛車に乘せて拙者を伴れて行くとは！　あゝ拙者には譯がわからぬ！　しかし多分今の世の騎士道や魔術は、往昔のものとは違うたやりかたをするのであらう。そしてまた、この拙者は世界の新しい騎士であつて、すでに忘られてをる武者修行の道を復活させる開祖ぢやから、彼奴等も種類のちがつた魔術や妖術をかけられたものを伴れ去る新規の方法などを、新たに作り出したことかも知れぬ。これサンチョー、お前は一體この事柄をどう思ふのぢや？』

『私はどう考へてよいやら分りませんわい。』とサンチョーは答へた、『貴方樣のやうに武者修行の書物を讀んどりませんでな。けれどそれはさうとして、御遠慮なしに申しますとな、眞實誓言この私らと一緒にをる怪物どもは、全く天主教信者ぢやござりませんわい。』

『天主教信者！』とドン・キホーテは言つた、『まア何の事ぢや。こんな變化の形をしてやつて來て、こんなことをして、拙者をこんな目に逢はせるやうな惡魔どもが、どうして天主教信者であらうぞ？　それをお前が確かめたければ、彼奴らに觸つて撫でて見るがよい。さうすれば彼奴らの身體は唯の空氣で、見えはしても手觸りのないといふことが分らうわい。』

『ほんとに、旦那樣、』とサンチョーは答へた、『私はもう觸つて見ましたよ。するとそら、そこに急いで行くあの惡魔は手答へのある身體を有つてをつて、話に聞いてをつた惡魔の身體とはまるで違うた別の正體を有つとりますよ。どう

見てもこの人たちは皆な銘々硫黄の匂ぢやの他の悪い匂ぢやのを有つてをりますでな。ところがこの一人は一里離れとつても琥珀の香ひがしますわい。』サンチョーはドン・フェルナンドーのことをかう話した。その人は高貴の紳士らしく、サンチョーの言つた通り良い香料を用ゐてゐた。

『そんなことで吃驚すまいぞよ、のう、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『つまりこの悪魔どもは狡猾なのぢや。彼奴らがたとへ身に香料を附けて居るとしても、彼奴ら自身はもと〳〵靈氣ぢやから、何の匂ひも有たんのぢや。またよしんば彼奴らが何かの匂ひを有つて居るにせよ、嫌なむつとする匂ひの外にや、好い薫りなど有つ事は出來ぬのぢや。それはの、彼奴らは何處へ行つても身に地獄を持ち運んで行く、それでその苦惱から助かりやうがない。それにまた好い香氣は樂しみと喜びを與へるものぢやから、彼奴らが好い匂ひのする筈はないのぢや。そこでお前の言うてをるその悪魔が、琥珀の匂ひを持つとるやうに思はれるなら、それはお前が感ちがひをしとるか、それともそれが悪魔でないと思はせるやうに、お前を晦まさうとしとるのぢや。』

主從の間に交された會話はこんなものであつた。そこでドン・フェルナンドーとカルデニオとは、サンチョーが既に或る點まで見破つてゐる自分等のたくらみを、すつかり見破つてしまひはせぬかと氣遣はしくなつたので、取り急いで出發しようと決心した。そして亭主をそつと呼んで、ロシナンテに鞍を置き、サンチョーの驢馬に荷鞍を置くやうに命じた。亭主は非常に手敏こくそれをした。その間に牧師補は例の巡邏たちに若干の日當を拂つて、自分の村まで伴なはせるやうに手筈をきめた。カルデニオはロシナンテの鞍輪の片側に楯を、片側には金盥を吊るした。そしてサンチョーに、自分の驢馬に乘つてロシナンテの轡綱を執るやうにと手眞似で命じた。また荷車の兩側には鐵砲を持つた巡邏を二人づつ附けた。しかしその荷車が動き出さぬうちに、主婦と娘とマリトルネスとは、ドン・キホーテの不幸を悲しんで泣く風をしながら、彼に別れを告げようとして跳び出して來た。そこでドン・キホーテはこの女どもに向つて言つた、『やさしい御婦人がた、かういふ災難はすべて拙者の勤める職分に從ふ人々の運命ぢやから、お泣きなさるな。かういふことは名譽の乏しい騎士には決してふりかゝらんものですよ、世間の人はさういふ人たちを物の數ともしませんからの。勇敢な騎士たちはその美德や勇氣の爲に、

卑劣の手段で優れた者の破滅を計るやうな數多の王侯や騎士たちに妬まれるので、かういふ目に逢ひますのぢや。それに拘らず美德はそれ自ら力を有つが故に、魔術の開祖のゾロアステス（拜火教の開祖のことであらう）が知つてをる限りの魔術を盡しても、美德は試めされる毎に凱旋して、ちやうど太陽の天に於けるが如く美德は地上にその光を注ぎませう。お美しい御婦人がた、もしや拙者の粗匆から何かにつけて貴女がたの御機嫌を損ねたことがありましたら、何卒お許し下されい。拙者は何人に對しても、知りながら故意と左樣なことをしたことはござりません。そしてどうか、意地の惡い魔術使ひのために拙者が陷いれられて居るこの囚はれから、拙者を救うて下さるやう、神へ祈つて下されい。拙者がこの囚はれから免かれましたら、この城内で貴女がたから受けました御恩寵は、しかと心に留め置いて、それ相應に感謝も記憶もまた御報恩も致したいものでござりますわい。』

城内の婦人たちとドン・キホーテとの間にこんなことが言ひ換はされてゐる間に、牧師補と理髮師とは、ドン・フェルナンドーやその伴侶の者等にも、大尉やその弟にも、それから今や殘らず幸福になつてゐる婦人たちにも、取り分けドロテアとルシンダにも別れを告げた。彼等は皆々互に抱擁し、以後は音信を通じようと約束した。そしてドン・フェルナンドーは牧師補に手紙の宛て先を敎へて、自分に取つてはそれを聞くより面白いことは外にないから、是非ドン・キホーテの身の上を知らせよと言つた。そして自分の方でも、ゾライダの受洗やドン・ルイスの事件や、ルシンダの歸家など、凡て牧師補が知りたがつてゐると思はれることどもは、殘らず書き送ると約束した。牧師補は間違ひなくその求めに從ふ旨を約束した。そこで二人は今一度抱擁してその誓ひを新にした。

亭主は牧師補のところへ來て、これはいつぞや『無分別なる好奇心』といふ小說の入つてゐた提鞄の裏覆ひの中から見出されたからと言ひながら、何かの書き物を手渡しした。そしてこれの持ち主も未だに取りに來ないから、皆殘らず持つてお出でになつても宜しうございますと言つた。つまり亭主には讀めないので、自分にはそんなものは用がなかつたからである。牧師補は禮を言つてその書き物を開いた。するとその草稿の見出しに『小說リンコネテとコルタディロー』といふ言葉を見た。これによつてそれは小說であると分つたし、それに『無分別なる好奇心』の小說もな

か〳〵面白かつたので、これもやはりさうであらうと思ひこんだ。といふのは、二つながら大方同じ作者のものであつたからである。そこで牧師補はいつかの折に讀まうと思つて、その草稿をしまひ込んだ。やがて彼も彼の友人の理髪師も、二人ともドン・キホーテに見破られまい爲めに顏を隱して、何れも騾馬に乘つた。そしてその荷車の背後に從いて出發した。進行の順序はかうであつた、眞先きには荷車が牛牽きに導かれて行き、その兩側には既に述べた如く鐵砲を持つた「神聖救濟組合」の巡邏が附き、その次ぎには驢馬に乘つて、ロシナンテの韁綱を執つたサンチョー・パンザが續き、そして最後には、牧師補と理髪師とが各逞しい騾馬に乘つて、前述の如く顏を包んで、嚴めしいもの〳〵しい樣子をして、牡牛ののろい足取りに合ふやうに各歩みを計つて進んだのである。ドン・キホーテはその兩手を縛られ兩足を攫げて、宛ら肉身の人ではなく石像ででもあるかの如く、默つて辛抱强く柵に倚りかゝりながら、じつと檻の中に坐つてゐた。かやうにしてそろ〳〵と默つて二リーグほども進んだかと思ふ頃、とある谷間に着いた。牛牽きは此處が誰むにも牛に草を飼ふにも恰好な場所だと思つたので、さう牧師補に言つた。しかし理髪師は、すぐ向うに見える丘陵の向う側には、今休まうと言つてゐる谷間よりももつと草の多いよい谷間のあることを知つてゐるので、今少し前進した方がよいと言ひ出した。この申し出が採用されて、彼等は旅を續けた。

丁度その時牧師補がふと振り返つて見ると、後の方から旅裝のよく整つた六七人の騎馬の人々がやつて來るのであつた。その人たちは、のろくさい念入りの牛の歩みでなく、役僧の騾馬に乘つて、もう一リーグと隔たらぬところに見えてゐる宿屋へ行つて、早く晝の休みをしたいと思ふ人らしく、急いでゐたので直ぐさま追ひついた。その足の早い旅人等はそろ〳〵と近づいて來た。丁寧な挨拶が交された。そしてその新來の人々の一人は、それは實際トレドーの役僧で、またその一行の主人であつたが、この牛車や巡邏やサンチョーやロシナンテや、牧師補や理髪師や、取り分け檻の中に囚はれてゐるドン・キホーテなどの、この規律正しい行列を見るや、何故こんなにして、この人を護送してゐるのかと訊ねずには居られなかつた。尤もその巡邏どもの徽章によつて、これは屹度手に終へぬ追剝か、それとも「神聖救濟組合」の權限で罰される、何か他の犯罪人かに相違ないと、すでに判斷してはゐたのである。彼にさう訊ねかけ

られた一人の巡邏は答へた、『かうして護送される譯はどうか、この御本人にお聞き下さい。私らは存じません。』

ドン・キホーテはこの會話を洩れ聞いて言つた、『もし貴方、貴方はもしや騎士道のことに通じてはござるまいか？もしさうならば、拙者は身の不運をお話ししませう。もしさうでなくば、骨折つてそんなことをお話し申しても役には立ちません。』しかしこの時牧師補と理髪師とは、この旅人がドン・キホーテと話しをしてゐるのを見て、自分等の策略を看破られないやうな風に答へる爲めに、乘り出して來た。役僧はドン・キホーテに答へて言つた、『いや實は私はヴィラルパンドー有名な神學の「論理の要素」紀元一五七年に出版よりも騎士道の書物のことを餘計に知つてをりますよ。そこで、それだけでよかつたら、どうぞ安心して貴方のお話を聞かせて下さい。』

『やれ〳〵さうでしたか、』とドン・キホーテは言つた、『さういふことなら喜んでお話ししませうが、實は拙者は惡い魔術使ひの嫉みや欺瞞から、この檻の中へ魔術で縛られてをりますのぢや。つまり美德は善人に愛されるよりも惡人に阻害されることが多いのですからの。拙者は武者修行者ですが、しかしその名を名譽の記錄に傳へて不朽にするに足らぬと思はれるやうな、さういふ武者修行者ではありません。嫉妬がいかに息巻けばとて、またペルシャの產んだ殘らずの魔術師や、インドの生んだ婆羅門敎徒や、エティオピアの生んだジムノソフィスト インドの瞑想哲學者の一團を指す 等が、いかに息巻けばとて、それに拘らず、その名を永久不滅の殿堂に納めて、未來永劫の模範典型とし、それに依つて武者修行者たちに、汝等もし武道の譽れの最高絶頂に達したくば、こゝを踏まねばならぬぞと、その足跡を示し得るやうな、さういふ武者修行者のうちの一人でござりますのぢや。』

『ラ・マンチャのドン・キホーテ殿の言はれることは本當ですよ、』と牧師補は言つた、『この方は御自分の罪過からでなく、たゞ美德を忌み憎むものどもの姦惡の爲めに、かうして檻の中に魔術をかけられて居られますのぢや。貴方、或ひはその名前だけはお聞き及びがあるかも知りませんが、これこそは「憂ひ顏の騎士」殿で、その勇ましい事蹟や偉大なる手柄は、嫉みがそれを湮滅させ惡意がそれを隱さうとして一切の努力を拂ふにも拘らず、永久の不滅の大理石像に留められるでありませう。』

この囚はれ人と自由な人とが、共にさういふ調子で話すのを聞くと、役僧は膽を潰してまさに自ら十字を切らうと

した。そして自分の眼前に在る物事の見分けがつかなかつた。その供の人々も皆同じく驚いてしまつた。

丁度この時、その會話を聞かうとて近くに來てゐたサンチョー・パンザは、萬事を明白にする爲めに言つた、『ちよつと旦那樣がた、私の言ふことがお氣に入るか入らんか知らんが、本當の事實はかうでござります、私の旦那のドン・キホーテ樣は私のお袋ほどに魔術にかゝつてゐなさるのぢや。旦那さんは全くの正氣でゐなされますよ。旦那さんは食べもなされば飲みもなさる。また昨日檻に入れられる前になさつたやうに、他の人と同じに用足しもなされます。さうすると、この方が魔術にかけられてゐなさると私に思はせようとなさるのは、どういふつもりでござりますぞい？　魔術にかゝつた人は食ひも眠りも話しもせんといふことは、いろ〳〵の人が言うて居りましたぞい。ぢやが私の旦那樣は貴方がたが止めさへなさらにや、三十人の代言人よりも餘計に喋舌りなさるぢやろ。』そして今度は牧師補に向き直つて叫んだ、『あゝ、牧師樣、牧師樣、私に貴方が分らんと思うとんなさるかい？　貴方はこの新規の魔術の魂膽を私が感づいて居らんと思ひなさるかい？　ふん、そんなら申しますがな、貴方がどんなに顏を包みなさらうが、私はちやんと知つとりますのぢや。また貴方がどれほど手管を隱しなさらうと、私は感づいとりますのぢや。どうせ姫みの憂るところぢや德は住めません、また慾張りの居るところにや施しはござりません。何と忌々しいこつちや！　貴方さんさへなけりや、私の旦那樣は今頃はミコミコナ姫樣と結婚して、そして私は安う積つても伯爵にやなつとりますにな。私の旦那の「憂ひ顏の騎士」樣の御親切や私の大した御奉公から考へて見ると、それより下のことはありさうに思はれませんでな。ぢやが私は今になつて、こゝらの人の言ふ、運勢の車は水車の車よりも早う廻り、昨日上に居つた者は今日は下になるといふことが、本當ぢやと分りましたわい。私は女房や子供に氣の毒でなりませんよ。何故なら、あいつらはこの親父がどこかの島か國の太守か總督になつて歸つて來るのを待つてをる、それも無理もないことぢやが、そこへ親父はたゞの馬丁で歸つて來るのぢや。牧師樣、私はたゞ貴方さんが私の旦那に訐くなされたことを御自分でよう胸に手を當てゝ考へて貰はうとてかう申しましたのぢや。そして用心なされんと、あの世で神樣は、こんな風に貴方が私の旦那を囚人になされたことを數へ上げて、私の旦那のドン・キホーテ樣がかうして閉ぢ籠められ

てござる爲めに、人助けの功德をせずに打棄つて置きなさる罰も、みんな貴方がお受けなさりませうぞよ。』

それを聞いて理髮師は叫んだ、『その燈はそこでちよん切れよ！　サンチョー、それぢやお前もやつぱり旦那同樣の氣違ひぢやな？　ほんに、お前も少し御主人の氣風や騎士道を承けついで居るから、旦那のお伴をして檻の中へ入つて、旦那のやうに魔術をかけて貰ふことになるぢやらうよ。お前が旦那の約束を眞に受けて釣られたのも、またそれほどほしがつて居る島のことがお前の頭へ入り込んだのも、ほんとに間の悪い時ぢやつたよ。』

『私は誰にも釣られもや居りませんぞい、』とサンチョーは答へた、『たとへ王樣にぢやとて、釣られたりするやうな人間ぢやござりませんわい。私は貧乏はしとりますが、生れつきのキリスト信者で、誰にも借りはござりませんのぢや。私が島をほしがるなら、他の人はもつと悪いものを欲しがつとる。私らは皆自分の働きでどんなものにもなる。私は男ぢやから、島の總督はおろか法王樣にでもなれんことはないのぢや。それに私の旦那樣は、誰に分けて呉れてよいか分らん程澤山獲物があらうからの。床屋の親方、言ふことに氣を附けなされ。何もかも褒貶するやうには行かんからの。ペテロとペテロとの間にもちつとは違ひがありますからの。私らはお互によう知つとるので、私にやごまかしの骰子ころは利き目があるまいで、私はかう言ひますのぢや。私の旦那が魔術にかゝつたといふことは神樣が本當のところを知つてござる。そのまゝに放つて置きなされ。搔き立てると却つて藪蛇になりますぞよ。』

理髮師は自分と牧師補とで苦心慘憺して隱さうと努めてゐることを、サンチョーの明つ放しの物言ひぶりで覺かれはせぬかと恐れたので、彼に返答しようとはしなかつた。そして牧師補も同樣の氣遣ひから、その役僧に少し前へ乘り出してくれるやうに、さうすればこの檻の中の人の祕密も亦その他さま〴〵の面白いことも話してきかせるからと言つた。役僧は同意した。そしてその從者等と共に先に進んで、牧師補から聞かされるドン・キホーテの性質や經歷や狂氣や癖などの物語に熱心に耳傾けた。牧師補はドン・キホーテの狂氣の始めの起りを手短に述べて、この檻に入れられるまでの武者修行の話の一伍一什と、彼を自宅へ連れて行つてその狂氣を療養する方法を講じようとしてゐる自分等の計畫なども加へて物語つた。役僧も從者もこの不思議なドン・キホーテの身の上話を聞いて又更に吃驚した。そ

して其の話が終ると、役僧は言つた、『牧師さん、實は私も所謂騎士道の書物は國家に害をなすものと考へてゐますのぢや。私もつまらぬ惡趣味から印刷されてをるあゝいふ書物は、大抵殘らず初めの部分だけは讀みましたがな、一册でも始めから終りまで通讀することはとても我慢が出來ませなんたよ、といふのは、あゝいふ書物は殘らず大抵同じことのやうに思はれますのでな。そしてあの本とこの本とで何程も違うちや居りませんし、どれもこれも同じですからな。私の考へでは、こんな種類の書き物は、ミレタスの物語（ギリシャローマに流行したる如何はしき物語）といふ作り話と同じ種類のものですな。あれは教訓を與へるんでなく、たゞもう娯樂一點ばりの馬鹿げた物語で、娯樂と教訓とを同時に與へるあの教訓寓話とは丁度正反對ですよ。またあゝいふ書物の主な目的は娯樂でありませうが、さればとてあゝいふ恐ろしい嘘言だらけの本か世に持囃されるのはどういふ譯ですかなア。一體心に感ずる樂みは、眼や惠像か心の前に持つて來る樣樣の物に對して、心が見分けたり味うたりする美と調和とから來なければなりません。心に映つて醜いとか不釣り合ひとか思はれるものは、何の快樂も與へることは出來ません。そんならばぢや、十六歲の少年が塔のやうに高い巨人を斬り倒して、丁度扁桃菓子のやうに、眞つ二つにするといふやうな本や作り話に、何の美がありませう。その部分と全體とに、全體と部分とに、何の釣り合ひがありませう？また戰の有樣を傳へようと思ふ時は、先づ敵の側には百萬からの戰士が居ると言うて置いて、本の主人公をそれに双向はせますのぢや。するとその所謂騎士が自分の强い片腕の力だけで勝利を得るといふことを、好かうが好くまいが、無理にも私らは信じねばならんのぢや。それからまた、生れながらの女王樣なり皇后樣なりが、見も知らぬ浮浪人の騎士の懷に容易に身を委ねてしまはれるといふに至つては、一體何と言うたら宜しからうぞ？　また騎士を一杯詰めた大きな塔が、順風を受けた船のやうに海を渡つて行つて、今夜はロムバルディヤリーの地名に居るのが明日の朝はインドのプレスタージョンの國（十三世紀頃中央アジアに在つたと傳へらるゝ一キリスト教國にて紀元二世紀にアレキサンドリアにて初めて天文地理學を講じたる學者）も記さねばマルコ・ポーロ（紀元十三世紀に有名な旅行家）も見たことのない土地へ着いてをる、といふやうなことを讀んで面白がるのは、全く無智な教養のない人でなうて何でありませう？　もしそれに答へて、かういふ書物の作者はそれを小説として書くのぢやから、微細な事實にこだはる必要はないと云ふかも知れんが、さうしたら

私はかう言ひませう、小説は眞實らしく見えるほど優れたもので、また如何にもありさうぢや、これはあり得ることぢやと思はせれば思はせるだけ面白いものですと。小説の結構は讀者の理解力と結合すべきものぢや。また不可能のことをもありさうに見せ、困難なことも滑らかにし、讀者が驚き面白がり氣を晴らし娯むやうに常にその心を引き緊めさせて、驚きと喜びが足並を揃へて進むやうに仕組まねばなりません。眞實らしく見せ眞に迫らせるところに作の骨はありますが、それを避けるやうな人には、上に述べたやうなものはとても出來ません。どの騎士道の本を讀んでも、その眞中が始めと合ひ、その終りが始めや眞中と合ふやうに、その各章をちやんと一つの纏まつた結構で一貫して居るのは遂に一册も見たことはありません。それどころか、非常に澤山の人物で組み立てゝ居るので、釣り合ひのとれた一人の人間よりも物の怪か怪物を拵へ出さうとしたやうに見えますな。その上にまた、その文章が粗雜で、その手柄ぶりも信用されず、その色艶はだらしなく、その鄭重な言葉は無細工で、その闘ひは冗漫で、その問答は馬鹿馬鹿しく、その旅行は辻褄が合はず、そして一口に言へば聰明な藝術らしいものは悉く缺けてをります。かういふ譯ですから、そんな物は無益の物としてキリスト教國から追放してしまふべきですよ。』

牧師補は熟心に彼に耳傾け彼は正しい判斷を有つた人であると感じ、また彼の言ふことには立派な道理があると感じた。そこで彼はかう言つた、『私もやはり同じ意見をもつて居りまして騎士道の書物は嫌でしたから、澤山あつたドン・キホーテの書物は殘らず燃やしてしまひました』と。それから自分がそれ等の書物を一々吟味したことや、燒いてしまつたものや殘して置いたものに就いて話した。それを聞いて役僧は、少からず面白がつて、自分はそれ等の書物のことをあんなに惡くは言つたものゝ、尚ほその中に一つ善いことがあると思ふ、それはこれによつて天才を發揮させる機會を與へたことであると附け加へた。といふのは、是等の書物は、筆を自由に走らせることの出來る廣い茫漠たる天地を開いて、難破船や、暴風や、一騎打ちや、戰などを寫し、大將たるに必要なあらゆる資格を備へた大將を描き出し、その大將をして敵の謀計を先見する智謀を有たせ、その部下の兵士等を激勵し鎭撫する雄辯を有たせ、神謀英斷にして攻勢にも守勢にも大膽ならしめ、こゝに悲しい痛ましい出來事を描いてをるかと思へば、忽ち何か喜ば

しい思ひがけない事件を描き、此處には操正しく賢くつゝましやかな美姫があり、彼處には勇敢にして溫良なるキリスト教徒の騎士あり、此處には無法な野蠻な空威張りものが居るかと思へば、其處には華麗な上品な王子が居り、臣下の忠義獻身を示すと思へば貴族の尊嚴と寛大とを示すのである、『お負けに、』と役僧は言つた、『その作者は自ら天文學者にでも、熟達した宇宙學者にでも、音樂者にでも、國政に達した人にでもなつて現はれることが出來ますし、また時には自分の氣が向けば魔術使ひとして出て來る折もありませう。作者はユリッシスの詭計も、エーニアスの信心も、アキリーズの剛勇も、ヘクトル（トロイ方の勇士、アキリーズに殺さる）の不運も、シノンの謀叛も、ユーリャルスの友情も、アレキサンダーの寛大も、シーザーの豪膽も、トラーヤン（ローマの皇帝）の寛仁や眞實も、ゾピラスの誠忠も、ケートーの智慧も、つまり名高い人々を完全にする一切の資格をば、或は一人の人に結び付け、或は大勢の人々に配りなどして描きます。それでもしそれが出來るだけ眞實を志して、美妙な文體や巧妙な創意を以て書かれましたら、作者は確かに晴れやかな色樣樣の織物を織り出して、それが出來あがつた曉には、善美を盡したものとなつて、私が前に申した通り、教訓と娯樂とを共に與へるといふ、一切の文章の達し得る限りの最高の目的を達することになりませうわい。かういふ書物の範圍は制限がないので、作者は敍事詩も抒情詩も、悲劇も喜劇も、また詩や雄辯術などといふ人の心を惹く美しい藝術の用の得る限りの形式を使うて、その力量を見せることが出來ますわい。敍事詩は韻文同樣に散文でも書かれますからな。』

第四十八章　では件の役僧が騎士道物語の問題を論究する。附り彼の才智すぐれしことども。

『貴方、そりや仰有る通りですよ、』と牧師補は言つた、『さういふ理由から考へても、今まであゝいふ種類の本を書いた人々は、善良な趣味や藝術の法に從つてさへ居れば、ギリシャとラテンの二詩星（ホーマーとヴァージル）が詩界に於ける如くに、散文界に於いて名高くなれたかも知れませんのに、そんなことに注意を拂はずに書いたので、益々非難に相當するわけです。』

『兎も角、私自身も、』と役僧は言つた、『今申した諸々の點を守つて騎士道の本を書かうといふ氣になつた事がある

のですよ、そしてまア打ち明けて申しますと、實は百枚以上も書きましたよ。そして、それが私の考へ通りに出來たかどうかを試めさうとて、そんな種類の讀み物を好んでをる人達に、學問があつて聰明な人たちにも、痴言を聞いて面白がるより外何の能もない無學な人々にも見せました。すると皆の人から大喝采を得ましたのぢや。それに拘らず私はその先きを書き續けませなんだ、といふのは、私の職務と不釣り合ひの仕事のやうにも思はれたし、また世間には賢い人よりも馬鹿が多いと感づきましたからですよ。馬鹿な大勢に喝采されるよりも、賢い少數の人に賞讃される方がましですが、かういふ本を讀むのは大抵愚昧な民衆なのですから、そんな人々の愚鈍な判斷に任せることは私は好みませんでな。

『しかし自分で自分の手を抑へて、それを書き終へる考へまでも棄てさせた主なものは、近頃上演される戯曲について、私自ら起した一つの疑問でした。それはかうです、今日流行して居る戯曲は、純創作ものでも歴史ものでも、凡てが、いやその大部分が、頭も尻尾も無い他愛もない物です。それでもやはり世間は喜んで見物します。そして傑作どころの騒ぎやないものを、傑作と見たり持ち上げたりしてをりますのぢや。またそれを書く作者もそれを演ずる役者も、世間がそれを求めて他のものを求めぬので、これこそ本當の戯曲ぢやと申します。そこで正式に藝術の法によつて結構を作つた作は、唯五六人の識者が分つて呉れるだけで、その他の人々は皆その作の眞價に對しては盲目です。また作者としては少數の人に讃められるより多數の人からパンを得る方がましですからな。そこで私の前に申したやうな主義に從うて作らうとしたら、自分の眉毛を焦がしてしまうた揚句、私の本もその同じ運命に出つくはし、そして私は「エル・カムピローの仕立屋」（唯で縫つて糸を損したといふ訳がある骨折り儲けの狂言）になりませう。そして私は屢々役者を捕へて、お前らの採つてをる考へは間違うて居るし、またそんな不條理な戯曲の代りに、藝術の法に適うたものを演ずれば餘計に見物を牽き付け餘計に信用を得るであらうと、納得させようと、骨折りはしましたが、彼等はすつかり自分らの考へに囚はれて居りますから、どんな議論も證據もその考へを取り除くことは出來ません。

『忘れもしません私は、何時ぞやさういふ頑迷な連中の一人にかう申しました、「どうです、二三年前この國での名高い詩人が書いた三つの悲劇をスペインで上演した時のこと

を覺えてゐますかい。あれは賢い人にも無學な人にも上流社會にも下層社會にも凡ての見物を殘らず歡賞させ喜ばせ面白がらせたでせう、そして興行人もあの三つだけで、あの後出來た二番よい芝居を三十倍せたものより餘計の金を儲けたでせう。」

『するとその役者は答へました、「仰有る通りです。貴方は『イサベラ』や『フィリス』や『アレキサンドラ』（ルペルシオ・レオナルド・デ・アルゼンソラの作）のことを仰有るんでせう。」

『あゝいふ物を言ふんです、」と私は言ひました、「そしてあれなどは藝術の法則に從うてゐなかつたかどうか、またそれに從うたために優れた作ともなれず全體の世間を喜ばすことも出來なんだかどうかを見なさい。そこで下らんものに執着してゐる世間の見物が悪いのではなうて、何か他のものを作り出すすべを知らぬ人たちが悪いのですよ。』復讐されし忘恩』（ロペ・デ・ベガの喜劇）にも、『ヌマンシア』（ヌマンシアはスペーンにあつた市、ローマ人に全滅さるゝ、それを材料にしてセルヴァンテスが書いた悲劇である）にも、また『やさしき女敵』にも、それからまた『戀せる商人』にも、それからガスパーデ・グチエーラの喜劇にも、また『やさしき女敵』にも、それからまた某々天才詩人の書いた五六の物にも、下らぬことは些ともありはせん。それはその作者自身の名を揚げ評判を高め、またそれを演じた人々に利益を與へましたよ。」と言つて、まだいろ〳〵とそれに附け加へましたが、それに依つて私はその男を黙らせてこそは了ひましたが、しかしその妄を覺らせてやる程までに納得させたりすることは出來なんだかと思ひます。』

こゝで牧師補は言つた、『その點ですよ、それを聞いて私は近頃流行の芝居に對して有つてをる以前からの憎悪の念を呼び覺まされました。その憎悪は全く騎士道の書物に對して有つてゐるのに劣らぬ程烈しいのです。テュリー（ローマの悲劇者シセロのこと）の說によれば一體戲曲は、人生の鏡、風儀の模範、眞理の畫であるべき筈ですのに、現今流行してゐるものは無駄ごとの鏡、痴けごとの模範、淫奔の畫像でありますからな。唯今私たちが論じて居るその戲曲で、第一幕では嬰兒が襁褓に包まれて出るが、第二幕では成人した髭男になつて出るといふ位馬鹿げたことが一體ありませうか？或ひは老人をから威張り者に、若者を卑怯者に仕立てゝ見せたり、下男に上品な言葉を使はせ、小姓に賢い諫言を言はせ、國王に玄關番の役をさせ、お姫樣を臺所女中にしたりする以上の不條理がありませうか？　それに又彼等が演ずる劇の事件の發展には、殆ど時間の觀念がないのはイヤハヤ何と申しませうぞ？　その一例を擧げますと、何時ぞや

私が見ました或る戯曲には、第一幕がヨーロッパで始まり、第二幕はアジア、第三幕はアフリカでした。そこでもしあれが四幕物でしたら、疑ひなくその第四幕はアメリカで終つたに違ひありません。そこでその場面は全地球の四大地方に置かれたでありませう。もし人生を寫すといふことが劇の志すべき主眼としますなら、ペピン王（フランス人の王、紀元七五二年に登位、シャーレマンの父）かシャーレマン時代に起るものと思はれる劇中で、ヘラクリウス皇帝（西部ジの帝王、紀元六一二年より六二年まで在位）に扮装した立役者が、第一次十字軍の主将、紀元一〇九九年にエルサレムへ入りキリストの聖を開）に扮装した立役者が、丁度ブイヨンのゴドフレーしらしく十字架を持つてエルサレムへ乗り込み、聖墓を占領するといふに至つては、その両者の間には數へも切れない程の年月の隔たりがありますので、どんな平凡な頭でもそれで満足させられることがどうして出來ませう？　而もその劇は作り物語の上に立つてゐながら歴史上の事實に結び付けられて居つて、いやいろ〳〵の人物やいろ〳〵の時代に起つたきれ〳〵の事實が、作り話とごつちやになつて、凡てが眞らしい面影さへないのみか、どう見ても赦し難い白々しい誤りでありますからな。それにます〳〵驚くことには、かういふものこそ完全無缺で、これに過ぎるのは皆餘り過ぎたものぢやなどといふ無學な輩が居りますよ。それから宗教劇の方へ行きますと、まア何といふ奇蹟を拵へ上げて居ることでせう！　或る聖者の奇蹟を別の聖者につつけるなど、實に出鱈目な拙劣な出來事ばかりですよ！　また通俗劇にさへ、何の理由も目的もなく、たださういふ奇蹟とか彼等の所謂變貌といふやうなことが、愚かな見物を驚かせて、芝居に引き付ける足になるであらう位の考へから、奇蹟を押し入れたりしますのぢや。これはすべて眞實を曲げ歴史を害する恐れがある、いや、それのみかスペインの天才たちの恥になります。といふわけは、劇の法則を凡帳面に守つて居る外國の人たち（イタリー人を指す）が我が國で出來る劇の荒唐無稽を見ましたら、さぞかれ〳〵を野蠻な物知らずと思ひませうからな。それで文明國の政府の意見で芝居を公認する主要な目的は、何か罪の無い娯樂を折々人民に與へて樂ませ、そして暇のある爲めに陷り易い惡風から救ふにあるのぢやと言つたり――またさういふ目的は、善かれ惡しかれどんな種類の戯曲でも達せられるから、作者や役者に制限したり、こんなものを作らねばならんぞといふ法律を布いたりする必要はない。それはつまり前に言ふ通り、國家の求める目的はどんな戯曲でも達せられるからであるなどと言うたりしたところで、それでは十分の

辯解になりません。その辯解に對して私はかう答へませう。その國家の目的は、言ふまでもなく悪い戯曲よりは善い戯曲に依つて更によく達せられる。何故と言へば、藝術の法に適つて拵へられた戯曲を見物する人は、その戯曲の諧調に依つてそれを引き立てられ、その眞面目な役々に教訓せられ、その様々の出來事に依つて驚歎せしめられ、その言葉のやり取りを聞いて己の才智を磨き、奸策を見て戒められ、模範によつて賢くなり、悪を憎み善を愛するやうになつて歸りませう。かういふ様々の方法で善い戯曲は見物人の心を、如何に粗野な鈍い者でも感じさせるでありませう。そしてあらゆる不可能の中での一番の不可能は、さういふ様々の素質を殘らず備へてをる戯曲は、今日一般に演ぜられてをる大部分の戯曲のやうに――つまりさういふ素質に缺けてをる戯曲よりも優つて、見物人を樂ませ滿足させ喜ばせないであらうといふことですよ。しかしこの爲めに戯曲を書く詩人たちを咎めてはなりません。といふのは、詩人のうちには自分等の缺點を十分に悟つてゐて、自分等がどうせねばならぬかを殘らず承知して居る人もありますからな。しかし戯曲も商品になつて居りますから、かういふ流行に從はない作物は役者どもが買はぬのぢやと申しますが、そりや全くですよ。そこで詩人は自分の作品に對して金を拂ふ役者の要求に適應しようと力めるのです。そしてそれが本當ぢやといふことは、この王國で一番優れた天才ロペ・デ・ベガが指す の書いた無數の戯曲によつて分りませう。彼はその文名を天下に轟き渡らせたほどの絢爛と優雅と華麗と、洗煉された詩句、選擇された言葉、深遠な思想を以て、一口に言へばその筆力たるや實に豐富に、その文體たるや實に高雅でありました。しかも尚作者が役者どもの趣味に適はせようと願つた結果、その作の幾つかゞ達したやうに凡ての作が眞の完全無缺の域に達することは出來かねました。その他の作者等は實に無頓着に戯曲を書きますから、それを演じた後で役者どもは罰せられることを恐れて逃げて身を隱すのです。實際これまでも屢々、王樣が誰かを侮辱したり、どこかの華族を誹謗するやうなことを演じた廉で罰せられたことがありますからな。そこでもし首府に、誰か聰明な分別ある人を置いて、嘗に首府で書かれるものばかりでなく、このスペイン國内で演ずる目的で書かれた戯曲は、上演する前に殘らず一應檢閲させることにして、そしてその檢閲官の許可や檢印や記名がなければ、地方行政官は、どんな劇でも興行させてはならぬといふことにすれ

ば、こんな弊害は殘らず、それのみか今私がまだ言はない弊害までも取り除かれるでありませう。さうなれば役者はその戯曲を首府へ送る面倒さへ見れば、安心して演ずることが出來ますし、また作者も斯道に通じた人の嚴密な檢閲を受けるといふ恐れがあるから、隨つて一層の注意と勞苦を拂つて銘々作をすることになりませう。さうなれば善良な戯曲が作られて、その目ざす目的も目出度く達せられ、國民の娯樂はもとよりのこと、スペインの天才の評判も、役者の利益や安全も、また役者に罰を課する面倒を省くことも得られませう。そして若しその同じ檢閲官なり別の人なりに、新たに書かれる騎士道の本を檢閲する權限を與へられますなら、必ず貴方が唯今仰有つたやうな完璧の傑作が現はれて、典雅な貴重な雄辯の寶で我が國語を富まし、單に愉けものばかりでなく、非常に忙がしい人々にも、害の無い娯樂を與へる爲めに、世に出て來る新作の光の前に、舊作は暗隅に逐ひ除けられてしまひませう。弓は何時も曲げられて居ることは出來ず、弱い人間といふものは、何か正しい娯樂がなくては居られませんからな。』

僧侶と牧師補とが互ひの會話を此處まで進めて來た時に、理髮師も進み出て仲間に入つた。そして牧師補に言つた、『學士樣、此處ですよ。私らが正午休みをするかたく、生々した草の多い草場があつて、牛にも結構な場所ぢやと申したのは。』

『なる程さうらしいな。』と牧師補は答へた。そして理髮師の言ひ出したことを役僧に話すと、彼もその眼前に横たはつてゐる美しい谷の眺めに牽きつけられて、彼等と共に休んで、この景色を樂しみながら、親しみの出來て來たその牧師補の話も聞かうし、また取り分けドン・キホーテの行爲に就いてももつと詳しく知りたいものと心を決めた。そこで自分の下男のうちの數人を、餘り遠くないところにある宿屋へ遣つて、皆の人々の腹を拵へられるだけの食物を持つて來させようと思つた。それは此處でこの半日を休まうと思つたからである。これに對して一人の下男は、今頃あの宿屋へ着いてをる筈の荷駄騾馬が運んでゐる食物が十分にあるから、大變の外は宿屋から何も持つて來る必要はないと答へた。

『それでは、獸どもを殘らずあそこへ連れて行つて、あの荷駄騾馬をこちらへ連れて歸れ。』と役僧は言つた。

こんなことの運ばれてゐる間に、サンチョーは、どうも胡散臭いと思つてゐた牧師補と理髮師とが、始終くつつき通

してゐた檻の側から離れたので、自分の主人と話が出來ると見て取つて、ドン・キホーテの入れられてゐる檻に近寄つて、そして言つた、『旦那樣、私は貴方樣が魔術にかゝつてござることに就いて本當のことを申し上げねば氣が休まりませんわい。あの顏を包んで居りますあの二人の男は、私らの村の牧師さんと床屋さんでござりますぞい。私ほどうも、貴方樣が功名手柄をしてあの二人より偉いものになんなさるのを嫉むばつかりに、あの人等がかういふ風にして貴方樣を連れて行く謀略を考へついたんぢやないかと思ひますがの。もしそれが本當ぢやと、貴方樣は魔術にかゝつてござるのぢやない、たゞ瞞かされて馬鹿にされてござるだけのことになりますぞい。そこでこれを確めるにや、貴方樣へ一つものをお訊ね致したうござりますのぢや。そして若し私が思うてをる通りに貴方樣が返事をなさつたら、貴方樣はこの瞞着を覺くことが出來ますぞよ。そして御自分は魔術にかゝつて居るのぢやない、氣が變になつて居るのぢやといふことが分りませうぞよ。』

『サンチョーよ、何でも訊ねるがよいぞよ、』とドン・キホーテは答へた、『拙者は何なりお前の訊くことに答へて滿足させてやらうわい。あそこに居る私らの路伴どもを、私らの近所の人で知り合ひの、あの牧師や床屋ぢやとお前は言ふが、そりや如何にも同じ人間と見えさうなことぢや。しかしそれが眞實眞劍にさうぢやとは、どのやうな事があらうとも信じてはならぬぞよ。お前の言ふ通りたとへこの者等があの二人の者とそつくりに見えようとも、それは拙者に魔術をかけた奴がそれに生き寫しの姿をして居るのぢや、と、お前は眞實思はねばならぬのぢや。何故といふに、好きなまゝの姿になることは、魔術使ひには譯もないことぢやから、今お前が思うてをる通りに思はせようとて、私らの友だちの姿になつて居るかも知れん。そしてお前がたとへテシウスの絲（この事前に出づ）を持つて居らうとも、遁げ道の見付けられんやうな幻想の迷宮へお前を誘ひ込まうとて、姿を變へて居るかも知れんぞよ。そして彼奴らは拙者の心まで無我夢中にしてしまうて、この災難が何處から湧いたか判斷し兼ねるやうにしてをるかも知れんぞよ。一方にお前は私らの村の牧師補や床屋が此處に路伴になつて居るといふし、また一方には拙者はかうこの檻の中へ閉ぢ籠められて居つて、この拙者を閉ぢ籠め得る程の力は亂神の力でなうては世にあらう筈がないと心に辨へて居るとすれば、これをお前は何と言ふぞ、何と考へるぞ。それこそは古往今來魔術

にかけられた武者修行者のことを書いたあらゆる歴史の中で、拙者が讀んだこともない魔術でなうて何であらうぞ？それ故彼奴らがお前の言ふやうな者ぢやといふことに就いては、安心して居つてもよいぞよ。拙者がトルコ人なら彼れらもお前の言ふ通りの者ぢやらうがの。しかしお前は何か拙者に訊ねたいと言うたが、言ふがよい。すればたとへお前が今から明日の朝まで訊ねても返答をしてやらうわい。』

『あゝ聖母マリア様助けて下さりませ！』とサンチョーは聲を張り上げて言つた、『旦那様一體まア貴方様は私の言ふのが分り切つた眞實ぢやといふことも、貴方様のこの囚はれや災難には魔術よりも惡計の方が餘計に働いて居るといふことも、お分りなさらん程に頭が鈍うて腦味噌が足らんのでござりますかい？　けれど、さうぢやから仕方がない、私は貴方様が魔術にかゝつてござらんちふことを、はつきり教へて上げませうわい。サア旦那様、神様はこの苦みから貴方様を救うて下さりませうで、また貴方様が少しも當てにしてござらん時にドゥルシネアのお姫様が貴方様を抱いて下さりませうで――。』

『私に禁厭は御免ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『お前の聞きたいことを言ふがよい。先きに言うたやうに出來るだけ精しく返答しようからの。』

『それが私の望みでござりますわい、』とサンチョーは言つた、『私が知りたうて、貴方様に言うて貰ひたいのは、武者修行の名目で、貴方様が勤めてござるやうに武道に從うてござる方々は、皆本當のことを言はつしやることゝ思ひますし、また全くその通りでござりますが、さういふ工合に、何一つ足しも減らしもせずに、殘らず本當のことを言うて貰ひたいのでござりますわい――。』

『こら〳〵、拙者は何一つ嘘はつかぬぞよ、』とドン・キホーテは言つた、『もうその間ひは止めい。サンチョーよ、お前のその誓言や强請ごとや前觸れにはうんざりしてしまふわい。』

『ヘイ、私はもう旦那様の御親切や御眞實に賴つて居ります。』とサンチョーは言つた、『そこで今の話に關はりのあることぢやで、甚だ憚り樣ながらお訊ね致しますが、貴方様は御自分で考へてござるやうに魔術でこの檻の中へ閉ぢ籠められなさつてから、世間で言ひますやうに、一寸用足しに何處か他へ行かうとか行きたいとかいふ氣にお成りなされましたらどうでござりますぞい？』

『「何處かへ行く」とは解せんの、』とドン・キホーテは言つ

た、『サンチョー、シャンとした返答が聞きたいならもう少しはつきり言へ。』

『「何處かへ行く」ちふことが貴方樣にお分りなさらん筈がござりますかい？　はて、學校の子供でも、赤ん坊の時から知つとりますわい。まアそれぢやな、かう言へば分んなさらう——貴方樣は何か人に代つて貰へんことをしたいと思はつしやらなんだかの？』

『あゝ！　分つたよ、サンチョー。』とドン・キホーテは言つた、『ウム、度々ぢや、丁度今もぢや。この窮境から救うて晃れい、さうせんと何もかも臺なしになつてしまうわい。』

第四十九章　はサンチョー・パンザが主人ドン・キホーテと爲せし抜目なき會話を傳へる。

『ははア、分りましたわい、』とサンチョーは言つた、『私が心から知りたかつとつたのは、それでござりますわい。サアノ〳〵もう旦那樣、人が氣の觸れとる時に、世間の人が「何某は何處が悪いのか分らん。あれは食ひもせにや飲みもせず、眠りもせにや何を訊れても當り前の返事はせん。あれは魔につけられとるとしか思はれんな。」と、よう申しますが、貴方樣はそれを言ひ消すことが出來ますかい？　それから考へて見ると、食ひも飲みも眠りもせず、また私の言ふ人間持ち前の働きもせんやうな、さういふ人が魔にかけられとる者ぢやといふことになりますわい。けれど貴方樣のやうに便氣を催したり、飲み物を當てがはれりや飲みもするし、食ひ物があれば食ひもするし、訊かれるだけのことに返事もする人は、さうぢやござりませんぞよ。』

『サンチョーよ、お前の言ふことは本當ぢや、』とドン・キホーテは答へた、『ぢやが先にも言うた通り、魔術の種類は澤山あるのぢや。そして時代の移るにつれて魔術も段々變つて行く。往昔はさうぢやなかつたらうが、今時の魔術にかかる人は拵者のするやうなことを殘らずするかも知れんといふこともありさうなことぢや。そこで時代の慣はしを見ずに理窟を言うたり當て推量をしたりするのは埒もないことぢや。拵者は魔法にかゝつて居ると自分で知りもし感じても居るから、それで十分拵者の本心は安まるのぢや。もし拵者が魔術にかけられたのではなく、自分の卑怯や臆病からかうして徒らにこの檻の中に身を横たへて、今の今でも拵者の援助や保護を頻りに求め居らうも知れん萬民に對して、その窮乏不遇を救うてやることが出來るのに棄てゝ

置くのぢやと自分で思うたら、拙者は頗る心苦しいであらうがの。』

『それはさうでも、やつぱり、』とサンチョーは答へた、『貴方樣はこの牢屋から出るやうになさつたら、この上の十分な御滿足であらうかと思ひますわい、それにや、必ず私が力一杯手傳うて、この檻から貴方樣を引き出してでも上げますからの。そしても一度あの忠義なロシナンテに乘れるか乘れんか試して御覽なされ。あの馬もやつぱり魔術にかゝつとると見えて、悲しさうに鬱いでをりますよ。さうすりや私らは今一度冒險捜しの運試めしが出來ませう。そして若しうまく行かなんだら、その時になつてこの檻へ歸つて來ても十分、間に會ひませう。もしそれ程貴方樣の運が惡いか、私の間拔けのせゐでこの計畫を果せなんだら、貴方樣と御一緒にこの檻の中に入つて參りますと、正直な忠義な御家來として誓言を立てませう。』

『お前の言ふ通りにすることにしよう。サンチョーよ。』とドン・キホーテは言つた。『そしてもしお前が本當に拙者の身を自由にすることの出來る折が來たら、萬事お前の言ふまゝにならう。ぢやがな、サンチョー、拙者のこの災難に就いてお前の考へがどれ程間違うてをるかは今に分らうぞよ。』

この武者修行者と常軌を逸した從士とはかう話しつゞけながら、牧師補や理髮師や役僧などが既に下馬して彼等を待ち受けてゐたところへ着いた。牛牽きは直ぐさま牡牛どもの軛を外して、その美しい綠の草原に自由に放してやつた。その草原の鮮かさはドン・キホーテのやうに魔術にかけられた人でなく、その家來のやうに全く覺めて正氣である人を誘ひ寄せるかの如く見えた。家來は自分の主人を少時の間檻から出してくれるやうに牧師補へ頼んだ。それは、もう檻から出してやらないと、この牢屋は自分の主人のやうな紳士の禮儀に適ふほどの淸潔を保てないかも知れないといふのであつた。牧師補はそれを察した。それで、その求めには喜んで同意するが、たゞその主人が自由にされると元の調子に返つて二度と再び見付けられぬやうなところへ往つてしまひはせぬか、それが氣遣ひであると言つた。

『且那樣が逃げなさらんことは私が受け合ひます。』とサンチョーは言つた。

『また私も受け合ひます、』と役僧が言つた、『殊にもしこの方が騎士として、私らの同意を得ずには立ち去らんといふ約束をなさるなら。』

それを殘らず聽いてゐたドン・キホーテは、その約束をす

ると言つて、その上自分のやうに魔術にかけられた者には自分の好きなことが出來るものではない、といふのは魔術をかけた人はそのかけられた人を三百年間も一つの場所から動かないやうにすることが出來る。そして若し遁げ出さうとしても飛んで歸らせる、それ故、殊に又萬事に都合の好いことでもあるから、貴方がたは拙者を釋いて下さつても差支へはない、若しそれを許さねば、貴方がたがずつと離れて居られぬ限りは、已むなく皆さんの鼻の穴に對して失禮をせねばならぬと言ひ張つた。役僧は二本一緒に縛られてあつたドン・キホーテの手を取つた。そして彼の口約束と誓言とによつて人々は彼を釋いた。檻を出ると彼は夢中になつて喜んだ。彼は先づ第一に全身をうんと伸ばした。それからロシナンテの立つてゐるところへ行つて、その腰を二つ三つ平手で敲いて言つた、『神樣も貴い聖母マリア樣もまだ〳〵拙者を見放しはなされぬのぢや。あゝ駿馬の花よ、鏡よ。私らは共に望み通り、間もなく一緒にならうわい。そしてお前は、この背中に主人を乘せ、拙者はお前の上に乘つて、神樣が拙者をこの世へお遣はしなされたその職務をば勤めよう。』さう言ひながら、サンチョーを從へて彼は片蔭へと退いた。其處から歸ると、非常に身輕になつて、自分の家來の計畫を實行する念も前よりは一層強くなつてゐた。

役僧は彼の狂氣の性質の並外れなのや、凡て彼の言ふことや返答には、優れた智慮が見られるのに、一旦騎士道の問題になると、かねて聞いてゐた通り、その鐙を踏み外してしまふのを、不思議に思ひながら、じつと彼を見つめた。そこで彼は氣の毒に思つて、丁度食物の來るのを待つて皆が綠の草の上に坐つてゐる時、ドン・キホーテに言つた、『もし、貴方、一體まア下らぬやくざな騎士道の書物をお讀みになつたお蔭で、魔術にかけられて居るとか何とかと、嘘と眞ほども事實から懸け離れてをることを、一心に信じなさる程正氣を失はれたといふのは本當でござりますかな？どんな人間の頭にでも、この世の中に本當に、あの數限りないアマディスどもや、大勢の勇士や、トレピゾンドのあらゆる帝王たちや、あのヒルカニアのフェリクスマルテたちや、あの澤山の婦人乘馬や、廻國の處女たちや、大蛇や怪物や巨人や、それから驚くべき冒險とか、戰爭とか、素晴らしい一騎打ちとか、壯麗な衣裳、戀煩ひの姫君たち、伯爵になつた從士ども、滑稽な一寸法師、戀の手紙、喋々喃々の囁き、空威張りする女ども、つまり一と口に言へば、

騎士道の書物に收めてある譫言を悉く信じることがどうして出來ませう。私自身としては、あんな本を讀む時に、ふと讀み止めて、こりや殘らず嘘ぢや痴けごとぢやと思はぬ間は、唯幾らかの娯みを得ますと申すばかりです。しかしその本の何であるかをよく〳〵考へるやうになると、私はその中の最上の本でも壁へ投げ附けます。もし手近に火でもあれば、火の中へ投げ込みませう。常軌中庸の道から外れた詐欺瞞着の輩として、また新たな宗旨や道德の開山として、またあゝいふ馬鹿々々しい書物の中に書いてあるものを殘らず眞理として、無學な社會に信じさせ押し付けようとする教師として、彼等にはさういふ刑罰が丁度相當ですからな。あゝいふ書物は圖々しくも貴方に向つてしたことで明らかに分る通り、身分のある聰明な紳士の正氣をさへ掻き亂して憚りませんよ。貴方もあゝいふ書物のお蔭で、この檻の中へ閉ぢ籠められて、丁度金儲けの爲めに獅子や虎を方々見せ物にして歩くやうに、牛車に乘せて運ばれなさるやうな目に逢うてお出でですからな。さア、ドン・キホーテ殿、少しは御自分を憐れとお思ひなさるがよい。常識の懷へお歸りなさるがよい。そして貴方のその潤澤な天賦の心性をば、何か貴方の本心を益し名譽を加へるに足るやうな他の讀み物の爲めにお使ひなさつて、神樣が貴方に賜うたその裕かな常識を役にお立たせなさるがよいですぞ。そして若し、それでも尚性癖に驅られて、軍功や騎士道のことを書いた書物を讀みたいとお思ひなさるなら、聖書の中の「士師記」をお讀みなさい。あれには壯大な事實や、勇ましく確實な事蹟も書いてありませう。ルシタニア（ポルテュガルの雅名）はギリアトゥスを有し、ローマはシーザーを、カルタゴはハンニバルを、ギリシャはアレキサンダーを、カスティルはフェルナン・ゴンザレズ伯を、ヴレンシアはシードを、アンダルジアはゴンザロー・フェルナンデスを、エストレマンデュラはディエーゴー・ガルシア・デ・パレーデス（三十二章の註を見よ）を、ジェレズはガルシ・ペレズ・デ・ヴルガス（八章の註を見よ）を、トレドーはガーシラソー（十五世紀スペインの勇士）を、セギールはドン・マヌーエル・デ・レオン（十五世紀スペインの勇士）を有してゐます。かういふ人々の勇ましい事蹟を讀めば、高き心も樂まされ教へられて喜びと驚きに充たされませうわい。ドン・キホーテ殿、かういふ物こそ貴方の健全な理解力を以てお讀みになる値打ちがありませう。それに依つてこそ貴方は歷史の知識を高め、美德の愛を增し善に强くなり、禮節を磨き、猛々しからずして雄々しく、卑怯ならずして沈着になられませう。さすれば皆これ神の

榮えや、貴方御自身のお爲めや、また貴方の御出生の地と承ほるラ・マンチャの名譽になりませう。』

ドン・キホーテは非常な注意を以て役僧の言葉を傾聽してゐた。そして彼が言ひ終つたのを見て、稍暫し彼を見詰めてから彼に答へた、『貴方、そのお話はどうも拙者に向つて、世の中には武者修行者などは決して無かつたとか、また、騎士道の書物は殘らず嘘偽りで、國家の爲めに害あつて益がないとか、拙者があゝいふ書物を讀んだのは惡いこと、それを信じたのは尚惡いことで、拙者がそれに記してあるやうな武者修行といふ艱難の道に從ふことによつて、あゝいふことを模倣るやうになつたのは尚更惡いことであるなどと、說法なさるお考へであるやうに見えますがな。貴方はゴールやギリシャのアマディスどもとか、その他あゝいふ書物に一杯書いてある武者修行者などは、決して世に居らなんだものぢやと言はれますからな。』

『全く貴方が仰有る通りでございますよ。』と役僧は言つた。それに對してドン・キホーテは答へた、

『貴方は更にまた、かういふ種類の書物が拙者の正氣を顚倒させる程の害を與へて、拙者を檻の中へ閉ぢ籠めるに至つたとか、また拙者が自分の研究を改め變更して、更に多くの興味や教訓を與へる一層眞實な他の書物を讀んだ方がよからうなどと仰有りましたな。』

『フム、なる程、』とドン・キホーテは續けた、『拙者には、貴方こそ氣の違つた魔術にかけられた人と思はれますわい。何故といつて、貴方は大膽にもあの天下に治く事實として認められ受け容れられてをる事に對して、そのやうな不遜極まる言語を弄せられたからぢや。貴方のやうにあの事實を打ち消す者は悉く、讀めば腹が立つのでその本に加へよと貴方が言はつしやるその刑罰に當りますのぢや。一體アマディスその他あゝいふ本に充ちて居る殘らずの武者修行者が、決してこの世に存在せなんだなどと人に思はせようとするのは、丁度その人に、太陽は光を與へず、氷は冷たからず、地は物を育てずと思はせようとするやうなものぢや。世の如何なる才子と雖も、フロリプ姫とブルガンディのギイとの物語（後者はシャーレマンや、またシャーレマン時代に起つたフィーラブラス（前者の夫フロリプ姫の兄弟なる勇士とマンティブル橋の物語（フィーラブラスこの橋上の巨人を退治す）が本當のことでないと人を說き伏せることが出來ますかい？　一切の善きものにかけて、今が晝間ぢやといふ程にそれは眞實ぢや。そして若しそれが嘘なら、ヘクトルや、アーキリースやトロイの戰爭やフランスの十二貴

族や、或ひはまた今尚大鴉に變つて生き存へ、絕えず、その國内で待ち設けられて居る、イギリスのアーサー王などの居つたといふこともやつぱり嘘でなけりやなりませんぞ。さうなりやグァリノー・メズケノーの傳記（シャーレマン傳說の小說、原著はイタリー語、一五二七年にスペイン譯出づ）も「聖玉杯」捜索の物語（アーサー王傳說の中）も偽りぢやと證明し、またトリストラムとイソールト女王の戀も、ギネギーアとランスロットの戀も、二つながらアーサー王傳說のうちに在りみな偽りぢやと證明されるわけぢや。然るに大ブリテン國第一の酌人老女クヮンタニョーナを見て、まだ覺えてをる人々さへ居りますからの。それは全く本當のことで、拙者の父方の祖母がいつも床しげな頭布を被つてをる老女を見る毎に、「孫や、あの方はクヮンタニョーナさんによく似てござるわい」と言うたものですよ。この言葉から推しても、必ず祖母はその老女を知つてゐたか、或ひは少くともどうかして繪姿を見たことゝ判斷されますわい。それからあのピュールと美人マガローナの物語（十二世紀のフロバンスの傳奇物語）を眞實ぢやないと打ち消し得る人がありますかい？　あの勇ましいピュールが木馬に乘つて宙を飛んで行く時に韁代りに使うた鐵串は今日が日でも王室の武庫に見られませうわい。その鐵串は荷車の轅桿よりか少々太いですよ。そしてその鐵串は今バビエサ（スペインの英雄シードの愛馬）の鞍の側にありますよ。それにロンセスヴルレスには太い梁ほどもあるローランドの角笛がありますぞ。さういふ事からしてわれ〳〵は十二貴族やピュールといふ者や、シードといふ者や、その他それに似寄りの騎士で人々が俗に冒險家と呼んでをる人々が居つたものと判斷が出來ますのぢや。さうでなくば恐らく拙者は、あの勇敢なルシタニア人のジュアン・デ・メロー（ポルテュガルの名高い騎士）のやうな武者修行者も居らなんだと思はにやなりますまい。この人はブルガンディへ往つて、それからアラスの町（フランスの小市）でモーサン・ピュールといふ名高いシャルニーの領主と闘ひ、その後バーゼルの町（スキッツルの市）でモーサン・アンリック・ド・ルメスタンと闘うて、兩方ともに打ち勝つて名譽を擔ひましたのぢや。また、勇敢なスペイン人ペドロー・パルバとグティエーレ・キハーダ（この一家の直系から拙者は出ましたのぢや）、この二人が、やつぱりブルガンディでサン〳〵ボーロ伯の息子たちを打ち負かした時に仕遂げた奮擊突進も嘘ぢやと思はにやなりますまい。またドン・フェルナンドー・デ・グェヴラはゼルマニーへ武者修行に行つて、あそこでオウストリア公爵家の騎士メッシール・ジョールヂと眞劍勝負をしたことも、やつぱり嘘ぢやと思はにやなりますまい。また「パソー」の騎

士シューロー・デ・キニョーネスの數々の馬上試合も、カスティリヤの騎士ドン・ゴンザロー・デ・グズマンに對するモーサン・リュイ・ド・ファルスの壯圖も、ほんの嘘事と思はにやなりますまい。その外またわが國や外國のキリスト教徒の騎士たちの數多い事蹟もさうなりませう。拙者は繰り返して申すが、あれほど確固眞實なことを打ち消す人こそ、全く分別も正氣も缺いてをりますわい。』

ドン・キホーテが事實と作り話とを取り交ぜて言ふのを聞き、且つ武者修行の事蹟に關する事やそれに附屬することどもを如何にもよく知つてゐるのを見て、役僧は呆れてしまつた。そこで彼はそれに答へて言つた、『ドン・キホーテ殿、貴方の仰有ることにも多少の眞理のあることは私も打ち消し兼ねます。殊にスペインの武者修行者に就いてはさうです。またフランスの十二貴族の存在したことも喜んで承認致します。しかしテュルパン大僧正があの人たちに就いて記して居ることを、殘らずあの人たちが本當にやつたとは、信ずる氣になれません。つまり事の眞相はかうです、あの人たちはフランスの諸王に選ばれた騎士たちで、その人品も地位も武勇も、皆等しかつたので(等しくなかつたとしても少くとも等しくなければならん筈であつたので)「同輩」と呼ばれました。そしてそれは、今日サンチァゴとかカラトラヴとかの階級があつて、その階級に居る者は生れの良い優れた勇氣ある騎士ぢやと見做されて居るやうな、さういふ風な宗教上の一階級でした。そして只今私らが聖ヨハネの騎士とかアルカンタラの騎士とか言ふやうに、その十二人の同輩が一つの武士階級に選ばれたので、あの當時「十二貴族の騎士」と言ひ慣はしてゐたのですよ。シードといふ人も、またベルナルドー・デル・カルピーといふ人も、世に在つたことは疑ふべくもありません。しかし俗にあの人たちがしたと言うて居るやうな事を、あの人たちが本當にしたといふのは甚だ疑はしいと思ひますな。またもう一方の、貴方の仰有るピェール伯の鐵串のことや、それがバビエサの鞍の傍に在ると仰有ることに就いては、身の恥を懺悔致しますが、私は嘗てその鞍は見ましたが、その鐵串の方は、貴方樣の仰有るほどに太いのに拘らず、私が間抜けな爲めか近眼な爲めか、つひ見ることが出來ませなんだよ。』

『それは寸毫の疑ひなくその鐵串はあそこにありますのぢや、』とドン・キホーテは言つた、『それのみか、確かな筋から聞くところに據れば、あれは錆びないやうに牝牛の皮の鞘に納めてあるさうですわい。』

『さうかも知れませんな、』と役僧は答へた、『しかし、私はそれを見た覺えがないと、自分の受けて居る僧職にかけて誓ひますよ。しかし、たとひそれがそこに在るとしても、それが何もあんなアマディスたちや世間で噂をする大勢の騎士たちの物語を、私が信じねばならぬといふ譯にもならず、また貴方のやうに立派な、さま〴〵の美質を備へ立派な理解力をもつてをるお方が、あんな不條理な騎士道の書物に書いてある途方もない氣違ひめいたことを、眞實なことぢやと思ひ込まれるにも當りませんわい。』

第五十章　ドン・キホーテと役僧との抜目なき論戰。附りその他の出來事ども。

『冗談を言はつしやる！』とドン・キホーテは答へた、『國王の裁可を受け、その筋の人々の認可を經て印刷された書物が、そして偉人にも小人にも、富者にも貧民にも、學者にも、無學者にも、身分ある人にも無き人にも、要するにその地位財産の如何に拘らずあらゆる種類の人々に褒めそやされ、天下一般に喜んで讀まれる書物が――それが嘘ぢやと！　それのみか殊にその書物は如何にも眞實らしく見えるものを、卽ちその父も母も國も親族も年代も場所も、また一人なり大勢なりの騎士によつて成し遂げられた事蹟を、ば序を追うて一日々々と記して居るものを。貴方、お黙りなされい。そんな不謹愼な言葉を吐くものではござらんぞ。今日只今貴方に對して分別ある人間らしくなされいと御忠告申すから、それにお從ひ下されい。たゞ貴方はあの書物を讀まれるがよい、さうすればあれから興へられる面白味が分りませうわい。まア考へて御覽なされ、たとへば今こゝで我々の眼前に次のやうなことが現はれるとしたら、それより面白い見物があらうか？　卽ちこゝに深い泡立つ巨大な湖があつて、そこには大蛇小蛇蜥蜴の類がうようと群がり、その上に兇猛な恐ろしいありとあらゆる生き物が泳ぎ廻つて居る、するとその湖の眞中から哀しげな聲が聞えて來て、「おゝ騎士よ、この恐ろしい湖を見て居る御身は何人であらうとも、若しこのほの黒い浪の下に隱されてある寶を手に入れようと思はゞ、おん身の雄々しき心の勇氣を現はして、この暗く渦巻く水の唯中に身を投げよ。さうせずばこの無限の闇の下に横たはる七人の妖精の七つの城に收めてある數々の大不思議を見ることは叶ふまいぞよ。」と言ふ。するとその騎士は殆んどまだその恐ろしい聲

の終らぬうちに、深く考へる暇もなく、わが身を曝すその危險を思ひ廻らすこともせず、また身に着けて居る重い鎧さへ脫ぎ取らずに、神と愛する婦人とに身の安全を祈りながら渦巻く湖の眞中へ躍り入る。そしてわが身の運命の成り行くすべも知らず、思ひも寄らぬ時にエリジア樂園の野邊もこれとは比べられぬやうな、花咲き匂ふ牧原に身は居るのぢや。そこでは、大空は遙かに澄み渡り、日輪は不思議な光りを以て照り輝き、眼にはあざやかな綠葉の木々の茂みが映つて、その青々しさに身心を恍惚たらしめる。その間に投げかはす枝々の間に、彼方此方と飛び交ふ數限りない美しい翅の小鳥どもの美しい自然のまゝの囀りは、聞く耳を慰める。此處には水晶水のやうな透明な小川があつて、その水は節はれた黃金とも至純の眞珠とも見える細かな砂や白い小石の上を潺湲と流れて居る。其處には樣々の色した碧玉や磨き立てた大理石で巧みに拵へられた噴泉が見えるし、此處には今一つ鄙びた風のが見える。それは小さい蛤貝の殼や螺旋狀をした白や黃色の蝸牛の住宅などがわざと工夫をこらして不秩序に置かれ、しかも煌めく水晶石や不透明の綠玉石の碎片の中に混つて居るので、趣に富んだ細工は神に入り、技は自然を模しながらも自然を凌駕するかのやうに見えるのぢや。するとその騎士の眼には、思ひがけなく堅固な城廓か華麗な宮殿かゞ見えて來る。その壁は黃金の大塊より成り、その數々の櫓は金剛石、その門は風信子石ぢや。一口に言へば、それを拵へてある材料は金剛石や紅寶石や紅玉石や眞珠や黃金や綠玉石に過ぎないが、しかもその技術が一段と珍しいので、その建築は實に驚くべきものである。こんなものを殘らず見終つてから、さて更に神往き魂飛ぶのは、そこの城門から出て來る、はでやかに華やかに裝うた一群の處女を見ることぢや。その有樣をもし今描者が、あの物語などに記してあるやうに描き出さうとしたとて、それこそ到底及ばぬことぢや。やがてその殘らずの處女たちのうちで長と見える一人の處女は、この渦巻く湖に飛び込んだ勇敢な騎士の手を取つて、一言も口をきかずに、その立派なお城か宮城へ案內し、母親に生んで貰うた時のやうにその騎士を眞つ裸かにして、微溫たかい水に沐浴させ、身體ぢうに薰のよい軟膏を塗り、思ふ存分匂はせ薰らせたこの上ない柔かい薄絹の肌着を着せますのぢや。その間にいま一人の處女がやつて來て、騎士の肩から長袍をかけてくれる、その長袍はどう安く見ても一市だけか或ひはそれ以上の値打ちがあるといふことです

わい。やがてそれがすむと、その騎士は別室に案内される、そこにはたゞ不思議と驚き歎ずるばかりであるほどに飾り立てた食卓がある。そして手を洗ふには、琥珀や芳香ある花から絞り取つた水を掛けられ、象牙の椅子に坐らせられ、處女等は皆深く沈默して給仕をする。また如何にもおいしさうに拵へられた種々様々の馳走をば、どれに手を着けようかと選擇に迷ふ程持ち運び、誰が何處で奏して居るかは分らんが、食事の間ぢう、音樂の奏せられるのを聞く、といふに至つては如何ばかり心往くことでせう。やがて食事が終り食卓が片づけられると、その騎士は椅子に倚つて、恐らく平生の通り齒を剔じつて居る。すると外のより遙かに美しい一人の處女が不意にその室の戸口から入つて來て、騎士の傍に坐り、この城の眞相や、自分が魔術にかけられて此處に留められてをることや、その外この騎士を驚かせまたこの騎士の傳記を讀む人を吃驚させるやうなことを物語る。しかし拙者はこの事はもうこの上詳しくは話しますまい。つまりこれから推して、人の讀むどんな武者修行者の物語のどこの一節を何人が讀まうとも、喜びと驚きに充たされるといふことが分りませうがな。そこで貴方、拙者の勤めを聽きなさい。そして拙者が先きに言うた通りかういふ書物をお讀みなさい。さうすれば貴方がどんなに氣が慰いで居られうとも、その爲めに氣が晴れて、元氣が滅入つて居るならば氣を引き立てゝくれませう。拙者としてはこれだけのことは言へますのぢや　つまり拙者は既に一個の武者修行者に成つて居りますので、勇敢にも殷懃にも寛大にも上品にも寛潤にも鄭重にも、剛毅にも柔和にも堅忍にもなつて、艱難をも牢獄をも魔術をも忍ぶことを學びましたのぢや。そしてたとへ拙者はほんの暫くの間こそ狂人のやうにこの檻に閉ぢ籠められては居りましたが、もし天が拙者を扶けまた運命が拙者を妨げぬなら、この腕の力に依つて何處かの國の王になり、この胸に懷いてをる感謝や慈悲を現はすことが出來るやうにと望んで居りますわい。貴方、全くのところ貧乏人はいかに強くその考へを懷いてゐても、自分の慈悲の美德を何人にも示すことは出來ませんからの。また心の中でばかりの感謝といふものは、丁度行ひなき信仰が死んでをるやうに、死物ぢやでの。この理由から拙者は、幸運がこの身に皇帝になるやうな機會を早く與へて呉れゝば嬉しからうと思ひますぢや。さうなれば自分の友人たちに對して、いや取り分け拙者の從士で世にまたと無い好漢サンチョ・パンザに對して、この心

を善行に現はして見せませう。そしてもう永いこと約束して居る一つの國を喜んでこの男に與へませう。たゞこの男に自分の領地を治める能力がないかと氣遣うて居りますわい。』

サンチョーは主人のしまひの言葉を小耳に挟んだ。そして主人に言つた、『ドン・キホーテの旦那樣、貴方しつかり骨折つて下さるやうにして下さりませ、貴方樣はそれを何遍も約束なさつて、私は長いこと待つとりますんぢや。私にそれを治める腕がないといふことは決してござりません。またさうであつたにしたところで、世の中にや、年に澤山の金拂うて領地を賃借する人があるちふ話でござりますからの。さういふ人たちが、政治向きの事はして呉れますから、領主樣は兩脚伸ばして、自分ぢや何の面倒も見ずに納めて來る年貢を受けなさるのぢや。私がしたいのはそれでござりますぞい。私は細かい事はほじくり廻さずに、早速皆な仕事から手を洗ひませう。そして公爵樣のやうに地代を取つて、暢氣に暮らして行きましよわい。』

『そりや、サンチョーさん、』と役僧は言つた、『たゞ歲入を請け取るといふことだけならそれで好いがの。しかし領地の領主は司法の府に臨まねばなりませんよ。そこでは才能や健全な判斷が必要になります。殊に眞實を發見する確固たる決心が必要です。若し始めにこれが缺けてゐたら、中頃やお終ひは何時も間違うてしまひますのぢや。そこで、神樣は狡猾な人の惡計を無效になさるやうに、いつも質朴な人の正直な志を助けて下さるのぢや。』

『そんなむづかしい理窟は私にや分りませんよ、』とサンチョー・パンザは答へた、『私は唯、その國が私の手に入りさへすりやその治め方は分るぢやらうと思うとりますわい。何故と言うて、私も他の人同樣に魂も人並の身體も持つとりますからの、他の領地の王樣に劣らず私も手前の領地の王樣になれましよぞい。さうなりや私の好きなやうにしたいもんで、好きなやうなことして樂しみたいもんで、そして樂しんで滿足したいもんでござりますわい。人は滿足してしまへばもう何の慾もござりません。何の慾もなくなりやもうそれでお終ひでござりますわい。そこでその國が手に入りますやうに。貴方さんも御機嫌よう。そして盲目が盲目に言うたやうに、お互に成り行きを見ませうよ。』

『サンチョーさん、お前さんの言うて居ることも惡い考へぢやない、』と役僧は言つた、『それでもやつぱりその國のことに就いてはまだ言ふべきことが澤山ある、』

それに對してドン・キホーテは答へた、『何がまだ言ふべきことがあるのぢや。拙者は唯あの偉大なゴールのアマディスがその從士をインスラ・フィルメの伯爵に封じたのを學んで、その先例に從ふまでのことぢや。そこで少しも良心の迷ひなくサンチョー・パンザを伯爵にしてやりますわい。この男は今まで武者修行者の持つてゐた最良の家來の一人ぢやからの。』

役僧はドン・キホーテの言つた筋の立つた痴言(もし痴けごとに筋が立つものとすれば)に、吃驚りした　彼が述べた例の湖の騎士の冒險の話しぶりや、讀んだ書物の中の念入りの嘘僞りが彼に與へた影響などに吃驚りした。そして最後に役僧は、その主人の約束した國を手に入れたいと一心に思うて居るサンチョーの人の好さに驚いた。

折柄、先きに宿屋へ荷駄騾馬を伴れに行つた役僧の下男等が既に戻つて來たので、一枚の毛氈をひろげて、草原の綠の草を食卓として、皆木蔭に座を占めて食事をした。それは既に述べた通り、牛牽きにこの場所を利用させてやらう爲めであつた。彼等が食事をしてゐると、突然氣たゝましい物音や鈴の音が聞えた。それはすぐ近くにある荊棘や繁つた灌木の間から聞えたやうに思はれた。するとその途端に、身體一面に黑や白や鳶色の斑點のある美しい山羊が一匹その森の中から跳び出して來るのを見た。その山羊の後からは、山羊飼ひが、それを呼び止めて檻へ歸らせるいつもの呼び聲を出して呼びながら從いて來た。その逃げ出した山羊は物懐ぢしておびえて、恰も保護を求めるかの如くこの一團の方へ走つて來て、やがてじつと立ち止まつた。そこへ山羊飼ひがやつて來て、その角を掴みながら、宛ら分別判斷を備へて居るものに言ふやうに　山羊に向つて話しかけた、『うろつき者よ、うろつき者よ。「斑」よ、「斑」よ。お前はどうして跛ひいて此處まで來たのぢや？　おい娘や、狼でもお前を脅したのか？　容貌よしよ、一體どうしたのか言うて呉れんかい？　ぢやがな、お前は雌ぢやから、じつとして居れんといふ外にや、何もわけはあるまいよ！　お前の出來心にや戀り〳〵ぢや、またお前が眞似る外の奴等の出來心にも戀り〳〵ぢや！　よい娘ぢやで、歸つて來い、歸つて來い。お前はさほど滿足ぢやなうても、とにかく檻の中か仲間と一緒に居るかすりや大丈夫ぢやよ。皆を番して導かにやならんお前がかういふ風に迷ひ出したら、皆はどうなるんぢや？』

この山羊飼ひの言葉はそれを聞いた一同を面白がらせた

が、彼僧は取り分け面白かつた。そこで彼は山羊飼ひに言つた、『まア〳〵お前さん、さう急きなさるな。さう泡食つてその山羊を檻へ驅り立て〻歸ることはない。そりやお前さんの言ふ通り牝ぢやから、お前さんが幾らそれを防がうとしなさつても、その自然の本能に從ひますからのう。まア一口食べて一杯飲みなさい。さうすりやお前さんの苛ら立ちも靜まらうし、またその中にや山羊の氣も落ち着きませうわい。』とかう言ひつ〻彼僧は肉叉の先きに冷めたい兎の腰肉をのせて山羊飼ひに渡した。

山羊飼ひは禮を言つてそれを受けた。そして一杯飲んで臀を落ち着けてから、かう言つた、『今のやうに私がこの獸へあんな眞面目呉つたことを言うたとて、貴方樣がたは私を阿呆ぢやと思つて下されては困りますぞい。打ち明けて申しますとな、私の使うた言葉にや少し祕密がありますのぢや。私は馬鹿でござりますがな、と言うて人間にすることと獸にすることの差別を知らんほどの馬鹿ぢやござりませんわい。』

『そりや私もさうぢやと思ひますよ、』と牧師補は言つた、『深林は學者を育て、羊飼ひ小屋は哲學者を宿すといふことは、身に覺えがあるので私もとうから知つて居りますでな。』

『ともかくも、貴方樣、』と山羊飼ひは答へた、『羊飼ひ小屋にや身に覺えのある人が泊りますよ。でこれが本當ぢやとよく皆さまへ承知してお貰ひしたいので、訊ねられもせんのに出しや張るやうでござりますが、もし貴方樣がた御退屈なさらずに、一寸の間聞いて下さるなら、本當のお話を一つ致しませうわい。さうすりや私の申すこともこの旦那の〻と牧師補を指さしてお言葉も確かになりませう。』

それに對してドン・キホーテは答へた、『その事柄にはどうも武者修行道くさいところがあると思ふので、お前さん、拙者はこの上もなく喜んで聞きますわい。またこの紳士がたも皆非常に利發な方ばかりで、お前さんの物語はきつとさうであると思ふが、人の心を興がらせ面白がらせ樂しませるやうな珍らしい新奇な物事を好かれるから、やつぱり喜んで聞かれようわい。そこでさア始めなさい。拙者等は殘らず聞かうと待ち構へて居りますわい。』

『私は自分の杙を引いて行くから（特技的遊戲に於いて一人がその遊びから退く時にいふ言葉、自分の所得を以て退く、の意）』とサンチョーは言つた、『そしてこの饅頭を持つてあそこの小川へ行つて、三日分食ひ溜めしときましよ。私の旦那のドン・キホーテ樣の言はつしやることを聞けば、武者な。』

修行者は何かの拍子で六日の間も出路の分らんやうな深い森の中へ入り込むことが何度もあるので、武者修行者の家來は折さへありやこの上は詰らんといふまで食うて置かにやならんからな。それでもし腹にもどつさり詰めて置かず旅嚢にもうんと貯めて置かにや、そんな事も度々あるのぢやが、乾枯びた木乃伊になつて森の中に立往生するかも知れんわい。』

『サンチョーよ、そりやお前の言ふ通りぢや、』とドン・キホーテは言つた、『お前の好きなところへ行つて、精一杯食ふがよい。拙者はもう澤山ぢやで、たゞ心にさへ糧を與へればよいのぢや。それはこの人の物語を聞けば得られることぢや。』

『私等も皆さうしませう。』と役僧は言つた。そして山羊飼ひにその約束の話を始めるやうに頼んだ。

山羊飼ひは角を摑んで捕へてゐた山羊の背中を二つ三つ平手で敲いて、かう言つた、『「斑」よ、私の側へ坐るんぢや。檻へ歸るにやまだ間があるからな。』山羊は彼の言葉が分るらしかつた。卽ち主人が坐ると、自分も靜かにその側に身を伸ばして、主人がまさに話さうとしてゐることを私も十分注意して聞きますといふやうに、彼の顏を見上げたのである。そこで山羊飼ひは次のやうにその物語を始めた。

第五十一章　はドン・キホーテ護送中の人々に話した山羊飼ひの物語を述べる。

『この谷から三リーグのところに一つの村があります。それは小さいけれどもこの近郷で一番富んだ村の一つです。そこになか〳〵裕福な一人の百姓が住んで居りましたが、その人は非常に人に敬はれて居りました。金持ちであれば敬はれるのが當り前ですが、その人は自分の有つてゐた財産のお蔭といふよりは、その德の爲めに敬はれて居りました。しかしそれにも增してその人を仕合せにしたものは、自分でも言うとつた通り、非常な容貌よしの、珍らしく利發な、やさしい操がたい娘を一人有つて居つた爲めでした。それでその娘を知る人見る人は誰も皆、この娘が神樣や天然から受けた並ならぬ惠みに驚くばかりでありました。子供の時から美しかつたが、大きうなると共にその美しさも增して、十六の歲にはいかにも美しうなりました。その美貌の評判はあたり近郷殘らずの村々へ擴がりました——いや、私は何であたりの村々とだけ言ひませうぞ？　その

評判は遠い市々へも、また宮中や、あらゆる階級の人々にまで傳はつて、その人々はまるで何か珍らしい希代なものか、何か不思議な業をする肖像でも見るやうに、四方八方から見に來ました。

『父親はその娘をよく看守りましたし、またその娘も自分の身を守りました。若い娘を保護するには、自身本人の身だしなみに越した錠前も番兵も門もありませんからの。その父の身代やその娘の美貌やで、遠くの人も近所の人も大勢その娘を女房に貰はうとしました。しかしこんな値打ちのある寶を有つて居る人には如何にも尤もな次第ぢやが、父親はこの無數の婿がねのうちの誰にわが娘を任せたらよいかと惑うて心を決め兼ねました。私もさういふ無理ならぬ願望を懷いて居つた大勢の中の一人でございました。そして私は同じ村でもあり、血統は正しいし、若い盛りではあり、財産も非常に裕でありましたので、なか〳〵成功の望みがありました。いま一人私とは同じ村で同じやうな資格を備へた希望者がありました。それで父親は私ら二人のどちらにしても娘の爲めには幸ぢやと思うて、孰れにしようかと、とやかうその選擇に苦しみました。そこでその當惑から脱れよう爲めに、これをレアンドラ（といふのが、私をこんなに不仕合せにした金持ちの娘の名前ですが）、その娘の心に任せようと決心しました。つまり私らは二人とも對等ぢやで、その選擇は可愛い娘の心のまゝに委せようと思ひましたのぢや——これは自分の子供を世に一人立ちさせうと思ふ凡ての父親が學ぶに足る仕方です。何も私は、卑しい惡いものをもその氣まゝに選ばせねばならぬといふのではありません。たゞ善いものを子供らの前に並べて、その好きなやうに善い選擇をさせよと言ふのです。レアンドラが孰れを選んだか私には分りません。私の知つてをるのはたゞ、父親が娘の歳の行かないことを楯に、自分も責を負はず私らを斥けもせぬやうな曖昧な言葉で、私らを二人とも外したといふことだけです。私の競爭者はアンセルモーといひ私はユーゼニオーと申します——どうぞこの悲劇に出る人物の名前を覺えて居つて下さるやうに。その悲劇の大詰は、恐ろしいに違ひないと明かに豫想はされますが、まだあやふやの裡にあるのです。

『丁度その頃、私らの同じ町の貧乏な小作人の息子で、ギセンテ・デ・ラ・ロサといふ者がやつて來ました。そのギセンテはイタリーでは兵隊、外の處では潛水夫を勤めて居りましたが、そこから故郷へ歸つて來たのです。この男は十二

位の子供の頃、ふと私らの村の道をその仲間と一緒に通りがかつた或る隊長にさらはれて行きまして、十二年してから若者になつて、いろ〳〵の色に彩どられた兵隊服を着て、硝子の飾り玉や鋼鐵の鎖などで身體一面を飾り立てゝ戻つて來ました。そして今日は一つの派手な着物で、明日はまた違つた着物で出歩きました。しかし皆、やにこい、びか〳〵した物で、地の悪い安物ばかりでした。生れつき意地の悪い百姓どもは、仕事のない時は意地悪の固りですから、それを殘らず見て取つて、その男の美しい服や寶玉類を一々注意して見て、つまりその男の持つてゐるのは色の違つた三枚のシャツと、それに對の甲掛けや長靴下だけぢやと看破りました。しかし彼はそれだけの物をいろ〳〵に配合させ結合させましたから、もし百姓どもがそれを渦定せなんだなら、彼は十枚以上の着物と二十以上の羽飾りを見せびらかしたと誰しも請合ひましたらう。彼の着物のことをこんなにお話ししても、これは、この物語に大變關係がありますので、決して用のない無駄ごとぢやと思うては下さるな。彼はいつも村の廣市場の大きい白楊の下の腰掛に坐つて、自分のいろ〳〵の手柄話をしては、聞く人々の口をあんぐり開けさせて足を止めさせました。この地球の上には彼が見なんだ國は一つもなく、また彼が從軍せなんだ戰爭は一つもありませなんだ。彼はモロッコやテュニスに居るよりももつと澤山のムーア人を殺し、またその話によれば、ガルシラソーとディエゴー・デ・パレデスと、その他彼が名前をあげた幾百の勇士等よりも數多く一騎打をして、しかも戰ふ毎に血一滴も失はずにいつも勝利を占めて來たのです。さうして彼はまた自分の幾つもの傷痕を見せました。それは何の痕だか見分けは付きませなんだが、彼はそれをいろ〳〵の衝突や會戰の際に受けた鐵砲傷ぢやと申しました。最後に彼は途方もない横着な風で、自分の同輩にも自分の身元を知つてゐる人たちにさへも、「お前」と呼びかけて、そして「私のこの腕は私の先祖ぢや、そして私の手柄は私の子孫ぢや」とか、「私は兵隊ぢやで王様と同じぢや」とか威張り散らしました。かういふ法螺に、かて加へて、彼は些とばかり音樂が出來ました。そして賑やかに六絃琴を彈きましたが、或る人は「あいつは六絃琴に物を言はせる」と言うた位です。いや、彼の藝はそれだけでは盡きません。彼はまた詩人めいたところがあつて、村に起るどんな詰らんことでも二三里の長さの唄に作りました。

『さても私が述べましたこの兵隊は、このギセンテ・デ・ラ・

ロサは、この悪黨、この色男、この音樂者、この詩人は、ちやうどその廣市場に面してゐた家の窓から、レアンドラにしば〳〵見かけられ注意されて居りました。彼の見かけの好い着物のぴか〳〵するのがレアンドラの氣に入り、彼の唄が彼女の魂を奪ひ、彼は、自作の唄はどれでも二十許りの寫しを作つて人にやりましたから、彼が自ら話したその功名話はレアンドラの耳に入りました。一口に言へば、疑ひもなく悪魔が手管をした通り、男の方ではまだこの女と戀が出來るといふ已惚の影もさして居らんうちに、女の方から戀しました。一體戀ごとでは、婦人の意が味方になつて居る場合ほど容易く成り立つことはありませんので、レアンドラとギセンテは、何の困難もなく互の思ひを通じました。そして數多い求婚者等の誰一人一向にまだそのたくらみを感づかぬうちに、レアンドラは既に事を運んで、自分の懷かしいといふ父親（母親はなかつたのです）の家を脱け出しました。そして例の兵隊と共に、村から姿を隱しました。その兵隊は自分が威張り散らしてゐた澤山の手柄よりも、今度こそ一番得意な手柄をしましたのさ。村中の人人も、またこれを聞く殘らずの人々も、事の意外に驚きました。私は仰天しアンセルモーは茫然自失し、彼女の父親は悲歎に暮れ、その親類どもは憤り、その筋の人らは騷ぎ出し、「神聖救濟組合」の巡邏たちは武裝しました。人々は道を探し、森の中も何處も捜しましたが、三日目になつて、とある山の洞穴の中で氣まぐれなレアンドラを見付け出しました。あの娘は肌着一枚に剥ぎ取られて、家から持つて逃げた金も貴重品も皆奪はれて居りました。一同してその不幸な父の許へ伴れ歸つて、身の災難のことを訊ねると、レアンドラは強ひられずに白狀しましたが、つまりギセンテ・デ・ラ・ロサは彼女を瞞して、結婚するといふ約束の下に世界中で一番富裕であり一番面白い市――ネープルスへ伴れて行くからと言つて、父の家を逃げ出させたのです。無分別な誰かられてゐたレアンドラはそれを信じて、父の物を盜み、そして姿を隱した晩に悉くそれをあの男に渡しました。それから彼に伴れられて嶮しい山に行き、そして人々に見付けられた例の洞穴の中へ閉ち籠められたのです。尚、彼女の話によると、あの兵隊は持ち物は殘らず奪ひ取つたが女の操は汚さずに、そのまゝその洞穴に打ちやつて行つて了うたのです。これはいよ〳〵ます〳〵人々を驚かせました。私たちに取つては、その若者の節操を信ずることは容易でありませんだ。しかしレアンドラは一生

懸命にそれを擁護しましたので、落膽してゐる父親も、それをせめてもの慰めとしました。父親は、一度失はるれば未來永劫回復されない寶が、自分の娘に殘されてある以上は、その外の盜まれた物は何とも思はなんだのです。レアンドラが姿を現はした同じ日に、父は私らの眼から彼女を移して、近くの町の尼寺へ伴れて行つて閉ぢ籠めました。それは時さへ經てば娘の身にふりかゝつた不名譽も幾らか消えようとの望みからです。レアンドラの歳の行かぬことは、その過失に對して一つの申し譯になりました、少くとも彼女が善からうが惡からうが關係のない人にはさうでした。しかし彼女の拔け目なさ、悧巧さを知つてをる人たちは、彼女の不行跡を世間知らずのせゐにはしませなんだ。却つてその浮氣性や、またその大部分は氣まぐれな檢束のない女の持ち前の氣質のせゐにしました。

『レアンドラが姿を隱しますと、アンセルモーの眼は盲になりました、いや、兎に角何を見ても樂しくなくなつてしまひました。また私の眼とても、レアンドラが居らぬ間は眞暗の中に居つて、眼を喜ばせるもの〻方へ向ける一筋の光線もありませなんだ。私たちの氣鬱はだん〳〵と烈しくなり私たちの辛抱はだん〳〵減りました。私たちはあの兵隊の美服を呪ひ、レアンドラの父の不注意を罵りました。遂にアンセルモーと私とは村を見棄てゝこの谷へ來ようと相談しました。そしてアンセルモーは自分の澤山の羊の群を、私は私の山羊の大群をおの〳〵養ひながら、この森の中に日を送つて、互に悲しみを吐き出しつゝ、共に美しいレアンドラを讃美する唄を歌ひつゝ、また彼女を罵りつゝ、或ひは獨りきりで溜息を吐いて、孤獨の中に自分等の悶々を天に愬へて居るのでございます。私たちの倣うて、澤山レアンドラの戀人等が、この荒れた山中へ參りまして、私たちのやうにして日を送つて居ります。その數の多いこと〻言うたら、誰でも此處があの牧歌に出るアルカディアになつたかと思ひませう、それほど此處は羊飼ひや羊の檻で一杯になつて居ります。またこゝでは、何處へ行つても美しいレアンドラの名前の聞かれない場所とてはありません。此處では或る者があの女を呪うて氣まぐれな浮氣な不貞腐れよと呼べば、彼處では他の者があの女を脆くて輕薄ぢやと罵つて居ります。此方ではあの女を大目に見て恕せば、彼方ではあの女を嘲り罵つて居ります。或る者があの女の美しさを讃めれば、他の者はその人柄を攻擊して居ります。つまり皆があの女を罵り、皆があの女を歎美して居

ります。そしてその夢中になつた果てはかういふ始末です、即ちあの女と一と言も口を利いたこともなくてあの女の無情をかこつ者があり、またあの女は誰に對しても嫉妬の種は蒔かなんだのに、嫉妬の焔に身を焦して歎き悲しむ者さへあるといふ次第です。と申しますのは、私が先程も申したやうに、あの女は情を通ぜぬうちにはその不行跡を世間に知られたのですからな。巖の隅も、小川の邊も、森の下蔭も、一ヶ所として、そよ吹く風に胸の悲しみを物語る羊飼ひのうろつき廻つてゐないところはありません。山彦の響く所には必ずレアンドラの名が聞えて居ります。山山は「レアンドラ」「レアンドラ」で鳴り渡り、川々はそれをさゝやいてゐます。そしてレアンドラは私たち一同を惑はし迷はし、望みなきに望ませ、何を心配するとも分らずに心配させます。この馬鹿げた仲間のうちで唯一人ほんの少しばかり、そしてつまり一番餘計に正氣のあるらしいのは私の競爭者のアンセルモーです。この人は懲ぶべきことがいろ〳〵ありながら、たゞあの女と別れたことだけを懲へて、上手に彈くリーベック（一種の胡弓）に合せて、いかにも巧な歎きの唄を歌ひます。私はそれと違つたもつと容易い、そして私の考へでは、もつと賢いやり方を取ります。それはつまり婦人の輕薄や、不貞や、表裏のある掛け引きや、破約、僞書など、要するに婦人らがその愛情や、すき好みを決める時に現はす思慮の不足を罵りますのぢや。皆さん、これこそ唯今私がこゝへ參つた時に、この山羊に向つてあゐふ言葉や素振を用ひた理由です。つまりこの山羊は私の檻で一番良いのですが、これが牝なので私は蔑んで居るのです。皆さんへお約束した私の物語はこれだけです。私の話しぶりは氣が利かずとも、皆さんをお歡待することには氣を利かしませう。私の小屋はすぐ近くです。小屋には新しい牛乳もおいしい乾酪もありますし、舌にも味よく眼にも美しい、うまい樣々の果物もありますよ。』

第五十二章　ドン・キホーテと山羊飼ひとの喧嘩。附りドン・キホーテが汗を流して目出度き結末に到らしめたる行者等との稀有の冒險。

その山羊飼ひの物語は凡ての聞き手に大滿足を與へた。取り分け彼僧はそれを喜んだ。彼はその話しぶりに特別の注意を拂つて氣を附けた。それは田舍者の山羊飼ひの風と

は打つて變つて、垢ぬけのした都會の才子らしいところがあつた。それ故役僧は森が學者を育てると牧師補の言つたことは全く本當だと言つた。彼等は殘らずユーゼニオーの爲めに力を藉さうと言つた　しかしその方にかけて最も勞を惜まぬ者はドン・キホーテであつた。彼は山羊飼ひに言つた、『山羊飼ひさん、もし拙者が冒險を企てゝもよい境遇にさへ居りましたら、誓つて、今といふ今、お前さんの爲めに出かけて行つて、その尼寺からレアンドラを救うて上げるのぢや(必ずその婦人は、あそこに厭や〳〵囚へられてをるのぢやから)、たとへ尼僧やその他の者が私を妨げようとしても。そしてお前さんの意のまゝ好きのまゝになさるやうに、お前さんの手へ渡すのぢや。尤もそれは、凡そ處女には如何なる暴力も加ふべからずと記してある騎士道の掟に從うてのことぢや。それでこの惡性の魔法使ひの力がいつまでも拙者をかやうに囚へることなく、性質の善い別の魔術使ひの力がこれに打ち勝つやうに、主なる神樣にお縋り申して居りますのぢや。その曉には拙者は屹度自分の職掌柄その責めを負うて居るので、お前さんに味方して助けて上げませう。拙者の職務は弱き者窮せる者を扶けることより外はないのぢやからの。』

山羊飼ひはドン・キホーテにじつと眼をつけて、その情けない容貌風采を見て不思議で堪らなかつた。そこでその傍に坐つてゐた理髮師にかう訊ねた、『貴方、あんな姿をしてあんな調子に物を言ふが、一體こりやどういふ人ですかな？』

『これこそ別人ではありません、』と理髮師は言つた、『即ち不義を破り不正を正し、處女を保護し巨人を恐れしめ戰に勝利を得る名高いラ・マンチャのドン・キホーテといふ人ですよ。』

『そりや何だか武者修行の書物の中で讀む名前に似て居るやうですな。あゝいふ連中は、この人が今してござるといふやうなことを殘らずしましたよ。尤も、貴方が冗談言うて居られるか、さうでなきやこの紳士が頭の中に空き間をもつてをられるかぢやと私は思ひますがな。』と山羊飼ひは言つた。

『お前は大惡黨ぢや、』とドン・キホーテは言つた、『お前こそ空つぽの阿呆ぢや。拙者はお前を生んだ淫亂者の阿魔つちよよりか餘つ程賢いのぢや。』そして言葉から行爲に移つて、彼は手近にあつた一塊のパンを摑み取つて山羊飼ひの顏へうんと投げ付けた、それがその鼻柱を低めるほどの勢

ひで。冗談を解しなかつた山羊飼ひは、自分がこんなに眞劍で辛い目に逢はされたので、毛氈にも卓布にも食事中の人々にも構はずに、ドン・キホーテに跳びかゝつて咽頸を兩手で摑み、あはや彼を締め殺さうとしたが、その刹那サンチョー・パンザが救ひに來て、山羊飼ひの兩肩を摑みさま食卓の上へ投げ出したので、皿は割れコップは碎け、食卓の上にあつたものは殘らずでんぐり返つて撒き散らされてしまつた。ドン・キホーテは身が自由になつたので、山羊飼ひの上に乘しかゝらうとしたが、顏を血だらけにして、うんとサンチョーに蹴られたその山羊飼ひは、四ん這ひになりながら血腥い復讐をしようとて食事用の小刀を捜しまはつてゐた。しかし役僧や牧師補はそれをさせなかつた。けれど理髮師はドン・キホーテを山羊飼ひの下にするやうに工夫してやつた。そこで彼は鐵拳の俄か雨を降らしたので、彼の顏と同じくこの哀れな騎士の顏からも強かに血汐が流れ出た。役僧と牧師補は噴き出しさうになつてゐるし、巡邏どもは面白がつて跳ね廻つてゐた、そしてどちらの側からも、宛ら犬の噛み合ひの時にするやうに、雙方をけしかけた。サンチョーは、役僧の下男の一人に摑まれてゐてふり離すことが出來ぬので、主人の加勢に行けもせず、獨りでやきもきしてゐたのである。

撲り合つてゐる二人の拳闘者を除いて、他の人々は殆らず大喜びで面白がつてゐる折柄、悲しげな調子に響く喇叭の音が聞えて來たので、皆その音の聞えて來たと思はれる方を眺めた。しかし、それを聞いて一番興奮した者はドン・キホーテであつた。彼はひどく無念ながらも山羊飼ひの下になつて、したゝかに毆られてゐたが、山羊飼ひにかう言つた、『おい惡魔さん（お前は拇者に勝つ位の力を有つてをるからにや惡魔に相違ないのぢや、）たつた一時間だけ休戰することに承知して貰ひたい。あの向うから聞えて來るあの嚴かな喇叭の響きは、何か新しい冒險に拇者を呼び立てて居ると見えるからの。』もはや毆つたり毆られたりに厭いてゐた山羊飼ひは直ぐさま彼を放した。そこでドン・キホーテは立上つて、例の音の聞えた方へ眼を向けた。すると突然、行者のやうに白衣を着た數人の男がとある丘の坂路を降りて來るのが見えた。

事の眞相はかうであつた、その年は雲が大地から濕氣を取りあげてしまつたので、この地方の各村の人々は各々行列組や祈願組や苦行組を組織して、神がその慈悲の御手を開かれて雨を降らして下さるやうに祈り求めてゐたのであ

る。この目的で直ぐこの近くにある一村の人々が、この谷の一方の側にある神聖な行場へと行列をして行くところであつた。ドン・キホーテはこれ等の行者の異様な服裝を見ると、以前にもしば〳〵それを見たことのあるのは忘れて、これこそ一つの棒事であつて、しかもこれを處分するのは騎士たる自分の責であると、思ひ込んだのであつた。それに彼等は黒い布で蔽うた一つの尊像を携へてゐたので、それこそこれらの悪黨ども無禮な泥棒どもが、身分の高い婦人を引つ攫つて行くところだと考へて、ます〳〵その觀念を確かめたのである。この考へが湧くや否や、折柄思ふまゝに草を食つてゐるロシナンテのところへ、ドン・キホーテは精一杯に走つて行つた。そして鞍の前輪から面戰や楯を外して、瞬く間に面勒を掛け、サンチョーに劍を持つて來いと呼びかけつゝロシナンテに打ち跨り、楯を片腕に緊と取つて、傍に立つ人々に大聲で呼びかけた、『さア身分あるかた〳〵、世に武者修行の道に從ふ騎士の存在が如何に必要であるかゞ分りませうぞ。さアあそこに生捕られて行かるゝあの立派な婦人を救うて武者修行者が尊敬に價ひするか否かを見せて上げませう。』さう言ひつゝ彼はロシナンテに足を當てた——といふのは拍車がなかつたので——そして疾駈け歩で（この信憑すべき物語には、ロシナンテが見事に疾騙するとは一度も書いてないのだが）、例の行者たちに出會はうと駈け出した。尤も役僧や牧師補や理髪師はそれを遮り止めようと駈け寄つたが、それは彼等の手に合はなかつた。またサンチョーが次のやうに叫んでも留まらなかつた、『ドン・キホーテの旦那様、何處へ行かつしやるぞい？　何ちふ麗にさゝれて貴方様は私らが天主教の信心に双向ひをなさるのぢや？　やれ〳〵情けない！　氣をつけなされ、そりや行者たちの行列でござりますぞい。その輿の上にのせてその人等の運んで行くお姫様は、そりや清淨無垢な聖母様でござりますぞい。旦那様、することに氣をつけて下されよ。今度こそは、無我夢中で騒ぎ立てると言はれても仕様がありませんぞよ。』サンチョーの骨折りには効がなかつた。主人はその白衣の人々のところへ行つて、黒衣の婦人を救はうと一心になつてゐたので、一言も聞えなかつたからである。またよし聞えたとしても、それが王様の命令であつたにせよ、彼は取つて返しはしなかつたであらう。彼は行列のところへ着いたのでロシナンテを停めた。この馬はもう疾くから一と息休みたいと思つてゐたのである。彼は嗄れた興奮した聲で叫んだ、『面隠を隠し居るからには

恐らく良民ではあるまい、さア拙者の言ふ事をよう氣をつけて聞くがよい。』聖像を運んでゐた者等が先づ第一に止つた。祈禱を唱へてゐた四人の僧侶のうちの一人は、ドン・キホーテの異樣な風體や痩せこけたロシナンテや、その他樣樣の可笑な樣子を見て吃驚しながら、彼に答へて言つた、『お前さん、私らのこの一行は皆一身を苦しめてをるので、何か言ひたいことがあるなら手早く願ひませう。二言で言へる位のことなら兎に角ちやが、何か聞く爲めに止ることも出來ねば、またさうする譯もないのぢやからの。』

『拙者はそれを一言で言はうわい。』とドン・キホーテは答へた、『卽ちかうぢや、卽座に、今といふ今その美しい婦人を釋して上げい。そのお方の涙や悲しげな面持は明かにお前たちがその意に反して伴れて行くといふことや、この方に對して、何か非道な凌辱を加へたことを示してをるわい。拙者は、かやうな不義を悉く直す爲めにこの世に生れて來た者ゆゑ、お前たちが、このお方の求めて居られる正當の自由を返して上げぬうちは、此處を一歩も進ませまいぞよ。』

かういふ言葉に依つて聞き手らは彼を狂人に違ひないと判斷した。そして心から笑ひ出した。彼等の笑ひはドン・キホーテの怒りに火藥のやうな働きをした。彼はもはや一言も言はずに劍を引き拔き、その臺を目掛けて突き進んだ。輿を舁いでゐた中の一人は、その荷を仲間の者に任せて置いて、休む時輿を支へる爲めに用ゐる叉になつた棒を振り乍らドン・キホーテに向つて來た。そしてドン・キホーテの力強く打下した劍をその棒で受け止めると、棒は二つに切れたが、その殘つてゐる部分で彼の右の肩をうんと毆つた。この百姓の打擊に對して楯は効をなさなかつたので、哀れなドン・キホーテは見るも氣の毒な風に地べたへのめつた。

サンチョー・パンザは主人のすぐ後からハッハと息も切れ切れに從いて來て居つたが、主人の倒れるのを見て、大聲を出しながら、その人は魔術にかけられた哀れな騎士で、生れてから誰にも害を加へたことのない人だから、もう打つな、とその相手に言つた。しかし百姓が控へたのは、サンチョーのこの叫び聲の爲めではなく、ドン・キホーテが手も足もびくとも動かさないのを見たからであつた。そこで百姓は彼を殺してしまつたと思ひ込んで、慌てゝ上着の裾を帶に挿み、鹿のやうに草原を越えて逃げ出した。

折柄ドン・キホーテの一行は、彼が倒れてゐたところへやつて來た。しかし行者等は彼等が走つて來るのを見て、そ

してその中には、琴を持つた「神聖救濟組合」の巡邏の居るのを見たので、間違ひが起りはせぬかと氣遣つて、皆々聖像の周りに簇がりつゝ、頭巾を刎ねあげて杖を握つた。僧侶たちは各蠟燭を握つた。そして自ら身を護ると共に、もし出來るなら攻めかゝる者どもに眼にもの見せてやらうと決心して敵の攻撃を待ち構へた。しかし幸運は、彼等が待ち設けたよりも良い方へ事件を向けた。といふのは、サンチョーはたゞ自分の身體を主人の上に投げ掛けて、世にまたとない悲しげな可笑しげな泣き聲を揚げる外はなかつたからである。それは彼が主人を死んだと思つたからである。牧師補はその行列について歩いてゐた牧師補と知り合ひであつた。それで互にそれと見て雙方の懸念は無くなつた。こちらの牧師補は向うの牧師補にドン・キホーテの人物を手短に物語つた。そこでその牧師補とその行者の一行は、この哀れな紳士が死んでしまうたかどうかと見に來た。するとサンチョー・パンザが眼に涙を浮べてかう言つてゐるのを聞いた、『あゝ、騎士道の花形よ、たゞ杖の一と撃ちで結構な！貴方樣の御生涯をおしまひなされるとは情ないことぢや、あゝ、御一家の誇り、ラ・マンチャぢうの、いや〳〵全世界の譽れ榮えぢや。貴方樣がなけりや、もう惡いことしても咎める人がないから、この世はわるもので一杯になりませう！　あゝどんなアレキサンダーよりも贔屓でおいでなされた旦那樣！　私のたつた八月の御奉公に貴方樣は海が取り卷いたり圍んだりしとる上等の島を下されましたもの。高ぶる者にはへり下り、へり下る者には高ぶり、危いことには突き當り、亂暴されても忍び、譯もないのに惚れ込み、善を習ひ、惡を懲らし、卑劣を憎み、一と口に言へばたゞ武者修行樣ぢやと言ふより外にはないわい！』

サンチョーの泣き悲む聲でドン・キホーテは正氣づいた。そしてその最初の言葉はかうであつた、『芳ばしきドゥルシネアよ、お前身と別れて暮してをる者は、この上にも更に大いなる不幸を忍ばねばならんのぢや。こらサンチョーよ、拙者を助けて、あの魔術の車に乘せて呉れい。この肩ぶしが粉々に打ち挫かれて、拙者はロシナンテの上に乘れさうもないわい。』

『喜んでさう致しますよ、旦那樣、』とサンチョーは言つた、『そして貴方樣のお爲めを思うてござるこの旦那がたと一緒に私らの村へ歸りましよ。そして、も一度新規に出て來る用意を致しましよ。さうすりや今度はもつと儲けもあり名前も揚りましよ。』

『その通りぢや、サンチョー、』とドン・キホーテは答へた、『今夢を得て居るこの悪い星廻りを、通り越させる方が賢こからう。』

役僧も牧師補も理髪師も、貴方の言葉通りにする方が非常に賢いやり方であらうと、ドン・キホーテに言つた。そして彼等はサンチョーの愚直を頗る興がりつゝ、前の通り、ドン・キホーテを荷車に乗せた。行列は再び列を整へてその路を進行した。山羊飼ひはこの一團に別れを告げた。「神聖救済組合」の巡邏たちは、もうこの上従いて行くことを辭したので、牧師補は相當の日當を拂つた。役僧は、この後のドン・キホーテの樣子を、彼の狂氣が癒えたかやはり惱んで居るかを知らせて呉れるやうにと牧師補に頼んで、さて別れを告げて自分の旅程をつゞけた。要するに皆々思ひ〳〵に別れて行つて、後には牧師補と理髪師とドン・キホーテとサンチョー・パンザと、それからその主人の如く非常に素直に忍んで萬事を觀てゐたロシナンテだけが殘つた。牛牽きは牡牛に軛を掛け、ドン・キホーテを枯草の束の上に心地よく置いて牧師補の差圖した道を、例の念入りの歩調で進んだ。そして、六日目にドン・キホーテの村へ着いて、眞晝頃に村へ入つた。偶々それは日曜日であつたので、廣市場には人が一杯ゐた、その中をドン・キホーテの荷車は通つた。人々は、この荷車の中には何があるのかと寄つてたかつて見に來た。すると、それが自分の村の人なので吃驚してしまつた。一人の男の子はドン・キホーテの留守宅へ走つて行つて、その家婢や姪に、今こゝの御主人なり叔父さんなりが、すつかり痩せて黄色になつて牛車の枯れ草の束の上にへたばつて歸つて來るところだと知らせてやつた。この二人の善良な婦人たちが、泣き聲を立て胸を打つて、あの忌はしい騎士道の書物に更に呪ひを注ぎかけた、その聲は聞くも氣の毒であつた。その騒ぎは、ドン・キホーテが門に着くのを見ると又更に初まつた。

ドン・キホーテの歸りを聞いてサンチョー・パンザの女房は走つて來た。この女房は今は既に良人がこの人の家來になつて出奔したのだと知つてゐたからである。そしてサンチョーを見ると、第一に女房が訊ねたのは、驢馬は丈夫であるかといふことであつた。サンチョーは、うん、旦那樣よりも丈夫だよと答へた。

『まア有難いこつちや、』と女房は答へた、『お蔭さまで助かりまする。けれどなア お前さん、御家來になつて行つてどんな儲けがありましたぞいな？　私にやどんな着物を買

うて來て晃れたぞえ？　子供にやどんな靴を？』

『お前、私はそんな物は何も持つて來んぞよ、』とサンチョーは答へた、『別の物でもつと大事な値打ちのあるものは持つて來たがな。』

『そりやまア嬉しいことぢや、』と女房は答へた、『もつと大事な値打ちのある物ちふのを見せなされよ。なア、それでも見て、お前さんの不在の長い月日の間、悲しうて鬱いで居つたこの胸を晴らしましよわい。』

『家へ行つてから見せうわいのう、』とサンチョーは言つた、『今はまア我慢せいよ。それはなア若し運好う、も一度この武者修行の旅に出かけられるやうな具合になりさへすりや、今に私は伯爵様か島の總督様になつて來るのぢやぞ。それもありふれた並のぢやないぞ、最極上のぢやぞ。』

『まアお前さん、さうなりたいものぢやの、』と女房は言つた、『ほんとにさうならにやならんもの。けれどなアお前さん、その島ちふのは何のこつちやな。私にや分りませんぞえ。』

『蜜は驢馬の口にや合はんよ、』とサンチョーは答へた、『まアその時が來りや殘らず分らうわい、なアお前——いや、お前は皆の家來どもに令夫人様と言はれて魂消うぞよ。』

『何を言ふのぢやえ、サンチョーさん、令夫人様ぢやの、島ぢやの、家來ぢやのと？』とテレサ・パンザは答へた——これがサンチョーの女房の名であつた——尤も二人は血續きではなかつたが、ラ・マンチャでは妻は夫の苗字を取るのが習慣であつたからである。

『テレサや、さう慌てゝ聞かいでもえゝわい、』とサンチョーは言つた、『私は本當のことを言うとるのぢやから、それでえゝぢやないか、まア默つとれよ。ぢやが序にこれだけは言うてもえゝがな——世の中にや、えらい人になつて、武者修行の家來になつて、そして冒險を捜しに行くより面白いことはないぞよ。尤も出くはす事は大抵此方の望み通りに面白うは行かんがの。百のうちの九十九は意地惡う逆さになるからの。時によると毛布上げにされたり、また時によるとぶん殴られたりして來たので、身に覺えがあるのぢや。そんなことはあつても、やつぱり山を越えたり、森の中を辿つたり、岩に登つたり、お城を訪ねたり、宿屋に泊つたり、何處も彼處も自由自在にびた一文も拂はずに、何が降つて湧いて來るかと樂しみにして歩くのは面白いぞよ。』

サンチョー・パンザと彼の女房との間にこの會話の交され

てゐる一方では、家婢と姪とはドン・キホーテを家へ入れて着物を脱がせて彼の馴染の寢臺に寢かせた。彼はこの女たちを横目に見た。そして自分が何處に居るかを判じることが出來なかつた。牧師補は自分等が彼を家へ伴れ歸る爲めに已むを得ずしたことどもを姪に話して、叔父さんを居心地好くして上げるやうに、そしてまた遁げ出すかも知れないからよく見張りをするやうに十分に氣をつけなさいと賴んだ。これを聞いて二人の女たちはまたもやその聲を張り上げて、騎士道の書物を新たに呪ひ、さういふ嘘や痴けごとの作者どもを無間地獄の眞中へ投げ込んで下されいと神に祈つた。要するに、女たちはその叔父であり主人である人が、少し身體が良くなるとまた脫け出しはせぬかと、氣遣ひ恐れてばかりゐたのである。またそれは、彼等が氣遣つてゐた通りになつてしまつたのである。

しかしこの物語の作者は、ドン・キホーテによつてその第三次の出遊中に成し遂げられた事蹟を發見せうと、精査勤勉頗る努むるところがあつたけれども、何等それに關する消息を、少くとも信憑すべき記錄から出た消息を、手に入れることは出來なかつた。たゞドン・キホーテが三度自分の家を飛び出してサラゴッサへ行き、その市で擧行された有名な馬上試合に臨んだことや、またそこで彼の勇氣と優れた智謀にふさはしい種々の冒險を試みたといふことだけが、言ひ傳へとしてラ・マンチャの記錄に遺されて居るばかりである。もし好運が一人の老醫師を作者に引き合さなかつたら、作者はドン・キホーテの最後や臨終に就いて何等詳細なことを知ることは出來なかつたであらうし、またその死を確かめることも聞き知ることも出來なかつたであらう。その老醫師は一つの鉛の箱を所有してゐた。それは、彼自らの話によると、或る古い隱者の庵の建て直される時、その崩れた土臺の中から發見されたのであつた。その箱の中にはゴシック文字でカスティリア語の詩句を書いた若干の羊皮紙の書き物が見出された。それにはドン・キホーテの様々な事蹟を述べ、ドゥルシネアの美しさ、ロシナンテの風采、サンチョー・パンザの忠節、及びドン・キホーテその人の埋葬式などを記し、尙また彼の生涯や性格に對する種々様々の碑銘や頌德詩もあつた。しかしその中で讀んで判ずることの出來たものは、この斬新無比なる物語の信憑すべき作者が此處に揭げるだけのものに過ぎない。而して件の作者はその功績を世に知らしめん爲めに、マンチャの古文書を精査探究するに當つて自ら捧げた莫大の勞力に對しては、こ

れを讀む人々に何等の報酬をも要求しない。たゞ今の世に普及して非常な人氣を博してをる騎士道の書物に向つて常識ある人々が拂うて居るのと同樣の信用を彼に與へてくれればそれで宜い。蓋し作者はそれを以て自らゆたかに報いられ十分に滿足したりとなすであらう。さすればまたそれに勵まされて、この物語ほどに信は置けずとも、せめてその創意に於ては等しく、面白さに於ても劣らぬやうな、外の物語を見付けて書くやうな氣になるであらう。鉛の箱の中にあつた羊皮紙に書かれてある最初の言葉はかうであつた——

ラ・マンチャの一村、
アルガマシラの學士等
ラ・マンチャのドン・キホーテの生涯及び臨終に就いて之を錄す。
ドン・キホーテの墓石の上に
アルガマシラの學士、モニコンゴー
碑銘

ジェーソン（ギリシャ傳說中の遠征の勇將）の戰利品に優るものをラ・マンチャに與へし氣まぐれ者。
その機智の尖端の銳さよ、
もしその機智の風見機の尖端鈍かりせば、更に幸多かりけん。
武名はガエータ（イタリーの南部の港）の岸邊よりカセーまでのあらゆる國々に遠く轟けり。
思慮は細やかに容貌はたけ〳〵しく
さながら往昔の金板に鑄られしもの、如し。
その戀と武俠とに扶けられて、
あらゆるアマディスの族を壓倒し
ガラオルの族を物の數ともせず、
ロシナンテに跨りつゝ譽を索めて
ベリアニスの族を屏息せしめし
彼こそ、此處に、この冷たき石碑の下に眠るなれ。
ドゥルシネア・デル・トボソォの讃美の爲めに
アルガマシラの學士、パニャグッドー
ソンネット

ラ・マンチャの勇士ドン・キホーテが
むなしく胸を焦せしドゥルシネアの
全き姿を玆に記さん、
そは胸高く傲然たる風情。
トボソの女王なる處女のために、
彼は物凄き連山の彼方此方、さては名にし負ふ
モンティエルの野原もアランジュエズの曠野も
疲れしロシナンテに跨りて往來しぬ。
意地惡き星、殘忍の宿命は、
無敵なる騎士道の明星にも
美しきマンチャの處女にも追ひ迫りぬ。
若さも美しさも、死の招きより彼女を許さず。
勇士は苦き戀の苦行を勤め
かくて名を大理石にとゞめぬ。

ラ・マンチャのドン・キホーテの駿馬、ロシナンテの讃美の爲めに
最も聰明なるアルガマシラの學士、カブリチョソー
ソンネット

血汐流るゝマーズの足の踏みしてふ
金剛光の誇らしき玉座には
今こそいとも勇ましく掲げられたり
狂へるマンチャの騎士の旗じるし。
そこに懸けたる甲冑と鋭き打ち物は
これぞ斬りつ刻みつ突き刺し倒しつ
未曾有の高名を遂げしもの。
わが新しき騎士の爲めには藝術の一新機生れぬ。
もしゴールの誇る粉特がアマディスならば、
またその子孫がギリシャの名譽を
洽く世界に擴ぐるならば、
物凄きベロナ（怒りの劍戟者 鬪陣の女神）の宮に王たりし大キホーテこそ
今ぞラ・マンチャの位を高めて
ギリシャ、ゴールを平伏せしむれ。
彼の榮譽はこれに盡きず。彼の良き駿馬こそ
ブリラドル（勇士オルランドーの乘馬）にもバヤード（勇士リナルドーの乘馬）にも
遙かまさるを。
精悍なる駿馬もロシナンテに比ぶれば
その得たる譽は乏し。

サンチョー・パンザの爲めに
アルガマシラの學士、ブルラドール
ソンネット

見よこゝに忠臣サンチョー・パンザあり。
嘗てその大靈はその小軀に宿りき、
渾圓地上未だかくも率直に質實に、
かくも僞りなき從士はあらざりき。
間一髪にして伯爵たるべかりしを、
馬鹿者たることをすら許さゞる
この鄙吝なる惡時代の
怨恨惡意だになかりせば。
贈馬(この言葉を許せかし)(贈馬は愚者の意にあらず)に打ち跨り
この柔和の從士はロシナンテに引き添ひて
主君にかしづき遍歷するを常としき。
たやすくかなはせんと、衆生をまどはす
伴りの希望は、心の願ひは
影となり夢となり烟となりて常に終る。

ドン・キホーテの墓石に
アルガマシラの學士、カチデ・アブロー
碑銘

騎士はこの下に眠る、
ロシナンテに運ばれて
彼方此方と廻りつゝ
道には迷ひ重傷は負ひつ。
この騎士の傍には
律義者なるサンチョーも眠る、
これに優る忠臣は
從士職中にかつてなかりき。

ドゥルシネア・デル・トボソの墓石に
アルガマシラの學士　ティキトック
碑銘

こゝにドゥルシネアは眠る。
彼女は肥え太りて逞ましかりき、
今や彼女は灰となり塵となりぬ、

そは死すべき一切の肉身の終りなり。
彼の女は上臈の風情ある
位高き婦人にして、
勇士ドン・キホーテの愛人たり
また生れし村の誇りなりき。

以上が判讀の出來た詩の凡てであつた。その餘は蟲に喰はれてゐたので、その意味を推測して讀んで貰ふ爲めに學士の一人に渡された。我等の聞くところによれば、その學士は、幾晩も徹夜し、非常に骨折をして遂に成功したさうで、尙ドン・キホーテの第三回の出遊を傳へる爲めにそれを出版するつもりなさうである。

Forse altro cantera con miglior plettro.
(恐らくは別人が至上の琴もて歌ふならん)

ドン・キホーテ

——了——

非賣品

世界文學全集(4)
第三回配本

テーホキ・ンド

昭和二年五月一日印刷
昭和二年五月十五日發行

飜譯者　片上伸
發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地
發行所　新潮社
電話牛込（代表）八八〇〇番　六番
八八〇〇番　七番
八八〇九番
振替東京　二三四五〇番

大出製本所納

東京市牛込區榎町　目清印刷株式會社印刷